

国指定史跡

武蔵国分僧寺跡発掘調査報告書

Ⅱ

— 史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査 —

〔遺物編〕

平成 30 年 3 月

国分寺市遺跡調査会
国分寺市教育委員会

序

大正11年10月12日付、国指定の史跡となった武蔵国分寺跡は、爾来、史跡地の追加指定を得て、全国の国分寺跡のなかでも屈指の広域史跡地を擁する遺跡として周知されるにいたった。

江戸時代以降、地上に露呈していた礎石群と夥しい古瓦等の分布状態により、僧寺跡と目されてきた遺跡地は、明治36年の重田定一の踏査所見などによって国の指定史跡、ついで稲村坦元・後藤守一による東京府の調査の結果が公示された。しかし、対象地は僧寺跡が中心であり、「西院跡」が尼寺跡と確認され、僧・尼寺跡を一体とした武蔵国分二寺跡が実証的に把握されるには紆余曲折の歳月が必要であった。

国分寺跡を考古学の視点と方法で発掘した嚆矢は、昭和26年に実施された遠江国分寺跡であったが、武蔵国分寺跡の発掘は昭和31年に石田茂作を中心とする日本考古学協会により僧寺跡を対象として施行され、金堂・講堂の規模などが明らかにされた。ついで、昭和39年に尼寺跡比定地（西院跡）の発掘が滝口宏などによって国分寺市を主体として実施され、金堂跡の存在も明確となり、尼寺の位置が確定された。僧・尼寺跡の発掘調査は、寺域全体の把握と伽藍配置のあり方などについて、保存を前提とした調査が続けられるにいたったのである。

昭和62・63年度には、「国分寺市史跡武蔵国分寺跡整備計画策定委員会」によって『保存管理計画策定報告書』が作成されたが、「今後とも取り扱いの見直しを適宜行う必要がある」とされた。以降、『史跡武蔵国分寺跡（尼寺地区）整備基本設計報告書』（平成9年）、『史跡武蔵国分寺跡〔僧寺地区〕新整備基本計画』（平成15年）、『史跡武蔵国分寺跡（僧寺北東地域）保存整備事業報告書』（平成20年）、『史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）整備実施計画』（平成21年）、『史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）第一期整備〔中枢地区〕基本設計報告書』（平成23年）が相次いで作成され、僧・尼寺を一体とする寺域全体の保存方針が示されたのである。さらに、東山道武蔵路跡が「附」として史跡指定され、『東山道武蔵路跡保存整備事業報告書』（平成25年）が作成された。

これら一連の武蔵国分寺跡の整備事業は、毎年ごとに所期の目標を達成しつつ、その都度検討を加え、新整備基本計画によって実施されてきた。この度、平成15～24年における「事前遺構確認調査の報告」を2分冊（遺構編・遺物編）に分けて刊行することになった。事業の実施にあたり、文化庁・東京都教育庁の関係部局の指導、国分寺市当局の理解と尽力を得たことを明記すると共に、調査を分担した関係各位の協力に対し、感謝の意を表する次第である。

平成30年3月

国分寺市遺跡調査会
会長 坂 詰 秀 一

例言

1. 本書は、東京都国分寺市に所在する国指定史跡武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡（僧寺地区）の保存整備事業に伴い平成15～24年度に実施した事前遺構確認調査の報告書の第Ⅱ分冊で、出土遺物をまとめたものである。平成28年3月に刊行を済ませている第Ⅰ分冊（遺構編）に続く報告で、今後、第Ⅲ分冊として総括編を刊行し、一連の調査を完結する予定である。
2. 史跡保存整備事業は、文化庁の「国宝重要文化財等保存整備費補助金」の採択を受け、事業費の1/2を国、1/4を東京都および国分寺市がそれぞれ負担しているが、平成29年度の本報告書作成にかかる諸経費については、国分寺市が単独で負担した。
3. 事前遺構確認調査は国分寺市教育委員会の職員が調査担当者となり、発掘作業および出土品等整理作業は国分寺市遺跡調査会（会長 坂詰秀一）へ委託した。
4. 発掘調査および出土品等整理作業の期間と履行場所は、それぞれ以下のとおりである。なお、市では昭和49年に国分寺市遺跡調査会を設置して以降、武蔵国分寺跡として周知している埋蔵文化財包蔵地内での発掘調査は、手がけた順番に調査次数を振っており、本事業に伴う調査も基本的には一連の次数を付与している。

【発掘調査・基礎整理作業】

①平成15年度

〔期間〕平成15(2003)年12月11日～平成16(2004)年3月19日

〔対象〕武蔵国分寺跡第570次調査－南門地区（南門南方）、塔地区（塔跡間・塔跡2）、区画施設（中門東）

〔地点〕国分寺市西元町三丁目 2008、2024-4、2048-4、2093-5、2094-4・5、2112-1・4

②平成16年度

〔期間〕平成16(2004)年7月1日～平成17(2005)年3月31日

〔対象〕武蔵国分寺跡第578次調査－区画施設（中門東）、塔地区（塔跡2）

〔地点〕国分寺市西元町三丁目 2004-29、2008、2023-4、2024-1・4、2112-1・4、2113-1・4・5

③平成17年度

〔期間〕平成17(2005)年6月1日～平成18(2006)年3月31日

〔対象〕武蔵国分寺跡第578次調査－区画施設（中門東）、塔地区（塔跡2）

第603次調査－中門地区（中門跡）、塔地区（塔跡2周辺・南側）

〔地点〕国分寺市西元町三丁目 2004-8・16・21・41、2008、2023-4、2024-1・4、2112-1・4、2113-1・4・5、2114-1・4、2112-2

④平成18年度

〔期間〕平成18(2006)年7月6日～平成19(2007)年3月31日

〔対象〕武蔵国分寺跡第578次調査－塔地区（塔跡2）

第603次調査－中門地区（中門跡）、塔地区（塔跡2周辺）、堂間地区（中門・金堂間）

〔地点〕国分寺市西元町三丁目 2004-1・16・21・29・32・41、2008、2031-1～4、2014-1～3、2021-1、2023-1・4、2024-1・4、2035-5・8、2114-1～4、2121-2・3、2122-1・5

⑤平成19年度

〔期間〕平成19(2007)年7月19日～平成20(2008)年3月31日

〔対象〕武蔵国分寺跡第625次調査－塔地区（塔跡1）、中門地区（中門跡）、区画施設（中門西）、堂間地区（中門・金堂間）、南門地区（南門）

〔地点〕国分寺市西元町三丁目 2004-1、2101-7・8、2112-1・2・4、2113-1・4・5、2114-1～4、2122-2

⑥平成20年度

〔期間〕平成20(2008)年6月13日～平成21(2009)年3月31日

〔対象〕武蔵国分寺跡第642次調査－南門地区（南門跡）、堂間地区（中門・金堂間東）、講堂地区（講堂跡）、区画施設（北辺）

〔地点〕国分寺市西元町二丁目 1609、1610-1～3、1619、1621、西元町三丁目 2101-7・8、2111-2・3

⑦平成21年度

〔期間〕平成21(2009)年5月15日～平成22(2010)年3月31日

〔対象〕 武蔵国分寺跡第 650 次調査—講堂地区（講堂跡）、金堂地区（金堂跡）

〔地点〕 国分寺市西元町二丁目 1609、1610-1～3、1612～1616、1619、1621

⑧平成 22 年度

〔期間〕 平成 22（2010）年 5 月 7 日～平成 23（2011）年 3 月 31 日

〔対象〕 武蔵国分寺跡第 655 次調査—金堂地区（金堂跡）、堂間地区（講堂・金堂間）、鐘楼地区（鐘楼跡）

〔地点〕 国分寺市西元町二丁目 1608-1・2、1610-2・3、1612～1616

⑨平成 23 年度

〔期間〕 平成 23（2011）年 7 月 15 日～平成 24（2012）年 3 月 30 日

〔対象〕 武蔵国分寺跡第 672 次調査—鐘楼地区（鐘楼跡）、区画施設（北辺）、経蔵地区（経蔵東）、堂間地区（講堂・金堂間）

〔地点〕 国分寺市西元町二丁目 1608-1・2、1611-2、1616、1619～1621

⑩平成 24 年度

〔期間〕 平成 24（2012）年 6 月 14 日～平成 25（2013）年 2 月 28 日

〔対象〕 武蔵国分寺跡第 680 次—区画施設（北西・南西・南東）、金堂地区（金堂南側）

〔地点〕 国分寺市西元町二丁目 1610-3、1612～1616、1644-1・2

三丁目 2109-1・4～7、2131、2131-1・3・4

なお、主要遺物の水洗・注記、現場図面・写真等の基礎整理作業は、上記作業期間中に発掘調査と並行して行い、国分寺市西元町 1-15-10 に所在する国分寺市遺跡調査会武蔵事務所（旧事務所）にて実施した。

【出土品等整理作業】

①平成 25 年度 平成 25（2013）年 6 月 3 日～平成 26（2014）年 3 月 31 日

②平成 26 年度 平成 26（2015）年 4 月 1 日～平成 27（2015）年 3 月 31 日

③平成 27 年度 平成 27（2016）年 4 月 14 日～平成 28（2016）年 3 月 31 日

④平成 28 年度 平成 28（2017）年 4 月 1 日～平成 29（2017）年 3 月 31 日

上記期間のうち、平成 25 年 12 月までは東京都国分寺市西元町 1-15-10（国分寺市遺跡調査会武蔵事務所）、平成 26 年 1 月以降は東京都国分寺市西元町 1-13-6 武蔵国分寺跡資料館付属棟 2 階（国分寺市遺跡調査会事務所）にて作業を実施した。

【報告書作成作業】

①第 I 分冊 平成 27 年度 平成 27（2015）年 4 月 1 日～平成 28（2016）年 3 月 31 日

②第 II 分冊 平成 29 年度 平成 29（2017）年 4 月 1 日～平成 30（2018）年 3 月 31 日

東京都国分寺市西元町 1-13-10 武蔵国分寺跡資料館（ふるさと文化財課事務室）にて実施した。

5. 出土品等整理作業および第 II 分冊（遺物編）は、国分寺市遺跡調査会調査団団長の坂詰秀一、ならびに武蔵国分寺跡調査研究指導委員会の酒井清治・佐藤 信・藤井恵介・松井敏也の各委員、および文化庁・東京都・史跡武蔵国分寺跡保存整備委員会の指導を受け、国分寺市教育委員会ふるさと文化財課の依田亮一が担当した。なお、発掘調査・出土品の基礎整理作業および第 I 分冊（遺構編）の作成は、同課の中道 誠が担当している。

6. 本書の作成は、坂詰秀一調査団長ならびに酒井清治調査研究指導委員の指導のもと、依田亮一・笹津備当・矢内雅之が行い、増井有真・島田智博・中野 純・桂 弘美・平塚恵介がこれを補助した。全体の編集は依田亮一が担当し、執筆分担は次のとおりである。

依田亮一 第 1～3 章、第 4 章 1～10、第 5 章

笹津備当 第 4 章 11

矢内雅之 第 4 章 3・4 の遺物観察表

7. 遺物の注記は、以下のとおり調査回数ごとに行った。

（例）武蔵国分寺跡第 570 次調査 「MK570-（層位・遺構名・トレンチ名等）」

8. 出土遺物の実測・拓本は、井上 翔・大塚敦子・大羽正子・小野祐子・佐藤 令・相馬しのぶ・高橋より子・矢内雅之・山口啓子・依田亮一・李スルチョロンが担当した。また、文字瓦の拓本は、文化財愛護ボランティアの梅山伸二・上村雄三・佐々木義身の協力を得て、遺物図面を廣瀬真理子・笹津備当が作成した。

8. 遺物の写真撮影ならびに図版作成は、桂 弘美・平塚恵介が担当した。

9. 文字瓦を除く遺物図面の版組は依田亮一・矢内雅之が行い、デジタルトレース作業を平成 28 年度に株式会社大成エンジニアリングへ委託した。

10. 本書の作成には、Microsoft Word・Excel、Adobe Illustrator・Photoshop・Indesignの各ソフトを用いた。

11. 本報告書の遺物図面・写真図版の指示は次のとおりである。

- ・遺物図面の縮尺は、原則として各図面中のスケールに示した。
- ・遺物の縮刷写真の縮尺は、原則として遺物図面のスケールに合わせる。
- ・特に凡例を示していない遺物図面中のスクリーントーンは、以下のとおりである。



12. 武蔵国分寺僧寺地区の伽藍中樞部および七重塔では平成15年以前にも発掘調査が行われ、その一部は今回の調査範囲と重複している。既往の調査で報告書が刊行されているものについては、主要な遺物図面を転載したが（遺物図面178～208および写真図版33）、それぞれの出典は以下のとおりである。

①金堂・講堂・区画施設（中門東）・南門等【昭和31・33年に実施】

日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会編1985『武蔵国分寺跡遺物整理報告書一昭和31・33年度一』

②金堂・中門・区画施設（中門西）・鐘樓・七重塔（塔跡1）等【昭和39～41年度に実施】

滝口宏編1987『武蔵国分寺跡調査報告一昭和39年～44年度一』

③東僧房【昭和51・55年度および平成7年度に、個人住宅建設に伴う緊急調査として実施】

小野本教2009『武蔵国分寺跡発掘調査概報34一東僧房・僧尼寺区画溝・東山道武蔵路の調査一』

④区画施設（中門西）【昭和59年および平成3年度に、学術目的の調査として実施】

小野本教2010『武蔵国分寺跡発掘調査概報35一僧寺伽藍地の確認調査一』

13. 本書にかかる遺物・記録図面・写真等は、一括して国分寺市教育委員会で保管している。

14. 発掘調査および出土品等整理作業の参加者は以下の通りである。

【発掘調査・基礎整理作業】

①平成15年度〔遺跡調査会〕浅岡 陽・工藤朱里・小池和彦・近藤貴徳・佐藤 令・堀淵宜男

②平成16年度〔遺跡調査会〕青山達夫・井口正利・浦野 勇・大高広和・折原 覚・小池和彦・小林幸江・佐々木義身・嶋田圭吾・鈴木清彦・奏泉寺感・田中輝紀・中島里佳・中谷勝次・長友 信・林 純太郎・藤崎 努・藤野一之・百瀬兵一・山本祥隆・屋良健一郎・若林雅子、〔文化財愛護ボランティア〕川上領一・香宗我部辰子・斎藤和子・櫻井勲子・田代 稔・田中康敬・東 晃・前川 綱

③平成17年度〔遺跡調査会〕青山達夫・井口正利・大高広和・小池和彦・高野晶文・小林幸江・佐々木義身・永尾美智子・野村美智子・百瀬兵一・吉松大志・若林雅子、〔文化財愛護ボランティア〕浅山春海・川上領一・齊藤寿美・櫻井勲子・田中康敬・畑石重輝・東 晃・前川 綱

④平成18年度〔遺跡調査会〕井口正利・石丸あゆみ・大高広和・大羽正子・鯨井美咲・小池和彦・島田智博・中村輝紀・野村美智子・山本祥隆、〔文化財愛護ボランティア〕川上領一・小泉 進・齊藤寿美・櫻井勲子・田中康敬・前川 綱

⑤平成19年度〔遺跡調査会〕井口正利・石丸あゆみ・井村みゆき・大下ゆみ・大高広和・大羽正子・小池和彦・佐藤雄佑子・佐藤 令・島田智博・鈴木清彦・野村美智子・山本祥隆、〔文化財愛護ボランティア〕雲野重利・田中康敬・三浦宗子

⑥平成20年度〔遺跡調査会〕青山達夫・井口正利・石丸あゆみ・大里宗也・大高広和・桂 弘美・小池和彦・小林幸江・佐々木義身・鈴木通夫・高橋 想・谷口枝里夏・鶴見涼平・富永正義・野村美智子・林 正之・平塚恵介・平原信崇・藤崎 努・松吉佑希・三宅雄太郎・百瀬兵一・山口啓子・山本祥隆・若林雅子、〔文化財愛護ボランティア〕小松敬明・田中康敬

⑦平成21年度〔遺跡調査会〕青山達夫・井口正利・石丸あゆみ・伊藤直美・大高広和・大塚敦子・大羽正子・小池和彦・甲田篤郎・佐々木義身・平塚恵介・平原信崇・山口啓子・山本祥隆・若林雅子、〔文化財愛護ボランティア〕上村雄三・田中康敬・西原秀人・畑石重輝

⑧平成22年度〔遺跡調査会〕青山達夫・井口正利・伊藤直美・大塚敦子・大羽正子・岡見知紀・小野祐子・神崎聡史・清金良太・小池和彦・甲田篤郎・佐々木義身・林 正之・平塚恵介・山口啓子・若林雅子、〔文化財愛護ボランティア〕上村雄三・田中康敬・三日月 純

⑨平成23年度〔遺跡調査会〕青山達夫・井口正利・伊藤直美・大塚敦子・大羽正子・小野祐子・桂 弘美・

小池和彦・佐々木義身・佐藤 令・島田智博・相馬しのぶ・高橋より子・平塚恵介・藤崎 努・山口啓子・若林雅子、〔文化財愛護ボランティア〕梅山伸二・小此木ヒサエ・上村雄三・田中康敬・鶴田知子・三日月 純
 ◎平成24年度〔遺跡調査会〕青山達夫・井口正利・伊藤直美・大塚敦子・大羽正子・小野祐子・桂 弘美・小池和彦・佐々木義身・佐藤 令・島田智博・相馬しのぶ・高橋より子・平塚恵介・藤崎 努・山口啓子・李スルチョロン・若林雅子、〔文化財愛護ボランティア〕梅山伸二・小此木ヒサエ・梶木義治・上村雄三・島田善郎・田中康敬・鶴田知子・三日月 純

〔出土品等整理作業〕

①平成25年度〔遺跡調査会〕青山達夫・井口正利・伊藤直美・岩田尊湖・大塚敦子・大羽正子・小野祐子・桂 弘美・小池和彦・白木 誠・瀬尾晶太・相馬しのぶ・高橋より子・富澤 好・平塚恵介・廣瀬真理子・矢内雅之・山口啓子・李スルチョロン、〔文化財愛護ボランティア〕梅山伸二・上村雄三・佐々木義身

②平成26年度〔遺跡調査会〕井口正利・井上 翔・岩田尊湖・上野知里・大塚敦子・大羽正子・小野祐子・桂 弘美・小池和彦・佐藤 令・相馬しのぶ・高橋より子・富澤 好・平塚恵介・廣瀬真理子・藤崎 努・矢内雅之・山口啓子・李スルチョロン、〔文化財愛護ボランティア〕梅山伸二・上村雄三・佐々木義身

③平成27年度〔遺跡調査会〕井上 翔・岩田尊湖・大塚敦子・大羽正子・小野祐子・垣岡小百合・佐藤 令・相馬しのぶ・高橋より子・富澤 好・廣瀬真理子・矢内雅之・山口啓子・李スルチョロン、〔文化財愛護ボランティア〕梅山伸二・上村雄三・佐々木義身

④平成28年度〔遺跡調査会〕井上 翔・岩田尊湖・大滝清司・大羽正子・奥村直子・小野祐子・垣岡小百合・桂 弘美・小池和彦・笹津備当・佐藤 令・相馬しのぶ・高橋より子・富澤 好・平塚恵介・矢内雅之・山口啓子・山田義昭・吉田さおり、〔文化財愛護ボランティア〕梅山伸二・上村雄三・黒澤美代子・佐々木義身
 ※〔遺跡調査会〕名簿には、調査会雇用職員とシルバー人材センター派遣職員を含む。

15. 出土品等整理作業および第Ⅱ分冊（遺物編）の刊行にあたっては、次の諸氏・緒機関から御指導・御協力を賜った（順不同・敬称略）。

青木 敬・赤熊浩一・東 真江・荒井秀規・有古重藏・出浦 崇・伊藤敏行・江口 桂・海野 聡・近江俊秀・大上周三・大久保ひとみ・大橋泰夫・大村浩司・大八木謙司・岡本孝之・押方みはる・押木弘己・小田裕樹・小野本教・尾野善裕・及川良彦・梶原義実・加藤久美・加藤恭朗・金子 智・河合英夫・川口武彦・河野一也・栗田一生・黒尾和久・黒済和彦・黒済玉恵・合田恵美子・小杉山大輔・齊藤真一・佐藤敏幸・澁江芳浩・霜出俊浩・須田 勉・瀬田正明・田尾誠敏・高橋 香・立川明子・富永樹之・手島美実子・永井智教・長佐古真也・中山真治・廣瀬真理子・中田 英・中三川昇・根本 靖・箱崎和久・坂野千登勢・平尾政幸・平野 修・昼間孝志・藤木 海・藤野一之・福田健司・福田信夫・深澤靖幸・松本太郎・三舟隆之・宮井 香・宮原正樹・山下信一郎・山路直充・若林勝司・渡辺 一
 文化庁文化財部記念物課、東京都教育庁地域教育支援部管理課、東京都埋蔵文化財センター、公益財団法人かながわ考古学財団、国分寺市文化財保護審議会、国分寺市史跡武蔵国分寺跡保存整備委員会

瓦観察表の表記方法

(1) 廻瓦

- イ. 中房の形状 A 中房が凸型のもの
- A₁ 断面方形のもの
 - A₂ 断面半球形のもの
- B 中房の輪郭を凸線で表すもの
- B₁ 内部が平坦なもの
 - B₂ 内部が半球形に盛り上がるもの
- C 中房の輪郭を凹線で表すもの
- ロ. 弁の形状 S 妻弁
- A 弁の輪郭線(凸線)がなく、全体が盛り上がるもの
 - B 弁の輪郭線(凸線)のみであらわされるもの
 - C 弁の輪郭線(凸線)があり、内部全体が盛り上がるもの
 - D 弁の輪郭線(凸線)があり、内部が盛り上がるものの中房側が凹むもの
- T 単弁
- ハ. 外区文様 a=素文、b=珠文、c=その他などがあり、内・外縁の区別のないものは外縁側に記入
- ニ. 製作技法 A 接着技法
- B さしこみ技法
- I 一般的なもの
 - II 瓦当部が二段重ねで分厚くつくられるもの
- C 一本作り技法
- I 瓦当裏面の布目にしぼりがあるもの
 - II 瓦当裏面の布目にしぼりが無いもの
- D はめこみ技法
- I 半載後の男瓦広端側にはめこむもの
 - II 半載前の凹箇の広端側にはめこみ、不要部分を切り落とすもの

(2) 字瓦

- イ. 内区文様 G=重弧文、KK=均正唐草文、HK=偏行唐草文、H=ヘラ書文、K=格子文、J=縄文、M=無文、O=その他
- ロ. 上・下外区、脇区文様 a=素文、b=珠文、c=長円珠文、d=圈線文、e=鬚文、f=凸線文、g=その他
- ハ. 製作技法 A 接着技法
- B さしこみ技法
- C 折り曲げ技法
- D 貼り付け技法
- ニ. 顎の形態 A 直線顎
- a 瓦当凸面を調整するもの
 - b 瓦当部と女瓦部の境部分のみ調整するもの
 - c 不調整のもの
- B 段顎
- B₁ 瓦当凸面と凹面が並行するもの
 - a 瓦当凸面及び瓦当裏面を調整するもの
 - b 瓦当凸面のみ調整するもの
 - c 瓦当裏面のみ調整するもの
 - d 不調整のもの
 - B₂ B₁・B₃以外のもの
 - B₃ 瓦当凸面が円みをもつもの
- C 曲線顎
- C₁ 一般的なもの
 - a 瓦当凸面を調整するもの
 - b 瓦当部と女瓦部の境部分を調整するもの
 - c 瓦当凸面及び女瓦部の境部分を調整するもの
 - d 不調整のもの
 - C₂ やや直線的なもの

(3) 男瓦・女瓦

- イ. 製作技法 男瓦
- I₁-A₁ 技法 有段粘土組桶巻き作り
 - I₁-B 技法 有段粘土板桶巻き作り
 - I₂-A₁ 技法 無段隅落とし粘土組桶巻き作り
 - I₃-A₁ 技法 無段粘土組桶巻き作り
 - I₃-B 技法 無段粘土板桶巻き作り
- 女瓦
- I-A₁ 技法 粘土組桶巻き作りもの
 - I-B 技法 粘土板板巻き作り
 - II-A₁ 技法 凸面粘土横紐一枚作り
 - II-A₂ 技法 凸面粘土縦紐一枚作り
 - II-B 技法 凸面粘土一枚作り
 - II-B 技法 凹面粘土一枚作り
- ロ. 布目本数 3cm四方内での側端側に平行する糸数と狭・広端縁に平行する糸数を表す
- ハ. 縄叩き本数 3cm四方内での縄数を表す
- ニ. 縄の撚り L: 縄尻が右上がり左下がりの傾斜をなすもの
R: 縄尻が左上がり右下がりの傾斜をなすもの
- ホ. 粘土板合せ目 佐原真 1972「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』第58巻第2号記載での分類S・Z(第19図)による
- ヘ. 布合せ目 粘土板合せ目の分類S・Zに準ずる
- ト. 叩き締めめの円弧 A: 叩き締めめの円弧が一方
B: 叩き締めめの円弧が「ハ」字状をなすもの

目次

本文目次

序	i
例言	iii
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
1. 遺跡の位置と地理的環境	3
2. 周辺の遺跡と歴史的環境	7
第3章 遺跡の概要と調査の経過	19
1. 武蔵国分寺の概要	19
2. 発掘調査の経過と事前遺構確認調査の概要	24
3. 出土品等整理作業の経過	35
第4章 発見された遺物	38
1. 出土遺物の概要	38
2. 土器・陶磁器	38
3. 鏡瓦	49
4. 字瓦	52
5. 道具瓦（鬼瓦・面戸瓦・隅切瓦・熨斗瓦）	55
6. 男瓦・女瓦	57
7. 埴	58
8. 銭貨・金属製品・鉄滓・銅滓	59
9. 石製品（板碑・砥石）	61
10. 縄文時代の遺物	62
11. 文字瓦	63
第5章 成果と問題点	75
1. 土器の様相	75
2. 軒先瓦の様相	86
結語	107
引用・参考文献	108
抄録	
奥付	

挿図・挿表目次

＜本文中の挿図＞

第1図	武蔵国分寺位置図	2
第2図	武蔵野台地の地形区分と調査地点の位置	4
第3図	史跡武蔵国分寺跡主要伽藍等配置図	5
第4図	平成15～24年度の発掘調査地点と周辺の地形	6
第5図	調査地点と周辺の埋蔵文化財包蔵地	8
第6図	武蔵国分寺跡出土の弥生～古墳時代前期の土器	11
第7図	古代武蔵国の郡域・駅路と武蔵国分寺	12
第8図	伽藍中塚部の既往調査区	13
第9図	武蔵国分寺跡中世遺物出土地点位置図	18
第10図	武蔵国分寺跡の構造と名称	19
第11図	武蔵国分寺変遷図	19
第12図	尼寺主要遺構全体模式図	21
第13図	推定付属院院の位置	22
第14図	泉町地区の東山道武蔵路の変遷	23
第15図	塔跡地区全体図	26
第16図	南門地区全体図	28
第17図	伽藍中塚部全体図	29
第18図	中門地区・(伽藍中塚部区画施設)区画南辺全体図	30
第19図	区画北西・南西・南東・北辺地区全体図	31
第20図	金堂・講堂・堂間地区(金堂・講堂間)全体図	33
第21図	鐘樓地区全体図	35
第22図	武蔵国分寺跡出土土質質土器類・皿の分類	41
第23図	武蔵国分寺跡出土の鬼瓦と関連出土資料	56
第24図	伽藍中塚城周辺出土の銅製品	60
第25図	伽藍中塚城周辺における縄文時代からの調査地点と後期初頭の遺構・遺物	62
第26図	建物地区別出土数比較図	69
第27図	各分類別出土数比較図	69
第28図	武蔵国21郡の建物地区別出土数比較図	70
第29図	武蔵国21郡の記載方法別出土数比較図	71
第30図	武蔵国21郡の出土数別分布図	72
第31図	建物地区外出土の文字瓦	74
第32図	伽藍中塚城出土の内土器	77
第33図	伽藍中塚城出土の施輪陶器	77
第34図	伽藍中塚城出土の古代末～中世の土器・陶磁器	80
第35図	武蔵国分寺跡最終段階の土器様相	81
第36図	武蔵国分寺跡周辺出土の中世遺物	83
第37図	古代末期～中世前期の参考資料	85
第38図	金堂出土廻瓦の様相	94
第39図	講堂出土廻瓦の様相	95
第40図	鐘樓出土廻瓦の様相	95
第41図	東僧坊(第19次)出土廻瓦の様相	95
第42図	金堂・講堂間出土廻瓦の様相	95
第43図	中門出土廻瓦の様相	96
第44図	伽藍中塚部区画施設出土廻瓦の様相(1)	96
第45図	伽藍中塚部区画施設出土廻瓦の様相(2)	97
第46図	塔跡1出土廻瓦の様相(1)	97

第47図	塔跡1出土廻瓦の様相(2)	98
第48図	塔跡2出土廻瓦の様相	98
第49図	塔跡2周辺出土廻瓦の様相	98
第50図	金堂出土土瓦の様相	99
第51図	講堂出土土瓦の様相	100
第52図	鐘樓出土土瓦の様相	100
第53図	東僧坊(第19次)出土土瓦の様相	100
第54図	金堂・講堂間出土土瓦の様相	100
第55図	中門出土土瓦の様相	101
第56図	伽藍中塚部区画施設出土土瓦の様相(1)	101
第57図	伽藍中塚部区画施設出土土瓦の様相(2)	102
第58図	塔跡1出土土瓦の様相(1)	102
第59図	塔跡1出土土瓦の様相(2)	103
第60図	塔跡2出土土瓦の様相	103
第61図	塔跡2周辺出土土瓦の様相	103
第62図	南門出土土瓦の様相	103
第63図	中房に施刻花文状の文様を施す廻瓦	104

＜本文中の挿表＞

表1	史跡武蔵国分寺跡(僧寺地区)事前遺構確認調査調査経過一覧(平成15～24年度)	7
表2	武蔵国分寺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地一覧	9
表3	僧寺伽藍城周辺における昭和49年以降の発掘調査地点一覧(1)～(3)	14～16
表4	武蔵国分寺跡(市№.10・19遺跡)における中世考古学的情報	17
表5	武蔵国分寺(僧寺・尼寺)寺地・僧尼寺寺院地・伽藍地・中塚部等の規模比較	20
表6	武蔵国分寺七重塔再建をめぐる諸説	27
表7	年次別出土遺物箱数	38
表8	金堂地区出土土器・陶磁器器種別集計表	40
表9	講堂地区出土土器・陶磁器器種別集計表	42
表10	鐘樓地区出土土器・陶磁器器種別集計表	43
表11	堂間地区(金堂・中門間)出土土器・陶磁器器種別集計表	43
表12	堂間地区(金堂・講堂間)出土土器・陶磁器器種別集計表	44
表13	中門地区出土土器・陶磁器器種別集計表	45
表14	伽藍中塚部区画施設 角地区出土土器・陶磁器器種別集計表	46
表15	塔跡地区出土土器・陶磁器器種別集計表	48
表16	郡郡別文字分類一覧	65
表17	灯明具の調査区別出土傾向	75
表18	平安～近世の武蔵国分寺をめぐる主な歴史・伝承事象	78
表19	武蔵国分寺跡出土廻瓦・土瓦の型式内訳	87
表20	型式付与廻瓦の生産地情報と掲載図版番号対照表(1)・(2)	90・91
表21	型式付与土瓦の生産地情報と掲載図版番号対照表(1)・(2)	92・93

遺物観察表目次

遺物観察表117 ~ 238

- 第1表 金堂地区出土土器・陶磁器観察表 (図面1・2)
- 第2表 講堂地区出土土器・陶磁器観察表 (図面3・4)
- 第3表 鐘楼地区出土土器・陶磁器観察表 (図面4)
- 第4表 堂間地区 (中門・金堂間) 出土土器・陶磁器観察表 (図面4)
- 第5表 堂間地区 (金堂・講堂間) 出土土器・陶磁器観察表 (図面5)
- 第6表 中門地区出土土器・陶磁器観察表 (図面6)
- 第7表 (伽藍中樞部区画施設) 区南南辺出土土器・陶磁器観察表 (図面7・8)
- 第8表 (伽藍中樞部区画施設) 区南南東出土土器・陶磁器観察表 (図面8)
- 第9表 (伽藍中樞部区画施設) 区北北辺出土土器・陶磁器観察表 (図面8)
- 第10表 (伽藍中樞部区画施設) 区北北西出土土器・陶磁器観察表 (図面9~14)
- 第11表 (伽藍中樞部区画施設) 区南南西出土土器・陶磁器観察表 (図面14)
- 第12表 塔跡2地区出土土器・陶磁器観察表 (図面15・16)
- 第13表 塔跡2周辺地区出土土器・陶磁器観察表 (図面16)
- 第14表 金堂地区出土土器・陶磁器観察表 (図面17~26)
- 第15表 講堂地区出土土器・陶磁器観察表 (図面27~32)
- 第16表 鐘楼地区出土土器・陶磁器観察表 (図面33)
- 第17表 堂間地区 (中門・金堂間) 出土土器・陶磁器観察表 (図面33)
- 第18表 堂間地区 (金堂・講堂間) 出土土器・陶磁器観察表 (図面34~36)
- 第19表 中門地区出土土器・陶磁器観察表 (図面37~39)
- 第20表 (伽藍中樞部区画施設) 区南南辺出土土器・陶磁器観察表 (図面39~40)
- 第21表 (伽藍中樞部区画施設) 区北北辺出土土器・陶磁器観察表 (図面41)
- 第22表 (伽藍中樞部区画施設) 区北北西出土土器・陶磁器観察表 (図面41~43)
- 第23表 (伽藍中樞部区画施設) 区南南西出土土器・陶磁器観察表 (図面43)
- 第24表 塔跡1地区出土土器・陶磁器観察表 (図面44・45)
- 第25表 塔跡2地区出土土器・陶磁器観察表 (図面45~50)
- 第26表 塔跡2周辺地区出土土器・陶磁器観察表 (図面51)
- 第27表 金堂地区出土土器・陶磁器観察表 (図面52~59)
- 第28表 講堂地区出土土器・陶磁器観察表 (図面60~66)
- 第29表 鐘楼地区出土土器・陶磁器観察表 (図面66)
- 第30表 堂間地区 (金堂・講堂間) 出土土器・陶磁器観察表 (図面67・68)
- 第31表 中門地区出土土器・陶磁器観察表 (図面69~71)
- 第32表 (伽藍中樞部区画施設) 区南南辺出土土器・陶磁器観察表 (図面71・72)
- 第33表 (伽藍中樞部区画施設) 区北北辺出土土器・陶磁器観察表 (図面72・73)
- 第34表 (伽藍中樞部区画施設) 区北北西出土土器・陶磁器観察表 (図面73~76)
- 第35表 (伽藍中樞部区画施設) 区南南西出土土器・陶磁器観察表 (図面76)
- 第36表 塔跡1地区出土土器・陶磁器観察表 (図面77)
- 第37表 塔跡2地区出土土器・陶磁器観察表 (図面78~84)
- 第38表 塔跡2周辺地区出土土器・陶磁器観察表 (図面85)
- 第39表 南門地区出土土器・陶磁器観察表 (図面85)
- 第40表 鬼瓦観察表 (図面86)
- 第41表 面戸瓦観察表 (図面86)
- 第42表 隅切瓦観察表 (図面87・88)
- 第43表 契戸瓦観察表 (図面88~91)
- 第44表 男瓦観察表 (図面92~107)
- 第45表 女瓦観察表 (図面108~120)
- 第46表 金堂地区出土土器・陶磁器観察表 (図面121~123)
- 第47表 講堂地区出土土器・陶磁器観察表 (図面124~130)
- 第48表 鐘楼地区出土土器・陶磁器観察表 (図面130)
- 第49表 堂間地区 (金堂・講堂間) 出土土器・陶磁器観察表 (図面130)
- 第50表 中門地区出土土器・陶磁器観察表 (図面131)
- 第51表 (伽藍中樞部区画施設) 区南南辺出土土器・陶磁器観察表 (図面131)
- 第52表 (伽藍中樞部区画施設) 区北北辺出土土器・陶磁器観察表 (図面132)
- 第53表 (伽藍中樞部区画施設) 区北北西出土土器・陶磁器観察表 (図面133)
- 第54表 塔跡2地区出土土器・陶磁器観察表 (図面133)
- 第55表 塔跡2周辺地区出土土器・陶磁器観察表 (図面133)
- 第56表 銭貨計測表 (図面134)
- 第57表 金属製品計測表 (図面135・136)
- 第58表 鉄滓・銅滓計測表 (図面137~140)
- 第59表 板碑観察表 (図面141)
- 第60表 石製品観察表 (図面141)
- 第61表 縄文時代の土器観察表 (図面142)
- 第62表 縄文時代の石器観察表 (図面143)
- 第63表 金堂地区出土土器・陶磁器観察表 (図面144~154)
- 第64表 講堂地区出土土器・陶磁器観察表 (図面155~164)
- 第65表 鐘楼地区出土土器・陶磁器観察表 (図面165)
- 第66表 中門地区出土土器・陶磁器観察表 (図面166~170)
- 第67表 塔跡1地区出土土器・陶磁器観察表 (図面171~172)
- 第68表 塔跡2地区出土土器・陶磁器観察表 (図面173~176)
- 第69表 南門地区出土土器・陶磁器観察表 (図面176)
- 第70表 文字碑観察表 (図面177)
- 第71表 昭和31・33・39~44年度調査出土土器類 (図面178~181)

第72表	東僧坊出土土器 (図面182)
第73表	(伽藍中樞部区画施設) 区画南辺出土土器 (図面183~185)
第74表	昭和31・33年度調査出土甕瓦観察表 (図面186~188)
第75表	昭和31・33年度調査出土宇瓦観察表 (図面188~191)
第76表	昭和39~44年度調査出土甕瓦観察表 (図面192~197)
第77表	昭和39~44年度調査出土宇瓦観察表

(図面197~202)

第78表	第19・117・414次調査(東僧坊跡)、第226・360次 調査(南辺区画溝柵中門西)出土甕瓦観察表 (図面203・204)
第79表	第226次調査(南辺区画溝柵中門西)出土鬼瓦 観察表(図面204)
第80表	第19・117・414次調査(東僧坊跡)、第226・360次 調査(南辺区画溝柵中門西)出土宇瓦観察表 (図面205~208)

図面目次

図面	239~447
----	-------	---------

図面1	土器・陶磁器類(1) - 金堂地区1 -
図面2	土器・陶磁器類(2) - 金堂地区2 -
図面3	土器・陶磁器類(3) - 講堂地区1 -
図面4	土器・陶磁器類(4) - 講堂地区2、鐘樓地区、 堂間地区(中門・金堂間) -
図面5	土器・陶磁器類(5) - 堂間地区(金堂・講堂間) -
図面6	土器・陶磁器類(6) - 中門地区 -
図面7	土器・陶磁器類(7) - (伽藍中樞部区画施設) 区画南辺1 -
図面8	土器・陶磁器類(8) - (伽藍中樞部区画施設) 区画南辺2、区画南東、区画北辺 -
図面9	土器・陶磁器類(9) - (伽藍中樞部区画施設) 区画北西1 -
図面10	土器・陶磁器類(10) - (伽藍中樞部区画施設) 区画北西2 -
図面11	土器・陶磁器類(11) - (伽藍中樞部区画施設) 区画北西3 -
図面12	土器・陶磁器類(12) - (伽藍中樞部区画施設) 区画北西4 -
図面13	土器・陶磁器類(13) - (伽藍中樞部区画施設) 区画北西5 -
図面14	土器・陶磁器類(14) - (伽藍中樞部区画施設) 区画北西6、区画南西 -
図面15	土器・陶磁器類(15) - 塔跡2地区1 -
図面16	土器・陶磁器類(16) - 塔跡2地区2、塔跡2周辺 地区 -
図面17	甕瓦(1) - 金堂地区1 -
図面18	甕瓦(2) - 金堂地区2 -
図面19	甕瓦(3) - 金堂地区3 -
図面20	甕瓦(4) - 金堂地区4 -
図面21	甕瓦(5) - 金堂地区5 -
図面22	甕瓦(6) - 金堂地区6 -
図面23	甕瓦(7) - 金堂地区7 -

図面24	甕瓦(8) - 金堂地区8 -
図面25	甕瓦(9) - 金堂地区9 -
図面26	甕瓦(10) - 金堂地区10 -
図面27	甕瓦(11) - 講堂地区1 -
図面28	甕瓦(12) - 講堂地区2 -
図面29	甕瓦(13) - 講堂地区3 -
図面30	甕瓦(14) - 講堂地区4 -
図面31	甕瓦(15) - 講堂地区5 -
図面32	甕瓦(16) - 講堂地区6 -
図面33	甕瓦(17) - 鐘樓地区、堂間地区(中門・ 金堂間) -
図面34	甕瓦(18) - 堂間地区(金堂・講堂間) 1 -
図面35	甕瓦(19) - 堂間地区(金堂・講堂間) 2 -
図面36	甕瓦(20) - 堂間地区(金堂・講堂間) 3 -
図面37	甕瓦(21) - 中門地区1 -
図面38	甕瓦(22) - 中門地区2 -
図面39	甕瓦(23) - 中門地区3、(伽藍中樞部区画施設) 区画南辺1 -
図面40	甕瓦(24) - (伽藍中樞部区画施設) 区画 南辺2 -
図面41	甕瓦(25) - (伽藍中樞部区画施設) 区画北辺、 区画北西1 -
図面42	甕瓦(26) - (伽藍中樞部区画施設) 区画北西2 -
図面43	甕瓦(27) - (伽藍中樞部区画施設) 区画北西3、 区画南西 -
図面44	甕瓦(28) - 塔跡1地区1 -
図面45	甕瓦(29) - 塔跡1地区2、塔跡2地区1 -
図面46	甕瓦(30) - 塔跡2地区2 -
図面47	甕瓦(31) - 塔跡2地区3 -
図面48	甕瓦(32) - 塔跡2地区4 -
図面49	甕瓦(33) - 塔跡2地区5 -
図面50	甕瓦(34) - 塔跡2地区6 -
図面51	甕瓦(35) - 塔跡2周辺地区 -
図面52	宇瓦(1) - 金堂地区1 -

- 図面 53 宇瓦 (2) 一金堂地区 2 -
 図面 54 宇瓦 (3) 一金堂地区 3 -
 図面 55 宇瓦 (4) 一金堂地区 4 -
 図面 56 宇瓦 (5) 一金堂地区 5 -
 図面 57 宇瓦 (6) 一金堂地区 6 -
 図面 58 宇瓦 (7) 一金堂地区 7 -
 図面 59 宇瓦 (8) 一金堂地区 8 -
 図面 60 宇瓦 (9) 一講堂地区 1 -
 図面 61 宇瓦 (10) 一講堂地区 2 -
 図面 62 宇瓦 (11) 一講堂地区 3 -
 図面 63 宇瓦 (12) 一講堂地区 4 -
 図面 64 宇瓦 (13) 一講堂地区 5 -
 図面 65 宇瓦 (14) 一講堂地区 6 -
 図面 66 宇瓦 (15) 一鐘樓地区 -
 図面 67 宇瓦 (16) 一堂間地区 (金堂・講堂間) 1 -
 図面 68 宇瓦 (17) 一堂間地区 (金堂・講堂間) 2 -
 図面 69 宇瓦 (18) 一中門地区 1 -
 図面 70 宇瓦 (19) 一中門地区 2 -
 図面 71 宇瓦 (20) 一中門地区 3、(伽藍中樞部区画施設) 区画南辺 1 -
 図面 72 宇瓦 (21) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画南辺 2、区画北辺 1 -
 図面 73 宇瓦 (22) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画北辺 2、区画北西 1 -
 図面 74 宇瓦 (23) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画北西 2 -
 図面 75 宇瓦 (24) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画北西 3 -
 図面 76 宇瓦 (25) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画北西 4、区画南西 -
 図面 77 宇瓦 (26) 一塔跡 1 地区 -
 図面 78 宇瓦 (27) 一塔跡 2 地区 1 -
 図面 79 宇瓦 (28) 一塔跡 2 地区 2 -
 図面 80 宇瓦 (29) 一塔跡 2 地区 3 -
 図面 81 宇瓦 (30) 一塔跡 2 地区 4 -
 図面 82 宇瓦 (31) 一塔跡 2 地区 5 -
 図面 83 宇瓦 (32) 一塔跡 2 地区 6 -
 図面 84 宇瓦 (33) 一塔跡 2 地区 7 -
 図面 85 宇瓦 (34) 一塔跡 2 周辺地区、南門地区 -
 図面 86 鬼瓦、面戸瓦
 図面 87 隅切瓦 (1) 一金堂地区、講堂地区、中門地区 1 -
 図面 88 隅切瓦 (2) 一中門地区 2、熨斗瓦 (1) 一講堂地区 -
 図面 89 熨斗瓦 (2) 一講堂地区、鐘樓地区、中門地区 -
 図面 90 熨斗瓦 (3) 一中門地区、(伽藍中樞部区画施設) 区画南辺、区画北西 1 -
 図面 91 熨斗瓦 (4) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画北西 2、区画南西、区画南東 -
 図面 92 男瓦 (1) 一金堂地区 1 -
 図面 93 男瓦 (2) 一金堂地区 2 -
 図面 94 男瓦 (3) 一金堂地区 3 -
 図面 95 男瓦 (4) 一中門地区 1 -
 図面 96 男瓦 (5) 一中門地区 2 -
 図面 97 男瓦 (6) 一中門地区 3 -
 図面 98 男瓦 (7) 一中門地区 4 -
 図面 99 男瓦 (8) 一中門地区 5 -
 図面 100 男瓦 (9) 一中門地区 6 -
 図面 101 男瓦 (10) 一中門地区 7 -
 図面 102 男瓦 (11) 一中門地区 8 -
 図面 103 男瓦 (12) 一中門地区 9 -
 図面 104 男瓦 (13) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画南辺 1 -
 図面 105 男瓦 (14) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画南辺 2 -
 図面 106 男瓦 (15) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画南東 -
 図面 107 男瓦 (16) 一塔跡 2 地区 -
 図面 108 女瓦 (1) 一金堂地区 1 -
 図面 109 女瓦 (2) 一金堂地区 2・講堂地区 1 -
 図面 110 女瓦 (3) 一講堂地区 2・中門地区 1 -
 図面 111 女瓦 (4) 一中門地区 2 -
 図面 112 女瓦 (5) 一中門地区 3・(伽藍中樞部区画施設) 区画南辺 1 -
 図面 113 女瓦 (6) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画南辺 2 -
 図面 114 女瓦 (7) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画南辺 3 -
 図面 115 女瓦 (8) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画南辺 4 -
 図面 116 女瓦 (9) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画南辺 5・区画北辺・区画北西 -
 図面 117 女瓦 (10) 一塔跡 2 地区 1 -
 図面 118 女瓦 (11) 一塔跡 2 地区 2 -
 図面 119 女瓦 (12) 一塔跡 2 地区 3 -
 図面 120 女瓦 (13) 一塔跡 2 地区 4 -
 図面 121 埴 (1) 一金堂地区 1 -
 図面 122 埴 (2) 一金堂地区 2 -
 図面 123 埴 (3) 一金堂地区 3 -
 図面 124 埴 (4) 一講堂地区 1 -
 図面 125 埴 (5) 一講堂地区 2 -
 図面 126 埴 (6) 一講堂地区 3 -
 図面 127 埴 (7) 一講堂地区 4 -
 図面 128 埴 (8) 一講堂地区 5 -
 図面 129 埴 (9) 一講堂地区 6 -
 図面 130 埴 (10) 一鐘樓地区、堂間地区 (金堂・講堂間) -
 図面 131 埴 (11) 一中門地区、(伽藍中樞部区画施設) 区画南辺 1 -
 図面 132 埴 (12) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画北辺 1 -
 図面 133 埴 (13) 一(伽藍中樞部区画施設) 区画北西、塔跡 2 地区、塔跡 2 周辺地区 -
 図面 134 銭貨
 図面 135 金屬製品 (1)
 図面 136 金屬製品 (2)
 図面 137 鉄滓 (1)
 図面 138 鉄滓 (2)
 図面 139 鉄滓 (3)

- 図面 140 鉄滓 (4)・銅滓
- 図面 141 板碑・紙石
- 図面 142 縄文時代の土器
- 図面 143 縄文時代の石器
- 図面 144 文字瓦 (1) - 金堂地区 1 -
- 図面 145 文字瓦 (2) - 金堂地区 2 -
- 図面 146 文字瓦 (3) - 金堂地区 3 -
- 図面 147 文字瓦 (4) - 金堂地区 4 -
- 図面 148 文字瓦 (5) - 金堂地区 5 -
- 図面 149 文字瓦 (6) - 金堂地区 6 -
- 図面 150 文字瓦 (7) - 金堂地区 7 -
- 図面 151 文字瓦 (8) - 金堂地区 8 -
- 図面 152 文字瓦 (9) - 金堂地区 9 -
- 図面 153 文字瓦 (10) - 金堂地区 10 -
- 図面 154 文字瓦 (11) - 金堂地区 11 -
- 図面 155 文字瓦 (12) - 講堂地区 1 -
- 図面 156 文字瓦 (13) - 講堂地区 2 -
- 図面 156 文字瓦 (13) - 講堂地区 2 -
- 図面 157 文字瓦 (14) - 講堂地区 3 -
- 図面 158 文字瓦 (15) - 講堂地区 4 -
- 図面 159 文字瓦 (16) - 講堂地区 5 -
- 図面 160 文字瓦 (17) - 講堂地区 6 -
- 図面 161 文字瓦 (18) - 講堂地区 7 -
- 図面 162 文字瓦 (19) - 講堂地区 8 -
- 図面 163 文字瓦 (20) - 講堂地区 9 -
- 図面 164 文字瓦 (21) - 講堂地区 10 -
- 図面 165 文字瓦 (22) - 鐘樓地区 -
- 図面 166 文字瓦 (23) - 中門地区 1 -
- 図面 167 文字瓦 (24) - 中門地区 2 -
- 図面 168 文字瓦 (25) - 中門地区 3 -
- 図面 169 文字瓦 (26) - 中門地区 4 -
- 図面 170 文字瓦 (27) - 中門地区 5 -
- 図面 171 文字瓦 (28) - 塔跡 1 地区 1 -
- 図面 172 文字瓦 (29) - 塔跡 1 地区 2 -
- 図面 173 文字瓦 (30) - 塔跡 2 地区 1 -
- 図面 174 文字瓦 (31) - 塔跡 2 地区 2 -
- 図面 175 文字瓦 (32) - 塔跡 2 地区 3 -
- 図面 176 文字瓦 (33) - 塔跡 2 地区 4・南門地区 -
- 図面 177 文字磚
- 図面 178 昭和 31・33・39 ~ 44 年度調査出土土器類 (1)
- 金堂・講堂 -
- 図面 179 昭和 31・33・39 ~ 44 年度調査出土土器類 (2)
- 講堂・鐘樓・中門 -
- 図面 180 昭和 31・33・39 ~ 44 年度出土土器類 (3)
- D 地区・E 地区 -
- 図面 181 昭和 31・33・39 ~ 44 年度調査出土土器類 (4)
- 塔跡 1・不明 -
- 図面 182 東僧坊跡出土土器
- 図面 183 (伽藍中樞部区画施設) 区画南辺出土土器 (1)
- 図面 184 (伽藍中樞部区画施設) 区画南辺出土土器 (2)
- 図面 185 (伽藍中樞部区画施設) 区画南辺出土土器 (3)
- 図面 186 昭和 31・33 年調査出土瓦 (1) - 甕瓦 1 -
- 図面 187 昭和 31・33 年調査出土瓦 (2) - 甕瓦 2 -
- 図面 188 昭和 31・33 年調査出土瓦 (3) - 甕瓦 3・
字瓦 1 -
- 図面 189 昭和 31・33 年調査出土瓦 (4) - 一字瓦 2 -
- 図面 190 昭和 31・33 年調査出土瓦 (5) - 一字瓦 3 -
- 図面 191 昭和 31・33 年調査出土瓦 (6) - 一字瓦 4 -
- 図面 192 昭和 39 ~ 44 年調査出土瓦 (1) - 甕瓦 1 -
- 図面 193 昭和 39 ~ 44 年調査出土瓦 (2) - 甕瓦 2 -
- 図面 194 昭和 39 ~ 44 年調査出土瓦 (3) - 甕瓦 3 -
- 図面 195 昭和 39 ~ 44 年調査出土瓦 (4) - 甕瓦 4 -
- 図面 196 昭和 39 ~ 44 年調査出土瓦 (5) - 甕瓦 5 -
- 図面 197 昭和 39 ~ 44 年調査出土瓦 (6) - 甕瓦 6・
字瓦 1 -
- 図面 198 昭和 39 ~ 44 年調査出土瓦 (7) - 一字瓦 2 -
- 図面 199 昭和 39 ~ 44 年調査出土瓦 (8) - 一字瓦 3 -
- 図面 200 昭和 39 ~ 44 年調査出土瓦 (9) - 一字瓦 4 -
- 図面 201 昭和 39 ~ 44 年調査出土瓦 (10) - 一字瓦 5 -
- 図面 202 昭和 39 ~ 44 年調査出土瓦 (11) - 一字瓦 6 -
- 図面 203 第 19・117・414 次調査 (東僧坊跡) 第 226 次
調査 (伽藍中樞部区画施設区画南辺) 出土瓦
- 甕瓦 -
- 図面 204 第 117 次調査 (東僧坊跡) 第 226・360 次調査 (伽
藍中樞部区画施設区画南辺) 出土瓦 - 甕瓦・鬼瓦 -
- 図面 205 第 19 次調査 (東僧坊跡) 第 226 次調査 (伽藍中樞
部区画施設区画南辺) 出土瓦 - 一字瓦 -
- 図面 206 第 226 次調査 (伽藍中樞部区画施設区画南辺)
出土瓦 - 一字瓦 -
- 図面 207 第 226・360 次調査 (伽藍中樞部区画施設区画南辺)
出土瓦 - 一字瓦 -
- 図面 208 第 360 次調査 (伽藍中樞部区画施設区画南辺)
出土瓦 - 一字瓦 -

図版目次

図版 419 ~ 482

- 図版1 土器・陶磁器類(1) — 金堂地区—
- 図版2 土器・陶磁器類(2) — 講堂地区1—
- 図版3 土器・陶磁器類(3) — 講堂地区2、鐘樓地区、堂間地区(中門・金堂間)、堂間地区(金堂・講堂間) —
- 図版4 土器・陶磁器類(4) — 中門地区、(伽藍中樞部区画施設)区画南辺、区画南東—
- 図版5 土器・陶磁器類(5) — (伽藍中樞部区画施設)区画北西1—
- 図版6 土器・陶磁器類(6) — (伽藍中樞部区画施設)区画北西2—
- 図版7 土器・陶磁器類(7) — (伽藍中樞部区画施設)区画北西3—
- 図版8 土器・陶磁器類(8) — (伽藍中樞部区画施設)区画北西4、区画南西、塔跡2地区1—
- 図版9 土器・陶磁器類(9) — 塔跡2地区2、塔跡2周辺地区—
- 図版10 甕瓦(1) — 金堂地区1—
- 図版11 甕瓦(2) — 金堂地区2、講堂地区—
- 図版12 甕瓦(3) — 堂間地区(中門・金堂間)、堂間地区(金堂・講堂間)、中門地区、(伽藍中樞部区画施設)区画南辺—
- 図版13 甕瓦(4) — (伽藍中樞部区画施設)区画北西、塔跡2地区、塔跡2周辺地区—
- 図版14 宇瓦(1) — 金堂地区—
- 図版15 宇瓦(2) — 講堂地区、鐘樓地区、堂間地区(金堂・講堂間) —
- 図版16 宇瓦(3) — 中門地区、(伽藍中樞部区画施設)区画南辺、区画北辺、区画北西、塔跡2地区—
- 図版17 鬼瓦・隅切瓦・甕斗瓦(1) — 鐘樓地区、中門地区、塔跡2地区、金堂地区、講堂地区、(伽藍中樞部区画施設)区画南辺—
- 図版18 甕斗瓦(2)・男瓦(1) — (伽藍中樞部区画施設)区画北西、金堂地区—
- 図版19 男瓦(2) — 中門地区、(伽藍中樞部区画施設)区画南東1—
- 図版20 男瓦(3)・女瓦(1) — (伽藍中樞部区画施設)区画南東2、金堂地区、講堂地区—
- 図版21 女瓦(2) — 中門地区、(伽藍中樞部区画施設)区画南辺1—
- 図版22 女瓦(2) — (伽藍中樞部区画施設)区画南辺2、区画北辺—
- 図版23 SB216 中門 壺地業版築内瓦敷き遺物出土状況(1)
- 図版24 SB216 中門 壺地業版築内瓦敷き遺物出土状況(2)
- 図版25 埴(1) — 講堂地区1—
- 図版26 埴(2) — 講堂地区2—
- 図版27 銭貨・金属製品(1)
- 図版28 金属製品(2)
- 図版29 鉄滓(1)
- 図版30 鉄滓(2)
- 図版31 銅滓・板碑・砥石
- 図版32 縄文時代の土器・石器
- 図版33 第I期調査(昭和30~40年代)出土土器

第1章 調査に至る経緯

武蔵国分寺は、江戸時代後期の地誌類で文字瓦や礎石の存在等から太古の寺院跡であることが注目されて以降、明治36年に重田定一・柴田常恵が実地踏査を、大正9年には東京府が追従調査を行って遺跡が良好に遺存している状況を明らかにした(重田1903、稲村・後藤1923)。こうした成果を踏まえて、武蔵国分寺跡は大正11年10月12日に内務省告示第270号で史蹟名勝天然記念物保存法に基づく国指定の史跡となり、翌年12月13日付内務省発理第4号で東京府北多摩郡国分寺村(現在の国分寺市)が管理者として指定された。

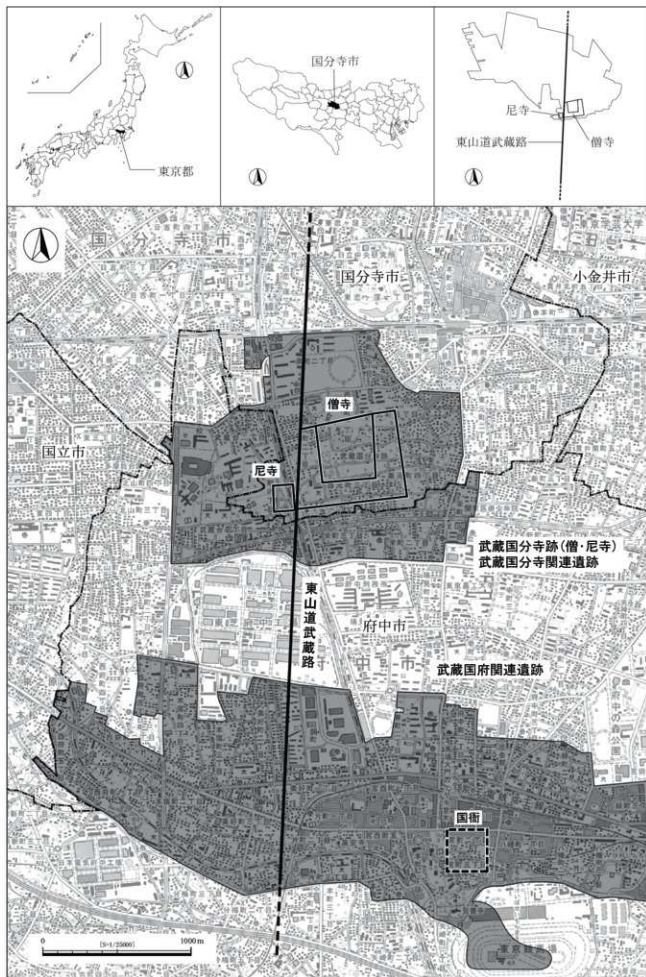
当時史跡となった範囲は、これらの実地調査で礎石や古瓦が密集する地点を包括し、尼寺地区では中心伽藍域に加えて伝祥応寺跡・塚跡・伝鎌倉街道切通しを含む伽藍北方の台地上を、一方の僧寺地区でも、薬師堂・国分寺墓地・講堂・金堂・鐘楼・経藏・西僧坊・中門・七重塔・南門・寺院地南辺区画溝付近に至る約94,181.7㎡の広大な面積に及んだ。その後も史跡地は、昭和51年12月以降、平成29年10月に至るまで追加指定を10回重ね、現在は155,959.96㎡にまで拡大しているが、このうち初回の指定地面積が全体の約6割を占めるなど、僧尼寺それぞれの伽藍の主要な部分は、周辺の市街地化が進む以前から保護が図られてきたといえよう。なお、大正12年には、早くも僧寺金堂・講堂・七重塔跡の一部約5,019㎡が国有化を済ませている。

国史跡地内での発掘調査は、日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会が昭和31・33年に金堂・講堂等を対象に実施した学術調査を嚆矢として、その後、昭和39～41・44年に滝口宏が団長を務める調査組織が尼寺・七重塔・鐘楼および講堂・金堂の再調査を断続的に行い、これらの調査成果によって僧尼寺全体の伽藍配置が想定されるに至った(滝口1966・68・86b・91等)。市では、調査と並行して昭和40年度から史跡の公有化事業に着手し、約7割方を買収した現在も事業は継続中である。また、昭和41年には史跡公園促進特別委員会を設置し、文化庁の指導のもとに昭和46年から3ヶ年で環境整備第1期工事を行う計画を掲げたが、僧尼寺中間地域に市立第四中学校が建設される運びとなったことで遺跡の広域保存のあり方が社会問題化し(大場1973・梶1973・坂詰1973等)、工事は金堂・講堂の基礎整備、石垣・看板工事を行ったところで中断する事態となってしまった。

その後、昭和49年に市は武蔵国分寺跡保存基本方針を表明し、文化財課の新設や学芸員採用を行い、武蔵国分寺遺跡調査会を組織して寺域確認の広域学術調査を開始した。さらに、昭和54年に整備計画策定委員会を条例設置し、史跡整備・博物館建設計画等の課題に取り組むこととしたが、その過程で、昭和60年まで継続した寺域確認調査で整備に向けた考古学的情報が得られたため、昭和63年に史跡の保存管理計画(第1次)、平成元年に整備基本構想、平成2年に整備基本計画、平成4年に(仮称)郷土博物館建設構想を順次策定するに至った。

整備基本計画では、歴史遺産と自然環境に恵まれた武蔵国分寺跡を「歴史のまち国分寺」のシンボルとして多角的に活用できるように、史跡公園と郷土博物館を一体的に整備すること、整備のイメージを国分寺崖線の緑を借景とし、壮大な武蔵国分寺の伽藍をイメージした史跡公園で広く市民に親しまれるふるさと公園とすること、伽藍が最も整った段階を整備の設定年代とすること、等を基本理念とした。この計画に基づいて、まずは公有化が100%完了した尼寺地区から整備事業に着手し、平成4～7年度の事前遺構確認調査、平成9～14年度に整備工事を行い、平成15年4月からは市立歴史公園武蔵国分尼寺跡として供用を始めている。

その後、整備事業を僧寺地区へ移行するにあたり、平成2年の整備計画策定後、10年間で指定地の拡大や史跡地内の家屋の撤収が進み、東山道武蔵路の都史跡指定化等、史跡をめぐる環境が大きく変化したため、平成15年3月には「史跡武蔵国分寺跡(僧寺地区)新整備基本計画」を策定した。本計画では事業期間を20年次と定め、前半の9年次中に中枢地区・南大門地区・塔地区・北方地区において事前遺構確認調査を実施して、中枢地区(金堂・講堂・中門基壇)・南大門地区(中軸園路・南大門表示)の整備を行い、後半11年次中に中門・築地塀等建造物復元、塔基壇、国分寺線緑樹林保全整備等を行う傍らで、整備工事に伴う発掘調査を順に実施する計画を掲げている。今次の事前遺構確認調査は、基本的には、この新整備基本計画に基づいて実施したものである。



第1図 武蔵国分寺位置図

第2章 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

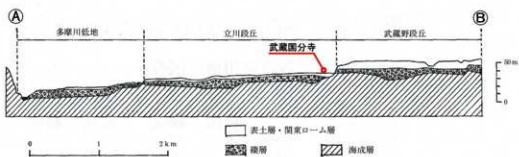
調査地点は、東京都国分寺市西元町二・三丁目地内に所在する。国分寺市は東京都のほぼ中央に位置し、東は小金井市、南は府中市・国立市、西は立川市、北は小平市とそれぞれ接している（第1図）。市域は東西約5.68kmに対して南北約3.86kmと東西にやや長く、面積は11.46km²を有する。都心からJR中央線で30分前後という地の利も手伝って、最近10年間でも微増の傾向にある市内人口は平成29年現在で約12万4千人を超え、都市近郊の住宅都市として発展を遂げている地域である。目下、平成2年に都市計画決定された国分寺駅北口地区第一種市街地再開発事業も佳境を迎え、29年度末には、その象徴となる施設建設物である再開発ビルが竣工を迎える予定で、今後も商業をはじめとした市の中心市街地としての発展に期待が寄せられている。その一方で、駅から南東に約1km離れた調査地点付近の元町地区は、第一種専用住宅地域のため高層建築物が少なく、住宅と農地・緑地が混在する閑静な空間を形成している。

多摩地域にある国分寺市は、巨視的には関東平野の南西部一帯に広がる武蔵野台地上に立地する。この台地は、青梅市付近を頂点として扇形に形成された国内最大級の洪積台地で、北東を荒川、北西を荒川支流の入間川、南を多摩川の各河川と沖積低地によって画され、東西50km、南北20kmの広がりを持つが、台地の南側は後期更新世（約12万年前～1万年前）に多摩川が形成した扇状地を起源として、特に最終間氷期～最終氷期の海面変動に伴って多摩川流路沿いに河岸段丘が幾段も発達している（貝塚1979・貝塚他編2000）。こうしたなかで市域の地勢は、北側の大部分が武蔵野段丘（M2面）上の平坦地が占め、段丘の南端で急激に下降する国分寺崖線を挟んで低位の立川段丘面（TC面）に連続するが、通称「ハケ」と呼ばれる国分寺崖線の下には現在も湧水地が点在し、これらの湧水が集積して多摩川支流である野川の源流となっている。全体的に西高東低の緩やかな傾斜をもつ武蔵野台地上にあって、国分寺市域の標高は武蔵野段丘面上で約70～92m、立川段丘面上で約55～66mをはかり、国分寺崖線の比高差は調査地点の周辺で約15m程である（第2図上段）。武蔵国分寺は、塔や金堂など僧尼寺の主要堂塔は立川段丘面上に占地しているが、後述するように僧寺の伽藍地・寺院地を圍繞する溝は、この崖線を挟んで一部武蔵野段丘の南端部をも取り込んでいる（第3図）。

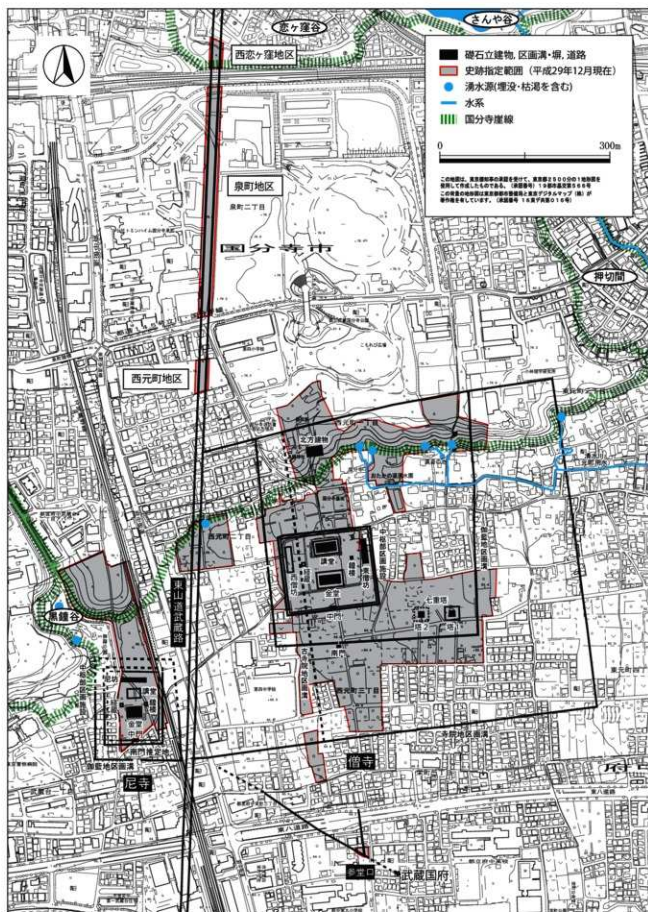
また、付近の武蔵野段丘縁辺部には小さな谷が幾筋も開析され、現在でこそ湧水は枯渇しているが、調査地点から西方約300m離れた尼寺の西北には「黒鐘谷」があり、そこから端を発して国分寺本堂・おたかの道湧水園・真空の池湧水群等の湧水を集めた清水川（元町用水）が武蔵国分寺伽藍の北側を東流している。さらに、調査地点の北東約600m離れた「押切間」付近で、日立製作所中央研究所構内の東西両脇に走る「恋ヶ窪谷」・「さんや谷」からの湧水が集まって元町用水と合流し野川を形成する（滝口1986a）。

ところで、国分寺・府中・小金井市周辺の立川段丘面上には幾つかの細長い凹地が存在し、そのなかには立川ローム層が欠如して立川礫層の上に直接黒土層が乗って凹地を埋積するなど、一見平坦に見える段丘面も意外と起伏に富んでいる。この凹地の一つが市内西元町付近に端を発し、府中市幸町～東京農工大農場～天神町～浅間山を経て、野川へと弓なりに続いているが、特に東京農工大農場以東では、凹地を介して南側が1m以上も低い小崖を形成している。この小崖の南と北では、礫層上に堆積するローム層の様相に差異があり、立川段丘面は上位のTe1面と下位のTe2面とに区分されている（松田・大倉1988）。Te1面は東西6km、南北2kmの規模を有し、東西に長い木の葉状を呈するが、その西端の国分寺崖線寄りの付近に武蔵国分寺僧尼寺が立地していることになる（第2図下段）。

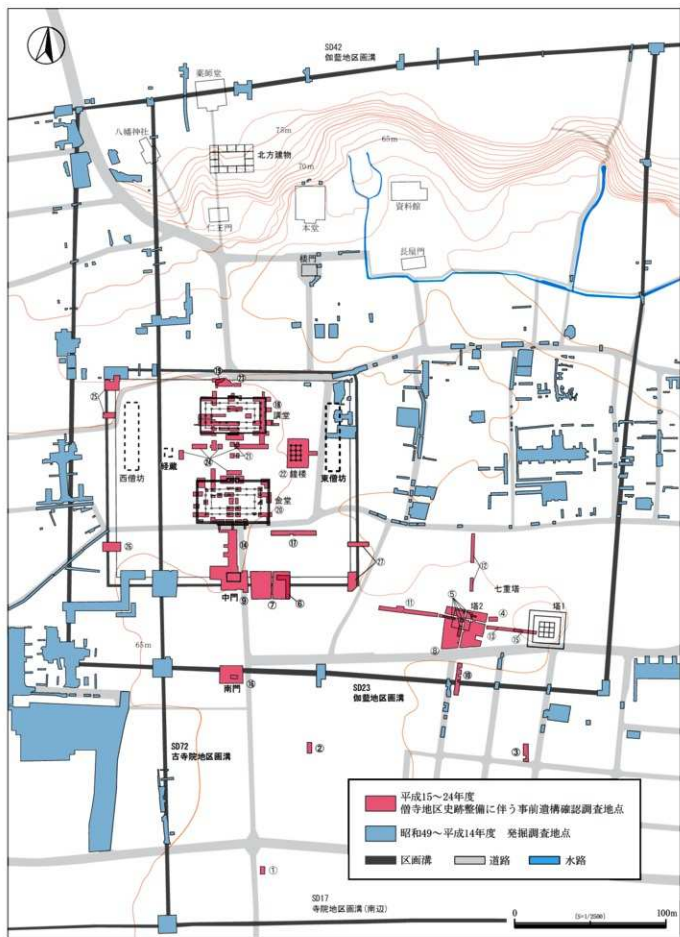
なお、僧寺地区伽藍中核部付近の微細な現況地形は、大局的には金堂・講堂、および七重塔付近が標高65mと最も高所で、北側の元町用水流域の崖線付近は約1～2m程低く、全体的に南東側へ向かって緩やかに低く傾斜している（第4図）。



第2図 武蔵野台地の地形区分と調査地点の位置 (松田・大倉1988を一部改変、加筆)



第3図 史跡武蔵国分寺跡主要伽藍等配置図



第4図 平成15～24年度の発掘調査地点と周辺の地形

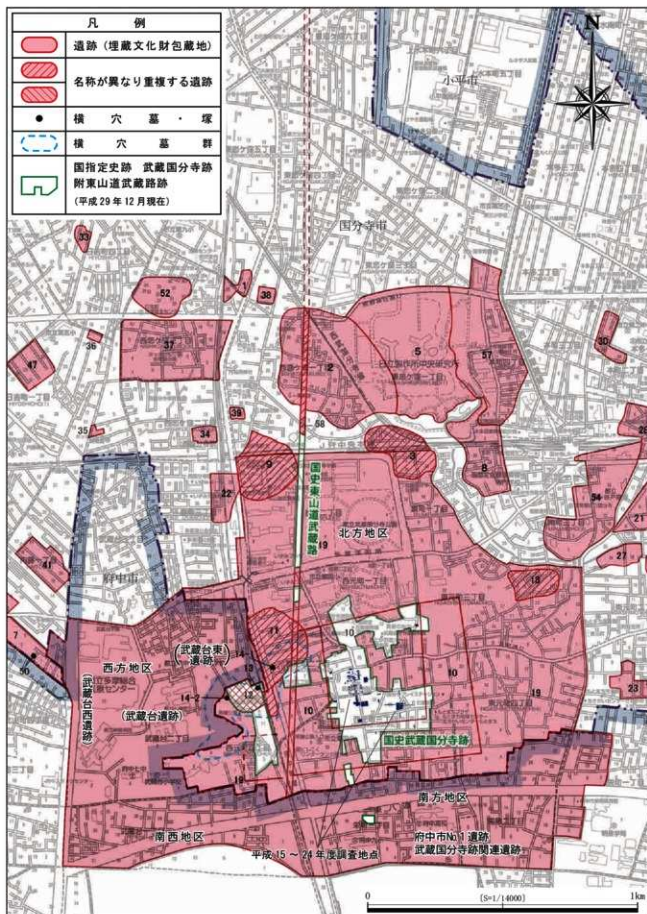
2. 周辺の遺跡と歴史的環境

国分寺市内では、現在48箇所及ぶ周知の埋蔵文化財包蔵地が存在し、平成29年現在までに約900箇所を超える地点で発掘調査が行われている。その全てを網羅して紹介する余裕はないが、ここでは武蔵国分寺跡(国分寺市No.10・19遺跡)周辺の調査概要について触れておきたい。なお、平成15～24年度に実施した僧寺地区史跡整備に伴う事前遺構確認調査の調査地点は第4図・表1に、武蔵国分寺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地については第5図・表2にそれぞれ掲げている。

表1 史跡武蔵国分寺跡(僧寺地区)事前遺構確認調査 調査経過一覧(平成15～24年度)

※地点番号①～⑳は第4図に対応

地点番号	調査年度	調査回数	地区	調査地点	面積(m ²)	調査期間		調査地番(西元町)	備考
						開始	終了		
①	15	570	南門地区	伽藍外(南門南方1)	15.80	20031211	20040107	三丁目2094-4・5	
		570	南門地区	伽藍外(南門南方2)	21.00	20031216	20040219	三丁目2093-5	
		570	塔地区	伽藍外(塔南方)	34.20	20031222	20040116	三丁目2048-4	
②	15	570	塔地区	塔1・塔2間	16.20	20040114	20040205	三丁目2008	
		570	塔地区	塔2	32.20	20040226	20040319	三丁目2024-4	全5調査区
③	16	570	中門・伽藍中 部区画施設地区	区画南辺(中門東)	58.00	20040119	20040301	三丁目2112-1・4	
		578	中門・伽藍中 部区画施設地区	区画南辺(中門東)	445.60	2004818	20050331	三丁目2112-1・4、2113-1・4・5	570次調査(15年度)の 継続及び調査区の拡張
④	16	578	塔地区	塔2	609.80	20040701	20050331	三丁目2004-29、2008、2021-4、2024-1・4	
		578	中門・伽藍中 部区画施設地区	区画南辺(中門東)	445.60	20050601	20060331	三丁目2112-1・4、2113-1・4	578次調査(16年度)の 継続及び調査区の拡張
⑤	17	603	中門・伽藍中 部区画施設地区	中門	344.15	20060202	20060322	三丁目2113-4・5、2114-1・4、2122-2	市道南3号線下部分の 調査
		578	塔地区	塔2	589.78	20050601	20050805	三丁目2004-29、2008、2021-4、2024-1・4	578次調査(16年度)の 継続及び調査区の拡張
⑥	17	603	塔地区	塔2 周辺南	56.76	20050822	20060316	三丁目2004-8・16・21-41	
		578	塔地区	塔2	597.06	20060706	20070315	三丁目2004-29、2008、2021-4、2024-1・4	
⑦	18	603	塔地区	塔2 周辺南	603	20060706	20070315	三丁目2004-16・21-41、2035-5-8	
		603	塔地区	塔2 周辺西	255.52	20060731	20070331	三丁目2021-1、2023-1	
⑧	18	603	塔地区	塔2 周辺北	603	20060731	20070331	三丁目2013-1・4、2014-1・3	
		603	塔地区	塔2 周辺東	603	20060731	20070331	三丁目2004-1・32	
⑨	18	603	中門・伽藍中 部区画施設地区	中門	405.30	20070202	20070322	三丁目2122-1・5、2121-2・3	603次調査(17年度)の 継続及び調査区の拡張
		603	堂間地区	中門・金堂間	131.93	20070302	20070709	三丁目2114-1・4	
⑩	19	625	塔地区	塔1	16.76	20080116	20080331	三丁目2004-1	603次調査(18年度)の 継続及び調査区の拡張
		625	中門・伽藍中 部区画施設地区	中門 区画南辺(中門西)	273.11	20070719	20080331	三丁目2122-2、2113-1・4・5、2112-1・2・4	603次調査(18年度)の 継続及び調査区の拡張
⑪	19	625	堂間地区	中門・金堂間	152.69	20070820	20080331	三丁目2114-1・4	603次調査(18年度)の 継続及び調査区の拡張
		625	南門地区	南門	186.00	20080314	20080327	三丁目2101-7・8	
⑫	20	642	南門地区	南門	184.08	20080613	20090205	三丁目2101-7・8	625次調査(19年度)の 継続及び調査区の拡張
		642	堂間地区	中門・金堂間東	86.85	20080728	20081106	三丁目2111-2・3	
⑬	20	642	講堂地区	講堂	374.25	20081106	20090331	二丁目1609、1610-1・3、1619、1621	
		642	中門・伽藍中 部区画施設地区	区画北辺	13.86	20081205	20090331	二丁目1610-3、1621	
⑭	21	650	講堂地区	講堂	494.60	20090515	20100331	二丁目1609、1610-1・3、1619、1621	642次調査(20年度)の 継続及び調査区の拡張
		650	金堂地区	金堂	181.00	20100210	20100331	二丁目1610-3、1612・1616	
⑮	22	655	金堂地区	金堂	471.12	20100507	20110331	二丁目1610-3、1612・1616	650次調査(21年度)の 継続及び調査区の拡張
		655	堂間地区	金堂・講堂間	28.00	20101220	20110331	二丁目1610-2・3、1614	
⑯	22	655	鐘樓地区	鐘樓	250.27	20101220	20110331	二丁目1608-1・2、1611-2	
		672	鐘樓地区	鐘樓	266.60	20110715	20120330	二丁目1608-1・2、1611-2	
⑰	23	672	中門・伽藍中 部区画施設地区	区画北辺	70.29	20111119	20120210	二丁目1621	655次調査(22年度)の 継続及び調査区の拡張
		672	経蔵地区 堂間地区	経蔵東 金堂・講堂間	168.28	20111004	20120330	二丁目1616、1619・1621	全5調査区
⑱	24	680	金堂地区	金堂	41.48	20120614	20130228	二丁目1610-3、1612・1616	
		680	中門・伽藍中 部区画施設地区	区画北西	99.34	20120614	20130228	二丁目1644-1・2	
⑲	24	680	中門・伽藍中 部区画施設地区	区画南西	73.80	20121116	20130228	三丁目2131、2131-1・3・4、2117	
		680	中門・伽藍中 部区画施設地区	区画南東	98.98	20121127	20130228	三丁目2109-1・4・7	322次調査区(元年度) を拡張



第5図 調査地点と周辺の埋蔵文化財包蔵地

表2 武蔵国分寺跡周辺の埋蔵文化財包蔵地一覧

No.	名称	種別	所在地	時代
1	熊之郷遺跡	集落跡	西恋ヶ窪三丁目19 西恋ヶ窪四丁目1・6・7付近	旧石器・縄文
2	恋ヶ窪遺跡	集落跡	西恋ヶ窪一丁目3・10～27、28～30・47 東恋ヶ窪一丁目付近、三丁目20・21	旧石器 縄文(早、中、後期)・中世
3	恋ヶ窪南遺跡	集落跡	西恋ヶ窪一丁目1～3・5・51 東恋ヶ窪一丁目 泉町一丁目18・20～22、二丁目7付近	旧石器 縄文(早、中期)
5	羽根沢遺跡	集落跡	東恋ヶ窪一丁目付近	縄文(早、中期)
7	多摩蘭坂遺跡	集落跡	内藤一丁目1～3・5・8・9、二丁目1・2・11 付近	旧石器・縄文・奈良
8	花沢西遺跡	集落跡	南町三丁目24・26～30 本町四丁目2～6 泉町一丁目14 東恋ヶ窪一丁目付近	旧石器・縄文・弥生
9	日影山遺跡	散布地(包蔵地)	泉町二丁目9 西恋ヶ窪一丁目8・34・35付近	縄文(中期)・奈良・平安
10	武蔵国分寺跡(僧尼寺)	寺院跡	西元町一丁目1・2・13～15 西元町二丁目1～7・11～14 西元町三丁目2～28 西元町四丁目1～5・9～11 東元町三丁目9・18～20 東元町四丁目6～10・19・20付近	奈良・平安
11	多喜窪遺跡	集落跡	西元町二丁目7～16 西元町四丁目10～12付近	旧石器・縄文(中期)
12	伝祥応寺跡	寺院跡	西元町四丁目12付近	中世
13	塚	塚	西元町四丁目11付近	中世(鎌倉?)
14	多喜窪横穴墓群1号 多喜窪横穴墓群2号	横穴墓	西元町二丁目8～11付近 西元町四丁目10付近	奈良
18	八幡前遺跡	散布地(包蔵地)	東元町三丁目12・14～16・24・25付近	縄文(中、後期)
19	武蔵国分寺跡	集落跡 道路跡	東元町三丁目1～25・31・33・34 西元町一丁目～四丁目 泉町一丁目5～11・18～21 泉町二丁目、三丁目3・16付近 西恋ヶ窪一丁目8	旧石器・縄文・奈良・平安・ 中世・近世
21	殿ヶ谷戸遺跡	集落跡	南町二丁目1～10付近	旧石器・縄文(早、中期)
22	恋ヶ窪廃寺跡	寺院跡	泉町三丁目17・27・30～33・35・36付近	縄文・平安・中世(鎌倉・ 室町)
23		散布地(包蔵地)	東元町二丁目3・7・9付近	縄文・奈良・平安
27		散布地(包蔵地)	東元町二丁目18付近	縄文(中期)
28	本町(国分寺村石器 時代)遺跡	集落跡	南町二丁目17 本町二丁目1～9付近	旧石器・縄文(中期)・奈良・ 平安
30		散布地(包蔵地)	本多一丁目3・4 本町二丁目20・24・25付近	縄文・奈良・平安
33		散布地(包蔵地)	日吉町四丁目30・31付近	縄文
34		散布地(包蔵地)	西恋ヶ窪二丁目2・3・5付近	縄文・奈良・平安
35		散布地(包蔵地)	日吉町一丁目3付近	縄文(中期)
36		散布地(包蔵地)	日吉町一丁目27・28付近	縄文
37		散布地(包蔵地)	西恋ヶ窪三丁目1～3・5～18付近	旧石器・縄文・奈良・平安
38		散布地(包蔵地)	西恋ヶ窪一丁目49付近	縄文・奈良・平安
39		散布地(包蔵地)	西恋ヶ窪一丁目37・38付近	縄文・奈良・平安
41		散布地(包蔵地)	内藤一丁目17～22付近	奈良・平安
47		散布地(包蔵地)	日吉町一丁目31～35付近	縄文(中期)・奈良・平安
50	内藤新田横穴墓	横穴墓	内藤一丁目2	奈良
54	花沢東遺跡	集落跡	南町二丁目14～16・18 南町三丁目1・7～9付近	旧石器・縄文
57	恋ヶ窪東遺跡	集落跡	本町四丁目4～11・14～25 東恋ヶ窪一丁目、二丁目1・2付近	旧石器・縄文(中期)
58	東山道武蔵路	道路跡	西恋ヶ窪一丁目8・9・15～18・24・25・47 東恋ヶ窪三丁目21	奈良・平安

【旧石器時代】 野川源流域にあたる国分寺市～府中市北部一帯では、武蔵野段丘縁辺部で旧石器時代の調査が数多く行われているが、立川ローム層第X層まで調査が及び、約35,000年前に比定される石器が出土した遺跡としては、多摩蘭坂遺跡（市№.7遺跡）・日影山遺跡（武蔵国分寺跡北方地区、市№.9遺跡）・府中市武蔵台遺跡（多摩総合医療センター地区）などがある。なかでも都営住宅建設に伴う多摩蘭坂遺跡第5地点の調査では、立川ローム層第Xc～Xa層で3箇所の石器集中が発見されて局部磨製石斧や大型打製石斧等が出土したが、このうち長さ25.5cm、幅13.5cm、厚さ6.6cm、重量1,646.2gの大型打製石斧を含む6点の石斧群は、一括して国分寺市指定の重要文化財となっている（上敷領1999）。同じくXa層から剥片・石刃を出土した日影山遺跡（板野他1999）、Xc層上部からXa層で石斧を含む石器集中が3箇所発見された武蔵台遺跡（伊藤他2010）とともに、周辺地域における萌芽期の人的活動を考えるうえで貴重な成果が上がっている。

また、武蔵国分寺跡（市№.19遺跡）では、恋ヶ窪谷（第3図）寄りの北方地区で、平成4～13年度にかけてJ R西国分寺駅周辺再開発事業に伴う発掘調査を東京都埋蔵文化財センター・西国分寺地区遺跡調査会・国分寺市遺跡調査会の3つの組織が分担して行い、それぞれの調査地点から旧石器時代の生活痕跡を検出している（福島他2003、板野他1999、上村他2002・2003、板倉他2006等）。このなかで東京都埋蔵文化財センターの調査では、IX層下部・VII層・VI層（AT層含む）・V層・IVb層・IVa層・III層で10枚の文化層を捉え、第2文化層に比定するIVa層からは黒曜石主体の尖頭器・ナイフ形石器をはじめ石器7,694点と礫1,197点が出土するなど、最も資料数豊富な文化層と位置付けている（福島前掲）。その一方で、西側に接する日影山遺跡（西国分寺地区遺跡調査会）の様相を分析した国武貞克氏は、武蔵国分寺跡北方地区の第2文化層期は武蔵台遺跡・多摩蘭坂遺跡における活動の縮小期にあたり、野川源流域における旧石器時代の活動拠点が時代によって移動している様相を指摘している（国武1999）。なお、武蔵国分寺の中核伽藍域と同じ立川段丘面上では、唯一、府中市側の武蔵国分寺跡南西地区の調査において、立川ローム層第IV層よりチャート製剥片を含む炭化物集中部、第III層から尖頭器・ナイフ形石器等6点の石器を伴う炭化物集中・自然湧出礫群、ローム漸移層から硬質頁岩の彫器・搔器を含む炭化物集中が確認されている（小川他1999・第5図）。

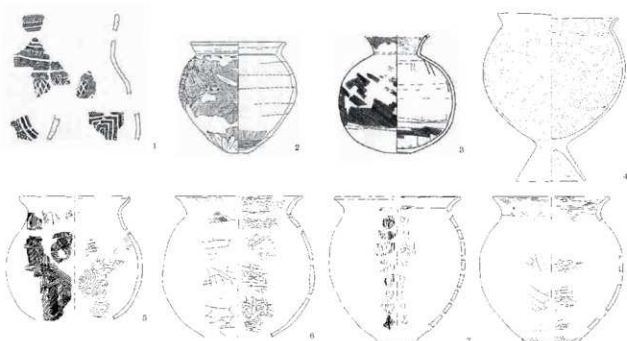
【縄文時代】 縄文時代の調査も、旧石器時代と同様に武蔵野段丘縁辺部で数多くの調査実績がある。武蔵国分寺跡周辺では、僧尼寺中間の国分寺崖線一帯が多喜窪遺跡（市№.11遺跡）として武蔵国分寺跡と二重に周知されている一画があり（第5図）、昭和24～25年頃に国分寺の前住職で郷土史家の星野亮勝が調査を行ったところ、1軒の堅穴住居から完形の勝坂式土器12個体を発見した。これらの土器は共伴した石器7点・土偶1点・耳飾1点とともに国指定重要文化財となり、付近には中期を中心とする集落の広がりが予測されていたが（吉田・土井1986）、その後の武蔵国分寺第251次調査等で早期（摺糸文・押型文・条痕文）、前期（諸磯式）、中期（五領ヶ台・貉沢・阿玉台・勝坂・加曾利E・連弧文・曾利式）、後期（称名寺・堀之内・加曾利B式）の各時期に及んで遺物が出土し、堅穴住居8軒・屋外埋甕2基・土坑・ピット群等が報告されている（福田他2003・第25図）。

また、僧寺伽藍北側の武蔵国分寺跡北方地区でも、真姿の池湧水群を望む台地縁辺部の第563次調査では早期前半の摺糸文期を中心とする堅穴住居6軒と中期前半五領ヶ台式期の住居1軒（合田他2005）、現在の市立第四小学校建設に伴う第500次調査で五領ヶ台式期の住居2軒と加曾利E式期の住居1軒を確認し（上村他2002・2003）、遺物全体の時期様相は多喜窪遺跡と同様に早期から後期に至り、なかでも早期の遺物が豊富に出土している。このような傾向は台地一帯に及んでいるようで、J R西国分寺駅周辺再開発事業に伴う大規模調査においても、特に恋ヶ窪谷に面した台地北側の縁辺部では早期初頭摺糸文・押型文期の住居が51軒と密集して確認されている他（福島他2003）、少量ながら晩期（安行式）の遺物も認められた（福島他2003・板野他1999）。

一方、立川段丘面上における縄文時代の様相については、武蔵国分寺跡（市№.10・19遺跡）の東端部で八幡前遺跡（市№.18遺跡）として二重に周知している中～後期の遺跡が所在する以外、極めて断片的な調査状況でしかないが、下水道敷設に伴う調査で中核伽藍北西付近の国分寺崖線下からは前期諸磯期の集石1

基の他、中期（五領ヶ台・阿玉台・勝坂・加曾利E式）、後期（称名寺・堀之内式）の土器が出土し（上村他1982）、東僧坊の東方至近地では中期末～後期の北白川式に伴う住居1軒・集石土坑1基がそれぞれ確認されている（上敷領1994）。また、府中市側の東八道路建設に伴う調査では、僧寺伽藍の南方地区で早期（野鳥・押型文・田戸上層・子母口式）の陥し穴状の土坑5基、前期（諸磯式）を伴う石器集中・焼土、中期（五領ヶ台・貉沢・加曾利E・連弧文式）の遺物集中、後期（堀之内式）の土器が（岡崎1985）、そして尼寺伽藍の南西地区でも前期（諸磯式）、中期（五領ヶ台・貉沢・阿玉台・勝坂式）、後期（称名寺・加曾利B式）の遺物とともに、土坑・集石・集石土坑・焼土・ピット群等の遺構が調査され（小川他1999）、崖線際の湧水から約300～500m南へ離れた一帯にも縄文時代の土地利用が展開する様子が判明している。

【弥生・古墳時代】 国分寺市域における当該期の考古学的情報はきわめて少ない。弥生時代は、野川源流の恋ヶ窪谷を隔てた東側台地縁辺部にあたる花沢西遺跡（市No.8遺跡）で、昭和52年の第2地点の調査で遺物包含層中から中期前葉の壺形土器（須和田式）の破片が出土しているのみである（佐藤・上村1986、第6図1）。また、続く古墳時代も土地利用は希薄であったようで、これまでのところ立川段丘面上では尼寺伽藍の周辺一帯から甕と壺形土器が1点ずつ（同図2・3）、尼寺伽藍の北側で府中市域に含まれる武蔵野段丘面上では、武蔵台遺跡・武蔵台東遺跡からそれぞれ土坑に伴って甕・台付甕が数点出土している（同図4～8）。これらはいずれも、器種や胎土、整形技法上の特徴から前期五領式期のもので、中期～後期にかけての遺物は現在までのところ発見されていない。ただ、武蔵国分寺創建期前夜の遺跡としては、崖線沿いに横穴墓が複数の地点で確認されている。そのうち、出土遺物から年代が想定できる横穴墓は2例あり、一つは昭和29年に甲野勇によって調査が行われた尼寺伽藍北側の多喜窪横穴墓群（市No.14遺跡）で、玄室中央寄りに一辺1mほどの不整形形状の土坑を設け、底面に疎らに敷かれた木炭と礫の上から人骨と平安時代の緑釉陶器の唾壺が出土している。また、多喜窪横穴墓から西へ約500m離れた内藤新田横穴墓（市No.50遺跡）は、前庭・羨門・羨道・玄室まで全長8mを測る横穴墓で、前庭部から土師器坏2点、玄室から須恵器高台付坏2点と鉄釘が出土した。土師器坏の1点は灯明皿として転用され、須恵器は東海産で形態上の特



1. 須和田（花沢西遺跡第2次調査帯花沢橋北西 上村1986）
2. 五領（武蔵国分寺跡第18次調査帯恋ヶ窪谷 上村1986）
3. 五領（武蔵国分寺跡第400次調査帯花沢北側 堀田1996）
4. 五領（武蔵台東遺跡128号土坑帯南方地区 西野他1999）
- 5～8. 五領（武蔵台遺跡府中病院内帯南方地区 河内他1999）

第6図 武蔵国分寺跡周辺出土の弥生～古墳時代前期の土器

徴から奈良時代前半頃の所産と考えられている（上村 1986）。

【奈良・平安時代】 21郡を有する大國であった武蔵国の国府と国分寺は多磨郡に設置された。国府（国衙）は同じ立川段丘面の南端に位置し、武蔵国分寺とは直線距離にして約2.5kmの距離を隔て、その間には駅路である東山道武蔵路が南北に縦貫しているが（第1・2・7図）、近年の発掘調査では両者が幾筋もの道路網で繋がっていたことが判明している。その武蔵国分寺に関連する集落（寺地）は現在の国分寺市南部～府中市北部一帯にわたり、僧寺金堂を中心に東西約2km、南北約1.5kmにも及んでいる。当該範囲では、これまでに国分寺市側で約730地点、府中市側で90地点近くのにぼる発掘調査が行われているが、僧寺中樞伽藍付近一帯の既往の調査状況については第8図・表3に示した。

僧寺中樞伽藍では、昭和31・33年に日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会が行った学術調査をはじめの調査で、金堂・講堂以外に、当時南大門の存在が想定されたA地区、現在の南門から金堂南側にかかるB・C地区、中門の東側で中樞部南辺区画施設にあたるD地区の計6箇所を対象とした（日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会編1985・第8図）。その後、昭和39～41年に滝口宏が同じく学術目的で鐘樓・中門・塔（塔跡1）・伽藍地区画溝と金堂・講堂の再調査を行い（滝口1987・同図）、この2つの調査で武蔵国分寺の主要な堂塔に関する考古学的情報を得ることとなった。昭和49年に武蔵国分寺遺跡調査会（現国分寺市遺跡調査会）が設立されて以降は、今日に至るまで継続して調査を実施しており、その要因は開発に伴う緊急調査が主体であるが、平成3年までには第4・6・7・29・30・44・163・175・202・226・248・250・



第7図 古代武蔵国の郡域・駅路と武蔵国分寺（駅路は古代交通研究会編2004を基に作図）

表3 僧寺伽藍域周辺における昭和49年以降の発掘調査地点一覧(1)(第8図)
 -昭和31~40年代前半の調査, および平成15~24年度の本書収載の調査地点を除く-

次	年度	調査原因	内容	所在地	調査面積	検出遺構/主要遺物	調査員	遺物箱数	文献
1	S48	公共施設(中学校)	発掘	西元町3-10-7	2,210.6	SB3-SI19・SD3・SK9・SE1 土師器、須恵器、灰軸・緑軸・瓦・鉄製品・石製品	有吉	248	雷田他1979 有吉他1981
4	S49	学術 寺域南辺	確認	西元町3-3	11.8	SD2 須恵器・土師器・瓦	雷田他	1	雷田他1979
6	S49	学術 寺域南辺	確認	西元町3-2071-1・2073	175.0	SD2 土師器・瓦・石器	西脇他	2	雷田他1979
7	S49	学術 寺域南辺	確認	西元町3-5	125.5	SI2-SK1 須恵器・土師器・灰軸・瓦・石製品	西脇他	3	雷田他1979
8	S49	公共施設(中学校)	発掘	西元町3-10-7	3,871.5	SB27-SI55・SD4-SK108 土師器、須恵器・瓦・緑軸・銀製鈴・石罫(巡方)	雷田他	368	有吉他1981 調査会1992
10	S50	ガス工事	確認	西元町3-2190 市道	20.0	SB1-SI1-SK1	有吉	3	小野本他2011
12	S50 ~ 53	下水道	発掘	南部地区3号	460.0	SD1-SI1-SX1 土師器、須恵器・瓦/縄文土器・石器	福田他	52	上村1988
19	S51	個人宅造	発掘	西元町3-31	132.0	SA1-SB1-SD2-SK2-SX1	早川他	87	小野本2009
21	S51	個人宅造	発掘	西元町3-2160-6	80.0	SI4-SK2	西脇他	1	小野本他2011
24	S51	下水道	発掘	西元町地区2号	515.0	SD16	福田他	1	上村1988
26	S51	個人宅造	発掘	西元町3-31-11	32.0	SI2	福田	2	小野本他2011
29	S51	学術 寺域確認	確認	西元町3-23	200.0	SD1-SI1-SK2-P多数 土師器、須恵器・緑軸・瓦・円面鏡	有吉他	112	有吉他1984
30	S51	学術 寺域確認	確認	西元町3-22	78.0	SD1-SX1 土師器、須恵器・瓦・砥石	有吉	7	有吉他1984 平田他1982
36	S52 ~ 53	下水道	発掘	西地区3号	474.0	SI11-SD6-SK28-SX1-P60/SKJ3 土師器、須恵器・灰軸・瓦・鉄製品	上村他	37	上村1989
37	S52 ~ 53	下水道	発掘	南部地区15号	181.9	縄文面1-SD1-SK1-P5-SSJ2 土師器、須恵器・灰軸・緑軸・瓦・砥石・ 鉄製品/縄文土器・石器	有吉他	70	上村1982
38	S52	公共施設(中学校)	発掘	西元町3-10-7	1,234.2	SB4-SA1-SI12-SD3-SK41/SKJ1	有吉	174	有吉他1981 調査会1992
44	S52	学術 寺域南辺	確認	西元町3-5-30	187.1	SB1-SD6-SK1 土師器、須恵器・瓦	行田他	9	有吉他1984
46	S52	個人宅造	発掘	西元町1-14-7	108.0	SK1	福田他	5	小野本他2011
54	S52	個人宅造	発掘	西元町3-29-14	20.6	SI1-SK1	有吉	2	小野本他2011
76	S53	個人宅造	発掘	西元町3-5-18	30.8	SD1	有吉	1	小野本他2011
80	S53	集合住宅	発掘	西元町3-30-11	62.0	SB4-SI1-SD1-SX1	西脇	4	未報告
87	S54 ~ 63	下水道	発掘	南部地区19号	1,400.0	SB6-SI24-SIJ1-SD10-SK39-SX2(地業遺構)/SKJ3-SSJ1 土師器、須恵器・灰軸・瓦・石製品・鉄製品・土製品/縄文土器・石器	有吉	96	上敷領1994
97	S54	個人宅造	発掘	西元町3-2192-2-2191-9	133.0	SI1-SD1-SK6-P53	福田	4	小野本他2011
105	S54	個人宅造	発掘	西元町3-13-5	27.0	P2	上村	1	小野本他2011
106	S54	個人宅造	発掘	西元町3-30-6	95.0	SI1-SK3	上村	1	小野本他2011
113	S56	個人宅造	発掘	西元町3-15-4	33.0	SD1	平田	1	上敷領他2013
115	S55	個人宅造	発掘	西元町3-20-3	129.5	なし	有吉他	1	小野本他2011
117	S55	個人宅造	発掘	西元町3-31-12	107.7	SB1-SA1-SK1	有吉他	17	小野本2009
119	S55	個人宅造	発掘	西元町3-21-12	5.4	なし	有吉	1	小野本他2011
124	S55	個人宅造	発掘	西元町3-30-7	64.8	SD1-SK4-P40/PJ4	福田	1	小野本他2011
132	S56	個人宅造	発掘	西元町3-15-4	14.2	SD1	平田	1	上敷領他2013
139	S57	個人宅造	発掘	西元町3-2058-5	51.1	SI1-SK5-P11	上村	3	未報告
148	S57	個人宅造	発掘	西元町2-29-9	30.1	SI1-P4 土師器、須恵器・瓦・輪裂口	上村	1	上敷領他2013
151	S57	個人宅造	発掘	西元町3-11-19	33.0	SD1	上村	1	上敷領他2013
152	S57	個人宅造	発掘	西元町3-31-17	165.0	SB1-SI2-SK1 須恵器・瓦・金属製品	有吉	10	未報告
153	S57	個人宅造	発掘	西元町3-13-9	30.0	なし	上村	1	上敷領他2013
156	S57	個人宅造	発掘	西元町3-11-19	28.5	SD1	上村	1	上敷領他2013
158	S57	個人宅造	発掘	西元町3-3-43	26.5	SD2	上村	1	上敷領他2001
163	S57	学術 寺域南辺	確認	西元町3-9-24	62.0	SI2-SD1-P26 土師器、須恵器・瓦	福田	1	上敷領他2001
175	S58	学術 寺域南辺	確認	西元町3-5	144.0	SD3-P413 須恵器・瓦/縄文土器・石器	福田	5	上敷領他2001
184	S58	集合住宅	発掘	西元町3-30-23	61.1	なし	上村	1	未報告

表3 僧寺伽藍域周辺における昭和49年以降の発掘調査地点一覧(2)(第8圖)
—昭和31~40年代前半の調査, および平成15~24年度の本書収載の調査地点を除く—

次数	年度	調査原因	内容	所在地	調査面積	検出遺構 / 主要遺物	調査員	遺物箱数	文献
198	S59	個人宅造	発掘	西元町3-30-17	52.8	ST1・SK1・P9 土師器・須恵器・瓦 / 縄文石器	上村	2	上敷領他 2013
302	S59	学術 寺域南辺	発掘	西元町3-23	147.8	SD2・SK1 須恵器・瓦・鉄製品	有吉	6	上敷領他 2001
204	S59	個人宅造	発掘	西元町3-19-7	139.5	SB1・SK1	上村	51	上敷領他 2013
211	S59	個人宅造	発掘	西元町3-12-9	20.3	なし	上村	0	上敷領 2007
215	S59	個人宅造	発掘	西元町3-13-3	44.1	SD1・SK1/SSJ1	上村	3	上敷領他 2013
224	S59	個人宅造	発掘	西元町3-4-19	64.8	SD1・SK3	有吉	1	上敷領他 2013
225	S59	個人宅造	発掘	西元町3-14-5	32.5	SK1	有吉	1	上敷領他 2013
226	S59	学術 寺域西辺	発掘	西元町3-23	282.3	SA1・SB2・S11・SD3・SK2・SX3・P 多数 須恵器・土師器・鬼瓦・轆面瓦・鉄製品・ 礎	有吉	238	小野本他 2010
234	S60	個人宅造	発掘	西元町3-10-4	6.0	P1	上村	1	上敷領他 2013
242	S60	宅地造成	発掘	西元町3-11	664.1	SI13・SD1・SK11/SKJ3(陥穴)	有吉他	21	未報告
248	S60	学術 寺域東辺	確認	西元町1-13-3	45.5	SB1(大型SB87)	上村	8	未報告
250	S60	学術 寺域西辺	確認	西元町2-6	247.7	SB3・SD2・SK1・SX3	有吉	96	未報告
257	S61	個人宅造	発掘	西元町3-3-44	25.0	SD1 土師器・須恵器・緑釉・瓦	上村	1	未報告
265	S61	個人宅造	発掘	西元町3-10-4	17.7	SB3・SD3 土師器・瓦	上村	1	小野本 2009
276	S61	個人宅造	発掘	西元町3-31-20	29.0	P19	上村	1	未報告
286	S62	宅地造成	発掘	西元町3-11-15	74.5	SI1・SD1・P3/SKJ1 土師器・須恵器・灰釉・瓦 / 縄文土器・ 石器	有吉	5	未報告
293	S62	個人宅造	発掘	西元町1-14-8	6.8	SK1 土師器・瓦	上村	1	未報告
295	S62	学術 塔周辺	確認	西元町3-29-3 +4	390.0	SI1・SK18・SX2・硬質面1・P50 土師器・須恵器・瓦	有吉	9	小野本他 2010
296	S62	個人宅造	発掘	西元町3-3-22	4.6	なし 土師器・瓦	上村	1	未報告
299	S62	個人宅造	発掘	西元町2-3-1	31.4	SB1・SI1・SD1・SK3・SX1 瓦・土師器・炭化物	上敷領	6	未報告
303	S63	学術 区画北西	確認	西元町2-5	152.9	SI2・SK14・SD1・SX2(瓦列) 緑釉・瓦・石鈿(丸駒)	福田	109	小野本 2009
305	S63	個人宅造	発掘	西元町3-30-14	19.1	SI2 土師器・須恵器・瓦	上敷領	2	未報告
307	S63	個人宅造	発掘	西元町3-3-26	9.6	なし 縄文石器	上敷領	1	未報告
308	S63	下水道	発掘	南部地区19号	97.6	P12	上村	3	未報告
309	S63	公共施設 (中学校)	発掘	西元町3-10-7	88.8	SI3・SK1・P1	福田	2	未報告
318	H1	個人宅造	発掘	西元町3-31-18	15.4	SB1・SK1・P3 瓦・金属製品	上敷領	1	未報告
322	H1	学術 区画北西	確認	西元町2-5	170.1	SA1・SD2・SK3 須恵器・瓦・石鈿(蛇尾)	福田	180	未報告
324	H1	個人宅造	発掘	西元町3-30-24	14.5	SK1・P16 土師器・瓦	上敷領	1	未報告
328	H1	個人宅造	発掘	西元町3-31-18	21.3	SB1・SI・P3	上敷領	1	未報告
329	H1	分譲住宅	発掘	西元町3-13-7	21.4	SI1	上敷領	1	未報告
334	H1	個人宅造	発掘	西元町3-12-10	2.4	SD1・PJ2	上敷領	3	未報告
335	H1	個人宅造	発掘	西元町3-12-7	5.8	SD1・P2	上敷領	1	未報告
337	H1	個人宅造	発掘	西元町3-10-3	6.3	なし	上敷領	0	立川 2009
338	H1	個人宅造	発掘	西元町3-3-37	1.6	なし 瓦	上敷領	1	未報告
342	H2	個人宅造	発掘	西元町3-10-4	8.5	SB1・P3 土師器・瓦	上敷領	1	未報告
348	H2	集合住宅	発掘	西元町3-5-30	136.6	SB1・SD3・SK1・P9	上敷領	2	未報告
352	H2	個人宅造	発掘	西元町3-3-28	4.7	なし	上敷領	0	立川 2009
357	H3 ~6	下水道	発掘	南部15号	637.7	SB14・SI5・SD6・SK11・P45/SSJ2 土師器・須恵器・灰釉・瓦・金属製品	上敷領	174	上敷領他 1998
360	H3	学術 区画南西	確認	西元町3-23	560.1	SB8・SA2・SI2・SD2・SK18・SX3・P140 須恵器・灰釉陶器・瓦・金属製品	福田	83	小野本他 2010
382	H4	個人宅造	発掘	西元町2-3-35	3.4	P2	上敷領	1	未報告

表3 僧寺伽藍域周辺における昭和49年以降の発掘調査地点一覧(3)(第8圖)
—昭和31～40年代前半の調査、および平成15～24年度の本書収載の調査地点を除く—

次数	年度	調査原因	内容	所在地	調査面積	検出遺構/主要遺物	調査員	遺物箱数	文献
414	H7	個人宅造	発掘	西元町3-31-9	79.3	SA1・SB1・SD1・SK1・SX1(硬質面)・P2	木下	15	小野本 2009
420	H7	個人宅造	発掘	西元町3-29-11	68.1	SD1・SK1・P12	木下	1	未報告
447	H9	分譲住宅	発掘	西元町3-5	336.1	S13・SD1・SK12・SF1・P96 土師器・瓦・縄文土器	上敷領	10	未報告
451	H9	分譲住宅	発掘	西元町3-3	803.5	S14・SD2・SK3・P6	上敷領	10	未報告
453	H9	個人宅造	発掘	西元町3-12-7	0.7	S11 土師器	上敷領	1	未報告
454	H9	個人宅造	発掘	西元町3-5-32	19.8	P20/PJ1 縄文土器・石器	上敷領	1	未報告
456	H9	個人宅造	発掘	西元町3-13-11	2.0	なし	上敷領	0	立川 2009
463	H10	個人宅造	発掘	西元町3-5-13	1.1	なし	木下	1	未報告
464	H10	個人宅造	発掘	西元町3-30-8	7.0	SB1	木下	1	未報告
488	H11	分譲住宅	発掘	西元町3-5	241.0	S13・SK2・SX3/PJ1 瓦/縄文土器	木下	5	未報告
496	H11	個人宅造	発掘	西元町1-13-3	24.1	P1	木下	1	未報告
497	H11	分譲住宅	発掘	西元町3-2	853.1	S12・SD2・SK2/SC1・SSJ1・SKJ7・PJ1	木下	4	未報告
511	H12	個人宅造	発掘	西元町3-14-12	8.4	なし	木下	0	立川 2010
513	H12	分譲住宅	発掘	西元町3-29-5~7	582.6	SR2・S15・SK13・SX1・P15/P11 土師器・瓦・鉄製品/縄文土器・石器	上敷領	9	未報告
517	H12	分譲住宅	発掘	西元町3-29	17.2	PJ11	上敷領	1	未報告
529	H12	宅地造成	発掘	西元町3-23	574.5	SB5・S117・SD2・SK4・SX2・P60/SKJ1・PJ1	上敷領	37	未報告
538	H13	個人宅造	発掘	西元町3-14-7	13.6	なし 瓦/縄文土器	木下	1	未報告
541	H13	下水道	発掘	西元町3-27～31 先	110.1	S13・SD4・SK3・SX1・P8/SKJ2・PJ1	上敷領	7	未報告
544	H13	宅地造成	発掘	西元町2-3-3・4	463.2	SB5・S15・SD3・SK17・SX2・P23 土師器・瓦・金属製品	上敷領	41	未報告
559	H14	個人宅造	発掘	西元町3-15-7	2.0	なし	上敷領	0	立川 2010
581	H16	個人宅造	発掘	西元町3-3-28	7.2	なし	中道	0	上敷領 2007
587	H16	個人宅造	発掘	西元町3-30の一部	111.9	SB1・P27/SJ11(柄鏡型敷石住居)・PJ1 土師器・須恵器・灰釉・青磁・瓦・金属 製品/縄文土器(加曾利EⅣ〜称名寺)、 石器	中道	14	上敷領 2007
589	H16	個人住宅 兼事務所	確認	西元町3-11-19	13.5	なし	中道	0	上敷領 2007
611	H18	分譲住宅	確認	東元町3-1447 -1	101.5	なし 須恵器/縄文土器	小野本	1	立川 2008
618	H18	個人宅造	発掘	西元町3-10-3	7.5	なし	立川	0	立川 2008
624	H19	個人宅造	発掘	西元町2-3-4	7.4	S13・SK1 土師器・須恵器・灰釉・瓦	立川	1	立川 2009
628	H19	個人宅造	発掘	西元町3-4-18	83.9	SD1・S11・SK2・P1/PJ3 土師器・須恵器・灰釉・瓦	立川	1	立川 2009
633	H20	個人宅造	発掘	西元町3-2-7	9.2	なし	立川	0	立川 2010
643	H20	個人宅造	発掘	西元町3-5-14	60.9	S11・P6 土師器・須恵器・灰釉・瓦	小野本	3	立川 2010
652	H21	個人宅造	発掘	西元町3-3-28	8.6	なし	立川	0	立川 2011
695	H25	集合住宅	確認	西元町3-28-15	248.0	SB4・S14・SK4・SX10/SK6(墓)・P多数 土師器・須恵器・円面瓦・瓦/中世銭貨・ 人骨	依田	6	依田他 2015a
719	H28	分譲住宅	確認	西元町3-10-4	11.4	SK1・P2 土師器・須恵器・瓦	増井	1	増井他 2018
724	H29	個人宅造	発掘	西元町3-3-28	4.1	なし 土師器・須恵器	増井	1	未報告

※「内容」欄の発掘は本調査、確認は確認調査を示す。

※「検出遺構/主要遺物」に記載の各種記号は、以下の通りである。

SA：竪 SB：掘立柱建物 SC：炭化物集中 SD：溝 SE：井戸 SF：道路状遺構 SI：竅穴住居 SK：土坑

SX：不明・特殊遺構 SS：集石 P：小穴(ピット)ー以上、古代・中世の遺構

SJ1・SKJ・SSJ・PJ 等：縄文時代の遺構

295・303・322・360次等の各調査で、寺域確認を目的とした学術調査も断続的に実施してきた。これらの調査によって判明してきた武蔵国分寺の概要については、次章で触れることにする。

【中世以降】 武蔵国分寺には、建武二（1335）年七月の奥付のある「医王山縁起」が伝わっている（表18-30・44）。それによると、元弘三（1333）年五月十五日に新田義貞と鎌倉幕府軍の間で激闘となった分倍河原の合戦の折、国分寺も兵火のため諸殿堂皆一時に焼亡したが、建武元年に義貞が黄金三百両その他を寄進し、その翌年三月お堂を造って供養した、という（滝口1986c）。伝承の上では、武蔵国分寺は14世紀の半ばに一旦焼失して無くなったことになるが、市内での中世に関する考古学的情報は、古代と比べて断片的で極めて少ないのが現状である。

そうしたなかで、古代の東山道武蔵路を踏襲したと見られる鎌倉街道上道が、市域では東山道から西へ約150m離れて走行し、尼寺伽藍の中心部を南北に貫いて北側台地の斜面には切通しを形成しているが（第9図）、この道路跡に沿って伝祥応寺跡（市No.12遺跡）・塚跡（同No.13遺跡）、さらにはその北側延長上に恋ヶ窪寺跡（同No.22遺跡）・恋ヶ窪遺跡（同No.2遺跡）などで中世の遺跡が存在する（第5図・表2）。

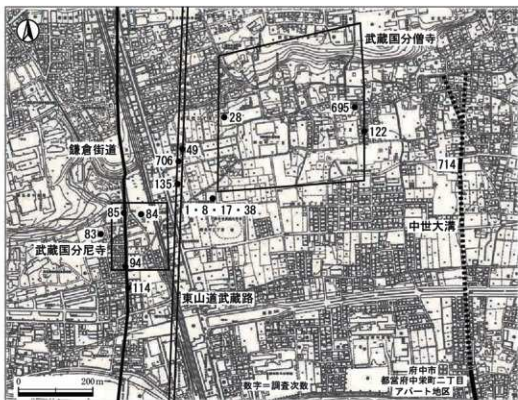
伝祥応寺跡は切通しの西側台地上にあり、昭和44年と平成7年に行った発掘調査で、鎌倉街道に面して東西30m、南北50mにおよぶ土塁を北・西・南の三方に巡らした内側に東西9m、南北18m程の礎石建物を配し、出土した陶磁器や板碑等から14～15世紀の一堂形式の寺院跡と判明した（滝口1974・福田1997）。また、切通しの東側対岸には一辺22m、高さ3mの塚が1基存在し、『東京府史蹟勝地調査報告書』では、方形封土と古瓦の出土から「国分寺に關係を有する一種の土塔」としていたが（稲村他1923）、同じく昭和44年の調査で洪武通宝と古瀬戸の灰釉瓶子が出土したことから、伝祥応寺跡と関連する修法壇跡の性格をもつ塚であることが指摘されている（有吉1986b・福田1997）。

恋ヶ窪寺跡は、昭和46年に行った第1次調査で礎石を伴う土段状建物が発見されて以降（滝口他1972）、現在までに調査は17地点に及んでいる（板倉2006）。それらの調査で掘立柱建物、溝・土橋状遺構・堀跡、火葬墓・土壇墓等の遺構を検出し、礎石建物跡のみで構成される平安時代後半（第一期）、掘立柱建物や溝跡などで構成され再建期にあたる13世紀末（第二期）、寺域南辺溝埋没後で火葬墓・土壇墓等で構成される14世紀前半～15世紀末（第三期）の変遷で大凡捉えられている（有吉1986b）。さらに縄文時代中期の集落跡として著名な恋ヶ窪遺跡でも、第6次調査で地下式礎1基と13世紀末の常滑甕が出土したことから中世の遺跡の存在が明らかになったが（永峯他1982）、近年でも第94次調査で14～15世紀の区画溝が検出されている（依田他2016）。

さて、武蔵国分寺跡（同市No.10・19遺跡）における既往の調査では、第9図・表4に掲げた地点で中世

表4 武蔵国分寺跡（市No.10・19遺跡）における中世の考古学的情報
（恋ヶ窪寺跡関連・伝祥応寺・塚を除く）

調査地点	調査年度	場所	概要	文献
1・8・17・38次	S48～52	僧尼寺中間	遺構 - なし。遺物 - 建築系糸目天目茶碗、龍泉系系青磁碗連弁文碗、無文碗、瀬戸灰釉折縁深皿・卸皿・大平鉢、祥符元寶・祥符通寶・元祐通寶等。	有吉1986b
28次	S51	僧寺伽藍地西辺	遺構 - なし。遺物 - 元祐通寶。	有吉他1984
49次	S52	僧尼寺中間	遺構 - なし。遺物 - 龍泉系系青磁碗1類。	増井2017c
83次	S53	尼寺伽藍西方	遺構 - 地下式横穴3基、溝跡1条、土坑1基。遺物 - かむらげ、龍泉系系青磁白文碗、瀬戸天目茶碗、常滑片口鉢・盃・大甕、石臼、板碑等。	有吉他1989
84次	S53	尼寺伽藍北辺	遺構 - 瓦葺群? 箇所。遺物 - 瀬戸灰釉平碗、常滑片口鉢・大甕、天橋通寶・元豊通寶・永樂通寶等。	有吉他1989
85次	S53	尼寺伽藍北西	遺構 - なし。遺物 - 瀬戸灰釉卸皿。	有吉他1989
94次	S54	尼寺伽藍南西	遺構 - 南北道路跡1条。遺物 - なし。	有吉他1989
114次	S55	尼寺伽藍南方	遺構 - 南北道路跡1条。遺物 - 天橋通寶・平和通寶等。	上敷領他1996
122次	S55	僧寺伽藍地東辺	遺構 - 小穴2基。遺物 - 治平元寶・元豊通寶等。	上敷領他2001
135次	S56	僧尼寺中間	遺構 - 南北道路跡1条・南北溝跡8条。遺物 - 瀬戸天目茶碗、常滑大甕、龍泉系系青磁連弁文碗、白磁碗、淨化通寶等。	有吉他1989
695次	H25	僧寺伽藍地内東側	遺構 - 土壇墓6基。遺物 - かむらげ、永樂通寶等。	依田2015a
706次	H27	僧尼寺中間	遺構 - 溝1条。遺物 - 龍泉系系青磁碗、龍美甕、常滑二筋甕等。	増井2017b
714次	H27	僧寺伽藍地東外縁	遺構 - 溝1条。遺物 - 常滑片口鉢、瀬戸鉄輪折縁中皿等。	増井2017c



第9図 武蔵国分寺跡中世遺物出土地点位置図（有吉1986bをもとに加筆）

の遺構や遺物が確認されている。大略して14世紀後半～15世紀中葉の時期に関わる遺跡が目立ち、「医王山縁起」で武蔵国分寺が焼失したという鎌倉時代の様相は依然として不明であるが、最近、僧尼寺中間地域にあたる第706次調査で、溝覆土中から12世紀後半～13世紀前半の龍泉窯系青磁碗Ⅰ類や渥美窯甕などが見つかり（増井2017b）、また僧寺寺院地の東外縁にあたる第714次調査で、玉川上水の工事失敗談に纏わり、府中市栄町方面までの延長が想定される14～15世紀の遺物を伴う大溝を検出するなど、極めて注目すべき成果があがっている（増井2017c）。さらに、七重塔と真姿の池湧水群の間で行った第695次調査では人骨や永楽通寶を伴う土壇墓群が見つかり、僧寺伽藍地内に及ぶと当該期の情報は極めて乏しいが、中世に関わる情報が徐々に蓄積されつつある（依田2015a）。

このようななか、伽藍地・寺院地の北方地区で平成28年度に実施した都立公文書館建設に伴う第718・722次調査において、恋ヶ窪廃寺跡と関連する中世溝が検出された（島田他2018）。以前、西国分寺駅周辺の再開発事業用地内の発掘調査で検出した「古代溝SD5」（板野他1999）の延長部分に相当する溝で、合わせて約340m以上に及ぶ延長距離を持つことになるが、覆土中から太宰府分類の白磁皿Ⅸ類（13世紀後半～14世紀前半、山本1995）が出土したことで「中世溝」として再評価することに至ったものである。これによって、現在、埋蔵文化財包蔵地として周知している「恋ヶ窪廃寺跡」の範囲の外側にも、関連遺構が広域に展開する様相が判明した。

さて、江戸時代の国分寺村に関わる史料に、断片であるが延宝六（1678）年の検地帳が残っている（国分寺市史編さん委員会1982・大澤1990）。そこには中世武士の居館跡に関係する「堀之内」の小名表記があるものの、具体的な場所については長らく追究されてこなかったが、近年、明治2年の国分寺村絵図中に、小字地名としての「堀之内」が視認出来るようになった（国分寺市他2015）。「堀之内」の地名表記は2箇所あり、村絵図を現在地と重ね合わせると、一つは国分寺業師堂の北西側一帯、今一つは伝祥応寺跡付近に比定出来る（島田前掲）。その内実の検討は今後の課題としなければならないが、国分寺地域の中世史を見直す貴重な情報が把握されている。

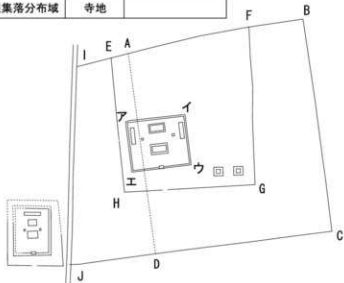
第3章 遺跡の概要と調査の経過

1. 武蔵国分寺の概要

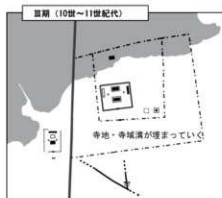
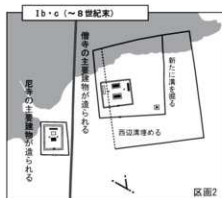
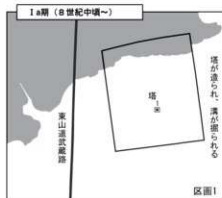
武蔵国分寺は、第1章でも触れたとおり、昭和31年に石田茂作を代表とする日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会による発掘調査を皮切りに、昭和49年からは市の常設調査機関である国分寺市遺跡調査会で学術・確認調査、および各種開発に伴う事前調査等を継続的に実施し、市内で「武蔵国分寺跡」として周知している埋蔵文化財包蔵地の範囲（国分寺市No.10・19遺跡）だけでも、平成29年12月現在までに730次を超える調査件数を累積してきた。また、武蔵国分寺を支える集落跡は、隣接する府中市域にも及び（府中市No.1遺跡「武蔵国分寺関連遺跡」、第1・5図）、府中市内ではこれまでに87箇所の調査が行われているため、全体での調査件数は約800地点にものぼっている。こうした既往の調査成果を踏まえた武蔵国分寺の概要については、大凡、以下のとおり理解されている（福田2008、太田・増井2015、中道2016、増井2017a等）。

規模と構造 武蔵国分寺の構造は、僧尼寺を含む南辺の東西中軸線上にあたる僧寺金堂に設計の中心を置き、中央部を占める僧寺は寺院地・伽藍地・中核部の三重に、南西隅を占める尼寺が伽藍地・中核部の二重にそれぞれ区画されている（第10図）。その間を東山道武蔵路が南北に縦貫し、これらの周辺には集落

区画範囲	名称	区画施設(溝)名称
ABCD	古寺院地	古寺院地区画溝
IBGJ	寺院地	寺院地区画溝
EFGH	伽藍地	伽藍地区画溝
アイウエ	中核部	中核部区画施設
周辺集落分布域	寺地	



第10図 武蔵国分寺跡の構造と名称（太田・増井2015）



第11図 武蔵国分寺変遷図

（国分寺市教委・坂戸市教委2017）

表5 武蔵国分寺(僧寺・尼寺) 寺地・僧尼寺院地・伽藍地・中樞部等の規模比較

対象地	東辺長	西辺長	南辺長	北辺長	備考(出典)	
僧寺	寺院地(新时期)	約582 m	約536 m	約716 m	約626 m	区画溝範囲
		約758 m		—		区画北辺溝～参道口間
	寺院地(古期)	約582 m	約548 m	約484 m	約484 m	区画溝範囲
		伽藍地	428.3 m	365.4 m	356.3 m	384.1 m
尼寺	中樞部	南北約132 m		東西約156 m		掘立柱塀範囲(国分寺市教育委員会2012)
	伽藍地	南北推定160 m以上		東西約150 m		区画溝範囲(国分寺市教育委員会2012)
	中樞部	118.78 m	123.05 m	88.42 m	89.4 m	掘立柱塀範囲(国分寺市教育委員会2004)
寺地	南北約1 km		東西約1.5 km		関連遺跡(集落域)の広がり	

が広がる寺地が展開するが、その規模は東西1.5km、南北1.0kmにも及んでいる(第1図)。また、僧尼寺をそれぞれ囲む範囲の規模は、表5に示したとおりである。

僧尼寺の中樞部を除く区域には、多数の掘立柱建物や堅穴住居が分布しているが、それらの大半は寺の管理運営機関である「院・所」を構成する遺構群であり、太衆院・政所院、苑院・花園院、東院、修理院、講(前)院・中院等の付属諸院等の存在が考えられる(第13図)。これらは遺構及び出土遺物の検討によって、大きく三期の変遷を辿っている(有吉1986a・90・01等・第11図)。

【創建期(第I期)】 8世紀後半にあたり、天平13年の国分寺創建詔発布直後に塔周辺を中心とする伽藍地で造営に着手したI a期、天平19年の郡司層の協力要請を受けての造寺計画の変更と造営が終了するI b期(天平宝字2年以前、以降のI c期に小区分される。I b・I c期は僧尼寺の金堂・講堂の創建段階に相当する。武蔵台遺跡で出土した漆紙文書が、天平勝宝九歳(757)の具注暦であることから、反故となる翌年の758年までには国分寺の造営は終盤を迎えつつあったことが窺える(平川他1989・廣瀬2014)。

【整備拡充期(第II期)】 塔再建(上限承和12年)を中心とする時期に当たり、僧尼寺の整備・拡充が行われた9世紀後半から後半代にあたる。

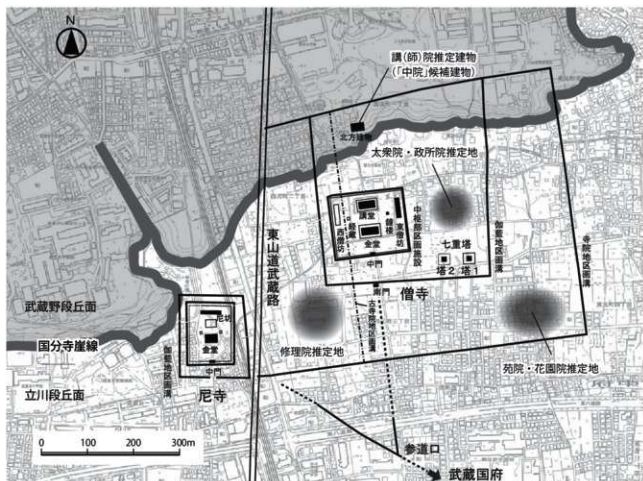
【衰退期(第III期)】 寺院地及び伽藍地区画溝の埋没を契機として堅穴住居が伽藍地内に出現し、国分寺の存在意義が失われてくる10～11世紀代にあたる。

僧寺伽藍 僧寺の主要伽藍が考古学的に解明された経緯は、昭和31・33年の石田茂作による発掘調査で、金堂基壇の規模や講堂西側の継ぎ足し基壇の存在を明らかにしたのを嚆矢とする(日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会編1985)。その後、尼寺跡の無許可宅地造成を契機として、滝口宏が昭和39～44年に調査を行い、中門・北方建物の規模や七重塔の再建、伽藍地(寺域)区画施設等が判明した(滝口1987)。続いて昭和49年以降には、寺域確認調査を柱として市に常駐調査組織(現国分寺市遺跡調査会)が設置され、中樞部区画施設の規模や伽藍地(寺域)区画の変遷等を解明すべく、市内の各所で調査を行った(福田1986)。これらの調査によって、僧寺伽藍地(寺域)は幅2.1～3.0 m、深さ0.8～1.5 mの素掘り溝で区画し、その規模は北辺384.1 m、東辺428.3 m、南辺356.3 m、西辺365.4 mを有することが判明した。

また、伽藍配置は、南辺の西寄り3分の1等分線を中軸線として、伽藍地区画に設けた南門、中樞部区画に設けた中門、中樞部区画内南側の金堂、その背後の講堂、中樞部区画外の北方建物が一直線に並び、金堂・講堂の両側には鐘楼・経蔵と東西僧坊が配される。

中樞部を区画する施設は掘立柱塀と素掘り溝で構成され、中門より両翼に延びて北へ折れ、東西僧坊を取り込み、講堂の背後で閉じる。回廊を有さず、僧坊等までを圍繞する特異な構成をとるのは、後述する尼寺も同様である。なお、僧寺の中樞部を区画する掘立柱塀は、第II期以降に築地塀へ替えられている。中樞部区画の規模は東西約156 m、南北約132 mを測る。塔は中樞部区画の外に位置し、金堂の中心より直線距離で約220 m離れた伽藍地(寺域)区画の南東隅に存在する。

以上の伽藍を構成する主要の建物は、瓦葺き礎石建物で、特に金堂は間口7間、奥行4間の東西棟建物で、



第13図 推定付属講院の位置 (増井 2013 に加筆)

柱建物跡が並ぶ。これらは第Ⅰ期から第Ⅱ期へと長期間存続し、「納」・「東」の墨書土器が出土していることから太衆院・政所院に想定される。ただし、他国の国分寺では政所院は独立せず、太衆院の一部として機能していた事例が多い(川尻前掲)。

【苑院・花園院】僧寺寺院地の南東地域は、小穴や小溝がわずかに確認されるのみで、遺構分布が希薄な地域となっていることから、苑院・花園院に想定されている。しかし、武蔵国分寺の付近は水稲栽培には不向きで、耕作地としての生産性は低い土地柄であった(深澤 2017)。

【東院】尼寺伽藍地南辺溝より出土した須恵器坏に、「東院」と書かれた墨書土器がある。その製品は9世紀中頃のもので、当該期に東院と呼ばれた施設が存在していたことが窺える。出土位置より尼寺の付属施設と考えられ、掘立柱建物数棟まとまっている尼寺伽藍地内の東側地域が想定されるが、実態は不明である。

【修理院】寺院地内西部地域(現在の市立第四中学校周辺)では、9世紀前半～11世紀代に至る掘立柱建物跡40棟、竪穴住居跡89軒の遺構が密集しており、さらにこれらは小溝で区画した中に整然と配置され、その中に鍛冶工房跡を含むことから宮内関係施設の修理院に想定される。

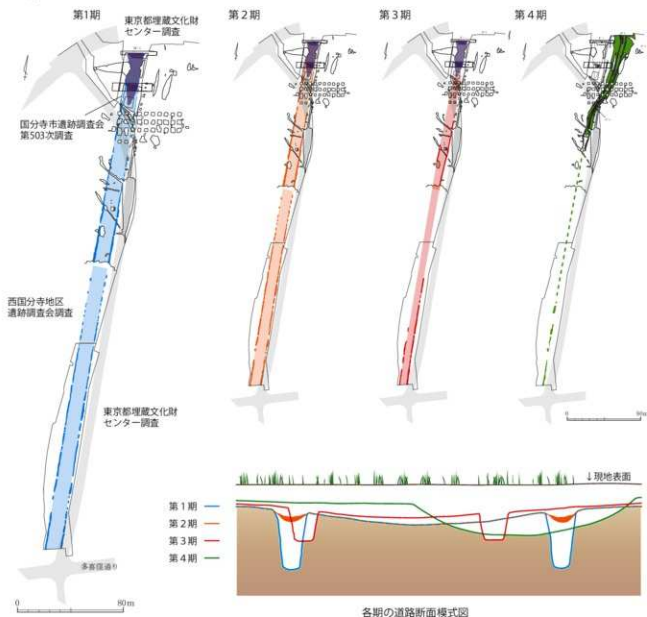
【講(師)院・中院】金堂・講堂の北方中軸線上で、国分寺崖線の南斜面に桁行5間(28.5m)、梁行4間(18.4m)の東西棟礎石建物があり、昭和41年の発掘調査で付近から塔跡と同種の軒先瓦・文字瓦や灯明皿・皇朝十二銭等が出土した。僧寺伽藍の全体を見渡せる立地から寺の重要施設で、北方建物跡(北方台地上建物)もしくは北院址と称し、国師(講師)の居宅であった可能性や(滝口 1987)、法隆寺所蔵の「大菩薩藏経卷十三」の奥書に、承和14年(847)の紀年銘とともに「武蔵国分寺中院僧最安」とあることから(表 18-6)、中院に充てる説もある(石村 1960)。

東山道武蔵路 東山道武蔵路は、都と地方を結ぶ古代東山道の枝道(支路)の一つで、上野国から武蔵国府へと南下する幅約12mの直線道路である。『続日本紀』宝亀二(771)年十月己卯条には、上野国邑楽郡か

ら武蔵国に至る間に5つの駅が存在すると記載があり、推定路線において駅家の候補地が数箇所挙げられている(木本1992他、第7図)。この古代道路を現在では「東山道武蔵路」と呼称し、発掘調査によって国分寺市域を通過していたことが明らかとなっている。その推定路線は、北は小平市上水木町地区より市内へ入り、戸倉一丁目、東恋ヶ窪六・四・三丁目、西恋ヶ窪一丁目、泉町二丁目、西元町二丁目の各地区を縦貫し、南は府中市武蔵台地区へと抜け、市内での総延長は約3kmにも及ぶ。特に武蔵国分寺の寺院地の北方にあたる現在の泉町二丁目では、平成5～7年の大規模な発掘調査で、おおよそ以下の4時期にわたる変遷が明らかにされている(板野他1999・福島他2003、第14図)。

【第1期】 2条の並走する側溝で区画された道路で、幅は約12mを測る。国分寺市内では、従来「SF1」と呼称して調査していた直線状の道路遺構である。道路側溝は底面の高さが一定でなく、所々で掘り残されたように盛り上がるが、平面的には長い土坑があたかも連結しているような形状を呈する。

【第2期】 第1期の両側溝の覆土上面に硬化層が認められる部分を道路として認識し、全体の道路幅は1期の12mを踏襲する。埋没途上の側溝に黄褐色～暗黄褐色のいわゆる関東ローム層土を充填して補修・改修しているのが特徴である。市域内では、JR中央線以北の西恋ヶ窪一丁目・東恋ヶ窪三丁目付近で同様な土層の堆積を確認しており、さらには小平市・東村山市域でも第2期道路の様相が確認されている(松原2000)。



第14図 泉町地区の東山道武蔵路の変遷(増井2017a)

【第3期】 新規の側溝を伴う幅約9～11mの道路で、第1期の側溝と一部重複する。これまでの調査では、武蔵国分寺の寺院地区西溝以北から現J R中央線以南の範囲でのみ確認されている。

【第4期】 泉町二丁目地区では第1～3期路線から東へ逸れていく、波板状圧痕を伴う切り通し状の道路として捉えられている。

第1期は、所沢市東の上遺跡の側溝内より出土した土器に7世紀第三四半期の湖西窯産須志器を含むことから、道路の築造時期も当該期と考えられており（根本 2015）、府中市域でも8世紀中葉の堅穴住居跡が第1期の側溝覆土を壊して構築しているが（野田 2015）、国分寺市域では第1期の側溝と重複関係にある遺構は未確認である。また、道路という遺構の性格上、路線上の全ての側溝が同時期に埋まる訳ではなく、第2期には一部の側溝が埋没していなかった可能性もあり、小平市小川町二丁目地点の側溝覆土の火山灰分析では9世紀第三四半世紀頃の年代が与えられている（松原前掲）。

なお、東山道武蔵路は武蔵国の東山道から東海道への所属替えにより、宝龜二（771）年には官道の役割を終えるが、その後も南北を結ぶ主要道路として利用され続けていたことが各地の調査で明らかとなっている。特に第3期以降の道路では、道路面や周辺から出土する遺物の様相から、少なくとも10世紀後半までは道路として機能を維持していた（福島他 2003）。

参道口 寺院運営上の諸施設を含む寺院地の外に、寺地と呼ぶ集落が展開する範囲があり、その南限を区切る施設として僧寺金堂跡から南に478m離れた位置で門柱状遺構が確認されている。府中市域で、平成11年に都営住宅の建て替えに伴う発掘調査によって存在が明らかとなった（野田 2002）。

門柱状遺構は3基確認され、いずれも共通した意図で一定期間に建て替えられている様子が判明している。その特徴は、①柱の太さが40～50cmほどで、柱間と柱径の割合が11分の1とほぼ一定していること、②柱は全て垂直に近く、内側に傾いていないこと、③東西の柱の上部は繋ぎ材で繋結していたと思われること、④柱の上部が繋がっていたため柱の深さを調整し、東西同じ高さ、水平に合わせたことが想定されること、などが挙げられる。野田憲一郎氏によると、これらの特徴から上部構造は鳥居よりはむしろ、古代荘園図「額田寺伽藍並条里図」にみられるような、柱の上部を水平な冠木で貫いた冠木門である可能性が高いことを想定している。

なお、門の直下には、武蔵国分寺僧寺推定中軸線上に延びる南北方向の道路跡（参道）が走り、幅2.2～3.0m、検出延長は28mを測る。また、門跡の南側では、武蔵国分尼寺方向に延びる斜行道路（幅2.4～3.0m、検出延長35m）とも合流し、進行方向の異なる2本の道路が交錯している。この道路はさらに南東方向へと伸び、武蔵国衙中軸から北上する道路と交わることが推定されている。このことから、武蔵国府と武蔵国分寺をダイレクトに繋ぐ道路網が存在し、国府と国分寺が都市的な計画のもとに道路・町割り整備されている様相が判明した（有吉 2014 等）。

当該地区より出土した遺物から、二本一對の門状遺構は9世紀後半以降に3回にわたってほぼ同一の空間に建て直され、北方に位置する武蔵国分僧寺の参道標識としての性格を持ち続けた。なお、門の柱穴から10世紀前半、参道周辺から11世紀代の遺物も出土している（野田前掲）。

2. 発掘調査の経過と事前遺構確認調査の概要

平成14年度に策定した「新整備基本計画」に基づき、翌年度からは僧寺地区の史跡整備に先行して事前遺構確認調査に着手することになったが、平成24年度までの10年間に実施した調査地点とその経過は、第4図・表1に整理したとおりである。また、平成15年度以前に伽藍中核部周辺で行った発掘調査箇所については第8図・表3に掲げた。ここでは、第1分冊（遺構編）で報告した主要堂塔の調査成果について、それぞれの概要を改めて述べておくこととしたい（依田 2013・中道 2016 等）。

まず調査実施にあたり平成15年度には、遺構分布の概略を把握する目的で物理探査（地下レーダー探査）を実施した。公有化した地域全体を対象に20mメッシュの測線を設定し、反応のあった範囲には適宜補助

測線を加えた結果、七重塔の西方に約11m四方の範囲で塔基壇と類似したレーダー反射面が得られ、同年行った発掘調査で二つ目の塔跡（塔跡2）が発見されることとなった。そこで翌16年度は、特に七重塔と新たな塔跡2の北方で遺構の分布・形状を推定するため、前年度に実施した測線内に追加で5mメッシュの測線を設定した。この2ヶ年で計測した延長距離は7,731mに及び、得られた主な所見は次の通りであった。

- ①金堂と講堂に挟まれた範囲に、大きな掘り込み跡や小規模で明瞭な反射面が存在し、遺構の存在が示唆される。
- ②七重塔の北側及び東側に、小規模ながら明瞭な反射面が存在する。
- ③七重塔の周囲において基壇跡と推定される領域のほか、地業跡が外側3m範囲に広がっていること、さらにその周囲には溝もしくは瓦溜めが巡ることが推定される（昭和39年の発掘所見と矛盾しない）。

平成16年度以降の調査地点は表1に掲げる通り、毎年、複数地点を同時並行して調査を行ってきたが、以下、七重塔、南門、中門及び中樞部区画施設、講堂、金堂、鐘樓に分けて成果を紹介する。

（1）七重塔（塔跡1・塔跡2、第15図）

武蔵国分寺の七重塔は、奈良時代に創建された後、『続日本後紀』の記述から、承和2（835）年に神火で焼失し、同十二（845）年に前男倉郡大領壬生吉志福正が再建を願い出て許可されたことが明らかであり、昭和39年に行った発掘調査では、焼土層の検出と現存する礎石などから、塔は同じ位置で建て替えられたことが判明した。現在、塔心礎を含む7つの礎石が残る東側の七重塔を「塔跡1」、レーダー探査がきっかけで見えられた西側の塔跡を「塔跡2」と区別して呼称しているが、この塔跡2の発見は、従来の見解に対して大幅に変更を迫るものであったことから、平成15～17年度にかけて発掘調査を実施した（第15図）。

その結果、塔跡2は僧寺伽藍中軸線から東に151m、塔跡1の心礎から西へ約55m隔てて立地し、基壇上部は削平されているため建物規模や基壇外装・雨落施設等の詳細は不明であるが、基壇中央部には心礎を抜いた痕跡と思われる略円形状の土坑（SX285）が検出されている。また、掘り込み地業は、一辺約11.2m四方でほぼ垂直に立ち上がり、掘り込み範囲の外周にも版築土は広がっており、基壇の規模は約20m四方と推定される。主軸方位は僧寺中軸線より6度東偏し、掘り込み地業の深さは確認した周囲の地山面より約2.3m、版築層の厚みは最大で3.1m、版築層は全体で28層以上に及び、緻密で堅固な層を形成している。なお、基礎地業が火災を受けている痕跡は見当たらなかった。基壇の一部に対して、断ち割り調査を行ったところ、基壇内の版築層から出土した南武蔵型土師器坏（図面15-1）から、9世紀中頃に基礎地業を施したことが判明しているが、実際に塔が基壇上に立ったか否かは、調査では明確な手がかりは得られなかった。なお、塔跡2の調査区からは、表土や攪乱からコンテナ約200箱分の瓦が出土しており、他の地区では見られない特異な様相が伺える。一つは、単弁五葉蓮華文鏡瓦で、鏡瓦130点中の64点、全体の約5割を占め、この鏡瓦は他の主要堂塔からは殆ど出土していない（図面47～50）。もう一つは、「造塔」の模骨文字を伴う瓦で、67点が出土している（図面173）。

一方、塔跡1は昭和39年に滝口宏が担当者として調査を行っており、基壇規模は一辺約17.7m四方で、基壇外装は乱石積であることを確認している。また基壇周囲は、幅約2.5～3.0mにわたって白色粘土を基底にして構築した石敷が広がり、その粘土層中からは焼損瓦が出土するため、石敷自体は再建後の造作であることも明らかとなっていた。なお、掘り込み地業は約1.7mの深さであった（滝口1987）。

平成18～19年度には、塔の西側部分に対してトレンチ状に調査区を設けて実施した（第15図塔2東トレンチの東側）。調査内容は、基本的には昭和39年度の調査成果を追認するものであったが、旧調査の基壇断ち割り部分を再発掘することで、塔跡2の基礎地業の様子との対比が一層明瞭に掴むことが可能となった。すなわち、塔跡1の掘り込み地業の形状は、ほぼ平坦な底面から垂直に約40cm立ち上がり、それより上部は約10度の緩やかな傾斜となっている。版築は上層がローム土と砂礫層の互層で、下層は黒褐色土に礫が多く揃き込まれ、基壇の上部はローム土を主体に白色粘土を多く含み、基壇の修復部を構成する。一方、塔跡2の掘り込み地業は、底面から垂直に近い立ち上りを呈し、版築層中に砂礫を含まない点で、二つの塔跡の基礎地業は全く異なる様相であったことが明らかとなった。

しかし、従前、塔跡1の再建時期が承和十二年頃と比定されてきたなかで、塔跡2の基壇中からも9世紀半以降の遺物が出土したことで、二つの塔跡の時間的な先後関係の解明が調査における重要な課題となった。塔跡1の場所で創建時に一度七重塔が建てられた後、白色粘土を用いた基壇の修復行為、損焼瓦の出土、さらには現存する礎石群等から、同じ場所で塔が再建されたという事実には変わりはないが、『続日本後紀』における七重塔再建記事と、二つの塔跡の解釈をめぐっては、現在、幾つかの考え方が示されている(表6)。

大きくは二つの考え方に収斂されるが、その一つは、創建期の塔跡1が焼失した後、同じ場所で塔が再建され、その後塔跡2に移行するというA説。塔跡1で再建された塔は、『日本三代実録』の元慶二(878)年9月29日条にみえる地震(表18-10)によって倒壊し、塔跡2で塔再建を目論んだが建設途中で放棄された、とする主張である。もう一つは、塔跡1が焼失した後に、塔跡2の段階を経て、塔跡1で再建されたというB説がある。これは、承和十二年に塔跡2で再建をしようとしたが途中で断念し、塔跡1で再建を果たした、とするものである。

現在、B説を支持する立場の関係者が多いが、B説支持者でも年代観の捉え方で、さらに二つの見解に分かれている。一つは、調査を担当した中道誠・有吉重蔵の説で、塔跡1からは、①再建以降の補修瓦は存在するが大規模な改修や再建の形跡が無いこと、②南多摩窯跡群御殿山支群産のG5号窯式段階の鏡瓦と同範瓦が出土するため、10世紀前半まで塔跡1再建塔が存続したこと、等から元慶二年の地震が契機で塔跡1再建塔が倒壊したとは考え難いと主張する。また、塔跡2の基壇上及び周辺に掘られたSX 269・282～284の四基の幢竿支柱は、塔跡1再建塔を荘厳化させるための遺構で、塔跡2が塔跡1再建塔より先行する根拠となり、塔跡2の築造時期は、承和二～十二年の間であったとしている(中道2012、有吉・中道2013等)。

これに対し、発掘調査を指揮する坂詰秀一は、武蔵国分寺の再建瓦を焼成した東金子窯跡群産製品の再検討を行う中で、武蔵国内10郡の郡名瓦が存在することに着目し、主要堂塔の再建は国を挙げての大きな事業であったことを推測する。即ち塔再建の直接的な契機は、元慶二年の地震の復興であり、『続日本後紀』に記された壬生吉志福正が願い出た塔再建記事は、それとは次元の異なる別事業で、塔跡2での塔再建の試みこそが福正の「造彼塔」であるとしている(坂詰2012)。

さらに調査担当者の一人、福田信夫は現時点で先後関係は不明とする慎重意見を示すなど(福田2012)、関係者間で様々な異なる見解が出されている。出土した遺物の整理等を通じて、さらなる検討が必要である。

表6 武蔵国分寺七重塔再建をめぐる諸説

	創建期 (天平)	承和2 (835)年	承和2～ 12年	承和12 (845)年	承和12年 以降	元慶2(878) 年	元慶2年 以降	備考・文献等
従來說	塔1 築造	塔1 神火焼失			塔1(同位置) で再建塔築造			(滝口1986b) ※1964年調査時 の所見に基づく
A説	塔1 築造	塔1 神火焼失			塔1再建塔 築造	塔1再建塔 が倒壊?	塔2基壇 築造 (未完成)	塔1再建塔が 塔2に先行
B説	塔1 築造	塔1 神火焼失	塔2基壇 築造		塔2基壇築造 (未完成)→ 塔1再建塔築造			塔2が塔1再建塔に先行 (中道2012) (有吉・中道2013)
B'説	塔1 築造	塔1 神火焼失			塔2基壇築造 (未完成)	講堂・中門 も倒壊	塔1・講堂・ 中門の再建	塔2が塔1 再建塔に先行 (坂詰2012)
C説	塔1 築造	塔1 神火焼失			『続日本後紀』が伝える再 建塔が、塔1再建塔か塔2 かは未確定			先後関係不明 (福田2012)
正史				壬生吉志福正の塔再建願許 可 『続日本後紀』		坂東諸国分寺の地震被害 『日本三代実録』		

※A説は、平成21年3月20日付『読売新聞』「武蔵国分寺の七重塔」と題する記事で紹介。

(2) 南門 (第16図)

僧寺の南門は、従前より、3箇所の推定地が存在した。一つは、大正12年の『東京府史跡勝地調査報告書』(稲村・後藤1923)で、「金堂址ノ正南方百二十間ノ道路上ニ、瓦片推積シテ一高地を為セリ。是レ即チ南大門址ナルベシ。明治初年ノ頃、コノ附近ニ礎石四五存シタレドモ、農民等発掘に持ち去リテ今ハ一箇ヲモ止メズ、…(中略)… 称して菜師大門ト云フ。」(同書18頁)とされる場所で、現在の南門発見地より約100m南側に相当する。二つ目は、さらに約50m南側で、伽藍中軸線と寺院地区画溝が交差する付近だが、いずれの箇所も昭和33年の発掘調査では、明確に門跡と比定される遺構は確認されていない(第8図)。三つ目が、伽藍中軸線と伽藍地区画溝が交差する当該地で、平成19～20年度に発掘調査を行った。その結果、伽藍地南辺区画溝(SD23)の南側に四本柱から構成される門跡(SB215)が発見され、この位置は金堂中心から約115m、中門から約65m南に離れた場所にあたる。

SB215は、間口が約4.5mを測る礎石建ちの棟門で、南側に面する左右両側の親柱は、礎石自体こそ遺存していなかったものの、礎石下部の壺掘り地業が確認されている。また、これらの背後(北側)には、それぞれ一本ずつの控柱が約2.3mの間隔を置いて存在する。さらに、南門の北側を東西に走る伽藍地区画溝(SD23)には、南北両側で対になる複数の小柱穴群が検出され、東西幅およそ3m程の木製の橋脚(SX316)が架けられていた。

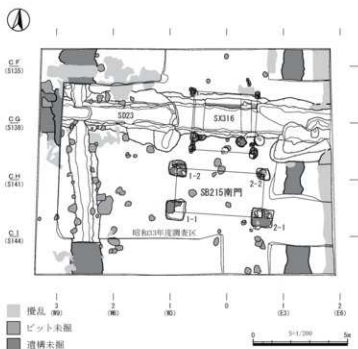
(3) 中門および中樞部区画施設 (第17図)

金堂・講堂・僧坊等を圍繞する中門および中樞部の区画施設を対象とした調査は、史跡整備や工事の立ち会いを含む開発等に伴い、これまでに約20箇所で行われている。

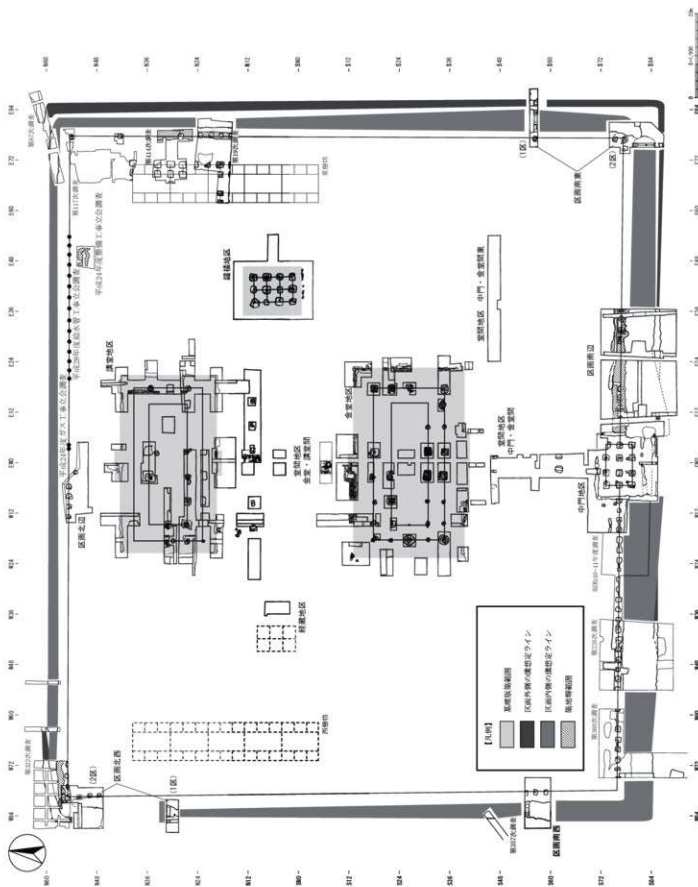
まず伽藍中軸線上で金堂と南門の間にある中門は、平成18～19年の調査によって、創建期の礎石建て(SB216)から、その後掘立柱建物(SB232)の門に建て替えられたことが判明した(第18図)。SB216は、桁行3間(9.6m)、梁行2間(6.2m)を測り、左右両側の柱間が3.0mに対して中央間が3.6mと幅広く、八脚門の構造であったと想定出来る。礎石は全て現存していなかったが、礎石を据え付けた掘り方には壺掘り地業が施され、大凡1.5m四方、深さ1.0m以上の規模を有する。底面には男瓦を主体に瓦凸面を上向きに据え、その上に河原石を多く含んだ厚さ5～10cmの版築層を積み上げて、最上部に礎石の根石を乗せる構造であった。底面に敷かれた瓦は創建期段階のもので、「高(高麗郡)」の押印、「播(播磨郡)」のへら書き資料があり、中門周辺からは隅切瓦が出土することから、屋根の構造は寄棟もしくは入母屋と推定される。

また、SB232は、礎石建ち中門より一回り小さく、桁行3間(約8m)、梁行2間(4.8m)の側柱建物で、正面中央間が3.2m、左右両側が約2.4mと中央間の幅が広い点ではSB216と同様である。柱穴は円形・楕円形状で、直径0.7～0.9m、深さは約0.5mと規模も小さく、断ち割りした柱穴には柱の抜き取り痕跡が確認出来た。

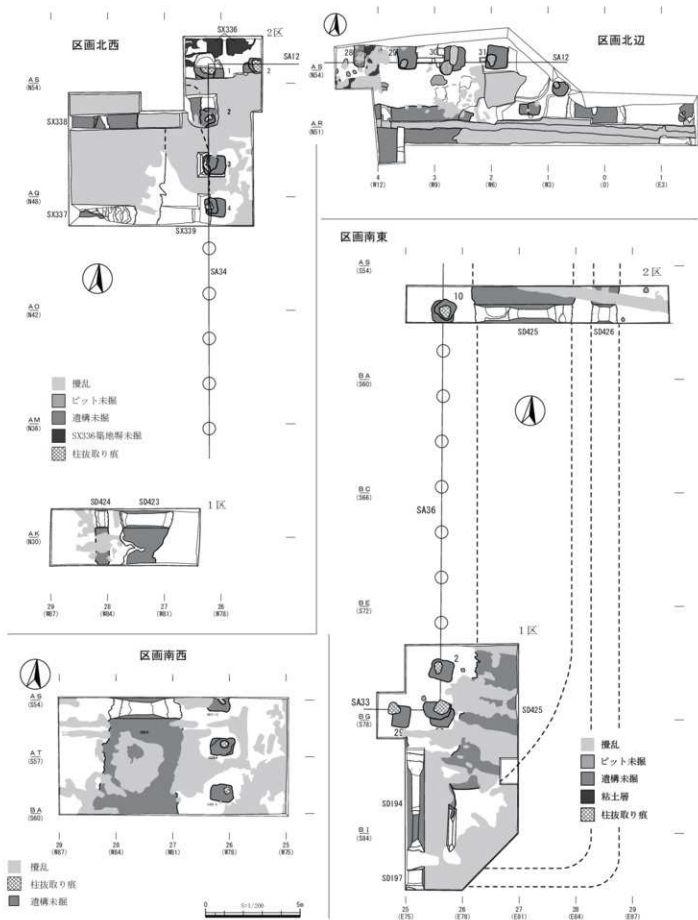
中門の両翼には、中樞部を区画する施設としての塀が巡り、さらにその外側は大小の溝が圍繞している(第19図)。創建期の塀は掘立柱塀で、塀で囲まれた空間の規模は東西(北辺)が約156m、南北(東辺)が約132mを測り、東西に長い長方形範囲を区画している。区画北西側では、柱穴掘り方の形状や覆土の観察から、最低一回は柱を建て替えた形跡を確認しているが、全ての柱穴に二時期の重複関係が見られる訳ではな



第16図 南門地区全体図



第17図 加藍中核部全体図



第19図 区画北西・南西・南東・北辺地区全体図

く、部分的な塼の改修が行われた可能性を示している。なお平成28年度には、給水管付設替え工事に伴う立会調査で、現道直下から北辺を区画する掘立柱塼の柱穴15基が約7尺スパンの間隔をもって一列に並んでいる状況が検出された(依田2018)。

また、中門東側と平成24年度に行った区画北西部の一角では、掘立柱塼の上に重畳して築地塼の痕跡が検出され、区画施設が掘立柱塼から築地塼へと移行している様子も判明している。築地塼は、基底部幅3.1m程の掘り込み地業を伴い、白色粘土と褐色粘質土を固く叩き締めて積み上げている。現段階で区画全周を巡っていたか否かの明確な状況は掴めていないが、東僧坊の東側を走る区画施設には、調査当時「通路状の遺構」として認識していた帯状に広がる硬質面が、近年の調査成果に照らすと築地塼であったことも考えられ(小野本2009)、そうした場合、区画の東辺にも築地塼が巡っていた可能性がある。さらに、中門の外側(南側)には、平成19年度の調査で、参道の可能性が考えられる硬質層(SX292)も確認されている。

(4) 講堂(第20図)

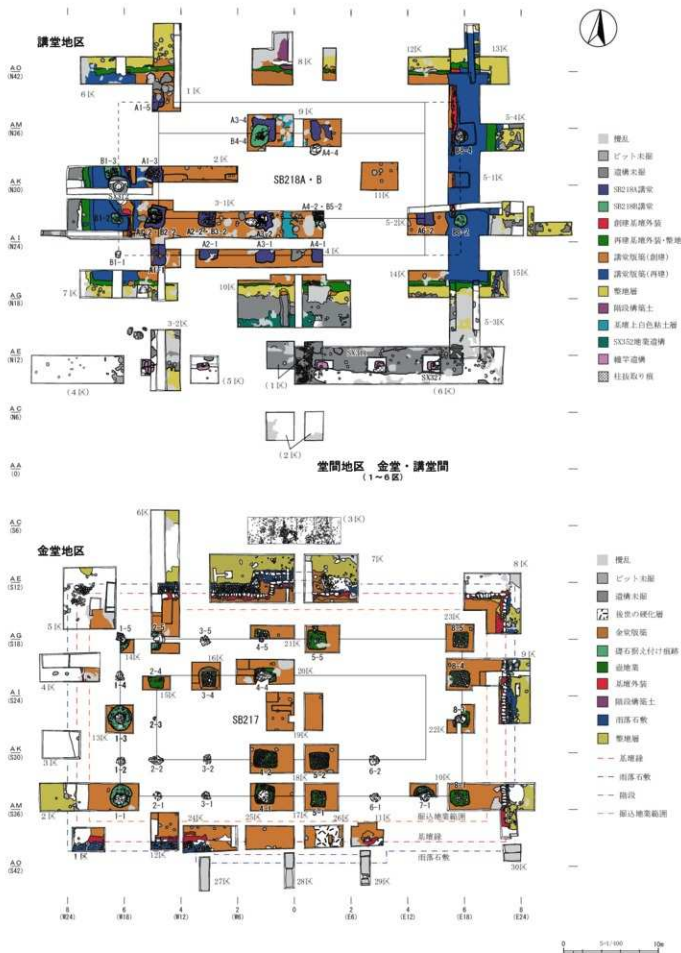
講堂跡は、昭和31年に日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会が、主に建物・基壇の西側部分を対象に調査を行い、その後、昭和40年代には市教育委員会が東側を調査し、礎石据付や基壇の増築状況等を確認した。今回の史跡整備に伴う調査では、これら二度の発掘成果を踏まえ、建物全体の構造と創建・再建時の基壇位置、礎石据付状況等を確認するため、一部既往の調査区も再掘削し、基壇全体を覆う15箇所のトレンチを設定して行った。その結果、特に基壇部分は南面を除く北・東・西側で増築した痕跡があり、重複する二時期の礎石据え付け状況などから、建物全体を建て替える大規模な改修を施した様子が改めて判明している。

まず建物の規模や構造については、創建時は桁行5間(東西約28.5m)、梁行4間(南北約16.6m)であったものが、再建時には桁行7間(東西約36.2m)、梁行4間(南北約16.6m)へと大きく建て替えている。ただし、身舎部分は創建時・再建時ともに桁行5間、梁行2間で規模は変化せず、身舎に取り付く廂の構造が南北両側の二面廂から四面廂へと変化したこと、このことから屋根構造は切妻造から入母屋造、もしくは寄棟になったものと考えられる。

創建時の基壇は、東西約34.3m、南北約22.6mを測り、外装は四周いずれも瓦積を施し、その基底を構成する部材は、東面が河原石を主体としながら一部では女瓦片を併用するが、西面南側では完形の男瓦、西面の北側では女瓦片と、場所によって設えの様相が異なる事が明らかとなった。また、再建時の基壇は、東西約42.2m、南北約22.6mで、外装は瓦積で創建時と変わらないが、基底部の部材が塼を地覆とする点で創建時とは異なっている。なお、基壇外周の雨落施設は、創建・再建時ともに確認されていない。次に、基壇外装に使用した瓦を比較すると、創建時は8世紀中頃に生産された南比企窯跡群産の有段男瓦が目立ち、一方の再建時の外装瓦は創建期から9世紀中頃までの製品が混在して使用され、再建されるまでの間建物に葺かれていた瓦を再利用したものと思われる。

礎石は、再建時の身舎および廂全体で本来は36個が存在した筈であるが、現況では基壇上に6個、基壇周辺に6個(南西に5個・北側に1個)の計12個が確認出来る。このうち、原位置を留めるのは礎石1-1、2-2、8-4の3個で、石材はチャートと砂岩の両者が認められる。現存する12個の礎石のうち、礎石8-4と原位置から外れる礎石4-2には被熱痕があり、講堂が再建された直接的契機として、創建時の建物が火災で焼失した可能性がある。また、礎石自体は元の位置からずれていたたり、もしくは他所へ持ち去られているが、礎石を据え付けるための根固め石やその掘り方が、礎石1-2・3、2-1・3・5、3-1・2、4-1・2・4、5-1・2・4の13箇所で確認されている。その一方で、礎石8-1・3・5に相当する範囲では、据え付け痕跡は明瞭に掘り出すことは出来なかった。

ところで、礎石4-4の据え付け痕跡に着目すると、方形と略円形の二つの掘り方が重複して検出されており、その新旧関係から前者が創建時、後者が再建時と考えている。創建時の掘り方は、一辺が約2.5mを測り、根固め石は遺存しておらず取り払われていた。また再建時の掘り方は創建時に対して南西側にややずれて構築され、長径約2.4m、短径約1.8mを測り、中央付近に根固め石を集積し、埋め土内には瓦を混入



第20図 金堂・講堂・堂間地区(金堂・講堂間)全体図

している。このことから、講堂跡は創建時の建物に対して南西側に幾分柱位置をずらして再建したことが推測されるが、その他の礎石据え付け部分では、新旧二時期の掘り方は確認されていない。

この他、基壇南面と北面のそれぞれ中央付近には、階段が付設されていた可能性がある。大凡、建物中央間1間分(約20尺)の範囲に瓦積外装の前面を覆う積み土が広がり、特に南面では50cm大の河原石が点在していた。これらは階段を構成する部材と思われるが、その規模や段石等の詳細は不明であった。さらに、平成21・23年度には、講堂基壇南側にトレンチを設定して調査を行い、土取り穴と想定される大規模な掘り込み(SX311)や、基壇南側に伽藍中軸線を挟んで東西に3基ずつ、計6基の幢竿支柱状の遺構が確認されている。

現時点で講堂の再建要因は、弘仁九(818)年及び元慶二(879)年の地震による倒壊の可能性があり、また再建講堂の廃絶時期は、基壇周囲に広がる焼土層や、昭和31年度の調査で基壇を壊す土坑覆土から北宋銭(天聖元宝・元祐通宝)が出土していることから、漠然と中世以降としか言えない状況であったが、今次の調査出土遺物については後述する。

(5) 金堂(第20図)

金堂跡は講堂跡と同様に、昭和31年と40年度にそれぞれ発掘調査が行われている。昭和47～49年度に環境整備事業の一環で盛土造成によって基壇の雰囲気を整備したが、今回の史跡整備に伴い詳細な遺構の状況を把握する目的から、一部既往の調査区を絡めつつ、平成21・22・24年度に計33箇所のトレンチを設定して発掘調査を実施した。

まず建物は、桁行7間(東西約36.1m)、梁行4間(南北約16.6m)で、再建時の講堂跡とほぼ同規模である。柱間は、桁方向で13尺+18尺+20尺+20尺+20尺+18尺+13尺の計122尺、梁方向で13尺+15尺+15尺+15尺の計56尺を測り、身舎の外周を廂が巡る四面廂建物で、屋根構造は入母屋造もしくは寄棟造と考えられる。軒の出は、廂部分に相当する礎石の位置から基壇縁、及びその外周雨落石敷まで約16～17尺を有するが、これは諸国国分寺の金堂としては最大級の規模を誇る。

基壇は河原石による乱石積外装で、規模は東西約45.4m、南北約26.2mを測る。さらに、基壇外装の周囲は、幅約0.9～1.0mの雨落石敷が巡る。基壇高は、周囲の旧地表面の高さを雨落石敷上面、礎石の天端より幾分低いレベルを推定基壇上面と比定した場合に、約0.8～1.3mを測り、西側に比べ相対的に東側の方が高い。なお、基壇上面は周辺から埴が出土するため埴敷の可能性はあるが、必ずしも明瞭ではない。

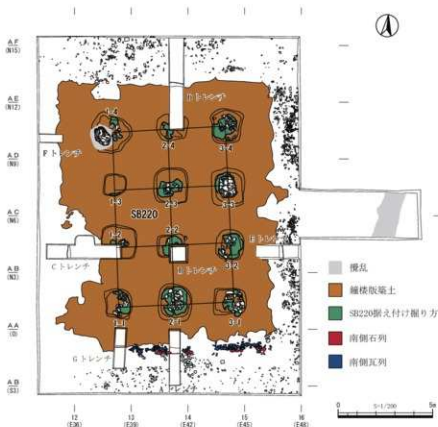
また、金堂跡はその基礎地業として建物規模より広い範囲に掘り込み地業(総地業)を施し、その深さは雨落石敷検出面より約1.3mを測る。基礎地業の底面から基壇上面までは版築が施されているが、掘り込み地業部分がローム土と暗茶褐色土・黒色土を積み上げているのに対し、基壇部分はローム土が主体で、全体で版築層は2m以上にも及んでいる。さらに、礎石を据えた下には、壺地業と呼ばれる基壇版築を大凡2m四方に約1m掘り窪め、石と土を互層に積み上げる版築を施した上に、砂利や小石・白色粘土と根固石を敷いて礎石を乗せる、極めて堅固な基礎を形成している。礎石は基壇上に19個残存しており、今回は、礎石1-1・3・5、2-5、4-1・4・5、7-1、8-3を対象に調査した結果、東にややずれる礎石2-5以外は、設置当時の原位置を留めていることが確認された。

その他の付帯施設としては、基壇の南と北に階段が存在する。いずれも河原石積の構造で、北面階段は大凡建物中央間一間分(約4.5m)の幅で、階段の出は約1.35mを測る。一方の南階段は中央間3間分の幅と想定され、南際は現道直下に当たるため全体的に遺存状態は悪いものであったが、平成29年度の史跡整備工事の立会い中に、道路縁石際で踏み面と思われる河原石を扁平に敷き詰めた状況を検出している。また、基壇縁から約6m南側には4基の幢竿支柱が東西に並んで確認された。さらに、北階段の北側では、中軸線上で幅1.4mの範囲に瓦片と石を敷いて両側を石列で区切り、さらにその東西外側にはそれぞれ1.4mずつ離れて並行する石列を配した、幅員全長4.2mの通路状遺構が確認されている。

(6) 鐘樓 (第21図)

鐘樓跡も、昭和39～41年の間に一度発掘調査が行われている(滝口1966)。その時の調査でも、建物跡全体は検出していたが、残念ながら当時の記録類が写真以外に現存しておらず、史跡整備に際して構造等の詳細を損むため、平成22～23年度に再度全面的な調査を実施することとなった。

建物は礎石建ちの南北棟総柱建物で、桁行3間(南北9.6m)、梁行2間(東西6.0m)の規模を測り、廂を伴わないことから屋根の構造は切妻造りで、建物の主軸は講堂・金堂に対して約1度西に向いている。建物の機能として、鐘を吊り下げていた明確な証拠を調査で得ている訳ではないが、柱間寸法が南北の中央間部分のみ3.3mで、それ以外は全て3.0mであることから、建物中央に何らかの高架物が存在していた可能性はあろう。また、建物を含む南北約14.3m、東西約11.5mの範囲には、深さ約50cmの掘り込み地業を施してい



第21図 鐘樓地区全体図

る。現存する2個の礎石のうち、礎石3-3は原位置を留め、礎石1-4は後世に動いた形跡が認められたが、その他は礎石を据えるための浅い掘り込みや、部分的には根石が集積されている状況が確認されている。

基壇高は残存する礎石との比高差から約50～80cmで、階段は付設されておらず、金堂・講堂よりも相対的に低い。また、基壇縁の南側では外側に自然石、内側に瓦を並べている状況が検出され、南面観を意識した設えと考えられる。

3. 出土品等整理作業の経過

上記のとおり、10年間に及ぶ事前遺構確認調査では、従前知り得なかった新たな発見があったことに加え、一部、昭和30～40年代初頭の発掘地点も調査して、当時保存を図った遺構の再測量を行い、今後、整備工事を進めていく上で必要な情報を得ることが出来た。調査の成果は、毎年概報を刊行することによって周知を図った一方で(福田・中道2006、中道2008～2013、依田2014、太田・増井2015等)、伽藍中樞地区については平成23年度中に基本設計をまとめ(国分寺市教育委員会2011)、同年度からは整備工事を着手している。既に、平成25・26年度には講堂基壇復元、平成28年度には鐘樓・中門の平面表示および金堂・中門間の幢竿支柱の復元整備を終え、平成29・30年度には金堂基壇と金堂・講堂間の堂間通路表示を行って8ヶ年計画に及ぶ伽藍中樞部の一連の工事を終了し、整備を終えた範囲を平成31年度に条例で位置付けた歴史公園として供用を開始する予定である。

また、調査と並行して記録図面や写真、主要な出土遺物等の基礎整理作業は行ってきたものの、発掘を優先して本格的な整理作業を見送ってきた経緯もあり、10年間で蓄積してきた調査成果は適切にまとめる必要があるため、平成25年度からは現地での調査はひとまず中断し、出土品等整理作業に移行することにした。その際、調査報告書は平成27年度にⅠ分冊（遺構編）を刊行し、平成29年度に本書の第Ⅱ分冊（遺物編）の刊行を経て、最終的には第Ⅲ分冊（総括編）を作成して全体で3冊の構成で編集を進めていく方針を固め、第Ⅰ・Ⅱ分冊にかかる出土品等整理作業期間は、平成25～28年度までの4ヶ年計画とした。

まず、平成25年度は、遺構編に関わる作業として原因整理・下図作成・写真整理を終え、一部遺構図のトレースと写真図版に着手し、遺物編に関わる作業として水洗・乾燥・注記・分類・集計・計量等を行った。なお、平成23年度末の市議会において、昭和49年の設立以来、約40年近く使用してきた国分寺市遺跡調査会武蔵事務所を25年度中に閉鎖・除却し、現在の武蔵国分寺跡資料館付属棟2階へ事務所機能を移転させることになったが、出土品の保管環境が極めて狭小になる等、著しい作業環境の悪化を招くことにも繋がった。そこで、移転先の新事務所・収蔵庫内には本書掲載遺物や金属製品等の脆弱資料、それに若干の参考資料しか持ち込めない状況が生じたことから、出土品の大半を占める古代の女瓦・男瓦類については、水洗・仮分類等の作業しか及んでいないものも含まれている。

翌26年度は、遺構編に関わる作業として、引き続き遺構図のトレース・写真図版の作成に加え、版組・割付、遺構の計測表・原稿執筆作業、図面・写真の収納・保管作業等を行い、次年度に刊行する第Ⅰ分冊は大よそのレイアウトまでを完成させた。また、遺物編に関わる作業としては、前年度に続き水洗・乾燥・注記・分類・集計・計量等の基礎整理作業を実施した。

平成27年度は、遺構編は入稿・校正・印刷・発送作業を済ませ、遺物編は実測・拓本・観察表作成作業を中心に行った。

最終年の平成28年度は、実測・拓本・トレース・版組・割付・観察表作成・写真撮影・写真図版作成・原稿執筆・収納・保管作業等を実施し、第Ⅱ分冊の大よそのレイアウトまでを完成させ、翌29年度に本書を刊行した。今後は事実報告を中心とした第Ⅰ・Ⅱ分冊の成果を踏まえて、第Ⅲ分冊（総括編）刊行を目指す予定である。なお、この間、国分寺市遺跡調査会の調査・研究指導委員会は、以下の通り開催した。

第1回 平成28年1月20日（水）15:30から

【会場】国分寺市遺跡調査会事務所2階整理室

【出席委員】坂詰秀一調査団長・酒井清治委員・佐藤信委員・藤井恵介委員・松井敏也委員

【事務局】ふるさと文化財課史跡係 依田亮一・中道 誠・増井有真・島田智博

【議題】1. 平成27年度受託の発掘調査・出土品等整理作業について

2. 史跡武蔵国分寺跡事前遺構確認調査の総括編報告書に向けて

第2回 平成29年5月31日（水）15:00から

【会場】武蔵国分寺跡資料館講座室

【出席委員】坂詰秀一調査団長・酒井清治委員・佐藤信委員・藤井恵介委員・松井敏也委員

【オブザーバー】有吉重蔵・福田信夫（元国分寺市役所職員）

【事務局】ふるさと文化財課長 高杉 強、ふるさと文化財課文化財保護係 中道 誠

ふるさと文化財課史跡係 依田亮一・増井有真・野中太久磨・島田智博

【議題】1. 史跡武蔵国分寺跡事前遺構確認調査

(1) Ⅱ分冊（遺物編）について (2) Ⅲ分冊（総括編）について

2. 文化財火災対策事業の総括報告書について

国分寺市遺跡調査会構成員名簿（平成30年3月31日現在）

——役員および監事——

会 長	坂誥 秀一	国分寺市文化財保護審議会会長
副 会 長	星野 亮雅	国分寺市文化財保護審議会副会長
理 事	井澤 邦夫	国分寺市長
理 事	古屋 真宏	国分寺市教育委員会教育長
理 事	富山 謙一	国分寺市教育委員会教育長職務代理者
理 事	北原 進	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	遠藤 慈郎	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	福嶋 司	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	清水 宏	東京都教育庁地域教育支援部管理課長
専務理事	堀田 順也	国分寺市教育委員会教育部長
監 事	伊藤 敏行	東京都教育庁地域教育支援部管理課統括課長代理
監 事	峯岸 桂一	元国分寺市職員

——武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会——

委 員 長	坂誥 秀一	(考古学)	立正大学名誉教授
委 員	藤井 恵介	(建築史)	東京大学大学院工学系研究科教授
委 員	佐藤 信	(古代史)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
委 員	酒井 清治	(考古学)	駒澤大学文学部教授
委 員	松井 敏也	(保存科学)	筑波大学芸術系教授

——事務局——

事務局長	高杉 強	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課長
事務局員	諸橋 広光	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係長
事務局員	中道 誠	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係主任
事務局員	吉田 澄音	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係嘱託
事務局員	熊木 正好	国分寺市遺跡調査会

——調査団——

団 長	坂誥 秀一	立正大学名誉教授
主任調査員	依田 亮一	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係長
調 査 員	増井 有真	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係主任
調 査 員	島田 智博	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係嘱託職員

第4章 発見された遺物

1. 出土遺物の概要

約7,583㎡を対象として10ヶ年に及んだ発掘調査では、多種多量の遺物が出土している。その数量は、各年度・調査回数毎で集約すると表7に掲げた内訳となり、プラスチック製コンテナに換算して3,126箱にものぼった。これらの約9割以上は古代瓦が占めているが、前章の作業経過でも触れたとおり、出土品等整理期間中の作業環境・遺物収納環境・調査担当者の変更等をめぐる諸般の事情から、瓦は特徴的な製品のみを抽出することに終始し、全破片の分類や計量作業を貫徹することが叶わなかった。このような状況ではあったものの、鉋瓦・宇瓦等の軒先瓦や、押型・押印・ヘラ書き・墨書を問わず文字瓦を極力選別し、文様の識別や文字が判読出来る資料は可能な限り図示するように努めた。また、その他の遺物には、古代以降の土器・陶磁器類、埴、銭貨・金属製品、銀冶関連遺物、板碑、砥石、縄文時代の土器・石器等が認められた。以下、遺物の種類ごとに概要を記すが、平成15年以前に僧寺地区の伽藍中核域や塔跡を調査した際の土器や軒先瓦についても、遺構の年代を検討するうえでは貴重な参考資料となるため、過去に刊行したそれぞれの調査報告書から観察表と実測図を抜粋して掲げた（第71～80表・図面178～208・図版33）。

表7 年次別出土遺物箱数

調査年度	調査回数	対象地区	遺物箱数
平成15年度	570次調査	南門、塔跡2、中門	11
平成16～18年度	578次調査	区画南辺、塔跡2	317
平成17～18年度	603次調査	塔跡2、中門、堂間（金堂・中門間）	257
平成19年度	625次調査	塔跡1、中門、南門、堂間（金堂・中門間）	60
平成20年度	642次調査	区画北辺、講堂、堂間（金堂・中門間）、南門	442
平成21年度	650次調査	講堂	523
平成22年度	655次調査	金堂	923
平成23年度	672次調査	鐘樓、区画北辺、堂間（金堂・講堂間）、経藏東	351
平成24年度	680次調査	区画北西・南東・南西、金堂南階段付近	242
		合計	3,126

2. 土器・陶磁器

土器・陶磁器については、出土した全点を観察・分類・計量作業を行った。各地区の出土傾向は、金堂地区で814点（16,289g）、講堂地区で1,796点（23,639g）、鐘樓地区で285点（3,323g）、中門・金堂間で575点（3,025g）、金堂・講堂間790点（9,533g）、中門地区で706点（8,717g）、中核部区画施設では区画南辺（中門東）で1,347点（10,635点）、区画南東で60点（672g）、区画北辺で140点（1,859g）、区画北西で4,071点（34,654g）、区画南西で52点（1,067点）、その他塔跡2地区で929点（27,370点）、塔跡2周辺地区で434点（6,057g）、塔跡1地区で5点（162g）、南門地区で31点（384g）を数える。当然のことながら、遺物点数・重量の多寡は調査区の大きさや器種構成にも左右されるが、おおむね金堂地区・講堂地区・区画南辺（中門東）・区画北西・塔跡2地区等で出土量の多い傾向があり、後述するように、殊のほか調査面積の割には区画北西で大量に土器類が廃棄されている状況が認められた。また、保存目的の調査の性質上、遺構の平面確認を優先し、基礎・地業・整地土等の断ち切りは必要最低限に留めているため（中道2016）、各堂塔から出土した遺物の層位は表土、もしくは旧調査トレンチの埋戻し土中が殆どであり、一括には乏しい。以下、調査地区毎に図化した遺物を中心に触れるが、須恵器の産地比定については加藤恭朗（坂戸市教育委員会）・根本靖（所沢市教育委員会）・江口桂（府中市教育委員会）の各氏、施軸陶器の時期・産地比定については平尾政幸（京都市埋蔵文化財研究所）・尾野善裕（奈良文化財研究所）の両氏に遺物を

実見のうえ種々貴重なご意見を頂いた。なお、武蔵国分寺では、西脇俊郎氏の先駆的な土器編年案は示されているもの（西脇他 1980・西脇 1981）、その後、古代末期の土師質土器を扱った福田信夫氏（福田 1984）以外に体系だった土器研究が継承されていない現状があるため、在地の土師器については山口辰一氏による武蔵国府関連遺跡の編年（山口 1984a・84b・85）や福田健司氏の落川一への宮遺跡編年（福田 2002・2017）を、東金子・南比企窯跡群等北武蔵産の須恵器は古代の入間を考える会による一連の研究（加藤他 2013～2015）、南多摩窯跡群産須恵器は八王子市史編纂の現行編年案（服部他 2011）等の先行研究を適宜参照することにした。

（1）金堂地区【第1表、図面1・2、図版1】

30箇所のトレンチを設定した金堂地区からは814点・16,289gの土器・陶磁器類が出土し、各トレンチ単位の遺物分類・集計結果は表8に掲げた。このうち遺存状況の良好な62点を図化した。非図化資料も含めて灯明具として使用した破片は22点を数えた。

1・28は南武蔵型の土師器環である。破片資料で器形全体は復元出来ないが、底径は5.0～6.0cm台と小さい法量であるため、武蔵国府編年でいうH3～4期（9世紀中～後葉）の頃の製品に比定されよう。

2～22は須恵器環である。土師器環と同様に、口縁部まで復元出来ない底部破片だが、底径は4.1～10.0cmとかなりばらつきが認められる。径の大小でしか判断材料に乏しいが、21は緻密な薄作りの胎土で、回転糸切後、外周に回転ヘラケズリを施す東金子前内出窯の製品。22も東金子窯の製品で、底部は回転糸切後、外周を手持ちで不定方向にヘラケズリを施している。これらは8世紀中葉に遡る古手の一群といえる。また、底径が8.0cmに復元出来る18も、同じく東金子窯産で8世紀後半代のものであろう。13・14は底径6.4cmを有し、東金子窯産の9世紀前半の製品。3～5・10～12などは底径5.5～6.0cm台で9世紀中～後半の製品で、産地も東金子・南比企・南多摩が混在している。そして、底径が4cm台の2・6・7・9・19は9世紀末～10世紀代に位置づけられ、2・6・9が南多摩窯御殿山5号（G5）窯式、7が南比企窯、19が東金子窯製品である。

26を除く23～42は土師質土器環および皿を掲げた。底径は4.0～6.0cm台と様々だが、主体は5.0～5.5cm台のものが目立つ。武蔵国分寺跡出土の土師質土器に関しては、かつて福田信夫氏が1～35類におよぶ詳細な分類案を設定しているが（福田 1984・第22図）、全形が判明する24はG5～14号窯式に類似するプロボーションを呈することから福田分類の32類に、やや肉厚で、傘まり気味の腰部から口縁部に向けてラップ状に開く25は、福田分類11もしくは12類に類似しているように思われる。法量的には10世紀前半～中頃の製品であろうか。41・42は高台が付く椀形態である。

43・44は灰釉陶器碗・皿である。内面見込みは無釉で、淡緑色の灰釉を体部内外面に刷毛塗りで施釉する。灰白色の硬質な胎土を持ち、高台内の底部は回転ヘラケズリを施していることから、猿投窯産の黒笹90号（K90）窯式に比定される（山下 1995）。45はかなり表面の釉葉が弾かれてしまっているが緑釉陶器の皿で、全面に淡緑色の釉葉がかかる。器面には入念なヘラミガキも見られるため、同じく猿投窯産の9世紀後半代の製品であろう（高橋 1995）。

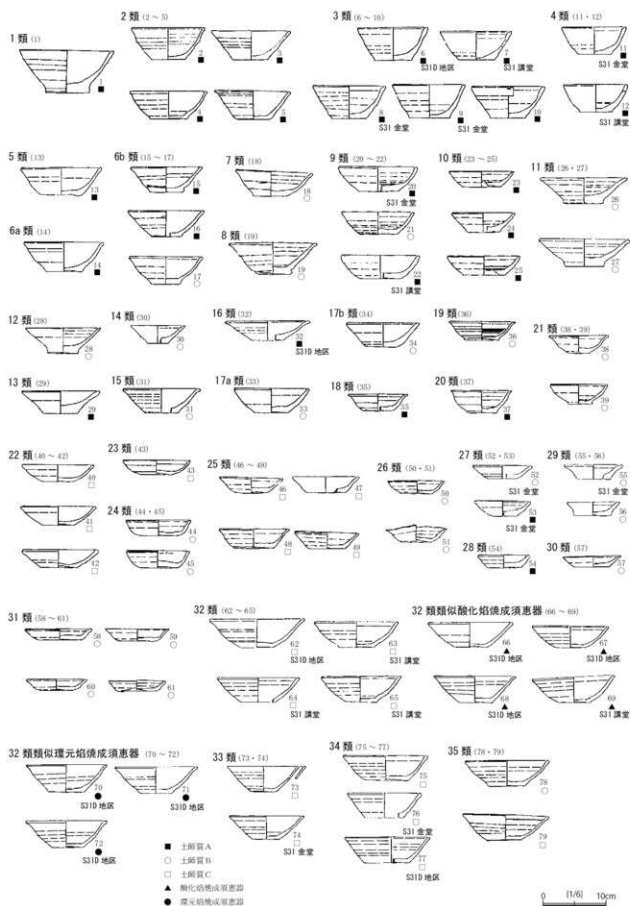
47は底部外面は指頭圧痕による調整を施し、内面にはタール状の物質が付着している。土師器の甕もしくは鉢の底部片であろうか。46・48～51は須恵器瓶・甕類で、48・49は浄瓶の注口部片である。

52～62は近世・近代陶磁器を掲げた。金堂跡に直接伴うものではないが、付近における近世以降の土地利用を示す遺物として貴重である。52～54・56はいずれも18世紀代の瀬戸・美濃産陶器で、灰釉徳利・灰釉鉄軸塗別碗・灰釉折縁鉢・灰釉碗である（成瀬 1997）。55・57～62は近代陶磁器で、55は明治時代の型紙摺絵碗、57以降は戦時下に生産・使用された製品。57は外面に「防（衛食）」「大日本防空食（料株式会社）」社長 小澤専（七郎謹製）の銘が見られる（括弧内は類別から推定）防衛食容器で、缶詰の代用品として陶製の瓶詰で使われた戦時下の製品である（小泉編 2002）。近在でも武蔵国分寺跡南西地区で出土品に報告例がある（小川他 1999）。58はゴム印判の碗で、見込みに「納税／小平村／完納賞」印と高台内には「岐754」の銘が認められる。59以降は小杯で、60～62は濃青緑色のクロム青磁、59は見込みに金文字

で「凱旋記念」「勝って(兜)緒をしめよ」の銘と、薄茶に発色する鉄釉地の体部外面には陽刻で星印、底部外面にも同じく陽刻で交差する2本のサーベルを象った凱旋記念盃で、口縁部を下に向けるとあたかもヘルメットのミニチュアを想起させる意匠である。従軍後に凱旋して帰郷する際、出征した兵が饒別や見送りの返礼として親類や知人等に贈った記念品に盃・德利・盆・風呂敷があり、盃や德利など陶器製記念品の主

表8 金堂地区出土土器・陶磁器種類集計表

調査区	種別	点数(点)	重量(g)	備考	調査区	種別	点数(点)	重量(g)	備考	調査区	種別	点数(点)	重量(g)	備考	
1区	須恵器坏類	1	6		10区	須恵器坏類	5	140		24区	土師器坏類	1	11		
	須恵器甕類	6	165			須恵器甕類	3	131			須恵器坏類	46	255		
	土師質土器坏類	4	35			土師質土器坏類	10	118	灯明3		須恵器甕類	5	142		
	(小計)	11	206			陶磁器類	3	73			土師質土器坏類	33	273	灯明5・内黒3	
2区	須恵器坏類	4	35		(小計)	21	462		25区	灰釉陶器坏類	1	3			
	須恵器甕類	2	56		須恵器坏類	3	48			須恵器坏類	4	15			
	土師質土器坏類	18	382	灯明1	須恵器甕類	3	113			土師質土器坏類	7	32			
	陶磁器類	1	29		土師質土器坏類	1	27			灰釉陶器坏類	1	15			
(小計)	25	502		陶磁器類	1	20		陶磁器類	3	56					
3区	須恵器坏類	8	29		(小計)	9	276		26区	(小計)	100	818			
	土師質土器坏類	2	11	灯明2	土師器坏類	4	34	灯明4		土師器坏類	1	3			
	(小計)	10	40		土師器甕類	1	5			須恵器坏類	16	105			
	須恵器甕類	3	49		土師質土器坏類	10	48			須恵器甕類	13	269			
4区	土師質土器坏類	5	128		12区	須恵器坏類	5	160		土師質土器坏類	5	19			
	緑釉陶器坏類	1	29			土師質土器坏類	21	188	灯明5	灰釉陶器坏類	2	19			
	陶磁器類	16	1,382			(小計)	41	435		陶磁器類	3	33			
	(小計)	25	1,588			陶磁器類	2	31		陶磁器類	17	215			
5区	須恵器坏類	5	42		13区	(小計)	2	31		27~28区	(小計)	18	159		
	須恵器甕類	18	788			15区	土師質土器坏類	1	10			土師器坏類	9	73	内黒1
	土師質土器坏類	28	546			(小計)	1	10			土師器甕類	1	5		
	灰釉陶器坏類	1	9			須恵器坏類	4	70			須恵器坏類	10	50		
陶磁器類	7	197		須恵器甕類	8	255		土師質土器坏類	4	36					
(小計)	59	1,582		17区	土師質土器坏類	4	61	内黒1	(小計)	17	215				
6区	須恵器坏類	6	105			緑釉陶器坏類	1	5		土師器甕類	3	15			
	須恵器甕類	8	419			陶磁器類	4	80		須恵器坏類	10	50			
	土師質土器坏類	28	424			(小計)	21	471		土師質土器坏類	4	36			
	灰釉陶器坏類	5	30		土師器坏類	1	22		灰釉陶器坏類	1	41				
陶磁器類	13	675		須恵器甕類	5	194		(小計)	18	142					
(小計)	60	1,653		18区	土師質土器坏類	2	13		29区	須恵器甕類	1	24			
7区	土師器坏類	4	53			土師質土器坏類	7	128			須恵器坏類	1	24		
	土師器甕類	5	36			(小計)	15	357			灰釉陶器坏類	1	24		
	須恵器坏類	13	181			19区	須恵器坏類	1		31		陶磁器類	3	116	
	須恵器甕類	18	1,056		(小計)	1	31		(小計)	5	164				
土師質土器坏類	79	996		20区	土師器甕類	1	5		土師器坏類	2	44				
灰釉陶器坏類	1	14			須恵器坏類	3	67	灯明1	須恵器坏類	7	158				
陶磁器類	13	286			土師質土器坏類	1	5		須恵器甕類	13	620				
(小計)	133	2,622			(小計)	5	77		土師質土器坏類	8	129				
8区	土師器坏類	2	49	灯明・南武藏1	21区	土師器坏類	3	53	内黒3	陶磁器類	7	526			
	土師器甕類	2	176			須恵器坏類	1	19		(小計)	37	1,477			
	須恵器坏類	8	124			須恵器甕類	1	45		土師質土器坏類	4	43			
	須恵器甕類	6	215			土師質土器坏類	5	38		陶磁器類	2	97			
	土師質土器坏類	33	584			陶磁器類	4	92		(小計)	6	140			
	かわらけ	1	8			(小計)	14	247		総計	814	16,289			
(小計)	52	1,156		9区	土師器坏類	3	53		土師器坏類	2	44				
土師器甕類	1	3			土師器甕類	1	3		須恵器坏類	7	158				
須恵器坏類	5	27			須恵器坏類	4	91		須恵器甕類	13	620				
須恵器甕類	4	91			土師質土器坏類	37	395		土師質土器坏類	8	129				
土師質土器坏類	37	395			灰釉陶器坏類	1	7		陶磁器類	7	526				
灰釉陶器坏類	1	7			灰釉陶器坏類	1	75		(小計)	37	1,477				
灰釉陶器坏類	1	75		陶磁器類	7	254		土師質土器坏類	4	43					
陶磁器類	7	254		(小計)	59	905		陶磁器類	2	97					
(小計)	59	905						(小計)	6	140					



第22図 武蔵国分寺跡出土 土師質土器杯・皿の分類 (福田1984を一部改変)

な産地は岐阜県東濃地方とされ、特に盃は土岐郡市之倉村（現在の多治見市市之倉）で生産していた（大西2013）。意匠の雰囲気から昭和の戦前期のものであろう。なお、昭和31・33年の日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会が実施した調査で、金堂跡から出土した土器は、図面178-1～23（第71表、図版33）に再録した。今次の調査出土土器よりも器形復元出来る個体が多いが、10世紀以降の土師質土器類が目立った存在であり、古代末～中世初頭の遺物については、第5章で改めて触れることにする。

（2）講堂地区【第2表、図面3・4上段、図版2・3上段】

15箇所のトレンチより1,796点・23,639gの土器・陶磁器類が出土し、それぞれのトレンチ毎の分類・集計は表9に示した。出土分布は基壇南側中央で設定した10区で多いが、金堂出土土器と比べて特徴的なことは、非図化資料を含めて灯明具として使用した破片が350点以上にもおよび、特に土師質土器で顕著にみられる点である。これらのうち遺存状況の良い53点を図化した。

1は南武蔵型の土師器環である。口径11.0cm、底径5.8cmを有し、武蔵国府編年のH3～4期（9世紀中葉～後葉）に比定されよう。18も土師器環であるが、平底で体部外面に横方向のヘラケズリ、口縁部は横ナデを施している。技法上は一見して相模型環だが、胎土は近在の南武蔵型に近似し、底部外面にヘラケズリを施す前に回転糸切状の痕跡が見える点とは異なる印象である。相模型のバリエーションの一種と捉えれ

表9 講堂地区出土土器・陶磁器種類集計表

調査区	種別	点数(点)	重量(g)	備考	調査区	種別	点数(点)	重量(g)	備考	調査区	種別	点数(点)	重量(g)	備考		
1区	土師器環類	1	3		6区	須恵器甕類	2	111		12区	土師器環類	6	66	灯明2		
	須恵器環類	1	5			土師質土器環類	9	101			須恵器環類	14	195	灯明3		
	須恵器甕類	4	249			緑釉陶器椀類	1	11			須恵器環類	1	89	灯明1		
	土師質土器環類	11	129			陶磁器類	2	48			須恵器甕類	1	141			
	陶磁器類	6	76			(小計)	14	271			土師質土器環類	43	707	灯明7		
(小計)	23	462		土師器環類	13	175	灯明5	かわらけ	1	40						
2区	須恵器環類	1	21		7区	須恵器環類	6	57		(小計)	66	1,238				
	須恵器甕類	3	251			須恵器甕類	6	436		須恵器環類	2	33				
	土師質土器環類	4	58	灯明1		土師質土器環類	27	359	灯明1	須恵器甕類	1	43				
	陶磁器類	1	11			灰釉陶器椀類	2	42		土師質土器環類	19	342	灯明1			
	(小計)	9	341			(小計)	54	1,069		(小計)	22	418				
3-1区	土師器環類	1	23	灯明1	8区	土師器甕類	2	6		14区	土師器環類	17	170	灯明6		
	須恵器環類	4	44			須恵器環類	18	178	灯明2		土師器甕類	1	5			
	須恵器甕類	16	837			須恵器甕類	9	436			須恵器環類	10	106	灯明2		
	土師質土器環類	77	563	灯明3		土師質土器環類	64	995	灯明10		須恵器甕類	2	94			
	灰釉陶器瓶類	1	29			灰釉陶器甕類	1	27			土師質土器環類	48	587	灯明10		
緑釉陶器椀類	1	12		陶磁器類	10	248		灰釉陶器椀類	2	42						
かわらけ	1	51		(小計)	104	1,890		陶磁器類	2	32						
陶磁器類	21	1,111		土師器甕類	1	9		(小計)	82	1,036						
(小計)	122	2,670		須恵器甕類	2	106		土師器環類	5	65						
3-2区	土師器環類	11	167	灯明3	9区	土師質土器環類	8	82		土師器甕類	1	54				
	土師器甕類	3	9			陶磁器類	15	363		須恵器環類	7	69	灯明3			
	須恵器環類	11	71	灯明4		(小計)	26	560		須恵器甕類	2	71				
	須恵器甕類	9	257			土師器環類	70	833	灯明44	土師質土器環類	4	68	内黒4			
	土師質土器環類	69	719	灯明2・内黒1		土師器甕類	2	45		陶磁器類	1	4				
灰釉陶器椀類	1	16		須恵器環類	176	1,856	灯明33	(小計)	20	331						
陶磁器類	10	307		須恵器甕類	33	1,339		表採 土師質土器環類	2	14						
(小計)	114	1,546		土師質土器環類	745	5,506	灯明193・内黒3	(小計)	2	14						
4区	須恵器甕類	1	24		10区	灰釉陶器椀類	6	44		表採	須恵器環類	1	4			
	(小計)	1	24			灰釉陶器瓶類	3	69			土師質土器環類	4	68	内黒4		
5区	土師器環類	2	32	灯明2		11区	赤良三彩	1	1			(小計)	陶磁器類	1	88	
	土師器甕類	6	37				陶磁器類	8	233				(小計)	2	14	
	須恵器環類	8	83	灯明1			(小計)	1,044	9,926				総計	1,796	23,639	
	須恵器甕類	4	184		土師質土器環類		1	5								
	土師質土器環類	66	1,320	灯明13	陶磁器類		5	94								
陶磁器類	1	88		(小計)	6	99										
(小計)	87	1,744														

ば、法量的にも9世紀中葉～後葉の製品に充てても違和感はない(田尾 2003)。

2～12は須恵器環、13は碗、14は蓋である。底径が6.0cm台を中心とする2～5・8は回転糸切後無調整、10～12は回転糸切後に外周を回転ヘラケズリ調整を施す。特に、12は胎土の観察から前内出窯製品の可能性が高く、8世紀中頃まで漚り得る古手の土器である。口径・底径比率や器形のプロポーシオンから3・4は9世紀前半の東金子窯製品、2・5・6も同じく東金子窯製品で9世紀中～後半、7は南多摩窯製品で10世紀前半のG5号窯式であろう。

18を除く15～36が土師質土器である。器形は統一感が無くバラエティに富んでおり、先の福田分類に照らせば、15・16が2類、17が32類、19が6b類、23・24は9類に相当しようか。26・29・31・32は高台が付く碗形で、29・31はやや足高の高台を伴う古代末期の製品。30はやや器高の高い柱状高台を伴う環で、底部外面は回転糸切を施している。近在では落川・一の宮遺跡編年で、第32段階(10世紀末～11世紀初頭:990～1010年)に出現し、第35段階(11世紀第3四半期:1050～1070年)に位置づけている(福田2002)、田中氏や八峠興氏など中世土器研究の立場からは、11世紀代に成立して12世紀代に盛行する土器とされている(田中2003・八峠2001)。33～36は小皿形態で、福田分類で33は25類、34・35は28類、36は29類に類似した器形である。このうち25類・29類などは、同氏の編年というⅢ期(11世紀末～12世紀前半)段階に位置付ける土器に該当する(福田1984)。

37～40は灰軸陶器、41・42は緑軸陶器、43は二彩陶器小壺である。灰軸陶器は37～39が刷毛塗り、高台内ナデ・ヘラケズリを施すK90号窯式期の製品、40は高台内を回転糸切りを施す折戸53号(O53)号窯式期の製品であろう。41・42の貼り付け高台をもつ緑軸陶器は、いずれも猿投窯産の製品である。43は小壺の肩部片で、表面に透明釉と緑釉がかかっている。細片のため褐色釉の痕跡は見られず、三彩か二彩の区別はつかないが、軟質白色の胎土から京都市左京区岩倉幡枝町の栗橋野窯産の可能性があり、8世紀後半～9世紀前半頃のものと思われる(上村1994・矢部2000)。

44は武蔵型土師器甕の口縁部片で、45～47は須恵器類、48は灰軸陶器甕である。

49～53は近世陶磁器で、同一個体と思われる49・50は口縁内面に格子目文を印刻する青磁鉢、51は17世紀の灰軸志野皿、52は瀬戸・美濃産の鉄軸播鉢で18世紀後半の製品、53も瀬戸・美濃産の灰軸碗で見込みを蛇の目状に釉を剥いでいる。

(3) 鐘樓地区【第3表、図面4中段、図版3中段左】

鐘樓地区より出土した土器の内訳は表10に示したとおり285点・3,323gを数え、うち須恵器で2点、土師質土器で4点の灯明具が確認されている。図は2点を掲げた。1は内面に黒色処理を施す土師質土器皿である。福田1984分類には該当器形は無く、内面には不定方向のヘラミガキ、体部下半はヘラケズリを施している。2の灰軸陶器碗は見込みを除く体部内面に灰釉を刷毛塗りし、三日月高台の内面には回転ヘラケズリを留める猿投窯産のK90号窯式の製品である。

(4) 堂間地区(金堂・中門間)

【第4表、図面4下段、図版3中段右】

堂間地区(金堂・中門間)は、中門・金堂の中軸線上に

表10 鐘樓地区出土土器・陶磁器種別集計表

種別	点数 (点)	重量 (g)	備考
土師器環類	5	45	
土師器甕類	24	55	
須恵器環類	52	437	灯明2
須恵器甕類	27	915	
土師質土器環類	167	1,321	灯明4・内黒1
灰軸陶器碗類	1	53	
灰軸陶器瓶類	2	8	
陶磁器類	7	489	
総計	285	3,323	

表11 堂間地区(金堂・中門間)出土土器・陶磁器種別集計表

調査区	種別	点数 (点)	重量 (g)	備考
中門 金堂間	土師器環類	2	12	灯明2
	須恵器環類	63	605	
	須恵器甕類	5	107	
	土師質土器環類	342	1,620	内黒3・灯明32
	陶磁器類	4	53	
	土製品	1	16	
	(小計)	417	2,413	
中門 金堂東	土師器環類	2	19	
	須恵器環類	15	78	灯明1
	須恵器甕類	3	21	
	土師質土器環類	131	437	内黒1・灯明1
	かわらけ	1	9	
	陶磁器類	6	48	
	(小計)	158	612	
	総計	575	3,025	

表 12 堂間地区(金堂・講堂間)出土土器・陶磁器器種別集計表

調査区	種別	点数(点)	重量(g)	備考	調査区	種別	点数(点)	重量(g)	備考	調査区	種別	点数(点)	重量(g)	備考
1区	土師器坏類	5	69		4区	土師器坏類	10	43	灯明1・内黒2	経蔵	土師器坏類	3	15	灯明3
	土師器甕類	3	39			土師器甕類	123	553			土師器甕類	5	26	
	須恵器坏類	17	191			須恵器坏類	16	253	灯明1		須恵器坏類	38	411	灯明7
	須恵器甕類	4	159			須恵器甕類	5	429			須恵器甕類	7	195	
	土師質土器坏類	29	257	灯明3		土師質土器坏類	73	493	内黒1		土師質土器坏類	85	560	灯明3
	陶磁器類	1	61			灰他陶器椀類	1	1			灰他陶器椀類	2	9	
(小計)	59	776		陶磁器類	1	15		緑釉陶器椀類	1	6				
2区	須恵器甕類	2	80		(小計)	229	1,787		陶磁器類	7	201			
	土師質土器坏類	6	39		土師器甕類	1	5		(小計)	148	1,423			
	陶磁器類	1	12		須恵器土器坏類	1	4		総計	790	9,533			
(小計)	9	131		土師質土器坏類	3	29								
3区	土師器坏類	8	67		(小計)	5	38							
	土師器甕類	5	10		土師器坏類	12	293	内黒1・灯明2						
	須恵器坏類	25	388		土師器甕類	7	74							
	須恵器甕類	15	601		須恵器坏類	32	616	灯明7						
	土師質土器坏類	172	1,614	灯明1	須恵器甕類	6	774							
	陶磁器類	1	17		土師質土器坏類	54	675	灯明3						
(小計)	226	2,697		灰他陶器椀類	1	7								
				陶磁器類	2	242								
				(小計)	114	2,681								

乗せた発掘区と金堂基壇南東側の発掘区2地点の調査を行い、575点・3,025gの土器・陶磁器類が出土した。表11には個々の発掘区ごとに器種内訳を示したが、このうち灯明具は36点(土師器坏2点・須恵器坏1点・土師質土器坏32点)を数えた。

1・2はともに東金子窯産の須恵器坏で、底径が5.4cmを有する9世紀中葉頃の製品。3～8は土師質土器で、3はやや箱形を呈する福田1984分類3類、5は32類、7は30類相当の製品である。8は体部片外面に墨痕が認められる。

(5) 堂間地区(金堂・講堂間)【第5表、図面5、図版3下段】

堂間地区(金堂・講堂間)は、6箇所の特レンチ(1～6区)に加えて、推定経蔵(建物本体は公有地西側の国分寺墓地内に所在)の東側に1箇所の特レンチを設定している。7箇所の特レンチから出土した土器・陶磁器類の内訳は表12に示したとおり、総計790点・9,533gにのぼった。2区を除く特レンチ各所で灯明具が出土し、全部で31点が確認されている。

1は体部外面を指頭瓦痕により調整する南武蔵型の土師器坏で、法量的に武蔵国府編年のH3～5期、9世紀代中頃以降の製品に相当する。2も土師器坏で、粘土紐を巻き上げて成形した後、体部外面にヘラケズリ、体部内面にヘラナゲ、口縁部はヨコナゲで整形を加えている。胎土も調整も武蔵型甕と同じで、甕の技法を用いた特異な坏といえる。3～11は須恵器坏・椀である。3・5が南多摩窯産で、法量比及び器形からG25号窯式に比定され、9世紀末頃のものであろう。それ以外は東金子窯産の底部片で、底径5.0～6.0cmの糸切調整のため、同じく9世紀中～後半頃の製品と思われる。その他、12の土師質土器は皿状器形を呈し、内面見込みには不定方向のヘラミガキを入念に施している。13は緑釉陶器輪花椀の口縁部片。猿投窯産で黒径90・89号窯の製品と思われる(尾野2003)。14・15は武蔵型土師器甕で、それぞれ断面「コ」・「ク」の字状を呈している。16・17はどちらも東金子窯産の須恵器瓶で、17の内外面には煤が付着し被熱を受けている。18は外面に粗目の並行叩きを施す渥美産(もしくは常滑産)の甕で、胴部内面を研磨しており、破片の2次的な利用痕が認められる。19は常滑甕の底部片である。

(6) 中門地区【第6表、図面6、図版4上段】

中門跡は建物・基壇の東端の一部が現道上に位置するが、調査では道路を一時的に迂回させ、建物・基壇の全体形を検出した。当該地区からは706点・8,717gの土器・陶磁器が出土しており、内訳は表13に掲げた。このうち灯明具の痕跡がある土器片は26点(土師器坏4点・須恵器坏8点・土師質土器坏14点)含まれて

いる。

1・2は南武蔵型の土師器環である。口径11～12cm、底径が6cm台をはかり、武蔵国府編年のH4～5期（9世紀中～後半）に比定される。3も土師器環で、体部は指頭圧痕による調整を施すが底部は突出し、砂質で粗い胎土を有する。南武蔵型環の消滅後、古代末期に出現するいわゆる「再興土師器」と呼ばれるもので、福田健司氏の落川・一の宮分類に照らせば、10世紀末～11世紀初頭に位置付く「cタイプ」の器形に近似している（福田2002・17）。

4～14は須恵器環・蓋で、6が南多摩型、10～12が南比企型、それ以外は東金子窯産の製品である。底部外周片で復元径が9cmを越え、遺存範囲では全面に回転ヘラケズリ調整を施している12は、8世紀中～後葉の鳩山Ⅲ・Ⅳ期に比定される最も古手の製品で、10・11はそれに比べ底径が5cm後半台で、鳩山Ⅶ期（9世紀中葉）の頃のものであろう（渡辺1990・2006）。口縁部を欠くが、6もほぼ同時期の所産で、G59号窯式と思われる。残る東金子窯製品は糸切底だが、底径は6cm後半台が主体で、9世紀前半頃であろう。

15～18は土師質土器環・碗である。15は口径：底径比が約1/2で福田1984分類の33類、17は復元底径が大きく、浅い皿形を呈するが福田分類には該当器形は見当たらない。16は足高台の脚部片、19・20は三足の獣脚が付く鍋形土器の脚部と底部片で、見込内底面に煤が付着する。

その他20は緩い「く」の字状口縁を呈する武蔵型土師器甕、21は灰陶陶器瓶の口縁部片である。

(7) 加藍中樞部区画施設一區画南辺地区（中門東）【第7表、図面7・8上段、図版4中～下段】

南辺地区（中門東）地区では、1,347点・10,636gの土器・陶磁器が出土した。ここでも灯明具としての痕跡のある土器片が62点（土師器環6点・須恵器環39点・土師質土器環17点）含んでいた（表14）。

1・2は土師器環である。1は直線的に立ち上がる器形で、器面は摩耗して調整痕が不明瞭だが、体部内面に指頭圧痕を施す。2は南武蔵型環で武蔵国府編年のH4～5期に相当する。3～25は須恵器環で、8・10・13・14・17～19が東金子窯、22・23・27が産地不明、それ以外が南多摩型の製品である。底部片が遺存する破片は、径が6.0cmを最大として（5・24）、5cm半ばのもの（6・11・14～17・19など）、4cm台のもの（4・12・13・18）と種類に富んでいるが、いずれも回転糸切後無調整のもので、9世紀中頃以降10世紀前半頃の所産である。

26～45は土師質土器環・皿・碗である。46は土師器台付甕の底部片。47は灰陶陶器の碗で、見込部を除く体部内外面に灰釉を刷毛塗りし、高台内は回転ヘラケズリ調整を施す猿投窯産のK90号窯式の製品である。48は淡褐色の砂粒を多く含む粗い胎土で、胴部から底部に向けて先細りの器形を呈することから壺形の土器と思われる。表面はタテ方向にヘラミガキを突入に施し、古式土師器（五領式期）のものであろう。なお、調査地の周辺では、特に尼寺方面で当該期の土師器甕が散見されている（第6図）。49は土師器甕の底部片である。

50・51は中世陶器で、50は底部外面を除き見込みと体部外面に鉄釉を施す小皿、51は灰釉緑釉小皿である。ともに14～15世紀の古瀬戸製品であろう（藤沢2005）。52・53・55は近世陶磁器で、18世紀代を中心とした瀬戸・美濃系の灰釉菊皿（52）と鉄釉灰釉塗分碗（55）、肥前系の染付皿（53）、口縁部外面に三角形のスタンプ印を施す在地系の瓦質鉢（54）などが出土している。

(8) 加藍中樞部区画施設一區画南東地区【第8表、図面8中段、図版4下段右】

区画南東地区から出土した土器類は60点・672gを数え（表14）、2点を図示した。

1はやや肉厚な胎土を有する土師質土器環で、口径は13.6cmを有する。全体の器形は復元できないが、10世紀前半頃の製品であろう。2は土師器甕で、胴部外面に不定方向のヘラケズリ、胴部内面にもヘラナデを施す。砂粒の多いやや粗い赤褐色の胎土を有し、特に底部外面には回転糸切り痕を留める点是在地の武蔵型甕と様相を大きく異にし、胎土は甲斐型にも似ている印象である。実物との対比は行っていないが、山

表13 中門地区出土土器・陶磁器種類集計表

種別	点数 (点)	重量 (g)	備考
土師器環類	39	382	灯明4
土師器甕類	30	166	
須恵器環類	151	1,680	灯明8
須恵器甕類	66	2,876	
土師質土器環類	388	2,970	灯明14
灰陶陶器瓶類	3	7	
灰陶陶器瓶類	3	65	
陶磁器類	25	528	常滑
土製品	1	43	
総計	706	8,717	

表 14 加藍中樞部区画施設 各地区出土土器・陶磁器種別集計表

調査区	種別	点数(点)	重量(g)	備考	調査区	種別	点数(点)	重量(g)	備考
南辺中門東	土師器坏類	17	123	灯明6	北西	土師器坏類	57	628	内黒8
	土師器甕類	31	385			土師器甕類	250	1,622	
	須恵器坏類	293	2,396	灯明39・墨書1		須恵器坏類	2,311	16,606	灯明12
	須恵器甕類	28	1,313			須恵器甕類	157	6,237	
	土師質土器坏類	957	6,155	内黒28・灯明17		土師質土器坏類	1,183	7,232	灯明3・内黒8・墨書2
	灰軸陶器椀類	1	3			灰軸陶器椀類	59	656	
	灰軸陶器瓶類	5	98			灰軸陶器瓶類	29	714	
陶磁器類	10	124		緑釉陶器椀類	2	16			
縄文土器	5	38		陶磁器類	21	868			
(小計)	1,347	10,635		土製品	2	75	置カマド		
南東	土師器坏類	4	29		(小計)	4,071	34,654		
	土師器甕類	1	48		土師器坏類	2	15		
	須恵器坏類	14	99		土師器甕類	4	88		
	須恵器甕類	3	105		須恵器坏類	4	44		
	土師質土器坏類	36	381	内黒2	須恵器甕類	12	496		
	灰軸陶器椀類	2	10		土師質土器坏類	29	384		
(小計)	60	672		陶磁器類	1	40			
北辺	土師器坏類	14	80		(小計)	52	1,067		
	土師器甕類	1	3		総計	5,670	47,028		
	須恵器坏類	25	348						
	須恵器甕類	11	320						
	土師質土器坏類	74	843	灯明10					
	灰軸陶器椀類	1	12						
	陶磁器類	14	253						
	(小計)	140							

梨県中巨摩郡榑形町のメ木遺跡などでは、回転糸切の底部と底部周辺の胴部にヘラケズリを施す9世紀前半頃のロク口甕が出土しており、甲斐・信濃方面の製品の可能性が考えられる(保坂1988)。

(9) 加藍中樞部区画施設一區画北辺地区【第9表、図面8下段、図版8上段】

区画北辺地区では、140点・1,859gの土器・陶磁器類が出土しており(表14)、うち土師質土器坏には10点の灯明具が確認されている。須恵器2点を図示した。

1は外面に回転ヘラケズリを施す、底径7.0cmの南比企窯産坏、2は底径5.6cmを有する東金子窯産坏である。底部片だが、それぞれ鳩山Ⅲ～Ⅳ期(8世紀後半)、東金子窯Ⅶ期(鳩山Ⅶ期並行；9世紀後葉)に比定されよう。

(10) 加藍中樞部区画施設一區画北西地区【第10表、図面9～14上段、図版5～7】

区画北西地区からは土器・陶磁器類が多く出土し、4,071点・34,654gを数えたが、灯明具自体は15点(須恵器坏12点・土師質土器坏3点)と出土量全体に比べると少ない印象である(表14)。126点を図示した。

1・2・4は南武蔵型の土師器坏である。口径11cm台、底径が6cm前後を測り、武蔵国府編年のH3～4期(9世紀中～後葉)の製品に比定される。

5～63は須恵器坏・皿類、64～75は高台付椀・皿類、76～82は蓋、83・84は墨書痕がある坏の体部片である。11・12・64・83・84に墨書が認められ、11・64は体部外面の正位に「具」、12は体部外面の逆位に「行」、83・84は小片のため判読は不能であった。坏・皿類は、大半が底部回転糸切後未調整の製品で、5・6・8・9・11～18・21～29・32・34・41・42・45・47・49・50・53・54・57～60・63が南多摩窯、7・10・19・20・30・35・36・40・44・48が東金子窯、31・33・38・39・51・62が南比企窯産で、南多摩窯製品の出土量が目立ち、これらは南多摩窯編年という9世紀中葉～10世紀前半代のG59～G5窯式期が主体である。一方、東金子窯産の52・55、南比企窯産の56は底部外周部に回転ヘラケズリ調整、61は全面回転ヘラケズリ調整を施し、9世紀前葉までの製品が少量含まれている。

3・85～94が土師質土器坏・椀である。85・86は腰部に丸みを持ち、口縁部にかけて内傾して立ち上がる口径12cm前後の大振りな器形で、福田1984分類の9類に該当する。腰部が張り、口縁が外反する小振り

の87は同じく21類に、皿形の器形で法量10cm台の93は31類に類似するが、砂粒を多く含む粗い胎土で、底部外面は銀杏切りである。福田1984分類の9・21・31類はいずれも「Ⅲ群」（西脇編年の「Ⅵ期」、服部編年の「E群土器」）のメルクマールで、11世紀以降、古代末期特有の土器とされているものである（福田1984）。黒色土器の88・90・92は、ともに軟質な胎土で、それぞれ特徴的な器形を呈する。88は丸みのある腰部から外上方へ直線的に立ち上がり、底部外面の調整は全面回転ヘラケズリである。内面は体部に等間隔の放射状暗文と、口縁部に横方向の入念なヘラミガキを行って黒色処理している。90は玉縁状の口縁部を形成し、外面には口縁部から体部にかけて横方向のヘラミガキ、内面もヘラミガキが認められるが調整単位の観察は不能である。内外面に黒色処理を施す。内黒の92は雲母が目立つ赤褐色の胎土をもち、底部は回転系切後にハの字形に開く高台を貼付する。見込部には不定方向のヘラミガキを行っている。群馬・栃木・千葉県等の黒色土器と比べても類例が見当たらない（三浦1990・田熊他1990・後生1990）。

95～103は灰軸陶器で、いずれも猿投窯系の製品である。腰部の張りが強く、見込み一面に均質な降灰軸が注ぐ101はK14号窯式にも適り得るが、その他は刷毛塗りて底部は回転ヘラケズリを施すK90号窯式期の製品に比定される。104の緑軸陶器は、口縁部が段を形成して外傾する皿形の器形で、底部を欠損するが三足盤もしくは段皿と思われる。施軸前のヘラミガキによる器面調整は非常に丁寧で、熊ノ前古窯産の可能性があり、猿投窯系Ⅵ期古～中段階（830～890年頃）の製品に比定される（愛知県陶磁資料館1998・尾野2003）。

105～109は土師器甕・羽釜・台付甕・置きカマドを掲げた。105は器表面が摩耗し調整痕が不鮮明だが、ロクロを用いているように見える。107は武蔵型の台付甕脚部片、106は羽釜の銚部分である。108・109は、輪積痕が鮮明で、外面指頭圧痕を施す置きカマドの底部片である。土師器の羽釜も、落川・一の宮遺跡編年では、第32段階（10世紀末～11世紀初頭：990～1010年）に盛行する器種と紹介されている。

110～114・115・116～118は須恵器甕・瓶・羽釜を掲げた。112は径の細さから長頸瓶の頸部もしくは高杯の脚部かもしれない。115は生産地動向での同器種は不明確だが、胎土の雰囲気から東金子窯産の羽釜と思われる。117は見込み中央部に円形の降灰軸があるのに対して、118は見込みの片側に円形の降灰軸があるため、117が長頸もしくは短頸瓶で、118は平瓶の可能性が考えられる。119～121は灰軸陶器甕である。119は頸部外面に横方向の太い沈線が巡り、縦方向にも幾筋もの線状痕が認められる。121は淨瓶で、注口部を丁寧にヘラケズリで面取りし、淡緑色の灰軸を施す。猿投窯産の製品で、K90号様式期のものと思われる。

122・123は常滑系の中世陶器で、122は高台端部が欠損しているが片口鉢Ⅰ類の底部片で、高台高がやや高く、外傾している形状から13世紀代の5～6型式あたりに比定出来ようか（中野1995）。123は甕の肩部片である。

124・125は近世陶磁器である。124は濃茶色の胎土を外面から内面受口部に施す瀬戸・美濃産の土瓶もしくは茶入れ・水注の類で、125は肥前系の染付筒型茶碗で見込みに五弁花文がある。いずれも18世紀代の製品と思われる（成瀬1997）。126は器形的には角皿の口縁端部と思われる内外面黒色処理した土器である。類似器形は管見の限りでは見当たらないが、薄作りで、口縁部内面外周に浅い沈線が巡っている。内外面は丁寧にヘラミガキを施しており、古代の黒色土器の範疇で捉えられるものかもしれない。

(11) 加藍中樞部区画施設一區画南西地区【第11表、図面14下段、図版8中段】

区画南西地区では52点・1,067gの土器・陶磁器類が出土しているが（表14）、灯明具の使用痕跡のある土器片は見当たらなかった。7点を図化した。

1は南比企窯産の須恵器杯で、底径7.0cmに復元される大振りの器形である。鳩山Ⅳ期頃の製品と思われる。2は内黒土器の境で、高台内はサデを行い、きめの細かい胎土である。見込みには不定方向のヘラミガキを施している。3は土師質土器杯で、砂粒の多い粗い胎土は区画北西地区の93と雰囲気が似ており、底部外面の回転系切り調整は銀杏切りのようにも見えるが判然としない。4も内黒土器で、硬質な精製された胎土を有する。外面のロクロ目は明瞭で、口縁端部は外傾する。内面は横方向の細かいヘラミガキの後、縦

方向の放射状にヘラミガキを施す。都内では町田市すぐじ山下遺跡・多摩市東寺方遺跡などで出土事例がある東北の栗圃式にも似た雰囲気を用意している(鶴間 2008)。5は土師質土器杯の底部、6・7は須恵器甕片で、7は割れ口2箇所二次利用した研磨痕が認められる。

(12) 塔跡2地区【第12表、図面15・16上段、図版8・9上段】

塔跡2地区では929点・6,742gの土器・陶磁器類が出土しているが(表15)、灯明具の使用痕跡のある土器片は見当たらなかった。47点を図化した。

1は土師器杯である。出土した土器の中で、唯一、掘込地業の版築土中より出土したもので、これ以外はすべて表土・攪乱中からの出土である。1は掘込地業上半部約50cmの7層にわたる薄い版築土層に混ざって17片の細片として出土し、それらを接合復元すると口径12.0cm、底径6.5cm、器高4.4cmをはかる個体となった。体部に指頭圧痕を施す典型的な南武蔵型で、武蔵国府編年のH4期(9世紀中葉頃)の製品に比定される。

2～13は須恵器杯・壺の底部片である。底径4.7～5.4cm台の南多摩・南比企窯産の製品が主体で、底径6.0cmの6も回転糸切り後無調整であり、9世紀中葉～後葉にかけてのものであろう。

14・15は灰軸陶器碗である。須恵器碗とした13は、高台端部がやや摩耗しているが、見込みに降灰軸状の釉薬粒が付着し、底部は糸切後に回転ヘラケズリを施しており、灰軸陶器かも知れない。14は見込みを除く体部に刷毛塗りし、三日月高台を有する猿投窯産のK90号窯式期、15は四角い扁平な高台に底部は全面回転ヘラケズリ、見込み全体に降灰軸もしくは刷毛塗りで灰軸を施すK14号窯式期の製品と思われる。16は緑軸陶器碗である。貼り付け高台の内側は回転ヘラケズリで、濃緑色の緑軸がかかる東海産の深碗形甕と思われる。17～19は須恵器甕・瓶類、20・21は灰軸陶器瓶類である。

22～26は中世陶器で、22～24は常滑系甕・鉢、25・26は古瀬戸製品を掲げた。22の甕は口縁部がN字状を呈することから13世紀中頃の常滑5型式に、23・24は片口鉢Ⅱ類で口縁端部が水平化する14世紀前半の7型式(もしくは6a型式以降)の製品であろう。25・26は、それよりやや遅れる15世紀前葉頃の古瀬戸後期様式の製品で、口縁のみ灰軸を施す緑軸皿である。

27～38・40は近世陶磁器で、27～31・33・34は17世紀代の瀬戸・美濃系の志野皿・灰軸皿・刷毛目碗・呉須絵碗、32は見込みに五弁花、高台内に大明年製の銘をもつ18世紀代の肥前系染付皿、35～37・38は瀬戸・美濃産の鉄軸挿鉢・鉄軸灯明皿、40は信楽産の脚付き灯明皿である。

39・41～47は近代陶磁器を掲げた。39は19世紀末の染付丸碗、41・42は焼締鉢、43以降は20世紀代の製品で、43はゴム印判飯碗、44は染付丸腰碗、45は「国分寺第一小学校前一燃料店」銘のある筒型碗、46・47は染付・色絵のどんぶり鉢である。

(13) 塔跡2周辺地区【第13表、図面16下段、図版9下段】

塔2周辺地区では、434点・6,057gの土器・陶磁器類が出土し(表15)、須恵器杯1点・土師質土器杯に3点の灯明具が確認された。このうち22点を図化した。なお、塔跡1にかかる調査区では5点・162gの土器・陶磁器の出土を見たが、図化出来る個体は無かった。

1～3は須恵器杯・蓋である。1・2は南多摩窯産の杯で、法量・器形から10世紀前半のG5号窯式の製品であろう。4～14は土師質土器杯・壺である。4以外は底部片で、全体の器形を窺えないが、底部端が張り出す12は福田1984分類の

表15 塔跡2地区出土土器・陶磁器種別集計表

調査区	種別	点数(点)	重量(g)	備考
塔2	土師器杯類	17	204	内黒1
	土師器甕類	54	582	
	須恵器杯類	89	1,031	
	須恵器甕類	362	16,897	
	土師質土器杯類	164	1,702	
	灰軸陶器碗類	6	108	
	灰軸陶器瓶類	5	90	
	緑軸陶器碗類	1	14	
	陶磁器類	231	6,742	
	(小計)	929	27,370	
塔2周辺	土師器杯類	8	19	
	土師器甕類	28	384	
	須恵器杯類	58	489	灯明1
	須恵器甕類	91	3,541	
	土師質土器杯類	218	1,107	灯明3・内黒1
	灰軸陶器碗類	4	47	
	灰軸陶器瓶類	10	224	
	陶磁器類	14	229	
	土製品	3	17	輪の羽口
	(小計)	434	6,057	
塔1	須恵器杯類	1	9	
	須恵器甕類	2	118	
	土師質土器杯類	1	13	
	陶磁器類	1	22	
	(小計)	5	162	
総計	1368	33589		

21類、腰部が丸みをもって立ち上がる8・13も福田分類の9類的で、11世紀以降の製品の可能性がある。15～17は灰軸陶器皿で、15・17は底部を回転ヘラケズリするK90号窯式期の製品、17は見込みは無軸だが、やや三角形の高台を持ち、百代寺窯式期に下る資料の可能性がある。18・19は須恵器甕口縁部で、ともに表面に楕円波状文を施す。20～24は中世陶器で、20・21は常滑系の片口鉢1類の口縁部片、22は甕、23は古瀬戸の錆軸挿鉢で、15世紀代の製品であろう。

3. 鏡瓦

(1) 金堂地区【第14表、図面17～26、図版10・11】

64点を図化したなかで、瓦当文様の特徴が明確な個体を中心に概観する。1～8は八葉蓮華文で、1・2は中房部が遺存しておらず、蓮子形状が三角形か否かは判然としないものの、丸味を帯びた蓮弁にY字形の間弁を伴う南比企窯系と思われる(有吉2001)。4も南比企窯産で中房は凸型に突出し、蓮子は伴わない。6は全体に盛り上がる蓮弁で輪郭線は無く、Y字形の間弁を有する。7は南比企窯産で、蓮弁及び中房の外周にそれぞれ1条の圏線を巡らし、蓮子1+4を配す。8も南比企窯の製品と思われる。9～15は蓮弁端部がやや尖るものを集めた。9は六葉蓮華文の八坂前窯Ⅲ-2類と同范で(坂詰他1982)、中房には1+4の蓮子が伴うであろう。11も六葉単弁蓮華文で中房は圏線で区画し、蓮子1+4を配す。瓦当裏面には縄叩きが認められる。16・17は蓮弁の先端が菱形に尖る新久窯Ⅳ類で(坂詰1971)、蓮子は円形の1+4が伴う。18は七葉単弁蓮華文で、蓮弁は中房に接せず、弁の基部を中房周辺に沿って円形に削っていることから八坂前窯Ⅶ類に相当し、蓮子は1+4と思われる。19～21も同類だが、18と21の瓦当裏面には縄叩きを施している。22は丸味を帯びた蓮弁を有する単弁六葉で、中房外周に太い圏線を巡らして、大きめの円形蓮子を1+4配す。瓦当裏面は縄叩きである。23は十五葉単弁蓮華文で、小さな間弁を有する。24～44・49～59・61・62は、いずれも外周に輪郭線を伴わない蓮弁で、断片資料が多いが49は五葉、24～43・48は六葉、44は七葉である。このうち24～35は蓮弁と中房の外周に圏線を巡らすもので、24・26・27・29～33には瓦当裏面に縄叩きが認められる。34・35は半載後の男瓦広端側に瓦当を嵌め込んで製作している。37・39は小形の花弁が中房と周縁の中間に置かれ、四角形の蓮子を1+4配置しており、御殿山I種a類(吉田2001)に相当する。48は高句麗系の宝相華文様を施す六葉蓮華文である(有吉1986a)。46～47も同じく高句麗系とされる七葉蓮華文で(有吉前掲)、蓮弁・間弁ともに輪郭線の内部全体が盛り上がり、おそらく中房には1+6の蓮子が表現されている。49は五葉蓮華文で、圏線で画した中房に1個の蓮子を載せる。55・59は中房内を界線で分割し、それぞれの区画に1顆の蓮子を配している。62は十六葉蓮華文で、凸字状に張り出した中房には蓮子は伴わない。63はおそらく五葉蓮華文で、瓦当裏面は縄叩きを施し、中房には旋回する花状の変形唐草を配する文様と思われる。後述する塔跡2地区で多く出土している。

(2) 講堂地区【第15表、図面27～32、図版11】

53点を掲げた。1～4は、いずれも小片だが八葉蓮華文と思われ、1・2は間弁を伴うが、3・4には間弁が無い。1と4は胎土の様相から南比企窯産であろう。5～10は木の葉形の六葉蓮弁で、中房・蓮弁の外周をそれぞれ圏線で区画する。5・7・9・10は瓦当裏面を縄叩きし、7・10などは弁端が周縁の圏線に接することから、八坂前窯Ⅲ-2類と同范であろう。その場合、蓮子は1+4が伴う。11・12は菱形状に角張る六葉蓮弁で、中房に円形蓮子を5顆を配することから新久窯Ⅳ類と同范である。13は七葉蓮華文で、中房周辺の蓮弁基部を削っており、八坂前窯Ⅶ類・新久窯Ⅲ類と同范である。16は単弁の十六葉蓮華文で、小さな間弁を伴い、中房には円形の蓮子が認められる。18～22は同范の素縁八葉蓮華文で、稜線を主体的に用いて蓮弁を表現し、各弁間より複数の稜線が派生して周縁に接続する独特の文様である。八坂前窯Ⅸ類と同范である。24・25はともに高句麗系瓦である。24は七葉蓮華文で、各弁の先端と間弁中にそれぞれ珠文を配している。25は蓮弁と間弁を矢印状に表現し、界線で4分割した中房各区内には、1顆ずつの蓮子を配する六葉宝相華文様の鏡瓦である。26～35は花卉・中房外周に圏線を画し、花卉に輪郭線を

伴わない六葉蓮華文で、26～30・32・34には瓦当裏面に縄叩きを施す。33の花弁端部付近には范傷がある。36～45も花弁に輪郭線を伴わないが、花弁の外周には圏線を描かないもので、36～38・42は胎土の様相から南比企窯産と思われる。38には弁間に1箇所のみ范傷が認められる。46～49は周縁のやや内側に凸帯が巡り、やはり花弁の輪郭線は無い。51は細長い花弁が特徴的な六葉蓮華文で、蓮子の無い中房の外周には沈線を巡らせている。花弁の形状や瓦当裏面に縄叩きを残すことから、八坂前窯の製品にも似た要素を留めるが生産地に類例は見当たらない。52は細い五葉の蓮華文で、圏線で区画した中房の中心に1顆の蓮子を配す。53は外周を輪郭線で表現した花弁内側が窪み、開弁部分が盛り上がる。

(3) 鐘樓地区【第16表、図面33、図版15】

2点を図化した。1は恐らく六葉蓮華文で、花弁と中房の外周を圏線で区画する。瓦当裏面は縄叩き後にナデを施し、東金子窯製品と思われる。2も六葉蓮華文で、花弁に輪郭線は伴わず、周縁との間に一条の圏線を巡らせている。

(4) 堂間地区(金堂・中門間)【第17表、図面33、図版12】

4点を図化した。1は高句麗系の六葉宝相華文で、瓦当裏面には縄叩きを施す。2～4は花弁外周を輪郭線で表現し、周縁内側にも1条の圏線を巡らせている。いずれも男瓦との接合は差し込み技法による。

(5) 堂間地区(金堂・講堂間)【第18表、図面34～36、図版12】

24点を図化した。1～9は胎土の様相から南比企窯の製品と思われる。1は輪郭線の無い三角形の花弁を呈する八葉蓮華文で、男瓦凹面～瓦当裏面にかけて一連の布目痕があることから、一本造りによる製作であろう。2は丸味のある花弁で、新沼窯跡におけるⅠA型式と同范の可能性(手島2016)。7も丸味の花弁だが、蓮子を連弁状に表現しており、統一新羅の瓦に近い様相を呈している。9は単弁八葉蓮華文で、細い花弁の外周に圏線を巡らせ、周縁との間に珠文を配する平城宮系の瓦である。やはり新沼窯跡のⅡ型式に比定される。10はやや角張った花弁を呈する六葉蓮華文で、花弁の間に2箇所のみ范傷が見られる。瓦当裏面を縄叩きしており、新久窯Ⅳ類と同范と思われる。11・12はともに高句麗系瓦で、11は六葉宝相華文、12は七葉蓮華文である。12は花弁と開弁の外周に1顆の珠文を配している。13は六葉単弁蓮華文で、花弁・中房外周に圏線を巡らせ、蓮子1+4を置く。

14～23は輪郭線を伴わない花弁の鏡瓦である。14は瓦当周辺と裏面に縄叩きを施すことが特徴的で、花弁は七葉を構成すると思われる。16は南比企窯産で、七葉もしくは八葉の簡素な花弁を呈し、細い周縁を持つ。中房の界線と蓮子の間には1箇所のみ范傷が見える。17・18・21・22は花弁自体が粗雑な作りで、弁間に珠状の突起を配している印象である。23も簡素な図案の鏡瓦で、八葉を数える連弁は放射状には広がらず、不定方向に向いている。中房に明瞭な輪郭線はなく、中心の蓮子から四方に稜線が伸び、稜線の間に1顆ずつの蓮子を配する。24はおそらく5弁で、中房内には旋回する花文状の変形唐草文を置く鏡瓦である。

(6) 中門地区【第19表、図面37～39、図版12】

20点を図示した。1は南比企上野系の八葉蓮華文で、素文は周縁で楔状の開弁を伴い、瓦当裏面には布紋り痕があることから一本造りによる技法である。国分寺創建に関係する布紋りの鏡瓦は、8世紀第2四半期頃には上野国南部を中心に武蔵国北部などに分布が認められている(昼間1993など)。2～4はやや丸味のある連弁の稜線をヘラケズリにより表現する点で共通するが、連弁外周の圏線の有無で様相が異なる。弁数は八葉を構成すると思われ、2・3はともに中房は凸型で蓮子は伴わないが、南比企勝呂系の要素を備えている。5・6も八葉蓮華文で、Y字形の開弁を有し、圏線で区画した中房内に蓮子を配す。7は弁の間隔が不均等で、連弁と中房外周に圏線を伴う。5～7いずれも南比企窯産と思われる。8は弁形を稜線で表現し、中房には円形を蓮子を4顆配する素縁六葉蓮華文で、八坂前窯Ⅰ類と同范。10も八坂前窯Ⅳ類と同范の八葉蓮華文である。12～14は素縁の単弁十五葉蓮華文で、突出する中房に1+4の蓮子を伴うものであろう。17は花弁がほぼ正三角形に膨らみ、中房は一重圏線の内側に1+4の蓮子を配する素縁六葉蓮華文で、御殿山Ⅰa型式と同范である。20は太い素縁を持つ素弁四葉蓮華文で、中房には界線が無く、中心に1顆の蓮子がある。半載後の男瓦に瓦当を嵌め込んで接合している。

(7) 伽藍中樞部区画施設一區画南辺地区（中門東）【第20表、図面39・40、図版12】

1は中房部分のみの破片であるが、凸型の中房には1+8の小さな円形蓮子を配し、花卉の中心には細線状の子葉が表現されていることから、南武蔵国府系A群（TNT No.513遺跡のA類、瓦谷戸瓦窯Ⅲ類）に比定される（加藤1982・87、坂浩他1999）。2は瓦当裏面に布紋り痕のある一本造り技法の瓦で、周縁は欠損しているが側面を斜格子で叩き、外区の珠文と中房蓮子は竹筒文で表現する十六葉蓮華文である。南比企上野系の瓦で、武蔵国分寺の最も初現期の瓦の一つである（酒井1989）。4も南比企上野系の本造りによるもので、素縁外周には斜格子の叩きが認められる。V字形の間弁を伴う八葉蓮華文で、突出する中房に竹筒で蓮子を表現するタイプのものであろう。5～8も胎土の様相から南比企窯産と思われる、8は弁間に珠文を施している。9・11は弁長の短い単弁で、弁の基部は中房の圏線に沿って空白帯があり、八坂前窯Ⅶ類・新久窯Ⅲ類と同型式の七葉蓮華文であろう。12も弁形を稜線で表現する八坂前窯Ⅰ類、13は瓦当裏面に縄叩きし、弁端形状から新久窯Ⅳ類に相当するものと思われる。

(8) 伽藍中樞部区画施設一區画北辺地区【第21表、図面41、図版13】

5点を掲げた。1は間弁を伴う単弁八葉蓮華文で、圏線で加工した中房には円形蓮子を配する。2は南比企窯産と思われる、T字形の間弁を有する八葉単弁蓮華文である。3は瓦当裏面に縄叩きを施す素縁単弁七葉蓮華文で、八坂前窯Ⅶ類・新久窯Ⅲ類と同形の瓦であろう。4は長さ2cm・幅1cmに満たない小さな花卉で、中房は圏線で画している。5は高句麗系の素縁七葉蓮華文で、弁端と間弁には珠文を配し、圏線で加工中房には1+6の円形蓮子を配している。

(10) 伽藍中樞部区画施設一區画北西地区【第22表、図面41～43、図版13】

1区で1点、2区で13点の計14点を図示した。北西1区から出土した1は素縁単弁八葉蓮華文の中房に1+4の蓮子を配する南比企窯産の平城宮系鏝瓦である。外区は欠損しているが、連弁の外周には一重の圏線が走り、おそらく周縁と圏線の間には珠を巡らせている。

北西2区出土の1～3は南比企窯産で、いずれもT字形の間弁を有する素縁単弁八葉蓮華文である。特に2は、瓦当裏面に布紋り痕があり、一本造りによる上野系の瓦である。4・5も南比企窯産の素縁単弁八葉蓮華文で、突出する中房には蓮子は伴わない。7・9は幅広で丈の短い素縁六葉単弁蓮華文で、太い圏線で囲う中房の蓮子は1+4を配し、7には中房の周囲に縄目が残っている。ともに東金子窯産と思われる。10は細めの周縁に素弁の六葉を持つが、その弁間は不均等で、3箇所に范傷が認められる。中房はやや太めの圏線を巡らせて、内側に1+4の蓮子を施している。11は周縁を欠損しているが、中房内に1+4の蓮子を配する単弁六葉蓮華文である。花卉外周の圏線から派生するV字状の間弁は、連弁基部までは到達しておらず、中房圏線から各連弁に向かって子葉状の隆線が弁の中心に向かって伸びている。12は瓦当裏面に縄叩きを残す素縁素弁六葉蓮華文、13は瓦当文様こそ不明だが、素縁で弁間に珠を配する素弁系の鏝瓦である。

(11) 伽藍中樞部区画施設一區画南西地区【第23表、図面43】

2点を掲げた。1は素縁単弁蓮華文で、弁外周に圏線は無く、三角形の花葩に細い花糸の間弁が伴う。2は素弁八葉蓮華文と思われる、鋭角な花卉端部の形状が特徴的である。

(12) 塔跡1地区【第24表、図面44～45】

12点を図示した。1は素縁八葉単弁蓮華文で、間弁を伴い、凸型の中房には竹筒で蓮子を表現している。瓦当裏面には布紋り痕があることから一本造りにより製作されたことが判る。2も間弁を有する単弁八葉蓮華文と思われるが、瓦当裏面はナゲ整形で、連弁の中心には子葉状突線がある。4・8は単弁六葉蓮華文で、それぞれ八坂前窯Ⅲ-2類、および八坂前窯Ⅳ類・新久窯Ⅰ類と同形であろう。10・12も東金子窯産で、素縁単弁七葉蓮華文を構成し、八坂前窯Ⅶ類・新久窯Ⅲ類と同形の瓦である。

(13) 塔跡2地区【第25表、図面45～50、図版13】

50点を図化した。1は恐らく十六弁を構成する細弁系の蓮華文で、裏面は剥落して調整痕の観察は不明。2は肉厚な輪郭線と連弁を有する単弁八葉蓮華文で、南多摩窯産であろう。3は素縁素弁七葉蓮華文で、弁

形は隅丸三角形や不整形など統一感に乏しい。凸型の中房には「父」字の陽刻があり、瓦当裏面には中央に布目痕を留め外周をナデている。4～6はT字の間弁を挟む素縁単弁八葉蓮華文で南多摩窯産、8・9は胎土の様相から南比企窯の単弁八葉と思われる。10・11は素縁単弁六葉で、圏線で括る中房に1+4の蓮子を置く八坂前窯Ⅲ-2類との同范瓦である。12は単弁七葉、13は瓦当裏面に縄叩きを施す単弁六葉で、それぞれ八坂前窯Ⅶ類・新久窯Ⅲ類、および新久窯Ⅳ類と同范で、その場合圏線で囲う中房内には1+4の蓮子が想定される。14～21は輪郭線の無い花卉を有するもので、15は素縁素弁六葉を構成し、瓦当裏面には縄叩きを残す。17～19は小片のため花卉と珠文の区別がつきにくい、瓦当面に范傷がある粗雑な瓦である。16・21には瓦当裏面に縄叩きが認められる。21～50は素縁単弁五葉蓮華文の同型瓦で、外区と中房は圏線で画し、連弁は輪郭線をもって表現する。中房内には、蓮子の珠ではなく、三単位の右方向に旋回する渦状(巴状)の変形唐草文様が施されている点で特徴的な瓦といえる。これらは、胎土・焼成・瓦当裏面の調整・男瓦との接合方法等から3種以上に分類が可能と思われる、瓦当裏面に縄叩きを施している点では東金子窯産の可能性もあるが、詳細については後述する(第5章2)。

(14) 塔周辺地区【第26表、図面51、図版13】

13点を図化した。1～4は南多摩窯(大丸地区)産と思われるT字の間弁を伴う単弁八葉蓮華文で、中房には1+6の蓮子を配する。5・6は南比企勝呂系の単弁八葉、7も南比企窯産であろう。8は素弁で九葉が想定される蓮華文で、外区には珠文を配する平城宮系の瓦である。12の瓦当文様は、連弁とは言い難い不可思議な文様を呈している。13は単弁七葉蓮華文で、弁端と外に大きく開く間弁はともに固縁に接する。

4. 宇瓦

(1) 金堂地区【第27表、図面52～59、図版14】

44点を図化した。1・2はともに段顎を呈する三重弧文で、1は南比企窯産であろう。3～16は偏行唐草文を掲げた。3～5は右方向に7単位で偏行する同系の唐草文で、主葉の巻き込みが大きく、その左右には珠文を配している。上下外区・左右脇区は無く素縁である。4・5は南比企窯産で、4は段顎で女瓦凸面には格子叩きを施すのに対して、5は曲線顎で凸面に縄叩きをしており、右端の主葉には縁に接して1箇所の范傷が見られる。6・7も右に7単位の偏行唐草文で、主葉の左脇には3顆の珠文を有する。段顎を呈し、女瓦凸面には斜格子叩きを施す。8は主葉の巻き込みが緩い7単位の右偏行唐草で、主葉の左脇に3顆、右脇に1顆の珠文を有する。9・10は直線的な唐草を特徴とする右偏行唐草で、主葉は7単位で構成されると思われる。いずれも段顎だが、9は上下の主葉脇に1顆、10は唐草上段の主葉脇に2顆、下段の主葉脇に1顆の珠文を配する点で異なる。11は左方向の偏行唐草文で、上下に展開する主葉の巻き込みは緩く、主葉脇に2～3顆の珠文を有する。12・13も右方向の偏行唐草で、細い唐草は9・10と雰囲気は近いが、やや曲線的である。12は段顎、13は曲線顎を呈する。14は左方向に7単位の主葉をもつ偏行唐草文で、外周には界線を伴う。曲線顎で、女瓦凸面に斜格子叩きを施し、押印・押型の「多」文字がある(文字瓦No.7・8)。15は14の主葉に珠文を追刻した偏行唐草文で、欠損しているが瓦当面右上端には「多」字銘が刻まれていると思われる。八坂前窯Ⅴ類に相当し、同范の宇瓦は南多摩の下落合瓦窯でも出土している(大川1979)。16は右展開する唐草文で、主葉と主葉脇に珠文を配する。

17～29・32は均整唐草文を掲げた。18・19は中心飾りから左右に3単位の主葉が派生し、外区には珠文を巡らせている。八坂前窯Ⅰ-1類・新久窯Ⅰ類と同范で、塔再建の所用瓦とされているものである。女瓦凸面は縄叩きを施し、18には凸面に朱が付着している。20～24も東金子窯産の製品と思われる。25～29は翻波状に唐草を表現するもので、25～27は八坂前窯Ⅵ類・新久窯Ⅱ類に、28は新久窯Ⅲ類に該当するであろう。32は中心から葡萄蔓様唐草の主葉が左右に8単位伸び、界線の左右両側に目字状の刻印が存在する。その他、30・31・33～35は特異文、36～38はヘラ書文、39は縄目文、40～44は無文である。

(2) 講堂地区【第28表、図面60～65、図版15】

46点を図化した。1～4は重弧文で、2・4は瓦当面が一部欠損しているが、1・3は三重弧文である。胎土の様相から2～4は南比企窯産と思われる。5は右方向の偏行唐草文で、瓦当左上に「多」字銘が刻まれている。女瓦凸面には斜格子の叩きを施す。6～8は特異文で、瓦当左端に「父瓦」印が刻まれる。南比企窯（鳩山窯跡群）小谷B・広町B両窯の製品と同范である（渡辺他1988・90～92）。9～18は偏行唐草文を掲げた。このうち9～13・15は南比企窯産で、右方向に7単位の主葉が並び周囲に珠文を伴う。いずれも段頸を呈し、9・11は女瓦凸面に斜格子叩き、15は格子叩きを施す。13は巻きの強い主葉に大きめの珠文から、新沼窯I B型式に類似した文様要素を持つ。16は直線的な唐草で、疎らな珠文を有する。おそらく一本の蔓に上段に3単位、下段に4単位の主葉が付き、上下段に合計11顆の珠文からなる意匠と思われる。女瓦凸面には斜格子の叩きが見られる。17・18は左方向の偏行唐草文を呈し、子葉を伴う18は八坂前窯V類・南多摩窯下落合窯と同范で、瓦当右端に「多」字が刻字されていると思われる。19は側端面に「高」のヘラ書文字がある（文字瓦№443）。20～34は均整唐草文を掲げた。20は文様が扁平で、直線的な唐草を特徴とし、おそらく牛角状中心飾りを伴う。段頸を形成し、凸面側には格子叩きを行う。界線と珠文は無く、酒井清治分類でいうC1類に該当する（酒井1990・2015）。21～23は外区に珠文を配し、女瓦凸面に縄叩きを施すもので、このうち23は八坂前窯Iー1類・新久窯I類と同范である。24～28は翻波状の唐草文で、24～26は八坂前窯VI類・新久窯III類と同范である。28は正確には唐草では無いが、3本の隆線でS字文様を1単位とし、中心から左右に向けてシンメトリな図案を呈している。曲線頸を呈し、凸面側には縄叩きを施す。29・30は界線を設け、主葉の外形曲線のみを表現した簡素な唐草文である。31・32は中心から葡萄蔓様唐草の主葉が左右に8単位伸び、界線の左右両側に「目」字状の刻印が存在する。33・34は唐草というよりは肉厚な連弁意匠を持つ瓦で、段頸を形成し、凸面は頸部分も含めて縄叩きを施す。35・36は特異文、37～46はヘラ書文である。

(3) 鐘樓地区【第29表、図面66、図版15】

8点を図化した。1は三重弧文で、段頸を形成する南比企窯産の製品。2～6は偏行唐草文、7・8は均整唐草文を掲げた。2～5は右方向に展開する唐草で、主葉の両側に1～3顆の珠文を配する。唐草の表現は似ているが、4には界線を伴っている。段頸を基調とする。一方、左方向の6は直線頸で、瓦范が痛んでいるためか、主葉が不鮮明である。7は唐草というよりは肉厚な連弁意匠を持つ瓦で、段頸を形成し、凸面は頸部分も含めて縄叩きを施す。8も正確には唐草では無いが、3本の隆線でS字文様を1単位とし、中心から左右に向けてシンメトリな図案を呈している。

(4) 堂間地区【金堂・講堂間】【第30表、図面67～68、図版15】

16点を図化した。1は段頸を持つ三重弧文で、頸部には格子叩きを施している。2～7は右方向の偏行唐草文で、8～10・12に均整唐草文を掲げた。2は右端の主葉に1～2枚の子葉を伴い、女瓦凸面側には斜格子叩きが見られる。3・4は主葉左側に3顆の珠文を伴う。2～4はいずれも段頸である。5は新沼窯I BもしくはI C型式と同范で、曲線頸を持つ。6はやや直線的な唐草文、7は太い隆線で唐草を示し、主葉の中心と周囲に珠文を伴う。8は主葉の外形曲線のみを表現した簡素な唐草文、9は中心から葡萄蔓様唐草の主葉が左右に8単位伸び、界線の左右両側に「目」字状の刻印が存在する。10は唐草というよりは肉厚な連弁意匠を持つ瓦で、段頸を形成し、凸面は頸部分も含めて縄叩きを施す。12も唐草とはいえない、蝶の羽を思わせるようなシンメトリの線刻模様の右側部分で、緩い段頸を呈する底面から女瓦凸面側には縄叩きが見られる。11・13～14・16はヘラ書文、15は縄目文様を施している。

(5) 中門地区【第31表、図面69～71、図版16】

19点を図化した。1～6は三重弧文で、5は南比企窯産、それ以外は南多摩窯産と思われる。2は頸部に縄叩き、3・4は女瓦凸面に掛けて格子叩きを施す。5には凸面に赤色顔料が付着している。7～9は右方向の偏行唐草文、10～14には均整唐草文を掲げた。7・8はともに南比企窯産で、主葉脇に珠文を配する。8は新沼窯I B型式と同范の可能性が高い。9は主葉の溝が多く、やや直線的な唐草意匠を持つ瓦当文

様で、女瓦凸面に赤色顔料が付着する。10は八坂前窯Ⅰ-1類・新久窯Ⅰ類と同范瓦で、11と12は外区に珠文を巡らせている。13は中心から葡萄蔓様唐草の主葉が左右に8単位伸び、界線の左右両側に「目」字状の刻印が存在する。14は肉厚な連弁意匠を持つ瓦で、段頸を形成し、凸面は頸部分も含めて縄叩きを施す。15~17は特異文で、17は瓦当面に縄叩きした後に瓦范を当てている。18・19はヘラ書文である。

(6) 加藍中樞部区画施設—区画南辺地区（中門東）【第32表、図面71~72、図版16】

6点を図化した。1~3は段頸を持つ三重弧文で、3は凸面側に格子叩きを施している。4はややための唐草文様で、外区には珠文を巡らせ、凸面側に縄叩き痕が認められる。5は蝶の羽のようなシンメトリの線刻模様を有し、緩い段頸を形成する。凸面側は縄叩きである。6は瓦当文様は不明だが、界線状の隆線が見える。女瓦凹面に「大」字様の模倣文字が認められる。

(7) 加藍中樞部区画施設—区画北辺地区【第33表、図面72~73、図版16】

6点を図化した。1は四重弧文、2は三重弧文である。1には凸面に赤色顔料の付着痕が認められる。3・4は遺存部位が小さいが左方向の偏行唐草文と思われ、主葉脇には珠文を配している。どちらも段頸を形成する。5は瓦当面右端部の破片だが、外区には珠文があり、細い唐草文から牛角状の中心飾りを持つ均整唐草文と思われ、酒井清治分類のA2類に比定される（酒井1990・2015）。6は均整唐草とは呼び難いが、翻波状の線刻で左右シンメトリな文様で、主葉と思われる同心円状の渦の脇に珠文を配している。

(8) 加藍中樞部区画施設—区画北西地区【第34表、図面73~76、図版16】

北西1区で2点、2区で15点の計17点を図化した。

まず、北西1区では、1が唐草というよりは肉厚な連弁意匠を持つ瓦で、段頸を形成し、凸面は頸部分も含めて縄叩きを施す。2は特異文で、界線の内側に太い縦刻みの沈線が走る。

北西2区では、1~3は三重弧文、4は四重弧文、5も頸部分を欠損し弧数は不明であるが重弧文系と思われる。このうち2・3は女瓦凸面に格子状のヘラ書き、5は格子叩きを施し、2~5は南比企窯産である。6は右方向の偏行唐草文で、瓦当左上に「多」の文字を刻み、曲線頸部には斜格子の叩きが見られる。7は左方向の偏行唐草で、主葉脇に珠文を配する。8~14は均整唐草文である。8は界線が二重に巡り、中心飾りから左右に3単位の唐草が伸びる点は均整唐草文だが、本来の瓦范では唐草の蔓はシンメトリ意匠にはなっていない。9は翻波状の唐草で、八坂前窯Ⅵ類・新久窯Ⅱ類と同范である。10も同系の文様だが、二重の界線と左右端部の唐草文から新久窯Ⅲ類に比定できる。11も翻波状の唐草文を呈し、東金子窯製品と思われる。13・14は主葉の外形曲線のみを表現した簡素な唐草文で、15は中心から葡萄蔓様唐草の主葉が左右に8単位伸び、界線の左右両側に「目」字状の刻印が存在する。

(9) 加藍中樞部区画施設—区画南西地区【第35表、図面76、図版16】

1点のみ図化した。1は頸部分が剥離しているが瓦当面にヘラで斜格子状の文様を描いている。

(10) 塔跡1地区【第36表、図面77】

13点を図化した。1・2は三重弧文で、どちらも段頸を形成する。3~12は均整唐草文で、3~10には外区に珠文が見られる八坂前窯Ⅰ-1類・新久窯Ⅰ類と同范瓦である。4は女瓦凸面に格子叩き、9・10は縄叩きが見られる。11は唐草の表現がやや直線的で細く、中心飾りから界線に向かって下に范傷状の痕跡が認められる。12は翻波状に唐草を表現した東金子窯製品、13はヘラ書文である。

(11) 塔跡2地区【第37表、図面78~84、図版16】

48点を図化した。1~4は三重弧文で、いずれも南多摩窯産の可能性があり、1・2・4は段頸、3は直線頸を呈する。5~14は偏行唐草文である。5・6は南比企窯産の右に偏行する唐草で、主葉脇に珠文を配する。7は左偏行唐草文で、本来は上下に4単位ずつの主葉があり、主葉間には2~3顆ずつの珠文を配する。瓦当右上に范割れと思われる接合痕がわずかにみえる。9・10も左偏行の唐草で、子葉を伴う。ともに直線頸で、9は八坂前窯Ⅴ類・南多摩下落合窯と同范と思われる。女瓦凸面に斜格子の叩きを施す。11・12は右偏行唐草で、12は主葉の中心に珠文を有する。13・14は一本の連続した蔓を持たず、主葉の巻き込み毎に独立した意匠をもつ右方向の偏行唐草で、ともに段頸を呈し、凸面には横位の縄叩きを施し

ている。15～32は均整唐草文である。15・16は外区に珠文を巡らせるもので、直線顎で凸面縄叩きの16は八坂前窯Ⅰ—1類・新久Ⅰ類と同范で、15や外区に珠文を持たない18も東金子窯産の製品であろう。19～27は形式化した唐草で、20～22は八坂前窯Ⅵ類・新久窯Ⅱ類と同范、窯跡は特定出来ないが26・27も同范の瓦である。28は文様の中心部が不明だが、左右に4単位の主葉が伸び、両端の主葉が大きく渦巻く均整唐草で、顎凸面には縄叩きを施している。29は牛角状中心飾りを伴う宇瓦にも似て、酒井分類（酒井1990）に照らせば外区が無文のB類に対比されようが、武蔵国分寺での出土例は知られておらず、唐草の回転も形式的で類例が見当たらない。32は左右から中心に向かって3単位ずつの主葉が伸びる簡素な唐草文である。断片的で瓦当面の様相が掴めないが、33も同系の文様要素かもしれない。34～37は中心から葡萄蔓様唐草の主葉が左右に8単位伸び、界線の左右両側に「目」字状の刻印が存在する。38は肉厚な連弁意匠を持つ瓦で、段顎を形成し、凸面は顎部分も含めて縄叩きを施す。39～43は特異文、41～48はヘラ書文あるいは無紋の瓦である。

(12) 塔跡2周辺地区【第38表、図面85】

8点を図化した。1～3は三重弧文で、いずれも段顎を形成する。1は南比企窯産、2・3は南多摩窯産の可能性ある。4・5は偏行唐草文、6～8は均整唐草文を掲げた。左方向の4は端部の主葉中央に珠文を配し、周縁と界線間の外区は素文で、八坂前窯Ⅴ類と同范である。5は右方向で外区には珠文を巡らせている。8は八坂前窯Ⅵ類・新久窯Ⅱ類と同范、6～8いずれも東金子窯産と思われる。

(13) 南門地区【第39表、図面85】

1点のみ掲げた。1は、瓦当面の一部しか遺存していないが、南比企窯産の右向偏行唐草文と思われる。主葉端部が肥厚している様子と主葉両側の珠文から新沼窯ⅠBもしくはⅠC型式に類似した文様要素で、曲線顎を呈している。

5. 道具瓦（鬼瓦・面戸瓦・隅切瓦・熨斗瓦）

(1) 鬼瓦【第40表・図面86・図版17】

今次の調査において鬼瓦は、金堂から1点、鐘楼から2点、中門から1点、塔跡2から1点の計5点が出土した。どれも小破片であるが、武蔵国分寺跡出土の鬼瓦については、かつて有吉重蔵が以下の三種類に大別しており（有吉1986a）、この型式分類に照らして個々の製品を概観してみる。

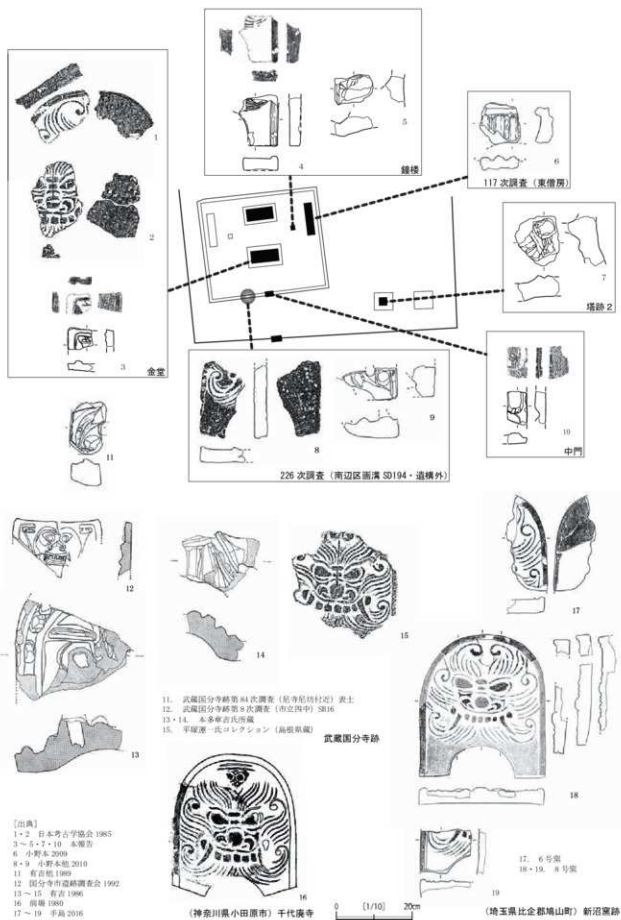
〔A型式〕 両手を頭上に掲げて怒った姿を表現しているものの、ユーモラスな獣面文を飾るもの。

〔B型式〕 周縁に大粒の珠文を配し、肉厚で立体的な面相をしているもの。

〔C型式〕 坂だった巻毛、つりあがった眉、鋭く伸びる歯牙など恐ろしい形相の獣面文を飾るもの。

まず、1は円頭槌形を呈し、足元がアーチ状に大きく抉られていることから、「拜み」の軒丸瓦をまたぐ形で据えられた大棟用の鬼瓦であろう（森2001）。鬼板表面の外周は直立してやや盛り上がり、范を粘土に押し込んで獣面の巻毛とした線縁が4条確認されるが、凹凸には乏しく、軟質な焼き上がりである。C型式の鬼瓦で、鐘楼から出土している。2は、1よりはやや小振りで矩形を呈することから、降り棟用の鬼瓦と思われる（森前掲）。全体的に器肉は薄く、外縁部は平坦で、范の型押しによって頭上に掲げた左手が厚く浮き出ている。側面はヘラナデによって整形されており、裏面は縄目の叩きを施している。硬質な胎土を有する。A型式の鬼瓦で、金堂から出土した。3～5は肉厚で獣面を表現しているB型式の鬼瓦である。いずれも小片のため詳細な部位の同定は難しいが、5には牙と思われる突起が確認される。3は軟質な胎土で中門から、4・5は硬質な胎土で、それぞれ鐘楼・塔跡2より出土した。

また、伽藍中樞部及び周辺域出土の鬼瓦を第23図に掲げた。金堂では昭和31年度の調査でもC型式の鬼瓦があり、今次の調査を合わせてA・Cの両型式が出土したことになる。中門および中門の西側では第226次調査の南辺区画溝SD194や遺構外からB・C型式、東僧坊ではB型式の鬼瓦がそれぞれ認められる。その他、尼寺尼坊周辺の第84次調査でB型式、僧尼寺中間地域の第8次調査でA型式、出土地は不明だが本多



- 11. 武蔵国分寺跡第84次調査 (坂倉尾村付近) 表土
- 12. 武蔵国分寺跡第8次調査 (市立四中) SR16
- 13・14. 本多康吉氏所蔵
- 15. 平塚源一氏コレクション (高根新蔵)

武蔵国分寺跡

- 【出典】
- 1・2 日本考古学会 1985
 - 3～5・7・10 本報告
 - 6 小野本 2009
 - 8・9 小野本能 2010
 - 11 有吉昭 1969
 - 12 国分寺市遺跡調査会 1992
 - 13～15 吉古 1986
 - 16 前掲 1980
 - 17～19 手島 2016

(神奈川県小田原市) 千代庵寺

(埼玉県比企郡鳩山町) 新沼窟跡

第23図 武蔵国分寺跡出土の鬼瓦と関連出土資料

章吉氏採集品にA型式、平塚運一氏採集品にC型式がある。なお、C型式の鬼瓦は新沼窯6・8号窯や小田原市千代庵寺にも類例があるが、千代庵寺は眉間の范傷をナデ消し、武蔵国分寺は范傷が増加していることから同庵寺よりも新しく、国を越えて范型が持ち込まれており、さらに新沼窯は両寺の文様を踏襲して新たに范型を作成したもので、巻毛の硬化化や本数が減っている（有吉2013）。

（2）面戸瓦【第41表・図面86】

外形端部がカーブかかった形状を有する女瓦片を面戸瓦として分類し、今次の調査では2点の存在を確認した。有吉重蔵によると、焼成後の女瓦端部を打ち欠いた後に研磨する、いわば廃棄された瓦の再利用品として面戸瓦を製作しており（有吉1986a）、1・2ともに研磨した形跡がある。また、形状は2側面を研磨する蟹形のもの、1側面を研磨する蟹形のもの2つに大別されており、図示した2点はいずれも小片で全体形は掴め得ないが恐らく後者のタイプで、降り棟用に供したものと思われる。1は中門と金堂間の堂間地区、2は金堂地区18区より、それぞれ出土した。

（3）隅切瓦【第42表・図面87～88・図版17】

降り棟の両側に接する部分に使用した瓦で、女瓦広端の片側を生乾きの段階で斜めに裁断して製作している。7点を図示した。1・3～7は広端面に対して大凡126度、2は30度とやや鋭角な角度で切り落としているが、全体的に整形具や胎土等に均一な様相は認められない。2の凹面には、「足」の押印がある。1・2は金堂地区、3は講堂地区、4～7は中門地区より出土し、中門地区でやや目立った出土状況を示している。

（4）熨斗瓦（埴瓦）【第43表・図面88～91・図版17～18】

大棟・降り棟に積載した瓦で、女瓦を生乾きの段階で分割して製作している。狭幅で大凡15cm前後のものが多いが、全長を知り得るものは無かった。12点を図示した。4は凹面布目地の上に「久」のへら書文字、8も凹面に文字は欠損しているが郡名の押印痕が認められる。1・2は講堂地区、3は鐘樓地区、4～7は中門地区、8は区画南辺（中門の東）、9・10は区画北西、11は区画南西、12は区画南東よりそれぞれ出土している。

6. 男瓦・女瓦

（1）男瓦【第44表、図面92～107、図版18～20・23・24】

男瓦は、昭和39～44年の調査で、形態・粘土素材・型などから①I1-A1（有段粘土紐桶巻き作り）、②I1-B（有段粘土板桶巻き作り）、③I2-A1（無段隅落し粘土紐桶巻き作り）、④I3-A1（無段粘土紐桶巻き作り）、⑤I3-B（無段粘土板桶巻き作り）の5大別され、③・④・①が多く、②・⑤は極めて少ないことが指摘された（滝口1987）。

前述のとおり、今次の調査では出土瓦の計量作業が行き届いておらず、男瓦の詳細な出土傾向の分析を成し得なかったが、各地区から遺存状況の良好なものを抽出し、金堂地区で7点、中門地区で24点、区画南辺（中門東）で4点、区画南東で2点、塔跡2地区で3点の計40点を図示した。講堂地区では遺存状況の良好な男瓦が相対的に少なく、中門地区では礎石壺地業底に男瓦・女瓦を敷いた状況が発見されていることから（第1分冊38頁・図面51・図版63～65、本書図版23・24等参照）、図化個体が必然的に多くなっている。また、明確に有段瓦と識別できる破片は決して少なくないものの、図化に耐えられるほどの遺存度をもつ破片がなく、塔跡2基礎版築土中より出土した図面107-3の1個体のみを掲げた。したがって、前回の報告で5大別した男瓦分類のうち①・②については当該個体のみで、おそらく①の技法で製作されたものと思われる。また、中門出土の図面101-18・20、区画南東出土の図面106-1、塔跡2出土の図面107-2は⑤の可能性があり、それ以外の個体はすべて④もしくは③の技法によるが、破片資料では紐桶の捉え方によってはさらに④と⑤の識別も困難といえる。

これらのうち、中門出土の図面95-1～図面103-24までの24個体は、すべて礎石壺地業底から出土した男瓦で、屋根を飾った瓦ではない（図版23・24）。1・2が壺地業1-1、3～6・14・15・19～21・23

が壺地業1-2、7～13・16～18・22・24が壺地業1-3に伴い、さらに壺地業1-2では14・15・19・20が上層の14層上面に、3～6・21・23が下層の15層上面の2つの層に亘って、それぞれ敷かれていた。これらの瓦は、地業底に並べた後で版築築盛土とともに突き固められたため、押しつぶされる形でいずれも破砕しており、接合を試みたところ完形までには復元出来ない個体も少なからずあった。壺地業自体を完復していないことにもよるが、完形の製品ばかりを敷いた訳ではなさそうな雰囲気である。壺地業出土男瓦のうち、8・13・14には広端面に「中」（那珂郡）の押印、23には凸面に「高」（高麗郡）の押印、写真のみの掲載資料だが壺地業1-2から凸面に「播」（播磨郡）のへら書き文字が認められる。また、4は淡褐色の軟質な胎土で、後述する図面111-4、図面112-6・7の女瓦と同様に、平行の叩きが組み合わされたものが、叩き締めの一単位として認識出来るもので、酒井清治が前内出窯跡2号窯出土瓦の中に見出し、「平行組合せ叩き文」と呼称している創建期の瓦である（酒井1988・1989など）。近年では、類例の瓦が供給され、交通の要衝にも立地している女影庵寺には国分寺に関係する官衙関係施設の存在が想定されている（坂野2016）。

その他特記すべきこととしては、男瓦特有の文字瓦として朱墨書が幾つかの個体で認められた。金堂出土の図面92-1・2、図面93-3・4、図面94-4・7、区画南東出土の図面106-1・2などである。判読不明の文字もあるが、凹面に朱墨で国分寺を示す「寺」を書いている。既往の調査では、女瓦にも同様な「寺」文字の朱墨瓦が散見されているが（有吉1986a）、今次の調査では男瓦のみで確認された。朱墨書は窯跡からの出土が認められていないが「生産地」において記名され、「出荷先」を示したものと考えられており（井上2017a）、また塔再建期に属する③I 2-A 1（無段隅落し粘土紐桶巻き作り）に多く認められるという（有吉1986a）。

（2）女瓦【第45表、図面108～120、図版20～24】

昭和39～44年の調査では、粘土素材と型から①I-A 1（粘土紐桶巻き作り）、②I-B（粘土板桶巻き作り）、③II 1-A 1（凸面型粘土横紐一枚作り）、④II 1-A 2（凸面型粘土縦紐一枚作り）、⑤II 1-B（凸面型粘土板一枚作り）の各技法に分類され、⑤・③が圧倒的に多く、①・②・④は極めて少ないことが指摘されている（滝口1987）。

女瓦も男瓦同様、調査地全体での出土傾向分析を行きれていないが、金堂地区で8点、講堂地区で8点、中門地区で7点、区画南辺（中門東）で16点、区画北辺で1点、区画北西で3点、塔跡2地区で26点の合計69点を図化した。このなかで、桶巻き作りは中門地区より出土した図面110-1、図面111-4、図面112-6・7、区画南辺出土の図面112-1と、塔跡2出土の図面117-1が桶巻き作りの可能性がある他は、すべて1枚作りの製品である。ただし、1枚作りでも区画南辺出土の図面112-3、図面114-10～12、図面115-13、図面116-15、塔跡2出土の図面120-19が技法③で、その他技法⑤の製品が圧倒的に多い傾向にある。

金堂出土の図面108-1～3は、凸面に宇瓦の範（偏行唐草文）を利用した叩きを施した女瓦である。同図4は広端面に「七」字の墨書を記す。中門出土の図面111-4・5は礎石壺地業底に敷いた瓦で、それぞれ壺地業1-2、1-1から出土している。このうち4は、図面96-4の男瓦でも触れたとおり、凸面側に平行組合せ叩き文を施す前内出窯2号窯産で、図面112-6・7も同窯の製品である（酒井1989他）。壺地業底に敷かれた瓦は、量的には男瓦に比べ女瓦は少ない印象である。塔跡2地区の瓦で、図面117-1・7、図面118-9～11・14、図面120-20・22～24・26は、掘込地業の版築土内から出土した。

7. 埴

埴は金堂地区、講堂地区、鐘楼地区、金堂・講堂間、中門地区、区画南辺・北辺・北西、塔跡2地区、塔跡2周辺地区の各地区で出土している。このうち遺存状況の比較的良好なものを抽出して、金堂で16点、講堂で22点、鐘楼で2点、金堂・講堂間で5点、中門で3点、区画南辺で1点、区画北辺で6点、区画北西で3点、塔跡2で5点、塔跡2周辺で1点の合計64点を図示したが、ここでは全地区を一括して報告す

る【第46～55表、図面121～133、図版25・26】。なお、昭和39～44年の調査では塔跡（塔跡1）で39点、鐘楼跡で2点、出土地不明162点を確認し、昭和31・33年度の調査では出土点数の報告は無い。

まず製作技法をみると、昭和31・33年の報告書では①粘土板平積み、②粘土板縦積み、③粘土塊充填、④一枚作りの4つの技法があり（日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会編1985）、昭和39～44年の報告書では①粘土紐詰め込み、②粘土板平積み、③粘土塊充填の3技法を確認し、このうち粘土塊充填技法による製品の多いことが述べられている（滝口1987）。昭和31・33年の②粘土板縦積みと、昭和39～44年の①粘土紐詰め込みが別の技法であるならば、武蔵国分寺出土の埴は合計で5種類の製作技法が存在することになるが、今次の調査では、明確に粘土板平積みと観察された製品は64点中の15点で、残りの49点は粘土塊充填（一部は1枚作りによる可能性のある製品を含む）と思われる。

次に規模・形態では、完形もしくは完形に近い講堂地区の出土品を例にとれば、長辺26.0～30.5cm、短辺15.0～16.8cm、厚さ5.3～7.5cmの長方形を基調としているが、厚みで7cmを超えるものは総体的に少なく、5～6cm台の厚みで、幅が15cm台後半～16cm台前半のものが主体といえる。また、31点が胎土中に白色針状物質を伴う南比金窯跡群産の製品であった。文字が確認されたものとしては全部で15点あり、金堂地区では「中」押印（4）、「父」押印（14）、「橘」ヘラ書き（16）の3点、講堂地区では「加」ヘラ書き（9・18）、「大里」ヘラ書き（19・21）、「父」ヘラ書き（10）、「瓦」ヘラ書き（13）の6点、中門地区では「父」ヘラ書き（1）と「加」ヘラ書き（3）の2点、区画南辺で「椽」押印（1）の1点、区画北辺で「父」ヘラ書き（1）と「埴」押印（6）の2点、塔跡2地区で「埴」押印（1）の1点であった。

8. 銭貨・金属製品・鉄滓・銅滓

(1) 銭貨【第56表、図面134、図版27】

銭貨は銘が不明なものを含めて18点出土し、全て図示した。調査面積の多寡にもよるが、金堂・講堂地区付近に密集する傾向があり、特に講堂で最も多く出土している。

1は平の字が潰れて見難いが、皇朝十二銭の一つ隆平永寶であろう。伽藍中樞地区区画施設一区画北西より出土した。武蔵国分寺出土の皇朝十二銭は、第80次調査（昭和53年度・福田1986※未報告）の表土から和同開珎が1枚、隆平永寶が第8次調査（昭和49年度・国分寺遺跡調査会1992）S149と第91次調査（昭和53年度・上敷領他1998）SI117より各1枚ずつ計3枚が知られているのみで、伽藍中樞域からは初めての出土例となった。

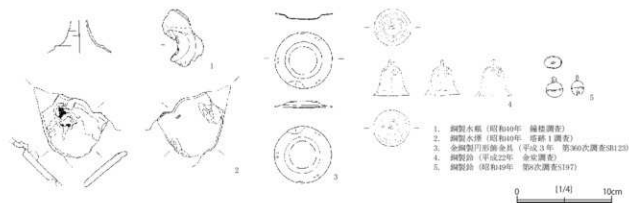
2～9は中世の渡来銭である（永井編1994・永井1996）。2は景德元寶で伽藍中樞地区区画施設一区画北辺から、3は明道元寶、4は嘉祐元寶、5は熙寧元寶、6は紹聖元寶、7は聖宋元寶のいずれも北宋銭で講堂から、8も北宋銭の宣和通寶で鐘楼から出土したものである。なお、図面134の下段には、昭和31・33年の調査で出土した1023年初鑄の天聖元寶と1086年初鑄の天祐通寶の2点の拓影図を再掲したが、区画北辺・鐘楼も含めて、講堂の周辺で北宋銭がまとまって出土していることが一目瞭然である。9は1408年初鑄の永樂通寶で、場所はやや離れて南門地区で出土した。

10～17は寛永通寶である（18は銭銘不明）。講堂で5枚、金堂で3枚、金堂・中門間で1枚が出土している。

(2) 金属製品【第57表、図面135・136、図版27・28】

出土した金属製品については、附着した泥土を落とした後でアルコール洗浄とX線透過撮影を行い、必要最小限の錆を除去した。近現代の丸釘や建具・屑鉄等は除いて、細片であっても可能な限り図化するように努め、結果的に28点を掲げた。

1～21は釘である。太さは1～2cm四方と様々で、端部が折損しているが太いものでも全長は約15cm位でそれ程大振りなものが少ない印象である。講堂で13点、金堂で4点、塔跡2で3点出土し、特定の堂塔に偏った出土傾向を示している。22は棒状の製品、23は先端が太く平たい鑿である。24は金堂から出土した、両端が緩く屈折し、幅が16cmほどの鍔である。25・26はともに講堂出土の板状製品で、26は刀子の



第24図 伽藍中樞域周辺出土の銅製品

柄の可能性がある。27は円盤状の製品を二つ折にしたもので、用途は不明。中門で出土した。建物本体に使用した釘類は散見されるものの、全体的に工具類が少ない。28は銅製の鈴である。金堂基壇西側4区表土中より出土したため、古代の所産であるか確証は持てない。高さ・径ともに4.0cm程の小型の鈴で、頂部は丸みを持ち、末広がりな断面「几」字状を呈する。鋳型により鋳造されたと思われるが、鋳型の合わせ目は見えず、身の裾部は研磨して平滑に仕上げられている。頭部には紐孔と、身の内面天井には舌の吊り下げ穴がそれぞれ1穴ずつ設けられているが、舌の錘自体は遺存しておらず、身の外面には縦方向に幾筋もの沈線状の窪みが走り、肩の部分には風化もしくは使用による摩滅の影響か穿孔が3箇所で認められた。その大きさや素朴な意匠から、建物の屋根先に吊るした風鐸や装飾性の高い密教法具というのではなく、何らかの仏具に関連する鈴であろうか。また、伽藍中樞及び周辺域出土の銅製品を第24図に掲げた。昭和40年の調査で鐘樓から水瓶と塔跡1から水煙が、平成3年の調査で中門西側から金銅製円形飾金具が出土している。さらに、僧尼寺中間地域の第8次調査SI97でも小形鈴の出土例がある。

(3) 鉄滓・銅滓【第58表、図面137～140、図版29～31】

武蔵国分寺では、僧尼寺中間地域（市立第四中学校周辺）で輪の羽口や鉄滓、埴輪転用土器等が多く出土していることから、当該地域を寺院の修繕を司る修理院に想定しているが（第3章1参照）、今次の調査においては伽藍の中樞域でも鍛冶に関連する遺物が認められている。

鉄滓・銅滓は出土した全点を図示した。1～12は上面がほぼ平坦で、底面の輪郭が曲線を描く椀形滓である。塔跡2地区で4点、中門地区で3点、講堂地区、南門地区、金堂・講堂間、区画北西でそれぞれ1点ずつ出土しており、数の多い塔跡2・中門あたりでは鍛冶作業が行われたことが想定される。特に、塔跡2地区では輪の羽口片も3点出土しているが、実際に耐えられない程の小片のため図は割愛した。2・3・10は完形、1・4～9は一部欠損している。全体的に酸化土砂・小礫の付着や錆跡の気泡が顕著であるが、肉眼観察では木炭や鍛造剥片等の付着物は明確に捉えられなかった。13～39は鉄滓である。やはり塔跡2地区で最も多く、18点が出土しており、金堂・講堂間、金堂地区、区画南辺で各2点、その他鐘樓、金堂・中門間、区画北辺で1点ずつ出土した。今回の整理作業では、強力磁石・金属探知機等を用いての含鉄調査や金属学的な分析を行っていないが、33・35・38等には他に比べて重量感があり、鉄塊の可能性が高い。一方、40～44は生焼け状の橙褐色粘土が付着し、椀形滓・鉄滓よりも軽量のため炉壁の一部を構成する部材と思われるが、このうち43は表面に僅かだが青緑色の銅粒が見え、後述する銅鋳物に關わる炉壁かもしれない。塔跡2・中門出土の椀形滓は径が7～10cmであるのに対して、他は4～6cm台と規模の様相に違いが認められるなど、2種の大きさの椀形滓や鉄塊の存在から、原料鉄を処理して鋼を製造する精錬と、鋼を加工する小鍛冶が主要伽藍の近傍で行われたようである（伊藤1998・佐々木他2002）。

44～69は銅滓で、出土した全てを図化した。全27点のうち、21点が金堂・講堂間、3点が講堂、金堂・

区画北西・区画南東で各1点ずつの内訳である。鉄滓が塔跡2・中門に集中するのに対して、銅滓は金堂・講堂間で多い傾向が顕著に示されている。但馬国分寺などでは、「鋳所解 申請荒炭事 合十龍 口鐸鋳料 景雲二(768)年四月二十五日 物部入鹿」の記載のある木簡が出土していることから、建物こそ特定はされていないものの国分寺に付随する施設に「鋳所」が存在し、その場所は火災除けのため塔や金堂など主要建物から離れた寺の隅に置かれたことが想定されているが(前岡2006)、武蔵国分寺の場合は、金堂や講堂に至近した位置で鋳造関連の遺物が発見されたことになる。五十嵐伸夫によれば、「古代の銅鋳物の生産工房は、銅鉱石の精錬の場とは別の場所に立地しているのが基本であり、精錬工程と鋳造工程の分業体制が、かなり確立していた可能性が高く、「鋳造工房は、需要者に近いところに設けられたと考えられるものも多く、それらは譚え的生产を基本にしていたと考えてよいであろう」と述べているように(五十嵐2002)、案外、主要堂塔とは距離を隔てない所にも、一時的に工房が存在した可能性があるのかもしれない。

9. 石製品(板碑・砥石)

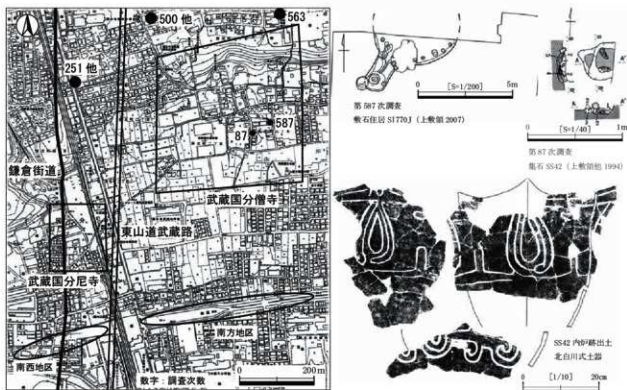
(1) 板碑【第59表、図面141、図版31】

国分寺市域の板碑は、かつて国分寺市史編纂に伴う調査で89基(うち紀年銘の残るものは57基)を確認していたが(岡田1986)、その後の発掘調査出土品や各種文献調査等によって、平成30年3月現在で所在の不確定なものを含めて概数124基を把握している(註)。ただ、その分布は恋ヶ窪魔寺跡や伝祥応寺跡等、鎌倉街道沿いの遺跡に多く、僧寺伽藍域周辺には殆ど存在していない傾向がある。

そのようななかで、今次の調査では秩父地方原産の緑泥片岩製の武蔵型板碑片が3点出土した。1は講堂地区、2は塔跡2地区、3は中門地区で出土するなど特定箇所にまとまることもなく、極めて散在的な分布状況で、本来の造立場所とはかけ離れている可能性が高いものと思われる。岡田芳郎によると、市域の板碑は紀年銘が判明する57基のうち14～15世紀代の板碑が全体の96%を超え、時期的傾向の大きな特徴であると指摘しており(岡田前掲)、武蔵国分寺の近傍で当該期の板碑の型式学的分析を行った深澤清幸の論考(深澤1996)に拠りながら、出土した3例を見てみたい。

1は2枚に折損しているが、頭部は三角形に尖り、二条線を設けている。主尊は葉研彫で阿弥陀如来(キリーク)を表現し、「カ」の先端には点を打たず、「ク」と思われる掘り込みを有している。深澤分類のB3類に相当するものと思われる。2は頭部を欠損しているものの、二条線が確認される。主尊は葉研彫で阿弥陀如来(キリーク)を表現し、外周には細い線で月輪を描く。「カ」の先端に点を打ち、「ラ」の跳ねは直線的である。蓮座は受座を葉研掘りで、蓮肉はやや扁平な円形に線刻で表現し、蓮座の下方にも何らかの線刻が見受けられる。深澤分類に照らすと主尊の表現はA8類に、右端の点状の葉研彫を受花中心花弁と左右の花弁間に入れた逆三角形の花弁と捉えれば、蓮座はI1類に近いであろうか。3は右端部の蓮座反花を線刻で表現している小片だが、深澤分類II類もしくはIII類に相当しよう。1～3は、いずれも紀年銘を欠く断片資料ばかりだが、B3類の主尊は1360～1390年頃、A8類の主尊とI1類の蓮座の組み合わせは深澤論考には無いが、いずれの型式も1390～1400年代に当たることになり、14世紀後半頃の板碑である可能性が考えられる。

〔注〕国分寺市では平成26年度から市内総合文化財調査を推進中で、平成28年末までに石造物分野の予備調査で把握している数値である(集計表は平成30年3月時点では未公開)。主として、以下9冊の文献資料に基づいて調査を行っている。高木閏五郎1976『石碑 石ほとけ かるた(国分寺市の巻)』/岡田芳朗他1986『国分寺市史 上巻』/東京都1979『東京都板碑所在目録(多摩分)』/福田信夫1997『武蔵国分尼寺跡IV』/東京都埋蔵文化財センター2005『国分寺市恋ヶ窪魔寺跡遺跡』(第171集)/国分寺市遺跡調査会2006『武蔵国分跡発掘調査概報33-北方地区・西国分寺駅東地区第一種市街地再開発事業に伴う調査-』/泉町遺跡調査会『恋ヶ窪堂址調査報告』(昭和46年調査、発行年明記無し)/鎌谷木三次1943『武蔵国分僧寺所蔵の板石塔婆とその出土地に就いて』『史蹟名勝天然記念物』第18集第10号/東京府1923『東京府史蹟勝地調査報告書第1冊「武蔵国分寺址の調査」』



第25図 僧寺伽藍域周辺における縄文時代の主要な調査地点と後期初頭の遺構・遺物

(2) 砥石【第60表、図面141、図版31】

砥石は出土した3点全てを掲げた。いずれも白灰色をした流紋岩製で、方柱状の形状から揚げ砥と思われる。1は塔跡2地区から出土し、戸口以外の4側面に砥面があり、3側面に櫛歯状の鑿痕が認められる。2も塔跡2から出土し、天地は欠損しているが、4側面を砥面として使用している。3は中門地区より出土したもので、2側面で砥面が確認される。

10. 縄文時代の遺物

(1) 土器【第61表、図面142、図版32】

縄文土器は、摩耗した小片が主体であるが総数127点が出土し、その内訳は金堂地区が8点、講堂地区が7点、鐘楼地区が39点、金堂・講堂間が5点、中門地区が4点、金堂・中門間が31点、南門地区が4点、区画施設南辺が5点、北西が3点、南東が2点、塔跡2地区が19点、金堂・中門の東側から鐘樓付近で多く出土している状況が判る。このうち、文様が明瞭な破片24点を抽出して図化した。

1は中期初頭五領ヶ台式の浅鉢で、口縁部内面に2本の隆帯を巡らせ、内外面に幅5mmの粘土紐による輪を貼り付けている。2は赤褐色の胎土で縦方向に隆帯を貼り、その両側に竹管状工具によって刺突文を施している。同じく中期初頭須賀式の深鉢胴部片と思われる。3～19・21は加曾利E式土器で、3がE1式、4・5がE3式、その他がE4式にそれぞれ比定される。3は胴部外面に2本の隆帯を縦に貼り、その脇に撫糸文を施す。4は肥厚する口縁部で、不鮮明ながらも口縁直下には単節RLの縄文が見られる。5も肉厚な口縁で、把手は欠損しているが、両耳付の壺であろう。6～19はいずれも深鉢である。胴部外面に沈線による区画を設け、単節縄文および刷り消して無紋帯を施している。21も加曾利E4式期のもので、口縁部上端に取り付く環状の耳の破片で、外側には単節LR縄文が認められる。20は文様要素は加曾利E4式に似るが、黒褐色の胎土を持ち、内面が膨れるほどの強い沈線を施すことから称名寺1式に比定されよう。22は波状の口縁部で、外面にはC字もしくはS字状に屈曲した太い沈線を横方向に巡らせ、内面にも横方向に

ハケ目状の調整痕がある。茶褐色の胎土を有し、北白川C式の特徴を備えている土器片である。23はそれより後出の堀ノ内1式で、胴部外面に4条の細い沈線が縦・斜め方向に描かれている。24は、一見して前期諸儀式の羽状縄文のようにも見られるが、不鮮明のため型式不明として扱っておく。

第2章2でも触れたように、東僧坊の東方近地では、下水道敷設工事に伴って実施した武蔵国分寺跡第87次調査(上敷領他1994)や、個人住宅建設に伴う第587次調査(上敷領2007)等でも中期末～後期初頭の住居跡・土坑を検出し、当該期の人的活動の様子が少しずつ垣間見えてきている(第25図)。近年、立川市向郷遺跡・国立市緑川東遺跡など、崖線を境に立地を異にする2つの縄文時代の集落遺跡では、中期末に唐突に一段低い段丘面へ住居が占地し始め、しかも敷石住居が点在する程度のムラとは呼び難い居住景観の実態が明らかとなりつつあり(黒尾2015)、武蔵国分寺跡の範囲と一部重畳して周知されている多喜窪遺跡周辺の縄文時代の動向についても、今後の調査の推移を見守っていく必要があるだろう。

(2) 石器【第62表、図面143、図版32】

石器は出土した全点を図化し、全部で8点を数える。1～3はいずれも円刃状の刃部を形成する打製石斧で、1・3が砂岩、2はホルンフェルス製と思われる。1は講堂地区、2・3は金堂・中門間で出土した。4は片岩製のやや扁平な棒状磨石で、下端部に研磨痕が認められる。5はホルンフェルス製の小形の石鐘で、頂部に袈りを入れ、下端は円形に刃部を作出している。6・7は砂岩製のスタンプ形石器である。6は両サイドを敲打により、7は研磨によりそれぞれ袈り部を整形し、底面が摩耗している。4～7はいずれも塔跡2地区より出土した。8は金堂地区で出土した、中央に楕円形状の窪みを持つ砂岩製の石皿で、側面～底面が欠損している。縄文土器が中期末～後期初頭が主体であるのに対して、早期の要素の強いスタンプ形石器が複数出土しているなど、土器に比べ石器の構成がやや古手の印象を持つが、真姿の池湧水群を囲む北方の国分寺崖線上では、武蔵国分寺跡第563次調査などで早期前半橋系文期の集落跡が広がっていることを確認しており、遺物自体が移動を伴っている可能性も考慮すべきかもしれない(第25図)。

〔注〕縄文土器については、府中市教育委員会の中山真治氏、国立ハンセン病資料館の黒尾和久氏、石器の石材については、国分寺市本多図書館の上敷領久氏からそれぞれご教示を賜った。

11. 文字瓦

平成15年度から平成24年度にかけての発掘調査で出土した瓦埴のうち、文字の刻印等が確認されたものは計1,573点を数える(うち埴は11点、朱書きや墨書は対象から外した)。この数字には、文字の部分的な痕跡しかない瓦片は含まれないため、出土総数自体はこれ以上のものとなる。また、文字瓦は当該年度の全ての調査区から出土するが、本書では建物地区(金堂地区・講堂地区・鐘樓地区・中門地区・塔跡1地区・塔跡2地区・南門地区)から出土した文字瓦埴1,110点のみを図化し掲載した。なお、堂間地区などの建物地区外から出土した文字瓦463点については、節末に補遺として、その概要を記す。

分類については、文字瓦はその記載方法によっていくつかの技法に大別される。本書では「押型」・「押印」・「へら書」・「模倣文字」の4種類に分類した。

「押型」は「型押」とも呼ばれる。瓦を製作する過程の中で粘土板を叩具で叩いて整形するが、その叩具に格子等の文様と共に文字を刻み、瓦に文字を記載する方法である。そのため押型は必ず凸面に刻印されることになる。叩具であるため、残存状態の良い瓦には同じ押型が複数残るものもあるが、本書ではその場合、一点として集計し、掲載する拓本もひとつのみとした。押型の多くが格子文様等の中に文字を配するが、文字のみで押印と判別が難しい押型も存在する。また、格子文様の一部を削り取るなど加工し文字を表した押型もある(松原1999)。押型で記される文字内容は郡名や郷名が主であるが、国名や寺院名を表したものも存在する。

「押印」は印章により瓦に文字を記載する方法である。角印に一字を配したものが一般的であるが、丸印、陰刻陽刻の別、印枠の形や有無、文字数(1字から4字)など様々である。押型と同じく、郡・郷名を表す

ものが主であるが、それ以外の文字や記号を記したものもある。本書では、竹管によるとみられる「○」の印もこの中に含めた。

「ヘラ書」は先の尖った木竹等の工具によって、文字を記載する方法である。手書きであることから、記される内容は他の記載方法より自由度が高く、郡・郷名の他にも人名や文書、戯画などがヘラ書で記される。本書では、記載方法の性格の類似性から「指書」もこの中に含めた。

瓦を製作する際に粘土板を模骨と呼ばれる木製の桶や台の上に乗せて整形する。その模骨自体に文字や記号が刻まれており、叩き締める成形過程の中で、瓦に文字等が写されるのが「模骨文字」である。現れる文字は陰陽あり、内容は記号やそれに近い文字が多いが、郡・郷名が記されたものもある。ただ、その刻字方法から文字の輪郭が不明瞭なものも多く、判読が難しい。

以上、4種類の他に鏡瓦や字瓦の「范」の中に文字を記したものがあり、別に取り上げた。

文字瓦に記された内容は、「人名」・「郡・郷名」・「文字」・「記号」の4種類の順に大別し、判読不能なものは「不明」とした。

「人名」は、氏や『戸主』『万呂]といった人名に併記される可能性のある文字を分類した。「郡・郷名」は、『和名類聚抄』等に記載される武蔵国の郡名及び郷名に使われる文字を分類した。郡・郷名は郡郷別の細別があるため、特に後述する。「文字」は、上記の二つの種類に入らなかったその他の文字を分類した。人名や郡・郷名以外の内容を記した文字、数を表す文字が主であるが、人名や郡・郷名の一部の可能性のあるものの分類できなかった文字もここに含まれる。「記号」は、文字として判別できず記号と見られるものを分類した。「不明」は、判別できなかった文字や、非常に断片的な文字を分類した。また文字瓦とは異なるが、「戯画瓦」と見られるものが数点出土しており、別に分類した。

郡名・郷名については、『和名類聚抄』に記載される武蔵国21郡と各郡に属する郷の名前で使用される文字を基に分類を行った(表16)。郡名のみが記載されているものを「郡名」、郷名のみのもを「郷名」、郡名及び郷名が両方記載されているものを「郡郷名」とした。分類に当たっては、先行研究を参考に、読みや字形の類似性も考慮し分類を行った。例えば、「玉」は読みの類似性から多磨郡に、「上」は賀美郡に、「中」は那珂郡に、「子」は兒玉郡に分類した。字形の類似性では、「命」は比企郡、「王」は多磨郡、「人」は入間郡に分類した。「×」はその多くを「父」と判別し秩父郡に分類したが、明白に直交するのは記号の「十」として分類した。また文字を郡・郷名に照らし合わせる際に、便宜的に分けざるをえない文字が多く存在する。特に一文字のみの文字瓦の場合は、複数の郡郷の候補がある場合が多い。例えば、「大」については全て大里郡に統一したが、郷名にも「(久良郡)・(兒玉郡)大井郷」・「(足立郡)大里郷」・「(入間郡)大家郷」・「(埴玉郡)大田郷」・「(男衾郡)大山郷」と複数の候補が存在する。また、「廣」は「(豊島郡)廣岡郷」・「(入間郡)廣瀬郷」・「(幡羅郡)廣澤郷」と3つの候補があるが、豊島郡廣岡郷で統一した。「大井」は久良郡と兒玉郡にそれぞれ大井郷があるが、兒玉郡に統一して分類した。「余戸」は武蔵国10郡で存在するため、郡郷名の分類の最後にまとめた。また、桶樹郡桶樹郷や幡羅郡幡羅郷のように、郡名と郷名が同じ場合もある。このような場合は郡名とした。

(1) 金堂地区【図面144～154】

金堂地区では350点の文字瓦が確認された。特筆すべきはヘラ書「造塔」(1)が1点出土したことである。「造塔」のヘラ書は、これまでも武蔵国分寺跡にて複数例が報告されている(上原1933a、原田1954、大川1958)。今回発見されたものも、これまでに報告されたものと筆跡が類似しており、同一の人間により書かれた可能性がある。後述する模骨文字「造塔」と違い、金堂地区で発見されているが、大川清氏が報告した「造塔」も講北(講堂址北)で発見されており、僅かな事例からではあるが、同じ「造塔」の文字瓦もヘラ書と模骨文字の違いにより、発見場所が異なる傾向が読み取れる。

人名は3点発見され「戸主大田部子」(2)、「遅部多称万」(3)、「戸主□□」(4)と判読した。3は先行研究の例からすると、「宇遅部多称万呂」という人名になる可能性が考えられる。

郡・郷名の文字瓦は287点を数える。新座郡と久良郡を除く全ての郡名が確認された。特に佐原郡に属す

表 16 郡別文字分類一覧

郡名	文字	郡名	文字	郡名	文字	郡名	文字	郡名	文字	郡名	文字							
多磨郡 (多摩) (多摩)	多 玉 王 多 下	小川	小川	豊島郡 嶋 豊 島	日頭	日頭、日	男 会 郡 男	横津	—	横 原 郡 (横原)	横 原	—						
		川口	川口瓦印、川		古方(白方)	豊白方		鎌倉	—		鎌倉	—						
		小橋	—		荒島	荒		郡家	—		郡家	—						
		小野	—		湯島	湯島、湯嶋		多富(多留)	—		多富(多留)	—						
		新田(尔太)	尔太、尔		廣岡	廣、廣瓦		川原(川面)	—		川原(川面)	—						
		小島	—		余戸	—		幡々(幡)	—		幡々(幡)	—						
		海田	海田		駅家	—		大山	—		大山	—						
		石津	石津瓦印		福津	—		中村	—		中村	—						
		狛江	—		殖田	—		上妻	—		上妻	—						
		勢田	—		植直	—		下妻	下		下妻	—						
郡家郡 郡	郡	余戸	—	足立郡 足 安	郡家	—	横 原 郡 (横原)	横 原	—	横 原 郡 (横原)	横 原	—						
		店屋	—		大里	—		彦原	—		彦原	—						
		駅家	—		余戸	—		幡原	—		幡原	—						
		立野	郡立、立		泉度	—		那珂	那中、那中瓦		那珂	—						
		針坂	—		新原郡 (新原)	志水(志未)		—	常見		—	常見	—					
		高輪	—			余戸		—	余戸		—	余戸	—					
		幡原	—			麻羽		—	新居		—	新居	—					
		久良郡 久	久			鮎浦		—	入間郡 入 入 入 入 入 入 入 入 入 入		大家	入大家、入大、大家、家	横 原 郡 横	横 原	—	横 原 郡 横	横 原	—
						大井		—			郡家	—		郡形	—		郡形	—
						服田		—			高尾	—		藤田	—		藤田	—
星川	—			安刀		—	余戸	—		余戸	—							
郡家	—			山田		—	廣瀬	—		廣瀬	—							
諸岡	—			余戸		—	高尾	—		高尾	—							
州名	—			比企		—	上総	—		上総	—							
良橋	—			比企郡 比 企 比	郡家	—	高 原 郡 高	郡家		—	高 原 郡 高	郡家		—	高 原 郡 高		郡家	—
高田	—				清後	—		高尾		—		高尾		—				
橋根	—				郡家	—		幡原		—		幡原		—				
御宅	—	高生	—		高生	—		高生	—									
黒守	—	御坂	—		御坂	—		御坂	—									
駅家	—	余戸	—		余戸	—		余戸	—									
佐原郡 佐	佐	満田	満田		横見郡 横 見	大田(太田)		大田、太	那 珂 郡 那 珂	那 珂		—	那 珂 郡 那 珂	那 珂		—		
		田本	—			笠原		—		中澤		—		中澤		—		
		満田	—			草原(菅原)		草瓦、草		水保		水		水保		—		
		佐原	—			埼玉		—		弘紀		—		弘紀		—		
		覺志	—	埼玉		—	巨吾	—		巨吾	—							
		御田(美田)	—	埼玉		—	上野(上科)	—		上野(上科)	—							
		木田	木田、木木田、木	埼玉		—	吉吉	—		吉吉	—							
		板田	—	埼玉		—	丹田	—		丹田	—							
		駅家	—	埼玉		—	中村	—		中村	—							
		余戸	—	埼玉		—	余戸	—		余戸	—							

※郡・郷名の表記は『和名類聚抄郡郷里驛名考證』(池邊 1981)による。

るものが72点と最も多く突出している。次いで秩父郡43点と非常に多く、多磨郡・豊島郡・大里郡が20点前後、確認されている。

郡・郷名で特筆すべきものとして、多磨郡では4字を配した「川口瓦印」(14)と「□□瓦印」(15)がある。15は『武蔵国分寺古瓦磚文字考』(以下、『文字考』)に掲載された「郡・郷名瓦磚図版四八(249)」の「石津瓦印」の印影と酷似することから、石津瓦印であると判読した(大川1958)。また、新田郷のへら書(19・20)と海田郷のへら書(21・22)があるが、この両郷は金堂地区でのみ発見されている。

佐原郡の金堂地区における点数の多さは上述したが、特に押型「佐」が多く、半数以上(59点中30点)が金堂地区で確認されている。確認される押型も斜格子文様下部の三角形の空白部分に「佐」を配置したものが29点と大多数を占める。また、佐原郡木田郷と関連付けられるへら書(103～109)も7点確認されている。54は、凸面に押型「佐」があるが、凹面にはへら書「人」(147)が記されている。「人」は字形の類似から入間郡に分類したが、147の場合はそのまま「人」と読み、人名やその他の文字列の一字である可能性も考えられる。

豊島郡では、他の地区でも複数例見られるが、押印「豊」で印枠が鉤括弧状になっているものが金堂地区で6点見ついている(110～116)。当初は、四角い印枠の一部が押し損じで写されなかったものと考えたが、同様の例が複数例見つかったことから、鉤括弧状の印枠であると判断した。また、ヘラ書「豊白方」(128)について、『文字考』「豊島郡の郷名について」の節中で、「白方」が「占方郷」を示すことが述べられているが(大川1958)、この「豊」を伴った「白方」が確認されたことによって、この節を裏付けることができた。

埼玉郡では、草原郷を記載した押印「草瓦」が3点発見されている(170～172)。金堂地区のみで確認された押印で、各印の字形は酷似し、印影は僅かずつ違いが見られるが同一の印であると思われる。

男会郡について、『武蔵国分寺跡遺物整理報告書一昭和31・33年度一』(日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会編1985)や『武蔵国分寺の研究』(石村1960)で「狛」の逆字とし、『文字考』(大川1958)では不明とされるものと同じと思われる200の押印を、本書では字形が「男」の金文と類似することから男会郡に分類した。狛江郡の可能性も高いが、この押印の解釈の一案として提示したい。

幡羅郡では、幡羅郡那珂郷を記したと考えられる押印「幡中」が3点確認されているが、この押印は金堂地区でのみ発見された(211～213)。

(2) 講堂地区【図面155～164】

講堂地区では326点の文字瓦が確認された。講堂地区では、明白に人名と判別できる文字瓦は確認されなかった。

郡・郷名の文字瓦は250点を数える。新座郡を除く全ての郡名が確認された。秩父郡が45点と最多で、次いで荏原郡が27点、豊島郡・大里郡・那珂郡が20点前後、確認された。荏原郡を除けば、出土傾向は金堂地区と非常に類似する。

郡・郷名で特筆すべきものとして、多磨郡では宇瓦の瓦当面に范の中に組み込まれた「多」(348)、金堂地区で確認されたものと同じ印影の「川口瓦印」(355)がある。354は一見すると「死」に読めるが、本書では「夕下」とし判じ「多磨郡下」を示すとして多磨郡に分類した。この「多下」の押印については、深沢靖幸氏が論じている(深澤2002)。模骨文字「多」(362)は、陰刻の模骨文字という珍しい例であり、中門地区でも確認されている(717)。記号的なものが多い模骨文字の中では、後述する「廣」と同じく、明らかに郡・郷名に関連付けられる例である。

荏原郡では、金堂地区で大量に確認された斜格子下に「荏」を配置した押型は、講堂地区では5点のみであった。また、金堂地区と同様に荏原郡木田郷のヘラ書が5点確認された(397～401)。

豊島郡では、豊島郡廣岡郷(前述のとおり他郷の可能性もある)を表すと考えられる模骨文字による逆字の「廣」が4点確認されており、この模骨文字は今回の調査では講堂地区でのみ発見された。

入間郡では、押印とヘラ書を組み合わせて「入麻」を記したものがある(434)。また、入間郡大家郷を示す押印やヘラ書が4点確認された。大家郷の文字瓦は他に中門地区で2点確認されたのみである。

大里郡では、「大里」の2字が陽刻されたものが4点確認された(460～463)。一見したところ全て押型に見えるが、460以外は全て凹面に印刻されている。そのため、460のみを押型とし、他は押印と分類した。文字埠でも「大里」の2字がヘラ書されているものが2点発見された(1101～1102)。

幡羅郡を表す押印「播瓦」が3点確認されたが、「播」が陽刻で「瓦」が陰刻となる珍しい押印である。同様の印影を持つものが、塔跡1地区で1点確認された(947)。

賀美郡では、押型「加」の逆字が3点、押型「加美」が1点確認された。文字埠にも、それぞれが類似するヘラ書「加」が3点確認された。「加」の文字は、講堂地区で多く見られる傾向がある。

那珂郡を示すものとしては「中」の字が全体的に多く出土するが、講堂地区では押印やヘラ書による「那珂」のそれぞれの文字や「那瓦」が確認された(529～533)。「那珂」の文字は、押印「那瓦」(529)と同じものが塔跡1地区で1点確認されたのみである(955)。

(3) 鐘樓地区【図面165】

鐘樓地区で確認された文字瓦は38点のみである。金堂地区や講堂地区、中門地区と比べると非常に少な

い。鐘楼地区では昭和40年度に建物範囲全面に対して調査が行われたが、文字瓦の出土報告はない(滝口1987)。鐘楼地区では文字瓦の使用は少なかったと言わざるをえない。

ただし点数は少ないが、そのうち郡・郷名が30点と全体の大部分を占める。武蔵国21郡中15郡の郡名が確認できるなど、文字瓦の種類は多岐に渡っている。荏原郡が7点と最も多く、続いて秩父郡5点、幡羅郡4点の順に続く。

(4) 中門地区【図面166～170】

中門地区では217点の文字瓦が確認された。金堂地区・講堂地区に次いで多い数である。中門地区でも人名瓦と考えられる文字は発見されなかった。郡・郷名については173点を数え、新座郡を除く全ての郡名が確認された。豊島郡が27点と最も多く、次いで都筑郡22点、多磨郡・荏原郡・秩父郡がそれぞれ14点という順である。

特筆すべきものとしては、都筑郡立野郷を記したと考えられるヘラ書「都立」があげられる。ヘラ書「都立」は必ず端面に記される傾向があり、金堂地区や講堂地区では確認されない。中門地区では、端面に記された「都立」及びその可能性がある「都」「立」の文字が6点確認され(736～741)、他の地区では塔跡1地区で2点(930・931)、塔跡2地区で1点(1000)確認された。

762は残存する印影が部分的ではあるが、『文字考』(大川1958)に掲載される豊島郡湯島瓦の押印(「郡・郷名瓦埴図版四二」、図版220)と一致するので、豊島郡湯島郷に分類した。しかしながら、この瓦には凸面に秩父郡に分類される押型「父」(864)が押される。金堂地区の項で記述した押型「荏」とヘラ書「人」との組み合わせとは異なり、この例では明らかに同一の瓦に異なる郡が併記されたことになる。意図的に「豊島郡湯島郷」と「秩父郡」を併記したものか、あるいは造瓦の過程で使用される押型あるいは押印のどちらかが誤って押されたものなのか、判断することは困難である。

ヘラ書「知瓦」(875)は、瓦の負担体系を巡る「知識説」と「貢進説」の論争(上原1989、山路2005など)において、「知識」との関連性を示唆する文字瓦である。ヘラ書「知瓦」については有吉重蔵氏が、尼寺跡で「知瓦」とヘラ書きされた男瓦が出土し、これが「知識物」である可能性は否定されるものではないことを言及した(有吉2001)。しかしながら、知識物を記載するのであれば、瓦を寄進した個人名を記載するのが適当であり、「知識物であること」だけを明示する必然性がない。また、今回の一連の調査でも「知瓦」の出土は一例だけであり、この例だけをして知識説の根拠とするのは、少々無理がある。「秩父」の訓み下し「知々夫」であることから、本書では「知瓦」は「秩父郡」を表すものとして分類した。

(5) 塔跡1地区【図面171・172】

塔跡1地区では50点の文字瓦が確認された。この出土数は、次に述べる塔跡2地区と比べると半分以下の数である。しかし今回の一連の発掘調査において塔跡1地区は、塔跡2地区の東トレンチを延長した狭小な範囲のみを対象としており、出土数の少なさはこのことに起因すると考えられる。

他の建物地区にはない傾向としては、塔跡1地区では模骨文字が1点も確認されなかったことがあげられる。ただし昭和39～44年度の調査では、模骨文字「上」・「王」・「多」などが複数点出土したので(滝口1987)、塔跡1地区で模骨文字が存在しないとはいえない。しかしながら後述する塔跡2地区では、模骨文字「造塔」を始めとして多くの模骨文字が確認されているので、模骨文字の少なさは塔跡1地区の特徴のひとつといえる。

郡・郷名のものが39点と全体の多数を占める。確認できる郡・郷名は、武蔵野国21郡中13郡。多い郡は多磨郡が6点、都筑郡と橘樹郡が5点、幡羅郡と秩父郡が4点となる。特徴的なものとしては、押型「橋」(木偏に「商」)があげられる。押型「橋」は塔跡1地区では5点出土したが(932～936)、他地区では塔跡2地区で3点(1002～1004)、非常に断片的なものが金堂地区で1点見つかったのみである(36)。この押型「橋」は塔跡地区で特に出土する傾向にあると言える。塔跡地区については、『続日本後紀』に前男倉部大領壬生吉志福正が七重塔の再建を願い出て許可された記述があるので、男倉部の文字瓦の出土状況に関心が向く。しかし塔跡1地区では、男倉部の文字瓦は押印「男」が1点確認されたのみである(945)。

(6) 塔跡2地区【図面173～176】

塔跡2地区では、126点の文字瓦が確認された。塔跡2地区で何より特筆すべきは、模骨文字「造塔」（逆字）である。今回の一連の調査では、模骨文字「造塔」と判別された文字瓦が合計67点出土したが、本書では比較的残存状況が良好な21点を掲載した（973～993）。これまで模骨文字「造塔」については、『文字考』の中で押印「造」（「爾余の瓦埴文字・記号図版一」図版番号1）として、1字が掲載されたのみで（大川1958）、「造塔」としての報告は今回の調査が初めてとなる。へら書「造塔」は金堂地区で発見されたが、模骨文字「造塔」は塔跡2地区でのみ確認され、塔跡1地区では出土しない。造瓦の過程を考えると、模骨（型）自体に「造塔」の文字が刻まれたということは、少なくともその模骨から造られた瓦は、塔専用であることを示すと考えられる。模骨文字「造塔」は、上述した『続日本後紀』の七重塔再建の記述との関連性を示唆する文字瓦である。

人名の文字瓦も2点確認されている。971は『口原部花万呂』と判読し、姓の一部と名の部分であると考えられる。972は『口久万呂』と判読し、名の一部または全体であると考えられる。いずれの人名瓦も、断片的な資料であり、全体は不明である。

郡・郷名については72点の文字瓦が確認された。確認される郡は武蔵国21郡中16郡。新座郡・高麗郡・横見郡・男衾郡・幡羅郡の5郡が確認されていない。点数は多い順に見玉郡20点、秩父郡9点、大里郡7点、豊島郡6点、荏原郡5点となる。塔跡2地区の特徴のひとつは、模骨文字の多さである。郡・郷名でも75点中25点が模骨文字である。模骨文字は記号的なものも多く、最も多い模骨文字「井」は見玉郡大井郷に分類しているが、必ずしも大井郷を指し示す文字瓦なのかどうか定かではない。しかし模骨文字以外でも押印「見玉」が3点（1033～1035）、へら書「子」が6点確認され（1036～1041）、塔跡2地区は見玉郡の文字瓦が多く確認される地区であることがわかる。

(7) 南門地区【図面176】

南門地区ではわずかに3点の文字瓦が確認されたのみである。全て押型で、「多」・「荏原」・「荏」がそれぞれ1点ずつ出土した。昭和33年度の調査でも南門址からは、文字瓦の報告例はない（日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会編1985）。

文字瓦の分析と考察

(1) 武蔵国分寺の文字瓦の研究史 武蔵国分寺の文字瓦は江戸時代から知られており、『武蔵野話』、『江戸名所図会』、『新編武蔵風土記稿』などにも登場する。その研究の始まりも古く、すでに明治・大正時代には篠原市之助氏や、沼田頼輔氏・住田正一氏が武蔵国分寺の文字瓦の年代やその性格などについて論じている（篠原1898、沼田1901、住田1917など）。大正12年（1923）5月には稲村垣元氏と後藤守一氏による『東京府史蹟勝地調査報告』第一冊「武蔵国分寺址の調査」が刊行され、多くの文字瓦が図版をもって報告されたことで、それまでの武蔵国分寺の文字瓦の総括となった（稲村・後藤1923）。昭和に入っても数々の研究者が文字瓦について論じているが、中でも昭和13年刊行の角田文衛氏編『国分寺の研究』で宮崎礼氏が執筆した「武蔵国分寺」の項は、それまで多かった断片的・紹介的な論文とは異なり、武蔵国分寺の文字瓦をまとまった形で考察した画期的なものである（宮崎1938）。そして昭和33年に大川清氏による『武蔵国分寺古瓦埴文字考』（大川1958）、昭和35年に石村喜英氏による『武蔵国分寺の研究』（石村1960）という、武蔵国分寺の包括的な文字瓦研究では指標となる2つの論書が相次いで刊行された。そして武蔵国分寺の文字瓦研究は、端的に言えば「誰が」「なぜ」瓦に文字を記したのか？、つまり「造瓦組織の解明」と「瓦の負担体系の解明（知識説と貢進説）」を論点に、多くの研究者によって展開された（ex. 宇野1968、石村1969、大川1972、上原1989、鈴木1992、山路2005、井上2017など）。

武蔵国分寺の発掘調査が始まるのは、日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会が昭和31・33年に実施した学術調査からである。武蔵国分寺の文字瓦研究は、本格的な発掘調査が開始される頃にはすでにかんがりの進展していたが、それら研究の原資料は個人や国分寺、博物館などが所蔵する表採資料であった。その後、

昭和39～44年度にかけて行われた緊急調査と、昭和49年の国分寺市遺跡調査会設立から断続的に行われた発掘調査により、多くの発掘調査資料が得られた。また南多摩窯跡群や南比企窯跡群など国分寺の瓦を生産した窯跡でも新たな発掘調査が行われた。これら発掘調査により得られた資料に基づいた代表的な研究は、有吉重蔵氏が武蔵国分寺と窯跡から出土した瓦の整理分析を行い、軒先瓦・文字瓦の創建期から再建期に至る変遷を明らかにした研究があげられる(有吉2001)。

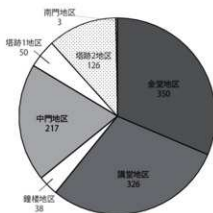
(2) 各分類別の傾向 各建物地区別の出土数は、上述したとおり金堂地区350点、講堂地区326点、鐘楼地区38点、中門地区217点、塔跡1地区50点、塔跡2地区126点、南門地区3点となる。無論、調査面積の違いもあるが、伽藍中枢部内の特に金堂地区・講堂地区から多く文字瓦が出土する傾向にあることが分かる(第26図)。

文字瓦の記載方法については、へら書が最も多く462点、続いて押印404点、模骨文字133点、押型111点、笮2点となる(第27図-記載方法別)。この結果を単純に判断すると、へら書が最も一般的な文字瓦の記載方法と受け取れるが、へら書は郡・郷名以外にも人名やその他の文字列に使用されるため絶対的な文字数が多く、破片としての資料が多い文字瓦では、結果的に点数が多く検出されることになる。ひとつの印で記載が完結する押印がへら書と同数近く出土することから、押印が最も一般的な記載方法と考えるのが妥当であろう。

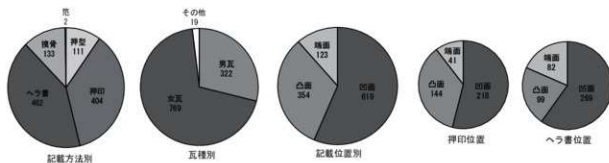
瓦の種別については、女瓦が769点、男瓦は322点、その他の瓦埴(宇瓦・鍔瓦・隅切瓦・埴・のし瓦)は19点を数え、女瓦・男瓦以外の文字瓦はわずかに全体の1.7%に過ぎない(第27図-瓦種別)。この割合からすると、宇瓦や鍔瓦等に文字を記載することは、非常に例外的な行為だったと言わざるをえない。女瓦と男瓦の文字瓦の比率は、女瓦が7割近くを占め、男瓦が残りの約3割を占める。特に記載方法別の要素も加えると、押型が全て女瓦(1点宇瓦を含む)、模骨文字もほぼ全て女瓦(男瓦は2点のみ)という傾向が出てくる。

文字の位置については、凹面が619点、凸面が354点、端面が123点となる(第27図-記載位置)。なお、笮や埴の位置については、これらの数字から除外している。割合にすると凹面5割強、凸面3割、端面1割程度となる。押型は必ず凸面に、模骨文字は必ず凹面に記載されるので、押印のみの位置別の割合をみると、凹面5割強、凸面3割強、端面1割と全体での割合にはほぼ一致する(第27図-押印位置)。へら書のみの位置別の割合をみると、凹面6割、凸面2割、端面2割と凸面の割合が減少し、凹面と端面の割合が若干増加する(第27図-へら書位置)。

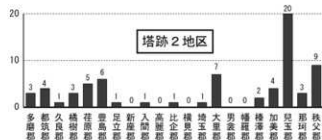
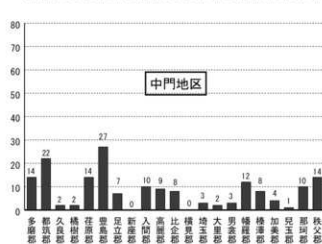
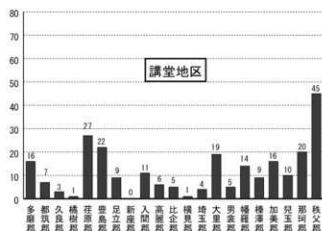
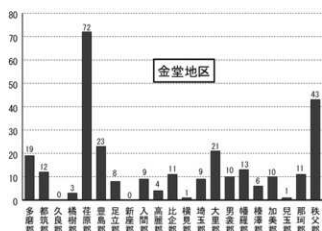
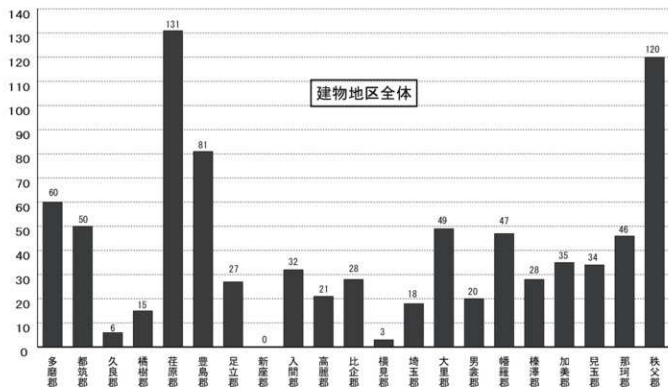
以上のことを合せて考えると、武蔵国分寺での文字瓦は、女瓦の凹面に押印を用いて記されるのが最も一般的な仕様であると考えられる。へら書を施す場合も、女瓦の凹面が選択される場合が多い。端面に記載する必要がある場合は、基本的にはへら書を用いるが、押印の中には端面専用と思われる非常に小さな「在」(ex. 87～93)や「中」(ex. 236～241)などの押印がみられる。



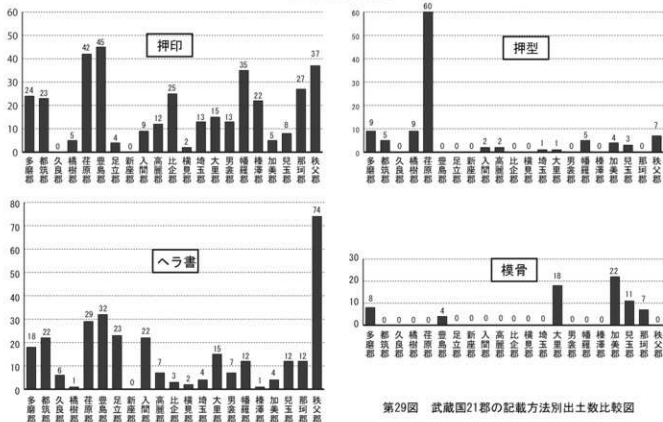
第26図 建物地区別出土数比較図



第27図 各分類別出土数比較図



第28図 武蔵国21郡の建物地区別出土数比較図



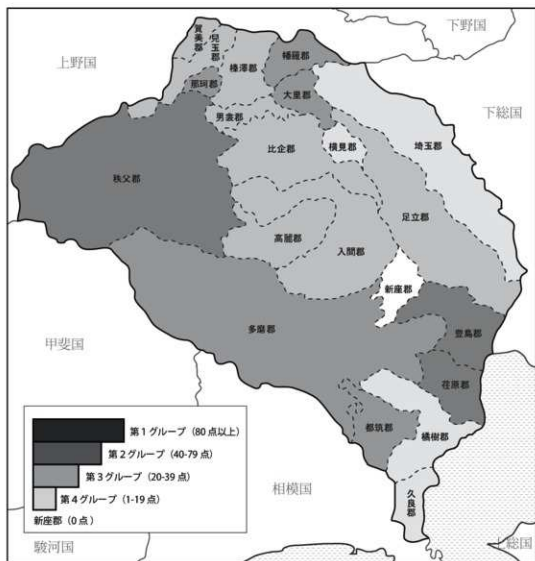
第29図 武蔵国21郡の記載方法別出土数比較図

文字瓦の内容については、建物地区から出土した文字瓦全1110点中、郡・郷名を記したものが854点、人名が6点、その他の文字が128点、記号が36点、戯画瓦と見られるものが6点、不明が80点となる。郡・郷名を記した文字瓦が全体の77%に達する。このように今回の一連の調査で確認された文字瓦の大部分が郡・郷名に関連するものである。建物地区ごとの特徴は上述したとおりであるが、ここでは全体としての考察を行いたい。

(3) 郡・郷名の文字瓦 まず平成15～24年度の発掘調査で出土した郡・郷名の文字瓦について考察を行うにあたり、いくつかの前提を確認する。まず冒頭にも述べたように、郡・郷名の分類基準は確定的なものではなく、便宜的なものであること。実際には郡・郷名を示さない文字、違う郡・郷を示した文字も各分類には含まれる可能性が多分にある。しかしながら、これらは分析結果を大きく変えるほどの量ではなく、大勢には影響しないと考える。次に出土状況について、その大半の文字瓦が以前の調査の瓦溜・埋戻土・表土・攪乱等から出土したこと。つまり廃棄された時点における原位置を保っていない可能性がある。ただこれも全体や建物地区ごとの大きな傾向としては、影響は少ないと思われる。最後に文字瓦の年代について、今回は一括して扱っていること。武蔵国分寺の変遷は、8世紀後半代から始まる創建期(第1期)、塔再建(上限845年)を中心とする整備拡充期(第2期)、10世紀～11世紀代の衰退期(第3期)に分けられる(第3章1参照)。各時期で武蔵国各郡の武蔵国分寺への関わり方も一様ではなかったと考えられるが、筆者の浅学さゆえ、基本的には今回の考察対象からは除外した。

建物地区全体から出土した郡・郷名の文字瓦854点のうち、どの郷に属するのか判らない「余戸郷」3点を除く851点の傾向をみてみたい。すると最も多いのが佐原郡の131点、次が秩父郡の120点、豊島郡81点、多磨郡60点という順になる(第28図-建物地区全体)。

数量として突出して多い佐原郡と秩父郡について、その理由を探るために記載方法ごとの分類を検討すると、佐原郡については押型「荏」が他を圧倒して多いのが判る(第29図-押型)。不明の押型3点を除く、押型全108点のうち半数以上の60点が佐原郡の押型である。他郡は多磨郡と榑澤郡がそれぞれ9点、秩父郡が7点、幡羅郡が5点と一桁台を数えるに過ぎない。この押型「荏」についてはすでに述べたように、金堂地区で最も多く、中でも斜格子文様下部の三角形の空白部分に「荏」を施した押型が目立ち、塔跡1地区を除く、全ての建物地区で確認された。特に金堂地区におけるこの押型「荏」は、残存率の良いものが多



第30図 武蔵国 21郡の出土数別分布図

く、一個体に多くの文字瓦が確認できるものが多い。例えば、48では10か所、38では8か所、39では7か所の押型「苴」が確認できる。もちろん叩具で叩き締める際に記されるものなので、複数の押型があるのは当然であるが、他の押型では一個体で確認できる数はせいぜい2か所である。押型「苴」はその数もさることながら、遺存状態が良いものが多いことが窺える。この押型については、有吉重蔵氏が作成した「武蔵国分寺跡軒先瓦・文字瓦変遷図」によると整備拡充期（第Ⅱ期）に属する（有吉 2001）。このことは、とりわけ整備拡充期（第Ⅱ期）の伽藍中核部における苴原郡の関わりの大きさを意味すると考えることも出来よう。なお、苴原郡の文字瓦が多出することは古くから指摘されており、1950年代に既に織戸市郎氏が苴原郡の文字瓦が出土量において他郡を圧倒すること、寺址の中心部で量と種類が豊富に採集されることを述べており（織戸 1952）、今回の一連の発掘調査でもそのことを裏付けたことになる。

秩父郡については、ヘラ書「父」が圧倒的に多い（第29図ヘラ書）。これは分類上、秩父郡の「父」と記号の「+」の線引きが難しく、記号「+」がヘラ書「父」の分類に一定数含まれる可能性も考えられる。ただ、それを考慮してもヘラ書「父」の数は突出しており、また押印でも秩父郡は37点と豊島郡45点、苴原郡42点に次ぐ数を示し、押印自体の種類も多様である。秩父郡については、井上翔氏が国分寺造営に技術力や財力ではなく、労働力を提供することで協力したと指摘しており（井上 2017b）、秩父郡の関わりの大きさが窺える。

建物地区全体で出土した郡・郷名の文字瓦を一点も出土しなかった新座郡を別にして、出土数に応じて4つのグループに分けると下記ようになる。最も出土数が多い第1グループ（出土数80点以上）が苴原郡・

豊島郡・秩父郡の3郡。次に多い第2グループ（出土数40～79点）が多磨郡・都筑郡・大里郡・幡羅郡・那珂郡の5郡。平均的な第3グループ（出土数20～39点）が足立郡・入間郡・高麗郡・比企郡・男会郡・榛澤郡・賀美郡・児玉郡の8郡。数が少ない第4グループ（出土数1～19点）が久良郡・橋樹郡・横見郡・埼玉郡の4郡。それを武蔵国の地図に落とすと第30図のような分布になる。この分布図からは大きな傾向としては、国府・国分寺のある多磨郡を挟んだ隣接する東西の郡の文字瓦の出土数が多い傾向が見てとれる。また、秩父郡と那珂郡を除く第1・2グループの6郡には、東山道武蔵路や東海道及びその支路が通る（第7図参照）。武蔵国分寺の造営において、基本的に瓦は各郡よりその財政に応じて貢進されたと仮定した場合、この分布図は当時の武蔵国各郡の人口や経済状況を示し、「道」が通る郡が発展したと考えられないだろうか。

（4）塔跡1地区と塔跡2地区出土の文字瓦 塔跡1地区と塔跡2地区の出土状況は上述したとおりであるが、今回の一連の発掘調査では、二つの地区の調査対象面積に隔たりがあり、単純に内容同士を比較することができない。そこで塔跡1地区については、昭和39・40年の発掘調査の資料を合わせて参照することが有効である。

当時の調査では、「塔跡」（現在の塔跡1地区）から人名文字瓦8点、郡・郷名文字瓦260点、その他の文字瓦及び記号が69点、合計337点の文字瓦が出土したと報告がある（滝口1987）。当時の調査でも、模骨文字「造塔」は塔跡1地区では確認されなかった。郡・郷名については、調査報告の中で別表としてまとめられている押印・押型185点（内1点は内容不明のため除外）とへら書20点の合計204点を抽出した。なお、模骨文字については、塔跡のもの出土位置不明のものが一緒に記載されているため除外した。

すると他の建物地区とは異なる傾向を示すことが分かった。今回の一連の発掘調査では、第4グループに属する橋樹郡が32点と最も多く、さらに第3グループに属する男会郡も23点と非常に出土数が多い。今回の一連の発掘調査では、建物地区全体でも橋樹郡は15点（内5点は塔跡1地区）、男会郡は20点しか出土していない。男会郡については、前述したように『続日本後記』にある前男会郡大領壬生吉志福正が七重塔の再建を願い出て許可された記述があるが、橋樹郡と塔の建立あるいは再建との関連を示す資料はこれまでのところ確認されていない。

塔跡1地区で多く出土する橋樹郡と男会郡の文字瓦。塔跡2地区でのみ出土し、造塔のためだけに作られたと考えられる模骨文字「造塔」。この二つの塔跡では、伽藍中樞部内での文字瓦とは明らかに違う傾向があることが分かる。このようなデータが七重塔再建をめぐる諸説とどのように繋がってくるのか、今後さらなる検討が必要である。

文字瓦のまとめ

今回の一連の発掘調査で出土した文字瓦の分析によって、郡・郷名の文字瓦は建物地区ごとに、異なる傾向を示すことが明らかになった。特に伽藍中樞部内の金堂地区・講堂地区・中門地区は比較的類似する傾向を示すのに対して、塔跡1地区・塔跡2地区などは中樞部内とは異なる傾向を示すことが分かった。

また武蔵国21郡についても、新座郡を除く全ての郡の文字瓦が存在するものの、それぞれの出土量に大きな違いがあることが明らかになった。新座郡の文字瓦は今回の一連の発掘調査でも一点も出土しなかったことから、武蔵国分寺の造営が、新座郡が建郡された天平宝字二年（758）には完了あるいは完了に近かったと論じた宮崎礼氏の考えがいまだ有効であることを裏付けた（宮崎1938）。ただ量の多寡はあれど、全部が等しく造瓦を負担しているにもかかわらず、整備拡充期（Ⅱ期）以降も新座郡が登場しないことには疑問が残る。『東京府史蹟勝地調査報告』では新座郡の郷の文字瓦はある旨の記述があり（具体的には不明）（稲村・後藤1923）、昭和39・40年の発掘調査で塔跡からへら書「新？」が報告ある（第56図423、滝口1987）。これらのことから、武蔵国分寺の造営への新座郡の関与もゼロではなかった可能性が考えられる。

今回は主に建物地区間での郡・郷名文字瓦の出土数の比較を主眼にまとめた。創建期（Ⅰ期）や整備拡充期（Ⅱ期）などの年代ごとの様相の変化や各窯跡出土の文字瓦との比較など、より複層的・多角的な観点からの検討が今後の課題である。

【補遺】 建物地区外の文字瓦について

建物地区外（堂間地区（中門・金堂間）・（金堂・講堂間）、（伽藍中樞部区画施設）区西南辺・区西南東・区西北辺・区画北西・区画南西、塔跡2周辺地区）からは、前述したように463点の文字瓦が出土している。内訳としては、堂間地区（中門・金堂間）が21点、同（金堂・講堂間）が150点、（伽藍中樞部区画施設）区西南辺が97点、（同）区西南東が6点、（同）区西北辺が37点、（同）区画北西が87点、（同）区画南西が6点、塔跡2周辺地区が64点となる。やはり建物地区でも文字瓦の出土量が多い、金堂と講堂の周辺で出土数が多いことがわかる。伽藍中樞部区画施設でも、数の大小はあるものの、それぞれの区画で文字瓦が確認され、塔跡2周辺でも、広い範囲で文字瓦が検出されている。

郡・郷名の出土傾向は、基本的には周辺の建物地区の傾向と同じくする。ただし塔跡2周辺地区では、塔跡2地区で特徴的な模骨文字「造塔」は確認されず、模骨文字自体も1点のみしか出土しないという多少の傾向の違いはみられる。

押型や押印については、本調査の建物地区で確認されたものや、昭和に行われた調査、その他文献資料等で既出のものがほとんどで、とりわけ珍しいものは出土していない。一点、堂間地区（金堂・講堂間）で確認された押印（第31図-1）は、初見の押印で「都」のように読めるが判読は難しい。

ヘラ書では、人名と読めるものが計4点確認されている。堂間地区（金堂・講堂間）で「口生マ（部）高（?）」（第31図-3）と「麻呂口」（第31図-5）、（伽藍中樞部区画施設）区西南辺で「戸主若奉」（第31図-6）と「戸主土師」（第31図-8）が出土した。ヘラ書「戸主若奉」には、押印「豊」（第31図-7）があり、今回の発掘調査では郡名と人名が併記された唯一の例である。ヘラ書では他に武蔵国を記したと考えられる「武」（第31図-9）や、「山口月」（第31図-2）、「六枚」（第31図-4）、「佛」（第31図-10）などのヘラ書がみられる。



第31図 建物地区外出土の文字瓦

第5章 成果と問題点

1. 土器の様相

伽藍中核域出土土器の特徴

前章ではそれぞれの調査地点毎に土器類を概観してきたが、ここでは既往の調査成果も含めて伽藍中核域出土の土器を俯瞰し、幾つかの視点から特徴的な傾向を抽出してみたい。

まず、平成15～24年度調査における古代の土器類(破片)は、総数11,400点(128,489g)の出土量に上った。これを供膳具・煮沸具・貯蔵具等の用途別に集計すると、供膳具が9,735点(77,884g)、貯蔵具が1,095点(46,228g)、煮沸具が570点(4,377g)の構成となり、全体の85%が坏・埴・皿類の供膳具で占め、以下、貯蔵具が10%、煮沸具が5%となっている。供膳具が突出した比率であるのに対して、貯蔵具・煮沸具が相対的に少ないのは、堅穴住居や掘立柱建物等の建物で食住生活を営む集落遺跡とは異なり、調査地が清浄な空間で、仏教儀礼を行う寺院の中核伽藍域であるためであろう。さらに、供膳具の種別内訳を見ると、土師質土器が5,614点(42,912g)、須恵器が3,620点(29,818g)、土師器が397点(3,987g)、施釉陶器が104点(1,167g)で、土師質土器が全体の58%、須恵器が同じく37%の大勢を占めている。なお、煮沸具は土師器甕を主体に羽釜・置きカマド等を含み、貯蔵具の内訳は須恵器が1,030点(44,758g)に対して、灰釉陶器が65点(1,470g)であった。

さて、供膳具の利用形態として注目すべき点は、煤やタール状の物質が付着した灯明具の利用痕跡を留める破片が目立つことである。表17には調査区別に灯明具を集計してみたが、全体で565点もの破片が抽出され、このうち土師質土器が351点、須恵器が128点、土師器が86点の内訳で、半数以上は土師質土器で占めていた。破片では時期の細かな特定は困難であるが、実測図化した古代の土器は8世紀の創建期段階のものが極めて少なく、9世紀中葉以降、10世紀前～中頃の製品が多い印象で、特に武蔵国分寺周辺では土師質土器が多様化する9世紀第4四半期以降(立川2009)に、土器の灯明具としての利用が盛行であった様子が窺える。相模国の事例だが高座郡家・下寺尾庵寺に隣接する集落遺跡でも、出土した7世紀末～11世紀前半の灯明具121点のうち、9世紀後半～10世紀後半の時期だけで85点を占めている、という時期別の分析結果があり(新倉・依田2013)、武蔵と相模の、しかも国分寺と郡寺という造立主体の異なる2つの寺院ではあるが、ともに共通した傾向が窺える。こうした寺院および寺院の関連遺跡で、10世紀前後の時

表17 灯明具の調査区別出土傾向

調査区	種別	点数	調査区	種別	点数	調査区	種別	点数	調査区	種別	点数
金堂2区	土師質土器坏類	1	講堂5区	土師器坏類	2	講堂14区	土師器坏類	6	中門	土師器坏類	2
金堂3区	土師質土器坏類	2		須恵器坏類	1		須恵器坏類	2		金堂間	土師質土器坏類
金堂8区	土師器坏類	1	講堂7区	土師質土器坏類	13	講堂15区	土師質土器坏類	10	中門	須恵器坏類	1
金堂10区	土師質土器坏類	3		土師器坏類	5		須恵器坏類	3		金堂間東	土師質土器坏類
金堂12区	土師器坏類	4	講堂8区	土師質土器坏類	1	鐘樓	須恵器坏類	2	中門	土師器坏類	4
金堂12区	土師質土器坏類	5		須恵器坏類	2		土師質土器坏類	4		須恵器坏類	8
金堂20区	須恵器坏類	1	講堂10区	土師質土器坏類	10	堂間1区	土師質土器坏類	3	土師質土器坏類	14	
金堂24区	土師質土器坏類	5		土師器坏類	44	堂間3区	土師質土器坏類	1		南辺	土師器坏類
講堂2区	土師質土器坏類	1	講堂12区	須恵器坏類	33	堂間4区	土師器坏類	1	北辺	須恵器坏類	39
講堂3-1区	土師器坏類	1		土師質土器坏類	193	堂間6区	須恵器坏類	1		北西	土師質土器坏類
講堂3-2区	土師質土器坏類	3	講堂13区	土師器坏類	2		土師質土器坏類	2	塔2周辺		須恵器坏類
	須恵器坏類	4		須恵器坏類	3	土師器坏類	7	(合計)		土師質土器坏類	3
講堂3-2区	土師質土器坏類	2	講堂13区	土師質土器坏類	1	堂間経蔵	土師質土器坏類		3	土師器坏類	86
	土師質土器坏類	2		土師器坏類	7	土師質土器坏類	3	須恵器坏類	128		
									土師質土器坏類	351	

期に灯明具が多く使われ出す背景としては、仁王会・放生会・灯明会などの法会や、写経・修法が盛んに行われた平安時代の東国仏教政策とも深く関わることが想定され(佐藤 2015・副島 2015)、寺院における献燈行為のあり方を考えるうえで非常に興味深い。特に、灯明具の出土地点としては、講堂地区10区(基壇南側中央付近)で270点、中門および中門東側で88点と、2箇所に際立った集中分布域が見い出せることから、この付近一帯で献燈行為が盛んに行われた可能性が高いものと思われる。

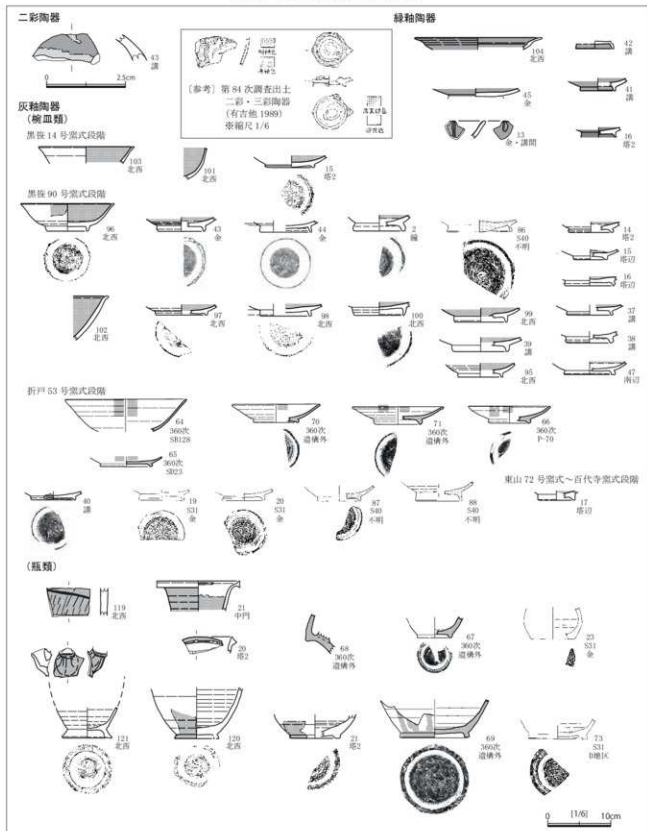
墨書土器は既往の調査成果も含めて、伽藍中核域全体で14点が確認された。判読可能な文字としては、「具」(図面9-11・64)、「行」(9-12)、「丁カ」(179-44)、「十カ」(183-19)、「方カ」(185-60)、「上」(185-54)の7点が挙げられる。すべて一文字で、意味する内容も不明と言わざるを得ないが、具え物・仏道修行などの仏教行為に関係した墨書内容の可能性も考えられよう。「具」は武蔵国分寺跡第1次調査SI14(有古他 1981)・武蔵台東遺跡1号住居跡(西野他 1999)・武蔵台遺跡87号住居跡(河内他 1999)に続き4・5例目で、「行」は初出の文字である。その他、判読不明な墨痕を含めると、須臾器が12点(坏:11点、蓋:1点)、土師質土器坏が2点あり、いずれも体部に墨書されていた。これらの出土地点は、堂間地区(中門・金堂間)の判読不明な1点(4-8)を除くと、区画北西と区画南辺(中門東※昭和31年調査のD地区、中門西※昭和59年調査の226次調査)に分布しており、いわば中核部の外縁施設ばかりに集まっているのが気になるが、伽藍中核域での土器墨書行為自体は案外と少ない印象である。

次に、生産地や製作技法の観点から幾つか特徴的な事項を取り上げたい。まず土器については、在地の南武蔵型坏や武蔵型甕が主体を占めているなかで、講堂地区の3-18は在地産の土師器坏と同じ胎土を用いているが、体部〜底部にヘラケズリを施す点で相模型に近似した整形手法を用いている。周辺では、東八道路建設に伴う武蔵国分寺跡南西地区において、8世紀末〜9世紀初頭の遺物に相模型の土師器坏が確認されており(小川他 1999)、相模方面との交流の一端が窺える。堂間地区(金堂・講堂間)の5-2は、赤褐色の胎土に加えて、ヘラケズリ技法や薄作りの器壁は、あたかも武蔵型甕の製作技法をそのまま土師器坏に用いているかのような土器である。管見の限りでは近在に類似は見当たらない資料で、武蔵型土師器甕の製作工人が甕を作る傍らで坏も製作していたことを示す興味深い土器といえよう。同様の事例として、例えば相模国府が所在する大住郡域周辺では、相模型甕特有の製作技法である胴部内面のハケメ調整と底部の木葉痕を、そのまま坏にも転用して製作した「10坏2類」と呼ばれる土師器坏が存在するが(小島 1984)、出現する時期は10世紀末以降であり、本事例と比べると時期的にはかなり新しい。また、区画南東の8-2は底部外面に回転糸切痕を伴うロクロ整形の土師器甕で、明らかに在地産ではなく、甲斐西部〜信濃方面から持たされた製品の可能性が考えられる(保坂 1988)。

黒色土器については、今次の調査では破片全体で77点(1,077g)を抽出し、出土地点の内訳は区画南辺(中門東)で29点、区画北西で18点、金堂で10点、講堂で5点、金堂・講堂間、金堂・中門間でそれぞれ4点、区画南東と南西で各2点、鐘楼・塔跡2・塔跡2周辺地区で各1点あり、このうち6点を図化した(第32図)。武蔵国分寺跡における土器編年研究では、黒色処理を施した坏・碗類は、従前は11世紀に時期比定する「第V期」(西脇他 1980)および「第I群」(福田 1984)段階以降に盛行し、数は少ないながら9世紀代の「第III期」にも「ロクロ調整で内面にミガギを施した内黒の坏」があるという(西脇前掲)。また、武蔵台東遺跡では、8世紀第3四半期から11世紀第1四半期に至る堅穴住居群が確認され、これらをI〜XI期に時期区分するうちのXI期(11世紀第1四半期)に内黒土器を位置付けている(西野他 1999)。こうした11世紀代に盛行する内黒土器には、武蔵国分寺跡第38次調査のSX229やSI137などの事例にみられるように、非回転(ロクロ)成形と回転(ロクロ)成形の2種があり、体部外面にヘラケズリや指頭圧痕を残す坏や大振りの碗が主体である(第35図)。一方、第32図に掲げた伽藍中核域出土の黒色土器は1・2・5が皿、3・4・6が坏で、4・5は内外面に、1〜3・6は内面のみを黒色処理し、ヘラミガキの手法をとってもバラエティに富んで、同じ器形は2つとして無い。平安時代の黒色土器は群馬県・栃木県等の北関東や、千葉県等の東関東で普遍的に知られているところであるが(三浦 1990・田熊他 1990・笠生 1990等)、産地情報はもとより相伴遺物も定かでないため、個々の所産年代は今のところ不明と言わざるを得ない。



第32図 伽藍中樞域出土の内黒土器



第33図 伽藍中樞域出土の施釉陶器

表 18 平安～近世の武蔵国分寺をめぐる主な歴史・伝承事象

No.	年号	月	出来事
1	天長 5(828)	3月	真奈池弁財天の使である浦嶋が、僧教心に災難除けの雷王石の存在を伝える(『医王山縁起』)
2	天長 10(833)	5月	多摩・人間界に悲田処を置き、五棟の屋を建て(『続日本後紀』天長十年五月丁酉条)
3	承和 2(835)	—	国分寺七層塔一基、神火の為に焼失する(『続日本後紀』承和十二年三月己巳条)
4	承和 6(839)	3月	相模・武蔵等関東七国の国分寺に一切経一部を写させる(『続日本後紀』承和六年三月乙酉条)
5	承和 12(845)	3月	前男部大願生吉志福正が塔再建を願ひ出て許可される(『続日本後紀』承和十二年三月己巳条)
6	承和 14(847)	3月	武蔵国分寺中院の僧最安が一切経を書写(『大菩薩経巻 13 奥書』『平安遺文』題跋第 37 号)
7	嘉祥元(848)	8月	真奈池弁財天の由来譚、玉造小町の病氣治療(『医王山縁起』)
8	仁寿 3(853)	5月	武蔵・信濃両国の国分寺に一切経一部を写させる(『文武天皇実録』仁寿三年五月癸卯条)
9	貞観 15(873)	12月	黄夷征伐のため、陸奥国分寺で武蔵の例に準じて五代菩薩像造立が許可される(『日本三代実録』貞観十五年十二月七日条)
10	元慶 2(878)	9月	関東に大地震がおこり、相模・武蔵の被害甚大(『日本三代実録』元慶二年九月廿九日条)
11	延喜 5(927)	—	武蔵国、正税 40 万束、国分寺料に 5 万束を充てる(『延喜式』上 諸国本條条)
12	天禄年中 (970～972)	—	両目患った下総国千葉郡の金澤刑部盛貞が薬師如来の御利益により治癒(『医王山縁起』)
13	治承 4(1049)	—	文覚上人が 100 日間の譚摩修行を行う(『医王山縁起』)
14	永承 5(1050)	11月	源頼義国分寺に三日間逗留(『医王山縁起』)
15	治安 3(1023)	4月	武蔵国分寺修理の勘宣旨(『小右記』)
16	永長元(1096)	5月	諸国に命じて観音経を転読させ、丈六観音像を作り国分寺に安置させる(『後二条師通記』永長元年五月二、三日条)
17	長治 2(1105)	6月	十二神符の安底羅大符に纏わる伝承(『医王山縁起』)
18	文治 2(1186)	5月	東海道諸国の聖社・国分寺・国分尼寺の修造(『吾妻鏡』)
19	平安末期	—	木造薬師如来坐像
20	鎌倉初期	—	恋ヶ窪宿と高山重忠に纏わる伝承形成(『武蔵夜話』・『四神地名録』等)
21	建久 3(1192)	5月	後白河法皇四十九日仏事に六所宮・浅草寺と並んで国分寺僧三人が集められる(『吾妻鏡』)
22	建久 5(1194)	11月	近国一宮・国分寺の破壊を修復させる(『吾妻鏡』)
23	寛喜 3(1231)	4月	諸国国分寺に最勝王経を転読させる(『吾妻鏡』)
24	24	5月	再度同様の趣旨の指令が諸国国分寺に発せられる(『吾妻鏡』)
25	建長 5(1253)	2月	府中善明寺藏 鉄造阿弥陀如来坐像銘文「大船進念阿弥陀仏明進」・「大工藤原助近」
26	文応元(1260)	6月	疾病除けのため、諸国寺社に大般若経を転読させる(『吾妻鏡』)
27	元弘 3(1333)	5月	分倍原原の合戦 武蔵国分寺被災(『医王山縁起』)
28	建武元(1334)	4月	新田義貞より黄金三百両その他の寄進(『医王山縁起』)
29	建武 2(1335)	3月	お堂再建→7月供養(『医王山縁起』)
30	30	7月	『医王山縁起』奥付 僧積釈仙快の羅書
31	応永 7(1400)	9月	武州国分寺の日光・月光菩薩を造立し奉る(深大寺僧長弁『私家抄』)
32	32	—	恋ヶ窪村の「よごれ塚」に 8月 15 日 了禪尼師の古碑の存在(『新編武蔵風土記稿』)
33	33	—	恋ヶ窪村の「凝塚」に同銘文の古碑の存在(『武蔵名勝図会』)
34	応永 33(1426)	3月	武州国分寺薬師如来の御坐前に妙法蓮華経六部を施入(『私家抄』)
35	宝徳元(1449)	8月	8月 26 日夜、永寿王殿(鎌倉公方足利成氏)は武州府中村間に御逗留、国分寺に御座す(『鎌倉大草紙』)
36	文明 18(1486)	—	聖護院道興准后が恋ヶ窪を訪れ、栄枯盛衰の詩を詠む(『嗣国雜記』)
37	享祿元(1528) ?	—	東福寺創建(寺伝) ※『北多摩寺院大観』(北多摩仏教会編 1936 年)
38	弘治 2(1556)	8月	木造書見台墨書銘「弘治 2 年 8 月 16 日 武蔵国足勝院本堂用」
39	慶長 2(1597) ?	—	熊野神社開創(社伝) ※『北多摩寺院大観』(北多摩仏教会編 1936 年)
40	元和年間 (1615～23)	—	「古宿」(国分寺街道沿い府中町境付近)から現在地へ西勝院が移転?(『国分寺村古絵図』国分寺藏)
41	寛永 6(1629)	11月	国分寺村新田改帳(東久留米市島崎三郎家文書) 名請人に「西正院」の表記あり ※市史中巻 p256
42	慶安元(1648)	10月	徳川将軍家寺額安堵朱印状「武州国分寺村 薬師堂領別当国分寺」 ※史料集Ⅲ-1 号
43	慶安～寛文 (1648～65)	—	『国分寺村古絵図』の成立?(『西勝院』・『西勝院先祖羅敷』表記あり) ※市史中巻 p263
44	寛文 5(1665)	—	『医王山縁起』成立 ※『西性院国分寺』の表記 ※史料集Ⅲ-98 号
45	延宝 6(1678)	—	□月 武州多摩郡府中領国分寺村新田御検地水帳に小名「堀之内」の表記あり ※史料集Ⅱ-6 号 明治 2 年の国分寺村絵図に、現在の西元町二～四丁目相当地域で字名「堀之内」が見える(後の地籍図等では消滅、字「黒鐘」・「多喜窪」に含まれる)
46	宝暦元(1751)	—	薬師堂再建(棟札写し)
47	文政 11(1821)	—	医王山西勝院と号す、真義真言宗、府中妙光院末(『新編武蔵風土記稿』)

■ 当時代資料では無いもの。

※史料集は、国分寺市史編さん委員会 1982-1983『国分寺市史料集』(Ⅱ・Ⅲ)の略称。

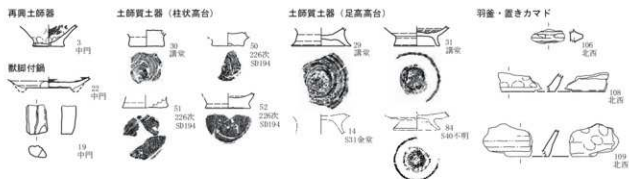
そのようななか、近年、平野修氏はカマドに長い煙道を有する竪穴住居と、丁寧なヘラミガキを行い炭素を吸着させた黒色土器が伴う事例を、宝亀5(774)年から弘仁2(811)年に及んだ東北38年戦争に伴って、陸奥・出羽の蝦夷が俘囚・夷俘として東国諸国へ移配された痕跡であると評価し、平安時代の黒色土器について再検討している(平野2017a・b)。平野氏は事例の一つで武蔵台東遺跡を取り上げ、長煙道の住居7棟分を抽出したが、そのうち9世紀第3四半期の住居に回転(ロクロ)成形の黒色土器の存在を指摘した(平野2017b)。この時期に武蔵国分寺と東北地方との関わりでいえば、『日本三大実録』貞観十五年十二月七日条で、「(略)先是、陸奥国言。俘夷瀧境。動事叛戻。吏民恐懼。如見虎狼。望請准武蔵国例。奉造五大菩薩像。安置国分寺。肅蛮夷之野心。安吏民之怖意。至是許之。」とあるように、蛮夷征伐のため武蔵国分寺に準じて陸奥国分寺で五大菩薩像の造立が許可された記事がある(表18-9、佐藤他2015)。もちろん、この内容を直ちに黒色土器と結びつけて考える訳にはいかないが、蝦夷征伐では軍団を派遣するなど陸奥との関連性が強い相模国府でも、特に9世紀後半から10世紀前半の時期で局所的に黒色土器生産が行われている実態があり(依田2015b)、そのような観点から、これまで様相が不明確であった西脇編年「第Ⅲ期」の黒色土器を再度見直す必要はありそうである。

須恵器については、武蔵国内における主要な生産地の南比企・東金子・南多摩窯のいずれかの製品で、詳細は遺物観察表の記載に拠られたいが、創建期段階は東金子窯(前内出窯)や南比企窯から供給された製品が多く、今回の調査では、出土した須恵器自体が10世紀前葉以降の所産のものを中心のため、必然的に当該期以降に生産が活発化する南多摩窯の製品が多くを占めているようである。これは武蔵国府で流通する須恵器が、H6期(9世紀後葉～10世紀後半)を境に東金子窯から南多摩窯の製品に供給地がシフトする動向とも軌を一にしている(野田・江口2006)。また、施釉陶器は全般的に少ないが、猿投窯産の製品が目立ち、黒佐90号窯式～折戸53号窯式期のものが中心であった(尾野1997・2006)。なお、多彩釉陶器は講堂で小壺の肩部片が1点出土しており、武蔵国分寺では尼寺尼坊付近の小壺・托に続く3例目の出土例となった(第33図)。

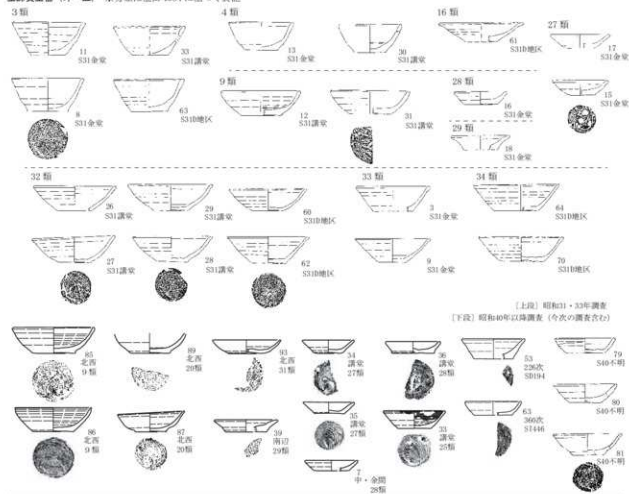
古代末期から中世における武蔵国分寺の様相(予察)

第34図には、古代の武蔵国分寺の終焉時期を考える上で注目すべき、武蔵国内で須恵器生産が終わる10世紀中葉以降の伽藍中核域出土土器を掲げたが、これらの土器を検討する際に、当該期における土器編年研究を今一度振り返っておきたい。

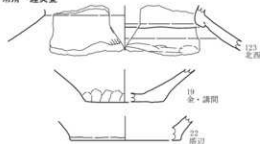
まず、西脇俊郎・山口辰一氏は武蔵国府・国分寺地域における土器変遷を、須恵器坯の技法および口径・底径比、土師器坯の技法・形態、土師器甕の技法・口縁部形態等を考慮して大きく六期区分し、「須恵器坯は色調が赤褐色ないしは灰褐色を呈する酸化炭焼成が主流」となる第Ⅳ期を10世紀代に充て、続く「体部外面に粘土巻き上げ痕を明瞭に残し、体部下端をヘラ削りした粗雑な感を呈する小形坯となり、南武蔵型坯は伴出しない」第Ⅴ期、「いわゆるカララケが現れる時期」の第Ⅵ期として、第Ⅴ・Ⅵ期を11世紀代以降に比定した。さらに、第Ⅳ期を第一～第三階に小区分し、第三階以降には武蔵型甕が消失するといひ、そして「第Ⅳ期第三階と第Ⅴ期との間には時間的に大きな隔りがある」としたうえで、第Ⅵ期も第一・二段階に分けて「第一階段まで第Ⅴ期と同種のものがない、第二階段では伴出しない」と整理している(西脇他1980・西脇1981)。福田信夫氏も西脇編年を補強・整理する立場から、武蔵国分寺跡第38次調査SK229とSI137が第Ⅵ期第一階段、第18次調査SI119が第二階段の指標とし(第35図)、このうち「SI119資料に類似する土師質土器小皿が僧寺金堂や寺地内の表土中より出土しており、武蔵国分寺の最終末を示す遺物と考えられる」としながらも、SI119は「発掘時においては住居内堆積土の識別が難しく、為に遺物は分布図操作の結果帰属決定したものも含んでおり、(中略)一括資料としての有効性に疑問が残る」、「将来見直されるべき資料である」とも付言している(福田1984)(注)。なお、このSI119出土土器は、服部敬史氏も南武蔵における10世紀末～12世紀中葉までの土器をA～E群に区分するなかで、「供献形態がすべて土師質土器に変わり、土師器を含まなくなる」、「E群土器」の唯一の資料として着目し、12世紀第一四半期



土師質土器 (坏・皿) 系分類は福田 1984 に基づく表記



常滑・瀬美型



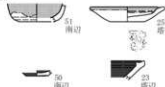
常滑片口鉢 I 類



常滑片口鉢 II 類



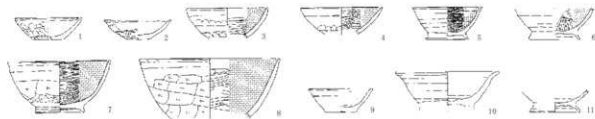
古瀬戸



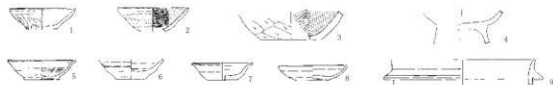
0 [1/6] 10cm

第 34 図 伽藍中核域出土の古代末～中世の土器・陶磁器

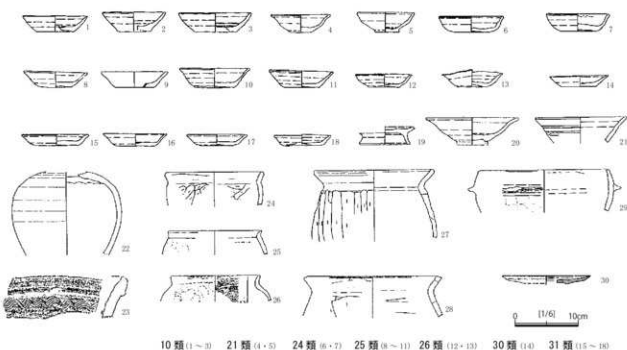
武蔵国分寺跡第38次調査（市立四中※概報18）-SK229



武蔵国分寺跡第38次調査（市立四中※概報18）-S1137



武蔵国分寺跡第18次調査（府中公共下水道※未報告・福田1984）-S1119



第35図 武蔵国分寺跡最終段階の土器様相

の年代を付与しており（服部1982）、「少なくとも武蔵国分寺においては、これらに続く資料は現在のところ出土していない」（福田1984）という状況であった。

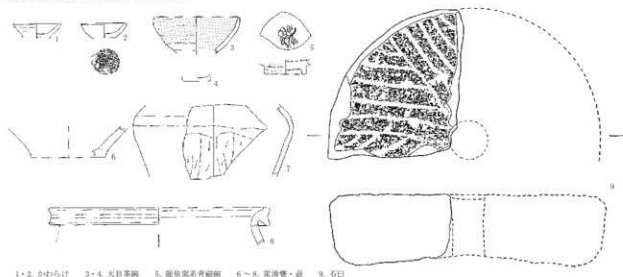
さて、多摩地域で古代末期の土器編年については、落川・一の宮遺跡の豊富な出土資料をもとに「須恵器生産終了後（窯式無き後）段階」の10世紀第4四半期～12世紀第2四半期までの土器を、20年単位で第31～39段階に時期区分する福田健司氏の先行研究が著名である（福田2002・2017等）。これに対して、①貿易陶磁・②国産陶器（渥美・常滑産陶器、東海系山茶碗）の編年研究や、③北宋銭の初鋳年代を活用しながら遺物出土状況の検証を行い、第31～36段階の土器群を「福田氏よりもほぼ100年繰り下げる11世紀後半～12世紀末葉の実年代を与える」反論を述べた黒尾和久氏の近業がある（第38図、黒尾1998・2003・2008等）。かつて報告者も、当該期における武蔵・相模国の銭貨と共存する土器群に触れて、銭貨の初鋳年代よりも伴出する土器の実年代が不当に遡る複数の事例を紹介し、古代末～中世初頭の土器編年研究が揺らいでいる現状を述べたが（依田2004）、黒尾氏はさらに、御殿山第14号窯式との併行期に位置付けられる

第30段階と、「南武蔵型土師器坏形土器が姿を消して以来、約120年ぶりに型式として認定できる土師器坏形土器」・「再興土師器と命名した手抜きの土師器」(福田2002)が出現する第31段階の間には、100年の編年的空白が介在すると疑ってみるべきであることを指摘した(黒尾2008)。これは期せずして、西脇氏が「第IV期第三段階と第V期との間には時間的に大きな隔りがある」としていた認識とも一致するもので(西脇他1980)、須恵器生産終了後間もない段階の土器については、目下のところ、解決すべき編年研究上の大きな課題となっている。

そうした編年研究の現状を念頭に入れながら伽藍中核域出土の該期の遺物を見ていくと(第34図)、まず中門で再興土師器(3)、講堂及び中門西側の大溝SD194から柱状高台(30・50～52)、金堂・講堂で足高台(14・29・31・84)、中門で獣脚付鍋(19・22)、区画北西地区で羽釜と置きカマド(106・108・109)等が確認される。また、土師質土器坏・皿では、昭和31年の調査で金堂から出土した小皿(15～18)と同タイプ(福田1984分類でいう、「27～29類」)の皿が講堂(34～36)・堂間(7)・中門東(39)でも出土している。また、「27～29類」と同時期の所産として福田氏が位置付けた、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる器形の坏「9類」が、昭和31年度調査の金堂出土品(12)に加えて区画北西でも2点(85・86)、さらに腰部の張る坏「20類」も区画北西で2点(87・89)、中型の法量をもつ「25・28類」相当の坏が講堂で1点ずつ(33・36)、皿形態の「31類」が区画北西で1点(93)、それぞれ極少量ながら確認することが出来る。これらのうち、特に器形や整形上で目立った特徴を有する再興土師器(3)・底部銀杏切りの小皿(39)・柱状高台(30・50～52)などは、再興土師器の出現を11世紀第3四半期以降とする落川・一の宮遺跡SI34(黒尾1998・第38図)や銀杏切りの小皿が尾張型5型式の東海産山茶碗と共存する南広間地遺跡SX89B(黒尾2003)の事例や、田中信・八峠興氏等の検討内容と照らすと(田中2003・八峠2001)、12世紀後半代に位置付けられる可能性があろう。また、これらの土器は必ずしも出土状況が明確なものばかりではないのが難点だが、講堂・区画北辺・鐘楼地区では1004年初鑄の景德元寶から、1119年初鑄の宣和通寶に至る9枚の北宋銭が出土し(図面134)、まとまった出土分布域を形成していることは、これらの土器群の年代を12世紀以降の所産として考慮するうえでの貴重な情報といえよう。

しかし、遺物の総量としては極めて貧弱で、『小右記』に記載のある治安3(1023)年の武蔵国分寺修造の勘宣旨(表18-15)については、その具体的内容を知る由は無いものの、伽藍中核域で10世紀中～後半の土器が主体的に出土している事実は、伽藍を構成する主だった堂塔の倒壊が、この時期までにかかり進んでいたことを物語っているのかもしれない。近年、江口桂氏は「武蔵国分寺の成立から変遷のなかでは、従来、十世紀が衰退期と位置づけられてきた。しかし、堅穴建物址の推移からみれば、十世紀は決して衰退期ではなく、十世紀代に国分寺全域で堅穴建物が拡充することが明らかで、十世紀を第二次整備期と捉えることが可能である」とする見解を示しているが(江口2006・2014)、国分寺市内域における堅穴住居の動向に触れた立川明子氏は「7期(G5号窯式期後半・10世紀第4四半期)を自身の編年の最終末に位置付けている(立川2009)。これは国分寺を監理する側の武蔵国衙においても同様で、小野一之氏が「国庁を中心とした空間は10世紀末様までに消滅するが、国府の機能はここで終えるわけではなく、「10世紀のうちの廃絶した国庁に替わる国府のシンボルとして創出されたのが総社」で、「11世紀中頃を出発点にした中世の武蔵府中は、総社を中心に「府庁」「所」などの国衙施設や在庁官人の居館などが広がる景観を示していた」と指摘することとも、パラレルに関連する一連の動向なのであろう(小野2010)。11世紀代に位置付ける武蔵国府編年のH8・9期に後出する遺物の報告事例は、最近徐々に蓄積されつつあるが(荒井2001・06・07、中山2004、河野2008等)、江口氏は「10世紀末～11世紀初頭には国府域は大幅に規模を縮小し、国衙北方域と東山道武蔵路付近へと集約」して「12世紀の遺構・遺物は、皆無に近い状態」であると国府の変容について述べている(江口2017)。したがって、西脇編年の第IV期第三段階、落川・一の宮編年の第30段階以前以降とでは、武蔵国分寺の景観は大きく異なっていたことが想定される。道塩千尋氏によると、平安中後期の国分寺は「国家との関係を断ち切ることなく鎮護国家の修法を継続する一方、在地においても根をはっ」たが、「各国を代表する寺とはなり得なかった」としたうえで、「(鎌倉)幕府は地方行政に力を

武蔵国分寺跡第 83 次調査 (有吉他 1989)



1・2. かむらげ 3・4. 天目茶碗 5. 龍泉窯系青磁碗 6～8. 常滑焼・磁 9. 石臼

武蔵国分寺跡第 84 次調査 (有吉他 1989)



1. 天目茶碗 2～5. 常滑井口鉢 6～12. 常滑 (龍泉) 焼

武蔵国分寺跡第 85 次調査
(有吉他 1989)



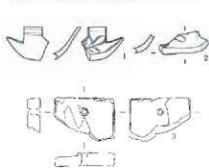
1. 天輪割皿

武蔵国分寺跡第 695 次調査 (依田 2015a)



1～3. かむらげ (水菜湯甃と共付)

武蔵国分寺跡第 706 次調査 (増井 2017 c)



1・2. 龍泉窯系青磁碗 3. 磁石

武蔵国分寺跡第 714 次調査 (増井 2017 e)



1・2. 常滑井口鉢 3. 古瀬戸鉄輪縁鉢

0 [1/6] 10cm

第 36 図 武蔵国分寺跡周辺出土の中世遺物

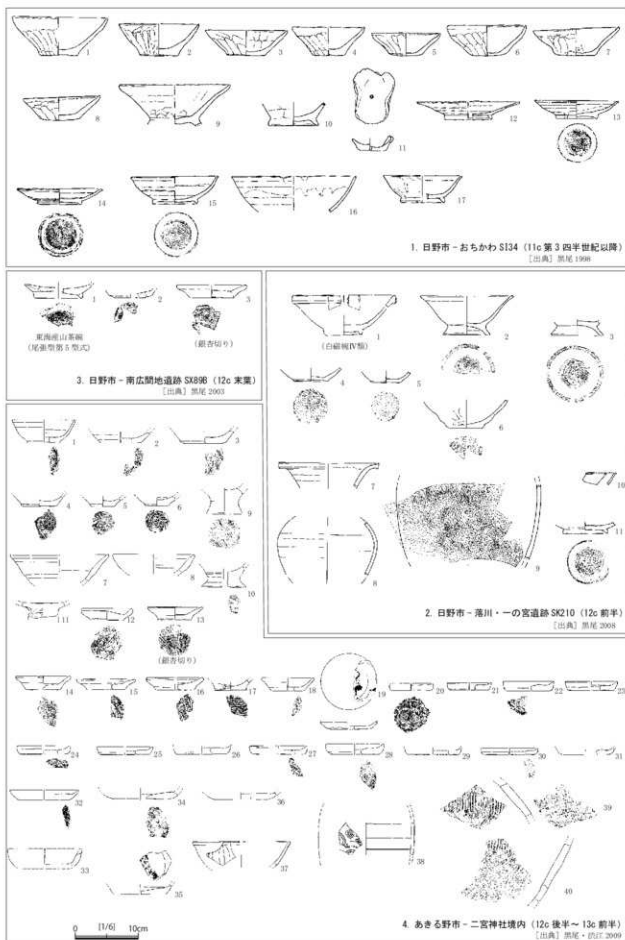
入れ始め、地方寺院であった国分寺の復興も目指す。そうした動きの中で国分寺がどのように扱われ、どのような展開を見せるのか。一宮制の問題ともからめ中世の国分寺を考える際の第一の課題であると述べ(道塩 1983)、武蔵の場合も総社・一宮の成立の視点と合わせて国分寺の様相を検討する必要がある。

ところで、近年の武蔵国分寺跡第706次調査では、僧尼寺中間地域の東山道武蔵路沿いの調査地点から渚美夷や割花文を有する龍泉窯系青磁鉢Ⅰ類(山本1995)など、中世前期の遺物の出土が把握されるようになり(増井2017b)、今次の調査でも塔跡2地区で常滑甕(22)、塔跡2周辺地区で常滑片口鉢Ⅰ類(20・21)等の13世紀後半以降の遺物が僅かながら出土している。しかし、伽藍中楕域やSI119出土の土器様相では、「12世紀前葉まで、古代末からの系譜を引く坏形が主体」で、「12世紀中葉以降、小型で皿形を呈する土師質土器が主体となる」在地土器の皿形化の一般的動向は認められるもの(立川2012・2016)、青磁や常滑の流通が増え出す12世紀後葉～13世紀前葉以降の様相は見られないことから、伽藍中楕域内では13世紀代の遺物は皆無に等しい状況といえ、遺物の様相をみる限り12世紀のある段階で土地利用は一旦途絶えているようにも思われる。『吾妻鏡』には、12世紀末～13世紀に近国の国分寺へ度重なる修造や經典の転読を促す記事が散見されるが(表18-18・21～24・26等)、武蔵国分寺に特化した内容はみられない。また、建長5(1253)年の年紀と、「大勧進念阿弥陀仏明蓮」・「大工藤原助近」の造像関係者の銘文を伴う善明寺(府中市)の鉄造阿弥陀如来坐像は(表18-25)、もとは国分寺付近で発掘されて露座となっていた仏像が後に府中へ運ばれたという出自を巡る伝承を持ち、「恐らくは武蔵国分僧寺が国分尼寺、またはその関連堂舎で祀られていた像であったとするのが自然」とする小野一之氏の見解も(小野2011)、13世紀の国分寺を類推する上では非常に興味深い発言ではあるが、遺跡の実態に即すと依然不明な点が多いのが現状といえそうである。

その後、武蔵国分寺が文献史料上で現れるのは、『私案抄』を著した深大寺の僧長弁が日光・月光菩薩を造立し、薬師如来の宝前に妙法蓮華経を施入した15世紀以降のことで(表18-31・34)、さらに鎌倉公方足利成氏が宝徳元(1449)年に、聖護院道興准后が文明18(1486)年にそれぞれ国分寺(恋ヶ窪)を経由した記録が存在する(表18-35・36)。それに連動するかのようには、塔跡2付近から常滑窓片口鉢Ⅱ類(24)・古瀬戸緑釉小皿(25・26)と播鉢(23)、区画南辺(中門東)付近からは灰釉・鉄釉小皿(50・51)等が出土し、また紀年銘は無いが14世紀後半以降と思われる板碑断片も講堂・塔跡2・中門地区の3箇所確認されている。さらに最近では、伽藍地東辺区画溝の内側にあたる第695次調査で人骨に永楽通寶を伴う土坑墓群や(依田2015a)、寺院地東方の第714地点で常滑片口鉢や古瀬戸播鉢が出土し、府中市域にまで延長が予測される南北大溝の存在(増井2017c)など、当該期の遺構や遺物の発見が相次いでいる(第9・36図、表4)。

14～15世紀に、国分寺周辺に薬師如来坐像を祀る何らかの宗教施設が存在したことは、長弁の『私案抄』の記述からも事実のようであるが、古代武蔵国分僧寺の中核伽藍域には考古学の手がかりはなく、これまでの市内における発掘調査成果を通観する限りでは、第2章でも触れたとおり、むしろ鎌倉街道沿いの恋ヶ窪廃寺跡や伝祥応寺跡付近にこそ適地が求められるのではないだろうか。平安末期作の薬師如来坐像(表18-19)を祀る現在の薬師堂は宝暦元～6(1751～1755)年頃の建造物で、『国分寺村古絵図』(年記不明、表20-43)の記載位置を根拠として僧寺講堂・金堂の跡地から現在地へ移転した可能性が指摘されているが(石村1960)、それ以前にも移転を繰り返していたことを案外想定する必要があるのかもしれない。それは、恋ヶ窪廃寺跡・伝祥応寺跡・僧寺地区いずれもが15世紀代のうちに再び途絶えて、市域では16～17世紀前半代も再び考古学的には遺跡の空白期が到来するからである。ともあれ、伽藍中楕域での発掘成果のみから言及出来る課題でも無いため、国分寺の変遷史の解明には、引き続き市域での調査を継続していかなければならないであろう。

(注) 福田論考の公表時には、SI119を含む尼寺北方崖線下の武蔵国分寺跡第18次調査(府中市公共下水道北多摩1号幹線工事)成果は、「未報告(近刊)」(福田1984)であったが、諸般の事情で未だ資料の公表は図られていないため、出土状況等の検証も行われていないのが現状である。



第 37 図 古代末期～中世前期の参考資料

2. 軒先瓦の様相

各堂塔出土の軒先瓦について

多種多様な内容をもつ武蔵国分寺跡の出土瓦は、発掘調査以前からも多角的に研究が進められてきたが、有吉重蔵氏が「文字瓦と軒先瓦を両輪として出発した古瓦研究も、次第に文字資料としての特性を生かした文字瓦の研究に中心が置かれるようになり、(中略)軒先瓦の研究は停滞し、基礎的な研究が細々と継続される状態にとどまった」と指摘するように(有吉 1986a)、軒先瓦の研究は、主に瓦范種の多さや特異な文様を紹介する内容に終始したものが多く、体系だった検討は殆ど行われてこなかった。そうしたなか初期の代表的な研究は、東京府の調査報告で、後藤守一が瓦当文様をもとに鑑瓦を10種3型式、宇瓦を8種に分類したことを嚆矢として(後藤 1923)、太田静六が「塔婆址出土土瓦」に後の新久窯Ⅰ類に該当する単弁六葉蓮華文鑑瓦を紹介し(太田 1935)、角田文衛編『国分寺の研究』の「武蔵国分寺」の項では宮崎礼が単弁八葉蓮華文鑑瓦と均整唐草文宇瓦、単弁六葉蓮華文鑑瓦と偏行唐草文宇瓦の代表的な文様瓦4例を掲げ、前者を「奈良時代」、後者を「稍後れた時代に比定」するなど瓦の先後関係を呈示したものが知られる(宮崎 1938)(注1)。戦後も、外縁に線鋸歯文を施す鑑瓦の発見(星野 1950・注2)や瓦当面に文字を伴う軒先瓦の事例報告(内藤 1950)が続いたが、石村喜英は様々な収集家のコレクション資料を通観して、鑑瓦は辨数・中房形態・蓮子・色彩・周縁文様・連辨形式ごとに一〜七類の単辨式と一類の複辨式に、宇瓦も周縁・断面形・色彩・焼質・表現ごとに均整唐草文・偏行唐草文・重弧文・並列文・波状文・格子文・垂花文・無文・特異文に細分するなど、それまで「多様」と一括りされてきた武蔵国分寺出土瓦について、はじめて全体像を把握する意欲的な試みを行った(石村 1960)。

しかし、発掘調査による出土瓦ではなかったことは自ずと分析にも限界があり、さらなる研究の止揚には昭和31・33年度の金堂・講堂・中門等、昭和39～44年度の七重塔・鐘楼・金堂・講堂等の調査成果が公表されるのを待たねばならなかった(日本考古学協会編 1985、滝口 1987)。このうち特に七重塔の調査では、宇野信四郎が再建塔の周囲を固めた粘土敷層を媒介に、泉井窯・大丸窯産の創建期瓦、東金子窯産の再建期瓦として整理を行い(宇野 1953b・1987・94)、出土瓦の数量的傾向からも八坂前窯Ⅲ—1・2類、Ⅷ類(新久窯Ⅲ類)の鑑瓦、八坂前窯Ⅰ類(新久窯Ⅰ類)・八坂前窯Ⅴ類などの宇瓦が塔再建期の所用瓦であることが明らかとなった(滝口 1987)。こうした報告書に関連して有吉重蔵氏は、再度コレクション瓦や発掘資料から瓦の全体様相把握を行い、意匠の祖型となった文様に「上野系」、「国府系」(A群:在地系・B群:中央系)、「平城宮系」の三系統を示した上で、上野系・国府系A群の創建前期、平城宮系・国府系B群の創建後期の二つに小期区分し、創建後期段階(天平宝字年間)に国分寺の造営が完了したという見通しを述べた(有吉 1982・86a・93他)。また、創建期瓦については酒井清治氏も、上野・武蔵両国の初期寺院出土瓦の文様系譜論から、国分寺造営には「上野国、特に上植木廃寺を造営した首長層に協力を要請したと推測され、造営に最初に関与したのが、前代から上野国と関わり、五明廃寺、城戸野廃寺などを建立するなど、台頭してきた賀美郡の郡司層を含めた有力者」であることを想定している(酒井 1989)。

一方で、国分寺に供給した瓦の生産地の様相は、坂詰秀一氏による国分寺市史の総括論考に詳しい(坂詰 1986)。その後も瓦窯の調査は進み、南多摩窯跡群ではTNT No.515遺跡(加藤 1982・87、竹花 2012・18)、瓦谷戸窯跡(坂詰他 1999)、御殿山窯(服部 1981・坂詰他 1992a・坂詰他 1997・99～2001)、TNT No.944遺跡(雪田他 1998)、セイカチクボ瓦窯(及川他 2000)、南比企窯跡群では鳩山窯跡群(渡辺他 1988・90)、久保瓦窯(金井塚 1993)、金沢窯(須田他 2014)、新沼窯(手島 2016・18)などの報告書が相次いで刊行されるに及んで、「多様」な武蔵国分寺跡の個々の瓦は、徐々にではあるが産地が判明してきている状況である。

ところで、従来、七重塔(塔跡1)以外の建物は葺かれた軒先瓦の具体的な様相が明確ではなかった経緯もあるため、ここでは今次の調査成果を踏まえ、昭和31・33・39～44年度および平成初期に伽藍中核域で行った既往調査の出土瓦も加味して、各堂塔における軒先瓦の出土傾向をまとめておきたい。その際、国分寺市

表 19 武蔵国分寺跡出土鍍瓦・宇瓦の型式内訳 (平成 30 年 3 月現在)

種別	型式No.	文様	登録型式数	型式内訳		
鍍瓦	001 ~ 150	単弁蓮華文 (T)	141 種			
	001 ~ 010	4 弁		1, 3, 4, 4?, 5		
	011 ~ 020	5 弁		11		
	021 ~ 060	6 弁		21-A, 21-A', 22, 23-A, 23-B, 23-C, 24, 24-A, 24-A?, 24-B, 24-B?, 26-A, 26-B, 26-C, 26-D, 26-E, 27, 28, 29-A, 29-B, 29-C, 29-D, 29-E, 29-F, 29-G, 29-G1, 29-G2, 29-H, 29-I, 30-A, 30-B, 30-C, 30-D, 30-?(1), 30-?(2), 31, 32, 33, 34, 35, 36, 新 2		
	061 ~ 080	7 弁		61-A, 61-B, 61, 62, 63, 64-A, 64-A', 64-B?, 65-A, 65-B1, 65-B2, 65-B3, 65-B4, 新 1		
	081 ~ 120	8 弁		81, 82, 82-A1, 82-A2, 82-B, 82-B1?, 82-B2, 82-B2?, 82-C, 82-C?, 82-D, 83-A, 83-A?, 83-B, 83-C, 83-D?, 83-E?, 83-F?, 83-F, 83-新, 84-A, 84-B, 85-A1, 85-A2, 85-A', 85-A3, 85?, 86, 87, 88, 89-A, 90, 91-A, 91-A1, 91-A2, 91-B, 92, 93, 94, 95-A, 95-B, 95-C, 96, 97-A, 97-A1, 97-A2, 97-A?, 97-B1, 97-B2, 98, 99, 100-A, 100-B, 101, 101?, 102, 103-A, 103-A?, 103-新型式 (1), 103-新型式 (2), 103?, 104, 105-A, 105-A1, 105-A2, 106-A, 106-B, 107, 108, 109		
	121 ~ 130	9 弁		121		
	131 ~ 140	15 弁		131, 132, 132-A, 132-B		
	141 ~ 150	16 弁		141		
	151 ~ 160	複弁蓮華文 (F)				
	161 ~ 170	幾何学文 (K)		161-A, 161-B		
	171 ~ 200	特異文 (Z)		171		
	宇瓦	201 ~ 215		重弧文 (G)	145 種	201, 201-A, 201-B, 201-C, 201-?, 202, 203
		216 ~ 225		三重弧文 (3G)		216, 217
226 ~ 230		四重弧文 (4G)	226			
231 ~ 280		均整唐草文 (KK)	231-A, 231-B, 232-A, 232-B, 232-C, 232-D, 232-D', 232-E, 232-E', 232-F, 232-G, 233, 234-A, 234-B, 234-C, 234-D, 234-E, 234-G, 234?, 235-A, 235-B, 235-C, 235-D, 235-E, 235-F, 235-G, 235-H, 235-I, 236, 237, 238, 239-A, 239-B, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246, 247-A, 247-A', 247-B, 247-C, 248-A, 248-A', 249, 250, 251, 252, 253			
281 ~ 320		偏行唐草文 (HK)	281-A, 281-B, 281-C, 281-D, 282-A, 282-B, 282-C, 282-D, 282-E, 283, 284, 285-A, 285-B, 285-C, 285-D, 285-?, 286, 287-A, 287-B, 288, 289, 290, 291, 292, 292?, 293-A, 294-A, 294-B, 295, 296			
321 ~ 340		へろ書文 (H)	321-A, 321-B, 321-C, 321-D, 321-E, 322, 322-A, 322-B, 322-C, 322-D, 322-F, 322-新, 323-A, 323-B, 323-C, 325, 326, 327-A, 327-B, 327-C, 327-D, 327-E, 327-F, 328, 329			
341 ~ 345		竹管文 (T)	341-A, 341-B, 341-D			
346 ~ 350		格子目文 (K)	346			
351 ~ 355		調目文 (J) 無文 (M)	351, 355			
356 ~ 400		特異文 (O)	356, 357-A, 357-B, 358, 359, 360, 361, 362, 363, 364, 365, 366, 368-A, 368-B, 369-A, 369-B, 369-C, 370, 371, 372, 373, 374, 375			

遺跡調査会で活用している瓦台帳記載の型式番号と照合が可能な個体については、その型式名も併記することにした。この瓦台帳は範種毎に型式番号を付与しているもので、昭和 49 年の調査会設立以降、出土事例が増える度に追記を重ね、平成 30 年 3 月現在では鍍瓦 141 種と宇瓦 145 種の型式登録が完了しているが (表 19)、諸般の事情から更新作業が滞り、出土した瓦すべてを網羅的には検討が出来ていない点で課題を残している。ただ、瓦台帳はこれまで主に調査会の内部資料として援用してきたものの、市発行の各種刊行物 (中道 2008、太田・増井 2015 等) や、一部外部機関の書籍・個人論考等 (東山他 2011、宮原 2016a・16b・18 等) でも型式名が流布しており、研究に混乱を来してしまっている現状がある。表 20・21 および第 38 ~ 62 図には、既刊書籍との整合性をはかるため便宜的に型式名を表記したが、瓦台帳と個別型式の説明については別の機会に改めて公表することとしたい。

なお、前章でも触れたとおり、今次の調査で出土した瓦については分類・計量作業が貫徹出来ておらず、遺存度を重視して実測図化個体を差別抽出しており、さらに発掘調査以前の採集瓦には出土位置を明記して公表されている資料もあるが (例えば、田熊他 1994・平石他 2008・東山他 2011 等)、これらの資料は除外した。したがって、どこまで本来の実態を反映しているかは甚だ見通せないが、ひとまず図化した個体をもとに軒先瓦の出土傾向を見てみたい。

まず、型式が付与されている瓦のうち出土点数が多く、10 点以上を数えたのは、鍍瓦では後述する単弁五葉の 11 型式の他に、単弁六葉の 28 型式 (新久窯Ⅳ類)、単弁七葉の 63 型式 (八坂前窯Ⅶ類・新久窯Ⅲ類)、

単弁八葉の88型式(南比企窯産?)、単弁十五葉の131型式があり、宇瓦では三重弧文の201~203型式、均整唐草の232-D型式(八坂前窯I-1類・新久窯I類)・233型式(八坂前窯VI類・新久窯II類)・236型式・240型式(南比企窯産?)、偏行唐草の282-B型式・282-D型式(新沼窯I B型式)、ヘラ書文の321-C型式などが挙げられる。創建期の瓦としては三重弧文や新沼窯の偏行唐草文宇瓦、再建期の瓦では鍍瓦・宇瓦とも八坂前・新久窯製品が主体的といえる。以下、個別堂塔ごとに出土傾向を概観してみる。

【金堂跡】 鍍瓦(第38図)では43種の型式が確認でき、他に型式不明(もしくは未設定)の瓦が30点出土しているが、このうち30-B型式(御殿山窯I a類)と63型式が各5点、29-B型式が4点と多い。また、生産窯が特定出来そうな瓦は、26-A型式(八坂前窯III-2類)・27型式(八坂前窯IV類・新久窯I類)・28型式(新久窯IV類)・30-C型式(御殿山窯I b類)・31型式(八坂前窯I類)・83-C型式(瓦谷戸窯I類)・97-B2類(新沼窯I B型式)などがある。瓦谷戸窯は聖武天皇詔の741年から造営督促の757年の間(松原2008a・b)、新沼窯もI B型式を生産した12号窯は鳩山編年III期からIV期(8世紀第3~4四半期)の操業で(手島2016)、一方御殿山窯の鍍瓦は、現在のところG5窯式期(10世紀前~中葉)に限られ、生産の実態としては量が少なく、補修用の瓦の需要に応えることを目的とした可能性が指摘されている(吉田2001)。宇瓦(第50図)では40種の型式があり、他に型式不明(未設定)の瓦が7点出土しているうち、三重弧文が5点、232-D型式が6点、233型式が4点、282-D型式が4点と目立った存在である。

【講堂跡】 鍍瓦(第39図)では20種の型式があり、型式不明(未設定)の瓦が34点出土している。95-A型式(八坂前窯IX類)が6点、続いて28型式(新久窯IV類)が3点と多い。宇瓦(第50図)は32種の型式と、型式不明(未設定)の瓦は15点確認された。三重弧文が6点、282-B型式が5点、233型式が4点、236・240型式が3点ずつ含まれる。なお、宇野信四郎が「本遺址最古」とする講堂東部の採集品で、弁中央の稜線が明瞭な、周縁と1+4の蓮子を伴う単弁八葉蓮華文の鍍瓦(宇野1953)は、出土品中には確認されない。

【鐘楼跡】 鍍瓦(第40図)では4種の型式と、型式不明(未設定)の瓦2点が出土している。一方、宇瓦(第52図)は5種の型式と、型式不明(未設定)の瓦5点があり、このうち233型式の偏行唐草文は谷野窯と同范である。同窯は文様の系譜を根拠に、8世紀第3四半期を下らない時期で、谷野窯=大丸2号窯もしくは谷野窯→大丸2号窯→TNT94窯への操業変遷が想定されている瓦である(有吉1995)。また、南多摩地域の偏行唐草文では最も古く位置付けられる同宇瓦は、近年、武蔵国分寺で既刊の報告書から9個の出土例を集成し、直線頸・曲線頸の両形態が認められることに注目する矢内雅之氏は、谷野窯の瓦はある程度の時間幅をもって生産され続けたことを想定している(矢内2016)。

【東僧坊跡】 鍍瓦(第41図)は2種の型式と型式不明(未設定)瓦2点が出土し、塔跡2で多い11型式が含まれている。宇瓦(第53図)は5種の型式が確認される。

【堂間地区(金堂・講堂間)】 建物では無いが、軒先瓦で図化に値する個体が多いため、出土傾向のみをみておく。鍍瓦(第42図)は11種の型式と、型式不明(未設定)の瓦13点出土している。81型式(久保1号窯)、100-B型式(南比企平城宮系)の創建期、26-C・28型式の再建期瓦が混在する。宇瓦(第54図)は15種の型式があり、重弧文、282-D型式・283型式などが含まれている。

【中門跡】 鍍瓦(第43図)は13種の型式と型式不明(未設定)の瓦が5点あり、131型式が3点、88型式と97-A型式が各2点ずつ出土している。また、創建期段階の南比企上野系・平城宮系、再建期の八坂前窯製品、10世紀の御殿山窯製品が認められる。宇瓦(第55図)は15種の型式と型式不明(未設定)の瓦1点出土したうち、三重弧文が6点、232-B型式・232-D型式が各3点と多い。

【区画施設】 以下、調査地点ごとに様相を概観する。鍍瓦は第44・45図、宇瓦は第56・57図に掲げた。

①南辺地区(中門東)では、鍍瓦が8種の型式と型式不明(未設定)瓦5点が出土している。創建期ではTNT No.513遺跡A類・南比企上野系、再建期の八坂前・新久窯製品が混在する。宇瓦は3種の型式があり、三重弧文が4点と最も多い。

②南辺地区で昭和31年調査のD地区では、鍍瓦が12種の型式と型式不明(未設定)瓦2点出土している。

南比企勝呂系の85-A2型式が含まれる。宇瓦は20種の型式と型式不明(未設定)瓦が2点ある。同様に三重弧文が4点と多く、その他、新沼窯ⅡA型式相当の235-H型式、鳩山窯跡群小谷・広野B両窯の365型式など創建期段階の製品が目立っている。

③北辺地区では、鏡瓦が2種の型式と型式不明(未設定)瓦3点、宇瓦が4種の型式と型式不明(未設定)瓦2点出土している。宇瓦は三重弧文・四重弧文・牛角状中心飾りを有する均整唐草文等、創建期瓦が多い。

④・⑤北西地区では、鏡瓦が7種の型式と型式不明(未設定)瓦5点、宇瓦が11種の型式と型式不明(未設定)瓦2点出土している。宇瓦では三重弧文・四重弧文の重弧文系が多い。

⑥南西地区では、型式不明(未設定)の鏡瓦2点、宇瓦では321-C型式と型式不明の2点が出土している。

⑦中門西側で南辺地区の第226次調査地点では、鏡瓦は10種の型式と型式不明(未設定)が8点出土し、創建期では南比企勝呂系が見られる。宇瓦は18種の型式があり、TNT No.944瓦窯の281-D型式や谷野窯の283型式、セイカチクボ窯の359型式などが認められる。セイカチクボ窯の製品は、同窯に近いTNT No.243・244遺跡で堅穴住居のカマド構築材に転用された事例を根拠に、9世紀後半前後の時期に比定する見解(長佐古2004)と、頸の形態が武蔵国分寺創建期の曲線頸に近いことや窯構造から9世紀初頭前後の時期に充てる見解(有吉1995)がある。

⑧同じく中門西側の第360次調査地点では、鏡瓦は5種と型式不明(未設定)が3点出土し、南比企の久保1号窯と同范の新羅系81型式がみられる。また宇瓦は11種あり、三重弧文・新久窯Ⅲ類・高岡廃寺や勝呂廃寺と同范の236型式が目立って出土している。

【塔跡1】 鏡瓦(第46・47図)は53種の型式と型式不明(未設定)の瓦が16点出土している。昭和39～44年度調査の報告書において、「出土不明」の表記がある瓦の多くは塔跡1の可能性が指摘されているが(滝口1987)、本集成図からは除外し、明確に塔跡出土品と表記された瓦のみを掲載したものの、それでも型式数は他の堂舎に比べて最も多い。創建期の南比企窯では上野系・勝呂系・平城宮系があり、南多摩窯はTNT No.513窯A・C②類、瓦谷戸窯Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅶ類が認められる。宇瓦(第58・59図)も47種の型式と型式不明(未設定)の瓦3点があり、型式数としては最も多様で、創建期の意匠では、三重弧文・四重弧文・五重弧文、南比企平城宮系、新沼窯ⅠB型式、牛角状中心飾りを持つ均整唐草文4種(235-A・C・D・E型式)などが見られる。

【塔跡2】 鏡瓦(第49図)は10種の型式と型式不明(未設定)の瓦9点が出土している。鏡瓦では11型式としている中房に旋回文様を施す一帯が目立った出土状況で、本瓦については後述する。その他、南比企上野系・TNT No.513窯A類・瓦谷戸窯Ⅶ類等の創建期瓦も含んでいる。宇瓦(第60図)は25種の型式と型式不明(未設定)瓦7点が出土している。最も多いのは三重弧文と236型式が各4点で、八坂前窯Ⅵ類・新久窯Ⅱ類の233型式が3点と続く。

【塔跡2周辺地区】 鏡瓦(第48図)は5種の型式と型式不明(未設定)瓦8点、宇瓦(第61図)は4種の型式と型式不明(未設定)瓦2点が出土している。

【南門跡】 調査範囲から鏡瓦は確認されなかったが、宇瓦(第62図)では282-A型式が1点出土している。

(注1) 宮崎礼が示した宇瓦は拓影図を見る限り、「奈良時代」の鏡瓦は大丸もしくは瓦谷戸窯、宇瓦は八坂前窯Ⅰ-Ⅰ類、「稍後れた時代」の鏡瓦は八坂前窯Ⅲ-Ⅰ類、宇瓦は新沼Ⅰ-C型式に類似しており、今日的な観点からすると宇瓦の先後関係は逆といえる。

(注2) 酒井清治氏の剣菱文軒丸瓦分類2類(酒井1990・2015)に該当する瓦で、武蔵国分寺ではその後の発掘調査で出土例が見られない唯一の資料である。

表 20 型式付与燈瓦の生産地情報と掲載図版番号対照表 (1)

型式名	産地等情報	遺物図版No.
4		[S31 金堂] 1 [S39 塔跡 1] 1
5	南比企	[S31 金堂] 2 [S39 塔跡 1] 21
11		[金堂] 63 [東僧坊 (19 次)] 4 [金堂・講堂間] 24 [塔跡 2] 22 ~ 50
22		[S39 塔跡 1] 36
23-A		[金堂] 22 [S31 金堂] 4 [区画南辺 (第 226 次)] 16
23-B	谷久保瓦窯	[S31 講堂] 47 [区画南辺 (中門東)] 11 [区画南辺 (S31D 地区)] 47 [北西 2] 7・9 [S39 塔跡 1] 33
23-C		[S31 金堂] 37 [中門] 9 (23-C ㌘) [区画南辺 (S31D 地区)] 37
24-A		[鐘樓] 4 [北西 2] 11 [区画南辺 (第 360 次)] 28
24-B		[S31 金堂] 6
26-A	八坂前瓦窯Ⅲ-2 類	[S31 金堂] 5 [講堂] 7・10 [金堂・中門間] 1 (26 ㌘) [塔跡 1] 4 [塔跡 2] 11 [塔跡 2] 10 (26-A ㌘)
26-C	八坂前瓦窯Ⅲ-1 類	[金堂・講堂間] 13 [S39 塔跡 1] 22・23
26-D		[金堂] 11 [S31 金堂] 41 [講堂] 5 [S31 講堂] 41 [東僧坊 (19 次)] 3 [区画南辺 (S31D 地区)] 41
26-E		[金堂] 9
27	八坂前瓦窯Ⅳ類・新久瓦窯Ⅰ類	[S31 金堂] 33 [区画南辺 (S31D 地区)] 33 [区画南辺 (第 226 次)] 21 [塔跡 1] 8 [S39 塔跡 1] 24
28	新久瓦窯Ⅳ類・谷久保瓦窯	[金堂] 16・17 [講堂] 11・12 [S31 講堂] 22 [金堂・講堂間] 10 [区画南辺 (中門東)] 13 [区画南辺 (第 226 次)] 20 [S39 塔跡 1] 38 [塔跡 2] 13
29-B		[金堂] 29・32・33 [S31 金堂] 32 [S31 講堂] 32
29-C	鳩山窯跡群広町 B (改范?)	[金堂] 28・30 [金堂] 27 (29-C ㌘)
29-D	鳩山窯跡群広町 B (改范?)	[S31 金堂] 13 [講堂] 31・32 [北西 2] 10
29-E		[金堂・中門間] 2 [S39 塔跡 1] 27 [S39 塔跡 1] 37 (29-E ㌘) [塔跡 2] 15 (29-E ㌘)
29-F		[金堂] 25・26 (29-F ㌘) [S31 金堂] 7 [講堂] 26 [講堂] 28 (29-F ㌘) [S39 塔跡 1] 35
29-G1		[S39 塔跡 1] 31
29-G2	八坂前瓦窯Ⅱ類	[S39 塔跡 1] 30
30-B	御殿山窯Ⅰ a 類 武蔵国府	[金堂] 37・39 ~ 41 [S31 金堂] 9 [中門] 17 (30-B ㌘)
30-C	御殿山窯Ⅰ b 類	[S31 金堂] 11
30-D		[区画南辺 (S31D 地区)] 44
31	八坂前瓦窯Ⅰ類	[S31 金堂] 10 [中門] 8 [区画南辺 (中門東)] 12 [S39 塔跡 1] 34
32		[中門] 19
33		[S31 金堂] 8
34	八坂前瓦窯?	[講堂] 51
35		[S39 塔跡 1] 25
新 2		[金堂] 61 [中門] 11 (新 2 ㌘)
61-A	高句麗系	[金堂] 45 ~ 47 [S31 金堂] 35 [講堂] 23・24 [金堂・講堂間] 12 [区画南辺 (S31D 地区)] 35 [北辺] 5 [S39 塔跡 1] 40 [塔跡 2 周辺] 13
61-B		[区画南辺 (第 226 次)] 6
62	鳩山窯跡群 (広町 B 遺跡・小谷 B 遺跡) 一本作り	[区画南辺 (第 226 次)] 9 [塔跡 2] 3
63	八坂前瓦窯Ⅴ類・新久瓦窯Ⅲ類	[金堂] 18 ~ 21 [S31 金堂] 14 [講堂] 13 (63 ㌘) [S39 中門] 18 [区画南辺 (中門東)] 9 [北辺] 3 [塔跡 1] 10・12 [S39 塔跡 1] 18 [塔跡 2] 12 [S39 塔跡 1] 6 (63 型式の後継㌘)
64-A	八坂前瓦窯Ⅵ類	[S39 塔跡 1] 39
64-A'		[S39 塔跡 1] 41
65-A		[金堂] 49・50・52 (65 型式類似の 5 弁) [講堂] 52 (65 型式類似の 5 弁)
65-B1		[S39 金堂] 28 [S39 塔跡 1] 28
65-B2		[S39 金堂] 29 [S39 塔跡 1] 29
65-B3		[S31 金堂] 15
65-B4		[S31 金堂] 30 [S31 講堂] 30
新 1		[金堂] 59 [区画南辺 (第 360 次)] 24
81	久保 1 号瓦窯 新羅系	[金堂・講堂間] 7 [区画南辺 (第 360 次)] 29
82	南比企上野系	[S39 塔跡 1] 60
82-A1	南比企上野系 一本作り	[S39 塔跡 1] 47
82-B	南比企上野系	[S39 塔跡 1] 16 [北西 2] 2
82-B1	一本作り	[塔跡 1] 1
82-B2	南比企上野系	[S31 講堂] 25
82-B2'	南比企上野系	[S39 塔跡 1] 11
82-C	南比企上野系	[S39 塔跡 1] 7
82-D	南比企上野系	[S39 塔跡 1] 48

表 20 型式付与證瓦の生産地情報と掲載図版番号対照表 (2)

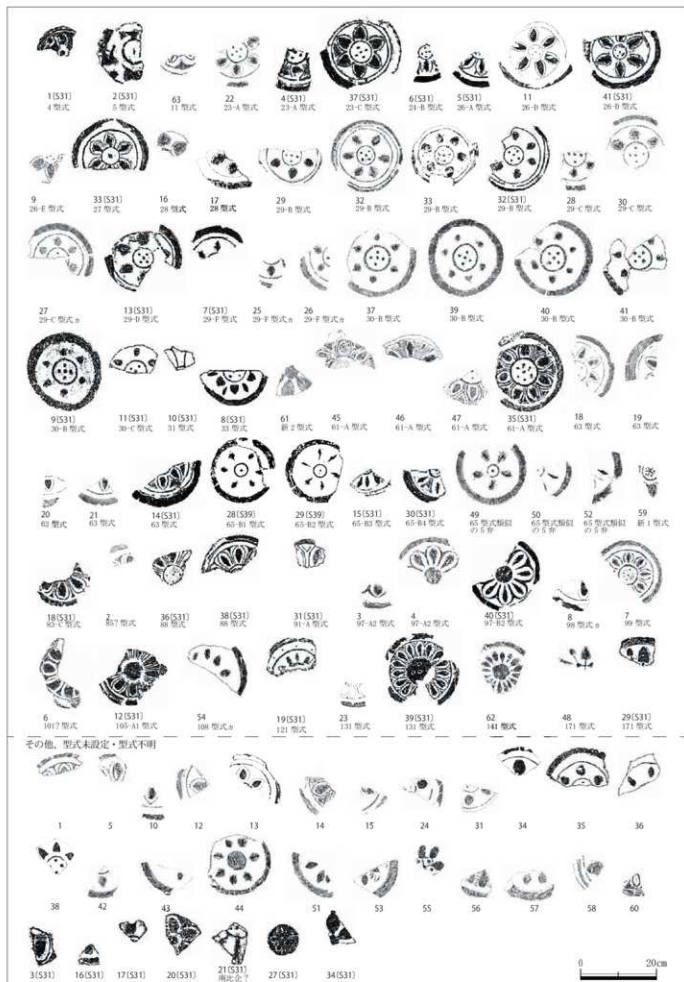
型式名	産地等情報	遺物図版No.
83-A	南多摩国府系 A 群 瓦谷戸瓦窯IV類 武蔵国府	[S39 塔跡 1] 46
83-B	南多摩国府系 A 群 TNT No. 513 道跡 A 類・瓦谷戸瓦窯Ⅲ類	[講堂] 1 [区画南辺 (中門東)] 1 [S39 塔跡 1] 44 [塔跡 2] 4~6
83-C	南多摩国府系 A 群 瓦谷戸瓦窯 I 類	[S31 金堂] 18 [S39 塔跡 1] 14
83-D?		[S39 塔跡 1] 55
83-F?		[S39 塔跡 1] 43・61
84-A	南比企上野系	[S39 塔跡 1] 5
84-B	南比企上野系	[S39 塔跡 1] 50
85-A2	南比企勝呂系 金沢・石田国分寺瓦窯	[区画南辺 (S31D 地区)] 42 [区画南辺 (第 226 次)] 19
85-A3	南比企勝呂系	[S39 塔跡 1] 56
85?	南比企勝呂系	[金堂] 2
86		[S31 講堂] 28 [区画南辺 (第 360 次)] 30 [S39 塔跡 1] 45
87	南多摩国府系 A 群 TNTNo. 513 道跡 C 2 類・瓦谷戸瓦窯 V 類	[S39 塔跡 1] 49
88	南比企	[S31 金堂] 36・38 [金堂・講堂間] 6 (88 ㍴) [中門] 5・6 [区画南辺 (中門東)] 5 (88 ㍴) [区画南辺 (S31D 地区)] 36・38 [北西 2] 3 [区画南辺 (第 226 次)] 10 [S39 塔跡 1] 51 [S39 塔跡 1] 10 (88 ㍴)
90		[S39 塔跡 1] 58
91-A		[S31 金堂] 31 [S31 講堂] 31
92		[S39 塔跡 1] 17
93		[S31 講堂] 23 [S39 塔跡 1] 15
95-A	八坂前瓦窯Ⅸ類 高句麗系	[講堂] 18~22 [S31 講堂] 24 [中門] 10 [区画南辺 (第 226 次)] 17
96	瓦谷戸瓦窯Ⅷ類	[S39 塔跡 1] 42 [塔跡 2] 2
97-A	南比企	[中門] 3・4 [塔跡 2 周辺] 5
97-A2	南比企	[金堂] 3・4
97-B1	南比企	[金堂・講堂間] 2 [中門] 2 [北西 2] 4・5 [塔跡 2 周辺] 6
97-B2	鳩山窯跡群 (広町 B 道跡・小谷 B 道跡) 新沼窯跡群 I b 類	[S31 金堂] 40 [区画南辺 (S31D 地区)] 40
98	南比企	[金堂] 8 (98 ㍴) [区画南辺 (S31D 地区)] 45 [区画南辺 (第 226 次)] 15
99	石田国分寺瓦窯	[金堂] 7 [S39 鐘樓] 20 [区画南辺 (S31D 地区)] 46 [S39 塔跡 1] 20 [塔跡 2] 9
100-A	南比企平城宮系 (鳩山窯跡群広町 B 第 3 号窯・新沼 1 次 C 区 II A 型式)	[北西 1] 1 [S39 塔跡 1] 53
100-B	南比企平城宮系 新沼瓦窯跡・天沼瓦窯跡	[金堂・講堂間] 9 [S39 塔跡 1] 52 [塔跡 2 周辺] 7
101		[S39 塔跡 1] 12
101?		[金堂] 6
103-A	南比企	[金堂・講堂間] 16
104	南比企	[S39 塔跡 1] 57 (104 ㍴)
105-A1	南比企在地系	[S31 金堂] 12
106-A	南比企上野系	[中門] 1 (106-A ㍴) [区画南辺 (中門東)] 4
108		[金堂] 54 (108 ㍴) [金堂・講堂間] 23 [S39 塔跡 1] 8
121	南比企平城宮系	[S31 金堂] 19 [S39 中門] 19 [S39 塔跡 1] 19 [塔跡 2 周辺] 8
131		[金堂] 23 [S31 金堂] 39 [講堂] 16 [中門] 12~14 [区画南辺 (S31D 地区)] 39 [区画南辺 (第 226 次)] 8・12 [S39 塔跡 1] 63
132-A	南比企上野系 一本作り 新羅系	[S39 塔跡 1] 64 [S39 塔跡 1] 68 (132-A ㍴) [塔跡 2] 1
132-B	南比企上野系 一本作り 新羅系	[区画南辺 (中門東)] 2
141	大仏庵寺と同範㍴	[金堂] 62
171	高句麗系	[金堂] 48 [S31 金堂] 29 [講堂] 25 [S31 講堂] 29 [鐘樓] 1 [金堂・講堂間] 11 [区画南辺 (第 360 次)] 25 [S39 塔跡 1] 26

表 21 型式付与宇瓦の生産地情報と掲載図版番号対照表 (1)

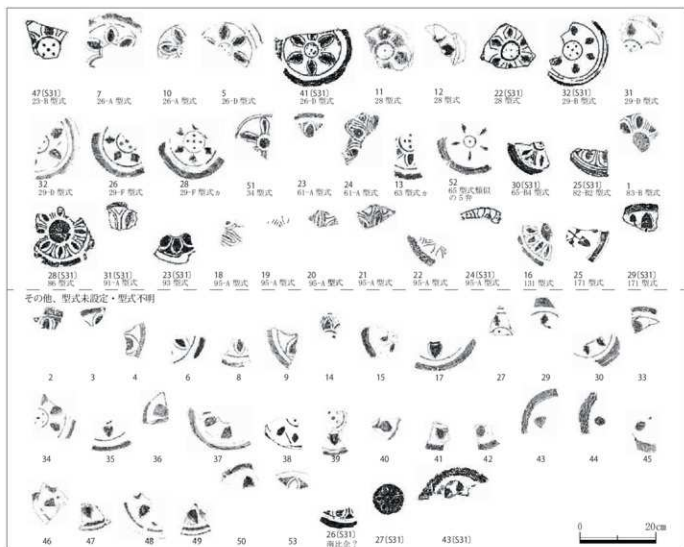
型式名	産地等情報	遺物図版No.
201		
201-A		[金堂] 1 (3G)・2 (G) [S31 金堂] 68・69・76 (3G) [講堂] 1 (3G)・2～4 (G) [S31 講堂] 68・69 (3G) [鐘樓] 1 (3G) [金堂・講堂間] 1 (3G) [中門] 1～6 (3G) [区画南辺 (中門東)] 1～3 (3G)・6 (G) [区画南辺 (S31D 地区)] 76・93・98・100 (3G) [北辺] 2 (3G) [北西 2] 1～3 (3G)・5 (G) [区画南辺 (第 226 次)] 58 (3G) [区画南辺 (第 360 次)] 62・67 (3G) [塔跡 1] 1 (G)・2 (3G) [S39 塔跡 1] 123～126・129 (3G) [塔跡 2] 1～4 (3G) [塔跡 2 周辺] 1～3 (3G)
201-B		
201-C	G, 3G	
201-?		
202		
203		
216	4G	[北辺] 1 [北西 2] 4 [S39 塔跡 1] 127・128・131
217		
226	5G	[S39 塔跡 1] 103
231-A	南比企平城宮系	[S31 金堂] 48 [講堂] 21
231-B	南比企平城宮系	[S39 塔跡 1] 130・132・133
232-A	南比企平城宮系 天沼瓦窯 B 区 1 号窯	[S39 塔跡 1] 134
232-B		[S31 講堂] 61 [中門] 11 [S39 中門] 115・116 [区画南辺 (中門東)] 4 [S39 塔跡 1] 115・116
232-C	谷久保瓦窯	[金堂] 20・22 [区画南辺 (S31D 地区)] 94 [区画南辺 (第 226 次)] 50・59 [S39 塔跡 1] 135 [塔跡 2] 15 [塔跡 2 周辺] 7
232-D	八坂前瓦窯 I - 1 類・新久瓦窯 I 類	[金堂] 17～19・24 [S31 金堂] 78・79 [講堂] 23 [中門] 10 [S39 中門] 114・118 [区画南辺 (S31D 地区)] 78・79 [塔跡 1] 3～10 [S39 塔跡 1] 114・118 [塔跡 2] 16
232-D'		[東僧坊 (第 19 次)] 35 [区画南辺 (第 226 次)] 53
232-E	谷津池瓦窯・新久瓦窯?	[金堂] 21・23 [S31 講堂] 89 [区画南辺 (S31D 地区)] 89 [区画南辺 (第 226 次)] 40 [S39 塔跡 1] 136 [塔跡 2] 18
232-E'		[S31 講堂] 90 [区画南辺 (S31D 地区)] 90
233	八坂前瓦窯 VI 類・新久瓦窯 II 類	[金堂] 25～27 [S31 金堂] 86 [講堂] 24～26 [S31 講堂] 86 [区画南辺 (S31D 地区)] 86 [北西 2] 9 [区画南辺 (第 226 次)] 41 [S39 塔跡 1] 138 [塔跡 2] 20～22 [塔跡 2 周辺] 8
234-A	新久瓦窯 III 類 武藏国府	[金堂] 28 [S31 金堂] 70 [S31 講堂] 70 [北西 2] 10 [区画南辺 (第 360 次)] 63 [S39 塔跡 1] 137
234-C	新久瓦窯? 勝呂庵寺	[S31 金堂] 49 [塔跡 2] 25
234-E		[S31 金堂] 50
235-A	南多摩国府系 B 群 酒井分類 A 1 類	[北辺] 5 [S39 塔跡 1] 142
235-C	酒井分類 A 2 類	[S39 塔跡 1] 144
235-D	酒井分類 A 3 類	[S39 塔跡 1] 143
235-E	酒井分類 A 4 類	[S39 塔跡 1] 106
235-H	新沼 12 号窯 II A 型式	[S31 金堂] 80 [講堂] 20 [区画南辺 (S31D 地区)] 80 [塔跡 2] 29
235-I	南比企	[区画南辺 (S31D 地区)] 101 [S39 塔跡 1] 104
236	高岡瓦窯 勝呂庵寺	[金堂] 32 [S31 金堂] 88 [講堂] 31・32 [S31 講堂] 88 [金堂・講堂間] 9 [中門] 13 [区画南辺 (S31D 地区)] 88 [北西 2] 15 [区画南辺 (第 360 次)] 66・68・70 [S39 塔跡 1] 141 [塔跡 2] 34～37
237	八坂前瓦窯 IV 類	[S31 金堂] 52
238		[S31 金堂] 82 [区画南辺 (S31D 地区)] 82 [北辺] 6 [北西 2] 11 [S39 塔跡 1] 139
239-A		[S31 金堂] 53 [塔跡 1] 11
239-B		[北西 2] 8
240	南比企	[S31 金堂] 81・87 [講堂] 33・34 [S31 講堂] 87 [鐘樓] 7 [金堂・講堂間] 10 [中門] 14 [S39 中門] 119 [区画南辺 (S31D 地区)] 81・87 [北西 1] 1 [S39 塔跡 1] 119 [塔跡 2] 38
241	南比企	[S31 金堂] 51 [塔跡 2] 32
242		[S39 塔跡 1] 140
243		[塔跡 2] 19
244		[塔跡 2] 40・41
245		[講堂] 28 [鐘樓] 8 [塔跡 2] 30
246		[S39 中門] 122
247-A		[講堂] 27 [金堂・講堂間] 12 (247-A 外) [区画南辺 (中門東)] 5 [区画南辺 (S31D 地区)] 97 [塔跡 2] 26・27
248-A	高岡瓦窯 勝呂庵寺	[S31 金堂] 73 [講堂] 29・30 [S31 講堂] 73 [金堂・講堂間] 8 [北西 2] 13・14 [S39 塔跡 1] 146 [塔跡 2] 33
249	八坂前瓦窯 III 類	[S31 講堂] 62 [S39 塔跡 1] 145
250	南比企	[区画南辺 (第 226 次)] 60
252	八坂前瓦窯 II 類	[S39 塔跡 1] 107
253		[塔跡 2] 28
281-A	瓦谷戸瓦窯 III 類 石田国分寺瓦窯	[金堂] 14 [S31 金堂] 54

表 21 型式付与宇互の生産地情報と掲載図版番号対照表 (2)

型式名	産地等情報	遺物図版No.
281-B	八坂前瓦窯V類 下落合瓦窯	[金堂] 15 [講堂] 18 [東僧坊 (第19次)] 36 [S39塔跡1] 149 [塔跡2] 9・10 [塔跡2周辺] 4
281-C	谷野瓦窯	[講堂] 5 [東僧坊 (第19次)] 37 [北西] 2 6 [区画南辺 (第226次)] 48
281-D	TNTNo. 944 瓦窯	[区画南辺 (第226次)] 47・57 [S39塔跡1] 147
282-A	南比企 石田因分寺瓦窯	[金堂] 8 [S31金堂] 84 [東僧坊 (第19次)] 38 [中門] 7 [区画南辺 (S31D地区)] 84 [区画南辺 (第226次)] 45 [南門] 1 (282-A ㊦)
282-B	南比企	[金堂] 6・7 [S31金堂] 71・77 [講堂] 9～11 [S31講堂] 71・77 [金堂・講堂間] 3・4 [塔跡2] 6
282-C	南比企	[S31講堂] 64
282-D	南比企 新沼瓦窯1次C区I B型式	[金堂] 3～5 [S31金堂] 83 [講堂] 13 [金堂・講堂間] 5 [中門] 8 (282-D ㊦) [区画南辺 (S31D地区)] 83 [S39塔跡1] 109 [塔跡2] 5 (282-D ㊦)
282-E	南比企	[区画南辺 (S31D地区)] 96 [区画南辺 (第226次)] 43 [S39塔跡1] 150
283	谷野瓦窯	[S39鐘樓] 120 [金堂・講堂間] 2 [第226次] 54
284	高岡瓦窯	[金堂] 16 [S31金堂] 85 [金堂・講堂間] 7 [区画南辺 (S31D地区)] 85 [S39塔跡1] 148
285-A		[金堂] 9
285-B		[金堂] 10 [講堂] 16 (285-B ㊦) [金堂・講堂間] 6 [区画南辺 (第226次)] 46
285-D		[金堂] 13 [S39鐘樓] 121 [中門] 9 (285-D ㊦) [区画南辺 (S31D地区)] 102 [区画南辺 (第360次)] 64
285-?		[金堂] 12
287-A		[S39塔跡1] 108
287-B		[区画南辺 (第360次)] 69
288	谷津池瓦窯	[東僧坊 (第19次)] 39 [区画南辺 (第360次)] 72
289		[金堂] 11 [講堂] 15 [S39塔跡1] 151
290	鳩山窯跡群 (広町B第11号窯・小谷B遺跡)	[S31金堂] 55 [区画南辺 (第226次)] 42 [S39塔跡1] 111
292		[塔跡2] 11～14
294-A		[区画南辺 (第360次)] 74
295	南比企	[区画南辺 (S31D地区)] 99 [S39塔跡1] 110
296		[講堂] 19 (296 ㊦) [塔跡2] 7
321-A		[中門] 17 (321-A ㊦) [北西] 1 2 (321-A ㊦) [S39塔跡1] 154 (321-A ㊦)
321-C		[S31金堂] 72 [S31講堂] 72 [金堂・講堂間] 14 (321-C ㊦) [南西] 1 (321-C ㊦) [区画南辺 (第226次)] 52・55 [S39塔跡1] 155 [塔跡2] 44～46 (321-C ㊦)
321-D		[S31金堂] 56 [中門] 19 (321-D ㊦)
322		[S39塔跡1] 158
322-A		[中門] 18 (322-A ㊦) [区画南辺 (S31D地区)] 103 [区画南辺 (第360次)] 73 [S39塔跡1] 159
322-C		[金堂] 37 [金堂・講堂間] 11 (322-C ㊦)
322-F		[講堂] 40 (322-F ㊦) [S31講堂] 66 [金堂・講堂間] 13 (322-F ㊦)
322-新		[S39塔跡1] 157
323-A		[講堂] 38 (323-A ㊦)
341-B		[S39塔跡1] 152・153
351		[S31金堂] 74 [S31講堂] 74 [金堂・講堂間] 15 (351 ㊦) [区画南辺 (第360次)] 65 [S39塔跡1] 156
355		[金堂] 40～43 (355 ㊦) [S31金堂] 75 [S31講堂] 75 [金堂・講堂間] 16 (355 ㊦) [区画南辺 (第360次)] 61 [S39塔跡1] 162
356		[S39塔跡1] 163 [塔跡2] 39 (356 ㊦)
357-A		[S31金堂] 60
358		[金堂] 35 [講堂] 35 [S39中門] 117 [区画南辺 (第226次)] 56 [S39塔跡1] 117
359	セイカチクボ瓦窯	[区画南辺 (第226次)] 49
361		[金堂] 33 [S31金堂] 58
362		[S39塔跡1] 113
364		[金堂] 31 [S31講堂] 67
365	鳩山窯跡群 (広町B遺跡・小谷B遺跡)	[講堂] 6～8 [S31講堂] 91 [区画南辺 (S31D地区)] 91 [区画南辺 (第226次)] 44 [S39塔跡1] 161
368-A		[S31金堂] 59 [区画南辺 (第360次)] 71
369-A		[中門] 15
369-B		[塔跡2] 47 (369-B ㊦)
369-C		[S39塔跡1] 112
370	南比企	[S31金堂] 57 [中門] 16 [S39塔跡1] 160
374		[塔跡2] 43
375		[区画南辺 (第226次)] 51



第38図 金堂出土鍔瓦の様相

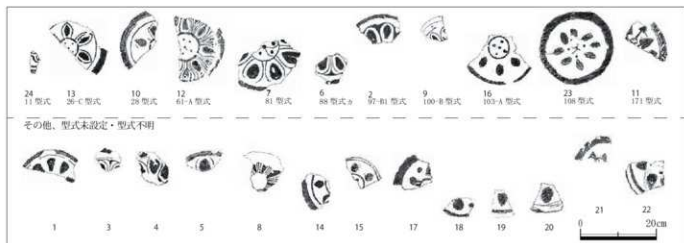


第39図 講堂出土鍔瓦の様相



第40図 鐘樓出土鍔瓦の様相

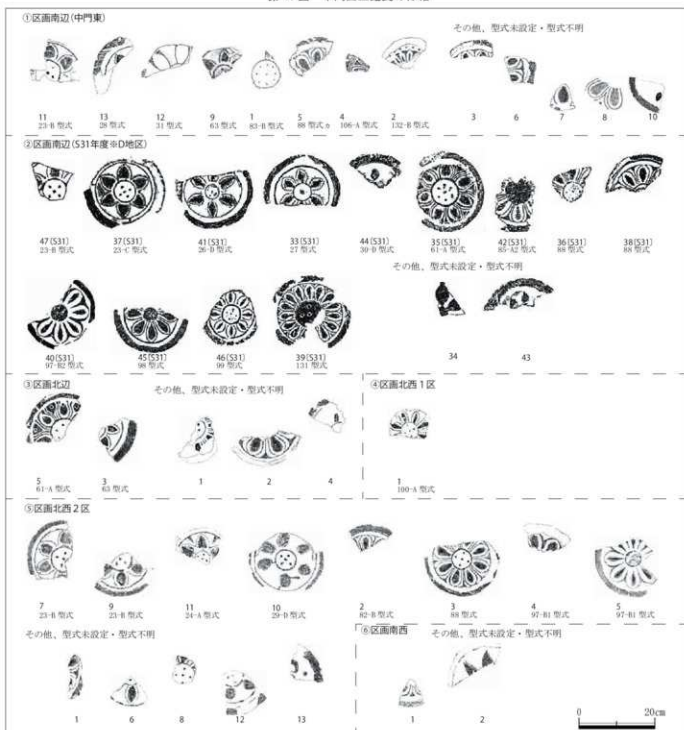
第41図 東僧坊（第19次）出土鍔瓦の様相



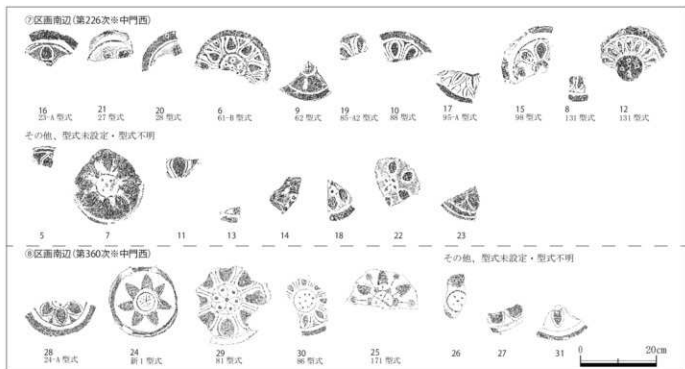
第42図 金堂・講堂間出土鍔瓦の様相



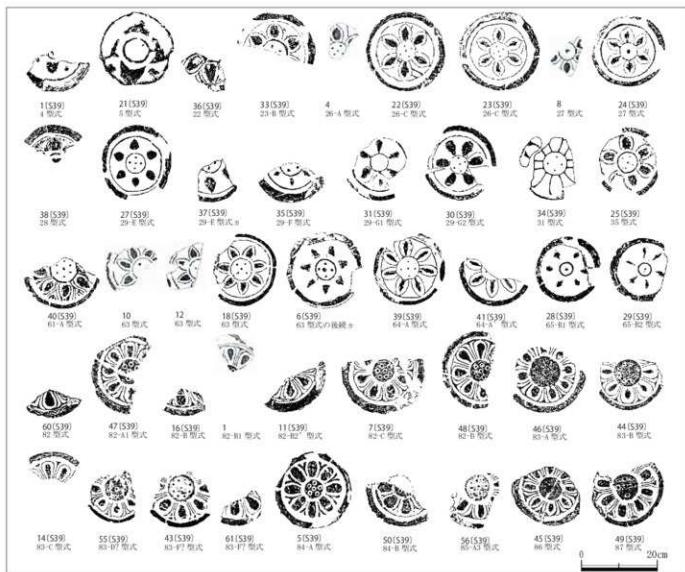
第43図 中門出土葺瓦の様相



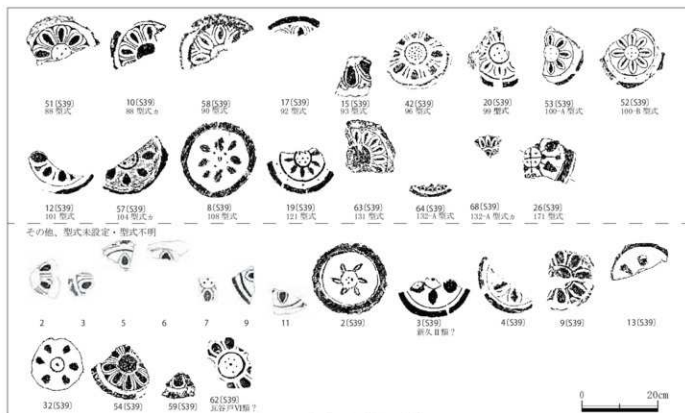
第44図 伽藍中部区画施設出土葺瓦の様相(1)



第45図 伽藍中柵部区画施設出土鍔瓦の様相(2)



第46図 塔跡1出土鍔瓦の様相(1)



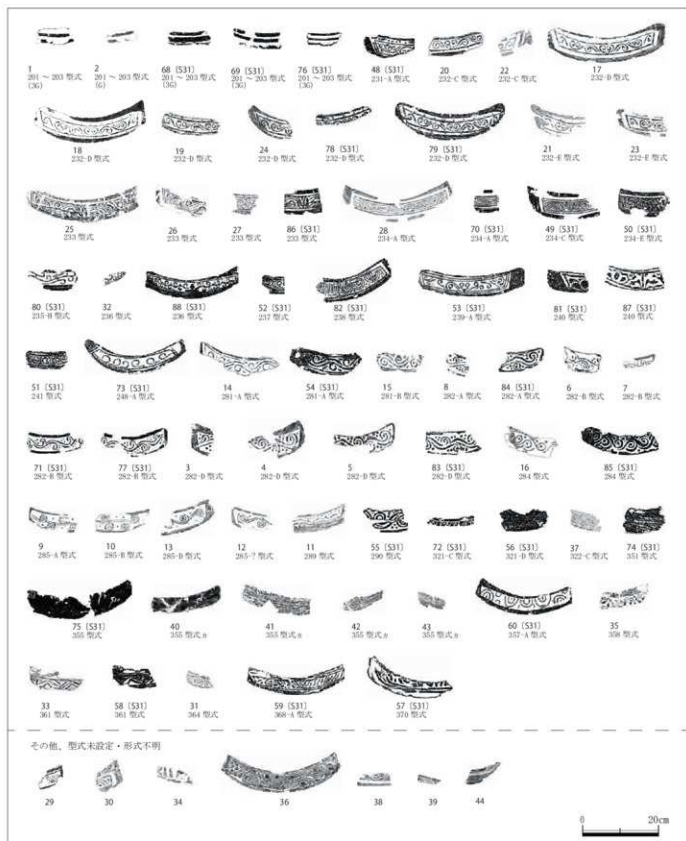
第47図 塔跡1出土甃瓦の様相(2)



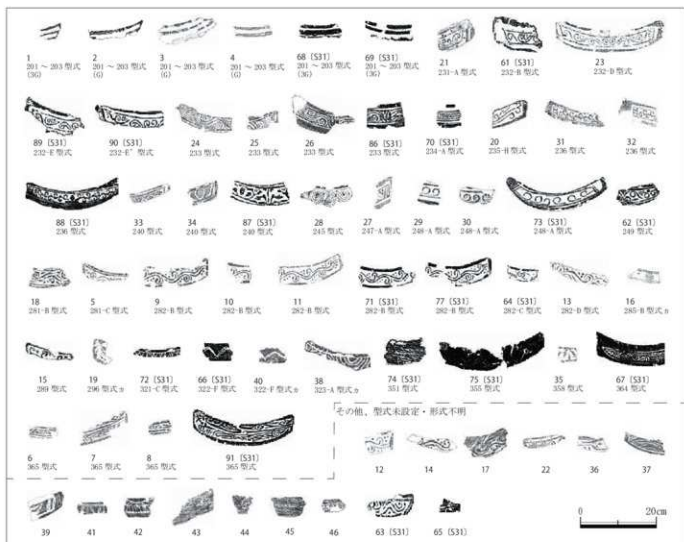
第48図 塔跡2出土甃瓦の様相



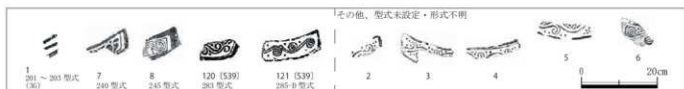
第49図 塔跡2周辺出土甃瓦の様相



第50図 金堂出土宇瓦の様相



第 51 図 講堂出土土瓦の様相



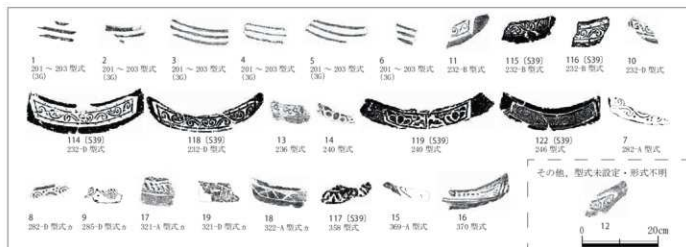
第 52 図 鐘樓出土土瓦の様相



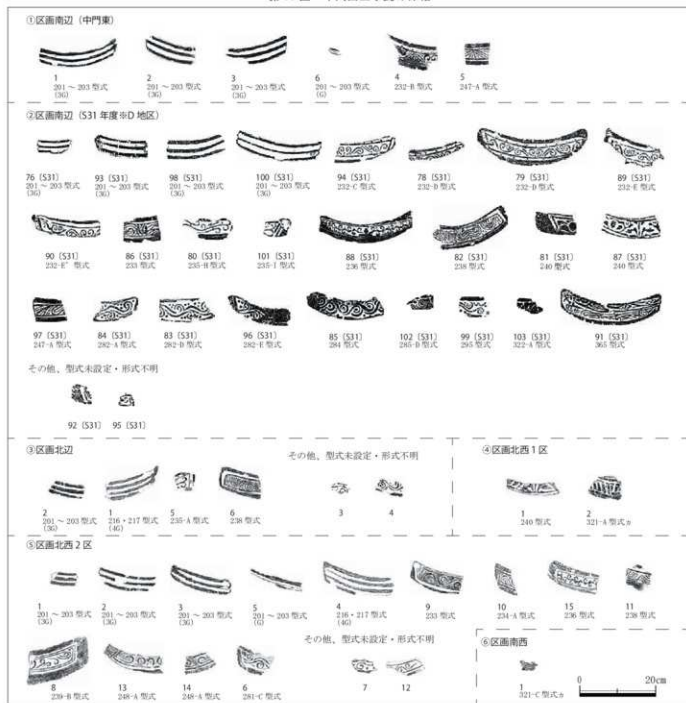
第 53 図 東僧坊（第 19 次）出土土瓦の様相



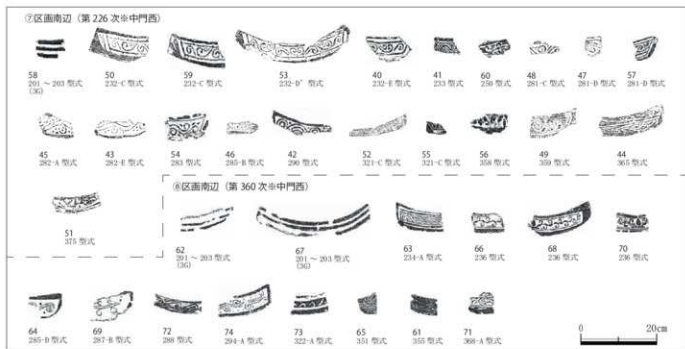
第 54 図 金堂・講堂間出土土瓦の様相



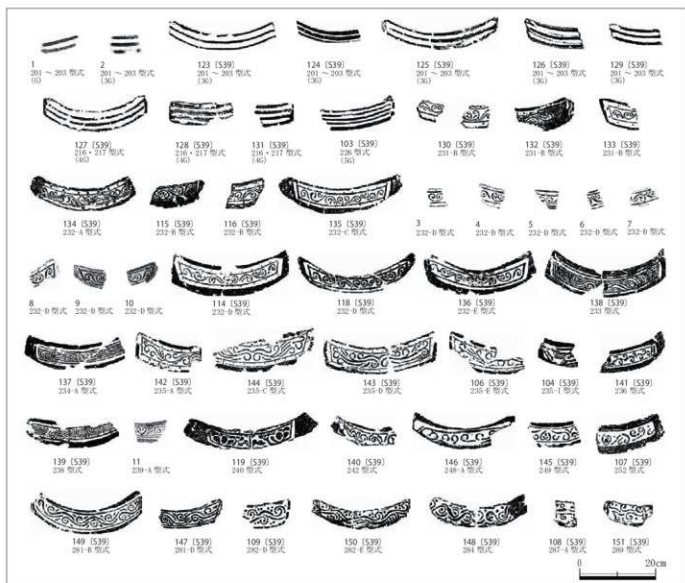
第55図 中門出土宇瓦の様相



第56図 伽藍中樞都区画施設出土宇瓦の様相 (1)



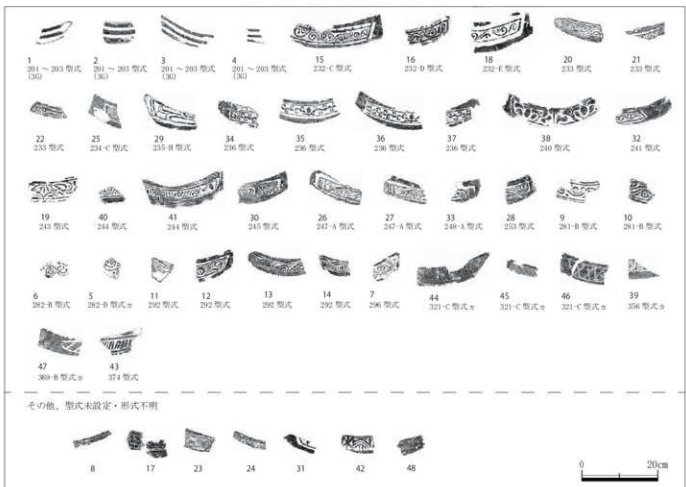
第 57 図 伽藍中柵部区画施設出土土瓦の様相 (2)



第 58 図 塔跡 1 出土土瓦の様相 (1)



第59図 塔跡1出土宇瓦の様相(2)



第60図 塔跡2出土宇瓦の様相



第61図 塔跡2周辺出土宇瓦の様相



第62図 南門出土宇瓦の様相

塔跡2出土の変形唐草文単弁五葉蓮華文鏡瓦について

塔跡2からは、他の諸堂には見られない、中房内に巴状もしくは旋回する花文状の文様を施す特異な変形唐草文の鏡瓦が数多く出土している（図面47-22～図面50-50）。既刊の発掘調査概報（中道2008）やその他の刊行物（太田・増井2015）等では、これまで「003型式」鏡瓦として紹介してきた経緯のある鏡瓦であるが、武蔵国分寺跡出土の鏡瓦の型式番号は表19に掲げたとおり、原則的に4弁が001～010、5弁が011～020、6弁が021～060（以下略）としており、本鏡瓦は5弁であることが判明しているため、本来は011以降の番号を付与すべきのものであった。既存台帳の型式番号に照らすと5弁の鏡瓦は「011型式」のみが設定されていて、「011型式」も中房には蓮子の珠ではなく、旋回する花文状の文様を施す点で本鏡瓦とは非常に類似した特徴を備えているが、蓮弁の外形や中房の輪郭線・文様が陽刻であるのに対して、塔跡2出土の本鏡瓦は陰刻で表現している点で大きく様相を異にしている（第63図）。この「011型式」の陽刻瓦は、古くは大正12年の東京府による調査で、後藤守一が武蔵国分寺出土の「巴瓦（鏡瓦）」を「圓様ハ変異ニ富ムモ、花卉区中房区ノ手法ニ見テ大體ニ於イテ三型式ニ分カチ、更ニ之ヲ十種ニ細分スルヲ得ベシ。第一ノ型式ハ第一種ヨリ第五種ニ及ビ以下第九種迄ヲ第二型式トナシ、第十種ヲノミ第三ノ型式トスベシ」としたうえで、このうちの第三ノ型式に分類し、「前述セルニ系統ト全ク類ヲ異ニシ、花卉区ニ於イテ、花卉ニ肉置キナク、只線ヲ以テ表セルバ、上野伊勢崎町在ノ植木庵寺址発見ノモノニ似タルモノアルヲ注意スベシ。中房区又蓮子ヲ作ラズシテ巴文ヲ以テセリ。（中略）類品極メテ稀ナルガ如シ」と述べ、中房に巴状の文様を配する点で特異な瓦として注目を寄せていた（後藤1923）。

一方、塔跡2から出土した印刻の鏡瓦は、今次の調査で掲載・非掲載資料も含めて64点が確認され（掲載29点、非掲載35点）、さらに金堂地区で1点（図面26-63）、金堂・講堂間でも1点（図面36-24）出土している。これらは胎土や焼成等の観察所見から、①胎土が灰褐色で、砂粒を多く含み、硬質な焼き上りのもの、②胎土が灰白色で、砂粒が少なく、軟質な焼き上りのもの、③胎土が灰褐色で、砂粒を含み、割口の断面がサンドイッチ状となる生焼けのやや軟質なもの、のおおよそ3種に分類が可能で、塔跡2地区では、それぞれ①は25点、②は28点、③は11点を数える。また、瓦当裏面の調整は、A：ナデ・ユビナデを施すものが51点、B：縄目叩きを施すものが4点、C：剥落して調整観察が不能なものが9点で、このうち①の製品でAは22点・Bは3点、②の製品でAは21点・Bは1点・Cは6点、③の製品でAは8点・Cは3点の内訳であった。なお、すべての破片で観察できる訳ではないが、瓦当と男瓦の接合は差し込み技法（22・23・25）とはめ込み技法と思われるもの（29）の2種があり、瓦当面の厚みは総じて2cm前後と薄作りの印象である。

これら陽刻・陰刻の2種ある同文の鏡瓦は、かつて石村喜英が武蔵国分寺跡出土の軒丸瓦を一～七類に区



第63図 中房に旋廻花文状の文様を施す鏡瓦（腰浜庵寺出土例との比較）

分したうちの、「本遺跡出土のものとして技法の巧拙に拘らず注目してよいものであるが、(中略)独自の味わいは、他と比較することのできない意味で格別の興趣を惹くものがある」という「六類 四辨式」に該当する(石村 1952、後石村 1960 に記載)。石村はこれらの鏡瓦の特徴として、「陰形及び陽形表示の差こそあれ、ともに重線表示が行われて明らかに異色」であり、「単調異例の蓮辨の上に、中房内に三ツ巴文様を配するなど、中房だけに限るとすれば、福島市腰浜出土のものを除いては、殆ど時代の下ったもの以外には見出されぬ」とし、早くから腰浜廃寺出土瓦との類似性について着目したが、いずれも小片で瓦当文様の全形が知り得る資料が無く、「六類 四辨式」と呼称したように、当時は単弁四弁蓮華文と認識していた様子が窺える。

なお、「011 型式」相当の陽刻瓦は、石村喜英が北院・金堂址等で採集された織戸市郎氏・宮崎礼氏・徳藏寺の所蔵資料を紹介している他に、平塚運一コレクション中にも採取地不明の2点があり(平石他 2008)、発掘出土品としては武蔵国分寺跡第28次調査(僧寺中樞部の北西外:有吉他 1984)、第84次調査(尼寺尼坊付近:有吉他 1989)等でも確認できる。一方の陰刻瓦は、石村本で採集地不明の徳藏寺蔵の資料が紹介され、平塚コレクション中に僧坊址採集品で2点、塔址採集品で2点を含む計7点が認められる他に、発掘出土品としては第35次調査(寺院地区西溝以東:上村 1988)、第117次調査(東僧坊付近:小野本 2009)、第303次調査(西僧坊北西の伽藍地西辺区画溝付近:小野本 2009)にあるが、陽刻・印刻ともに総じて数量は少なく、そのような意味でも一つの調査区で64点の出土をみた印刻鏡瓦は、塔跡2所用瓦として供給されたものと考えられよう。

さて、一般的に瓦の文様に巴文が採用されるのは、平安時代中頃、特に12世紀中葉以降の軒平瓦への剣頭文採用と同時期で(上原 1997)、藤澤典彦氏は瓦当文様における巴文様は建築物を守る結果としての意味を有する「氣」を表現する文様として採用されたが、室町時代には建物を「氣」から「水」で守るという意識が変化し、それまでの尖頭巴文から円頭巴文へと文様が展開したことを想定している(藤澤 2009)。また、毛利光俊氏は巴文に水勢・防火力を求めつつ、剣頭文・唐草文の軒平瓦と組み合わせる理由は定かではないとしながらも、高句麗・百済・中国出土瓦・埴の事例から、回転する半パルメット複合蓮華文のなかに巴化までに至らない簡略な文様があることを掲げ、インド仏教の蓮華・唐草文と中国の陰陽道にみられる太陽光・月光の旋回が融合して、日本神社特有の巴文に繋がる可能性を指摘した(毛利光 2001)。いずれにせよ、鏡瓦の巴文採用が12世紀中葉以降の様相として理解せざるを得ない以上は、承和2年に一度は雷火で焼失した武蔵国分寺の七重塔を、10年後の承和12年に前男衾郡大領壬生吉志福正が再建を願い出て許可されたことに絡め、塔跡2から出土する単弁五葉蓮華文の中房文様の解釈を、水勢・防火力と巴文とに単純に結び付けて考える訳にはいかなさそうである。

ところで、石村喜英が「六類 四辨式」と分類したうちの「中房内ニ三ツ巴文様を配する」一群の瓦について、その類例を求めた福島市腰浜廃寺の軒先瓦には、8世紀後半代の蓮華文系鏡瓦と重文系宇瓦グループと、9世紀代の特異な花文系鏡・宇瓦グループの2系統の組み合わせがあり、特に後者の瓦については兼ねてより高句麗・新羅瓦の特徴を備え朝鮮系文化との密接な関係性が暗示されてきた(内藤 1939・伊東他 1965・伊藤 1979 など)。実際、関東・東北地方には渡来系氏族によって造営された可能性のある古墳や寺院が点在するなかで、須田勉氏は武蔵国内の寺院では寺谷廃寺・女影廃寺・大寺廃寺・高岡廃寺などがそれに該当するといひ、さらに京所廃寺では新羅輿輪寺にみられる瓦を出土し、武蔵国分寺でも朝鮮半島系瓦が多いことが特徴であるとしている(須田 1997)。石村が着目した腰浜廃寺の瓦は恐らく後者の系統で、第63図に掲げたように、旋回する文様瓦には複数の型式が存在している。一つは「八弁花文である。中房は突出せず、中央珠文を中心にしてその周囲に4単位の文様を配し、その外側に圓線がめぐる。圓線に接して外側に八葉の花文を配置する。瓦当裏面はうすく粘土をはりたした後に全面ナデ調整を施す。背面の高い周縁もこの時に作りだされたものかもしれない。丸瓦は裏面に溝を作った後さし込んでいる」300型式と呼ばれる瓦で、今一つは「旋回花文である。中房は突出せず、中央の珠文をめぐって4単位の文様を配する。(中略)瓦当裏面には高い周縁をもち、全面ナデ調整を施している。丸瓦は瓦当裏面に作られた溝にさし込まれてい

る) 321 型式の鏡瓦である。この他、図示はしなかったが 321 型式に比べてやや単純化し、シャープさに欠ける 322 型式も設定されている(柴田他 1980)。腰浜廃寺では、これらの花文グループの瓦は、共存する女瓦に「嘉祥」のへら書きが認められることから 9 世紀第二四半期～第三四半期を中心とする時期に比定されており、鏡瓦の製作技法では瓦当に半截前の男瓦円筒をそのまま接合した後、不要部分を切り取り、結果的に瓦当裏面に高い周縁を有する「腰浜C技法」を特徴としている(藤木 2011・金子 2013)。藤木海氏は特徴的な目立つ文様要素のみを取り上げて追究するばかりではなく、こうした製作技法についても、より広い視野で類型や故地を探っていく必要性を説くなかで、陸奥国内の限定された地域に展開した「腰浜C技法」を、殊に上野地域の山王廃寺や北武蔵の馬騎の内廃寺との関連に引き付けて推定していることは、武蔵国分寺との繋がりを考えるうえで極めて注目すべき発言と思われる(藤木 2006)。何故なら、武蔵国分寺も創建期瓦には東山道武蔵路を介して上野系の文様要素が多く反映されているし(有吉 2001・2017 他、酒井 1989 等)、馬騎の内廃寺が立地する男舎郡域は七重塔再建の立役者である壬生吉志福正の本貫地でもあるからである。しかし、馬騎の内廃寺の所用瓦は、小さな中房に 1+8 の運子を配する複弁八葉蓮華文鏡瓦と三重弧文宇瓦が主体であり(高橋他 1982)、同じ男舎郡内に所在する寺内廃寺でも鏡瓦の意匠は素弁八葉蓮華文と単弁四葉蓮華文で(新井 1994)、塔跡 2 出土の本変形唐草文鏡瓦とは趣が全く異なる文様構成である。中房に巴状もしくは旋回する花文状の文様を施す「011 型式」鏡瓦と、その凹凸を逆転にした塔跡 2 出土の印刻鏡瓦の文様・技術的な来歴については、今後もさらなる追究が必要であるが、塔跡 2 出土土器は基壇版築内に 9 世紀中葉の南武蔵型土師器杯が含まれ、表土・攪乱土中に底径 5 cm 半ばから 4 cm 後半台の回転糸切底の須恵器杯や K 90 号型式期の灰軸陶器等が存在することからは、明確な共存関係とはいえないものの本鏡瓦も 9 世紀中葉から後半代以降の所産である可能性をひとまずは確認しておきたい。塔再建をめぐるのは、第 3 章で塔跡 1・2 の解釈が調査関係者間でも揺れている状況を呈示したが(表 6)、再建を願い出た壬生吉志福正は、承和 8 年には男舎郡榎郷戸主として息子二人が一生涯納めるべき調庸物を一括前納するなど、圧倒的な財源力を誇っていたことが評価されている向きが強い(井上 2015・荒井 2017 等)。坂詰秀一氏は、福正が建てようとしたのが塔跡 2 で、「下部構造は完成したが、本体建築は果たされなかった。ただ、付近から「造塔」(模件文字)と単弁五葉蓮華文鏡瓦が遺構外から出土している。「造塔」銘瓦(60 点)の出土は、塔に使用されることを目的として生産され、塔 2 に運ばれたものと判断される。塔 2 は、壬生吉志福正が「依請許之」た塔であったと考えられ、計画着手は、845(承和 12)年を上限と見るべき」と述べるように(坂詰 2012)、「造塔」銘瓦と本変形唐草文鏡瓦は壬生吉志福正との関わりの中で検討すべき瓦といえようか。

近年、宮瀧交二氏は「六国史」を始めとする諸史料に見える地震災害記録から、9 世紀の東国国分寺・国分尼寺に関連する記事を取り上げ、災害史の観点から国分寺の問題を再検討する試みを行うなかで、武蔵国分寺は『類聚国史』(災異五 地震)の弘仁九(818)年七月条に「相模・武蔵・下総・常陸・上野・下野等の国。地震す。山崩れ、谷埋まること数里、圧死する百姓勝て計う可からず」とみえる災害を推測する 9 世紀前半の史料および考古学的所見は指摘されないが、今次の調査における塔跡 2 の発見や講堂の再建を、『日本三大実録』元慶二(878)年九月二十九日条の「相模、武蔵、特に尤も甚し」とする同年の地震に引き寄せての検討が必要であると述べている(宮瀧 2017)。その一方で荒井秀規氏は、承和三年の「神火」を「人火」とする可能性を含みつつ、子息の調庸前納や七重塔再建は「福正の個人的な恩典狙いによるものではなく、現任郡司をも含めた壬生吉志氏一族の総意としてその仏教信仰を基として行われたものと理解」し、承和期の国分寺修造や定額寺の国分寺転用が良史を介して行われた、という吉岡康暢氏の指摘(吉岡 1978)に導かれながら、承和 12 年に武蔵国初の権守として任官され、翌 13 年 2 月に守となった多治比門成が在地豪族である壬生吉志氏の協力を得て国分寺再建・拡充に努めたことを想定する。それは、承和期には国分寺の維持と同時に定額寺で護国の法要が行われるなど、律令国家の地方寺院政策が国分寺主義から国分寺・定額寺主義へ転換したのが当該期であり、ひいては国分寺の衰退にも繋がれることを指摘している(荒井 1994)。塔および講堂再建の時期が、承和もしくは元慶年間を契機とするのかについては、今後も文献・考古の両側面からさらなる追究が必要であろう。

結 語

本報告書は、「史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）新整備基本計画」に基づいて、平成15年～24年度に実施された、金堂・講堂・鐘楼・堂間・中門など中枢地区および南門地区、塔地区などの、事前遺構確認調査の第Ⅱ分冊（遺物編）報告書であるが、第Ⅰ分冊（遺構編）は、平成28年3月に発行している。

報告書の内容は、伽藍中枢部の既往調査区位置関係が図と表で分かり易く掲載され、関連遺構の概要もまとめられている。調査によって出土した土器・陶磁器、鏡瓦、宇瓦、道具瓦、男瓦・女瓦、埴、銭貨・金属製品、鉄滓・銅滓、板碑など石製品、縄文時代の遺物、文字瓦についての概要がまとめられている。この中で、当該調査で出土した武蔵国分寺跡に特徴的な文字瓦・埴1,110点全点を図化し、各地区出土割合、瓦の種別などの分析を行っている。中でも郡・郷名文字瓦は荏原郡、秩父郡、豊島郡、多磨郡が多いようである。また、宮崎紘氏が論じた新座郡の郡名瓦がないことから758年に建郡される前に国分寺造営がなったことについて、整備拡充期（Ⅱ期）以降もなぜ新座郡名瓦が出土しないことは今後の課題であろう。

第5章「成果と問題点」で土器と軒先瓦の様相がまとめられている。伽藍中枢部域出土の土器類は破片数11,400点で、全体の85%が供膳具で占められ、土師質土器が58%、須恵器が37%である。供膳具は灯明具に使用されているようである。また、創建期段階の土器が極めて少ないこと、須恵器の産地、他国の土器、黒色土器、中世の土器も検討され、新たな成果が盛り込まれた。

軒先瓦は、各堂塔における出土傾向がまとめられた。

①昭和49年の調査会設立以降続けられてきた軒先瓦の型式名、鏡瓦141種、宇瓦145種の型式内訳表、②型式付与鏡瓦と宇瓦の生産地情報と掲載図版番号との対照表、③各堂塔出土の鏡瓦と宇瓦の図に型式名が付記されたことなど、武蔵国分寺跡の瓦の様相が分かりやすく示された。これまで、『国分寺市史』、報告書、論文等で明らかにされてきたが、まとまって型式名が示され武蔵国分寺跡の理解や研究に資するであろう。ただ、③には型式未設定、型式不明の資料も多く、今後照合、型式設定の継続がのぞまれる。

長きに亘る調査の遺構編、遺物編の報告書としてまとめられた、関係各位の尽力に敬意を表したい。

武蔵国分寺跡調査・研究指導委員
酒井 清 治

引用・参考文献

- 愛知県陶磁資料館・五島美術館 1998『日本の三彩と緑釉—天平に咲いた華—』
- 荒井健治 2001「キューブ・エス地区 (1010 次)』『武蔵国府の調査 19—平成 10 年度府中市内発掘調査概報—』府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 荒井健治 2006「大國魂神社社務所地区 (109 次)』『武蔵国府の調査 33—昭和 50～60 年度府中市内発掘調査概報—』府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 荒井健治 2007「サンスリー・本町地区 (796 次)』『武蔵国府の調査 35—平成 6 年度府中市内発掘調査概報—』府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 荒井秀規 1994「武蔵国分寺、その機能をめぐって」柳田敏司・森田 穂編『渡来人と仏教信仰—武蔵国寺内廃寺をめぐって—』雄山閣出版
- 荒井秀規 2017『古代の東国 3 覚醒するく関東—平安時代』吉川弘文館
- 新井 端 1994「武蔵・寺内廃寺」の発掘調査」柳田敏司・森田穂編『渡来人と仏教信仰—武蔵国寺内廃寺をめぐって—』雄山閣出版
- 有古重蔵 1982「武蔵国分寺跡出土の平城宮系瓦について」『東京考古』1 東京考古談話会
- 有古重蔵 1985「「多」字銘偏行唐草文字瓦」『東京考古』3 東京考古談話会
- 有古重蔵 1986a「第四章 第四節 遺瓦からみた武蔵国分寺」『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 有古重蔵 1986b「第五章 中世における国分寺市域 第五節 国分寺市域における中世遺跡」『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 有古重蔵 1990「武蔵国分寺」『考古学ジャーナル』No.318 ニュー・サイエンス社
- 有古重蔵 1993「武蔵国分寺の創建期瓦」『考古学ジャーナル』No.364 ニュー・サイエンス社
- 有古重蔵 1995「武蔵国分寺の創建期瓦窯—南多摩窯跡群を中心として—」『王朝の考古学 大川清先生古希記念論文集』雄山閣出版
- 有古重蔵 2000「武蔵国分寺・武蔵国府」『文字瓦と考古学』日本考古学協会第 66 回総会国土館大学実行委員会
- 有古重蔵 2001「軒先瓦、文字瓦から探る武蔵国分寺」『多摩のあゆみ』103 財団法人たましん地域文化財団
- 有古重蔵 2013「鬼瓦のヒミツ」『平成 25 年度 国分寺市歴史講演会』資料 国分寺市教育委員会
- 有古重蔵 2014「国分寺と都市計画」『季刊考古学 129 特集：王権擁護の寺・国分寺』雄山閣出版
- 有古重蔵 2017「武蔵国分寺創建期瓦窯再考」須田 勉編『日本古代考古学論集』同成社
- 有古重蔵・中道 誠 2013「武蔵国分寺」須田 勉・佐藤 信編『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館
- 五十嵐伸夫 2002「銅錐物の鋳造遺跡と鋳造技術」佐々木稔編『鉄と銅の生産の歴史—古代から近世初頭にいたる—』雄山閣出版
- 池邊 彌 1981『和名類聚抄郡郷里驛名考説』吉川弘文館
- 石村亮司 1952「軒丸瓦考」『武蔵野 特集：国分寺号』第 32 巻 3・4 号 武蔵野文化協会
- 石村亮司 1954「上代載書瓦の一形態」『日本歴史』第 37 号
- 石村喜英 1960「武蔵国分寺の研究」明善堂書店
- 石村喜英 1969「古代の造瓦組織に見える『瓦長』再考」『歴史考古』第 17 号 日本歴史考古学会
- 伊藤 薫 1998「VI 鉄を科学する」『兵の時代—古代末期の東国社会』横浜市歴史博物館・横須賀市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 伊東信雄・梅宮 茂・佐藤聖治郎 1965「腰瓦廃寺 福島市史資料叢書特集」福島市史編纂準備委員会
- 伊東信雄 1979「福島市腰瓦出土瓦の再吟味—広島県寺町廃寺跡出土瓦との比較において—」『腰瓦廃寺跡確認緊急調査報告書』福島市埋蔵文化財調査報告書第 5 集 福島市教育委員会
- 稲村垣元・後藤守一 1923『東京府史蹟踏地調査報告書 第一冊 武蔵国分寺址の調査』東京府
- 井上 翔 2015「壬生吉志福正について」『武蔵国分寺跡資料館だより』第 21 号 国分寺市教育委員会
- 井上 翔 2017a「武蔵国分寺造営における瓦の生産と流通について」『古代交通研究 第 19 回大会資料集 移動を支えた人と場・道』古代交通研究会・日本大学経済学部
- 井上 翔 2017b「地方官衙の司・所と国分寺—「郡瓦長」解文瓦の再検討を通じて—」佐藤信編『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社
- 上原準一 1933a「武蔵国分寺発見の文字瓦 (一)」『考古学雑誌』第 23 巻 10 号
- 上原準一 1933b「武蔵国分寺発見の文字瓦 (二)」『考古学雑誌』第 23 巻 11 号

- 上原真人 1997『歴史発掘 11 瓦を読む』講談社
- 上原真人 1989「東国国分寺の文字瓦再考」『古代文化』VOL. 41 財団法人古代学協会
- 上村和直 1994「平安京周辺の施軸陶器生産」『第3回シンポジウム 古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施軸陶器—』古代の土器研究会
- 宇野信四郎 1952「埼玉縣入間郡東金子村窯跡発掘概報」『武蔵野 特集：国分寺』第32巻3・4号 武蔵野文化協会
- 宇野信四郎 1953 a「武蔵国分寺創建時に於ける瓦について」『西郊文化』4輯 杉並区史編纂委員会
- 宇野信四郎 1953 b「埼玉縣入間郡東金子村窯跡とその出土古瓦について」『西郊文化』6輯
- 宇野信四郎 1968「武蔵国分寺の文字瓦—窯跡出土例を中心として—」『日本歴史考古学論叢』第2 雄山閣出版
- 宇野信四郎 1987「附 武蔵国分寺塔跡出土の古瓦（抄）」『武蔵国分寺跡調査報告—昭和39年～昭和44年度—』国分寺市教育委員会
- 宇野信四郎 1994「武蔵国分寺塔跡出土の古瓦」田熊信之・天野茂編『宇野信四郎蒐集古瓦集成』東京堂出版
- 江口 桂 2006「武蔵国府・国分寺の景観と人的構成—一壑一窟建物群の検討を中心に—」『坂浩秀—先生古稀記念論文集—』考古学の諸相Ⅱ 坂浩秀—先生古稀記念会（後、同著 2014『古代武蔵国府の成立と展開』同成社古代史叢書13に所収）
- 江口 桂 2017「平安時代における国府の変容」『条里制・古代都市研究』第32号 条里制・古代都市研究会
- 江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 追塩千尋 1983「平安中後期の国分寺」佐伯有清編『日本古代政治史論考』吉川弘文館（後、同著 1996『国分寺の中世的展開』吉川弘文館に再録）
- 大川 清 1958『武蔵国分寺古瓦埴文字考』早稲田大学考古学研究室報告第五冊 小宮山書店
- 大川 清 1968「武蔵国分寺人名瓦再考」『日本歴史考古学論叢』第2 雄山閣出版
- 大川 清 1972「奈良・平安時代の造瓦組織 武蔵国分寺の瓦屋」『日本の古代瓦窯』雄山閣出版
- 大川 清 1979「多摩丘陵窯跡群調査報告」『東京都埋蔵文化財調査報告』第6集 東京都教育委員会
- 大川 清 1994「武蔵国分寺創建時の造瓦組織」『東海道の国分寺—その成立と変遷—』栃木県教育委員会
- 大澤理恵 1990「第1章 近世初期の村落 第2節 検地と村落」『国分寺市史 中巻』国分寺市
- 太田和子・増井有真 2015『見学ガイド 武蔵国分寺のはなし』（改訂2版増補版）国分寺市教育委員会
- 大田静六 1935「武蔵国分寺の伽藍配置に就て（I・II）」『建築世界』第29巻第11・12号
- 太田 亮 1923「古瓦に刻まれたる姓氏」『系譜と傳記』第2巻第4号 系譜学会
- 大西稔子 2013『特集展示 平和のいしげ 2013』東東歴史民俗資料館
- 大場智雄 1973「武蔵国分寺跡の重要性」『考古学ジャーナル』No. 87 ニュー・サイエンス社
- 岡田芳朗 1986「第五章 中世における国分寺市域 第四節 鎌倉・室町期の信仰と生活」『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 小野一之 2010「中世武蔵府中の誕生—文獻からみた両期としての11世紀—」『府中市郷土の森博物館紀要』第23号 府中市郷土の森博物館
- 小野一之 2011「鉄仏の来歴と畠山重忠の伝説」『府中市郷土の森博物館紀要』第24号 府中市郷土の森博物館
- 尾野善裕 1997「猿投窯と西三河の窯跡」『第1回三河考古合同研究会 須恵器から灰軸陶器へ—生産地と消費地から—資料』三河考古刊行会
- 尾野善裕 2003「古代尾張・美濃における緑軸陶器生産」『第7回シンポジウム 古代の土器研究—平安時代の緑軸陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会
- 尾野善裕 2006「古代土器編年と暦年代観—10・11世紀を中心に—」『第14回 京都府埋蔵文化財研究会発表資料』京都府埋蔵文化財研究会
- 及川良彦他 2000『多摩ニュータウン遺跡群—No. 247・248 遺跡（本文編）—』東京都埋蔵文化財センター調査報告第80集
- 蔵戸市部 1952「任瓦考」『武蔵野 特集：国分寺』第32巻3・4号 武蔵野文化協会
- 貝塚爽平 1979『東京の自然史』（増補第二版）紀伊國屋書店
- 貝塚爽平ほか編 2000『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会
- 加藤 修 1982『多摩ニュータウン遺跡 一No. 513 遺跡1—』東京都埋蔵文化財センター調査報告第3集
- 加藤 修 1987『多摩ニュータウン遺跡 昭和60年度（第4分冊）』東京都埋蔵文化財センター調査報告第8集
- 加藤恭朗・根本 靖・富元久美子・平野寛之 2013『古代入間の土器と遺跡（II）—須恵器の編年（9・10世紀）—』古代の入間を考える会
- 加藤恭朗・根本 靖・富元久美子・坂野千登勢・平野寛之 2014『南比企窯と東金子窯（I）—8世紀の東金子窯の編年と土器の分布—』古代の入間を考える会

- 加藤恭朗・根本 靖・富元久美子・坂野千登勢・平野寛之 2015『南比企窯と東金子窯(Ⅱ)ー東金子窯の開窯と9世紀の編年ー』古代の人間を考える会
- 金井厚厚 1993『久保1号瓦窯跡』鳩山町埋蔵文化財調査報告第14集 鳩山町教育委員会
- 金子 智 2013『みちのくの瓦 東北と三州をつなぐもの』『平成24年度特別展 東日本大震災復興祈念』高浜市やまもの里かわら美術館
- 上村昌男 1986「第三章 弥生・古墳時代 第二節 古墳時代」『国分寺市史 上巻』国分寺市史
- 川尻秋生 2001『資材帳からみた加藤と大衆院・政所』『古代』第110号 早稲田大学考古学会
- 河野一也 2008「附編 遺跡から歴史を読むー分信河原の古代・中世前期の遺跡からー」『武蔵国府関連遺跡調査報告 府中市片町3丁目計画に伴う埋蔵文化財発掘調査』大成エンジニアリング株式会社
- 北島信一 1989「武蔵国分寺文字瓦埴に押捺された陽刻印の製作技法と作者について」『東京考古』7号 東京考古談話会
- 北多摩仏教会編 1936『北多摩寺院大観』
- 木本雅康 1992「宝亀2年以前の東山道武蔵路」『古代交通研究』創刊号 古代交通研究会(設立準備会)
- 久保常晴 1955「武蔵国分寺の「各」の文字瓦」『立正考古』第7号
- 櫛 国男 1973「武蔵国分寺跡の保存運動」『考古学ジャーナル』No.87 ニュー・サイエンス社
- 黒尾和久 1998「古代末期土器群の年代観の修正」『おちかわ』日野市落川土地区画整理組合
- 黒尾和久 2003「3. 遺物(1) 陶磁器・土器」『東京都日野市南広間地遺跡 一般国道20号(日野バイパス日野地区) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』国土交通省関東地方整備局相武国道工事事務所
- 黒尾和久 2008「V. 考察 一古代末〜中世前期の陶磁器・土器群の編年と実年代ー」『落川・一の宮遺跡ー石坂事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』石坂武・石坂みどり、落川区画整理地区(石坂事業地) 遺跡調査団
- 黒尾和久・江江芳浩 2009「多摩における中世前期の土器様相ーあきる野市二宮神社境内出土の中世土器をめぐってー」『東京考古』27 東京考古談話会
- 黒尾和久 2015「VI. 調査の成果と若干の考察 1. 当地における縄文中期後半〜後期初頭の土器様相と集落景観」『東京都国立市緑川東遺跡ー第28地区一介護老人保健施設国立あおやぎ苑新築工事及び汚染土壌改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』有限会社箱守製作所・株式会社ダイサン
- 古代交通研究会編 2004『日本古代道路事典』八木書店
- 小泉和子編 2002『ちやぶ台の昭和』河出書房新社
- 後藤守一 1923「第三、遺物 丁、瓦埴」『東京府史蹟勝地調査報告書 第一冊「武蔵国分寺址の調査」』東京府
- 小島弘義 1984「出土土器の検討」『四之宮下郷』平塚市遺跡調査会、神田・大野遺跡発掘調査団
- 酒井清治 1988「高麗郡の郡寺と氏寺」『研究紀要』第26号 埼玉県立歴史資料館
- 酒井清治 1989「武蔵国分寺創建期の瓦と須恵器」『埼玉考古』第26号 埼玉考古学会
- 酒井清治 1990「剣菱文軒丸瓦から見た武蔵国京所廃寺の性格ー国府付属寺院の可能性についてー」『研究紀要』第12号 埼玉県立歴史資料館(後、酒井 2002に再録)
- 酒井清治 2002『古代関東の須恵器と瓦』同成社
- 酒井清治 2015「南多摩に分布する剣菱文軒丸瓦と牛角状中心飾り唐草文軒平瓦小考」『駒澤考古』第40号 駒澤大学考古学研究室
- 酒井清治 2018「考古学から見た関東の渡来人」『遺跡から見た「古代武蔵・相模の社会」』平成29年度 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業 公開セミナー
- 坂詰秀一編 1971『武蔵新久窯跡』雄山閣出版
- 坂詰秀一 1973「武蔵国分寺跡の破綻問題」『考古学ジャーナル』No.87 ニュー・サイエンス社
- 坂詰秀一 1982『八坂前窯跡』八坂前跡調査会・入間市教育委員会
- 坂詰秀一 1986「第四章 武蔵国分寺 第五節 武蔵国分寺の瓦窯跡」『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 坂詰秀一 2012「元慶二年の地震と武蔵国分寺」『武蔵野』第87巻第1号 武蔵野文化協会
- 坂詰秀一・遠藤政孝他 1997・1999・2000・2001『南多摩窯跡群 八王子みなみ野シティ内における古代窯跡の発掘調査報告Ⅰ〜Ⅳ』八王子市南部地区遺跡調査会
- 坂詰秀一・服部敬史他 1992a『南多摩窯跡群 東京造形大学津貫校地内における古代窯業の発掘調査報告書』東京造形大学校地内埋蔵文化財発掘調査団
- 坂詰秀一・松原典明 1992b『南多摩窯跡群ー山野美容芸術短期大学校地内における古代窯跡の発掘報告ー』学校法人山野学苑・山野美容芸術短期大学校地内埋蔵文化財発掘調査団
- 坂詰秀一・松原典明 1999『東京都稲城市 瓦谷戸窯跡群発掘調査報告書ー主要地方道稲城日野線第41号整備に伴う発掘調査報告書ー』東京都建設局南多摩東部建設事務所・都内遺跡調査会

- 佐々木稔他 2002『鉄と銅の生産の歴史—古代から近世初頭にいたる—』雄山閣
- 笹生 衛 1990『房総における黒色土器の展開と終焉』『東国土器研究第3号 特集 黒色土器—展開と終焉』東国土器研究会
- 佐藤敏也・上村昌男 1986「第三章 弥生・古墳時代 第一説 弥生時代」『国分寺市史 上巻』国分寺市史
- 佐藤 信・藤井恵介・副島弘道・中道 誠 2015「平安時代における折りの空間 武蔵国分寺」『国分寺市制施行50周年 記念事業 歴史文化フォーラム』国分寺市・国分寺市教育委員会
- 佐藤 信 2015「平安時代の東国仏教と国分寺」『平安時代における折りの空間 武蔵国分寺』国分寺市政施行50周年記念行事 歴史文化フォーラム
- 重田定一 1903「武蔵国分僧寺の廢址」『古蹟』2-2 帝國古蹟取調會
- 藤原市之助 1988「武蔵国分寺発見に係る文字瓦」『考古学会雑誌』2-7
- 柴田俊彰・辻 秀人・鈴木 啓 1980「腰浜廢寺Ⅱ」『福島市埋蔵文化財調査報告書 第7集』福島市教育委員会
- 須田 勉 1997「関東・東北の古墳と寺院」『季刊考古学第60号 特集 渡來系氏族の古墳と寺院』雄山閣出版
- 須田 勉・佐藤 信編 2011『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館
- 須田 勉・佐藤 信編 2013『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館
- 須田 勉他 2014『埼玉県比企郡鳩山町 金沢瓦窯』国士舘大学考古学研究室報告第16冊 国士舘大学
- 住田正一 1917「武蔵国分寺文字瓦に就いて」『考古学雑誌』第7巻7号
- 鈴木俊雄 1992「武蔵国分寺文字瓦に関する一試論」『丘陵』第13号 甲斐丘陵考古学研究会
- 間根俊一 2011『日本の美術No.541 金剛鋸と金剛杵』至文堂
- 前場幸治 1980『古瓦を追って 相模国分寺・千代台廢寺考』編著・発行者 前場幸治
- 副島弘道 2015「武蔵国分寺と平安時代の仏像」『平安時代における折りの空間 武蔵国分寺』国分寺市政施行50周年記念行事 歴史文化フォーラム
- 田尾誠敏 2003「土器の変遷とその背景」『平塚市史11下 別編考古(2)』平塚市
- 高橋一夫他 1982「14. 上里町五明廢寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県史編さん室
- 高橋照彦 1995『緑釉陶器』概説 中世の土器・陶磁器 真陽社
- 滝口 宏 1966『武蔵国分寺図譜』東京都国分寺市教育委員会
- 滝口 宏 1968「武蔵国分寺址調査私見」『日本考古学論叢』第2巻 雄山閣出版
- 滝口 宏 1986a「序章—地と人と—」『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 滝口 宏 1986b「武蔵国分寺の規模」『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 滝口 宏 1986c「第四章 武蔵国分寺 第六節 平安から中世へ」『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 滝口 宏 1991「第九 武蔵 角田文衛編『新修国分寺の研究 第2巻 畿内と東海道』吉川弘文館
- 田熊清彦・梁木 誠 1990「栃木県の黒色土器—奈良・平安時代を中心に—」『東国土器研究第3号 特集 黒色土器—展開と終焉』東国土器研究会
- 田熊信之・天野茂編 1994『宇野信四郎蒐集 古瓦集成』東京堂出版
- 竹花宏之 2012「多摩丘陵における瓦窯について—多摩ニュータウン遺跡群を中心として—」『東京都埋蔵文化財センター 研究論集』XXVI 東京都埋蔵文化財センター
- 竹花宏之 2018「南多摩窯跡群」『関東甲信越地方の国分寺瓦窯』東国古代遺跡研究会
- 立川明子 2009「国分寺市内遺跡における壑穴住居出土土器の様相」『駒澤考古』第34号 駒澤考古学研究会
- 立川明子 2012「12世紀の武蔵府中と多摩川流域の考古学的様相」『第27回東京中世史研究会 12世紀の武蔵国』東京中世史研究会
- 立川明子 2016「東京の中世前期のかわらけ—中世前期の土器・陶磁器様相—」『第38回東京中世史研究会 シンポジウム 東京中世史を拓く—その10年の成果と課題—』東京中世史研究会・調布市博物館
- 田中 信 2003「関東」『第22回 中世土器研究会 シンポジウム中世土器研究の今日的課題—土器編年と中世史研究—』日本中世土器研究会
- 鶴間正昭 2008「南武蔵・相模の土器様相からみた地域間交流」国士舘大学考古学研究室40周年記念シンポジウム『古代社会と地域間交流—土師器からみた関東と東北の様相—』国士舘大学考古学会
- 手島実美子 2016「新沼窯跡 第1~4次発掘調査報告書」『鳩山町埋蔵文化財調査報告』第44集 鳩山町教育委員会
- 手島実美子 2018「南比企の瓦窯跡について—新沼窯跡を中心に—」『関東甲信越地方の国分寺瓦窯』東国古代遺跡研究会
- 内藤政恒 1939「東北地方出土の特異文様について」『夢殿論叢』19巻
- 内藤政恒 1950「奈良時代の瓦當面に於ける文字」『武蔵野』第31巻第3・4号 武蔵野文化協会
- 永井久美男編 1994『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』兵庫埋蔵銭調査会

- 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧』兵庫県埋蔵文化財調査会
- 長佐古真也 2004 『多摩ニュータウン遺跡-No.243・244 遺跡- (古墳時代以降) 第1分冊-本文編-』東京都埋蔵文化財センター調査報告第155集
- 中野晴久 1995 「常滑・瀬美」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中道 誠 2012 「武蔵国分寺、二つの再建塔をめぐる問題について」『考古学からみた災害と復興』東国古代遺跡研究会第二回研究会
- 中山真治 2004 「ボニータ府中地区(858次)」『武蔵国府の調査 25 -平成7年度府中市内発掘調査概報-』府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 成瀬晃司 1997 「第四部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要Ⅰ 江戸遺跡出土資料による磁器碗・皿の変遷一文様、銘款を中心に」『東京大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ 1996年度』東京大学埋蔵文化財調査室
- 新倉 香・依田亮一 2013 「高座郡衙・下寺尾慶寺周辺の集落景観と律令祭祀-小出川河川改修事業関連遺跡群の調査成果を中心として-」『神奈川考古』第49号 神奈川考古同人会
- 西脇俊郎・山口辰一 1980 「武蔵国府・国分寺跡出土土器の変遷(試案)」『文化財の保護第12号 特集:武蔵国府と国分寺』東京都教育委員会
- 西脇俊郎 1981 「VI 小結 1. 出土土器について」『武蔵国分寺跡発掘調査概報V-市立第四中学校建設に伴う第1次調査-』武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市遺跡調査会
- 沼田頼輔 1901 「武蔵国分寺発見に得る文字瓦に就て」『考古界』1-1
- 根本 靖 2015 「所沢市東の上遺跡における東山道武蔵路-集落遺跡の中の東山道武蔵路-」『シンポジウム・国分寺市東山道遺跡発掘20周年 東山道武蔵路調査の最前線-多摩郡から入間郡まで-』国分寺・名水と歴史的景観を守る会
- 野田憲一郎・江口 桂 2006 「武蔵国府跡出土土器群の再検討」『古代武蔵国の須置器流通と地域社会』埼玉考古別冊9 埼玉考古学会
- 野田憲一郎 2015 「武蔵国府における東山道武蔵路について」『シンポジウム・国分寺市東山道遺跡発掘20周年 東山道武蔵路調査の最前線-多摩郡から入間郡まで-』国分寺・名水と歴史的景観を守る会
- 野中完一 1902 「武蔵国分寺発掘の文字瓦」『考古界』1-8
- 服部敏史 1981 「南多摩窯址群-御殿山地区62号窯址発掘調査報告書-」八王子パイパス鍾水遺跡調査会
- 服部敏史 1982 「南武蔵における古代末期の土器様相」『東京考古』1 東京考古談話会
- 服部敏史・河合英夫・根本 靖・江口 桂・小野本 敦 2011 「南多摩窯跡群須置器編年の暦年代検討」『八王子市史研究』創刊号 八王子市
- 原田良雄 1954 「塔址より見たる国分寺創建年代」『西郊文化』7輯
- 坂野和信 1982 「北武蔵における古代瓦の変遷-瓦当文様からみた7世紀~10世紀の様相-」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県民部県史編さん室
- 坂野千登勢 2016 「高麗郡女影窟寺に関する一考察」『武蔵国高麗郡建部-入間から見た高麗郡建部とその後-』古代の入間を考える会
- 東山信治他 2011 『平塚運-古代瓦コレクション資料集(2)-武蔵国分寺関連土瓦・鏡瓦補遺 平塚運-コレクション 資料目録-』島根県古代文化センター調査研究報告書44 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財センター
- 平石 充他 2008 『平塚運-古代瓦コレクション資料集(1)-武蔵国分寺関連資料・鏡瓦編-』島根県古代文化センター調査研究報告書39 島根県教育庁文化財課古代文化センター
- 平川 南・早川 泉・坂詰秀一 1989 『武蔵国分寺跡出土の漆紙文書-武蔵台遺跡-』都立府中病院内遺跡調査会(後、都立府中病院内遺跡調査団1996『武蔵国分寺跡西方地区 武蔵台遺跡Ⅱ 資料編6・附章』に再録)
- 平野 修 2017a 「平安時代黒色土器の出現契機とその系譜-甲斐・信濃両国の事例から-」『信濃』第69巻第3号
- 平野 修 2017b 「武蔵と甲斐における倅因・夷仔痕跡」『倅因・夷仔』とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学山梨文化財研究所研究成果公開シンポジウム
- 梶間孝志 1991 「入間郡と高麗郡の古代寺院」『埼玉考古学論集-設立10周年記念論文集-』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 梶間孝志 1993 「武蔵国分寺と北武蔵の寺院」『考古学ジャーナル』364 ニュー・サイエンス社
- 梶間孝志 2000 「国分寺七重塔の再建とその影響/東金子窯跡群と高岡瓦窯」『日高市史 通史編』埼玉県日高市
- 廣瀬真理子 2014 「武蔵台遺跡出土漆紙文書の再調査」『府中市郷土の森博物館紀要』第27号 府中市郷土の森博物館
- 深澤清幸 1996 「武蔵府中における板碑の型式と組成-14世紀後半から15世紀前半を対象として-」『府中市郷土の森紀要』第9号 府中市郷土の森博物館

- 深澤靖幸 2002 「武蔵国府・国分寺跡出土「多上」「多下」文字瓦をめぐる—古代多摩郡の地域編成区分—」『地域考古学の展開』村田文夫先生還暦記念論文集
- 深澤靖幸 2017 「武蔵国府と国分寺の景観」鈴木靖良・荒木敏夫・川尻秋生編『日本古代の道路と景観—駅家・官衙・寺—』八木書店
- 福田健司 2002 「第2章 土器編年と実年代」『落川・一の宮遺跡Ⅲ 総括編【第二分冊】』落川・一の宮遺跡（日野3・2・7号線）調査会
- 福田健司 2017 『土器編年と集落構造』考古調査ハンドブック 16 ニュー・サイエンス社
- 福田信夫 1984 「武蔵国分寺跡出土の土師質土器について」『東京考古』2 東京考古談話会
- 福田信夫 1986 「49年以降発掘調査の成果」『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 福田信夫 2008 『シリーズ遺跡を学ぶ052 鎮護国家の大伽藍・武蔵国分寺』新泉社
- 福田信夫 2012 「武蔵国分寺の実像」『朝日カルチャーセンター武蔵国の古代史第6回』朝日カルチャーセンター・朝日JTB・交流文化塾
- 藤木 海 2006 「有苜弁蓮華文鏡瓦の展開とその背景」『福島考古』第47号 福島県考古学会
- 藤木 海 2011 「植松廃寺跡」『原町市史 第三巻 資料編Ⅰ「考古」』南相馬市
- 藤澤典彦 2009 「巴文様の変容—中・近世軒丸瓦の瓦当文様を中心に—」『志学考古第9号—年代・産地・分析等—』大阪大谷大学文化財学科
- 藤沢貞祐 2005 「施軸陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—』文部科学省特定領域研究『中世考古学の総合的研究—学融合を目指した新領域創生—、特定領域計画研究『中世土器・陶器の生産技術及び全国編年研究と流通様相の年代的解明』
- 保坂康夫 1988 「山梨県下における古代前半のロクロ整形土師器甕をめぐる—」『山梨県考古学協会誌』第2号 山梨県考古学協会
- 星野亮勝 1950 「武蔵国分寺古瓦発見の動機」『武蔵野』第32巻第1号 武蔵野文化協会
- 前岡孝彰 2006 『国府・国分寺の謎を探る—但馬国府・国分寺館展示図録—』但馬国府・国分寺館
- 増井有真 2013 「武蔵国分寺跡出土の「甕」墨書土器」『考古学の諸相Ⅲ』坂路秀一先生喜寿記念論文集
- 増井有真 2017a 「国史跡追加指定記念 古代道路を掘る—東山道武蔵路の調査成果と保存活用—」国分寺市教育委員会
- 松尾公就 1990 「第二章 享保改革と武蔵野新田の開発」『国分寺市史 中巻』国分寺市
- 松原典明 1999 「第Ⅷ章 考察」『東京都稲城市 瓦谷戸窯跡群発掘調査報告書—主要地方道稲城市日野線 第41号整備に伴う発掘 調査報告書—』東京都建設局南多摩東部建設事務所・都内遺跡調査会
- 松原典明 2000 『道路遺構等確認調査報告』東京都教育委員会
- 松原典明 2008a 「瓦生産から見た武蔵国分寺の造営事情—瓦谷戸窯跡群の操業年代の再検討を通して—」『多知波奈の考古学—上野恵司先生追悼論集』橘考古学会
- 松原典明 2008b 「瓦谷戸窯跡の操業年代と武蔵国分寺の造営事情」『稲城市文化財研究紀要』第8号 稲城市教育委員会
- 松田隆夫・大倉利明 1988 「立川段丘と凹地地形について—府中市周辺の立川面の区分について—」『府中市郷土の森紀要』第1号 府中市郷土の森博物館
- 三浦京子 1990 「群馬県における8～11世紀の黒色土器について」『東国土器研究第3号 特集 黒色土器—展開と終焉』東国土器研究会
- 宮崎 礼 1938 「武蔵国分寺」角田文衛編『国分寺の研究』上巻 考古学研究会（後、同著 1992 『武蔵考古漫筆』株式会社やき出版に収載）
- 宮瀧文二 2017 「九世紀の地震災害と東国の国分寺・国分尼寺」佐藤信編『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社
- 宮原正樹 2016a 「瓦が語る高麗郡」『特別展 高麗郡 1300年—物と語り—』埼玉県立歴史と民俗の博物館
- 宮原正樹 2016b 「九世紀武蔵国における造瓦体制—模倣文字瓦とその背景—」『国史館学』第20号 国史館大日本史学会
- 宮原正樹 2018 「武蔵国東金子窯跡群における瓦生産—武蔵国分寺創建期・整備拡充期の様相—」『関東甲信越地方の国分寺瓦窯』東国古代遺跡研究会
- 森 郁夫 2001 『瓦』（ものとの人間の文化史100）法政大学出版会
- 毛利光俊彦 2001 「巴文の源流を探る」『第133回歴史考古学研究会』帝塚山大学考古学研究所
- 八崎 興 2001 「柱状高台考」『中世土器研究論集—中世土器研究会 20周年記念論集—』中世土器研究会
- 矢内雅之 2006 「武蔵国分寺創建期における瓦生産の再検討」『Archaeo-Clio』第13号 東京芸芸大学考古学研究室
- 矢部良明 2010 『日本の美術5 No.408 唐三彩と奈良三彩』至文堂
- 山口辰一 1984a 「武蔵国府関連遺跡における土器編年試論」『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅴ』府中市教育委員会・府中市

遺跡調査会

- 山口辰一 1984b 「武蔵国府関連遺跡における坏類の基礎的分類と変遷」『武蔵国府関連遺跡調査報告VI』府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 山口辰一 1985 「武蔵国府と奈良時代の土器様相」『東京考古』3 東京考古談話会
- 山下峰司 1995 「灰輪陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山路直克 2005 「文字瓦の生産—七・八世紀の坂東諸国と陸奥国を中心に—」平川 南・沖森卓也・榮原永遠男・山中 章編『文字と古代日本3 流通と文字』吉川弘文館
- 山路直克 2011 「寺の空間構成と国分寺—寺院地・伽藍地・付属地—」須田勉・佐藤信福『国分寺の創建—思想・制度編』吉川弘文館
- 山本信夫 1995 「11. 貿易陶磁器〔2〕中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 雪田孝子・宇佐美義春 1998 「多摩ニュータウンNo.944 遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 先行調査報告9』東京都埋蔵文化財センター調査報告第52集（財）東京都埋蔵文化財センター
- 吉岡康暢 1978 「承和期における転用国分寺について」下出徳興博士還暦記念会編『日本における国家と宗教』大蔵出版
- 吉田 格・土井悦枝 1986 「第二章 縄文時代 第二節 市内の遺跡と調査研究の歩み」『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 吉田美弥子 2001 「瓦の諸問題」『南多摩窯跡群IV—八王子みなみ野シティ内における古代窯業の発掘調査報告書—』
- 依田亮一 2004 「武蔵・相模国の紀年銘資料と共存する土器様相—古代銭貨（皇朝十二銭・北宋銭）を中心として—」『Archaeo-Clilo』第5号 東京学芸大学考古学研究室
- 依田亮一 2013 「国史跡武蔵国分寺（僧寺跡）の保存整備事業と事前遺構確認調査の主な成果」『多摩考古』43 多摩考古学研究会
- 依田亮一 2015b 「東国の官衙と土器—相模国の事例を中心として—」『第18回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と土器1—官衙・官衙と土器—』独立行政法人奈良文化財研究所
- 渡辺 一他 1988・1990・1991・1992 『鳩山窯跡群1～IV』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1990 「南比企窯跡群の須恵器の年代—鳩山窯跡の年代を中心に—」『埼玉考古』第27号 埼玉考古学会
- 渡辺 一 2006 『古代東国の窯業生産の研究』青木書店

<武蔵国分寺跡発掘調査報告書・国分寺市史関係>

- 有吉重蔵・西脇俊郎 1981 『武蔵国分寺跡発掘調査概報V—市立第四中学校建設に伴う第1次調査—』武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 有吉重蔵・上村昌男・高林和恵 1984 『武蔵国分寺遺跡調査会年報II—昭和51～53年度 寺地・僧寺々域確認調査—第1分冊』武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 有吉重蔵・上敷領久・滝島和子 1989 『武蔵国分寺跡発掘調査概報XIV—昭和52～57年度 尼寺々域確認調査—』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 板倉欽之他 2006 『武蔵国分寺跡発掘調査概報33—北方地区・西国分寺駅東地区第一種市街地再開発事業に伴う調査—』国分寺市遺跡調査会
- 板倉欽之 2006 「第4章 小結 第1節 歴史時代 2. 「恋ヶ窪廃寺」」『武蔵国分寺跡発掘調査概報33—北方地区・西国分寺駅東地区第一種市街地再開発事業に伴う調査—』国分寺市遺跡調査会
- 伊藤 健・江里口省三・松崎元樹・上條朝宏 2010 『武蔵国分寺跡関連遺跡・武蔵台遺跡—多摩総合医療センター（仮称）等建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—』東京都埋蔵文化財センター調査報告239集
- 岡崎完樹 1985 『武蔵国分寺跡発掘調査報告—南方地区・府中市計画道路（1・2・1号線の2）建設に伴う調査—』東京都建設局・武蔵国分寺関連（府中市計画道路1・2・1号線の2）遺跡調査会
- 小川将之・牧野麻子 1999 「V. 小結 2. 遺物」『武蔵国分寺南西地区発掘調査報告書—府中市計画道路3・2・2の2号線建設に伴う調査—』武蔵国分寺関連（府中市計画道路3・2・2の2号線）遺跡調査会・東京都北多摩南部建設事務所
- 小野本教 2009 『武蔵国分寺跡発掘調査概報34—東僧坊・僧尼寺区画溝・東山道武蔵路の調査—』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会（※東僧坊の調査を記載）
- 小野本教・増井有真・立川明子 2010 『武蔵国分寺跡発掘調査概報35—僧寺伽藍地の確認調査—』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会（※中核部区画南辺（中門西）調査を記載）
- 小野本教・立川明子 2011 『武蔵国分寺跡発掘調査概報37—昭和50～55年度 僧寺寺院地内等の調査—』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 上敷領久 1994 『武蔵国分寺跡発掘調査概報20—国分寺市交響下水道種整備南地区19号工事に伴う調査—』国分寺市

遺跡調査会

- 上敷領久・木下さおり 1996『武蔵国分寺跡発掘調査概報XXI—国分寺市公共下水道面整備西元地区5・6号工事に伴う尼寺西・南方地区他の調査—』国分寺市遺跡調査会
- 上敷領久・木下さおり 1998『武蔵国分寺跡発掘調査概報XXII—国分寺市公共下水道面整備南部地区15号工事に伴う調査—』国分寺市遺跡調査会
- 上敷領久 1999『多摩湖坂道跡III 都営内藤1丁目第4団地建設に伴う事前調査』国分寺市遺跡調査会
- 上敷領久・木下さおり 2001『武蔵国分寺跡発掘調査概報25—昭和55～59年度 僧々々域内等の調査—』国分寺市遺跡調査会
- 上敷領久 2007『平成16・17年度 国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 上敷領久・増井有真・依田亮一 2013『武蔵国分寺跡発掘調査概報38—昭和54～60年度 僧寺寺院地内等の調査—』国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会
- 上村昌男 1982『武蔵国分寺跡発掘調査概報VI—市交響下水道南部地区15号工事に伴う調査』武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 上村昌男 1988『武蔵国分寺跡発掘調査概報XII—昭和50～53年度 公共下水道面整備に伴う調査—』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 上村昌男 1989『武蔵国分寺跡発掘調査概報XV—昭和53年度 国分寺市公共下水道面整備西元町地区3号工事に伴う工事—』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 上村昌男・吉田好孝・吉岡秀範・中山哲也 2002『武蔵国分寺跡発掘調査概報26—北方地区・平成8～10年度 西国分寺地区土地区画整理事業及び泉町公園事業に伴う調査—』国分寺市遺跡調査会
- 上村昌男 2003『武蔵国分寺跡発掘調査概報29—北方地区・平成11～13年度 西国分寺地区土地区画整理事業及び泉町公園事業に伴う調査—』国分寺市遺跡調査会
- 河内公夫他 1999『武蔵国分寺跡西方地区 武蔵台遺跡IV』都立府中病院内遺跡調査会
- 国武貞克 1999『VI. 調査成果 1. 旧石器時代』『日影山遺跡・東山道武蔵路』西国分寺地区遺跡調査会
- 合田芳正・国武貞克・上敷領久他 2005『武蔵国分寺跡発掘調査概報30—北方地区、(仮称)国分寺プロジェクト計画工事に伴う調査—』国分寺市遺跡調査会
- 国分寺市遺跡調査会 1992『武蔵国分寺跡発掘調査概報XVIII—市立第四中学校建設に伴う第2～5次調査—(図面・図版編)』
- 島田智博・依田亮一 2018『武蔵国分寺跡第718・722次調査』『平成28年度 国分寺市埋蔵文化財調査概報』国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会
- 滝口 宏他 1972『恋ヶ窪堂址調査報告』泉町庵寺址遺跡調査会
- 滝口 宏 1974『武蔵国分尼寺』早稲田大学出版部
- 滝口 宏 1987『武蔵国分寺跡調査報告—昭和39年～44年度—』国分寺市教育委員会
- 立川明子 2008『平成18年度 国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 立川明子 2009『平成19年度 国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 立川明子 2010『平成20年度 国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 立川明子 2011『平成21年度 国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 中道 誠 2008『国指定史跡武蔵国分寺跡附 平成17・18年度保存整備事業に伴う事前遺構確認調査』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 (※中門、塔跡2および周辺、金堂前面の調査を収載)
- 中道 誠 2009『国指定史跡武蔵国分寺跡 平成19年度保存整備事業に伴う事前遺構確認調査』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 (※塔跡1西方、中門、金堂前面、南門の調査を収載)
- 中道 誠 2010『国指定史跡武蔵国分寺跡 平成20年度保存整備事業に伴う事前遺構確認調査』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 (※南門、金堂前面、講堂、中廊部区画北辺の調査を収載)
- 中道 誠 2011『国指定史跡武蔵国分寺跡 平成21年度保存整備事業に伴う事前遺構確認調査』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 (※講堂、金堂の調査を収載)
- 中道 誠 2012『国指定史跡武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡 平成22年度保存整備事業に伴う事前遺構確認調査』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 (※金堂、鐘樓の調査を収載)
- 中道 誠 2013『国指定史跡武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡 平成23年度保存整備事業に伴う事前遺構確認調査』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 (※鐘樓、経蔵東、金堂・講堂間の調査を収載)
- 中道 誠 2016『国指定史跡武蔵国分寺跡発掘調査報告書I—史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査—(遺構編)』国分寺市教育委員会
- 永峯光一・広瀬昭弘・秋山道生他 1982『恋ヶ窪遺跡調査報告III』国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会

- 西野善勝他 1999『武蔵台東遺跡Ⅰ－(2)』都営川越道住宅遺跡調査会
- 日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会編 1985『武蔵国分寺跡遺物整理報告書一昭和31・33年度一』日本考古学協会
- 野田憲一郎 2002『武蔵国分寺跡調査報告6－南方地域の調査－都営府中栄町三丁目第2団地建設に伴う事前調査』
府中市埋蔵文化財調査報告第30集 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 (※参道口)
- 坂野善鏡・坂東雅樹・坂詰秀一・持田友宏・早川 泉・伊藤俊治・小林定之・国武貞克 1999『武蔵国分寺跡北方地区
日影山遺跡・東山道武蔵路－西国分寺地区(旧国鉄中央鉄道学園西側跡地)住宅市街地総合整備支援事業に伴う発掘調
査報告書一』西国分寺地区遺跡調査会
- 平田貴正・高橋和恵 1982『武蔵国分寺跡遺跡調査会年報Ⅱ一昭和51～53年度 寺地・僧寺々々確認調査一第2分冊』武
蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 福島宗人・中西 充・五十嵐彰・小栗一夫・戸井恵子・岩泉辰子 2003『武蔵国分寺跡遺跡 北方地区－西国分寺地区土
地区画整理事業に伴う調査一』東京都埋蔵文化財センター調査報告第136集
- 福田信夫 1994『武蔵国分尼寺Ⅰ 平成4年度発掘調査概報』国分寺市教育委員会
- 福田信夫 1995『武蔵国分尼寺Ⅱ 平成5年度発掘調査概報』国分寺市教育委員会
- 福田信夫 1996『武蔵国分尼寺Ⅲ 平成6年度発掘調査概報』国分寺市教育委員会
- 福田信夫 1997『武蔵国分尼寺Ⅳ 平成7年度発掘調査概報』国分寺市教育委員会
- 福田信夫・上敷領久 2003『武蔵国分寺跡発掘調査概報28(多喜窪遺跡の調査)』国分寺市遺跡調査会
- 福田信夫・中道 誠 2006『武蔵国分寺跡発掘調査概報32 史跡武蔵国分寺跡(僧寺地区)保存整備事業に伴う事前遺構
確認調査 平成15・16年度』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 (※伽藍地外、中門東、塔跡2の調査および
地下レーダー探査による予備調査を収載)
- 増井有真・依田亮一・島田智博・中野 純 2018『平成28年度 国分寺市埋蔵文化財調査概報』国分寺市教育委員会・国
分寺市遺跡調査会
- 増井有真 2017b『武蔵国分寺跡第706次調査』『平成27年度 国分寺市埋蔵文化財調査概報』国分寺市遺跡調査会
- 増井有真 2017c『武蔵国分寺跡第714次調査』『平成27年度 国分寺市埋蔵文化財調査概報』国分寺市遺跡調査会
- 雪田 孝・早川 泉・西脇俊郎・有吉重蔵・福田信夫 1979『武蔵国分寺跡遺跡調査会年報1974 武蔵国分寺跡』武蔵国
分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 依田亮一 2014『国指定史跡武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡 平成24年度保存整備事業に伴う事前遺構確認調査』国分寺
市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 (※中樞地区画施設・金堂跡南階段の調査を収載)
- 依田亮一 2015a『武蔵国分寺跡第695次調査』『平成25年度 国分寺市埋蔵文化財調査年報』国分寺市教育委員会
- 依田亮一・上敷領久 2016『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅸ 第94次調査一日立製作所中央研究所構内純水設備付風建屋建設に伴
う調査一』株式会社製作所中央研究所・国分寺市遺跡調査会
- 依田亮一 2018『附編(1) 元町通り水道管付設替工事に伴う立会調査』『平成28年度 国分寺市埋蔵文化財調査概報』
国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会
- 国分寺市史編さん委員会 1982『国分寺市史料集(Ⅱ)一武蔵野新田開発関係文書・川崎平右衛門関係文書』
- 国分寺市史編さん委員会 1983『国分寺市史料集(Ⅲ)一寺社・信仰・文芸関係文書一』
- 国分寺市史編さん委員会 1986『国分寺市史 上巻』国分寺市
- 国分寺市史編さん委員会 1990『国分寺市史 中巻』国分寺市
- 国分寺市史編さん委員会 1991『国分寺市史 下巻』国分寺市
- 国分寺市教育委員会 2004『史跡武蔵国分寺跡(尼寺地区)保存整備事業報告書』
- 国分寺市教育委員会 2011『史跡武蔵国分寺跡(僧寺地区)第一期整備[中樞地区]基本設計報告書』
- 国分寺市教育委員会 2012『国指定史跡武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡 保存管理計画(第2次)』
- 国分寺市・国分寺市教育委員会 2015『市政施行50周年記念 国分寺市の今昔』
- 国分寺市教育委員会・坂戸市教育委員会 2017『第3回国分寺市・坂戸市合同企画展 勝呂庵寺の瓦と武蔵国分寺～瓦で
つながる古代の国分寺と坂戸』

遺物 観 察 表



(伽藍中柱部区画施設) 区画北西出土土器

第1表 金堂地区出土土器・陶磁器観察表(1)(図面1・2、図版1)

No.	器種	観察内容
1	土師器 環	法量 底径(6.0cm)/残存高0.9cm 残存率 底部片 色調 橙黄色 焼成 良好 胎土 粗、雲母少量含む。 調整 体部外面・ヘラケズリ、底部外面・外周手持ヘラケズリ、内面ナデ 特徴 南武型 出土位置 5区表土
2	須恵器 環	法量 底径(4.2cm)/器高(3.4cm) 残存率 体部~底部1/4 色調 淡灰色 焼成 良好 胎土 やや粗、砂粒少量含む。 調整 体部内外面・回転ナデ 底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 7区東表土
3	須恵器 環	法量 底径(6.0cm)/残存高1.4cm 残存率 底部3/4 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 やや粗、砂粒少量含む。 調整 体部内外面・回転ナデ 底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 8区埋戻土
4	須恵器 環	法量 底径(5.5cm)/残存高1.2cm 残存率 底部1/2 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 やや密、砂粒・白色粒を含む。調整 底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 19区埋戻土
5	須恵器 環	法量 底径(5.8cm)/残存高0.9cm 残存率 底部1/2 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 密、砂粒・白色針状物質を多く含む。調整 底部・回転糸切り 産地 南比企窯 出土位置 7区東表土
6	須恵器 環	法量 底径(4.1cm)/残存高1.7cm 残存率 体部下~底部3/4 色調 明赤褐色 焼成 良好 胎土 やや粗、砂粒・白色粒を含む。調整 底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 特徴 内外面煤付着(灯明皿)
7	須恵器 環	法量 底径(4.8cm)/残存高1.7cm 残存率 底部1/4 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 やや密、砂粒・白色粒・白色針状物質を少量含む。調整 底部・回転糸切り 産地 南比企窯 出土位置 7区表土
8	須恵器 環	法量 底径(4.9cm)/残存高2.0cm 残存率 底部1/3 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 やや密、砂粒・白色粒・白色針状物質を含む。調整 体部内外面・回転ナデ 底部・回転糸切り 産地 南比企窯 出土位置 7区表土
9	須恵器 環	法量 底径(4.5cm)/残存高0.5cm 残存率 底部3/4 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 やや密、砂粒少量含む。調整 底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 2区表土
10	須恵器 環	法量 底径(6.0cm)/残存高0.8cm 残存率 底部1/2 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 密、砂粒・白色粒を含む。調整 底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 17区表土
11	須恵器 環	法量 底径(5.6cm)/残存高1.3cm 残存率 底部1/4 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 密、白色粒を少量含む。調整 体部下平・回転ヘラケズリ 底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 7区表土
12	須恵器 環	法量 底径(5.6cm)/残存高1.3cm 残存率 底部1/4 色調 灰白色 焼成 やや軟質 胎土 密 調整 底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 7区東表土
13	須恵器 環	法量 底径(6.4cm)/残存高1.5cm 残存率 底部1/4 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 やや粗、砂粒・白色粒を多く含む。調整 底部・回転糸切り 産地 東金子窯 特徴 内外面に火押痕あり 出土位置 10区埋戻土
14	須恵器 環	法量 底径(6.4cm)/残存高1.1cm 残存率 底部1/6 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 やや粗、砂粒・白色粒を少量含む。調整 底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 17区表土
15	須恵器 環	法量 底径(6.0cm)/残存高1.7cm 残存率 底部1/8 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 やや粗、砂粒・白色粒を含む。調整 底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 5区表土
16	須恵器 環	法量 底径(5.8cm)/残存高2.9cm 残存率 体部1/4~底部の一部 色調 暗灰色 焼成 やや軟質 胎土 粗、砂粒を多く含む。調整 体部内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 東金子窯 特徴 体部内外面に煤付着(灯明皿) 出土位置 7区埋戻土
17	須恵器 環	法量 底径(5.8cm)/残存高0.7cm 残存率 底部1/8 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 やや粗、礫少量含む。調整 底部・回転糸切り 産地 東金子窯 特徴 内外面に煤付着(灯明皿) 出土位置 2区表土
18	須恵器 環	法量 底径(8.0cm)/残存高2.0cm 残存率 底部1/8 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 黒斑・礫・砂粒多く含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 7区表土
19	須恵器 環	法量 底径(4.4cm)/残存高2.9cm 残存率 体~底部1/6 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 砂粒多く含むが、緻密。調整 内外面・回転ナデ 底部・回転糸切り 産地 火押窯 出土位置 10区瓦溜
20	須恵器 環	法量・残存率 口径1.8 色調 暗赤灰色 焼成 良好 胎土 密 調整 内外面・回転ナデ 産地 東金子窯 特徴 口縁部に内外面煤付着(灯明皿) 出土位置 1区表土
21	須恵器 環	法量 底径(7.2cm)/残存高0.6cm 残存率 底部1/4 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 緻密 調整 底部・回転糸切り~外周回転ヘラケズリ 産地 東金子窯(前内出窯) 出土位置 10区埋戻土
22	須恵器 塊	法量 底径(10.0cm)/残存高1.4cm 残存率 底部1/4 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・小礫微量含み、やや粗い。調整 外面・回転ナデ 体部下・回転ヘラケズリ 底部・回転糸切り~外周手持ヘラケズリ 産地 東金子窯 出土位置 30区瓦溜
23	土師質土器 環	法量 底径(5.7cm)/残存高1.8cm 残存率 底部1/6 色調 明褐色 焼成 良好 胎土 軟質、緻密。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 出土位置 9区埋戻土
24	土師質土器 環	法量 口径(12.6cm)/底径4.6cm/器高4.2cm 残存率 口径1/8~底部 色調 橙褐色 焼成 良好 胎土 砂粒多く、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 特徴 器面荒れ、内面煤付着(灯明皿) 出土位置 7区東表土
25	土師質土器 環	法量 口径(12.0cm)/底径5.3cm/器高3.8cm 残存率 口径~底部1/4 色調 浅橙黄色 焼成 良好 胎土 やや密 小礫少 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 特徴 口縁部内外面に煤付着(灯明皿) 出土位置 8区埋戻土
26	土師質土器 環	法量 底径5.5cm/残存高2.3cm 残存率 底部片 色調 黄灰色 焼成 普通 胎土 軟質、砂粒微量含むが、緻密。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 出土位置 10区表土
27	土師質土器 環	法量 口径(6.0cm)/残存高2.2cm 残存率 底部片 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・角四石・石英を含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 出土位置 5区表土
28	土師器 環	法量 底径(5.0cm)/残存高2.4cm 残存率 底部1/2 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・赤色スコリア・石英を含む。調整 外面・指頭圧痕、内面・ヘラナデ、底部外面・不定向ヘラケズリ 特徴 南武型 出土位置 24区表土

第1表 金堂地区出土土器・陶磁器観察表(2)(図面1・2、図版1)

No.	器種	観察内容
29	土師質土器 環	法量 底径(5.6)cm/残存高1.2cm 残存率 底部2/3 色調 淡褐色(内面赤褐色) 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を含み、やや粗い。 調整 底部・回転系切り 出土位置 7区西表土
30	土師質土器 環	法量 底径(5.6)cm/残存高0.9cm 残存率 底部片 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・赤色スコリア少量含み、粗い。 調整 底部・回転系切り、内面見込みに糸切痕あり 特徴 内外面に煤付着 出土位置 17区P16
31	土師質土器 環	法量 底径5.0cm/残存高1.4cm 残存率 底部3/4 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 緻密 調整 底部・回転系切り、内面・回転ナデ(見込口ロ口目顯著) 出土位置 8区表土
32	土師質土器 環	法量 底径(5.0)cm/残存高1.8cm 残存率 底部1/4 色調 淡白色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒多く含み、やや粗い。 調整 底部・回転系切り 出土位置 24区南西石敷付近
33	土師質土器 環	法量 底径4.0cm/残存高1.1cm 残存率 底部片 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒多く、やや粗い。 調整 底部・回転系切り 内面・回転ナデ 出土位置 5区表土
34	土師質土器 環	法量 底径(4.2)cm/残存高0.9cm 残存率 底部片 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・赤色スコリア多く含み、粗い。 調整 底部・回転系切り 出土位置 7区表土
35	土師質土器 環	法量 底径(4.6)cm/残存高0.6cm 残存率 底部1/8 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 白色粒・砂粒多く含み、やや粗い。 調整 底部・回転系切り 出土位置 2区表土
36	土師質土器 環	法量 底径(6.0)cm/残存高2.2cm 残存率 1/8 色調 暗褐色 焼成 良好 胎土 緻密で軟質 調整 内外面・回転ナデ 底部・回転ナズリ?(不鮮明) 出土位置 1区表土
37	土師質土器 環	法量 底径(6.8)cm/残存高1.9cm 残存率 底部2/3 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒多く、やや粗い。 調整 内外面・回転ナデ 底部・回転系切り 特徴 内面煤・タール付着(灯明面) 出土位置 24区表土
38	土師質土器 環	法量 底径(4.4)cm/残存高2.0cm 残存率 体部下半~底部1/6 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 小礫・砂粒を含む、やや粗い。 調整 内外面・回転ナデ 底部・回転系切り 特徴 内面器面荒れ 出土位置 7区東表土
39	土師質土器 環	法量 底径(8.0)cm/残存高2.0cm 残存率 体部下半~底部1/3 色調 赤褐色 内面黒色 焼成 良好 胎土 軟質、砂粒・黒色粒を含む。 調整 外面体部ナデ→下半平方向のヘラケズリ 底部・回転系切り 特徴 内黒 出土位置 8区表土
40	土師質土器 環	法量 底径(5.4)cm/器高(3.5)cm 残存率 体~底部1/6 色調 褐色 焼成 普通 胎土 軟質、砂粒・赤色スコリアやや多く含み、粗い。 調整 内外面・ナデ 底部・回転系切り(不鮮明) 出土位置 7区東埋戻土
41	土師質土器 環	法量 底径(7.6)cm/残存高1.3)cm 残存率 底部1/3 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 軟質、砂粒・小礫少量含み、やや粗い。 調整 内外面・回転ナデ 底部・回転系切り 特徴 器面やや荒れ 出土位置 2区
42	土師質土器 環	法量 底径(6.5)cm/残存高2.4cm 残存率 底部1/2 色調 淡褐色 焼成 軟質 胎土 やや軟質、砂粒・赤色スコリアを少量含む。 調整 内外面・回転ナデ 底部・回転系切り(不鮮明) 特徴 内面煤付着 出土位置 8区埋戻土
43	灰釉陶器 皿	法量 底径(7.0)cm/残存高2.2cm 残存率 底部1/3 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 砂粒・黒色粒を少量含み、やや粗い。 調整 内外面・回転ナデ 底部・回転ヘラケズリ 施釉 体部内外面に淡緑色の灰釉を刷毛塗り(見込無釉) 産地 猿投窯 時期 K 90号窯式 27~30区表土
44	灰釉陶器 碗	法量 底径8.1cm/残存高1.8cm 残存率 底部 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 黒色粒・砂粒多く含む。 調整 底部・回転ヘラケズリ 施釉 体部内面に淡い緑色の灰釉を刷毛塗り(見込無釉) 産地 猿投窯 時期 K 90号窯式(Ⅱ期新) 出土位置 9区表土
45	緑釉陶器 皿	法量 底径(8.8)cm/残存高1.2cm 残存率 底部1/6 色調 淡緑色 焼成 良好 胎土 灰褐色でやや硬質、白色粒・黒斑を含む。 調整 内外面・ヘラ磨き後に施釉 底部・回転ヘラケズリ 産地 猿投窯 時期 Ⅱ期新 出土位置 4区表土
46	須恵器 甕	法量 底径(15.0)cm/残存高3.8cm 残存率 底部1/8 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 やや粗、砂粒・小礫・白色針状物質を含む。 調整 内外面・ナデ、内面に研磨痕あり 特徴 南北企堂 出土位置 30区東埋
47	土師器 甕	法量 底径9.8cm/残存高2.2cm 残存率 底部 色調 赤褐色(内面:黒色) 焼成 良好 胎土 やや粗い。 砂粒・角閃石多く、雲母少量含む。 調整 底部・指頭圧痕 特徴 内面器面が荒れ、煤状物質付着 出土位置 8区瓦溜
48	須恵器 浄瓶	法量 残存高6.5cm/注口径3.7cm 残存率 注口部片 色調 青灰色(断面:赤褐色) 焼成 良好 胎土 密 調整 内面・ナデ、外面・注口下端に横方向のカキム状沈線が巡る。 産地 東金子窯 特徴 外面降灰桶付着 出土位置 6区瓦溜
49	須恵器 甕	法量 口径(25.4)cm/残存高7.7cm 残存率 口縁部1/8 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 白色粒・砂粒少量含む 調整 内外面・回転ナデ 産地 東金子窯 出土位置 7区東埋戻土
50	須恵器 浄瓶	法量 残存高6.7cm/注口径3.4cm 残存率 注口1/2 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 軟質、白色粒少量含む、緻密 調整 内面・ナデ 産地 東金子窯? 出土位置 30区瓦溜
51	須恵器 甕	法量 底径(23.2)cm/残存高4.7cm 残存率 底部1/10 色調 淡赤褐色 焼成 良好 胎土 硬質、白色粒を多く含む 調整 内外面・回転ナデ 底部・ヘラケズリ 産地 東金子窯 出土位置 9区表土
52	灰釉 徳利	法量 底径(8.0)cm/残存高4.0cm 残存率 底部1/3 色調 濃緑色の灰釉を内外面に施釉、高台内輪割ぎ 焼成 良好 胎土 密 調整 内外面・回転ナデ 底部・ヘラケズリ 特徴(美濃、18世紀 出土位置 26区表土)
53	鉄釉灰釉 塗分碗	法量 底径(5.0)cm/残存高2.1cm 残存率 底部1/3 色調 -- 焼成 良好 胎土 密 調整 -- 特徴 内面灰釉、外面鉄釉 産地 瀬戸・美濃、18世紀 出土位置 26区表土
54	灰釉 折縁鉢	法量 口径(30.4)cm/残存高5.2cm 残存率 口縁1/8 色調 淡緑色 胎土 灰白色、やや軟質 調整 内外面回転ナデ 特徴 瀬戸・美濃、18世紀 出土位置 30区瓦溜
55	型紙附付 丸甕	法量 底径(3.0)cm/残存高3.3cm 残存率 体部下半~底部 特徴 瀬戸・美濃、19世紀後半 出土位置 7区表土

第1表 金堂地区出土土器・陶磁器観察表(3)(図面1・2、図版1)

No.	器種	観察内容
56	染付碗	法量 口径3.8cm/残存高2.2cm 残存率 底部付近2/3 特徴 腹部外面に淡い須度で線を描き、見込は軸削ぎ。肥前系、18世紀後半。出土位置 7区表土
57	筒型湯呑	法量 口径7.0cm/残存高5.0cm 残存率 口径1/4 色調 淡黄色 焼成 良好 胎土 密 調整 口縁内側に軸削ぎ(やや赤味かかると) 特徴 表面に「防」「大日本防空室」「社長 小澤忠」の路あり。出土位置 5区表土
58	ゴム印判小碗	法量 口径(8.5)cm/口径3.0cm/器高4.6cm 残存率 口径1/8 底部完形 色調 濃青色(コバルト絵具) 焼成 良好 胎土 密 特徴 戦時下の統制磁器、見込に「納税/小平村/完納賞」印、高台内は一重線に「統754」刷刺あり。出土位置 4区表土
59	祈念小杯	法量 口径5.8cm/器高3.0cm 残存率 完形 色調 外面褐色/内面白色 焼成 良好 胎土 密 調整 高台陶刻(サーベル状) 特徴 見込に金字で「凱旋記念」刷つて(兜)の緒をしめよとの路と兎・サーベルの図案を配置。緑色で葉、桃色で花を表現。外面体部に星印の陶刻マークあり。出土位置 9区埋戻土
60	青磁小杯	法量 口径5.5cm/口径2.0cm/器高3.0cm 残存率 完形 色調 青緑色(クロム青磁) 焼成 良好 胎土 密 特徴 高台接地面茶褐色 出土位置 9区埋戻土
61	青磁小杯	法量 口径5.4cm/口径2.1cm/器高3.0cm 残存率 口径3/4~底部 色調 青緑色(クロム青磁) 焼成 良好 胎土 密 特徴 高台接地面茶褐色 出土位置 9区埋戻土
62	青磁小杯	法量 口径5.5cm/口径2.0cm/器高3.1cm 残存率 完形 色調 青緑色(クロム青磁) 焼成 良好 胎土 密(青緑色) 特徴 高台接地面茶褐色 出土位置 9区埋戻土

第2表 講堂地区出土土器・陶磁器観察表(1)(図面3・4、図版2・3)

No.	器種	観察内容
1	土師器環	法量 口径(11.0)cm/口径(5.8)cm/器高3.2cm 残存率 口縁部~底部1/6 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 軟質、砂粒少量含む。調整 外面-口縁部ヨコナデ、体部指頭庄痕、内面-回転ナデ、底部外面-ヘラナデ。特徴 南武蔵型 出土位置 10区(表土)
2	須恵器環	法量 口径(12.6)cm/口径(6.3)cm/器高3.9cm 残存率 口縁部1/4~底部 色調 濃青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を多く含む、やや粗い。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り。産地 東金子窯 特徴 内外面保付着(灯明皿) 出土位置 10区(南東側表土)
3	須恵器環	法量 口径(10.9)cm/口径(6.4)cm/器高3.7cm 残存率 口縁部~底部1/2 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒をやや多く含む、粗い。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り。産地 東金子窯 特徴 口縁部内面保付着(灯明皿) 出土位置 10区(表土)
4	須恵器環	法量 口径(11.7)cm/口径(6.3)cm/器高3.3cm 残存率 口縁部~底部1/4 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 硬質、砂粒・白色粒少量含む。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り。特徴-産地 東金子窯 出土位置 10区(表土)
5	須恵器環	法量 口径(12.2)cm/口径(5.8)cm/器高3.4cm 残存率 口縁部~底部1/6 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒多く含む、やや粗い。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り。産地 東金子窯 出土位置 10区(西側表土)
6	須恵器環	法量 口径(11.4)cm/口径(5.0)cm/器高4.2cm 残存率 口縁部~底部1/6 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒多く含む、やや粗い。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り。特徴 東金子窯 出土位置 10区(東側表土)
7	須恵器環	法量 口径(12.4)cm/口径(4.2)cm/器高3.8cm 残存率 口縁部~底部1/8 色調 灰白色(内面やや黒灰色) 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り。特徴-産地 南多摩産 出土位置 10区(西側表土)
8	須恵器環	法量 口径(12.6)cm/口径(7.0)cm/器高4.2cm 残存率 口縁部~底部1/6 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒針状物質含む。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り。産地 南北企業 出土位置 10区(表土)
9	須恵器環	法量 口径(14.9)cm/器高(2.3)cm 残存率 底部1/6 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を含むが、緻密。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 産地 東金子窯 特徴 体部内面に煤付着(灯明皿) 出土位置 10区(表土)
10	須恵器環	法量 口径(7.0)cm/器高(1.0)cm 残存率 底部1/6 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒・白色針状物質を含む、やや粗い。調整 底部-回転系切り→外周回転ヘラクスリ。産地 南北企業 出土位置 10区(南西側表土)
11	須恵器環	法量 口径(6.6)cm/器高(1.0)cm 残存率 底部1/4 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色針状物質少量含む。調整 底部-回転系切り→外周回転ヘラクスリ。産地 南北企業 特徴 底部外面にヘラ記号あり(判読不明) 出土位置 10区(表土)
12	須恵器環	法量 口径(6.0)cm/器高(1.6)cm 残存率 底部1/8 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 緻密 調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り→外周~体部下端回転ヘラクスリ。産地 東金子窯(前内出窯) 出土位置 10区(表側表土)
13	須恵器壺	法量 高台径(6.9)cm/器高(2.4)cm 残存率 底部2/3 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 緻密 調整 外面-回転ナデ、底部-回転系切り→高台貼付。産地 東金子窯 出土位置 10区(南西側表土)
14	須恵器蓋	法量 口径(20.8)cm/器高(1.9)cm 残存率 口径部1/8 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒多く含む、粗い。調整 内外面-回転ナデ 産地 東金子窯 出土位置 10区(南西側表土)
15	土師質土器環	法量 口径(10.2)cm/口径(5.1)cm/器高4.3cm 残存率 口縁部1/4~底部 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 小磯多く、赤色スロリア・砂粒を少量含む、粗い。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り。特徴 口縁部~体部内面に煤付着(灯明皿) 出土位置 10区(南東側表土)

第2表 講堂地区出土土器・陶磁器観察表(2)(図面3・4、図版2・3)

No.	器種	観察内容
16	土師質土器 環	法量 口径(11.5)cm/底径(5.5)cm/器高4.5cm 残存率 口縁部1/6~底部 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を多く含み、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り。特徴 口縁部内外面に煤付着(灯明皿)出土位置 10区(表土)
17	土師質土器 環	法量 口径(12.7)cm/底径4.5cm/器高4.5cm 残存率 口縁部~底部1/6 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含み、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り。出土位置 10区(表土)
18	土師 器 環	法量 口径(11.5)cm/底径(6.0)cm/器高3.7cm 残存率 口縁部~底部1/4 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 やや硬質。砂粒・雲母少量含む。調整 外面・口縁部ヨコナデ、体部下・不定方向ヘラズリ、内面・ナデ、底部外面・糸切後、外周手持ちヘラズリ。特徴 技法は相模系に似るが、胎土はやや硬質(在地か?)。口縁部内外面に煤付着。出土位置 14区(表土)
19	土師質土器 環	法量 口径(13.0)cm/底径4.6cm/器高3.6cm 残存率 口縁部~底部1/3 色調 淡褐色 焼成 軟質 胎土 砂粒・赤色スコリアを多量に含み、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り。特徴 底部がやや突出する 出土位置 10区(表土)
20	土師質土器 環	法量 底径4.8cm/器高(2.2)cm 残存率 底部片 色調 灰褐色 焼成 軟質 胎土 砂粒・赤色スコリアを少量含み、やや粗い。調整 底部・回転系切り 特徴 体部内面・底部外面に煤付着(灯明皿)出土位置 10区(表土)
21	土師質土器 環	法量 底径(8.0)cm/器高(1.6)cm 残存率 底部片 色調 淡褐色 焼成 軟質 胎土 雲母多く含み、粗い。調整 外面・回転ナデ、底部・回転系切り、内面・ヘラミガキ。特徴 内黒土 出土位置 12区(表土)
22	土師質土器 皿	法量 底径(6.0)cm/器高(2.0)cm 残存率 底部1/6 色調 淡褐色 焼成 軟質 胎土 砂粒多量・雲母少量含み、やや粗い。調整 外面・回転ナデ、底部・ヘラズリ?(不鮮明) 特徴 底部がやや突出する 出土位置 10区(表土)
23	土師質土器 環	法量 口径(11.6)cm/底径(6.6)cm/器高4.3cm 残存率 口縁部~底部1/6 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 白色粒多量・砂粒少量含み、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 特徴 全体に煤がかる 出土位置 10区(東側表土)
24	土師質土器 環	法量 口径(11.4)cm/底径(5.9)cm/器高3.7cm 残存率 口縁部1/6~底部の一部 色調 明褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含み、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 特徴 内面全体に煤付着(灯明皿)出土位置 10区(表土)
25	土師質土器 環	法量 口径(13.0)cm/器高(3.8)cm 残存率 口縁部~体部1/5 色調 淡白色 焼成 良好 胎土 砂粒多く、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ 特徴 口縁部~体部内面に煤付着(灯明皿)出土位置 10区(南西側表土)
26	土師質土器 高台付壇	法量 底径(6.8)cm/器高(2.6)cm 残存率 底部3/4 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒少量含むが、緻密。調整 内外面・回転ナデ、底部・ナデ→高台貼付。特徴 広台外面に煤がかる。出土位置 12区(表土)
27	土師質土器 環	法量 底径(7.8)cm/器高(2.7)cm 残存率 底部1/8 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含み、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 特徴 体部内外面、底部外面に煤付着(灯明皿)出土位置 10区(東側表土)
28	土師質土器 環	法量 口径(14.4)cm/底径(6.2)cm/器高3.9cm 残存率 口縁部~底部1/3 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒多量・小礫少量含む、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 10区(南西側表土)
29	土師質土器 壇	法量 高台径(9.3)cm/器高(2.9)cm 残存率 底部3/4 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 小礫・砂粒を多く含む。調整 底部・回転ナデ→高台貼付 出土位置 14区(表土)
30	土師質土器 環	法量 底径5.3cm/器高(2.6)cm 残存率 底部 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 小礫・砂粒少量含む。調整 高台外面・ナデ・指頭圧痕、底部・回転系切り 特徴 柱状高台 出土位置 8区(西側表土)
31	土師質土器 壇	法量 底径(7.0)cm/器高(3.1)cm 残存率 底部~脚部1/2 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を少量含む。特徴 体部内外面・回転ナデ、底部・回転系切り→高台貼付 特徴 足高状高台 出土位置 8区(表土)
32	土師質土器 高台付壇	法量 底径(5.6)cm/器高(2.1)cm 残存率 底部(脚部欠損) 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒をやや多く含む、粗い。調整 内外面・回転ナデ 見込一定方向のヘラミガキ→黒色処理 特徴 内黒土 出土位置 3-2区(旧調査による埋戻土)
33	土師質土器 小皿	法量 口径(9.5)cm/底径5.3cm/器高2.8cm 残存率 口縁部1/3~底部 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒をやや多く、小礫を少量含む。やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り、見込・コビナデ。特徴 口縁部~体部内外面に煤付着(灯明) 出土位置 8区(表土)
34	土師質土器 小皿	法量 口径(8.0)cm/底径(4.7)cm/器高2.1cm 残存率 口縁部1/4~底部 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒・小礫微量含む。やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り、見込・回転ナデ。特徴 口縁部内外面に煤付着(灯明皿) 出土位置 8区(表土)
35	土師質土器 小皿	法量 口径8.1cm/底径4.6cm/器高1.7cm 残存率 完形 色調 暗褐色 焼成 良好 胎土 黒斑・赤色スコリア・角閃石微量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 出土位置 3-1区(旧調査による埋戻土)
36	土師質土器 小皿	法量 口径(8.3)cm/底径(6.7)cm/器高1.9cm 残存率 口縁部~底部3/4 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 軟質、緻密。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り(中心切り) 特徴 見込み中央部が突出する 出土位置 12区(表土)
37	灰釉陶器 碗	法量 底径(7.0)cm/器高(1.7)cm 残存率 底部1/8 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 緻密 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転ナデ 施釉 刷毛塗り(見込部も含む) 産地 猿投産 時期 K90号窯式 出土位置 10区(東側表土)
38	灰釉陶器 皿	法量 底径(7.0)cm/器高(1.9)cm/高台高(0.9)cm 残存率 底部1/6 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 緻密 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転ナデ 施釉 見込み部分・無釉 産地 猿投産 時期 K90号窯式(Ⅱ期中~新段階) 出土位置 7区(表土)
39	灰釉陶器 碗	法量 底径(8.5)cm/器高(2.2)cm 残存率 底部1/4 色調 淡灰色 焼成 良好 胎土 砂粒少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転ヘラズリ 施釉 体部内面刷毛塗り 産地 猿投産 時期 K90号窯式(Ⅱ期中段階) 出土位置 7区(表土)

第2表 講堂地区出土土器・陶磁器観察表(2)(図面3・4、図版2・3)

No.	器種	観察内容
40	灰釉陶器 皿	法量 底径(6.8cm)／器高(1.4cm) 残存率 底部1/6 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 黒灰あり、やや緻密。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り。 施釉 見込部無釉、高台外面に薄緑色の灰釉付着 産地 猿投塚時期 O 53号室式(Ⅲ期古段階) 出土位置 15区(表土)
41	緑釉陶器 椀	法量 底径(5.5cm)／器高(2.0cm) 残存率 体部下半～底部1/10 色調 素地 灰褐色、釉調 明緑色 焼成 良好 胎土 硬質、緻密 調整 体部内外面・回転ナデ、底部・回転ヘラケズリ→高台貼付 産地 尾張 時期 Ⅱ期中段階 出土位置 3-1区(旧調査による埋戻土)
42	緑釉陶器 碗	法量 底径(6.0cm)／器高(1.2cm) 残存率 底部1/4 色調 素地 灰褐色、釉調 濃緑色 焼成 良好 胎土 緻密 調整 底部・回転ヘラケズリ→高台貼付 産地 尾張 時期 H 72号室式(Ⅲ期古段階) 出土位置 6区(表土)
43	二彩 小壺	法量 器高(0.8cm) 残存率 体部1/10 色調 素地・灰白色、釉調 透明・濃緑色 焼成 良好 胎土 軟質、 緻密 調整 内外面・回転ナデ 産地 京都周辺(幡枝か?) 時期 8世紀後～9世紀前半 特徴 三彩小壺の可能性あり 出土位置 10区(西側表土)
44	土師器 甕	法量 器高(5.2cm) 残存率 口縁部片 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多量に含む。 調整 外面・ 口縁部ココナデ、頸部以下横方向のヘラケズリ、内面・ヘラナデ 特徴 武蔵型甕 出土位置 10区(西側表土)
45	須恵器 甕	法量 器高(4.7cm) 残存率 口縁1/10 色調 内面・灰色、表面・赤褐色 焼成 良好 胎土 黒灰・礫を含み、 粗い。 調整 外面ナデ 産地 東金子窯 出土位置 10区(表土)
46	須恵器 長頸瓶	法量 底径(8.8cm)／器高(1.9cm) 残存率 底部 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 礫を少量含む、粗い。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転ナデ→高台貼付 特徴 体部割口に研磨痕(2次利用) 産地 東金子窯 出土位置 12区(表土)
47	須恵器 長頸瓶	法量 底径(5.8cm)／器高(5.0cm) 残存率 底部1/8 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を含むが、 緻密。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転ナデ→高台貼付 特徴 内面胴部の片側に円形の降灰痕あり。 産地 東金子窯 出土位置 10区(南東側表土)
48	灰釉陶器 皿	法量 口径(19.0cm)／器高(4.0cm) 残存率 口縁部1/4 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 黒灰少量含むが、 緻密。 調整 内外面・回転ナデ 特徴 口縁部内面に薄緑色の灰釉付着 出土位置 3-1区(旧調査による埋戻土)
49	青磁 鉢	法量 口径(22.5cm)／器高(3.4cm) 残存率 口縁部1/8 色調 胎土・灰白色 釉調 淡水色 焼成 良好 胎土 硬質、緻密。 特徴 口縁部内面に格子文 出土位置 11区(表土)
50	青磁 鉢	器高(1.1cm) 残存率 口縁部片 色調 胎土・灰白色 釉調 淡水色 焼成 良好 胎土 密 特徴 口縁部内 面に格子文、49と同一体か? 出土位置 9区(表土)
51	長石釉皿 (志野皿)	法量 口径(10.9cm)／底径(6.0cm)／器高2.5cm 残存率 口縁部～底部1/2 色調 胎土・灰褐色 釉調 灰白 色 焼成 良好 胎土 密 産地 瀬戸・美濃窯 年代 17世紀 特徴 高台内3か所にトナシ痕あり。 出土位置 3-1区(旧調査による埋戻土)
52	鉄釉 鉢	法量 器高(4.1cm) 残存率 口縁部片 色調 胎土・灰白色、釉調 茶褐色 焼成 良好 胎土 軟質、緻密。 産地 瀬戸・美濃 年代 18世紀後半以降 出土位置 10区(西側表土)
53	灰釉 碗	法量 底径(6.0cm)／器高(3.4cm) 残存率 体部～底部1/3 色調 白色 焼成 良好 胎土 砂粒少量含むが、 緻密。 調整 内外面・回転ナデ、体部内外面に灰白色の灰釉を施す。 産地 瀬戸・美濃 年代 18世紀後半以 降 出土位置 11区(表土)

第3表 鐘樓地区出土土器・陶磁器観察表(図面4、図版3)

No.	器種	観察内容
1	土師質土器 皿	法量 口径(13.4cm)／底径(8.2cm)／器高1.9cm 残存率 口縁1/10～底部1/2 色調 明褐色 焼成 良好 胎土 砂粒少量含む、粗い。 調整 外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 表土 特徴 内黒土器 Aトレンチ
2	灰釉陶器 椀	法量 底径(8.0cm)／器高(2.5cm) 残存率 底部1/3 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を少量 含む、粗い。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転ヘラケズリ→高台貼付。 施釉 刷毛塗(見込無釉) 産地 猿投 時期 K 90号室式(Ⅱ期新) 出土位置 表土

第4表 堂間地区(中門・金堂間)出土土器・陶磁器観察表(1)(図面4、図版3)

No.	器種	観察内容
1	須恵器 環	法量 底径(5.4cm)／器高(2.6cm) 残存率 底部1/3 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 小礫・白色粒を少量 含むが、緻密。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 表土
2	須恵器 環	法量 底径(5.4cm)／器高(2.6cm) 残存率 底部1/4 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 礫・砂粒・白色粒を 少量含む、やや粗い。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 特徴 底部外面に煤付着 産地 東金子窯 出土位置 表土
3	土師質土器 環	法量 口径10.7cm／底径5.7cm／器高4.6cm 残存率 口縁1/2～底部 色調 柑褐色 焼成 良好 胎土 黒 灰・砂粒を含む、軟質で粉っぽい。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り? (不詳明) 特徴 口縁部内外 面に煤付着(灯明皿) 出土位置 表土
4	土師質土器 環	法量 底径4.7cm／器高(1.5cm) 残存率 底部片 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を少量含む、 やや粗い。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 出土位置 表土
5	土師質土器 環	法量 口径(12.4cm)／底径(5.3cm)／器高(3.5cm) 残存率 体部1/6～底部 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 白色粒を多く含む。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 出土位置 表土

第4表 堂間地区(中門・金堂間)出土土器・陶磁器観察表(2)(図面4、図版3)

No.	器種	観察内容
6	土師質土器 環	法量 口径(6.2)cm/器高(1.6)cm 残存率 底部1/8 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 緻密 調整 底部-回転系切り 特徴 内外面-タール状物質付着(灯明皿) 出土位置 表土
7	土師質土器 小皿	法量 口径(8.0)cm/口径(5.6)cm/器高1.7cm 残存率 1/10 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。 調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 出土位置 表土
8	須恵器 環	法量 器高(2.6)cm 残存率 体部1/10 色調 明黄色 焼成 良好 胎土 やや粗い 調整 内外面-回転ナデ 特徴 体部外面に「人」?墨書痕 産地 不明(南多摩座?) 出土位置 表土

第5表 堂間地区(金堂・講堂間)出土土器・陶磁器観察表(図面5、図版3)

No.	器種	観察内容
1	土師器 環	法量 口径(12.0)cm/口径(8.0)cm/器高(4.1)cm 残存率 口径1/10~底部1/4 色調 暗褐色 焼成 良好 胎土 砂粒少量含む、やや粗い。 調整 口径部-内面-ヨコナデ、体部外面-指頭圧痕、底部-ヘラケズリ 特徴 南武蔵型・全体的に煤付着 出土位置 6区覆瓦
2	土師器 環	法量 口径(12.0)cm/口径7.2cm/器高(4.1)cm 残存率 口径1/8~底部 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・炭母を多く含む。 調整 口径部内外面-ヨコナデ、体部外面-底部-ヘラケズリ、体部内面-ヘラナデ 特徴 整形・胎土ともに武蔵型裏に似る、体部下半-底部に煤付着。 出土位置 6区表土
3	須恵器 環	法量 口径(11.6)cm/口径(5.2)cm/器高4.1cm 残存率 口径1/4~底部1/2 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を多量に含む。 調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 特徴 器面全体荒れ 産地 南多摩座? 出土位置 4区表土
4	須恵器 環	法量 口径(5.0)cm/器高(0.8)cm 残存率 底部1/4 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含むが、緻密。 調整 底部-回転系切り 特徴 外面体部下半に煤付着 産地 東金子窯 出土位置 3区表土
5	須恵器 環	法量 口径12.2cm/口径5.0cm/器高4.0cm 残存率 完形 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 小礫少量含む、粗い。 調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 特徴 全体的に煤付着(灯明皿) 産地 南多摩座 出土位置 4区表土
6	須恵器 環	法量 口径(6.0)cm/器高(1.5)cm 残存率 底部1/2 色調 灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を多く含む、緻密。 調整 底部-回転系切り(やや不鮮明) 産地 東金子窯 出土位置 3区表土
7	須恵器 環	法量 口径(5.0)cm/器高(1.7)cm 残存率 底部4/5 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒少量含む、やや粗い。 調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 特徴 内外面に煤少量付着 産地 東金子窯 出土位置 6区表土
8	須恵器 環	法量 口径(6.0)cm/器高(2.2)cm 残存率 底部1/3 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含むが、やや緻密。 調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 特徴 内外面に煤少量付着 産地 東金子窯 出土位置 6区覆瓦
9	須恵器 環	法量 口径5.0cm/器高(1.5)cm 残存率 底部 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 密 砂粒やや多く含む、粗い。 調整 底部-回転系切り 産地 東金子窯 出土位置 6区覆瓦
10	須恵器 環	法量 口径(6.6)cm/器高(1.8)cm 残存率 底部3/4 色調 灰褐色 焼成 普通 胎土 砂質で、やや粗い。 調整 底部-回転系切り 産地 不明(土師質土器?) 出土位置 経蔵地区表土
11	須恵器 環	法量 口径7.0cm/器高(1.5)cm 残存率 底部 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 黒炭少量含む、やや緻密。 調整 底部-回転系切り→高台貼付 産地 東金子窯 出土位置 経蔵地区表土
12	土師質土器 皿	法量 口径(10.0)cm/器高(2.1)cm 残存率 底部1/4 色調 淡灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒多く含む。 調整 底部-回転系切り、見込-ヘラミワキ 出土位置 3区表土
13	緑釉陶器 輪花椀	法量 器高(2.8)cm 残存率 口径1/10 色調 素地-灰褐色、釉調-淡緑色 焼成 良好 胎土 やや軟質で緻密 産地 猿投 時期 II期中(K90~89号窯) 出土位置 経蔵地区表土
14	土師器 甕	法量 口径(14.1)cm/器高(3.9)cm 残存率 口径1/10 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒少量含む。 調整 口径-頸部-ヨコナデ、胴部上部-ヘラケズリ 特徴 武蔵型甕(2の字口径) 出土位置 4区表土
15	土師器 甕	法量 口径(18.0)cm/器高(2.8)cm 残存率 口径1/10 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 黒炭・砂粒多く含む。 調整 口径-ヨコナデ、胴部-ヘラケズリ 特徴 武蔵型甕(くの字口径) 出土位置 4区表土
16	須恵器 長頸甕	法量 口径(9.0)cm/器高5.9cm 残存率 口径1/3 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 軟質、緻密 調整 内外面-回転ナデ 産地 東金子窯 出土位置 5区表土
17	須恵器 甕	法量 口径8.5cm/器高(6.2)cm/高台高0.8cm 残存率 底部 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 白色粒・小礫多く、粗い。 調整 内外面-回転ナデ、底部-回転ナデ→高台貼付 特徴 胴部内外面煤付着(2次被熱?) 産地 東金子窯 出土位置 6区覆瓦
18	陶美京 甕	法量 器高(6.5)cm 残存率 胴部片 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 黒炭・白色粒を少量含む。 調整 外面に目の粗い並行印きを施す。 特徴 胴部内面研磨痕あり 出土位置 2区表土
19	常滑窯 甕	法量 口径(12.3)cm/器高(5.0)cm 残存率 底部1/3 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 小礫多く、粗い。 調整 胴部下端-ヘラケズリ 特徴 内面に降灰粘付着 出土位置 4区表土

第6表 中門地区出土土器・陶磁器観察表(図面6、図版4)

No.	器種	観察内容
1	土師器 環	法量 口径(12.0)cm/底径(6.6)cm/器高4.1cm 残存率 1/2 色調 表面-淡褐色、断面-黒褐色 焼成 良好 胎土 赤色スコリアを少量含む、軟質。調整 口縁外面-ヨコナデ、体部内外面-指頭圧痕、底部-ヘラケズリ 特徴 南武蔵型 出土位置 掘丸
2	土師器 環	法量 口径(11.1)cm/底径(6.0)cm/器高3.8cm 残存率 1/3 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 赤色スコリアを少量含む、軟質。調整 口縁部-ヨコナデ、体部外面-指頭圧痕、底部-ヘラケズリ 特徴 南武蔵型、体部下端・内面ターム状物質付着(灯明皿) 出土位置 表土
3	土師器 土師器	法量 底径(4.7)cm/器高(3.4)cm 残存率 底部1/6 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・赤色スコリア・白色粒を少量含む、粗い。調整 体部内外面-指頭圧痕、底部-ヘラケズリ 特徴 再興土師器、内面煤付着(灯明皿) 出土位置 掘丸
4	須恵器 環	法量 口径(12.2)cm/底径(6.7)cm/器高3.4cm 残存率 3/4 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 小礫多く、砂粒少量含むが緻密。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 産地 東金子窯 出土位置 掘丸
5	須恵器 環	法量 口径(12.2)cm/底径(6.6)cm/器高3.6cm 残存率 口縁1/3~底部 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 白色粒を少量含む。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 産地 東金子窯 出土位置 掘丸
6	須恵器 環	法量 底径5.5cm/器高(3.7)cm 残存率 体部下半~底部 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 粘土ブロック・砂粒を多く含む、粗い。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 表土
7	須恵器 環	法量 底径(6.4)cm/器高(2.8)cm 残存率 底部1/2 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 白色粒・小礫多く含む調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 産地 東金子窯 出土位置 旧トシ理灰土
8	須恵器 環	法量 口径(12.4)cm/底径(6.6)cm/器高3.9cm 残存率 口縁1/6 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・小礫少量含む 調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 産地 東金子窯 出土位置 表土
9	須恵器 環	法量 口径(11.4)cm/底径(5.9)cm/器高3.2cm 残存率 口縁1/6 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 白色粒・砂粒を少量含むが、緻密。調整 内外面-回転ナデ 底部-回転系切り 産地 東金子窯 出土位置 SD194
10	須恵器 環	法量 底径(5.8)cm/器高(1.7)cm 残存率 底部1/2 色調 灰色 焼成 良好 胎土 砂粒多く、白色針状物質を含む、粗い。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 産地 南比企窯 出土位置 表土
11	須恵器 環	法量 底径(5.4)cm/器高(2.4)cm 残存率 底部1/2 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色針状物質を含む、粗い。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 特徴 底部外面に「丁」ヘラ書き 産地 南比企窯 出土位置 表土
12	須恵器 環	法量 底径(9.6)cm/器高(0.7)cm 残存率 底部1/3 色調 明灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色針状物質を含む、緻密。調整 底部-(遺存範囲では)回転ヘラケズリ 産地 南比企窯 出土位置 SB216 P1-1
13	須恵器 蓋	法量 口径(14.8)cm/器高(1.8)cm 残存率 口縁1/8 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 白色粒を含む、緻密。調整 内外面-回転ナデ 産地 東金子窯 出土位置 表土
14	須恵器 蓋	法量 口径(18.2)cm/器高(2.7)cm 残存率 口縁1/8 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 白色粒を少量含むが、緻密。調整 内外面-回転ナデ 産地 東金子窯 出土位置 掘丸
15	土師質土器 環	法量 口径(12.4)cm/底径(6.0)cm/器高3.6cm 残存率 口縁1/6 色調 明褐色 焼成 普通 胎土 小礫・赤色スコリアを少量含む。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 出土位置 SD194
16	土師質土器 環	法量 底径(11.7)cm/器高(3.2)cm 残存率 高台部1/6 色調 明褐色 焼成 普通 胎土 砂粒・赤色スコリアを少量含む。粉っぽい。調整 内外面-回転ナデ 特徴 足高台台 出土位置 表土
17	土師質土器 環	法量 口径(13.2)cm/底径(9.2)cm/器高3.5cm 残存率 口縁~底部1/8 色調 柑褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・赤色スコリアを少量含む。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 特徴 体部内外面黒色化(焼痕?) 出土位置 掘丸
18	土師質土器 皿	法量 底径7.0cm/器高(1.4)cm 残存率 底部片 色調 柑褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・赤色スコリアを少量含む、粗い。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り 出土位置 掘丸
19	土師質土器 三足鍋	法量 最大長(4.6)cm/最大厚(2.3)cm/幅3.3cm 残存率 脚部片 色調 柑褐色 焼成 良好 胎土 砂粒多く、やや粗い。調整 側面-ナデ・縦に1条の枕線、底面-ヘラで取 出土位置 表土
20	土師器 甕	法量 口径(24.0)cm/器高(4.1)cm 残存率 口縁部1/8 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・雲母少量含む。調整 口縁部内外面-ヨコナデ 特徴 武蔵型(緩い)の字状口縁) 出土位置 掘丸
21	灰釉陶器 瓶	法量 口径(13.0)cm/器高(4.7)cm 残存率 口縁部1/8 色調 表面-灰白色、釉調-淡緑色 焼成 良好 胎土 黒灰少量、やや粗い。調整 内外面-回転ナデ 出土位置 表土
22	土師質土器 三足鍋?	法量 底径(8.6)cm/器高(2.0)cm 残存率 底部2/3 色調 柑褐色 焼成 軟質 胎土 粗い、小粒少 調整 内外面-回転ナデ、底部-回転ナデ~脚部貼付 特徴 脚部3~4本?、内底面に煤付着。 出土位置 表土

第7表 (加藍中核部区面施設) 区面南辺出土土器・陶磁器観察表(1)(図面7・8、図版4)

No.	器種	観察内容
1	土師器 環	法量 口径(15.9)cm/器高(3.3)cm 残存率 口縁部1/5 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 雲母・赤色スコリアを多く含む。調整 口縁部外面-ヨコナデ、体部外面-ヘラケズリ(不鮮明)、体部内面-指頭圧痕 出土位置 SD194
2	須恵器 環	法量 口径(12.3)cm/底径(6.4)cm/器高3.9cm 残存率 口縁~底部1/8 色調 淡褐色 焼成 普通 胎土 軟質で粉っぽい。調整 口縁部外面-ヨコナデ、体部内外面-指頭圧痕、底部外面-ヘラケズリ 特徴 南武蔵型 出土位置 旧トシ理灰土
3	須恵器 環	法量 口径(11.0)cm/底径(6.3)cm/器高3.4cm 残存率 完形 色調 褐色 焼成 良好 胎土 礫を少量含むが緻密、軟質。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転系切り。巻き上げ痕が確。産地 南多摩窯(山野) 出土位置 SD194

第7表 (加藍中枢部区画施設) 区画南辺出土土器・陶磁器観察表(2) (図面7・8、図版4)

No.	器種	観察内容
4	須恵器 環	法量 口径(12.0)cm/底径(4.6)cm/器高(3.8)cm 残存率 口縁部~底部1/3 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 砂粒多く含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 特徴 内面に煤付着 出土位置 西側旧トレ埋戻土
5	須恵器 環	法量 底径(6.0)cm/器高(3.0)cm 残存率 体部下半~底部 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含み、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯? 特徴 煤層量付着 出土位置 SD194
6	須恵器 環	法量 口径(10.9)cm/底径(5.5)cm/器高5.0cm 残存率 口縁部~底部1/6 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 SD194
7	須恵器 環	法量 口径(14.2)cm/器高(4.8)cm 残存率 口縁部~体部1/5 色調 褐色 焼成 良好 胎土 淡茶褐色 調整 内外面・回転ナデ 産地 南多摩窯 出土位置 旧トレ埋戻土
8	須恵器 環	法量 口径(12.0)cm/器高(4.5)cm 残存率 口縁部~体部1/4 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含むが緻密。調整 内外面・回転ナデ 産地 東金子窯 特徴 口縁部内面に煤付着(灯明皿) 出土位置 表土
9	須恵器 環	法量 - 残存率 口縁部片 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、やや粗い。 調整 内外面・回転ナデ 産地 南多摩窯 特徴 煤付着(灯明皿) 出土位置 西側旧トレ埋戻土
10	須恵器 環	法量 底径(5.2)cm/器高(1.0)cm 残存率 底部1/2 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 白色粒を多量に含む、やや粗い。調整 底部・回転系切り 産地 東金子窯 出土位置 旧トレ埋戻土
11	須恵器 環	法量 底径5.8cm/器高(2.0)cm 残存率 体部下半~底部1/2 色調 暗褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含み、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 特徴 底部外面に二重線のヘラ書き。出土位置 表土
12	須恵器 環	法量 底径(4.8)cm/器高(1.2)cm 残存率 底部片 色調 暗褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、やや粗い。調整 底部・回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 表土
13	須恵器 環	法量 底径(4.6)cm/器高(0.9)cm 残存率 底部片 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を含む。 調整 底部・回転系切り 産地 東金子窯 特徴 見込全体~外面に煤付着 出土位置 旧トレ埋戻土
14	須恵器 環	法量 底径(5.5)cm/器高(1.5)cm 残存率 体部下半~底部片 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 緻密 調整 底部・回転系切り 産地 東金子窯 出土位置 表土
15	須恵器 環	法量 底径(5.6)cm/器高(1.6)cm 残存率 底部1/6 色調 白灰色 焼成 良好 胎土 礫を少量含む、やや粗い。調整 底部・回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 表土
16	須恵器 環	法量 底径(5.8)cm/器高(1.6)cm 残存率 底部1/6 色調 白灰色 焼成 良好 胎土 礫を少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 SD194
17	須恵器 環	法量 底径(5.8)cm/器高(2.0)cm 残存率 底部1/4 色調 白灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 東金子窯 特徴 体部外面墨書(判読不明) 出土位置 旧トレ埋戻土
18	須恵器 環	法量 底径(4.5)cm/器高(3.0)cm 残存率 体部~底部1/6 色調 白灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 東金子窯 出土位置 旧トレ埋戻土
19	須恵器 環	法量 底径5.8cm/器高(1.2)cm 残存率 底部片 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 礫・白色粒を多く含む、粗い。調整 底部・回転系切り 産地 東金子窯 出土位置 表土
20	須恵器 壺	法量 底径(9.0)cm/器高(4.9)cm/高台高(0.9)cm 残存率 体部1/6 色調 灰色 焼成 良好 胎土 やや密 小礫多 小粒多 調整 体部内外面・回転ナデ、体部下半・回転ヘラクスリ 産地 南多摩窯 出土位置 SD194
21	須恵器 壺	法量 底径(5.1)cm/器高(1.6)cm/高台高(0.4)cm 残存率 底部 色調 赤灰色 焼成 良好 胎土 赤色スコリア・白色粒を含む、やや粗い。調整 底部・回転系切り~高台貼付 産地 南多摩窯 出土位置 旧トレ埋戻土
22	須恵器 環	法量 底径(4.4)cm/器高(0.9)cm 残存率 底部2/3 色調 表面-黒色、断面-灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、やや粗い。調整 底部・回転系切り 産地 不明(土師質土器?) 出土位置 表土
23	須恵器 環	法量 底径(4.7)cm/器高(0.7)cm 残存率 底部1/2 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、やや粗い。調整 底部・回転系切り 産地 不明(土師質土器?) 特徴 煤付着 出土位置 旧トレ埋戻土
24	須恵器 環	法量 口径(13.7)cm/底径(6.0)cm/器高4.9cm 残存率 口縁~底部1/3 色調 明褐色 焼成 軟質 胎土 粗い 雲母少 調整 底部・回転系切り(不鮮明) 産地 南多摩窯? 特徴 器面荒れ 出土位置 SD194
25	須恵器 環	法量 口径(12.0)cm/器高(4.1)cm 残存率 口縁部1/8 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 特徴 口縁部内面に煤付着(灯明皿) 出土位置 SD194
26	土師質土器 環	法量 口径(14.8)cm/底径(8.0)cm/器高3.9cm 残存率 1/2 色調 淡褐色 焼成 軟質 胎土 砂粒・赤色スコリアを少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 特徴 口縁部内外面に煤付着(灯明皿) 出土位置 SK3274
27	須恵器 環	法量 口径(11.8)cm/器高(4.4)cm 残存率 底部1/10 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 赤色スコリア・砂粒を少量含む。調整 内外面・回転ナデ 産地 不明 特徴 口縁部内外面に煤付着(灯明皿) 出土位置 西側旧トレ埋戻土
28	土師質土器 環	法量 底径5.9cm/器高(1.7)cm 残存率 底部片 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂質で赤色スコリア・白色粒を少量含む。調整 底部・回転系切り 出土位置 旧トレ埋戻土
29	土師質土器 環	法量 底径(6.0)cm/器高(2.1)cm 残存率 体部下半~底部3/4 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、赤色スコリアを少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 特徴 体部外面に墨痕(判読不明) 出土位置 SD194

第7表 (伽藍中柵部区画施設) 区画南辺出土土器・陶磁器観察表(3) (図面7・8、図版4)

No.	器種	観察内容
30	土師質土器 環	法量 底径(5.6)cm/器高(2.2)cm 残存率 体部下半~底部1/2 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・雲母を少量含む、やや粗い。調整 外面・回転ナデ 底部・回転系切り 内面・回転ナデ 特徴 内面見込みが突出し、やや朱色がかかる 出土位置 SD194
31	土師質土器 環	法量 底径(6.4)cm/器高(2.0)cm 残存率 体部下半~底部1/4 色調 橙褐色 焼成 良好 胎土 赤色スコリアを少量含む、緻密で軟質。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 出土位置 SK3273
32	土師質土器 環	法量 底径(6.1)cm/器高(2.3)cm 残存率 体部下半~底部1/4 色調 橙褐色 焼成 軟質 胎土 赤色スコリアを少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 出土位置 表土
33	土師質土器 環	法量 底径(5.4)cm/器高(1.5)cm 残存率 底部3/4 色調 橙褐色 焼成 普通 胎土 赤色スコリアを少量含む。調整 底部・回転系切り 出土位置 西側旧ト埋戻土
34	土師質土器 環	法量 底径4.6cm/器高(1.1)cm 残存率 底部片 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 やや砂質で、礫を少量含む。調整 底部・回転系切り 出土位置 SD194
35	土師質土器 環	法量 底径(5.6)cm/器高(1.3)cm 残存率 底部1/2 色調 淡褐色 焼成 普通 胎土 砂粒を多く含む、粗い。調整 底部・系切り 出土位置 表土
36	土師質土器 環	法量 底径(6.0)cm/器高(2.1)cm 残存率 底部1/3 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・赤色スコリアを少量含む。軟質。調整 底部・回転系切り 出土位置 旧ト埋戻土
37	土師質土器 環	法量 底径(6.5)cm/器高(1.8)cm 残存率 底部1/2 色調 淡褐色 焼成 普通 胎土 赤色スコリアを少量含む、緻密。調整 底部・回転系切り 出土位置 表土
38	土師質土器 環	法量 底径(5.0)cm/器高(2.4)cm 残存率 底部 色調 淡褐色 焼成 普通 胎土 砂粒・赤色スコリアを含み、粗い。調整 底部・回転系切り 出土位置 表土
39	土師質土器 胎土	法量 口径(9.7)cm/底径(6.3)cm/器高2.0cm 残存率 口縁部~底部1/10 色調 淡褐色 焼成 普通 砂粒を多く含む、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・系切り(銀杏切り) 出土位置 表土
40	土師質土器 環	法量 底径(6.0)cm/器高(2.0)cm 残存率 底部片 色調 赤褐色 焼成 普通 胎土 軟質、緻密。調整 底部・回転系切り 出土位置 SK3273
41	土師質土器 環	法量 底径(6.3)cm/器高(1.2)cm 残存率 底部 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・赤色スコリアを多く含む。調整 底部・回転系切り 出土位置 旧ト埋戻土
42	土師質土器 環	法量 底径(6.4)cm/器高(2.0)cm 残存率 底部片 色調 褐色 焼成 良好 胎土 白色粒・砂粒を少量含む。調整 底部・コピナデ→高台貼付 出土位置 旧ト埋戻土
43	土師質土器 環	法量 底径(5.9)cm/器高(1.6)cm 残存率 底部片 色調 茶褐色 焼成 良好 胎土 礫・砂粒・雲母を多く含む、粗い。調整 底部・回転ナデ→高台貼付 出土位置 表土
44	土師質土器 環	法量 底径(7.0)cm/器高(1.7)cm 残存率 底部1/4 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・赤色スコリアを少量含む。調整 底部・回転系切り→高台貼付 出土位置 SD194
45	土師質土器 壺	法量 底径(10.3)cm/器高(4.0)cm 残存率 脚部1/2 色調 橙褐色 焼成 普通 胎土 赤色スコリアを含み、軟質。調整 外面・回転ナデ(器面摩耗により不鮮明) 特徴 足高台 出土位置 旧ト埋戻土
46	土師器 壺	法量 底径(4.5)cm/器高(1.8)cm 残存率 底部片 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・雲母を少量含む、粗い。調整 底部・ナデ→脚部貼付 出土位置 旧ト埋戻土
47	灰釉陶器 椀	法量 底径(8.0)cm/器高(2.0)cm 残存率 底部1/8 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 緻密 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転ヘラケズリ 産地 協友 時期 K90号窯式(Ⅱ期中) 特徴 内面体部に薄緑色の灰釉を刷毛塗り(足込は無釉)、やや潰れた三日月高台 出土位置 SD194
48	土師器 壺	法量 底径(5.6)cm/器高(4.9)cm 残存率 胴部下~底部1/3 色調 表面・淡褐色、断面・黒褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。調整 胴部外面・縦方向のヘラミガキ 特徴 古式土師器(古墳時代前期) 出土位置 旧ト埋戻土
49	土師器 壺	法量 底径(7.6)cm/器高(1.9)cm 残存率 底部1/2 色調 淡褐色 焼成 普通 胎土 砂粒を少量含む 調整 胴部外面・ヘラケズリ(不鮮明) 出土位置 表土
50	鉄釉 小皿	法量 底径(3.5)cm/器高(0.9)cm 残存率 底部1/2 色調 素地・白色 調整 底部・回転ヘラケズリ 特徴 体部外面・見込に濃茶褐色の鉄釉を施釉。産地 古瀬戸? 出土位置 表土
51	灰釉 緑釉小皿	法量 底径(5.5)cm/器高(2.7)cm 残存率 胴部1/10 色調 素地・灰白色、釉調・薄緑色 胎土 密 調整 外面腰部を除く、体部内外面に施釉 産地 古瀬戸 年代 14~15世紀 出土位置 旧ト埋戻土
52	灰釉 菊皿	法量 口径(14.0)cm/器高(2.3)cm 残存率 口縁部1/10 色調 素地・白色、釉調・淡緑色 胎土 軟質 産地 瀬戸・美濃 年代 18世紀 出土位置 表土
53	染付 皿	法量 器高(0.8)cm 残存率 底部片 胎土 密 特徴 見込に薄青色の只須で葉を描く 産地 肥前 年代 18世紀頃か? 出土位置 表土
54	瓦質土器 鉢	法量 口径(10.0)cm/器高(3.9)cm 残存率 口縁1/10 色調 黒褐色 胎土 やや密 特徴 口縁部外面に、2段に異なる三角形のスタンプを施文。 出土位置 表土
55	鉄釉灰釉 塗分盤	法量 器高(2.7)cm 残存率 脚部1/10 胎土 密 特徴 外面に茶褐色の鉄釉、見込に濃緑色の灰釉を施釉。産地 瀬戸・美濃 年代 18世紀 出土位置 表土

第8表 (伽藍中柵部区画施設) 区画南東出土土器・陶磁器観察表 (図面8、図版4)

No.	器種	観察内容
1	土師質土器 環	法量 口径(13.6)cm/器高(5.2)cm 残存率 口縁1/6 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・赤色スコリアを少量含む。調整 内外面・回転ナデ 出土位置 SD425
2	土師器 甕	法量 底径(5.6)cm/器高(3.2)cm 残存率 底部1/4 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・小礫を含み、やや粗い。調整 胴部外面・ヘラケズリ、胴部内面・ヘラナデ、底部・回転糸切り 特徴 甲斐・信濃産のロク口成形装か? 出土位置 表土

第9表 (伽藍中柵部区画施設) 区画北辺出土土器・陶磁器観察表 (図面8)

No.	器種	観察内容
1	須恵器 環	法量 底径(7.0)cm/器高(1.2)cm 残存率 底部1/4 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色針状物質を含む。調整 内外面・回転ヘラケズリ 産地 南北企業 出土位置 表土
2	須恵器 環	法量 底径5.6cm/器高2.0cm 残存率 体部下半~底部 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を含む。調整 底部・回転糸切り 産地 東金子窯 特徴 見込に煤付着 出土位置 表土

第10表 (伽藍中柵部区画施設) 区画北西出土土器・陶磁器観察表 (1) (図面9~14、図版5~7)

No.	器種	観察内容
1	土師器 環	法量 口径11.3cm/底径6.8cm/器高3.8cm 残存率 完形 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・雲母・赤色スコリアを少量含む。調整 外面口縁部・ヨコナデ、外面体部・指頭圧痕、底部・ヘラケズリ 特徴 南武蔵型、内外面に煤付着(灯明皿) 出土位置 2区SX337
2	土師器 環	法量 口径11.8cm/底径5.8cm/器高3.7cm 残存率 完形 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・雲母・赤色スコリアを少量含む。調整 外部口縁部・ヨコナデ、外面体部・ヘラナデ、底部・ヘラケズリ、体部内面・指頭圧痕 特徴 南武蔵型、口縁部内外面に煤付着(灯明皿) 出土位置 2区SX337
3	土師質土器 環	法量 口径(10.1)cm/底径(5.7)cm/器高3.8cm 残存率 完形 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 赤色スコリアを少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り? (摩耗のため不鮮明) 特徴 口縁部内外面に煤付着(灯明皿) 出土位置 2区SX337
4	土師器 環	法量 口径(2.7)cm/底径6.5cm 残存率 底部3/4 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む。調整 体部外面・ヘラナデ、底部・ヘラケズリ、体部内面・指頭圧痕 特徴 南武蔵型、内外面に煤付着 出土位置 2区SX337
5	須恵器 環	法量 口径11.8cm/底径5.5cm/器高3.8cm 残存率 完形 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 白色粒・小礫を少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 2区SX337
6	須恵器 環	法量 口径12.7cm/底径5.8cm/器高4.7cm 残存率 完形 色調 淡灰色 焼成 良好 胎土 砂質で黒斑多い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 特徴 内外面に煤付着(灯明皿) 出土位置 2区SX337
7	須恵器 環	法量 口径13.1cm/底径5.0cm/器高4.4cm 残存率 完形 色調 淡灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・小礫を少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 東金子窯 特徴 内外面に煤付着(灯明皿) 出土位置 1区SD423
8	須恵器 環	法量 口径13.6cm/底径5.8cm/器高4.9cm 残存率 口縁3/4~底部 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を多く含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯(山野) 出土位置 1区SD423
9	須恵器 環	法量 口径12.0cm/底径5.3cm/器高4.0cm 残存率 完形 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 やや砂質 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 特徴 内面口縁部に煤付着(灯明皿) 出土位置 1区SD423
10	須恵器 環	法量 口径12.1cm/底径7.0cm/器高3.7cm 残存率 完形 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 やや砂質で白色粒を含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 2区SX337
11	須恵器 環	法量 口径(14.4)cm/底径6.2cm/器高6.4cm 残存率 口縁部1/4~底部 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 特徴 口縁部内外面に煤付着(灯明皿)、体部外面に墨書「具」 出土位置 1区SD423
12	須恵器 環	法量 口径16.5cm/底径6.2cm/器高5.7cm 残存率 完形 色調 橙褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を多く含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 特徴 体部外面に墨書「行」 出土位置 2区SX337
13	須恵器 環	法量 口径(14.5)cm/底径6.4cm/器高5.7cm 残存率 完形 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く、小礫を少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 1区SD423
14	須恵器 環	法量 口径(15.4)cm/底径(7.0)cm/器高5.0cm 残存率 口縁部1/6~底部3/4 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒多く含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 特徴 体部外面に不鮮明な墨痕あり。 出土位置 1区SD423
15	須恵器 環	法量 口径13.4cm/底径5.2cm 残存率 完形 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 黒斑が多く、砂粒を少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 特徴 体部外面に薄い墨痕あり 出土位置 2区SX337
16	須恵器 環	法量 口径14.5cm/底径5.5cm/器高4.3cm 残存率 口縁部1/2~底部 色調 相褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 1区SD423

第10表 (加藍中樞部区画施設) 区画西北出土土器・陶磁器観察表(2) (図面9~14、図版5~7)

No.	器種	観察内容
17	須恵器 環	法量 口径12.3cm/底径(5.8)cm/器高3.8cm 残存率 1/2 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 小礫・砂粒を多く含み、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 2区 SX337
18	須恵器 環	法量 口径(14.9)cm/底径 6.3cm/器高 4.4cm 残存率 1/2 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・小礫を少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 1区 SD423
19	須恵器 環	法量 口径 11.5cm/底径 6.8cm/器高 4.1cm 残存率 1/2 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を少量含む、緻密。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 東金子窯 特徴 火障痕あり 出土位置 1区 SD423
20	須恵器 環	法量 口径(11.6)cm/底径(5.8)cm/器高(3.8)cm 残存率 1/2 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒・小礫を少量含むが緻密。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 2区 SX337
21	須恵器 環	法量 口径(12.4)cm/底径(5.6)cm/器高3.7cm 残存率 1/2 色調 茶灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を多く含み、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 1区表土
22	須恵器 環	法量 口径(12.0)cm/底径(6.0)cm/器高4.3cm 残存率 1/3 色調 暗青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を多く含み、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 特徴 内面に降灰釉 出土位置 2区 SX337
23	須恵器 環	法量 口径(12.8)cm/底径(6.4)cm/器高3.8cm 残存率 1/2 色調 明灰色~褐色 焼成 良好 胎土 硬質、緻密 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯(山野) 出土位置 2区 SX337
24	須恵器 環	法量 口径(11.8)cm/底径(6.0)cm/器高3.8cm 残存率 1/3 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・小礫を少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 2区 SX337
25	須恵器 環	法量 口径(12.6)cm/底径 5.5cm/器高 4.0cm 残存率 口径1/6~底部 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 1区表土
26	須恵器 環	法量 口径(12.6)cm/底径(5.6)cm/器高(4.4)cm 残存率 1/3 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含み、白色粒を少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 2区 SX338
27	須恵器 環	法量 底径 5.5cm/器高(3.2)cm 残存率 体部下~底部 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・黒炭を少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 特徴 内外面に黒付着(灯明皿) 出土位置 2区 SX337
28	須恵器 環	法量 口径(13.6)cm/底径(6.9)cm/器高6.0cm 残存率 1/2 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 白色粒・砂粒を少量含む、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 2区 SX337
29	須恵器 環	法量 口径(14.3)cm/底径 6.0cm/器高 6.0cm 残存率 口径1/4~底部 色調 褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯? 特徴 底部外面に十字のへら書きあり。出土位置 1区 SD423 上層
30	須恵器 環	法量 口径(13.0)cm/底径(6.8)cm/器高3.9cm 残存率 1/4 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 白色粒・砂粒を多く含み、やや粗い。硬質。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 2区表土
31	須恵器 環	法量 口径(16.0)cm/器高(6.8)cm 残存率 口径1/8 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色針状物質を多く含み、粗い。調整 内外面・回転ナデ 産地 南比企窯 出土位置 2区瓦溜
32	須恵器 環	法量 口径(14.0)cm/器高(3.4)cm 残存率 口径1/3 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む。調整 内外面・回転ナデ 産地 南多摩窯 出土位置 1区 SD423
33	須恵器 環	法量 口径(13.1)cm/底径(8.0)cm/器高3.6cm 残存率 口径~底部1/6 色調 青灰色~赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色針状物質を少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南比企窯 出土位置 2区瓦溜
34	須恵器 環	法量 口径(13.0)cm/底径(5.7)cm/器高5.0cm 残存率 口径~底部1/4 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、緻密で軟質。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯(山野) 出土位置 1区 SD423
35	須恵器 環	法量 口径(12.8)cm/底径(6.7)cm/器高3.7cm 残存率 口径~底部1/4 色調 青灰色~赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含み、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 2区 SX337
36	須恵器 環	法量 口径(13.3)cm/底径(6.9)cm/器高3.7cm 残存率 口径~底部1/8 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 白色粒・砂粒を少量含む、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 東金子窯 出土位置 2区表土
37	須恵器 環	法量 口径(13.0)cm/器高(3.9)cm 残存率 口径~体部1/6 色調 褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ 産地 土師質土器の可能性もあり 出土位置 1区 SD423
38	須恵器 環	法量 口径(12.4)cm/底径(5.6)cm/器高3.5cm 残存率 口径~底部1/6 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南比企窯 出土位置 2区瓦溜
39	須恵器 環	法量 口径(11.4)cm/底径(5.9)cm/器高4.0cm 残存率 口径~底部1/4 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色針状物質を少量含む。緻密・硬質。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南比企窯 出土位置 1区 SD423
40	須恵器 環	法量 口径(9.5)cm/底径(5.4)cm/器高3.8cm 残存率 口径~底部1/4 色調 灰色 焼成 良好 胎土 白色粒・砂粒を少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 東金子窯 特徴 内底面にターール状物質付着(灯明皿) 出土位置 2区 SX337
41	須恵器 環	法量 口径(11.0)cm/底径(5.8)cm/器高4.5cm 残存率 口径~底部1/4 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯? 出土位置 2区 SX337

第10表 (加藍中樞部区画施設) 区画北西出土土器・陶磁器観察表(3) (図面9~14、図版5~7)

No.	器種	観察内容
42	須恵器 環	法量 口径(14.0)cm/底径(5.4)cm/器高6.4cm 残存率 口縁~底部1/4 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む。やや軟質。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 (山野) 出土位置 2区SX337
43	須恵器 環	法量 口径(13.4)cm/底径(5.6)cm/器高4.1cm 残存率 口縁~底部1/2 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を少量含む。やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 不明(土師質土器の可能性もあり) 出土位置 1区SD423
44	須恵器 皿	法量 口径(15.8)cm/底径(6.8)cm/器高(2.9)cm 残存率 口縁1/4~底部 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を多く含む。やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 東金子窯 出土位置 2区SX337
45	須恵器 環	法量 底径6.2cm/器高(5.4)cm 残存率 体部下半~底部 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を 多く含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩(山野?) 特徴 内外面に煤付着(灯明皿) 出土位置 1区SD423
46	須恵器 環	法量 口径(13.0)cm/底径(5.0)cm/器高3.9cm 残存率 口縁~底部1/4 色調 暗褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む。粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 1区SD423
47	須恵器 環	法量 底径(6.7)cm/器高(4.1)cm 残存率 体部下半~底部1/4 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色 粒を多く含む。粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 2区SX337
48	須恵器 環	法量 口径(10.7)cm/底径(5.9)cm/器高3.5cm 残存率 1/4 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 小礫を少量 含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 東金子窯 出土位置 2区瓦函
49	須恵器 環	法量 底径(7.8)cm/器高(1.0)cm 残存率 底部1/4 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含むが、 緻密。調整 底部・回転系切り 産地 南多摩窯 特徴 外面に「井」状の墨痕あり(不鮮明) 出土位置 2区表土
50	須恵器 環	法量 底径4.7cm/器高(3.8)cm 残存率 体部下半~底部 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、 やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 1区SD423
51	須恵器 環	法量 底径(6.0)cm/器高(2.0)cm 残存率 底部1/3 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色針状物質 を少量含むが、緻密。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南比企窯 出土位置 2区SX337
52	須恵器 環	法量 底径(8.5)cm/器高(2.0)cm 残存率 1/4 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含むが、緻密。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り→外周回転ヘラケズリ 産地 東金子窯 出土位置 2区SX337
53	須恵器 環	法量 底径(6.0)cm/器高(1.4)cm 残存率 底部片 色調 明灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含むが、 緻密。調整 底部・回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 2区SX337
54	須恵器 環	法量 底径6.0cm/器高(1.9)cm 残存率 底部片 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 2区SX337
55	須恵器 環	法量 底径(7.2)cm/器高(2.0)cm 残存率 底部3/4 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く、白色粒 ・小礫を少量含む。やや粗い。調整 底部・回転系切り→外周回転ヘラケズリ 産地 東金子窯 出土位置 2区瓦函
56	須恵器 環	法量 底径(6.8)cm/器高(2.1)cm 残存率 底部1/3 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、白色 針状物質を少量含む。やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南比企窯 出土位置 2区SX337
57	須恵器 環	法量 底径6.3cm/器高(2.7)cm 残存率 体部下半~底部 色調 暗褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、 粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 1区SD423
58	須恵器 環	法量 底径7.5cm/器高(1.8)cm 残存率 底部 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・小礫を少量含む。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 2区SX337
59	須恵器 環	法量 底径(5.3)cm/器高(2.5)cm 残存率 体部下半~底部1/2 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・小 礫を多く含む。粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 2区SX337
60	須恵器 環	法量 底径(6.0)cm/器高(2.3)cm 残存率 体部下半~底部3/4 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・小 礫を多く含む。粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南多摩窯 出土位置 2区SX337
61	須恵器 環	法量 底径(9.0)cm/器高(1.4)cm 残存率 底部1/3 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・黒痕多く、や や粗い。調整 底部・回転ヘラケズリ 産地 南比企窯 出土位置 2区SX337
62	須恵器 環	法量 底径(6.6)cm/器高(1.5)cm 残存率 底部1/2 色調 明灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒・白色 針状物質を多く含む。粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 産地 南比企窯 出土位置 2区SX337
63	須恵器 環	法量 底径(5.8)cm/器高(2.3)cm 残存率 体部下半~底部1/4 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 軟質。砂 粒を多く含む。調整 内外面・回転系切り 産地 南多摩窯(山野) 特徴 底部外面に不鮮明な墨痕あり 出土位置 2区旧ト埋灰土
64	須恵器 埴	法量 口径14.9cm/底径7.5cm/器高6.0cm 残存率 口縁部3/4~底部 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含むが、緻密。軟質。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り→高台貼付 産地 南多摩窯 特徴 体部外面に「具」墨書 出土位置 1区SD423
65	須恵器 埴	法量 口径(15.0)cm/底径(8.0)cm/器高6.2cm 残存率 口縁部1/3~底部1/2 色調 暗灰白色 焼成 良 好 胎土 砂粒・黒痕を少量含むが、緻密。軟質。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り→高台貼付 産地 南多摩窯 出土位置 2区表土
66	須恵器 埴	法量 口径(13.8)cm/底径(6.0)cm/器高3.5cm 残存率 口縁部~底部1/2 色調 赤灰色 焼成 良好 胎土 礫・砂粒を多く含む。粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り→高台貼付 産地 南多摩窯 出土位置 1区SD423
67	須恵器 埴	法量 底径(7.5)cm/器高(2.9)cm 残存率 底部2/3 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、や や粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り→高台貼付 産地 南多摩窯 出土位置 2区瓦函

第10表 (加藍中樞部区画施設) 区画西北出土土器・陶磁器観察表(3) (図面9~14、図版5~7)

No.	器種	観察内容
68	須恵器 埴	法量 口径(8.0)cm/器高3.9cm 残存率 底部1/2 色調 暗青灰色 焼成 良好 胎土 白色粒を少量含む。破片。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り→高台貼付 産地 東金子窯 出土位置 2区 SX337
69	須恵器 埴	法量 口径(7.0)cm/器高(2.8)cm 残存率 底部2/3 色調 暗灰褐色・赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り→高台貼付 産地 東金子窯 出土位置 2区 SX337
70	須恵器 埴	法量 口径(13.8)cm/口径(7.6)cm/器高3.0cm 残存率 口縁~底部1/3 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り→高台貼付 産地 南多摩窯 出土位置 1区 SD423
71	須恵器 埴	法量 口径(6.2)cm/器高(2.3)cm 残存率 底部1/2 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・全面ナデ→高台貼付 産地 南多摩窯 特徴 高台端部摩耗(磨屑?) 出土位置 1区 SD423
72	須恵器 埴	法量 口径6.4cm/器高(2.9)cm 残存率 体部下半~底部 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 黒・白色粒を多く含む、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・火影れのため不鮮明 産地 南多摩窯 出土位置 2区 SX337
73	須恵器 埴	法量 口径(8.2)cm/器高(1.8)cm 残存率 底部1/2 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。調整 底部・回転系切り→高台貼付 産地 東金子窯 出土位置 2区攪乱
74	須恵器 埴	法量 口径(10.2)cm/器高(2.3)cm 残存率 底部1/4 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含むが、緻密で破片。調整 底部・回転ヘラズリ→高台貼付 産地 東金子窯 出土位置 2区攪乱
75	須恵器 埴	法量 口径(10.2)cm/器高(3.0)cm 残存率 底部1/3 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。調整 底部・回転ヘラズリ→高台貼付 産地 東金子窯 出土位置 2区互滲
76	須恵器 蓋	法量 器高(2.9)cm 残存率 楕円~体部1/10 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。調整 体部内外面・回転ナデ 産地 南多摩窯 特徴 宝珠形の楕円 出土位置 2区攪乱
77	須恵器 蓋	法量 天井径(5.2)cm/器高(1.9)cm 残存率 天井部~体部1/4 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、天井部・回転系切り→外周回転ヘラズリ 産地 南比企窯 出土位置 1区表土 備考 盤の可能性あり。
78	須恵器 蓋	法量 口径(14.8)cm/器高(2.0)cm 残存率 口縁部1/8 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 白色粒を多く含むが、緻密。調整 内外面・回転ナデ 産地 東金子窯 出土位置 2区表土
79	須恵器 蓋	法量 口径(16.2)cm/器高(1.1)cm 残存率 口縁部1/10 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 白色粒を多く含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ 産地 南多摩窯 出土位置 2区 SX337
80	須恵器 蓋	法量 口径(16.8)cm/器高1.7cm 残存率 口縁部1/8 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ 産地 南多摩窯 出土位置 2区表土
81	須恵器 蓋	法量 器高(1.9)cm 残存率 体部1/4 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 白色粒・砂粒を多く含む、粗い。調整 内外面・回転ナデ 産地 東金子窯 出土位置 2区互滲
82	須恵器 蓋	法量 口径(18.0)cm/器高(2.0)cm 残存率 口縁~体部1/8 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色針状物質を少量含むが、緻密。調整 内外面・回転ナデ 産地 南比企窯 特徴 体部外面に不鮮明な墨書あり 出土位置 2区 SX337
83	須恵器 環	法量 器高(0.8)cm 残存率 底部片 色調 橙褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む。調整 底部・回転系切り 産地 東金子窯 特徴 内外面に墨書あり 出土位置 1区 SD423
84	須恵器 環	法量 口径(2.9)cm 残存率 体部片 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、軟質。調整 内外面・回転ナデ 産地 不明 特徴 体部外面に墨書あり 出土位置 1区 SD423
85	土師質土器 埴	法量 口径12.6cm/口径7.0cm/器高4.1cm 残存率 口縁1/2~底部 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 特徴 底部~体部外面に煤状物質付着、体部巻き上げ痕明瞭 出土位置 1区 SD423
86	土師質土器 埴	法量 口径(11.9)cm/口径6.6cm/器高3.8cm 残存率 1/2 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 特徴 体部の巻き上げ痕明瞭 出土位置 1区 SD423
87	土師質土器 埴	法量 口径10.5cm/口径4.9cm/器高3.0cm 残存率 完形 色調 橙褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含むが精緻。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 出土位置 2区 SX338
88	土師質土器 埴	法量 口径(11.0)cm/口径5.2cm/器高3.8cm 残存率 口縁1/2~底部 色調 橙褐色 焼成 普通 胎土 砂粒・雲母を少量含むが、緻密。調整 内外面・回転ナデ、体部下半~底部・回転ヘラズリ 特徴 内面口縁部・横方向へつミガキ、体部内面・放射状凹文、内面黒色処理(内黒) 出土位置 2区 SX337
89	土師質土器 埴	法量 口径(6.2)cm/器高(3.1)cm 残存率 体部下半~底部1/2 色調 橙褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・赤色スロリアを少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 出土位置 2区互滲
90	土師質土器 環	法量 口径(10.8)cm/器高(3.4)cm 残存率 口縁部片 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 軟質・緻密。調整 内外面・回転ナデ→横方向のヘラミガキ 特徴 両面黒色処理 出土位置 2区 SX337
91	土師質土器 環	法量 口径(14.5)cm/口径(7.0)cm/器高4.8cm 残存率 口縁部~底部1/2 色調 赤灰褐色(断面・黒灰色) 焼成 普通 胎土 軟質・緻密。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転系切り 特徴 外面に煤少量付着、赤色塗彩している可能性あり。 出土位置 2区 SX337
92	土師質土器 環	法量 口径7.4cm/器高(2.4)cm 残存率 底部片 色調 橙褐色 焼成 普通 胎土 砂粒を多く、雲母を少量含む、やや粗い。調整 底部・回転系切り→高台貼付、見込み・不定方向のヘラミガキ 特徴 内面黒色処理(内黒) 出土位置 2区表土
93	土師質土器 環	法量 口径(10.6)cm/口径(5.6)cm/器高(2.2)cm 残存率 口縁~底部1/3 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・系切り(鋸ぎ) 出土位置 2区表土
94	土師質土器 環	法量 口径(6.0)cm/器高(2.0)cm 残存率 底部1/6 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。調整 底部・回転系切り→高台貼付、見込み・不定方向のヘラミガキ 特徴 内面黒色処理(内黒) 出土位置 1区表土

第10表 (加藍中樞部区画施設) 区画北西出土土器・陶磁器観察表(4) (図面9~14、図版5~7)

No.	器種	観察内容
95	灰陶陶器 椀	法量 底径(6.0)cm/器高(2.2)cm 残存率 体部下半~底部1/6 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 黒斑多い 調整 外面-回転ナデ、底部-ナデ→高台貼付 施軸 見込み全面に淡緑色の灰軸(降灰軸か?) 産地 猿投 時期 K 90号窯式(Ⅱ期中) 出土位置 1区表土
96	灰陶陶器 椀	法量 口径(14.5)cm/底径6.5cm/器高4.4cm 残存率 口縁部1/5~底部 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・黒斑を少量含む、粗い。調整 内外面-回転ナデ、底部-回転ヘラズリ→高台貼付 施軸 内面 体部および見込みに一筆の刷毛塗り(見込みに重ね焼き痕あり)、外面体部にも刷毛塗り。産地 猿投 時期 K 90号窯式(Ⅱ期中) 出土位置 1区SD423
97	灰陶陶器 皿	法量 底径(8.0)cm/器高(1.6)cm 残存率 底部1/3 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、緻密。 調整 底部-回転ヘラズリ→高台貼付 施軸 見込み全体に淡緑色の灰軸(降灰軸?) 産地 猿投 時期 K 90号窯式(Ⅱ期中) 出土位置 1区表土
98	灰陶陶器 皿	法量 底径(7.6)cm/器高(1.9)cm 残存率 底部1/2 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 黒斑少量含むが、緻密。 調整 底部-回転ヘラズリ→高台貼付 施軸 体部内面に淡緑色の灰軸を刷毛塗り(見込は無し) 産地 猿投 時期 K 90号窯式(Ⅱ期中) 出土位置 2区表土
99	灰陶陶器 皿	法量 底径(8.4)cm/器高(2.2)cm 残存率 底部1/8 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含むが、 緻密。調整 底部-回転ヘラズリ→高台貼付 施軸 薄緑色の灰軸を刷毛塗り(高台内も含めて全面に施軸) 産地 猿投 時期 K 90号窯式(Ⅱ期中) 出土位置 2区SX337
100	灰陶陶器 椀	法量 底径(7.7)cm/器高(2.0)cm 残存率 底部1/2 色調 暗灰褐色 焼成 良好 胎土 黒斑多く含む、やや粗い。 調整 底部-回転ヘラズリ→高台貼付 施軸 内面に薄緑色の灰軸を刷毛塗り 産地 猿投 時期 K 90号窯式(Ⅱ期中) 出土位置 1区SD423
101	灰陶陶器 椀	法量 器高(2.6)cm 残存率 体部片 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 白色粒・黒斑を少量含む。調整 内 外面-回転ナデ 施軸 内面全面に薄緑色の灰軸を施軸(降灰軸?) 産地 猿投 時期 K 14~90号窯式(Ⅱ 期古) 出土位置 2区SX337
102	灰陶陶器 椀	法量 器高(5.0)cm 残存率 口縁部1/8 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 黒斑を少量含む、緻密。 調整 内外面-回転ナデ 施軸 内面に薄緑色の灰軸を刷毛塗り 産地 猿投 時期 K 90号窯式(Ⅱ期中) 出土位置 2区表土
103	灰陶陶器 椀	法量 口径(15.0)cm/器高(2.7)cm 残存率 口縁部1/6 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 黒斑を多く含む、 粗い。調整 内外面-回転ナデ 施軸 内面に薄緑色の灰軸を刷毛塗り(降灰軸?) 産地 猿投 時期 K 14-90号窯式(Ⅱ期古) 出土位置 2区SX337
104	緑陶陶器 三足盤	法量 口径(19.9)cm/器高(1.9)cm 残存率 口縁1/8 色調 赤土-灰褐色 焼成 良好 胎土 緻密 内外面-ヘラミガキ→明黄色の緑釉を施軸 産地 猿投(熊ノ前) 時期 Ⅱ期中 出土位置 2区表土 備考 器種は段目の可能性もあり。
105	土師器 費	法量 底径(15.0)cm/器高(2.7)cm 残存率 底部1/6 色調 柑褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む。 調整 外面-器面摩耗で不鮮明、底際部に指頭痕あり。内面-回転ナデ 特徴 内面に円形・不定形の窪み多数 あり 出土位置 2区瓦瀝
106	土師器 羽釜	法量 器高(2.0)cm 残存率 跨部片(跨部幅1.3cm) 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む。 出土位置 2区表土
107	土師器 費	法量 底径11.2cm/器高(6.4)cm 残存率 底部 色調 柑褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・礫を多く含む、粗い。 調整 胴部外面-縦ヘラズリ 特徴 武蔵型 出土位置 1区SD423
108	置カマド	法量 器高(2.8)cm 残存率 底部片 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。 調整 外面-ナデ、内面-指頭圧痕 出土位置 2区SX337
109	置カマド	法量 器高(4.2)cm 残存率 底部片 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。 調整 外面-ナデ・指頭圧痕、内面-ナデ 出土位置 2区SX337
110	須恵器 裏	法量 器高(6.4)cm 残存率 口縁1/4 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。 調整 外面-柳波状文 産地 不明 出土位置 2区瓦瀝
111	須恵器 長頸瓶	法量 口径(7.0)cm/器高(3.0)cm 残存率 口縁1/4 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 白色粒を含むが、緻密。 調整 内外面-回転ナデ 産地 東金子窯 出土位置 2区表土
112	須恵器 長頸瓶	法量 口径(3.6)cm/器高(4.9)cm 残存率 頸部片 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂質でやや粗い。 調整 内外面-回転ナデ 産地 南比企窯 出土位置 2区表土
113	須恵器 短頸壺	法量 口径(11.8)cm/器高(2.9)cm 残存率 口縁部1/10 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、 やや粗い。調整 内外面-回転ナデ 産地 東金子窯 出土位置 2区旧ト埋灰土
114	須恵器 裏	法量 底径(10.0)cm/器高(3.7)cm 残存率 胴部下半~底部1/8 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・黒斑を多く含む、粗い。調整 内外面-回転ナデ 産地 東金子窯 出土位置 2区SX337
115	須恵器 羽釜	法量 口径(10.8)cm/器高(4.3)cm 残存率 口縁~胴部1/6 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒 を少量含むが、緻密。調整 内外面-回転ナデ 産地 東金子窯 出土位置 2区表土
116	須恵器 費	法量 器高(15.3)cm 残存率 胴部片 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・小礫・白色粒を多く含む、粗い。 調整 外面-格子印き、内面-同心円印き 産地 東金子窯 出土位置 2区SX337
117	須恵器 裏	法量 底径(10.0)cm/器高(3.4)cm 残存率 底部1/3 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。 調整 底部-回転ナデ→高台貼付 産地 東金子窯 特徴 見込みに円形の輪溜まり、胴部外面に輪垂れ(濃 緑色の降灰軸) 出土位置 2区SX337
118	須恵器 費	法量 底径(12.2)cm/器高(8.6)cm 残存率 胴部下半~底部1/8 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 黒斑少量 含むが、緻密。調整 内外面-回転ナデ、胴部下端-ヘラズリ 産地 猿投窯? 特徴 体部下端に径5cmの 降灰軸、器種は樽瓶の可能性あり。 出土位置 2区SX337
119	灰陶陶器 瓶	法量 器高(4.2)cm 残存率 胴部片 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 礫・砂粒を含む、やや粗い。 調整 胴部外面-横方向に1条の太い沈線と縦方向に細い複数の沈線あり。濃緑色の灰軸を施軸。産地 猿投窯? 出土位置 2区表土

第10表 (加藍中樞部區面施設) 区画西北出土土器・陶磁器観察表(5) (図面9~14、図版5~7)

No.	器種	観察内容
120	灰釉陶器 長頸瓶	法量 底径(7.0)cm/器高8.1cm 残存率 胴部下半~底部 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・黒斑を多く含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転ヘラケズリ→高台貼付 特徴 胴部外面に濃緑色の灰釉(軸垂れ)、見込みに降灰釉 出土位置 2区攪乱
121	灰釉陶器 浄瓶	法量 底径7.7cm/器高(4.8)cm 残存率 注口部片・胴部下半~底部 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 砂粒・黒斑を少量含む、緻密。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転ナデ→高台貼付、注口部→ヘラ状工具で面取り→胴部に貼付、淡緑色の灰釉を施釉(刷毛塗り) 産地 協投 時期 K 90号窯式(II期中) 出土位置 2区SX337
122	常滑 片口鉢	法量 底径(13.9)cm/器高(3.1)cm 残存率 底部付近1/3 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 小礫・砂粒を多く含む、粗い。調整 外面・回転ナデ 特徴 内面研磨痕、片口鉢1類 出土位置 2区攪乱
123	常滑 甕	法量 頸部径(25.0)cm/器高(7.0)cm 残存率 胴部 色調 淡灰色 焼成 良好 胎土 小礫・砂粒を多く含む、粗い。調整 内面・ヘラナデ、胴部外面に薄緑色の降灰釉 出土位置 1区IV50
124	胎土 土瓶	法量 口径(12.0)cm/器高(4.3)cm 残存率 口縁部付近1/10 色調 茶灰色 胎土 軟質 特徴 外面~口縁受口部にかけて濃茶色の胎釉を施釉 産地 瀬戸・美濃 年代 18世紀以降 出土位置 2区表土
125	染付 陶型碗	法量 底径3.5cm/器高(1.4)cm 残存率 底部片 特徴 見込み・五弁花のコンニャク印、外面腹部・淡い呉須で二重輪線を描く 産地 瀬戸・美濃 年代 18世紀後半以降 出土位置 2区表土
126	土師器 皿	法量 幅(4.1×4.5)cm 厚さ0.4cm 残存率 口縁部片 色調 黒褐色 焼成 良好 胎土 緻密。雲母・白色粒を微量含む。調整 内外面・不定方向の細いヘラマガキ、内面口縁・外周に1条の細い沈線が通る。両面黒色処理。出土位置 1区SD423

第11表 (加藍中樞部區面施設) 区画南西出土土器・陶磁器観察表(図面14、図版8)

No.	器種	観察内容
1	須恵器 環	法量 底径(7.0)cm/器高(0.9)cm 残存率 底部1/4 色調 明灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色針状物質を少量含むが、緻密。調整 底部・回転糸切り 産地 南比企窯 出土位置 SD259
2	土師質土器 環	法量 底径(5.6)cm/器高(1.8)cm 残存率 底部1/4 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒をやや多く含む。調整 底部・回転ナデ→高台貼付、見込み・不定方向のヘラマガキ 特徴 内面黒色処理(内黒) 出土位置 表土
3	土師質土器 環	法量 口径(11.3)cm/底径(5.0)cm/器高3.6cm 残存率 口縁~底部1/6 色調 淡褐色 焼成 普通 胎土 砂粒・小礫を多く含む 調整 内外面・回転ナデ、体部外面・指頭圧痕(不鮮明)、底部・回転糸切り(不鮮明) 出土位置 表土
4	土師質土器 環	法量 底径(18.4)cm/器高(3.7)cm 残存率 口縁部1/8 色調 明茶褐色 焼成 良好 胎土 雲母を少量含む。緻密。調整 内外面・回転ナデ、内面・横ヘラマガキ縦ヘラマガキ 特徴 内面黒色処理(内黒)、口縁部外面に部分的に煤?付着 出土位置 表土
5	土師質土器 環	法量 底径(5.2)cm/器高(1.3)cm 残存率 底部1/2 色調 明褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、やや粗い。調整 底部・回転糸切り 出土位置 SD259
6	須恵器 甕	法量 器高(5.5)cm 残存率 頸部片 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む。粗い。調整 外面・上下2段に柳葉波状文 産地 南多摩窯 出土位置 SD259
7	須恵器 甕	法量 器高(5.3)cm 残存率 胴部片 色調 灰色 焼成 良好 胎土 小礫を少量含む。調整 外面・平行叩き産地 東金子窯 特徴 割口の一部(2箇所)に研磨痕あり 出土位置 表土

第12表 塔跡2地区出土土器・陶磁器観察表(1) (図面15・16、図版8・9)

No.	器種	観察内容
1	土師器 環	法量 口径(12.0)cm/底径6.5cm/器高4.4cm 残存率 口縁部1/4~底部3/4 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・赤色スクリヤを少量含むが、緻密。調整 口縁部外面~内面・ヨコナデ、体部外面・指頭圧痕、底部・ヘラケズリ 特徴 南武蔵窯 出土位置 SB224
2	須恵器 環	法量 底径(5.1)cm/器高(1.2)cm 残存率 底部片 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、やや粗い。調整 底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 攪乱
3	須恵器 環	法量 底径(5.7)cm/器高(1.0)cm 残存率 底部1/2 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色針状物質を少量含む。調整 底部・回転ヘラ糸切り 産地 南比企窯 出土位置 攪乱
4	須恵器 環	法量 底径(4.7)cm/器高(1.6)cm 残存率 底部片 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 砂粒・黒斑多く、やや粗い。調整 底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 表土
5	須恵器 環	法量 底径5.0cm/器高(1.4)cm 残存率 底部3/4 色調 橙褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む。調整 底部・回転糸切り 産地 不明(土師質土器の可能性もあり) 出土位置 表土
6	須恵器 環	法量 底径(6.0)cm/器高(2.1)cm 残存率 体部下半~底部1/2 色調 灰色 焼成 良好 胎土 白色粒を少量含む。調整 底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 表土
7	須恵器 環	法量 底径(5.4)cm/器高(1.4)cm 残存率 底部1/3 色調 褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色針状物質を少量含む。調整 底部・回転糸切り 産地 南比企窯 出土位置 表土
8	須恵器 環	法量 底径(5.0)cm/器高(2.5)cm 残存率 底部1/3 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・小礫を少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 攪乱
9	須恵器 壺	法量 底径4.9cm/器高(1.9)cm 残存率 底部片 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、緻密。調整 底部・回転ナデ→高台貼付 産地 南多摩窯 特徴 器面全体に降灰釉 出土位置 攪乱

第12表 塔跡2地区出土土器・陶磁器観察表(2) (図面15・16、図版8・9)

No.	器種	観察内容
10	須恵器 環	法量 器高(2.2)cm 残存率 口縁部1/10 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む。調整 内外面・回転ナデ 産地 南多摩窯 特徴 内外面に煤付着 出土位置 掘丸
11	須恵器 環	法量 高台径(10.0)cm 残存率 口縁1/2 色調 灰褐色 焼成 普通 胎土 砂粒を少量含む。軟質、緻密。調整 内外面・回転ナデ 産地 南多摩窯(山野) 出土位置 表土
12	須恵器 環	法量 底径(8.2)cm/器高(2.3)cm 残存率 体部下半~底部1/3 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 白色粒を少量含む。緻密。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転ネ切り~高台貼付 産地 東金子窯 出土位置 掘丸
13	須恵器 環	法量 底径(7.0)cm/器高(1.7)cm 残存率 底部1/4 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む。調整 底部・ナデ~高台貼付 産地 不明 特徴 高台接地面に研磨痕、見込みに降灰軸 出土位置 掘丸 備考 灰軸陶器か?
14	灰軸陶器 皿	法量 底径(6.6)cm/器高(1.7)cm 残存率 底部1/3 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 黒斑少量、緻密。調整 底部・回転ナデ~高台貼付 施軸 見込みに淡緑色の灰軸を刷毛塗りて施軸 産地 東金子窯 掘投 時期 K 90号室式(Ⅱ期前) 出土位置 表土
15	灰軸陶器 皿	法量 底径(7.6)cm/器高(1.9)cm 残存率 底部1/3 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 黒斑少量、緻密。調整 底部・回転ヘラズリ~高台貼付 施軸 見込み全体に淡緑色の灰軸を刷毛塗りて施軸(降灰軸の可能性もあり)。椀A。産地 掘投 時期 K 14号室式 出土位置 表土
16	緑軸陶器 深椀	法量 底径(5.6)cm/器高(1.5)cm 残存率 底部1/4 色調 素地・灰褐色、釉調・濃緑色 焼成 良好 胎土 密 調整 底部・ヘラズリ、見込み・ヘラミガキ 産地 東海系(美濃が掘投) 時期 Ⅲ期古(H72号室式) 出土位置 表土
17	須恵器 甕	法量 底径(9.4)cm/器高(3.4)cm 残存率 胴部下半~底部1/10 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 白色粒、砂粒を多く含む。調整 内外面・回転ナデ 産地 東金子窯 出土位置 表土
18	須恵器 甕	法量 器高(3.7)cm 残存率 口縁部1/10 色調 明灰褐色 焼成 良好 胎土 白色粒を多く含む。調整 外面・柳掛波状文 産地 東金子窯 出土位置 表土
19	須恵器 甕	法量 底径(10.0)cm/器高(4.1)cm 残存率 底部1/6 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を少量含む。調整 内外面・回転ナデ 産地 東金子窯 特徴 見込みに凹形状に降灰軸付着 出土位置 掘丸 あり。
20	灰軸陶器 長頸瓶	法量 底径(2.4)cm 残存率 口縁部1/10 色調 灰白色 焼成 良好 胎土 白色粒を微量含む、緻密。調整 内外面に淡緑色の灰軸付着 産地 不明 出土位置 表土
21	灰軸陶器 甕	法量 底径(8.0)cm/器高(3.8)cm 残存率 底部1/8 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く、黒斑少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転ヘラズリ~高台貼付 特徴 胴部外面に見込みに淡緑色の灰軸付着(軸垂れ・降灰軸) 出土位置 掘丸
22	常滑 甕	法量 器高(4.5)cm 残存率 口縁部片 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 小礫を多く含む、粗い。産地 常滑窯 年代 5型式(13世紀中葉) 特徴 N字状口縁 出土位置 表土
23	常滑 片口鉢	法量 器高(6.0)cm 残存率 底部片 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む、粗い。調整 外面・ヘラズリ 産地 常滑窯 年代 6a型式以降(13世紀後半) 特徴 片口鉢Ⅱ類、内面研磨痕 出土位置 掘丸
24	常滑 片口鉢	法量 器高(4.4)cm 残存率 口縁部片 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 小礫多く、粗い。調整 外面・回転ナデ・指頭圧痕 産地 常滑窯 年代 7型式以降(14世紀前半) 特徴 片口鉢Ⅱ類 出土位置 掘丸
25	緑軸皿	法量 口径(11.0)cm/底径(5.7)cm/器高2.3cm 残存率 口縁部~底部1/6 色調 素地・暗灰色、釉調・乳白(灰軸) 胎土 緻密 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転ネ切り 産地 瀬戸 年代 古瀬戸後期様式Ⅲ期(15世紀前半葉) 出土位置 表土
26	緑軸皿	法量 底径(4.5)cm/器高(1.2)cm 残存率 底部1/2 色調 素地・明灰色、釉調・濃緑色 胎土 緻密 調整 底部・回転ネ切り 産地 瀬戸 年代 古瀬戸後期様式Ⅲ期(15世紀前半葉) 出土位置 掘丸
27	長石釉皿 (志野皿)	法量 底径(6.0)cm/器高(1.5)cm 残存率 底部1/4 色調 素地・灰白色、釉調・白濁色 胎土 緻密 産地 瀬戸・美濃 年代 17世紀 特徴 高台内3ヶ所にトチン痕 出土位置 掘丸
28	灰軸皿	法量 底径(5.0)cm/器高(1.3)cm 残存率 底部片 色調 素地・灰褐色、釉調・緑色 胎土 緻密 調整 底部・削り出し高台、見込みに灰軸を施軸(重ね積み痕あり) 産地 瀬戸 年代 17世紀 出土位置 表土
29	灰軸皿	法量 底径(5.8)cm/器高(1.3)cm 残存率 底部1/2 色調 素地・灰褐色、釉調・緑色 胎土 緻密 調整 底部・削り出し高台、見込みに灰軸を施軸(重ね積み痕あり) 産地 瀬戸 年代 17世紀 出土位置 表土
30	灰軸皿	法量 器高(1.3)cm 残存率 底部1/4 色調 素地・灰褐色、釉調・緑色 胎土 緻密 調整 底部・削り出し高台、見込みに灰軸を施軸(重ね積み痕あり) 産地 瀬戸 年代 17世紀 出土位置 表土
31	刷毛目 碗	法量 底径(3.8)cm/器高(2.1)cm 残存率 底部片 胎土 緻密 調整 内外面に白絵土による渦状の刷毛目を施す。産地 唐津 年代 17世紀後半~18世紀代 出土位置 表土
32	染付 小皿	法量 底径6.5cm/器高(1.2)cm 残存率 底部3/4 産地 肥前 年代 IV期(1690~1780年) 特徴 見込み・五弁花文、二重圓縁の外側に複数の丸文を配置、高台内、一重圓縁に大明化年製の銘あり。出土位置 掘丸
33	刷毛目 碗	法量 底径(3.6)cm/器高(2.5)cm 残存率 底部片 胎土 緻密 調整 内外面に渦状の刷毛目を施す。産地 唐津 年代 17世紀後半~18世紀代 出土位置 掘丸
34	灰軸 呉須絵碗	法量 口径9.5cm/底径4.3cm/器高6.2cm 残存率 口縁~底部3/4 特徴 灰白色の灰軸地に、体部外面に薄水色の呉須で文様を描く 産地 瀬戸・美濃 年代 17世紀代 出土位置 掘丸
35	鉄軸 搦鉢	法量 口径(35.0)cm/器高(5.8)cm 残存率 口縁1/6 色調 素地・灰白色、釉調・明茶色 胎土 緻密、軟質。特徴 内面・5条1単位の櫛目 産地 瀬戸・美濃 年代 18世紀 出土位置 掘丸
36	鉄軸 搦鉢	法量 底径(9.8)cm/器高(2.7)cm 残存率 底部1/8 色調 素地・灰白色、釉調・茶褐色 胎土 緻密、軟質。調整 底部・回転ネ切り、内面・11条1単位の櫛目 産地 瀬戸・美濃 年代 18世紀 出土位置 表土
37	鉄軸 搦鉢	法量 器高(4.0)cm 残存率 胴部片 色調 素地・茶褐色、釉調・紫褐色 胎土 軟質、緻密。調整 内面・11条1単位の櫛目 産地 瀬戸・美濃 年代 17世紀代 出土位置 掘丸

第12表 塔跡2地区出土土器・陶磁器観察表(3) (図面15・16、図版8・9)

No.	器種	観察内容
38	鉄軸 灯明皿	法量 口径(10.0)cm/器高(1.6)cm 残存率 口縁~体部1/4 色調 素地-灰褐色、釉調-明茶色 胎土 軟質、緻密。産地 瀬戸・美濃 年代 18世紀以降 出土位置 表土
39	染付 丸碗	法量 口径(3.6)cm/器高(3.6)cm 残存率 底部3/4 産地 瀬戸・美濃 年代 19世紀第IV西半期 特徴 磁器、濃青色のコバルト染付 出土位置 表土
40	灰釉脚付 灯明皿	法量 口径(5.2)cm/器高(4.8)cm 残存率 脚部 色調 素地-灰褐色、釉調-灰色 調整 底部・回転ヘラケズリ 見込み・底部外面を除く範囲に施釉。産地 瀬戸・美濃 年代 19世紀 出土位置 表土
41	焼締 鉢	法量 口径(13.0)cm/口径(12.5)cm/器高4.9cm 残存率 口縁~底部1/8 色調 赤褐色 胎土 粗い 産地 常滑? 出土位置 表土
42	焼締 鉢	法量 器高(3.5)cm 残存率 胴部辺 色調 暗灰色 胎土 緻密、硬質。特徴 外面に1条の突帯が巡る。 出土位置 表土
43	ゴム印判 飯碗	法量 口径11.4cm/口径3.8cm/器高6.0cm 残存率 完形 調整 外面・コバルト絵具によるゴム印判(5単位) 産地 瀬戸・美濃 年代 20世紀第2・4半期 出土位置 表土
44	染付 丸盛碗	法量 口径8.1cm/口径3.2cm/器高5.5cm 残存率 完形 調整 外面に鶴の図案を隅割、嘴・赤色・首・青色・羽・水色の絵具で着色する。高台外周・二重、高台内・一重圓線が巡る。産地 瀬戸・美濃 年代 20世紀 出土位置 覆乱
45	長筒角腰 湯呑	法量 口径(6.6)cm/口径(3.2)cm/器高6.8cm 残存率 1/2 調整 器面に、「国分寺第一小学校前 一燃料店 電話五七八番」のプリントあり。年代 20世紀第3・4半期以降 出土位置 表土
46	染付 鉢	法量 口径(15.4)cm/口径(5.0)cm/器高8.6cm 調整 コバルト絵具で手描きによる絵付 産地 瀬戸・美濃 年代 20世紀 出土位置 覆乱
47	色絵 鉢	法量 口径(16.8)cm/口径(6.0)cm/器高7.8cm 残存率 口縁~底部1/2 調整 クロム系の緑色絵具で口縁 部に二重圓線を描く。産地 瀬戸・美濃 年代 20世紀 出土位置 覆乱

第13表 塔跡2周辺地区出土土器・陶磁器観察表(1) (図面16、図版9)

No.	器種	観察内容
1	須恵器 環	法量 口径12.3cm/口径4.3cm/器高4.2cm 残存率 口縁1/2~底部3/4 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 特徴 内外面に煤付着(灯 明皿) 出土位置 北トレ表土
2	須恵器 環	法量 口径(13.0)cm/口径(5.2)cm/器高4.2cm 残存率 口縁3/4~底部 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 白色粒・砂粒を少量含む、やや粗い。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 産地 南多摩窯 出土位置 SK3320
3	須恵器 蓋	法量 口径(1.8)cm/器高(1.6)cm 残存率 蓋部1/2 色調 暗灰色 焼成 良好 胎土 白色粒を多く含む。 調整 外面・回転ヘラケズリ 産地 南多摩窯 出土位置 西トレ表土
4	土師質土器 環	法量 口径(14.0)cm/器高4.0cm 残存率 口縁部1/8 色調 明褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・石英少量含む、 やや粗い。調整 内外面・回転ナデ 特徴 内面口縁部に煤付着(灯明皿) 出土位置 北トレ表土
5	土師質土器 環	法量 口径(6.1)cm/器高(1.3)cm 残存率 底部1/8 色調 茶褐色 焼成 普通 胎土 砂粒・雲母を少量含む。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 出土位置 南トレ表土
6	土師質土器 環	法量 口径(6.2)cm/器高(1.4)cm 残存率 底部1/8 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を含むが緻密。 調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 出土位置 西トレ表土
7	土師質土器 環	法量 口径(6.2)cm/器高(1.4)cm 残存率 底部1/2 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む、緻密。 調整 底部・回転糸切り 出土位置 西トレ表土
8	土師質土器 環	法量 口径(6.0)cm/器高(2.8)cm 残存率 体部下半~底部1/8 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 特徴 体部外面に墨痕あり(判読不明) 出土位置 南トレ表土
9	土師質土器 環	法量 口径(5.0)cm 器高(1.8)cm 残存率 底部1/2 色調 明褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む。 調整 底部・回転糸切り 出土位置 SX358
10	土師質土器 環	法量 口径4.5cm/器高(1.9)cm 残存率 体部下半~底部片 色調 茶褐色 焼成 普通 胎土 赤色スコリア・ 砂粒を多く含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 出土位置 西トレ表土
11	土師質土器 環	法量 口径(4.2)cm/器高(1.4)cm 残存率 体部下半~底部1/2 色調 淡褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少 量含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 特徴 見込みに煤付着 出土位置 西トレ表土
12	土師質土器 環	法量 口径(4.9)cm/器高(1.9)cm 残存率 底部片 色調 橙褐色 焼成 普通 胎土 砂粒を少量含む、軟質 で緻密。調整 底部・回転糸切り 出土位置 西トレ表土
13	土師質土器 環	法量 口径(6.4)cm/器高(2.3)cm 残存率 体部下半~底部1/8 色調 褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を多く 含む。調整 内外面・回転ナデ、底部・回転糸切り 出土位置 南トレ表土
14	土師質土器 環	法量 口径(6.8)cm/器高(1.9)cm 残存率 底部1/2 色調 茶褐色 焼成 良好 胎土 砂粒・雲母を少量含む。 調整 底部・回転糸切り→高台貼付 出土位置 西トレ表土
15	灰釉陶器 皿	法量 口径(5.5)cm/器高(1.7)cm 残存率 底部1/4 色調 素地-灰白色 焼成 良好 胎土 砂粒を含むが、 緻密。調整 底部・回転ヘラケズリ→高台貼付。体部内面に薄緑色の灰釉を刷毛塗りして施釉(見込み無釉)。 産地 猿投 時期 K90号窯式(Ⅱ期中) 出土位置 南トレ表土
16	灰釉陶器 皿	法量 口径(7.6)cm/器高(1.4)cm 残存率 底部1/2 色調 素地-灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を含むが、 緻密。調整 底部・回転ヘラケズリ→高台貼付。体部内面に薄緑色の灰釉を刷毛塗りして施釉(見込み無釉)。三日 月高台。産地 猿投 時期 K90号窯式(Ⅱ期新~Ⅲ期占) 出土位置 南トレ表土

第 13 表 塔跡 2 周辺地区出土土器・陶磁器観察表 (2) (図面 16、図版 9)

No.	器種	観察内容
17	灰軸陶器 椀	法量 底径 (5.6)cm / 器高 (1.5)cm 残存率 底部 1/10 色調 素地 - 灰褐色 焼成 良好 胎土 やや粗い。 調整 底部 - 回転ナデ → 高台貼付。体部内面に薄緑色の灰軸 (見込みは無軸)。産地 猿投 時期 明和 27 号窯・ 百代寺 (IV 期古) 出土位置 北トレ表土、椀 A
18	須恵器 甕	法量 器高 (5.0)cm 残存率 口縁部片 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 砂粒を少量含み、粗い。 調整 外面 - 7 条 1 単位の縞描波状文 産地 南多摩窯 出土位置 南トレ表土
19	須恵器 甕	法量 器高 (5.7)cm 残存率 口縁部片 色調 青灰色 焼成 良好 胎土 砂粒・白色粒を含む。 調整 外面 - 7 条 1 単位の縞描波状文 産地 東金子窯 出土位置 東トレ旧トレ埋戻土
20	常滑 片口鉢	法量 器高 (2.4)cm 残存率 口縁部片 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 小礫多く、粗い。 調整 内外面 - 回転ナデ 産地 常滑窯 特徴 片口鉢 1 類 5 型式 (13 世紀第 2 四半期) 出土位置 西トレ表土
21	常滑 片口鉢	法量 器高 (3.2)cm 残存率 口縁部片 色調 灰褐色 焼成 良好 胎土 小礫多く、粗い。 調整 内外面 - 回転ナデ 産地 常滑窯 特徴 片口鉢 1 類 5 型式 (13 世紀第 2 四半期) 出土位置 南トレ埋戻土
22	常滑 甕	法量 底径 (17.6)cm / 器高 (3.8)cm 残存率 底部片 色調 赤褐色 焼成 良好 胎土 小礫多く、粗い。 調整 外面 - ナデ 産地 常滑窯 出土位置 北トレ表土
23	銷軸 摺鉢	法量 器高 (3.0)cm 残存率 口縁部片 色調 素地 - 橙褐色、軸調 - 紫褐色 焼成 良好 胎土 軟質・緻密 特徴 古瀬戸後中期 ~ 後古期 (15 世紀中葉) 出土位置 南トレ表土

第14表 金堂地区出土土鏡瓦観察表(1)(図面17~26、図版10・11)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
17-1	30区 瓦溜	(220.0)	-	-	3.6	((8)SC)	2.3	0.7	a	1.6	0.9	a	(12.3)	技法A, 明黄褐色。軟質。白色針状物質を多く含む。南北企鵝呂系か。
17-2	30区 瓦溜	(220.0)	-	-	-	((8)SC)	2.8	0.9	a	1.9	1.5	a	(4.2)	技法B7。暗青灰色(内部灰白色)。軟質。南北企鵝呂系か。
17-3	7区東 表土	((19.0))	-	-	-	((8)SC)	1.9	-	-	-	1.0	a	(3.5)	灰白色。硬質。白色針状物質を含む。瓦当裏面ナデ・瓦当周縁部へラ削り。
17-4	7区西 表土	((20.5))	A1	0	4.7	((8)SC)	2.2	-	-	-	0.8	a	(3.3)	技法B11?。灰白色。硬質。白色針状物質を含む。瓦当裏面指ナデ、男瓦側面に布目痕あり。
17-5	19区	((18.5))	-	-	4.8	(2)SC)	1.5	-	-	-	1.3	a	(7.2)	技法A, 灰色。硬質。0.1~1.0mm程の砂粒を多く含む。自然軸付着(瓦当裏面に顕著)。瓦当裏面・接合部ナデ。男瓦部凸面縦位のナデ。范範が瓦当周縁部まで及ぶ。
17-6	7区東 埋灰土	((21.0))	-	-	((15.5)3.3)	(4)SA)	2.5	0.6	a	1.9	0.8	a	(3.1)	技法B11。灰色。やや硬質。0.5~1.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面ナデ。
17-7	7区東 表土	((17.2))	B1	1+4	13.2 3.3	((8)SC)	2.0	0.4	a	1.6	0.8	a	(5.0)	技法B11?。黒色~灰色。硬質。白色針状物質を少量含む。瓦当面に自然軸付着。瓦当裏面ナデ。
17-8	30区 瓦溜	(20.4)	-	-	-	(1)SC)	2.8	0.4	a	2.4	1.3	a	(4.3)	黒色(内部明黄褐色)。軟質。白色針状物質、小石、0.1~0.5mm程の砂粒を含む。瓦当周縁部へラ削り。
18-9	8区 瓦溜	-	B1	1+ ((4))	3.3	((6)SC)	-	-	a	-	-	a	(2.8)	灰色。硬質。0.1~1.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面顕明き後指ナデ。瓦当面自然軸付着。
18-10	7区東 埋灰土	((21.0))	-	-	3.5	(1)SC)	3.3	1.4	a	1.9	1.0	a	(2.5)	浅灰色。軟質。1.0mm以下の黒色粒を多く含む。瓦当裏面ナデ。
18-11	8区 瓦溜・ 埋灰土	19.8	B1	1+4	14.8 3.1	6SC)	2.2	-	-	-	1.7	a	(4.3)	技法B11。灰色。硬質。0.1~2.0mm程の砂粒を含む。瓦当裏面顕明き後指ナデ。瓦当面外区内縁指ナデ。
18-12	6区 攪乱	((20.5))	-	-	3.6	((6)SC)	2.5	0.6	a	1.9	1.2	a	(3.3)	技法B11。灰色。硬質。0.5~1.0mm程の砂粒を含む。瓦当裏面・男瓦接合部指ナデ。外区外縁内側をへラ削り。
18-13	6区 瓦溜	((19.0))	-	-	3.6	((6)SC)	2.5	0.8	a	1.7	0.9	a	(10.6)	技法B11。灰色。やや硬質。小石、0.1~0.5mm程の砂粒を含む。男瓦接合部指ナデ。
18-14	5区 表土	((21.0))	-	-	4.0	((6)SC)	3.0	0.9	a	2.1	0.9	a	(3.3)	淡黄色。やや軟質。0.5~2.0mm程の砂粒を少量含む。外区内縁~外縁内側、瓦当裏面ナデ。
18-15	30区 瓦溜	((21.0))	-	-	(2.6)	(1)SC)	2.0	0.7	a	1.3	0.6	a	(3.0)	色調灰色。やや硬質。0.5~1.5mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面ナデ。
19-16	7区東 埋灰土	-	((5.6)) B1	(1)	((14.0)3.6)	((6)SC)	-	-	-	-	-	-	(2.5)	灰色~ぶい褐色。やや軟質。赤色スコリア・0.5mm程の砂粒を含む。瓦当裏面指ナデ。28型式。
19-17	7区 表土	((19.4))	((5.6)) B	-	((14.0)3.6)	((6)SC)	2.9	0.4	a	2.5	1.4	a	(2.9)	灰色。硬質。石英・0.1~1.0mm程の砂粒を含む。瓦当裏面削りのチナデか。28型式。
19-18	5区 埋灰土	((19.4))	5.3 B1	(2)	((7.1)3.2)	((7)SC)	2.9	0.5	a	2.4	1.1	a	(6.4)	技法B11。灰色(瓦当裏面青灰色)。硬質。0.1~3.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面顕明き。63型式。
19-19	8区 埋灰土	((20.0))	-	-	3.6	(2)SC)	3.1	0.5	a	2.6	0.6	a	(18.4)	技法B11。褐色~ぶい赤褐色。非常に硬質。0.5mm前後の白色粒を含む。男瓦部凸面縦位のへラ削り。瓦当裏面男瓦接合部指ナデ。男瓦部素材粘土。凹凸面を除き全的に自然軸付着。
19-20	30区 瓦溜	((19.5))	-	-	(2.8)	(1)SC)	3.4	0.6	a	2.8	1.5	a	(3.0)	灰色。やや硬質。0.5~3.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面指ナデ。63型式。

第14表 金堂地区出土鍔瓦観察表(2)(図面17~26、図版10・11)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
19-21	8区 埋戻土	((19.5))	-	-	(2.8)	(1) SC	2.6	0.4	a	2.2	1.1	a	(2.9)	灰色(表面色調が一部マーブル状を呈する)。硬質。0.5~2.0mm以下の砂粒を多く含む。瓦当裏面縄目き。63型式。
19-22	6区 瓦溜	((19.0))	5.9 B1	1+4	((13.8)) 3.7	((6)) SC	2.2	0.7	a	1.5	0.8	a	(2.2)	瓦当裏面縄目き。灰色~暗紫灰色(内部灰赤色)。0.1~0.5mm程の白色粒・赤色スコリアをわずかに含む。非常に硬質。23-A型式。
20-23	30区 瓦溜	((20.5))	-	-	2.6	((15)) SC	2.4	0.6	a	1.8	0.6	a	(2.0)	灰色~灰褐色(断面褐色)。2.0mm以下の砂粒・赤色スコリアを多く含む。やや軟質。131型式。
20-24	10区 攪乱・ 瓦溜	((19.6))	((6.0)) B1	(2)	((13.2)) 2.8	(1) SA	3.2	0.9	a	2.3	1.0	a	(3.1)	灰色。0.5mm程の白色粒・少量の赤色スコリア状物質を含む。硬質。瓦当裏面縄目き。
20-25	7区東 表土	((19.5))	- B1	-	2.6	(2) SA	2.3	0.7	a	1.6	0.8	a	(1.9)	灰色。硬質。0.1~1.0mm程の砂粒を含む。瓦当裏面指ナデ、指頭痕あり。29-F型式。
20-26	30区 瓦溜	((18.0))	((6.0)) B1	(1)	((13.0)) 2.5	(2) SA	2.5	0.7	a	1.8	0.8	a	(2.5)	胎土緻密。白色粒を多く含む。硬質。瓦当裏面縄目き後指ナデ。瓦当面に自然軸付着。
20-27	7区東 表土	((19.0))	6.2 B1	(2)	13.5 2.7	((6)) SA	2.8	0.8	a	2.0	1.1	a	(5.1)	技法B1。暗灰色~灰色(断面褐色)。硬質。0.1~2.0mm程の白色粒を含む。瓦当周縁部・同裏面縄目き、後者をナデ消す。瓦当面・周縁部に自然軸付着。
20-28	6区 攪乱・ 瓦溜	((18.5))	((4.4)) B1	1+ (4)	((13.4)) 2.7	(2) SA	2.5	0.7	a	1.8	0.9	a	(2.4)	灰白色。硬質。0.5mm以下の白色粒・微量の石英を含む。瓦当裏面指頭痕。瓦当面・同周縁に自然軸付着。
20-29	5区 埋戻土	((17.2))	5.3 B1	1+ (4)	((14.0)) 2.8	((6)) SA	((2.0))	0.5	a	((1.5))	-	a	(3.6)	灰色~暗青灰色。硬質。0.5~1.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面縄目き。瓦当面に自然軸付着。
20-30	7区東 表土	((21.0))	7.4 B1	1+4	((7.9)) 3.4	((6)) SA	2.6	0.7	a	1.9	1.5	a	(8.0)	技法A。灰色。硬質。0.5~3.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面・周縁、男瓦部内面に縄目き。
20-31	5区 P54 覆土	-	- B1	(1)	3.0	(2) SA	-	0.8	a	-	-	-	(2.4)	暗灰色~暗青灰色。硬質。小石t、0.5mm程の砂粒を含む。瓦当裏面縄目き。瓦当面に自然軸付着。
21-32	7区東 表土	19.4	5.5 B1	1+4	13.6 2.8	6 SA	2.8	0.7	a	2.1	1.1	a	(37.2)	技法A。灰色~青灰色。硬質。0.1~3.0mm程の白色粒・微量の赤色スコリア状物質を含む。瓦当裏面縄目き。瓦当面に自然軸付着。
22-33	5区 埋戻土	17.7	6.0 B1	1+4	13.7 2.8	6 SA	2.1	1.1	a	1.1	1.1	a	(3.9)	技法B1。胎土やや粗。白色粒・石英を含む。硬質。瓦当面自然軸付着。瓦当裏面縄目き。
22-34	9区 埋戻土	((19.0))	-	-	3.8	(1) SA	2.5	0.7	a	1.8	1.0	a	(4.4)	技法D1?。灰白色。やや硬質。0.5~2.0mm程の砂粒。微量の白雲母を含む。男瓦接合部裏面指ナデ。
22-35	10区 攪乱・ 瓦溜	((18.6))	- B1	-	3.3	((6)) SA	3.0	1.2	a	1.8	1.5	a	(18.8)	技法D1?。灰色(断面内部暗赤褐色)。硬質。胎土粗。3.5mm以下の白色砂粒を多く含む。瓦当裏面指頭痕あり。
22-36	17区 東	((18.0))	- B1	-	((13.0)) 3.1	(2) SA	2.2	0.8	a	1.4	-	-	(2.9)	技法B1。灰黄褐色~灰褐色。石英粒。0.1~3.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面接合部付近ナデ。
22-37	7区東 表土	((19.2))	6.4 B1	1+4	14.9 2.5	6 SA	1.9	-	-	-	1.7	a	(3.1)	技法B1。灰色~にぶい褐色。やや硬質。小礫。0.1~3.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面指頭痕およびナデ。4片接合。
22-38	30区 瓦溜	-	((5.4)) B1	((1)) +4	((7.1)) 1.9	(3) SA	-	-	-	-	-	-	(2.4)	技法D7。暗灰黄色~浅黄色(断面灰白色・内部にぶい褐色)。石英・赤色スコリア状物質。3.0mm以下の砂粒を多く含む。瓦当裏面指ナデ。
23-39	7区東 表土	19.8	6.5 B1	1+4	14.5 2.5	6 SA	2.6	-	-	-	1.4	a	(7.2)	技法A?。青灰色~暗紫灰色(瓦当裏面にぶい黄褐色)。硬質。小石。0.5~3.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面押圧後ナデか。

第14表 金堂地区出土土鏡瓦観察表(3)(図面17~26、図版10・11)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
23-40	7区東 表土	19.4	6.5 B1	1+4	14.5 2.5	6 SA	2.5	-	-	-	1.6	a	(6.5)	褐色～褐色。やや軟質。4mm以下の砂粒を多く含む。瓦当裏面指頭痕およびナデ。3片接合。
23-41	7区 表土	(20.0)	6.3 B1	1+4	14.7 2.5	((6) SA	2.3	-	-	-	1.7	a	(3.5)	技法B1。青灰色～灰黄色。やや硬質。0.1～2.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面指頭痕およびナデ。4片接合。
23-42	8区 埋灰土	((19.5))	- B1	-	((14.3)) 2.5	(1) SA	2.0	-	-	-	0.6	a	(2.5)	灰色。硬質。石英。0.5～1.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面樋目印きのちナデ。瓦当面自然釉付着。
23-43	8区 埋灰土	((20.0))	-	-	- 2.3	(1) SA	2.1	-	-	-	2.0	a	(3.1)	にぶい黄褐色。やや硬質。4mm以下の砂粒を多く含む。瓦当裏面指頭痕およびナデ。
24-44	7区東 表土	17.6	5.4 A1	0	14.6 1.8	7 SA	1.4	-	-	-	0.9	a	(3.9)	技法B1。暗青灰色。硬質。小石。0.1～0.5mm程の砂粒を含む。瓦当裏面樋目印き。同瓦接合部・瓦当周縁ナデ。
24-45	29区 表土	((20.5))	((8.0)) B1	(3)	((17.2)) 4.2	((7)) SC	-	-	-	-	-	-	(3.5)	技法A。瓦当面明青灰色。断面・瓦当裏面灰褐色。4.0mm以下の砂粒を多く含む。瓦当裏面指ナデ。
24-46	24区 南側	((20.0))	-	-	((17.2)) 3.2	((7)) SC	1.6	-	-	-	-	a	(8.6)	技法B1。灰色～青灰色。硬質。2.0mm以下の砂粒を多く含む。瓦当裏面接合部ナデ。瓦当裏面朱付着。
24-47	6区 攪乱・ 瓦溜	((20.5))	((7.8)) B1	1+(1)	((17.6)) 3.7	((7)) SC	-	-	-	-	-	a	(2.4)	灰色。硬質。0.5～3.0mm程の砂粒を含む。瓦当面自然釉付着(暗緑灰色)。同裏面ナデ。
24-48	7区 表土	-	((6.0)) B1	(1)	((16.4)) 2.5	((6)) SA	-	-	-	-	-	-	(3.6)	技法B1?。灰色～青灰色(瓦当裏面灰赤色)。硬質小石・0.5～2.0mm程の砂粒を含む。瓦当面自然釉付着。同裏面ナデ。
24-49	7区東 表土	17.9	3.9 B1	1	13.0 2.2	5 SA	1.5	-	-	-	1.4	a	(7.0)	技法B1。灰白色。やや軟質。0.1～0.5mm程の砂粒を少量含む。瓦当周縁・男瓦部凸面格子目印きのちナデナデ。瓦当裏面指ナデ。
25-50	8区	((17.4))	((3.8)) B1	1	((12.8)) 1.7	(2) SA	2.2	-	-	-	1.3	a	(3.4)	褐色～青灰色(断面赤褐色)。硬質。0.1～0.5mm程の砂粒を少量含む。瓦当裏面指ナデ。周縁部ヘラナデ。
25-51	8区 瓦溜	((17.2))	-	-	((12.2)) 2.1	(3) SA	2.5	-	-	-	1.1	a	(3.1)	技法B1?。灰色(断面にぶい赤褐色)。硬質。0.1～0.5mm程の砂粒を少量含む。瓦当裏面指頭痕および指ナデ。周縁部ヘラナデ。
25-52	8区 埋灰土	((19.5))	-	-	((14.5)) 1.6	(1) SA	2.5	-	-	-	1.0	a	(2.8)	にぶい黄褐色(断面褐色)。やや軟質。0.5mm程の砂粒・赤色スコリア状物質を含む。瓦当裏面指頭痕および指ナデ。周縁部ヘラナデ。
25-53	10区	((19.0))	-	-	((16.1)) 2.4	(4) SA	2.9	-	-	-	1.5	a	(16.0)	技法B1。灰色～暗青灰色。硬質。0.1～2.0mm程の砂粒を含む。瓦当裏面指頭痕。
25-54	6区 攪乱・ 瓦溜	((18.0))	-	-	((12.6)) 2.1	(2) SA	2.7	-	-	-	0.9	a	(2.4)	技法B1。暗紫灰色～暗青灰色(断面灰赤色)。非常に硬質。0.5mm程の砂粒を少量含む。瓦当面・同周縁部自然釉付着。同裏面指ナデ?。
25-55	7区東 埋灰土	-	((5.7)) B1	1+(3)	((14.0)) 2.5	(3) SA	-	-	-	-	-	-	(2.1)	灰色。硬質。0.5mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面ナデナデ。
25-56	30区 瓦溜	((19.0))	-	-	((13.0)) 2.6	(2) SA	3.0	-	-	-	0.7	a	(2.4)	青灰色。硬質。0.5～1.0mm程の砂粒を含む。瓦当裏面指頭痕。
25-57	6区 埋灰土	((19.5))	-	(1)	((16.1)) 2.7	(2) SA	1.7	-	-	-	1.4	a	(2.7)	灰色～暗灰色。硬質。0.5～2.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面指頭痕。
26-58	30区 瓦溜	((20.0))	-	-	((14.2)) 3.3	(1) SA	2.9	0.5	a	2.4	0.6	a	(3.1)	灰色。硬質。0.5～2.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面指ナデ。瓦当径より型径が小さいためか、陶縁が二重となる。外側の陶縁上面がヘラ削りされ、断面形状を呈する。

第14表 金堂地区出土鏡瓦観察表(4)(図面17~26、図版10・11)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
26-59	5区 表土	-	5.2 B1	(4)	2.8	(1) SA	-	-	-	-	-	(2.7)	暗灰色~暗青灰色。硬質。白色針状物質・1.0mm程の砂粒・雲母・微量の赤色スコリア物質を含む。	
26-60	5区 表土	((19.5))	-	-	((15.9)) 2.4	(2) SD?	1.8	-	-	-	0	a	(1.8)	灰色。硬質。0.5mm以下の白色粒を少量含む。瓦当裏面指頭痕。
26-61	9区 表土	-	3.4 B1	0	3.6	(2) SA	-	-	-	-	-	-	(1.8)	灰白色。硬質。0.5mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面指頭痕およびナデ。
26-62	6区 攪乱・ 瓦溜	((16.4))	4.4 A1	0	((12.0)) 2.0	((16)) SA	2.3	-	-	-	1.0	a	(5.7)	技法Aか。暗青灰色。硬質。1cm程の大粒の石英片・0.5~3.0mm程の砂粒を多く含む。男瓦部凸面ヘラ削り。瓦当裏面接合部指ナデ。
26-63	2区	-	-	-	((16.0))	(5)	-	-	a	-	-	-	(2.6)	浅黄褐色(断面内部褐色)。やや軟質。石英・赤色スコリア物質・0.5~1.0mm程の砂粒を含む。瓦当裏面罫目叩き。
26-64	7区東 表土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(34.5)	技法D1?。瓦当部欠失。青灰色。0.5~2.0mm程の砂粒を含む。男瓦部ヨコナデ(瓦当付近ヘラ削り)。

第15表 講堂地区出土鏡瓦観察表(1)(図面27~32、図版11)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
27-1	14区 表土	-	5.9 A1	1+ (4)	((15.2)) 3.8	(8) SC	-	-	-	-	-	-	(2.8)	灰色。硬質。白色針状物質・石英粒・0.5mm程の砂粒を含む。瓦当裏面指ナデ。
27-2	10区 攪乱	((20.2))	-	-	((15.2)) 3.8	(1) SC	((2.5))	-	-	-	-	-	(15.0)	技法BⅡ。黒色(断面黄褐色)。やや軟質。石英・雲母・0.5mm程の砂粒を含む。丸瓦部凸面ヘラナデ・凹面指ナデ・接合部端面ヘラによる割目あり。
27-3	8区	((16.0))	-	-	((13.0))	(2) SC	1.5	-	-	-	0.3	a	(3.3)	灰白色。石英・雲母・0.5mm以下の砂粒を少量含む。
27-4	5-3区 Aトシ 粘土層	((21.4))	-	-	((18.4)) 5.2	(2) SC	1.5	-	-	-	0.8	a	(7.5)	黒色(断面浅黄色)。軟質。白色針状物質・雲母・0.5~2.0mm程の砂粒を多く含む。
27-5	1区 表土	((20.2))	4.0 B1	1+ (4)	((14.2))	(6) 3.1	3.0	1.0	a	2.0	-	-	(6.5)	技法BⅠ。灰色。硬質。0.5~1.0mm程の砂粒を含む。瓦当裏面罫目叩き後ナデ。
27-6	14区 表土	((19.2))	-	-	((14.2)) 3.3	(1) SC	2.5	1.0	a	1.5	1.0	a	(2.0)	灰色~灰白色。やや硬質。0.5mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面指ナデ。
27-7	8区西 表土	((19.5))	((5.1)) B1	0	((14.1)) 3.9	(6) SC	2.7	0.8	a	1.9	1.1	a	(4.8)	技法BⅠ。褐灰色。やや軟質。0.5~3.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面罫目叩き。
27-8	5-4区 Cトシ 整地層	((19.0))	-	-	((18.4)) 3.2	(1) SC	2.3	0.9	a	1.4	1.0	a	(2.5)	暗灰色~青灰色。非常に硬質。0.5~1.0mm程の砂粒を含む。瓦当面自然軸付着。
28-9	5-4区 表土	((20.6))	-	-	((15.8)) (4.2)	(2) SC	2.4	0.6	a	1.8	1.1	a	(3.2)	灰色~黄灰色。硬質。0.5~1.0mm程の砂粒を少量含む。瓦当裏面罫目叩き、一部指ナデ。
28-10	13区 表土	-	B1	(1)	((14.6)) 3.5	(6) SC	-	-	-	-	-	-	(3.5)	灰色~暗灰色。やや硬質。0.5~4.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面罫目叩き。
28-11	5-3区 埋戻土	-	5.3 B1	1+4	((14.0)) 3.6	(6) SC	-	-	-	-	-	-	(3.5)	暗青灰色(断面灰赤色)。硬質。0.5~2.0mm程の砂粒を含む。瓦当裏面罫目叩き。
28-12	3-2区 埋戻土	((15.6))	-	-	((11.4)) (3.5)	(2) SC	2.1	0.3	a	1.8	(0.5)	-	(5.2)	技法BⅡ。灰色。やや軟質。0.5~1.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面接合部ナデ。

第 15 表 講堂地区出土土器瓦観察表(2) (図面 27～32、図版 11)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高 文様			
28-13	10区 東 表土	(16.8)	((5.8)) B1	1+ (4)	((11.2)) (3.2)	(2) SC	2.8	1.1	a	1.7	0.6	a	(2.2)	灰色。硬質。0.5～1.0mm程の砂粒を少量含む。瓦当裏面ナデか。
28-14	5-4区 埋戻土	-	B1	(1)	3.0	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(2.2)	にぶい褐色。硬質。0.5～1.0mm程の砂粒を含む。瓦当裏面罫目印きのちナデか。
28-15	10区 西 表土	((19.0))	((4.4)) B1	(1)	((14.6)) 1.8	(2) SA	2.2				0.7	a	(2.8)	浅黄色(瓦当裏面黄灰色)。軟質。0.1～2.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面指ナデ後、同裏面外縁をヘラ削り。
28-16	10区 南東 表土	((20.0))	((7.8)) A1	(1)	((15.4)) 2.6	(4) 2.4	2.3	0.4	a	1.9	1.0	a	(3.9)	灰色～にぶい黄褐色。硬質。0.1～2.0mm程の砂粒を含む。瓦当周縁ヘラ削り、同裏面指ナデ。
28-17	10区 南東 表土	((20.8))	((6.0)) B1	-	((16.4))	(1) 4.0	2.2	0.7	a	1.5	1.1	a	(2.8)	浅黄色(瓦当裏面一部青灰色)。やや硬質。赤色スコリア状物質・0.1～1.0mm程の砂粒を含む。瓦当周縁部指ナデ、裏面罫目印き。
29-18	14区 表土	-	-	-	2.3	(2) SC	1.7				0.7	a	(3.6)	暗青灰色。硬質。0.1～1.0mm程の砂粒を含む。瓦当面自然釉付着、同周縁部に泡痕あり。瓦当裏面ナデ。
29-19	10区 東 表土	-	-	-	-	(1) SC	-	-	-	-	-	-	(7.4)	技法B1。灰色。硬質。0.5～3.0mm程の砂粒を多く含む。男長凸面縦方向のヘラ削り。
29-20	5-3区 埋戻土	-	-	-	2.3	(2) SC	-	-	-	-	-	a	(6.2)	技法B1か。灰褐色。硬質。0.5～2.0mm程の砂粒を含む。瓦当裏面接合部ナデ。
29-21	5-3区 埋戻土	-	-	-	((14.8)) 2.4	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(2.3)	技法B1?。男瓦面への布目痕が支持粘土等に転写。青灰色(断面にぶい赤褐色)。0.1～0.5mm程の砂粒を含む。瓦当裏面指ナデ。瓦当面自然釉付着、文様が扁平である。
29-22	5-3区 埋戻土	((21.8))	-	-	((17.2))	(2) SC	2.3			1.0	a		(2.7)	灰褐色～にぶい赤褐色。やや硬質。0.1～1.0mm程の砂粒を含む。瓦当裏面指ナデ(一部布目残存)、外縁部脱落とし気味にヘラ削り。
29-23	10区 表土	((17.0))	-	-	((13.0)) 3.8	(1) SC	2.0			1.2	a		(3.2)	技法A?。灰色。やや硬質。小石・雲母・0.5～1.0mm程の砂粒を含む。
29-24	5-3区 埋戻土	((18.5))	((7.5)) B1	-	((15.9)) 4.0	(3) SC	1.3			0.7	a		(3.7)	技法B1。灰色。やや硬質。0.5～2.0mm程の砂粒を含む。瓦当裏面・周縁部ナデ。
29-25	2区 埋戻土	((21.5))	((6.5)) B1	-	((17.3)) 2.7	(1) SA	2.1			0.5	a		(3.0)	技法B1?。青灰色。硬質。0.5～4.0mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面指ナデ・周縁部ヘラ削りか。
29-26	7区西 表土	((18.4))	6.2 B1	1+ (4)	((13.6)) 2.6	((6)) SA	2.4	0.5	a	1.9	0.7	a	(2.7)	技法B1。灰色～灰黄褐色(断面褐色)。硬質。0.1～1.0mm程の砂粒を少量含む。瓦当裏面罫目印き後ナデ。周縁部ヘラナデ。瓦当面自然釉付着。
30-27	14区 表土	-	((6.4)) B1	(1)	((13.4)) 2.4	(1) SA	-	0.9	a	-	0.4	a	(2.4)	暗青灰色(断面赤灰色)。非常に硬質。0.1～0.5mm程の砂粒を少量含む。瓦当裏面罫目印き後ナデ。
30-28	10区 表土	((19.8))	6.1 B1	1+4	((13.2)) 2.6	((6)) SA	3.3	0.8	a	2.5	0.9	a	(2.2)	暗灰黄色(断面灰褐色)。非常に硬質。0.1～1.0mmほどの白色粒を含む。瓦当裏面罫目印き。瓦当表裏面自然釉付着。
30-29	10区西 表土	((18.5))	B1	-	((11.5)) 2.3	(1) SA	3.5	0.7	a	2.8	0.8	a	(4.2)	灰色(断面内部灰褐色)。0.1～1.0mm程の砂粒を含む。瓦当周縁部および裏面接合部ナデ。
30-30	8区西 表土	((18.8))	B1	-	((12.0)) 2.3	((6)) SA	3.4	0.7	a	2.7	0.7	a	(2.2)	青灰色(断面灰褐色)。非常に硬質。0.1～0.5mm程の砂粒を含む。瓦当裏面罫目印き。瓦当周縁部ヘラナデ。
30-31	5-3区 埋戻土	((19.0))	((6.0)) B1	1+ (4)	((16.0)) 3.1	(2) SA	1.5	0.4	a	1.1	0.8	a	(4.5)	技法B1。灰色～青灰色。硬質。0.5～2.0mm程の砂粒を多く含む。周縁部ヘラ削り。瓦当裏面ナデ。

第 15 表 講堂地区出土土器瓦観察表 (3) (図面 27 ~ 32、図版 11)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
30-32	10 区 南西 表土	((20.0))	((6.0)) B1	(2)	((14.8)) 3.1	(2) SA	2.6	0.5	a	2.1	0.6	a	(2.7)	技法 B 1。青灰色～暗青灰色 (断面 灰褐色)。硬質。0.1 ~ 1.0mm 程の 白色粒を少量含む。瓦当裏面ナ デか。外区外縁 (瓦当面) をヘラ削 り。
30-33	3-2 区 旧トシ 埋戻土	((17.6))	-	-	((12.8)) (2.8)	(1) SA	2.4	0.9	a	1.5	1.3	a	(2.7)	技法 A?。灰色～青灰色。やや硬質。 0.5mm 程の砂粒を含む。内区～外 区内縁にかけて范キズあり。瓦当 周縁部臍目叩き。
30-34	10 区 南東 表土	((19.8))	((5.9)) B1	1+ (4)	((14.0)) 3.1	(3) SA	2.9	0.9	a	2.0	0.9	a	(2.8)	赤灰色 (断面褐色)。硬質。0.1 ~ 3.0mm 程の砂粒・赤色スコリア状 物質を含む。瓦当裏面臍目叩き。
30-35	7 区西 表土	((20.0))	- B1	-	((15.4)) 2.8	(1) SA	2.3	0.7	a	1.6	1.2	a	(2.3)	暗灰色～灰色。非常に硬質。0.5 ~ 1.0mm 程の白・黒色粒を含む。瓦 当裏面臍目叩き後ヘラ削り。瓦当 面・周縁部自然釉付着。
31-36	5-3 区 埋戻土	((16.2))	-	-	((14.2)) 3.5	(1) SA	1.0			1.0	a	(3.2)	技法 B 1。黄灰色～灰白色。やや 硬質。白色針状物質・0.1 ~ 1.0mm 程の白・黒色粒を含む。周縁部ナ デ。	
31-37	10 区 南東 表土	((20.2))	- B1	-	((16.4)) 3.1	(2) SA	1.9			0.9	a	(1.8)	灰色～灰黄色。やや硬質。白色針 状物質・0.5 ~ 1.0mm 程の白・黒 色粒を含む。瓦当裏面指頭痕。	
31-38	5-4 区 表土	((17.6))	((7.0)) B1	(1)	((14.8)) 2.2	(2) SA	1.4			1.0	-	(2.2)	灰色。やや硬質。白色針状物質・0.5 ~ 1.0mm 程の白・黒色粒を含む。 瓦当裏面指頭痕およびナデ。	
31-39	12-13 区 表土	((18.4))	((2.8)) B1	1+ (4)	((14.4)) 2.5	(1) SA	2.0			0.8	a	(2.1)	青灰色 (断面内部にぶい褐色)。や や硬質。0.1 ~ 1.0mm 程の砂粒を 含む。瓦当裏面ナデ。	
31-40	7 区東 表土	-	- B1	-	- 3.4	(1) SA	1.3			0.3	a	(2.6)	黒褐色～にぶい赤褐色。非常に硬 質。0.5mm 程の砂粒を少量含む。 瓦当裏面ナデ。瓦当面に自然釉多 量に付着 (淡黄色)。	
31-41	5-1 区 埋戻土	-	- B1?	-	- 3.0	(1) SA	2.2			0.8	a	(1.9)	灰色。硬質。0.1 ~ 1.0mm 程の砂 粒を少量含む。瓦当裏面指頭痕。	
31-42	5-1 区 埋戻土	-	-	-	2.6	(1) SA	1.9			0.7	a	(2.0)	青灰色 (断面褐灰色)。微量の白色 針状物質・雲母・0.5mm 程の砂粒 を含む。瓦当裏面ナデ。	
31-43	10 区 表土	((17.4))	-	-	((11.8)) 3.7	(1) SA	2.8			1.0	a	(5.2)	技法 B 1。暗灰色～灰色。硬質。0.5 ~ 2.0mm 程の砂粒を含む。	
31-44	3-2 区 表土	((17.8))	-	-	((13.8)) 2.7	(1) SA	2.0			0.8	a	(6.5)	技法 B 1。灰色～青灰色。硬質。雲母・ 0.5 ~ 1.0mm 程の砂粒を含む。瓦 当裏面ナデ。男瓦部凸面横方向の ナデ。	
32-45	1 区 表土	-	蓮子 のみ	(1)	- 2.8	(1) SA	2.7			0.8	a	(3.0)	暗青灰色。硬質。雲母・0.5mm 程 の砂粒を含む。瓦当裏面指頭痕お よびナデ。	
32-46	10 区 東 表土	((17.8))	蓮子 のみ	(1)	((13.8)) 2.4	(2) SA	2.0			0.6	a	(4.6)	灰色～暗灰色。硬質。0.1 ~ 0.5mm 程の砂粒を含む。瓦当面に自然釉 付着。瓦当裏面指頭痕。	
32-47	5-3 区 埋戻土	((21.8))	-	-	((17.0)) 3.0	(1) SA	2.4			0.7	a	(3.2)	灰色～暗灰色。硬質。0.1 ~ 1.0mm 程の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ、自 然釉付着。	
32-48	7 区 表土	((22.0))	-	-	((17.0)) 3.0	(2) SA	2.5			0.6	a	(3.1)	灰白色。やや軟質。0.5mm 程の砂 粒を含む。瓦当裏面ナデ。	
32-49	10 区西 表土	((19.0))	-	(1) ?	((14.2)) 2.9	(1) SA	2.4			0.6	a	(2.5)	灰色～青灰色。雲母・0.5 ~ 1.0mm 程の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。	
32-50	12 区 表土	(19.0))	-	-	((16.1)) 3.1	(1) SA	2.9			1.0	a	(3.7)	暗青灰色 (断面内部にぶい褐色)。 硬質。0.5 ~ 1.0mm 程の砂粒を含 む。瓦当裏面ナデ。	
32-51	5-4 区 埋戻土	-	2.9 A1	0	((14.8)) 2.8	(6) SC	-	-	-	-	-	(2.3)	灰褐色 (断面青灰色)。小石・0.5 ~ 1.0mm 程の白・黒色粒・微量の 雲母を含む。瓦当裏面臍目叩き。	
32-52	10 区 表土	((18.2))	3.2 B1	1	((13.4)) 1.9	5 SA	2.4			1.3	a	(3.3)	技法 B 1。にぶい赤褐色。軟質。 赤色スコリア状物質・微量の雲母・ 0.1mm 程の細かな砂粒を含む。瓦 当裏面指頭痕及びナデ。	

第15表 講堂地区出土鍔瓦観察表(4)(図面27~32、図版11)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考		
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁					
								幅	文様	幅	高			文様	
32-53	8区 拡張 表土	((17.8))	-	-	((14.8)) 3.0	(1)	1.5					0	a	(2.5)	技法B1。灰白色(瓦当裏面黄灰色)。軟質。0.5mm程の黒色粒を含む。瓦当裏面ナデ。弁の中央が凹む。

第16表 鐘樓地区出土鍔瓦観察表(図面33、図版15)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
33-1	表土	((19.0))	-	B1	((13.4)) 3.3	(2) SC	2.8	1.2	a	1.6	1.0	a	(2.8)	表面にふい赤褐色。裏面にふい黄褐色。断面暗青灰色~暗紫灰色。硬質。0.1~1mm程の砂粒を含む。瓦当裏面縄目明きのちナデか。
33-2	Dトレ 覆土	((18.6))	-	-	((12.2)) 3.2	(2) SA	3.2	0.3	a	2.9	0.7	a	(5.6)	技法B1。淡黄色(断面橙色)。やや硬質。1mm以下の砂粒・赤色スコリア状物質を多く含む。瓦当周縁部ヘラケズリ・裏面ナデ。

第17表 堂間地区(中門・金堂間)出土鍔瓦観察表(図面33、図版12)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
33-1	表土	-	-	-	2.9	(2) SA	-				0.9	a	(3.0)	技法B1。灰色。硬質。小礫・2mm以下の砂粒を多く含む。瓦当裏面縄目明き。外区外縁が瓦范からはみ出る。
33-2	表土	((14.2))	-	-	((10.6)) (3.1)	(1) SC	1.8	0.3	a	1.5	1.2	a	(8.5)	技法B1?。浅黄色。やや硬質。微量の雲母・0.5mm程の砂粒を含む。男瓦凸面布目部分に斜格子状の刻目あり。
33-3	表土	((18.0))	-	-	((12.4)) 3.4	(1) SC	2.8	0.7	a	2.1	1.2	a	(12.8)	技法B1。灰色。硬質。0.5~2mm程の砂粒を多く含む。男瓦凸面横方向のナデ。瓦当裏面ナデか。
33-4	表土	(17.0)	-	B1	((11.4)) 3.5	(2) SC	2.8	1.1	a	1.7	-	-	(7.1)	技法B1。灰色。硬質。小礫・1mm以下の砂粒を多く含む。男瓦部ケズリ及びナデ。瓦当裏面ナデ。

第18表 堂間地区(金堂・講堂間)出土鍔瓦観察表(1)(図面34~36、図版12)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
34-1	6区 瓦溜	((18.2))	-	-	((12.6)) 3.4	(4) SC	1.3				0.5	a	(3.8)	技法CII?。黄灰色~明黄褐色。やや硬質。小礫・白色針状物質・0.5~1mm程の砂粒を少量含む。瓦当裏面ナデ。接合部~男瓦凸面には布目残存。瓦当周縁部に范破あり。
34-2	3区西 表土	((18.2))	-	-	((15.4)) 4.3	(2) SC	1.4				1.1	a	(5.5)	技法A7。灰色~青黒色。硬質。白色針状物質・2mm以下の砂粒を多く含む。瓦当裏面ナデ。瓦当表裏面に自然釉付着。
34-3	4区 表土	-	-	-	((3.2))	(2) SC	2.5	0.7	a	1.8	1.1	a	(11.1)	技法B1。表面にふい褐色~灰色。断面明黄褐色~灰色。やや硬質。小礫・白色針状物質・1mm程の砂粒を含む。男瓦部凸面縦方向のヘラケズリ。
34-4	6区 攪乱	-	A	-	4.0	(3) SC	1.6				0.4	a	(3.9)	浅黄色。軟質。石英粒・白色針状物質・0.5mm程の砂粒を少量含む。瓦当裏面に布目痕。
34-5	1区 表土	((20.1))	-	-	((17.7)) 4.6	(1) SC	1.2				0.9	a	(4.7)	青灰色。硬質。石英粒・白色針状物質・2mm以下の砂粒を含む。男瓦部凸面縦方向のヘラケズリ。

第18表 堂間地区(金堂・講堂間)出土鍔瓦観察表(2)(図面34~36、図版12)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考		
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 形態	弁数 形態	幅	内縁		外縁					
								幅	文様	幅	高			文様	
34-6	6区 瓦溜	-	-	-	3.7	(2) SC	2.3	0.8	a	1.5	0.9	a	(2.5)	瓦当面灰白色、裏面暗灰黄色、断面 褐色。硬質。多量の白色針状物質、 少量の小礫・0.5~1mm程の砂粒 を含む。瓦当裏面ナデ。	
34-7	3区	((23.0))	((8.2)) A1	(4)	((19.6)) 5.2	(5) SC	1.7	-	-	-	-	1.1	a	(4.4)	技法B I?。表面黒色、断面浅黄 褐色。やや硬質。小礫・雲母・白 色針状物質・赤色スコリア状物質・ 1mm以下の砂粒を含む。瓦当周縁 部及び裏面ナデ。蓮子を蓮弁状に表 現した、統一新羅系の瓦当文様か。
34-8	6区 瓦溜	((16.0))	5.0 A1?	-	2.6	(4) SC	-	-	-	-	-	-	-	(6.3)	技法B II?。灰黄褐色(断面にふい 黄褐色)。硬質。雲母・白色針状物質・ 0.1~1mm程の砂粒を含む。瓦当 裏面ケズリのちナデ。
34-9	6区 瓦溜	((13.4))	-	-	((8.0)) (1.3)	(2) SC	2.7	1.4	b	1.3	(0.5)	-	-	(3.8)	技法B I。灰黄色~青灰色。硬質。 白色針状物質・0.5~1mm程の砂 粒を含む。瓦当周縁部縦方向のヘ ラズリ。瓦当裏面ナデか。南比 企平城宮系。
35-10	3区西	((18.6))	- B1	-	((16.0)) 2.9	(2) SC	2.5	0.3	a	2.2	1.6	a	(5.6)	技法B I。灰色~暗紫灰色。非常 に硬質。0.5~1mm程の砂粒を多 く含む。瓦当面自然軸付着。瓦当裏 面罫目印き。瓦当外周に范磁残る。 弁の輪郭部が曖昧である。	
35-11	6区 攪乱	((18.8))	-	-	((14.8)) 2.7	(2) SA	2.0	-	-	-	-	0.8	a	(7.1)	技法B I。青灰色(男瓦部凹面灰 赤色)。非常に硬質。3mm前後の 砂粒を多量に含む。瓦当裏面指ナ デ。瓦当面自然軸付着。
35-12	3区 表土	((20.1))	7.2 B1	1+ (5)	((16.9)) 3.2	(4) SC	2.1	-	-	-	-	0.6	a	(8.0)	技法B I。灰白色~青灰色。硬質。0.5 ~1mm程の砂粒を多く含む。瓦当 裏面接合部付近指ナデあり。
35-13	3区	((19.2))	5.1 B1	1+ (4)	((14.6)) 3.2	(6) SC	2.3	0.2	a	2.1	1.0	a	(4.0)	技法B I?。灰色~青灰色。硬質。0.1 ~0.5mm程の砂粒を少し含む。瓦 当裏面指ナデ(接合部付近指ナデ)。	
35-14	3区東 表土	((18.0))	- B1	-	((12.4)) 2.6	(2) SA	2.8	0.7	a	2.1	0.9	a	(3.3)	灰色~暗灰色(断面暗赤灰色)。非 常に硬質。0.5~1mm程の砂粒を 少し含む。瓦当外周罫目印き。瓦 当裏面罫目印き後ナデ。瓦当面自 然軸付着。	
35-15	3区 表土	-	((6.0)) B1	(1)	((13.0)) 2.5	(2) SA	-	-	-	-	-	-	-	(2.0)	技法B I。暗青灰色(断面内部暗赤 灰色)。硬質。0.1~0.5mm程の砂 粒を少し含む。瓦当裏面ナデ・自 然軸付着。
35-16	6区 瓦溜	((19.2))	5.7 B1	1+4	((16.8)) 2.5	(3) SA	1.2	-	-	-	-	0.7	a	(2.3)	灰色。やや硬質。小礫・0.5mm程 の砂粒・白色針状物質・微量の雲母 を含む。瓦当裏面ケズリ及びナデ。
36-17	経蔵 地区 表土	((19.6))	- B1	-	((12.8)) 3.4	(2) SA	2.9	-	-	-	-	1.7	a	(5.2)	技法D I。青灰色~暗赤灰色(断 面褐色)。0.5mm程の砂粒を含む。 瓦当裏面ナデ。
36-18	4区 表土	((16.8))	-	-	((15.4)) 3.7	(1) SA	0.7	-	-	-	-	0.2	a	(2.1)	灰色(断面褐色)。やや硬質。0.5mm 程の砂粒・赤色スコリア状物質を 含む。
36-19	1区西	((19.0))	-	-	((16.5)) 2.7	(1) SA	2.3	-	-	-	-	0.5	a	(2.6)	灰色。やや硬質。小礫・0.1~0.5mm 程の砂粒を含む。瓦当裏面に一部 自然軸付着。
36-20	6区 瓦溜	((21.0))	-	-	((17.4)) 3.3	(1) SA	1.8	0.8	a	1.0	0.9	a	(3.1)	青灰色~暗紫灰色(断面暗赤灰色)。 硬質。0.5~1mm程の砂粒を含む。 瓦当裏面指ナデあり。瓦当周縁部 自然軸付着。	
36-21	6区 瓦溜	((19.2))	-	-	((18.6)) 1.6	(1) SA	2.3	-	-	-	-	1.7	a	(5.2)	技法A?。灰色。硬質。0.5~1mm 程の砂粒を多く含む。瓦当面自然 軸付着。瓦当裏面接合部付近ナデ。
36-22	6区 瓦溜	((19.0))	中房輪 郭線なし	(2)	((14.8)) 2.8	(2) SA	2.1	-	-	-	-	0.5	a	(3.0)	灰色。やや硬質。小礫・0.1~ 1mm程の砂粒を含む。瓦当裏面指 ナデあり。
36-23	3区西 表土	19.7	- B1?	1+4?	13.7 2.8	8 SA	3.1	-	-	-	-	1.5	a	(4.3)	灰色。硬質。小礫・0.1~1mm程 の砂粒を含む。瓦当面に中房輪郭 線らしき痕跡がすかに残る。瓦 当裏面指ナデあり。

第18表 堂間地区(金堂・講堂間)出土甕瓦観察表(3)(図面34~36、図版12)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁			
								幅	文様	幅	高 文様		
36-24	経蔵 地区 表土	-	-	-	- (2.8)	(1) SC	-	-	-	-	-	(1.9)	赤褐色(瓦当裏面・断面暗赤灰色)。 硬質。0.1~0.5mm程の砂粒を含む。

第19表 中門地区出土甕瓦観察表(1)(図面37~39、図版12)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考		
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁					
								幅	文様	幅	高 文様				
37-1	表土	((19.0))	-	-	((14.4)) (2.7)	(1) SD	2.3	0.4	a	1.9	0.5	a	(2.3)	技法C1(瓦当裏面布紋り痕)。灰色(断面にふい黄褐色)。やや軟質。雪母・赤色スコリア状物質・2mm以下の砂粒を多く含む。	
37-2	表土	((19.2))	4.6 A1	0	((16.4)) 4.5	(2) SC	1.4	-	-	-	0.8	a	(3.7)	技法C1?, 瓦当裏面男瓦補強粘土剥離面に布目痕あり。灰色。硬質。小窪・白色針状物質・0.5~1mm程の砂粒を含む。瓦当面・瓦当周縁部に自然種付着。	
37-3	表土	(18.4)	5.4 A1	0	((17.8)) 4.6	(3) SC	-	-	-	-	-	-	(8.3)	技法B1。灰色(男瓦部断面にふい赤褐色)。やや硬質。白色針状物質・0.1~0.5mm程の砂粒を多量に含む。瓦当裏面、男瓦接合部ナデ。	
37-4	表土	-	-	-	- 4.7	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(2.0)	技法B1。灰色。やや硬質。白色針状物質・0.1~0.5mm程の砂粒を多量に含む。	
37-5	表土	((18.5))	-	-	((13.5))	(1) SC	2.5	0.8	a	1.7	0.7	a	(1.8)	技法A?, 暗赤灰色~灰褐色。硬質。白色針状物質・0.5mm程の少量の砂粒を含む。	
37-6	旧トレ 埋戻土	((19.8))	((5.4)) B1	(1)	((15.8)) 3.3	(4) SC	((2.5))	-	a	-	-	-	a	(6.9)	技法A。黄灰色。やや軟質。白色針状物質・1mm以下の砂粒を含む。瓦当裏面・男瓦接合部ナデ。
37-7	表土	-	((6.0)) B1	(1)	((16.6)) 3.2	(2) SC	-	-	a	-	-	-	-	(2.4)	灰黄色~暗青灰色。硬質。白色針状物質・0.5~2mm程の砂粒を含む。
37-8	表土	-	6.1 B1	(2)	- (4.3)	(1) SB	-	-	-	-	-	-	-	(1.7)	灰白色。軟質。1mm以下の砂粒を含む。瓦当裏面指圧痕あり。
37-9	表土	-	((5.5)) B1	(1)	((14.6)) 3.7	(2) SC	-	-	a	-	-	-	-	(2.7)	技法B1?。灰黄色。硬質。0.5mm以下の砂粒を少量含む。瓦当裏面ナデ。
37-10	表土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(2.1)	黄灰色~青灰色。やや軟質。1mm以下の砂粒を多く含む。
38-11	表土	-	- B1	-	- 3.4	(2) SA	0.9	-	-	-	0.2	-	-	(2.4)	暗青灰色。硬質。雪母・白色針状物質・0.5~1mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面ナデ。
38-12	表土	((22.0))	-	-	((17.6)) 2.6	(4) SC	2.2	0.6	a	1.6	0.8	2.8	(2.7)	技法B1。灰色~灰黄色。やや硬質。0.5~2mm程の砂粒を多く含む。	
38-13	表土	((21.6))	-	-	((17.2)) 2.6	(4) SC	2.2	0.4	a	1.8	0.8	a	(2.9)	暗灰色。やや硬質。小窪・0.1~1mm程の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ及び指圧痕あり。	
38-14	表土	((21.0))	-	-	((16.0)) 2.5	(3) SC	2.5	0.4	a	2.1	0.6	a	(2.8)	灰色~暗灰色。やや硬質。小窪・0.1~0.5mm程の砂粒を含む。	
38-15	表土	((21.6))	- B1	-	((16.8)) 3.4	(1) SA	2.4	0.9	a	1.5	1.6	a	(3.1)	灰色。硬質。0.1~0.5mm程の砂粒を含む。瓦当裏面罫目叩き、一部ナデ。	
38-16	表土	((18.5))	((5.0)) B1	(1)	((13.5)) 2.8	(1) SA	2.5	0.6	a	1.9	0.9	a	(2.6)	灰色~暗灰色。硬質。0.1~0.5mm程の砂粒を含む。瓦当裏面罫目叩きのちナデ。	
38-17	表土	((20.8))	6.5 B1	1~ (4)	((16.0)) 2.6	(4) SA	2.4	-	-	-	1.8	a	(4.2)	技法B1。褐色~にふい褐色。軟質。0.5~2mm程の砂粒を多く含む。瓦当裏面指圧痕および指ナデ。	
38-18	表土	((17.6))	-	-	((11.6)) 2.3	(1) SA	2.9	-	-	-	0.4	a	(5.2)	技法B1。灰色~青灰色。硬質。0.1~0.5mm程の砂粒を含む。男瓦部凸面罫目叩き・凹面布目痕残存。	

第 19 表 中門地区出土土器互観察表 (2) (図面 37 ~ 39、図版 12)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考		
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁					
								幅	文様	幅	高			文様	
39-19	表土	-	-	-	-	(2) SB	1.9						(2.5)	技法 B 1 ?。黄灰色。やや硬質。0.5 ~ 1mm 程の砂粒を含む。瓦当裏面ケズリ。	
39-20	表土	((18.6))	3.5 B1?	1	-	(3) SA	3.5					0.6	a	(8.2)	技法 D 1 ?。黄灰色 ~ 青灰色。軟質。0.1 ~ 3mm 程の砂粒を多く含む。瓦当裏面指圧痕あり。

第 20 表 (伽藍中樞部区画施設) 区画南辺出土土器互観察表 (図面 39・40、図版 12)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考		
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁					
								幅	文様	幅	高			文様	
39-1	旧トレ SD194 覆土	-	7.5 A1	1+8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(2.4)	灰黄色。やや硬質。0.5mm 程の砂粒を少量含む。瓦当裏面ケズリ。弁の付け根に子葉状の突縁あり。南多摩国系。
39-2	SK 3273 覆土	((18.0))	-	-	-	((11.0)) 1.0	(3) SA	3.5	1.5	b	2.0	0.8	a	(7.8)	技法 C 1 (瓦当裏面布紋り痕あり)。灰色 (断面にふい褐色)。軟質。赤色スコリア状物質・0.1 ~ 1mm 程の砂粒を多く含む。男瓦部凸面ナデ。
39-3	旧トレ 埋戻土	-	-	-	-	((2.0))	(1) SD	2.2	0.9	a	1.3	-	a	(4.0)	技法 C 1 (瓦当裏面布紋り痕あり)。黄灰色 ~ 灰色。軟質。雲母・赤色スコリア状物質・0.1 ~ 1mm 程の砂粒を多く含む。瓦当周縁部格子目印き。
39-4	表土	((19.2))	-	-	-	((15.0)) (3.2)	(2) SC	2.1	0.6	a	1.5	0.8	a	(6.9)	技法 B 1 ?。灰白色。やや軟質。小礫・0.1 ~ 0.5mm 程の砂粒・多量の白色針状物質を含む。男瓦部凸面ケズリ。
39-5	SD194 覆土	((21.0))	-	-	-	((15.4)) 3.7	(2) SC	2.8	0.8	a	2.0	0.8	a	(2.4)	技法 B 1 ?。にふい黄褐色。軟質。1mm 以下の砂粒・多量の白色針状物質を含む。瓦当裏面ナデ ?。
39-6	旧トレ 埋戻土	-	-	-	-	((3.8))	(2) SC	2.3	0.7	a	1.6	0.9	a	(2.9)	技法 B 1 ?。灰白色。軟質。2mm 程の砂粒・多量の白色針状物質を含む。瓦当裏面指圧痕あり。
40-7	SK 3274 覆土	-	-	-	-	4.7	(1) SC	1.2				1.8	a	(2.8)	灰色 ~ 灰褐色。軟質。石英・多量の白色針状物質を含む。瓦当裏面ナデ。
40-8	SD194 覆土	((22.6))	-	-	-	((18.6)) 5.6	(2) SC	2.0				1.5	a	(4.3)	灰白色 ~ 黄灰色。やや軟質。雲母・0.1mm 程の砂粒を少量含む。瓦当裏面ケズリのチナデ。弁尖に稜を有し、弁間に珠文を配する。
40-9	旧トレ 埋戻土	-	((6.5)) B1	(1)	((15.0)) 3.0	(2) SC	-	-	-	-	-	-	a	(2.5)	灰白色 ~ 灰色。やや軟質。2mm 以下の砂粒を多く含む。瓦当裏面ナデ。
40-10	表土	((16.4))	-	-	-	((12.2)) 1.9	(1) SC	2.1				1.5	a	(3.8)	灰白色。やや軟質。0.5mm 以下の砂粒を少量含む。瓦当裏面指圧痕あり。瓦当周縁部格子目印きの後ナデか。
40-11	旧トレ 埋戻土	-	6.7 B1	1+(4)	-	((16.4)) 4.1	(3) SC	-	-	-	-	-	-	(4.1)	技法 B 1 ?。暗灰色 (断面灰褐色)。硬質。小礫・1mm 以下の砂粒を含み、粘土がまだらである。瓦当裏面・男瓦接合部ナデ。瓦当自然剝付着。
40-12	SD194 覆土	((19.5))	-	B1	-	((17.9)) 3.8	(2) SB	0.8				0.4	a	(11.7)	技法 B 1 ?。灰白色 ~ 灰色。やや硬質。0.1 ~ 1mm 程の砂粒を多く含む。瓦当周縁部ヘラケズリ。男瓦部凸面ケズリのチナデ。凹面ナデ。
40-13	表土	((19.0))	-	-	-	((16.0)) 3.5	(1) SC	3.0	0.4	a	2.6	1.8	a	(6.6)	技法 B 1 ?。灰黄褐色 ~ 灰褐色。やや硬質。0.1 ~ 1mm 程の砂粒を多く含む。瓦当裏面罫目印き。男瓦部凸面ケズリ及びナデ。

第 21 表 (伽藍中樞部区画施設) 区画北辺出土證瓦観察表 (図面 41)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
41-1	表土	-	((6.5)) A1	-	- ((2.6))	(3) C	-	-	-	-	-	(5.4)	技法 B II ?。灰黄色。やや軟質。石英・0.1 ~ 0.5mm 程の砂粒を含む。瓦当裏面へラケズリ。	
41-2	表土	((20.8))	-	-	((16.8)) 4.4	(2) SC	2.0	0.7	a	1.3	-	(3.0)	灰色～灰白色。硬質。0.1 ~ 2mm 程の砂粒・白色針状物質を含む。瓦当裏面ケズリ及びナデ。	
41-3	表土	((21.0))	- B1	-	((14.0)) 2.7	(2) SC	3.5	0.5	a	3.0	1.2	a	(3.1)	灰黄色 (断面明黄褐色)。軟質。0.5 ~ 1mm 程の砂粒を多く含む。瓦当裏面罫目叩き。瓦当周縁部に范磁残る。
41-4	表土	((18.0))	((4.9)) B1	1	((12.8)) 1.5	(1) SA	2.6	-	-	-	0.8	a	(2.4)	技法 B I。青灰色～灰黄褐色。やや軟質。3mm 以下の砂粒を多く含む。瓦当裏面指圧痕あり。
41-5	表土	((20.8))	((6.4)) B1	((1)) + (5)	((17.8)) 3.3	(3) SC	1.5	-	-	-	1.6	a	(4.3)	技法 B I。灰色。硬質。石英・0.1 ~ 2mm 程の砂粒を含む。瓦当裏面・男瓦接合部ナデ。

第 22 表 (伽藍中樞部区画施設) 区画北西出土證瓦観察表 (1) (図面 41 ~ 43、図版 13)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
41-1	1区 瓦溜	-	((4.7)) B1	1+4	((11.8)) 2.0	((8)) SC	-	-	-	-	-	-	(2.1)	技法 B I。灰色～暗灰黄色。やや硬質。0.5mm 程の砂粒・白色針状物質を含む。瓦当裏面ナデ。南北企平城宮系。
41-1	2区 瓦溜	-	-	-	- 3.3	(2) SC	2.0	-	a	2.0	0.9	a	(6.0)	技法 B II (接合溝あり)。灰白色。やや軟質。0.1mm 程の砂粒・白色針状物質をわずかに含む。瓦当周縁部ケズリのちナデ。瓦当が厚い(約 5.5cm)。
41-2	2区 瓦溜	((19.0))	-	-	((13.6)) 3.3	(1) SC	2.7	0.4	a	2.3	0.6	a	(2.5)	技法 C I (瓦当裏面布粒り痕)。黒色 (断面黄褐色)。軟質。白色針状物質・1mm 以下の砂粒を多く含む。
42-3	2区 表土	19.0	5.2 B1	1+4	15.2 3.2	8 SC	2.5	0.8	a	1.7	1.1	a	(4.0)	技法 B I。青灰色。硬質。白色針状物質・雲母・0.1 ~ 1mm 程の砂粒を含む。瓦当裏面ケズリのちナデ。
42-4	2区 瓦溜	((19.4))	-	-	((15.0)) 4.0	(2) SC	((2.2))	-	-	-	-	-	(5.7)	灰色～青灰色。硬質。白色針状物質を多く含む。0.5mm 前後の砂粒を少し含む。瓦当面自然剥離着。男瓦接合部ナデ。
42-5	2区 瓦溜	((19.8))	4.6 A1	0	((16.4)) 4.0	8 SC	1.7	-	-	-	1.1	a	(3.1)	技法 B I。青灰色。硬質。小礫・2mm 以下の砂粒、及び多量の白色針状物質を含む。瓦当裏面ケズリ及び指ナデ。
42-6	2区 表土	((16.6))	- B1	(1)	((14.0)) 3.3	(1) SC	1.3	0.3	a	1.0	0.3	a	(2.0)	灰色。やや硬質。小礫・3mm 以下の砂粒を多く含む。瓦当裏面ナデ。外区外縁をもたない。
42-7	2区 SX337	((19.8))	6.5 B1	1+ (5)	((15.4)) 4.1	((6)) SC	2.2	0.4	a	1.8	1.3	a	(5.2)	技法 B I。青灰色。硬質。0.5mm 程の砂粒を多量に含む。瓦当裏面ナデ。中房周囲に罫目が残る。
42-8	2区 瓦溜	-	((6.2)) B1	1+4	-	(1) SC	-	-	-	-	-	-	(2.5)	灰色～黄灰色。硬質。2mm 以下の砂粒を含む。瓦当裏面ケズリのちナデナデ。
42-9	2区 表土	((20.0))	((6.2)) B1	1+ (4)	((15.4))	(3) SC	2.3	0.4	a	1.9	0.9	a	(3.5)	やや硬質。小礫・3mm 以下の砂粒を多く含む。瓦当裏面ナデ。
43-10	2区 SX337	((19.0))	((7.2)) B1	1+4	((16.0))	6 SA	1.5	0.6	a	0.9	0.8	a	(3.7)	技法 B I。暗灰色。硬質。小礫・2mm 以下の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
43-11	2区 表土	-	((4.4)) B1	1+ (4)	((13.6)) 3.3	(3) SC	-	0.7	a	-	-	-	(2.5)	褐色。軟質。小礫・1mm 前後の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
43-12	2区 表土	((20.0))	((4.6)) B1	1+ (4)	13.8 2.7	(2) SA	3.1	0.8	a	2.3	1.0	a	(2.2)	青灰色。やや硬質。0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む。瓦当裏面罫目叩き。

第22表 (伽藍中樞部区画施設) 区画北西出土鍔瓦観察表(2) (図面41~43、図版13)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
43-13	2区 表土	((21.4))	- B1	-	((15.2)) (2.8)	(1) SA	3.1				1.4	a	(9.0)	技法D1。青灰色(断面にふい赤褐色)。0.1~2mm程度の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。

第23表 (伽藍中樞部区画施設) 区画南西出土鍔瓦観察表 (図面43、図版13)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
43-1	表土	((20.8))	-	-	((16.8)) -	(2) SC	2.0				1.2	a	(3.4)	青灰色。硬質。0.5~2mm程度の砂粒を含む。瓦当裏面へラケズリ。
43-2	表土	((21.0))	-	-	((16.8))	(2) SA	2.1				0.7	a	(4.5)	技法B1。灰色。やや硬質。白色針状物質・小塵・0.1~2mm程度の砂粒を含む。

第24表 塔跡1地区出土鍔瓦観察表 (図面44・45)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
44-1	旧トレ 埋戻土	((21.2))	- A1	(1)	((15.4)) 3.3	(2) SC	2.9	0.4	a	2.5	0.8	a	(3.7)	技法C1。灰褐色。やや軟質。0.5~1mm程度の砂粒を含む。
44-2	旧トレ 埋戻土	((17.5))	-	-	- 3.5	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(5.5)	技法B11?。灰白色。やや軟質。0.5mm程度の砂粒を少量含む。瓦当裏面ケズリおよびナデ。蓮弁基部に子葉状の突線あり。
44-3	旧トレ 埋戻土	((17.0))	-	-	((13.4)) 3.5	(1) SC	1.8	0.5	a	1.3	1.0	a	(4.5)	明黄褐色~黒褐色。軟質。0.5~1mm程度の砂粒を少量含む。
44-4	旧トレ 埋戻土	-	((5.0)) B1	1+4	((15.2)) 3.4	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(3.6)	技法B1。灰白色。やや硬質。0.5mm以下の砂粒を少量含む。瓦当裏面ナデ。
44-5	旧トレ 埋戻土	((19.4))	-	-	((15.8)) 3.1	(1) SC	1.8	1.0	a	0.8	0.9	a	(6.0)	技法B1。灰色。硬質。0.5mm以下の砂粒を少量含む。瓦当裏面ナデ。
44-6	旧トレ 埋戻土	-	((5.2)) B1	1+ (4)	- 3.0	(1) SC	-	-	-	-	-	-	(2.4)	技法B1。灰白色。軟質。赤色スコリア状物質を多く含む。男瓦凸面縦方向のヘラケズリ。
44-7	旧トレ 埋戻土	-	-	-	- 3.3	(1)	-	0.7	a	-	-	-	(7.7)	灰色。硬質。0.5mm以下の砂粒を少量含む。瓦当裏面ナデ。
44-8	旧トレ 埋戻土	-	4.8 B1	1	- 3.2	(4) SC	-	-	-	-	-	-	(2.3)	灰白色。軟質。0.1mm程度の砂粒を微量に含む。瓦当裏面同心円状の指ナデ粗あり。
44-9	旧トレ 埋戻土	((20.0))	-	-	((15.4)) 3.1	(1) SC	2.2	0.9	a	1.3	0.6	a	(2.5)	灰色。硬質。0.5mm程度の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
44-10	旧トレ 埋戻土	((18.5))	((5.5)) B1	(2)	((15.5)) 3.1	(4) SC	1.5	0.4	a	1.1	1.0	a	(3.1)	技法B1。灰白色(断面にふい褐色)。軟質。赤色スコリア状物質を多く含む。瓦当裏面ナデ。
45-11	旧トレ 埋戻土	((20.0))	-	-	((16.4)) 2.6	(1) SC	1.8	0.4	a	1.4	1.2	a	(2.7)	灰色。硬質。0.1~0.5mm程度の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
45-12	旧トレ 埋戻土	((18.6))	((5.8)) B1	(1)	((15.6)) 2.8	(3) SC	1.5	0.5	a	1.0	0.8	a	(2.8)	技法B1。軟質。2mm程度の砂粒を少量含む。瓦当裏面ナデ。

第25表 塔跡2地区出土竝瓦観察表(1)(図面45~50、図版13)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
45-1	表土	-	-	-	1.0	(3) SA	-	-	-	-	-	-	(1.3)	暗灰色(断面にぶい黄褐色)。0.5mm前後の砂粒を少量含む。
45-2	攪乱	((18.0))	-	-	((15.6)) 3.1	(2) SC	1.2	-	-	-	-	-	(6.8)	灰色~灰黄色。やや硬質。0.5~2mm程度の砂粒を多く含む。瓦当裏面ナデ。
45-3	攪乱	((18.8))	3.7 A1	0	((15.2)) 4.6	(3) SA	1.8	-	-	-	0.5	a	(5.3)	技法C1。灰白色(断面にぶい赤褐色)。やや軟質。瓦当裏面罫目のち回転ナデ。
45-4	攪乱	((20.5))	-	-	-	(1) SC	-	-	-	-	-	-	(4.7)	技法BII。灰色~暗灰色(断面浅灰色)。0.5mm程度の砂粒を含む。瓦当裏面ヘラケズリ。蓮弁基部に子葉状の突縁あり。
45-5	攪乱	-	-	-	-	(2) SA	-	0.7	a	-	-	-	(5.1)	灰黄褐色。やや硬質。0.5mm程度の砂粒を含む。男瓦部凸面・裏面ヘラケズリ。
45-6	攪乱	((20.0))	-	-	((15.6)) 3.5	(2) SC	2.2	0.7	a	1.5	0.6	a	(4.4)	技法B1。褐灰色~暗褐色(断面にぶい褐色)。やや軟質。0.5mm以下の砂粒を含む。
46-7	表土	-	-	-	2.8	(2) SC	1.7	-	-	-	-	-	(4.0)	褐灰色~暗灰色。硬質。小礫・0.1~1mm程度の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
46-8	表土	-	((3.0)) B1	-	-	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(4.1)	技法B1。灰色。硬質。白色針状物質・小礫・0.5~1mm程度の砂粒を含む。
46-9	表土	-	((5.0)) B1	1+ (5)	2.6	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(3.6)	灰色~黄灰色。硬質。白色針状物質・小礫・2mm以下の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
46-10	攪乱	((20.0))	4.8 B1	1+4	((14.6)) (3.8)	(6) SC	2.7	0.9	a	1.8	1.2	a	(3.2)	灰黄色。硬質。0.1~1mm程度の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
46-11	攪乱	((18.2))	5.1 B1	1+4	((15.2)) 3.2	(6) SC	1.5	0.7	a	0.8	0.6	a	(5.5)	技法BII。青灰色。硬質。0.1~1mm程度の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
46-12	表土	((20.0))	- B1	-	((15.8)) 2.8	(2) SC	2.1	0.7	a	1.4	1.1	a	(4.1)	技法B1。軟質。灰白色。瓦当裏面ナデ。
46-13	攪乱	((20.2))	4.6 B1	(1)	((16.9)) 3.6	(3) SC	3.3	0.6	a	2.7	1.0	a	(3.7)	技法A。褐灰色。硬質。0.5mm以下の砂粒を多く含む。瓦当裏面罫目叩き。
46-14	攪乱	-	((5.0)) B1	(2)	((13.5)) 2.8	(2) SA	-	-	-	-	-	-	(2.5)	技法D17。灰色(断面にぶい黄褐色)。1mm以下の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
47-15	攪乱	-	5.2 B1	(2)	13.7 3.0	(3) SA	-	1.1	a	-	-	-	(3.5)	技法D1。瓦当面灰白色。同裏面・断面褐灰色。硬質。0.1~0.5mm程度の砂粒を含む。瓦当面自然袖付着。同裏面罫目叩き。
47-16	攪乱	-	- B1	-	- 2.9	(2)	-	-	-	-	-	-	(2.7)	灰色。硬質。0.1mm程度の砂粒を多く含む。瓦当裏面罫目叩き。
47-17	攪乱	((18.0))	-	-	((11.2)) (2.5)	(1) SA	3.4	-	-	-	1.1	a	(4.1)	技法D1。青灰色(断面灰褐色)。やや硬質。胎土粗く2mm程度の砂粒を含む。
47-18	攪乱	-	3.8 B1	1	((6.5)) 3.3	(2) SA	-	-	-	-	-	-	(2.8)	技法D17。暗赤褐色。硬質。小礫・0.1mm程度の砂粒を少し含む。瓦当面自然袖付着。同裏面ナデ。
47-19	表土	-	-	-	(2.0)	(1) SA	2.9	-	-	-	1.8	a	(5.4)	技法D17。暗赤褐色。硬質。0.1~1mm程度の砂粒を少し含む。瓦当面自然袖付着。同裏面ナデ。
47-20	表土	((18.0))	-	-	((14.0)) 3.0	(2) SA	2.0	-	-	-	0.7	a	(2.9)	暗灰黄色。硬質。0.1~1mm程度の砂粒を含む。
47-21	攪乱	((21.0))	-	-	((15.0)) 3.6	(1)	3.0	0.6	a	2.4	1.5	a	(9.8)	技法B1。褐灰色。硬質。0.1~1mm程度の砂粒を多く含む。男瓦部凸面罫目叩き。瓦当裏縁ナデ。
47-22	SK 3264	((20.0))	4.4 A1	巴	((14.6)) 1.9	5 SC	2.7	0.9	a	1.8	1.3	a	(3.4)	技法B17。灰色。やや硬質。0.1~2mm程度の砂粒を含む。瓦当裏面指圧痕。接合部付近ナデ。
48-23	SK 3264	((19.8))	4.6 A1	-	((13.6)) 1.9	(3) SC	3.1	1.0	a	2.1	1.5	a	(3.1)	技法B17。青灰色。小礫・0.1~1mm程度の砂粒を含む。瓦当裏面指圧痕およびナデ。

第 25 表 塔跡 2 地区出土土器互観察表 (2) (図面 45 ~ 50、図版 13)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区					全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高			文様
48-24	攪乱	-	((4.0)) A1	-	((14.0)) 2.0	(3) SC	-	0.7	a	-	-	-	(1.7)	灰白色。軟質。瓦当裏面指圧痕およびナデ。
48-25	攪乱	-	-	-	1.9	(1) SC	-	-	-	-	-	-	(1.9)	技法 B 1。灰黄色。軟質。小礫・0.5mm 程度の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
48-26	表土	-	((4.7)) A1	-	2.5	(3) SC	2.0	1.0	a	1.0	-	a	(2.8)	灰黄色(断面橙色)。やや軟質。小礫・1mm 以下の砂粒を少し含む。
48-27	攪乱	((20.8))	4.2 A1	-	((14.4)) 2.4	(1) C	3.2	1.1	a	2.1	1.9	a	(3.4)	灰色。やや軟質。小礫・0.5mm 程度の砂粒を含む。瓦当裏面指圧痕。
48-28	攪乱	((21.3))	-	-	((15.3)) 2.3	(1) SC	3.0	0.9	a	2.1	1.7	a	(13.6)	灰黄色(断面にぶい橙色)。2mm 以下の砂粒を少し含む。瓦当裏面指圧痕およびナデ。
48-29	表土	((21.2))	-	-	((15.0)) 2.4	(2) SC	3.1	0.9	a	2.2	1.7	a	(3.7)	技法 D 1 ?。灰色～灰白色。軟質。0.5mm 前後の砂粒を含む。男瓦部凸面・瓦当裏面接合部付近ナデ。
49-30	表土	-	A1	-	((15.0)) 1.7	(2) SC	-	1.0	a	-	-	-	(2.7)	灰色。やや硬質。0.1 ~ 1mm 程度の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
49-31	攪乱	-	-	-	2.2	(1) SC	-	1.3	a	-	-	-	(3.2)	灰白色(断面にぶい橙色)。軟質。0.5mm 以下の砂粒を少量含む。
49-32	攪乱	((20.8))	4.3 A1	-	((15.4)) 1.9	(3) SC	2.7	0.9	a	1.8	1.5	a	(2.9)	灰白色。やや軟質。1mm 以下の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
49-33	表土	-	4.4 A1	-	((13.8)) 1.9	(4) SC	-	1.0	a	-	-	-	(2.8)	褐灰色。硬質。2mm 以下の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
49-34	攪乱	-	4.7 A1	-	2.3	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(2.1)	灰白色。軟質。2mm 以下の砂粒を少量含む。
49-35	攪乱	-	4.5 A1	-	2.2	(3) SC	-	-	-	-	-	-	(2.5)	褐灰色(断面にぶい橙色)。やや軟質。小礫・2mm 以下の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
49-36	表土	-	4.3 A1	-	15.4 2.0	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(2.2)	黄灰色(断面にぶい橙色)。軟質。小礫・2mm 以下の砂粒を少量含む。
49-37	表土	-	A1	-	2.2	(1) SC	-	1.1	a	-	-	a	(2.0)	灰白色。軟質。1mm 以下の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
49-38	表土	((19.4))	-	-	((15.2)) (1.7)	(1) SC	2.1	1.0	a	1.1	1.5	a	(2.9)	灰白色。軟質。1mm 以下の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
49-39	攪乱	-	-	-	2.0	(2) SC	-	-	a	-	-	-	(2.0)	灰白色。軟質。0.1mm 程度の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
50-40	表土	-	A1	-	2.1	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(2.0)	褐灰色。やや硬質。0.1 ~ 0.5mm 程度の砂粒を含む。瓦当裏面指圧痕、接合部付近ナデ。
50-41	攪乱	-	((4.6))	-	((13.6)) 1.9	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(1.8)	灰黄褐色～灰色。硬質。0.1mm 程度の砂粒を含む。瓦当裏面指圧痕。
50-42	攪乱	-	-	-	((2.0))	(2) SC	3.0	1.0	a	2.0	-	-	(1.9)	灰白色。軟質。瓦当裏面指圧痕。
50-43	表土	-	((4.0)) A1	-	2.3	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(1.8)	灰白色。軟質。2mm 以下の砂粒を微量に含む。
50-44	表土	-	A1	-	1.7	(1) SC	-	-	-	-	-	-	(1.9)	灰色～褐灰色。硬質。0.5mm 前後の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
50-45	攪乱	-	-	-	-	(1) SC	2.9	1.0	a	1.9	1.7	a	(3.7)	褐灰色(断面にぶい橙色)。0.5mm 以下の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
50-46	攪乱	-	A1	-	1.6	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(2.4)	灰色。硬質。小礫・0.5mm 以下の砂粒を含む。瓦当裏面指圧痕。
50-47	表土	((18.0))	-	-	((11.0))	-	3.5	1.0	a	2.5	1.5	a	(4.7)	灰白色。軟質。瓦当裏面ナデ。
50-48	表土	-	-	-	2.1	(1) SC	-	-	-	-	-	-	(1.3)	褐灰色。硬質。1mm 以下の砂粒を含む。瓦当裏面罫目付き。
50-49	表土	((19.0))	-	-	((13.0)) (1.8)	(1) SC	3.0	1.0	a	2.0	1.8	a	(3.3)	褐灰色。硬質。0.1 ~ 0.5mm 以下の砂粒を含む。瓦当裏面罫目付き。
50-50	攪乱	((20.2))	3.7 A1	-	-	-	3.4	0.8	a	2.6	-	-	(2.3)	褐灰色。硬質。0.1 ~ 0.5mm 程度の砂粒を含む。瓦当裏面罫目付き。

第 26 表 塔跡 2 周辺地区出土土器瓦観察表 (図面 51、図版 13)

図面 図版	出土 位置	直径	内区				外区						全長	備考	
			中房径 形態	蓮子 数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁					
								幅	文様	幅	高	文様			
51-1	旧トレ 埋戻土	-	-	-	-	(2) SC	1.7	0.4	a	1.3	0.3	a	(6.0)	浅黄色。軟質。0.5mm 以下の黒色 粒子・黒雲母・赤色スコリア状物 質を含む。	
51-2	旧トレ 埋戻土	-	-	-	3.6	(2) SC	1.8	0.3	a	1.5	0.5	a	(2.9)	にぶい黄褐色。軟質。2mm 以下の 砂粒・赤色スコリア状物質を含む。 蓮弁基部に子葉状の突起あり。	
51-3	旧トレ 埋戻土	-	5.3 A1	1+6	-	(2) SC	-	-	-	-	-	-	(2.8)	灰白色。やや軟質。多摩ニューター ウン No.513 道跡 B 類。	
51-4	旧トレ 埋戻土	-	B1	(6)	-	-	-	-	-	-	-	-	(4.2)	灰色。2mm 以下の砂粒を多く含む。 瓦当裏面ケズリおよびナデ。瓦谷 戸室跡群Ⅷ類か。	
51-5	表土	((19.8))	-	-	((16.8)) 4.6	(2) SC	1.5					0.6	a	(6.9)	明褐色。軟質。白色針状物質・0.5mm 前後の砂粒を含む。
51-6	旧トレ 埋戻土	((20.8))	-	-	15.8 (4.6)	(2) SC	2.5					1.0	a	(4.1)	暗青灰色。やや硬質。白色針状物質・ 2mm 以下の砂粒を含む。瓦当面自 然釉付着。同裏面ナデ。
51-7	旧トレ 埋戻土	-	3.3 B1	(1)	2.1	(2) SC	-	-	-	-	-	-	-	(2.1)	青灰色。硬質。白色針状物質・0.5mm 以下の砂粒を含む。瓦当裏面同心 円状の指ナデ痕。
51-8	旧トレ 埋戻土	((20.5))	-	-	((13.5)) (2.1)	(1) SA	3.5	1.8	b	1.7	0.7	a	(4.1)	浅黄色。やや軟質。瓦当周縁ヘラ ケズリ。	
51-9	旧トレ 埋戻土	-	((5.1)) B1	1+(4)	-	(2) SC	-	-	-	-	-	-	-	(2.5)	にぶい黄褐色。やや硬質。0.5mm 以下の砂粒を含む。
51-10	旧トレ 埋戻土	((20.1))	((5.5)) B1	-	((15.1)) (3.6)	(1) SC	2.3	1.0	a	1.3	-	a	(3.5)	技法 D 1 ?。灰色～灰白色。やや硬 質。0.5mm 以下の砂粒を含む。	
51-11	旧トレ 埋戻土	((19.8))	-	-	((14.2)) 3.6	(1) SC	2.8	0.8	a	2.0	1.0	a	(4.4)	灰色。硬質。0.5mm 程度の砂粒を 含む。瓦当裏面ナデ。	
51-12	旧トレ 埋戻土	((20.5))	-	-	16.7 1.8	(4) SA	1.9					0.5	a	(3.4)	暗灰色。2mm 以下の砂粒を多く含 む。瓦当裏面ケズリおよびナデ。
51-13	攪乱	-	-	-	-	(2) SC	1.8					0.5	a	(2.6)	褐灰色。やや硬質。0.5mm 以下の 砂粒を含む。瓦当裏面自然釉付着。

第 27 表 金堂地区出土宇瓦観察表 (1) (図面 52 ~ 59、図版 14)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
52-1	3区	(5.2) -	(3.5)		3G							0.5	(9.8)	顎 B1-a。灰色。やや硬質。白色針状物質・1mm 以下の砂粒を含む。
52-2	3区	(6.8) (8.4)	3.6		3G							0.5	(6.6)	技法 A。顎 B1-a。灰黄色。やや軟質。0.5 ~ 1mm 程の白色砂粒を含む。
52-3	7区	(3.4) (4.6)	6.8	4.3	HK	1.5	a	1.0	a	1.6	a	0.2	(7.1)	技法 D ?。顎 B1-a。灰色 ~ 暗灰色。硬質。石英粒・雲母・2mm 以下の砂粒を含む。自然軸付着。
52-4	7・8区	(6.3) (8.2)	7.0	4.8	HK	1.3	a	0.9	a	1.2	a	0.3	(24.0)	技法 D ?。顎 B1-a。灰色 ~ 暗灰色。硬質。小礫 (石英)・白色針状物質・雲母・2mm 以下の砂粒を含む。自然軸付着。
52-5 図版 14	7区	(5.7) (5.2)	5.2	4.5	HK	0.5	a	0.2	a	0.8	a	0.3	(14.8)	技法 D。顎 C2-d。灰色 ~ 暗灰色。硬質。小礫・白色針状物質・0.1 ~ 2mm 程の砂粒を含む。瓦当面に自然種多量に付着。
52-6	17区	(7.6) -	5.1	3.4	HK	0.9	a	0.8	a	-	-	0.2	(9.7)	技法 D。顎 B1-a。褐色灰色 ~ 暗青灰色。硬質。0.5 ~ 2mm 程の白色砂粒を多く含む。
52-7	6区 表土	(5.0) -	(3.2)	(2.3)	HK	0.9	a	-	-	(0.8)	a	0.3	(10.7)	技法 D。顎 B。暗灰色。非常に硬質。小礫・0.1 ~ 1mm 程の砂粒を含む。
53-8	5区 表土	(3.4) (4.9)	4.9	3.5	HK	0.7	a	0.7	a	0.6	a	0.2	(5.2)	技法 D?。顎 B1。灰色 ~ 暗灰色。硬質。小礫・白色針状物質・0.5mm 程の砂粒を含む。瓦当面自然軸付着。
53-9 図版 14	8区	(12.1) (12.3)	4.9	3.5	HK	0.5	a	0.9	a	0.6	a	0.1	(12.7)	技法 D?。顎 B1-b。灰色 ~ 暗灰色。やや硬質。小礫・0.5mm 程の砂粒を含む。凸面に赤色顔料付着。瓦当面に自然軸付着。
53-10	11区 表土	(6.3) (13.3)	(5.0)	(4.2)	HK	-	a	0.8	a	0.8	a	0.1	(9.6)	技法 B。顎 B2-a。灰色。硬質。小礫・2mm 以下の砂粒を多く含む。
53-11 図版 14	5区	(12.1) (12.8)	4.3	3.9	HK	0.4	a	-	a	0.8	a	0.2	(10.3)	技法 B?。顎 B1-a。灰色 ~ 暗青灰色。硬質。白色針状物質・1mm 程の砂粒を多く含む。
53-12	8区	(8.2) (8.3)	(4.7)	3.8	HK	0.4	a	0.5	a	0.5	a	0.2	(9.1)	技法 B2?。顎 B2-a。灰色 ~ 暗灰色。硬質。0.1 ~ 2mm 程の砂粒を含む。
53-13	6区	(9.2) (15.1)	6.0	3.9	HK	1.0	a	1.1	a	1.7	a	0.2	(8.4)	技法 D。顎 C2-a。灰色。硬質。0.1 ~ 2mm 程の砂粒を少し含む。全体に自然軸付着。
53-14 図版 14	9区	(15.4) -	(4.7)	(3.9)	HK	0.8	a	-	a	1.0	a	0.4	(15.3)	技法 D。顎 C2-a。灰色 ~ 暗灰色。やや軟質。0.5mm 程の砂粒を含む。凸面に押印「多 (文字瓦 No 8)・押印「多 (文字瓦 No 7) (瓦谷戸窯跡群 3-B 型) 凸面に赤色顔料付着。
54-15	7区東	(7.8)	(3.7)	(2.6)	HK	-	-	1.1	a	-	-	0.1	(14.4)	技法 C1-a。顎 C1-d。灰色 (剥離面: 灰白色)。軟質。0.1 ~ 1mm 程の砂粒を含む。瓦当凸面に赤色顔料付着。
54-16 図版 14	30区	(11.3) (3.3)	(4.8)	(4.1)	HK	-	a	-	-	2.5	a	0.2	(11.5)	技法 D (女瓦部技法 II 2-B?)。顎 A-a。暗灰色。硬質。小礫・0.1 ~ 2mm 程の砂粒を少し含む。
54-17 図版 14	7区東	(25.2) (30.1)	6.3	2.8	KK	1.4	b	6.3	b	1.7	a	0.3	(32.1)	顎 A-d。灰白色 ~ 淡黄色。やや軟質。石英・2mm 以下の砂粒を含む。凸面赤色顔料付着。
55-18	7区	(24.7) (22.6)	6.5	2.8	KK	2.0	b	1.7	b	1.9	a	0.3	(16.2)	顎 A-d。灰色 ~ 浅黄色。硬質。0.1 ~ 2mm 程の砂粒を含む。凸面赤色顔料付着。
55-19	7区東	(10.7) (13.1)	4.1	2.3	KK	1.2	b	0.5	b	-	-	0.2	(14.7)	技法 D。顎 A-a。灰黄褐色。やや軟質。0.1 ~ 2mm 程の砂粒を含む。女瓦部凹面に靨位の指ナデ。北端縁へラケズリ。凸面に赤色顔料付着。
55-20	9区	(11.1) (8.2)	4.9	2.4	KK	0.9	-	1.6	a	-	-	0.1	(10.8)	技法 D?。顎 C1-a。瓦当面灰白色、同凸面・女瓦部凹面灰白色。硬質。0.1mm 程の砂粒を多く含む。
55-21	9区	(13.8) (6.3)	5.7	3.0	KK	1.5	b	1.2	b	2.7	a?	0.3	(13.1)	技法 D。顎 C2。青灰色。硬質。小礫・0.5mm 程の砂粒を含む。凹面・凹面・側端縁へラケズリ。凸面曬目肌、赤色顔料付着。

第 27 表 金堂地区出土宇瓦観察表 (2) (図面 52 ~ 59、図版 14)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区				外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様					
						厚さ	文様	厚さ	文様							
55-22	30 区 瓦溜	(5.2) (8.5) -	(4.6)	(3.3)	KK	-	b	1.3	-	4.4	a	0.1	(9.5)	技法 D、顎 B2-a、灰色 (断面中心部：に ぶい赤褐色)。硬質。0.5mm 以下の砂粒 を含む。		
56-23	7 区東	(10.3) (11.9) -	5.0	3.0	KK	0.7	a	1.3	a	2.3	a	0.2	(13.4)	技法 D、顎 C2-a、暗褐色。硬質。0.5 ~ 2mm 程度の砂粒を含む。凹・凸面に自然 釉付着。		
56-24	7 区東	(8.9) (11.7) -	5.0	2.9	KK	1.0	b	1.1	b	2.3	a	0.2	(12.8)	技法 D7、顎 C2-a、灰色~暗灰色。硬質。 0.1mm 程の細砂粒を含む。女瓦凹面指ナ デ、広端部へラ削り。凸面に赤色顔料付着。		
56-25 図版 14	7 区	(23.8) (29.3) -	5.3	2.8	KK	1.3	a	1.2	a	1.8	a	0.2	(23.0)	顎 B1-c、暗灰黄色。硬質。小礫・2mm 以下の砂粒・赤色スコリア状物質を含む。 瓦当裏面に赤色顔料付着。		
56-26	24 区	(13.3) (12.2) -	4.6	3.0	KK	0.8	a	0.8	a	1.5	a	0.1	(8.5)	技法 D7、顎 C1-d、黄灰色~灰色。硬質。0.1 ~ 0.5mm 程の砂粒を含む。		
56-27	7 区東	(5.8) (4.9) -	4.9	3.0	KK	0.8	a	1.1	a	-	-	0.2	(4.0)	青灰色 (断面内部：赤灰色)。硬質。小礫・ 0.5mm 以下の砂粒を含む。		
57-28 図版 14	7 区東	27.6 28.9 5.2	5.5	2.8	KK	1.2	a	1.5	a	3.0	a	0.2	(16.9)	顎 B2-c、女瓦部凹面：灰黄色、同凸面： 浅黄色、瓦当面：赤褐色。硬質。2mm 以 下の砂粒を含む。女瓦部凸面縦位、瓦当 凸面横位の罫目印き (境部ナデ、赤色顔料 付着)。		
57-29	5 区 表土	(3.5) (4.4) -	4.4	2.7	KK	1.3	a	0.4	-	-	-	0.1	(10.2)	技法 D、顎 B2-c、灰赤色。硬質。0.1 ~ 1mm 程の砂粒を含む。瓦当凸面に横位の、 女瓦部凸面に縦位の罫目印き (境部ナデ)。		
57-30	6 区 表土	(5.9) (3.1) -	5.7	2.8	O	2.3	a	0.6	a	1.8	a	0.1	(3.8)	暗灰色。硬質。小礫・0.1 ~ 0.5mm 程の 砂粒を含む。		
57-31	30 区 瓦溜	(5.5) -	(3.3)	(2.5)	O	0.8	a	-	-	-	-	0.2	(3.4)	灰色 (断面：にぶい褐色)。やや硬質。0.1 ~ 2mm 程の砂粒・赤色スコリア状物質を 含む。		
57-32	7 区東	(6.2) -	(2.5)	(2.5)	KK	-	-	0	-	(1.1)	a	0.1	(3.6)	黄灰色。やや硬質。0.5 ~ 3mm 程の砂粒 を含む。		
57-33 図版 14	8 区	(7.3) (12.2) -	4.8	2.3	O	2.3	a	-	-	2.0	a	0.2	(10.2)	技法 D7、顎 C2-b、青灰色~明黄褐色。軟 質。小礫・2mm 程の砂粒・赤色スコリア 状物質を含む。		
57-34 図版 14	19 区	(4.8) (6.3) -	3.9	3.0	O	-	-	0.9	a	-	-	0.2	(12.3)	顎 C2-b、灰赤色。やや硬質。小礫・0.5 ~ 3mm 程の砂粒を含む。		
57-35	8 区	(7.6) (10.3) -	(4.2)	(2.7)	O	1.5	a	-	-	1.5	a	0.2	(8.1)	顎 C2-b、橙色~にぶい褐色。軟質。小礫・ 0.5 ~ 4mm 程の砂粒を含む。		
58-36 図版 14	26 区 表土	27.9 31.1 5.2	5.2	3.2	H	1.0	a	1.0	a	1.3	a	0.2	-	顎 B2-c、灰黄色~青灰色 (断面：にぶい 赤褐色)。0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む。 女瓦部凹面に布目・一部指ナデ、中央に 横骨「中」(文字番号 244)。凸面縦位の 罫目印き。		
59-37	7 区東	(6.5) (7.0) -	4.3	3.6	H	0.2	a	0.5	a	-	-	0.1	(7.6)	顎 B1-c、灰色~暗灰色。硬質。0.1 ~ 1mm 程度の白色砂粒を含む。瓦当面・同 凸面・側端部に自然釉付着。		
59-38 図版 14	5 区	(8.8) -	(2.9)	(1.4)	H	-	a	1.5	-	-	-	0.1	(6.2)	顎 B2-c、青灰色 (剥離面：赤灰色)。硬質。 0.1 ~ 1mm 程度の白色砂粒を含む。		
59-39	21 区	(5.8) -	(1.5)	-	H	-	-	-	-	-	-	-	(7.2)	顎 B、青灰色。やや硬質。0.1mm 程度の 細砂粒をわずかに含む。瓦当面を罫目印 きの上、へら書きで施文。		
59-40 図版 14	22 区西	(16.7) (17.9) -	3.9	-	M	-	-	-	-	-	-	-	(9.1)	顎 C1-a、灰オリーブ色 (断面内部：にぶ い褐色)。軟質。0.1mm 程度の細砂粒を わずかに含む。瓦当面指ナデ。瓦当凸面 赤色顔料付着。		
59-41	8 区	(17.3) (18.2) -	4.2	-	M	-	-	-	-	-	-	-	(10.0)	顎 A-b、青灰色~暗灰色。硬質。小礫・ 2mm 以下の砂粒を含む。瓦当凸面に赤色 顔料付着。瓦当面指ナデ。		

第27表 金堂地区出土宇瓦観察表(3)(図面52~59、図版14)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
59-42	8区 表土	- (9.1)	2.9		M								(12.2)	顎A-b, 浅黄色(断面:褐色)。非常に軟質。0.1~2mm程度の砂粒・赤色スコリア状物質を少し含む。瓦当裏面~女瓦部凸面にかけて赤色顔料付着。
59-43	9区 表土	(6.4) -	3.1		M								(12.2)	顎A-b, 灰褐色~暗青灰色(断面:にぶい赤褐色)。硬質。0.1~1mm程度の砂粒をわずかに含む。瓦当凸面~女瓦部凸面に赤色顔料付着。
59-44 図版14	10区	(7.6) (2.8)	(3.8)	2.7	M	0.6							(15.6)	顎A-b, 灰白色。軟質。小礫・0.1~1mm程度の砂粒をわずかに含む。瓦当裏面に赤色顔料付着。瓦当面指ナデ。

第28表 講堂地区出土宇瓦観察表(1)(図面60~66、図版15)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考	
				厚さ	文様	上		下		幅	文様				
						厚さ	文様	厚さ	文様						
60-1 図版15	10区東 表土	(5.5) (1.9)	3.0		3G								0.4	(8.0)	顎B1-a, 暗青灰色(断面:にぶい黄褐色)。軟質。1mm以下の砂粒・雲母・赤色スコリア状物質を含む。
60-2	10区 表土	(14.3) -	(1.8)		G					0.8	a		0.6	(17.9)	顎B1-a, 青灰色。やや硬質。白色針状物質・0.1~2mm程度の砂粒を含む。女瓦部凹面横位のヘラケズリナデ。凸面縦位のヘラケズリ。
60-3 図版15	5-3区 南 表土	(9.3) -	4.8		3G								0.6	(10.1)	灰色~灰黄色。やや硬質。白色針状物質・2mm以下の砂粒を多く含む。顎刺離面に糸切痕あり。
60-4	5-4区 表土	(9.4) -	(2.8)		G								0.6	(5.0)	顎B2-a, 青灰色。やや硬質。0.5mm程度の砂粒を多く含む。
60-5 図版15	1区 表土	(11.2) -	(2.2)	(1.4)	HK	0.8	a	-	-	0.6	a		0.2	(19.0)	顎C2?。青灰色~暗青灰色。硬質。小礫・0.1~2mm程度の砂粒を多く含む。広端部凹面ヘラケズリ、女瓦部凹面一部ナデ。瓦当面范による「多」(文字瓦№348)。谷野瓦空。
60-6	7区西 攪乱	(2.5) -	(2.9)	(2.1)	T	0.4	a	-	-	-	-		0.2	(12.6)	顎B, 灰色。硬質。白色針状物質・小礫・0.1~2mm程度の砂粒を含む。女瓦凸面瓦当境界部を指ナデ。
60-7 図版15	9区 表土	(10.8) (13.6)	4.4	(3.8)	T	-	-	0.6	a	0.7	a		0.1	(8.5)	顎B2-a, 暗青灰色。硬質。白色針状物質・0.1~0.5mm程度の砂粒を含む。瓦当凸面ヘラ削り、女瓦部凸面指ナデ。文様上部(凹面側)の一部が調整により切り取られる。
60-8	7区西 攪乱	(2.4) -	(3.3)	(2.4)	T	0.7	a	-	-	-	-		0.2	(12.0)	技法D, 顎B, 灰黄色褐色(断面:にぶい褐色)。軟質。白色針状物質・0.5mm程度の砂粒を含む。女瓦部技法Ⅱ1-B?。
61-9	13区 表土	(14.8) (16.8)	5.5	3.7	HK	0.9	a	0.9	a	0.6	a		0.2	(13.4)	技法D, 顎B1-a, 明褐色。やや軟質。白色針状物質・2mm以下の砂粒を多く含む。女瓦部技法Ⅱ1-B, 凹面広端縁ヘラ削り。瓦当凸面に赤色顔料付着。
61-10	埋灰土	(5.4) (2.4)	5.2	3.4	HK	1.1	a	0.7	a	-	-		0.3	(8.4)	技法D, 顎B1-a?, 青灰色。やや軟質。微量の白色針状物質・多量の礫・2mm以下の砂粒を含む。
61-11	9区西 表土	(15.6) (14.2)	4.7	3.6	HK	0.4	a	3.6	a	0.8	a		0.4	(10.8)	技法D, 顎B1-a, 灰色。やや軟質。白色針状物質・礫・2mm以下の砂粒を含む。女瓦部技法Ⅱ1-B, 凹面広端縁ヘラ削り。
61-12	5-2区 表土	(6.3) (1.9)	4.7	4.2	HK	0.8	a	0.4	a	0.8	a		0.3	(6.4)	技法D, 顎B1-a, にぶい黄色。軟質。白色針状物質・2mm以下の砂粒を含む。
61-13	8区 拡張 表土	(10.5) -	(3.1)	(2.7)	HK	0.4	a	-	-	1.0	a?		0.3	(7.6)	顎B2-a, 黄灰色。やや硬質。白色針状物質・2mm以下の砂粒を含む。
61-14	5-2区	- -	(3.6)	(3.6)	HK	-	-	-	-	-	-		0.2	(6.7)	顎B1-d, 褐色。硬質。礫・2mm以下の砂粒を多く含む。女瓦部凹面に自然釉付着。

第28表 講堂地区出土宇瓦観察表(2)(図面60~66、図版15)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区				外区				脛区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様					
						厚さ	文様	厚さ	文様							
61-15	13区 表土	(11.3) -	(2.6)	-	HK	0.6	a	-	-	0.7	a	0.2	(16.7)	技法D、顎B1 ₇ 。青灰色。やや硬質。白色針状物質・礫・2mm以下の砂粒を多く含む。女瓦部技法Ⅱ1-A1。		
62-16	6区東 表土	(5.2) -	(3.0)	(2.3)	HK	0.7	a	-	-	-	-	0.1	(20.5)	技法D、顎A。暗青灰色。やや硬質。礫・2mm以下の砂粒を多く含む。女瓦部技法Ⅱ1-B、凹面広端縁を幅広くヘラケズリ。		
62-17	7区東 表土	(9.6) (6.3)	5.9	4.2	HK	0.9	a	0.7	a	-	-	0.1	(6.7)	技法D。黒褐色にぶい褐色。やや軟質。0.1~1mm程度の砂粒を含む。女瓦部凹面広端縁ヘラケズリ・側端縁幅広く面取り(約2.5cm)。		
62-18 図版15	10区西 表土	(4.7) (9.6)	5.1	3.9	HK	0.6	a	0.6	a	-	-	0.1	(9.4)	技法D、顎C1-a。黄灰色。やや軟質。0.1~2mm程度の砂粒を含む。女瓦部凸面に赤色顔料付着。		
62-19 図版15	8区西 表土	(2.4) (3.6)	5.6	3.4	HK?	1.2	a	0.9	a	1.1	a	0.1	(12.0)	技法D、顎A-a。黄灰色~灰白色。やや軟質。0.1~2mm程度の砂粒を含む。女瓦部凹面広・側端縁ヘラケズリ。側端縁にヘラ書「高」(文字瓦№443)。		
62-20 図版15	10区 南東 表土	(7.9) (9.5)	4.4	3.1	KK	0.5	a	0.8	a	1.1	a	0.2	(5.4)	顎B1。灰白色。やや軟質。白色針状物質・0.1~2mm程度の砂粒を含む。女瓦部凹面広端縁指ナデ。		
62-21 図版15	10区東 表土	(8.4) (2.8)	(6.0)	4.0	KK	0.7	b	(1.2)	b	2.4	b	0.1	(8.9)	顎C1-d。灰色。硬質。0.1~2mm程度の砂粒を多く含む。		
62-22	3-2区 表土	(4.6) -	(2.5)	(1.3)	KK	1.2	b	-	-	-	-	0.1	(22.6)	技法D、顎C2。灰色。硬質。0.1~2mm程度の砂粒を多く含む。女瓦部凹面に指ナデ痕、広・側端縁面取り。		
63-23	6区東 表土	27.1 28.7 3.3	5.4	3.7	KK	0.8	b	1.0	b	2.6	a	0.2	(18.7)	顎C2-a。黄灰色。硬質。0.5mm程度の砂粒を含む。女瓦部技法Ⅱ1-B、凹面広・側端縁ヘラケズリ。		
63-24	1・6区 表土	(12.8) (12.3)	4.0	3.4	KK	-	a	0.6	a	-	-	0.1	(12.3)	技法D?。顎A-c。暗青灰色。硬質。0.1~2mm程度の砂粒を含む。女瓦部凹面広・側端縁ヘラケズリ。瓦凸面に赤色顔料付着。		
63-25	6区東 表土	(7.2) -	(3.4)	(2.6)	KK	(0.8)	a	-	-	0.9	a	0.2	(12.7)	技法D、顎B。オリブ灰色~オリブ褐色(断面:明褐色)。やや硬質。礫・0.1~0.5mm程度の砂粒を含む。女瓦部技法Ⅱ1-A1、凹面広端縁ヘラケズリ。		
63-26	6区東 表土	(7.0) (8.1)	(6.0)	3.0	KK	1.5	a	1.5	a	-	-	0.1	(17.0)	技法D、顎B3-a。青灰色(断面:ぶい赤褐色)。硬質。0.1~1mm程度の砂粒を含む。女瓦部凹面広・側端縁ヘラケズリ。瓦当裏面~女瓦部に赤色顔料付着。		
63-27	5-2区	(4.1) (4.5)	6.6	2.7	KK?	2.0	a	1.9	a	0.9	a	0.2	(5.9)	技法D、顎B2-c。灰オリブ色。硬質。0.1~1mm程度の砂粒を多く含む。瓦当面・凹面に自然釉付着。		
64-28	8区西 表土	(8.2) (3.2)	((6.8))	3.8	KK	1.3	a	1.7	-	-	-	0.1	(5.5)	技法D、顎C1-b。褐色(断面:ぶい赤褐色)。やや軟質。0.1mm程度の細砂粒をやや多量に含む。		
64-29	10区東 表土	(3.5) (5.4)	(5.5)	2.6	KK	-	a	1.8	a	-	-	0.2	(7.6)	技法D、灰色。硬質。礫・0.1~2mm程度の砂粒を含む。瓦当面自然釉付着。凹面広端縁ヘラケズリ。瓦当凸面に赤色顔料付着。		
64-30	7区東 表土	(6.1) -	(3.9)	(2.7)	KK	1.2	a	-	-	-	-	0.3	(10.5)	技法D、顎B2-c。赤灰色。硬質。礫・0.1~2mm程度の砂粒を含む。瓦当裏面~女瓦部指ナデ。凹面広端縁ヘラケズリ。		
64-31 図版15	5-2区 埋戻土	(12.3) (15.9)	3.6	2.1	KK	0.6	a	0.9	a	1.9	a	0.1	(11.7)	技法D、顎B2-c。灰色。硬質。0.1~2mm程度の砂粒を多く含む。瓦当裏面~女瓦部指ナデ。		
64-32	5-3区 埋戻土	(9.2) (10.6)	4.7	2.7	KK	0.9	a	1.1	a	3.5	a	0.3	(6.1)	技法D、顎B1-c。暗青灰色。硬質。0.5~2mm程度の砂粒を多く含む。瓦当面に自然釉付着。		
64-33	6区東 表土	(8.6) -	(2.7)	(1.9)	KK	0.8	a	-	-	1.6	a	0.1	(11.7)	技法D、顎B。暗灰色~灰白色。硬質。小礫・0.1~2mm程度の砂粒を含む。		
64-34 図版15	8区西 表土	(7.2) (6.4)	4.6	4.0	KK	-	-	0.6	a	0.9	a	0.1	(12.2)	技法D、顎B2-c。暗灰色。硬質。小礫・2mm以下の砂粒を多く含む。瓦当面に自然釉付着。		

第 28 表 講堂地区出土宇瓦観察表 (3) (図面 60 ~ 66、図版 15)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
64-35	1区 旧トレ 埋戻土	(5.0) (2.9) -	4.1	3.0	O	0.5	a	0.6	a	-	-	0.4	(8.6)	技法 D7。顎 A-b、黒褐色～にぶい黄褐色。軟質。小礫・2mm 以下の砂粒を多く含む。
64-36	10区 南東 表土	(5.8) - -	(3.5)	(3.0)	O	0.5	a	-	-	-	-	0.2	(9.7)	技法 D。顎 B1-c。灰白色～灰色。硬質。白色針状物質・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む。
65-37 図版 15	8区	(10.6) -	(4.1)	-	H	-	-	0.9	a	1.1	a	0.2	(5.0)	技法 D。顎 B2-a。灰色。硬質。0.1 ~ 0.5mm 程度の細砂粒を含む。瓦当面自然釉付着。
65-38	14区 表土	(5.4) - -	(4.3)	-	H	0.9	a	-	-	(0.6)	a	0.2	(8.6)	技法 D。灰黄色。軟質。胎土粗く、小礫・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む。
65-39	5-1区 埋戻土	(7.0) -	((5.2))	3.3	H	0.9	-	1.0	a	2.3	a	0.4	(10.9)	技法 D。顎 A-c。灰色。硬質。小礫・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む。瓦当面赤色顔料付着。
65-40	6区東 表土	(3.2) (6.7) -	4.3		O					-	-	0.2	(17.4)	技法 D。顎 B1-c。灰色～暗灰色。硬質。小礫・0.5 ~ 2mm 程度の砂粒を多く含む。瓦当裏面赤色顔料付着。
65-41	10区東	(5.3) -	(2.8)		H	0.8	a	-	-	-	-	0.2	(7.8)	技法 D。顎 C2-b。灰色。硬質。0.5mm 程度の砂粒を少し含む。
65-42 図版 15	5-4区	(7.0) (5.7) -	5.1	2.8	H	1.0	a	1.3	a	-	-	0.2	(7.9)	技法 D。顎 B2-c。褐灰色。硬質。0.1 ~ 0.5mm 程度の白色細砂粒を含む。凹面広端縁ヘラケズリ。
65-43	5-2区 埋戻土	(6.6) (10.4) -	5.4		M								(13.2)	技法 D。顎 A-b。黄灰色。軟質。胎土粗く小礫・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を多く含む。瓦当面・同裏面指ナデ。
65-44	10区東 表土	(2.1) -	(4.2)		H							0.1	(6.2)	技法 D。顎 B2-a。青灰色。硬質。0.1mm 程度の細砂粒を少し含む。瓦当面罫目甲きおよび一部指ナデの後、ヘラ書きによる施文。
65-45 図版 15	10区東	(7.6) (5.5) -	5.4		H							0.1	(5.2)	技法 D7。顎 B2-a。青灰色。硬質。0.1mm 程度の細砂粒を少し含む。瓦当面罫目甲きおよび一部指ナデの後、ヘラ書きによる施文。
65-46	7区東 表土	(3.8) (4.8) -	3.5		H							0.2	(4.6)	技法 D。顎 A-b。褐灰色(断面:明黄褐色)。軟質。1mm 以下の砂粒を含む。

第 29 表 鐘樓地区出土宇瓦観察表 (1) (図面 66、図版 15)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
66-1	表土	(3.9) (2.3) -	4.2		3G							0.7	(7.0)	技法 D。顎 B1-a。灰白色。やや硬質。白色針状物質・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む。瓦当凸面縦位のヘラケズリ、同裏面ナデ。凹面広端縁ヘラケズリ。
66-2	表土	(7.5) -	(3.0)	(3.0)	HK	0.4	a	-	-	0.8	a	0.2	(10.7)	技法 D。顎 B。黄灰色。やや硬質。白色針状物質・2mm 以下の砂粒を含む。女瓦部凸面赤色顔料付着。同面、凹面広・側端縁ヘラケズリ。
66-3 図版 15	表土	(10.8) (3.9) -	5.4	(3.8)	HK	0.6	a	1.0	a	0.7	a	0.3	(5.6)	技法 D。顎 B1-a。黄灰色。やや硬質。白色針状物質・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む。凹面広端縁、瓦当凸面縦位のヘラケズリ。
66-4	表土	(13.4) -	(3.1)	(2.3)	HK	0.8	a	-	-	0.4	a	0.2	(8.5)	技法 D。灰黄色。やや硬質。白色針状物質・礫・2mm 以下の砂粒を含む。凹面広端縁ヘラケズリおよびナデ、同側端縁ヘラケズリ。
66-5	E トレ	(14.2) -	(4.0)	(3.3)	HK	-	-	0.7	a	-	-	0.3	(6.9)	技法 D。顎 B。灰白色。やや軟質。白色針状物質・2mm 以下の砂粒を多く含む。瓦当凸面縦位のヘラケズリおよびナデ。赤色顔料付着。
66-6	E トレ	(2.2) (7.0) -	5.1	3.8	HK	0.8	a	0.5	a	0.5	a	0.2	(15.2)	技法 D。顎 A-a。灰色。硬質。2mm 以下の砂粒を多く含む。凸面縦位のヘラケズリ。

第29表 鐘樓地区出土宇瓦観察表(2)(図面66、図版15)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
66-7 図版15	表土	(9.9) (3.0) -	5.0	3.7	KK	0.6	a	0.7	a	1.7	a	0.2	(12.2)	技法D、顎B2-d、灰色、硬質。2mm以下の砂粒を多く含む。女瓦凸面・側面に矽目印。女瓦部凹・凸面に自然釉付着。
66-8	表土	(6.7) (7.7) -	5.9	3.5	KK	1.4	a	1.0	a	2.5	a	0.2	(9.5)	技法D、顎C1-d、灰色、硬質。0.1mm程度の細砂粒を微量に含む。

第30表 堂間地区(金堂・講堂間)出土宇瓦観察表(図面67・68、図版15)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考	
				厚さ	文様	上		下		幅	文様				
						厚さ	文様	厚さ	文様						
67-1	6区 攪乱	(2.8) (3.5) -	4.5		3G								0.5	(10.1)	技法D、顎B1-c、暗灰色、軟質。0.1～2mm程度の砂粒を含む。凹面広端縁ヘラナデ。瓦当凸面格子目印。
67-2	6区 表土	(6.8) (5.0) -	4.9	3.3	HK	0.6	a	1.0	a	1.2	a	0.2	(11.1)	技法D?、顎B1、灰色、硬質。0.1～1mm程度の砂粒を含む。瓦当凸面・女瓦部凸面斜格子目印。	
67-3	6区 攪乱	(8.0) (2.8) -	4.8	3.2	HK	0.6	a	1.0	a	-	-	0.2	(14.7)	技法D、顎B1、灰色～暗灰色、硬質。0.1～2mm程度の砂粒を含む。女瓦部技法II 1-B、凸面斜格子目印。凹面広端縁ヘラケズリ。	
67-4	6区 攪乱	(7.1) (9.1) -	4.5	3.2	HK	0.6	a	0.7	a	-	-	0.3	(9.6)	顎B1-a、灰色、硬質。0.1～2mm程度の砂粒を含む。女瓦部技法II 1-B、凹面広端縁・瓦当凸面ヘラケズリおよびナデ。	
67-5	3区 堂間 通路	(14.0) (13.3) -	5.4	3.9	HK	0.8	a	0.7	a	0.6	a	0.3	(15.5)	技法D?、顎A-a、灰色、硬質。白色針状物質・小礫・1mm以下の砂粒を含む。女瓦部凹面矽位の指ナデ痕あり。同側端縁ヘラケズリ、広端縁ヘラナデ。	
67-6	6区 表土	(1.0) -	((5.6))	(4.4)	HK	0.5	a	-	-	-	-	0.2	(9.2)	技法D、顎B2-a、灰色、硬質。礫・0.5～2mm程度の砂粒を多く含む。凹面広端縁・瓦当凸面ヘラケズリおよびナデ。瓦当裏面～女瓦部凸面に赤色顔料付着。	
67-7	6区 攪乱	(9.4) (10.9) -	5.4	4.0	HK	0.8	-	0.6	a	-	-	0.3	(4.7)	技法B?、青灰色、硬質。小礫・0.1～2mm程度の砂粒を含む。凹面広端縁ナデ。瓦当凸面に不明ヘラ書き。	
67-8	6区 攪乱	(4.1) (9.4) -	5.4	2.7	KK	1.2	a	1.5	a	(2.9)	a	0.2	(9.6)	技法D、顎B3-d、褐色、硬質。0.1～2mm程度の砂粒を含む。凹面側端縁ヘラケズリ。	
68-9	1区	(7.7) (7.7) -	5.1	3.6	KK	1.0	a	1.5	a	2.7	a	0.2	(7.1)	技法D?、顎B1-c、オリーブ黒色～灰色、硬質。小礫・0.5～2mm程度の砂粒をやや多量に含む。凹面広端縁ヘラナデ?。瓦当面に自然釉、同凸面に自然釉および赤色顔料付着。	
68-10 図版15	6区 攪乱	(8.4) (9.1) -	4.8	3.3	KK	1.0	a	0.5	a	0.9	a	0.1	(11.5)	技法D、顎B1-c、灰オリーブ色、硬質。小礫・0.5～2mm程度の砂粒をやや多量に含む。凹面側端縁ヘラケズリ。	
68-11	4区 表土	(9.8) -	(3.0)	(2.3)	H	0.7	a	-	-	1.7	a	0.1	(7.9)	技法D、顎B、青灰色、硬質。小礫・0.1～1mm程度の砂粒を少量含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。瓦当裏面ナデ。	
68-12	1区	(6.7) (4.4) -	4.1	2.4	KK	0.6	a	1.1	a	-	-	0.2	(9.0)	技法D、顎B2-c、暗青灰色、硬質。小礫・0.1～2mm程度の砂粒を多く含む。瓦当面に自然釉付着。	
68-13	6区 攪乱	(11.6) -	(3.3)	2.2	H	-	-	1.1	a	1.7	a	0.1	(5.5)	技法D、灰色、硬質。0.1～1mm程度の砂粒を含む。瓦当矽目印き→ナデ→ヘラ書きで施文。同凸面に自然釉付着。	
68-14 図版15	6区 攪乱	(11.4) -	(1.9)	(1.4)	H	-	-	0.5	a	(1.7)	a	0.2	(4.6)	技法D、顎B、暗青灰色、硬質。小礫・0.1～1mm程度の砂粒を含む。瓦当面・同凸面に自然釉付着。	
68-15 図版15	6区 表土	(11.8) (14.2) -	5.8		H							0.1	(10.5)	技法D?、顎C2-d、灰黄色。やや硬質。礫・0.5mm程度の砂粒を含む。瓦当面矽目印きの後ヘラ書きで施文。	
68-16	4区	(6.9) (3.3) -	4.5		H							0.1	(4.9)	技法D、顎A-b、褐色、やや軟質。0.1～1mm程度の砂粒を少量含む。瓦当面指ナデの後ヘラ書きで施文。	

第31表 中門地区出土土宇瓦観察表(図面69~71、図版16)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
69-1 図版16	表土	(3.2) (6.9)	4.5		3G							0.1	(9.8)	浅黄色。軟質。雲母・0.1mm程度の細砂粒を多く含む。女瓦凹面・瓦当凸面ナデ。
69-2	表土	(9.6) (1.2)	4		3G							0.5	(4.9)	暗灰色。軟質。雲母・0.1~0.5mm程度の細砂粒を多く含む。
69-3 図版16	表土	(14.8) (15.1)	5.3		3G							0.6	(11.6)	顎B1-c。黒色~暗灰色(断面:にぶい黄褐色)。やや硬質。礫・2mm以下の砂粒を含む。凹面広端縁ヘラケズリ。
69-4	SD194	(9.4) (9.5)	5.7		3G							0.6	(15.0)	顎B1-c。黒色(断面:にぶい黄褐色)。やや硬質。礫・2mm以下の砂粒を多く含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。
69-5	攪乱	(13.4) (11.4)	4.8		3G							0.5	(10.7)	技法D7。顎B1-a。灰白色。やや硬質。礫・雲母・1mm程度の砂粒を含む。女瓦部技法II-B。同凸面格子目叩き。凹面広端縁・瓦当凸面ナデ。凸面に赤色顔料付着。
69-6	表土	(5.0) (4.4)	4.8		3G							0.5	(9.4)	技法D7。顎B。灰色。硬質。白色針状物質(多量)・2mm以下の砂粒を含む。瓦当凸面開目叩き後ナデ。
69-7	表土	(15.8)	(3.1)	(2.5)	HK	-	-	0.6	a	0.8	a	0.3	(6.3)	技法D。灰白色。やや軟質。白色針状物質を多く含む。女瓦側面に指圧痕あり。瓦当凸面ヘラケズリ、赤色顔料付着。
69-8	攪乱	(5.5)	(2.5)	1.8	HK	0.7	a	-	-	-	-	0.2	(9.2)	技法D。灰色。硬質。白色針状物質・0.5~2mm程度の砂粒を含む。凹面広端縁ナデ。凸面縦位のヘラケズリ。
70-9	表土	(9.7)	(3.8)	(3.2)	HK	-	-	0.6	a	-	-	0.1	(6.7)	技法D。褐色~にぶい黄褐色。やや軟質。0.1~0.5mm程度の砂粒を多く含む。瓦当凸面横位のヘラケズリ。女瓦凸面~瓦当部にかけて縦位の指ナデ?、赤色顔料付着。
70-10	SD194	(9.9)	(3.7)	(2.1)	KK	-	-	1.6	a	-	-	0.2	(7.2)	技法D。浅黄色。やや軟質。小礫・2mm以下の砂粒を含む。瓦当凸面ヘラケズリ?。
70-11	表土	(14.0)	(4.9)	(2.4)	KK	-	-	2.5	b	5.3	a	0.2	(6.4)	技法D。顎C1-a。灰白色。軟質。2mm以下の砂粒を含む。女瓦部凸面斜格子目叩き。瓦当凸面指ナデ。
70-12	表土	(9.0) (4.9)	5.4	2.1	KK	1.5	b	1.8	b	(3.6)	a?	0.2	(6.4)	顎B3-c。暗オリーブ灰色~灰色。硬質。0.1~2mm程度の砂粒をやや多量に含む。瓦当面・同凸面・女瓦部凹面に自然輪付着。
70-13	表土	(7.5) (8.6)	(4.4)	2.3	KK	0.4	a	1.7	a	-	-	0.1	(7.7)	技法D。顎C2-b。オリーブ灰色。硬質。礫・2mm以下の砂粒を多く含む。凹面広端縁ヘラケズリ。
70-14	表土	-	(2.4)	(1.9)	KK	-	-	-	-	1.2	a	0.3	(4.1)	技法D。顎B。青灰色。硬質。小礫・2mm以下の砂粒を含む。瓦当裏面ナデ。
70-15	表土	-	(2.2)	(1.7)	O	-	-	-	-	(5.0)	a	0.1	(9.6)	技法D。顎C2-b。にぶい黄褐色。やや軟質。白色針状物質・小礫・2mm以下の砂粒を含む。凸面ナデ。赤色顔料付着。
70-16	表土	(15.9) (16.7)	5.0	2.1	O	0.4	a	2.5	a	1.6	a	0.2	(17.8)	技法D。顎B1-c。灰色。硬質。白色針状物質(多量)・0.1~2mm程度の砂粒を含む。
70-17	表土	(8.0)	7.7	2.0	O	2.1	a	3.6	a	-	-	0.3	(10.6)	顎B2-c。オリーブ灰色。硬質。0.1~0.5mm程度の砂粒を含む。瓦当面開目叩きの後施文。
71-18	表土	(22.8) (22.8)	5.3	3.0	H	0.8	a	1.5	a	-	-	0.2	(8.4)	技法D。顎B3-c。灰色。硬質。白色針状物質・0.1~2mm程度の砂粒を含む。凹面広端縁ヘラケズリ。瓦当裏面~女瓦部凸面ナデ。瓦当面開目叩きの後ヘラケズリ、最後にヘラ書きで施文。
71-19	表土	(7.8) (7.2)	5.9		H?							-	(12.4)	技法D。顎C1-a?。灰白色。軟質。礫・2mm以下の砂粒を多く含む。瓦当凸面ナデ?。

第32表 (伽藍中樞区画施設) 区画南辺出土宇瓦観察表 (図面71~72、図版16)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区				外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様					
						厚さ	文様	厚さ	文様							
71-1 図版16	表土	(19.0) (20.3)	4		3G								0.6	(13.8)	技法D、型B1-a、にぶい褐色。やや軟質。1mm前後の砂粒を多く含む。凹面広端縁ヘラケズリ。凸面赤色顔料付着。全面ナデ。	
71-2	表土	(21.4) (12.7)	4.5		3G								0.5	(11.9)	技法D、型B1-a、灰色。やや硬質。0.1~1mm程度の砂粒をやや多量に含む。瓦当凸面ナデ。女瓦部凸面罫目甲き後ナデ、赤色顔料付着。	
71-3 図版16	表土	(25.3) (9.9)	4.5		3G								0.5	(22.6)	技法D、型B1-c、灰色。硬質。礫・0.1~2mm程度の砂粒を多く含む。女瓦部広端縁を庇範にヘラケズリ。凸面格子目甲き後ナデ、赤色顔料付着。	
72-4	SK 3273	(12.5) (6.2)	6.1	3.1	KK	1.7	b	1.3	b	-	-		0.1	(10.5)	技法D、型B3-c、灰色。硬質。0.1~2mm程度の砂粒を多く含む。凹面広端縁ヘラケズリ。凸面罫目甲き。凹面および瓦当面に自然輪付着。	
72-5	SK 3283	(6.4) (5.8)	5.6	2.5	KK	1.6	a	1.5	a	-	-		0.2	(14.8)	技法D、型C1-b、灰色。硬質。0.1~2mm程度の砂粒を少量含む。凹面広端縁ヘラケズリ。凸面罫目甲き。	
72-6	表土	(2.6)	(1.5)	(0.5)	-	1.0	-	-	-	-	-		0.2	(17.1)	技法D、型B、灰褐色。硬質。0.1~0.5mm程度の細砂粒を含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。瓦当東面~女瓦部凸面罫目甲き。	

第33表 (伽藍中樞区画施設) 区画北辺出土宇瓦観察表 (図面72・73、図版16)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区				外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様					
						厚さ	文様	厚さ	文様							
72-1	表土	(13.0) (11.6)	5.2		4G								0.6	(15.1)	技法D、型B1-a、黄灰色。やや軟質。白色針状物質・0.1~2mm程度の砂粒を含む。凹面広端縁・瓦当凸面褐色のヘラケズリ。女瓦部凸面縦位のヘラケズリ。凸面赤色顔料付着。	
72-2	表土	(6.6) (9.1)	3.8		3G								0.4	(5.7)	技法D、にぶい褐色。やや軟質。礫・0.1~1mm程度の砂粒を多く含む。	
72-3	表土	(1.2) (1.6)	(3.0)	(3.0)	HK	-	-	-	-	-	-		0.4	(12.1)	技法D、型B1、青灰色。硬質。礫・0.1~2mm程度の砂粒を含む。凹面広端縁ヘラケズリ。凸面格子目甲き。	
73-4	表土	(7.2)	(3.9)	(3.2)	HK	-	-	0.7	a	-	-		0.4	(6.4)	技法D、型B2-a、青灰色。硬質。白色針状物質・礫・0.1~1mm程度の砂粒を含む。	
73-5 図版16	表土	(2.1)	(5.6)	3.6	KK	1.1	b	-	-	1.5	b		0.3	(0.7)	灰色。やや軟質。外区に珠文のめぐる牛角状中心飾均整唐草文だが、胎土に白色針状物質をやや多量に含む。	
73-6	表土	(9.7) (11.2)	6.1	3.2	KK	1.4	a	1.5	a	1.7	a		0.2	(9.2)	技法D、型B2-c、暗青灰色。非常に硬質。礫・0.1~1mm程度の細砂粒を少量含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。凸面罫目甲き。瓦当面に自然輪付着。	

第34表 (伽藍中樞区画施設) 区画北西出土宇瓦観察表(1) (図面73~76、図版16)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区				外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様					
						厚さ	文様	厚さ	文様							
73-1	1区 瓦瀕	(13.6)	(3.2)	(2.3)	KK	-	-	0.9	a	-	-		0.2	(5.6)	技法D、型B2-c、灰色。硬質。白色針状物質・小礫・0.5mm以下の砂粒を少量含む。瓦当面罫目甲きの後施文。	
73-2	1区 表土	(2.4) (9.0)	6.2	3.4	O	1.6	a	1.2	a	-	-		0.2	(9.6)	技法D、型B1-c、暗灰色。硬質。小礫・0.1~0.5mm程度の細砂粒を少量含む。凸面罫目甲き。瓦当面に自然輪付着。	
73-1	2区 表土	(4.5) (6.6)	3.4		3G								0.1	(5.0)	技法D、型B1、暗青灰色。硬質。小礫・0.1~1mm程度の砂粒を含む。凹面広端縁ヘラケズリ。瓦当凸面ナデ。	

第 34 表 (伽藍中樞区画施設) 区画北西出土宇瓦観察表 (2) (図面 73 ~ 76、図版 16)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
73-2	2区 SX337	(14.9) (11.5)	3.8		3G							0.8	(19.4)	技法 D、顎 A-a、褐灰色。硬質。白色針状物質・礫・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。女瓦部凸面縦位のヘラケズリ→格子状のヘラ書き。
74-3 図版 16	2区 SX337	(14.2) (14.3)	4.0		3G							0.8	38.0	技法 D、顎 A-a、にぶい黄褐色。軟質。白色針状物質・礫・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を多く含む。女瓦部技法 II 1-B、同凸面平行叩きをナデ消し(一部ヘラケズリ)した後、格子状のヘラ書き?。
74-4	2区 SX337	(18.1) (9.2)	5.2		4G							0.4	(13.6)	技法 D、顎 B1-a、青灰色。やや軟質。白色針状物質・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面広・側縁ヘラケズリ。凸面ケズリ後ナデ。
75-5	2区 SX337	(14.1)	(2.1)		G?							0.4	(17.2)	技法 D、顎 B、暗青灰色。硬質。白色針状物質・小礫・石英・2mm 以下の砂粒を含む。女瓦部凸面格子目叩き。側端縁、凹面広・側端縁ヘラケズリ。
75-6 図版 16	2区 表土	(9.8)(6.7)	5.7	3.5	HK	1.1	a	1.1	a	0.9	a	0.3	(10.4)	技法 D、顎 C2-d、暗青灰色。やや硬質。小礫・2mm 以下の砂粒を多く含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。凸面斜格子目叩き。瓦当凸面に赤色顔料付着。瓦当面左上に「多」字(谷野瓦型)。
75-7	2区 瓦溜	(3.1)	(3.2)	(2.6)	HK	-	-	0.5	a	-	-	0.3	(5.3)	技法 D?、顎 B2-a、青灰色~褐灰色。やや硬質。白色針状物質・2mm 以下の砂粒を多く含む。瓦当凸面ケズリおよびナデ。剥離面に布目痕あり。
75-8 図版 16	2区 表土	(13.5) (17.2)	8.6	3.7	KK	1.6	a	3.3	a	3.3	a	0.2	(10.4)	技法 D、顎 B1-a、褐灰色。硬質。小礫・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面広・側端縁・瓦当凸面ヘラケズリ。凹面一部・瓦当裏面ナデ。女瓦部凸面縦目叩き。
75-9	2区 SX337	(13.5) (14.7)	5.2	3.0	KK	0.8	a	1.4	a	2.0	a	0.2	(12.7)	技法 D、顎 C1-d、灰色~暗灰色。非常に硬質。小礫・0.1 ~ 1mm 程度の砂粒を少量含む。凸面全面に縦位の罫目叩き→瓦当凸面に横位の罫目叩き。凹面広・側端縁ヘラケズリ。瓦当面・同凸面に自然釉付着。
75-10	2区 表土	(4.1) (4.7)	5.8	2.6	KK	1.6	a	1.6	a	(1.2)	a	0.1	(6.3)	顎 B2-c、灰色。やや硬質。0.1 ~ 0.5mm 程度の細砂粒を含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。瓦当凸面横位の罫目叩き。
76-11	2区 SX337	(3.4)	((6.5))	3.2	KK	1.8	a	(1.5)	a	-	-	0.2	(9.7)	技法 D、顎 C1-b、褐灰色~暗紫灰色。顎 C2-b。やや硬質。小礫・0.1 ~ 3mm 程度の砂粒を多く含む。女瓦部凸面縦位。瓦当凸面縦→横位の罫目叩き。赤色顔料付着。
76-12	2区 表土	(8.1) (4.1)	4.0	2.7	KK	0.4	a	0.9	a	-	-	0.3	(12.1)	技法 D、顎 B1-a、灰色。硬質。白色針状物質・0.1 ~ 1mm 程度の砂粒を含む。女瓦部凹面一部指ナデ、同広・側端縁ヘラケズリ。凸面罫目叩き(瓦当凸面文様側は後ヘラケズリ、境部指ナデ)。
76-13	2区 SX337	(14.0) (16.2)	4.7	2.9	KK	-	-	1.8	a	4.1	a	0.1	(14.5)	技法 D、顎 B2-c、青灰色。硬質。小礫・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。女瓦部凸面縦位。瓦当凸面横位の罫目叩き(境部ナデ、後者に赤色顔料付着)。
76-14	2区 表土	(4.9) (8.3)	4.5	2.7	KK	0.5	a	1.3	a	-	-	0.2	(10.5)	技法 D、顎 A-c?、灰色。硬質。2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面に自然釉付着。広端縁ヘラケズリ。凸面縦位の罫目叩き。瓦当面罫目叩きの後発文。
76-15	2区 表土	(13.3) (13.5)	5.3	2.8	KK	1.4	a	1.1	a	2.4	a	0.2	(13.8)	技法 D、顎 B1-c、暗灰色。硬質。礫・2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面一部指ナデ、同広・側端縁ヘラケズリ。女瓦部凸面・瓦当裏面縦位。瓦当凸面横位の罫目叩き。全面的に自然釉付着。

第35表 (伽藍中柱区画施設) 区画南西出土宇瓦観察表 (図面73～76、図版16)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
76-1	表土	(2.8) -	(2.2)	(2.2)	H	-	-	-	-	-	-	0.2	(15.6)	技法 D7。褐灰色～灰白色 (断面：にぶい 橙色)。やや軟質。0.5mm 程度の砂粒を 含む。凹面一部ナデ、同広端縁ヘラケズリ。

第36表 塔跡1地区出土宇瓦観察表 (図面77)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
77-1	旧トレ 埋戻土	(8.6) -	2.3		G							0.3	(6.4)	技法 D。顎 B1-a?。黒色 (断面：にぶい黄 橙色)。軟質。0.1～2mm 程度の砂粒を 多く含む。
77-2	表土	(6.5) (6.4)	4.1		3G							0.5	(3.1)	にぶい黄褐色。軟質。凹面ヘラケズリお よびナデ?。凸面ヘラケズリ。
77-3	旧トレ 埋戻土	(3.5) (4.6)	4.6	2.7	KK	0.7	b	1.2	b	-	-	0.2	(5.0)	技法 D。顎 A-a?。褐灰色。硬質。小窪・0.1 ～1mm 程度の砂粒を含む。凹面広端縁・ 凸面ヘラケズリ。
77-4	旧トレ 埋戻土	(5.8) (5.2)	5.0	3.0	KK	0.7	b	1.3	b	-	-	0.3	(7.9)	技法 D。顎 A-a?。灰白色。やや硬質。0.1 ～1mm 程度の砂粒を含む。凹面広・側端 縁・瓦当凸面ヘラケズリ。女瓦部凸面格 子目叩き。
77-5	旧トレ 埋戻土	(6.1) (2.2)	4.3	2.6	KK	0.9	b	0.8	b?	-	-	0.3	(1.5)	灰黄色。硬質。0.1～0.5mm 程度の砂粒 を含む。凹面広端縁ナデ。
77-6	旧トレ 埋戻土	(2.4) (3.2)	4.4	2.9	KK	0.8	b	0.7	b	-	-	0.2	(4.1)	顎 A-a。灰色。硬質。0.1～0.5mm 程度 の砂粒を含む。凹・凸面ナデ。瓦当面自然 釉付着。
77-7	旧トレ 埋戻土	(4.4) (7.7)	4.2	2.9	KK	0.5	b	0.8	b	-	-	0.2	(5.2)	技法 D。顎 A-a。褐灰色。硬質。0.1～0.5mm 程度の砂粒をやや多量に含む。凹面広端 縁・凸面ヘラケズリ。瓦当面に自然釉付着。
77-8	旧トレ 埋戻土	(7.0) (8.2)	4.5	2.7	KK	0.9	b	-	-	(0.8)	-	0.2	(10.7)	顎 A-a。灰色～褐灰色。硬質。0.1～0.5mm 程度の砂粒を含む。凹面広・側端縁ヘラ ケズリ。凸面縦位のヘラケズリ。
77-9	旧トレ 埋戻土	(7.8) (8.2)	4.7	3.0	KK	0.8	b	0.9	b?	1.5	a	0.1	(4.8)	技法 D。顎 C2-a。褐灰色。硬質。0.1～ 0.5mm 程度の砂粒を少量含む。凹面広・ 側端縁ヘラケズリ。瓦当凸面縦目叩き。 脇区左下から右上方向に歪キズあり。
77-10	旧トレ 埋戻土	(7.9) (3.2)	((4.5))	3.1	KK	0.8	b	-	-	0.9	a	0.1	(7.8)	技法 B7。顎 C1-a。褐灰色～灰黄色。やや 硬質。0.1～0.5mm 程度の砂粒を含む。 凹面側端縁ヘラケズリ。広端縁ナデおよ びヘラケズリ。瓦当凸面縦目叩きの後ヘ ラケズリ。
77-11	旧トレ 埋戻土	(8.3) (5.4)	5.0	3.1	KK	0.7	a	1.2	a	-	-	0.1	(9.9)	顎 B2-c。灰色。硬質。0.1～1mm 程度 の砂粒を含む。凹面広端縁ヘラケズリ。女 瓦部凸縦位。瓦当凸面横位の面縦目叩き。 瓦当面に自然釉付着。
77-12	旧トレ 埋戻土	(5.0) (5.1)	(3.1)	(2.5)	KK	-	-	0.6	a	-	-	0.1	(3.6)	技法 D。灰白色。軟質。瓦当凸面斜格子 叩き。
77-13	旧トレ 埋戻土	(3.7) (3.1)	2.9	1.6	H	0.7	a	0.6	a	0.6	a	0.2	(3.3)	顎 A-a。暗灰色。硬質。凹面広・側端縁・ 凸面ヘラケズリ。

第37表 塔跡2地区出土宇瓦観察表(1)(図面78~84、図版16)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弧弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
78-1	攪乱	(5.9) -	(3.1)		3G							0.6	(9.7)	技法D、顎B1-a、暗灰色(断面：にぶい黄褐色)。軟質。石英・0.1~1mm程度の砂粒・赤色スコリア状物質を含む。凹面・瓦当凸面ナデ。女瓦部凸面格子目叩き後ナデ。
78-2	表土	(7.3) (6.8) -	4.4		3G							0.5	(12.5)	技法D、顎B1-a、黄灰色。やや軟質。礫・0.5mm程度の砂粒を多く含む。凹面広端側ヘラケズリおよびナデ。凸面ナデ。
78-3	攪乱	(14.9) (12.4) -	3.8		3G							0.6	(28.5)	技法D、顎A-a、暗灰色~にぶい黄褐色。やや硬質。小礫・0.1~2mm程度の砂粒を含む。女瓦部技法II-B、凹面一部ナデ。同広・側端縁ヘラケズリ。凸面縦目叩き後縦位のヘラケズリ。瓦当凸面横位のヘラケズリ。
78-4	攪乱	(3.8) (4.4) -	3.4		3G							0.5	(6.9)	技法B7、顎B1-a、褐灰色~にぶい褐色。硬質。0.5~1mm程度の砂粒を多く含む。凹面広端縁ヘラケズリ。瓦当凸面ナデ。
78-5	攪乱	- -	(5.2)	4.3	HK (0.2)	a	0.9	a	-	-	-	0.3	(6.1)	技法D、顎B2-a、灰色。やや硬質。白色針状物質・0.5~1mm程度の砂粒を多く含む。凹面ケズリ後ナデ?。瓦当凸面横位のヘラケズリ。
78-6	攪乱	(4.4) -	(4.1)	3.3	HK	0.8	a	-	a	-	-	0.3	(10.0)	技法D、顎B1-a、暗灰色。硬質。礫・白色針状物質(少量)・0.1~2mm程度の砂粒(多量)を含む。女瓦部技法II-B、凹面広端縁ヘラケズリ。凸面ナデ。
79-7	攪乱	(7.4) (6.2) -	4.5	3.5	HK	0.5	a	0.5	a	0.7	a	0.2	(6.0)	技法D7、顎B1-a、暗灰色。硬質。0.1~2mm程度の砂粒を多く含む。凹面広端縁ヘラケズリ。瓦当凸面ナデ。
79-8	攪乱	(9.7) -	(1.7)	(0.8)	HK?	0.9	a?	-	-	-	-	0.1	(9.0)	技法D、顎B7、灰色~暗灰色。硬質。白色針状物質・小礫・0.1~2mm程度の砂粒をやや多量に含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。女瓦部凸面縦目叩き(割剥離面も含む)。
79-9	旧トレ埋戻土	(7.1) (7.5) -	5.3	4.0	HK	0.7	a	0.6	a	-	-	0.1	(10.2)	技法D、顎A-a、褐灰~灰褐色。やや硬質。0.1~2mm程度の砂粒を多く含む。凹面広端縁・瓦当凸面ヘラケズリ。女瓦部凸面斜格子目叩き。唐草内に珠文あり。
79-10	攪乱	(4.3) (5.8) -	5.3	3.8	HK	0.6	a	0.9	a	-	-	0.1	(6.9)	技法D、顎A-a?、灰色。硬質。0.1~2mm程度の砂粒を多く含む。凹面広端縁・瓦当凸面ヘラケズリ。女瓦部凸面縦目叩き。
79-11	攪乱	(5.6) (2.5) -	5.2	(4.7)	HK	0.5	a	-	-	(0.7)	a	0.1	(6.9)	技法D7、顎B2-a、灰色。硬質。小礫・0.1~0.5mm程度の砂粒を含む。凹面広端縁ヘラケズリ。瓦当凸面縦目叩き後ナデ。
79-12 図版16	攪乱	(9.0) (9.2) -	5.8	3.3	HK	1.3	a	1.2	a	0.9	a	0.3	(7.9)	技法D、顎B2-a、青灰色。やや硬質。小礫・0.1~2mm程度の砂粒を含む。凹面広・側端縁・瓦当凸面ヘラケズリ。瓦当裏面指ナデ。
79-13	攪乱	(12.3) (15.5) -	4.5	2.3	HK	0.9	a	1.3	a	1.2	a	0.1	(7.8)	技法B7、顎B2-c、青灰色。硬質。小礫・0.1~0.5mm程度の砂粒を含む。女瓦部凸面縦位・瓦当凸面横位の縦目叩き。
79-14	攪乱	(7.5) (8.1) -	4.1	2.6	HK	0.4	a	1.1	a	-	-	0.1	(5.3)	技法D7、顎B2-a、青灰色。硬質。小礫・0.1~0.5mm程度の砂粒を含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。瓦当凸面横位の縦目叩き(側端その後ヘラケズリ)。瓦当裏面~女瓦部ナデ。
80-15	攪乱	(19.2) (21.4) -	5.7	3.1	KK	1.4	b	1.2	b	2.6	a	0.2	(12.8)	技法D、顎B1-c、灰色~黄灰色。硬質。0.1~1mm程度の砂粒を含む。凹面側端縁ヘラケズリ。同広端縁一部指ナデ。女瓦部凸面縦位。瓦当凸面横位の縦目叩き。瓦当面に自然釉付着。
80-16	表土	(12.3) (13.6) -	5.1	3.2	KK	0.8	b	1.1	b	1.2	a	0.1	(19.7)	技法D、顎A-c、浅黄色。やや硬質。胎土粗く、礫・0.5~2mm程度の砂粒を含む。女瓦部技法II-B、凹面広・側端縁ヘラケズリ。凸面縦目叩き。
80-17	表土	(3.6) (2.8) -	(4.8)	(4.0)	KK	0.8	a?	2.8	a?	-	-	-	(6.5)	技法D、顎B1-c?、灰褐色~暗灰色。やや硬質。小礫・0.1~2mm程度の砂粒を含む。凹面広端縁ヘラケズリ。瓦当凸面縦位の縦目叩き。同裏面ナデ。

第37表 塔跡2地区出土宇瓦観察表(2)(図面78~84、図版16)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弧幅 弧深	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考	
			厚さ	文様	上		下		幅	文様				
					厚さ	文様	厚さ	文様						
80-18	攪乱	(15.6) (16.4)	7.6	3.3	KK	1.8	a	2.5	a	(3.4)	a	0.3	(10.7)	顎C1-a。褐灰色。硬質。0.1~2mm程度の砂粒を含む。凹面広・側端縁・瓦当凸面ヘラケズリ。女瓦部凸面罫目叩き。
80-19	攪乱	(9.7) (9.2)	5.8	3.7	KK	1.3	a	0.8	a	-	-	0.3	(9.9)	技法D。顎B2-a。灰白色~黄灰色。胎土粗く、小礫・2mm以下の砂粒を含む。凹面広端縁(一部)・瓦当凸面ヘラケズリ。瓦当裏面ナデ。
81-20	攪乱	(6.7) (12.8)	5.0	2.5	KK	0.8	a	1.7	a	(0.9)	a	0.2	(10.2)	技法D?。顎A-b。灰黄色。硬質。0.1~2mm程度の砂粒をやや多量に含む。凹面広端縁ヘラケズリ(側端縁も極めて幅狭にヘラケズリ)。凸面縦位の罫目叩き。
81-21	攪乱	(10.5)	(3.2)	(2.0)	KK	1.2	a	-	-	1.2	a	0.1	(9.9)	顎B?。褐灰色~黄灰色。硬質。小礫・0.1~2mm程度の砂粒をやや多量に含む。
81-22	表土	(5.7)	(3.0)	(1.8)	KK	1.2	a	-	-	-	-	0.1	(11.8)	技法D。顎B?。褐灰色。硬質。凸面・0.5mm以下の砂粒を含む。女瓦部凸面縦位の罫目叩き。
81-23	攪乱	(8.1) (6.9)	4.5	3.3	KK	0.6	a	0.6	a	-	-	-	(5.3)	顎B2-c。青灰色。硬質。0.1~0.5mm程度の細砂粒を含む。瓦当凸面縦位の罫目叩き。同裏面ナデ。
81-24	表土	(8.6)	(2.2)	(1.5)	KK	0.7	a	-	-	1.8	a	0.1	(7.7)	技法D。顎B?。褐灰色~青灰色(断面:灰赤色)。硬質。0.1~0.5mm程度の細砂粒を含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。右閉じ板を指ナデ。女瓦部凹面・頸刺離面に罫目叩き。
81-25	攪乱	(6.4) (9.7)	5.8	(2.8)	KK	0.7	a	1.6	a	4.0	a	0.1	(8.7)	顎B2-c。瓦当面・女瓦部凹面:暗赤灰色。凹凸面:にぶい褐色。側端縁:青灰色。硬質。0.1~0.5mm程度の細砂粒を含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。凸面縦位の罫目叩き。瓦当凸面・側面・凹面に自然軸付着。
81-26	攪乱	(11.9) (14.5)	4.4	2.8	KK	0.5	a	1.1	a	2.1	a	0.2	(11.6)	技法D。顎B2-a。瓦当面:灰赤色。女瓦部:灰黄褐色。硬質。0.1~1mm程度の砂粒を含む。凹面広・側端縁・瓦当凸面側端縁ヘラケズリ。凸面縦位の罫目叩き。
81-27	攪乱	(5.2) (11.7)	5.2	2.6	KK	1.6	a	1.1	a	(0.5)	a	0.2	(6.6)	技法B?。顎B1-c。灰黄褐色~暗青灰色。硬質。0.1~1mm程度の砂粒を含む。凹面広端縁幅狭なヘラケズリ。凸面縦位の罫目叩き。
82-28	表土	(5.6) (8.0)	5.6	2.9	KK	1.2	a	1.5	a	1.5	a	0.2	(8.3)	技法D。顎C1-b。黄灰色。0.1~2mm程度の砂粒を少量含む。凹面広端縁ヘラケズリ。凸面罫目叩き。瓦当凸面の一部と境部はその後ナデ。范すれあり。
82-29 図版16	攪乱	(11.8) (11.4)	4.7	3.7	KK	-	-	1.0	a	(1.7)	a	0.3	(13.8)	技法D。顎B1-c。黄灰色。硬質。0.1~2mm程度の細砂粒を含む。女瓦部技法II 1-A1(凹面の粘土組み合わせ目を指ナデ)。凹面広・側端縁ヘラケズリ。凸面斜格子目叩き。瓦当面自然軸付着。
82-30	表土	(9.7) (13.9)	5.7	3.8	KK	0.3	a	1.6	a	2.9	a	0.1	(10.9)	技法D。顎B2-c。灰黄~オリーブ黒色。硬質。0.1mm程度の細砂粒をごく微量に含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。凸面縦位の罫目叩き。全面的に自然軸付着。
82-31	攪乱	(8.8)	(2.8)	(1.2)	KK	-	a	1.6	-	(2.5)	a	0.2	(6.0)	技法D。顎B2?。暗灰色。硬質。白色針状物質・0.1~1mm程度の砂粒を含む。凸面横位の罫目叩き。瓦当面・側面自然軸付着。
82-32	攪乱	(12.6) (14.6)	4.2	2.6	KK	0.8	a	0.8	a	8.8	a	0.1	(12.0)	技法D。顎B1-c。灰色。硬質。白色針状物質・小礫・0.5mm以下の砂粒を多く含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。凸面縦位の罫目叩き。
82-33	攪乱	(4.4) (4.4)	5.5	3.9	O	1.4	a	1.2	a	(3.8)	a	0.2	(6.8)	技法D。顎A-c。褐灰色。やや硬質。胎土粗く小礫・0.1~2mm程度の砂粒を多く含む。凹面広端縁ヘラケズリ。瓦当面罫目叩きの後施文。同凸面縦位の罫目叩き。
82-34	攪乱	(9.2) (11.1)	(4.5)	(2.6)	KK	(0.5)	a	1.4	a	(3.2)	a	0.2	(7.7)	顎B2-c。灰色。やや硬質。小礫・0.1~2mm程度の砂粒を少量含む。凹面一部ナデ。広・側端縁ヘラケズリ。瓦当面罫目叩きの後施文。同凸面横位の罫目叩きの後ナデ。

第 37 表 塔跡 2 地区出土宇瓦観察表 (3) (図面 78 ~ 84、図版 16)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
82-35	攪乱	(16.1) (16.2)	5.9	3.4	KK	1.0	a	1.5	a	-	-	0.3	(9.3)	技法 D、顎 B2-c、灰黄色~黒色、硬質。小礫・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面広端縁ヘラケズリ。瓦当凸面罫目叩き後ヘラケズリ、女瓦部罫目叩き。瓦当凸面自然軸付着。
83-36 図版 16	攪乱	(13.7) (19.1)	(5.0)	2.9	KK	(0.1)	a	2.0	a	3.4	a	0.2	(9.5)	顎 B2-a、黄灰色、硬質。小礫・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。女瓦・瓦当凸面罫位の罫目叩き後ナデ。一部自然軸付着。
83-37	攪乱	(8.8) (9.2)	4.9	3.0	KK	0.9	a	1.0	a	3.0	a	0.1	(10.4)	技法 D、顎 B2-c、暗灰色~黒色、硬質。小礫・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。凸面罫位の罫目叩き。全的に自然軸付着。
83-38 図版 16	攪乱	22.4 25.8 4.0	(4.3)	(3.9)	KK	0.6	a	0.5	a	1.5	a	0.1	(8.1)	技法 D、顎 B1-c、青灰色~暗褐色、礫・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を多く含む。凸面罫目叩き。瓦当凸面に自然軸付着。
83-39	攪乱	(1.1)(8.2)	5.7	3.1	O	0.3	a	2.3	a	-	-	0.2	(5.8)	顎 C2-a?、褐灰色、硬質。0.1 ~ 1mm 程度の砂粒を含む。瓦当凸面罫目叩き(文様側ヘラケズリ)。凹面・瓦当凸面に自然軸付着。
83-40	攪乱	(4.7)	(4.2)	(2.4)	O	-	-	1.8	a	-	-	0.2	(11.2)	技法 D、顎 B2-c、灰色~暗灰色、硬質。0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む。瓦当凸面自然軸付着。凸面罫目叩き。
83-41 図版 16	攪乱	(20.6) (19.6)	5.6	2.7	O	1.0	a	1.9	a	1.8	a	0.1	(14.9)	顎 B2-a、暗灰色、硬質。0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む。凹面広端縁ヘラケズリ。瓦当凸面罫目叩き。瓦当凸面罫目叩きの後施文、自然軸付着。
84-42 図版 16	攪乱	(7.7) (8.5)	(4.1)	3.1	O	0.3	a	(0.7)	a	-	-	0.1	(10.7)	技法 D、顎 B7?、黄灰色、硬質。0.1 ~ 1mm 程度の砂粒を多く含む。凹面広端縁ヘラケズリ。女瓦部凸面罫位の罫目叩き(瓦当との境部ナデ)。
84-43	攪乱	(11.5) (4.7)	5.2	3.9	O	0.5	a	0.8	a	-	-	0.2	(8.1)	顎 B2-c、黄灰色、硬質。0.1-2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面広端縁ヘラケズリ。凸面罫位の罫目叩き。
84-44	攪乱	(18.7) (15.2)	(5.0)	2.8	H	0.8	a	(1.4)	a	-	-	0.1	(9.3)	技法 B7?、顎 B2-c、灰色、硬質。礫・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む。凹面広端縁ナデ。凸面罫位の罫目叩き。瓦当凸面罫目叩きの後調整→ヘラ書きで施文?
84-45	攪乱	(7.6)	(2.8)	(1.8)	H	1.0	a	-	-	0.8	a	0.2	(11.3)	技法 D、顎 B7?、黄灰色、硬質。小礫・0.1 ~ 1mm 程度の砂粒を含む。凹面側端縁幅狭なヘラケズリ。女瓦部凸面罫位の罫目叩き。
84-46	攪乱	(12.4) (12.1)	5.4	3.7	H	1.0	a	0.7	a	1.6	a	0.1	(11.0)	技法 D、顎 B2-c、灰黄色、硬質。0.1 ~ 1mm 程度の砂粒を含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。凸面罫位の罫目叩き。瓦当凸面罫目叩きの後調整→ヘラ書きで施文。
84-47	攪乱	(10.8) (11.0)	4.4	2.5	H	0.9	a	1.0	a	5.6	a	0.2	(8.9)	技法 D、顎 B1-c、灰色~暗灰色、硬質。白色針状物質・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む。凹面広・側端縁ヘラケズリ。女瓦凸面罫位、瓦当凸面罫位の罫目叩き。瓦当凸面ヘラケズリの後ヘラ書きで施文。
84-48	攪乱	(5.8) (5.8)	4.2	2.4	KK?	0.4	a	1.4	a	-	-	-	(9.9)	技法 D?、顎 B1-c、灰色、硬質。小礫・0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面広端縁ヘラケズリ。凸面罫位の罫目叩き。瓦当凸面による施文→ナデ消し?

第 38 表 塔跡 2 周辺地区出土土瓦観察表 (図面 85)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
85-1	旧トレ 埋戻土	(1.8) (5.0)	3.9		3G							0.5	(11.2)	技法 D。顎 B1-a。黒色～暗褐色(断面： にふい黄褐色)。やや硬質。0.1～1mm 程度の砂粒。微量の白色針状物質を含む。 凹面広端縁ヘラケズリ。女瓦部凸面格子 目叩き。瓦当凸面ナデ。
85-2	旧トレ 埋戻土	(5.3) (4.2)	3.3		3G							0.6	(10.4)	顎 B1-a。灰色～明青灰色。硬質。0.1～ 2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面広・側 端縁ヘラケズリ(側端縁はその後面取り)。 女瓦部凸面ヘラケズリ後ナデ。瓦当凸面 ナデ。
85-3	旧トレ 埋戻土	(5.5) (7.9)	3.9		3G							0.6	(5.2)	技法 B7。赤灰色。やや硬質。0.1～1mm 程度の砂粒をやや多量に含む。凹面広端 縁・凸面ヘラケズリおよびナデ。
85-4	旧トレ 埋戻土	(5.5) (6.2)	4.4	3.1	HK	0.8	a	0.5	a	0.8	a	0.2	(7.1)	顎 C1-d。青灰色。硬質。小礫・0.1～0.5mm 程度の細砂粒を含む。凹面広端縁→側端 縁の順にヘラケズリ。凸面縦位の罫目叩 き。瓦当面に自然軸付着。
84-5	旧トレ 埋戻土	(5.0) (4.9)	4.6	2.7	KK	0.7	b	1.2	b	-	-	0.2	(5.3)	顎 A-a?。技法 D。褐灰色～黄灰色。硬質。 0.1～2mm 程度の砂粒を含む。凹面広端 縁・瓦当凸面ヘラケズリ。女瓦部凸面縦 位の罫目叩き。瓦当面に自然軸付着。
85-6	旧トレ 埋戻土	(6.7) (3.7)	5.3	2.8	KK	1.1	a	1.4	a	-	-	0.3	(4.6)	技法 D。褐灰色～にふい褐色。やや軟質。0.1 ～2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面ナデ。 凸面罫目叩きの後ヘラケズリ。
85-7	攪乱	(3.3) (6.5)	8.1	2.9	KK	2.2	a	3.0	a	-	-	0.3	(5.6)	技法 D。顎 B2-a。灰色。硬質。礫・0.1 ～2mm 程度の砂粒を多く含む。凹面広端 縁ナデ。瓦当凸面罫目叩き。凹面端縁ヘ ラケズリ。同裏面ナデ。
85-8	表土	(3.0) (4.2)	4.8	3.3	KK	0.7	a	0.8	a	-	-	0.2	(5.7)	技法 D。灰色～黄灰色。硬質。0.1～0.5mm 程度の砂粒を多く含む。凹面広端縁ヘラ ケズリ。瓦当凸面罫目叩きの後広端縁を ヘラケズリ。

第 39 表 南門地区出土土瓦観察表 (図面 85)

図面 図版	出土 位置	上限弧幅 下弦弧 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
85-1	表土	(6.2)	(2.7)	(1.9)	HK	-	-	0.8	a	-	-	0.2	(4.5)	褐灰色。硬質。白色針状物質・小礫・0.1 ～2mm 程度の砂粒を含む。凸面ヘラケズ リ。

第40表 鬼瓦観察表 (図面86、図版17)

図面 図版	出土 位置	長辺		厚さ	特徴
		短辺			
86-1 図版17	鐘樓地区	13.1	灰白色。軟質。砂粒・石英少量含む緻密。側面直立縁で、ヘラケズリを施す。下端面(脚部)ヘラケズリ。底を4重の降線で表現する。	3.5	
		6.7			
		5.8			
86-2 図版17	金堂地区 2区	2.4	灰褐色。硬質。砂粒少量含む。緻密。上端面・左側端面ヘラナデ。裏面縄印き→外周ナデ。手・外郭線貼り付け。	8.9	
		5.2			
		2.6			
86-3 図版17	中門地区	10.2	灰褐色。軟質。砂粒少量含む。緻密。右側端面ヘラナデ。裏面縄印き。	7.8	
		7.8			
		5.1			
86-4 図版17	鐘樓地区	13.7	青灰色。硬質。砂粒・角礫少量含む、粗い。裏面ヘラナデ。目貼り付け。	7.8	
		11.4			
		7.8			
86-5 図版17	塔2地区	11.4	赤灰色。硬質。砂粒・角礫含む。裏面ヘラナデ。目貼り付け。牙の左上に穿孔あり。	7.8	
		11.4			
		7.8			

第41表 面戸瓦観察表 (図面86)

図面 図版	出土 位置	長辺		厚さ	成・整形の特徴					備考
		短辺	素材		凹面		凸面		端面	
					布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
86-1	堂間地区 (中門・金堂間)	9.6	粘土板	1.3		-	-	横位ヘラナデ ヘラ書き	側～下端面3 面ヘラケズリ。	灰褐色。硬質。砂粒・石英少量 含む緻密。
		7.3								
86-2	金堂地区 18区	11.1	粘土板	1.2		-	布目	-	側端面1面ヘ ラケズリ。	灰褐色。軟質。砂粒少量含む緻密。
		8.4								

第42表 隅切瓦観察表 (図面87・88、図版17)

図面 図版	出土 位置	長辺		厚さ	成・整形の特徴					備考
		短辺	素材		凹面		凸面		端面	
					布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
87-1 図版17	金堂地区 10区	13.5	粘土板	2.0		-	格子	-	1面ヘラ削り	明灰色。軟質。砂粒・白色針状 物質を含む。南北企堂。
		12.1								
87-2 図版17	金堂地区 29区	16.5	粘土板	1.9		押印「足」? (文字瓦№18)	斜格子	叩き具幅 4.5cm	2面ヘラ削り	灰褐色。硬質。砂粒・石英を含 み緻密。
		14.6								
87-3	講堂地区 10区	17.8	粘土板	4.0		布目→磨消	斜格子	叩き具幅 6.5×8.5cm	2面ヘラ削り	淡褐色。軟質。砂粒・雲母を多 く含む。
		17.4								
87-4	中門地区	13.2	粘土板	2.2		-	縄	-	1面ヘラ削り	明灰色。軟質。砂粒・石英を含む。
		10.2								
88-5	中門地区	18.1	粘土板	2.0		-	斜格子	叩き具幅 6.5×6.5cm	1面ヘラ削り	淡褐色。軟質。砂粒・石英を多 く含む。
		14.5								
88-6	中門地区	8.7	粘土板	1.9		-	斜格子	-	1面ヘラ削り	表面: 黒灰色、断面: 淡褐色。軟 質。砂粒・雲母少量含む。
		7.2								
88-7	中門地区	9.9	粘土板	1.8		-	縄	-	2面ヘラ削り	灰褐色。軟質。砂粒少量含む緻密。
		7.2								

第43表 財戸瓦観察表(図面88~91、図版17・18)

図面 図版	出土 位置	狹端		厚さ	素材	成・整形の特徴			備考
		広端 全長	門面 特徴			凸面		端面 特徴	
						叩き 特徴	叩き 特徴		
88-1 図版17	講堂 10区	(15.4)	粘土 板	2.0	—	縄	—	2面ヘラケズ リ。	灰褐色。硬質。砂粒・角礫含み、 粗い。
		(19.8)							
		24.6							
89-2	講堂 5-3区	(11.8)	粘土 板	2.2	—	格子	叩き具幅 5.0cm	側端面2面、狭 端面1面ヘラケ ズリ。	灰褐色。硬質。砂粒・石英少量 含む。再建基壇外装粘土層。
		(10.6)							
		(11.9)							
89-3	鐘樓地区	(11.0)	粘土 板	1.8	ユビナデ	縄	—	側端面2面ヘラ ケズリ。	灰褐色。やや軟質。砂粒・石英・ 白色針状物質含む。南比企窯。
		(12.4)							
		(14.9)							
89-4	中門地区	(11.0)	粘土 板	1.7	ヘラ書「久」 (文字瓦№ 19)	斜格 子	叩き具幅 6.0×7.2cm	側端面2面ヘラ ケズリ。	灰褐色。硬質。砂粒・石英少量 含む。
		—							
		13.5							
89-5	中門地区	15.3	粘土 板	2.0	布目→糸切	縄	—	側端面2面、狭 端面1面ヘラケ ズリ。	淡褐色。硬質。砂粒・石英多く 含む。
		—							
		20.8							
90-6	中門地区	(10.8)	粘土 板	2.0	—	縄	—	側端面・狭端面 1面ヘラケズ リ。	灰褐色。硬質。砂粒・石英少量 含む。
		—							
		(6.0)							
90-7 図版17	中門地区	19.9	粘土 板	2.1	—	縄	—	側端面1面ヘラ ケズリ。	灰褐色。硬質。砂粒・角礫多く 含み粗い。SX249。
		—							
		(24.8)							
90-8	区画南辺	(13.0)	粘土 板	2.5	枠板痕跡 押印	縄	—	側端面2面ヘラ ケズリ。	淡褐色。軟質。砂粒少量含む。 SX249。
		—							
		(9.6)							
90-9	区画北西 2区	13.5	粘土 板	3.5	—	格子	叩き具幅 5.0×6.5cm	側端面・狭端面 1面ヘラケズ リ。	灰褐色。硬質。砂粒・礫を多く 含み粗い。
		—							
		(12.2)							
91-10 図版18	区画北西 2区	14.8	粘土 板	2.5	糸切→ヘラナ デ	格子	叩き具幅 3.2×6.0cm	側端面・狭端面 1面ヘラケズ リ。	灰白色。硬質。砂粒・石英少量 含む。SX337。
		—							
		(27.2)							
91-11	区画南西	11.0	粘土 板	2.9	布目→糸切	斜格 子	叩き具幅 5.1×6.7cm	側端面3面ヘラ ケズリ。	明灰褐色。硬質。砂粒・スコリ ア少量含む。
		—							
		(16.2)							
91-12	区画南東 1区	16.0	粘土 板	3.3	—	格子	叩き具幅 4.9×6.0cm	側端面2面・狭 端面1面ヘラケ ズリ。	灰白色。軟質。砂粒やや多く、 雲母少量含む。SD425。
		—							
		14.1							

第44表 男瓦観察表(1) (図面92~107、図版18~20・23・24)

図面 図版	出土 位置	挟端		厚さ	成・整形の特徴						備考
		広端 全長	素材		凹面		凸面		端面		
					布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
92-1 図版18	金堂地区 10区	(1.0)	粘土組	17×20	朱墨「寺」	—	全面横位ヘ ラナデ	挟端面ナデ。側 端面ヘラ削り。	技法I3-A1。明灰色。硬質。 砂粒多い。		
		(9.5) 38.5									
92-2	金堂地区 29区	(10.5)	粘土組	26×30	組接合部横 位ナデ 朱墨痕	—	横位ヘラナ デ→縦位ヘ ラナデ	挟端・広端面ナ デ。側端面2面ヘ ラ削り。	技法I3-A1。濃灰色。硬質。 砂粒・石英多く、粗い。胎土。		
		(16.0) 39.0									
93-3 図版18	金堂地区 29区	(7.3)	粘土組	22×21	朱墨痕	縄	縄叩き→全 面横位ヘラ 削り	挟端面ナデ。広 端面・側端面3面 ヘラ削り。	技法I3-A1。赤褐色。軟質。 砂粒少量含む。		
		(15.7) 38.8									
93-4	金堂地区 10区	10.2	粘土組	19×19	朱墨「寺」	—	全面横位ヘ ラ削り	挟端面・広端面ナ デ。側端面三面ヘ ラ削り。	技法I3-A1。淡褐色。軟質。 砂粒少量含む。		
		(10.7) 33.3									
94-5	金堂地区 10区	10.0	粘土組	30×31	朱墨「寺」	—	全面横位ヘ ラ削り	挟端面ナデ。側 端面1面ヘラ削り。	技法I3-A1。茶褐色。軟質。 砂粒多く含む、粗い。		
		(15.1) 38.5									
94-6	金堂地区 10区	7.0	粘土組	21×21	—	—	縦位ヘラ削 り	側端面2面ヘラ削 り。凸面円形の窪 み多い。	表面：黒褐色、断面：茶褐色。 軟質。砂粒・石英多く含む、 粗い。		
		13.1 36.0									
94-7 図版18	金堂地区 29区	—	粘土組	35×29	朱墨「寺」	—	全面横位ヘ ラ削り	挟端面3面ヘラ削 り。	表面：灰褐色、断面：赤褐色。 硬質。砂粒多く含む。		
		(17.8)									
95-1 図版24	中門地区	10.5	粘土組	22×22	—	縄L7 本	叩き→横位 ヘラナデ	挟端面ナデ、広 端面・側端面1面 ヘラ削り。	技法I3-A1。灰褐色。硬質。 砂粒、白色針状物質含む。 南比企業。SB216中門壺地 業1-1。		
		17.4 38.5									
95-2 図版24	中門地区	10.7	粘土組	24×20	—	縄	叩き→横位 ヘラナデ	挟端面、広端面ナ デ。側端面2面ヘ ラ削り。	灰褐色。軟質。砂粒少量 含む。SB216中門壺地業 1-1。		
		19.5 32.1									
96-3 図版23	中門地区	(2.4)	粘土組	20×18	—	縄	叩き→縦位 ヘラナデ	挟端面ナデ。側 端面1面ヘラ削り。	技法I3-A1。淡褐色。軟質。 砂粒、赤色スコリア含む。 SB216中門壺地業1-2。		
		(29.7)									
96-4 図版23	中門地区	—	粘土組	14×21	—	並行 組合式	叩き→横位 ヘラナデ	広端面・側端面1 面ヘラ削り。	技法I3-A1。淡褐色。砂粒 少量含む。前内出窯。 SB216中門壺地業1-2。		
		22.1 (30.3)									
96-5 図版23	中門地区	—	粘土組	24×20	布目→縦位 ヘラナデ	—	縦位ヘラ削 り	広端面ヘラ削り。 側端面2面ヘラ削 り。	技法I3-A1。赤褐色。硬質。 砂粒、白色針状物質含む。 南比企業。SB216中門壺 地業1-2。		
		(16.9) (30.3)									
97-6 図版23	中門地区	(21.1)	粘土組	21×19	—	—	縦位ヘラ削 り	広端面・側端面1 面ヘラ削り。	技法I3-A1。赤褐色。硬質。 砂粒、石英・白色針状物質 含む。南比企業。SB216中 門壺地業1-2。		
		(32.8)									
97-7	中門地区	(5.4)	粘土組	15×22	—	縄	叩き→全面 横位ヘラナ デ	挟端面、広端面ナ デ。側端面2面ヘ ラ削り。	技法I3-A1。淡褐色。軟質。 砂粒少量含む。SB216中門 壺地業2-2。		
		23.7 39.5									
97-8 図版24	中門地区	—	粘土組	22×17	—	—	全面横位ヘ ラナデ	広端面ヘラ削り→ 押印「中」。側端 面2面ヘラ削り。	技法I3-A1。明灰褐色。硬質。 砂粒・石英・白色針状物質 含む。南比企業産。SB216 中門壺地業2-2。		
		(12.0) (19.4)									
98-9 図版24	中門地区	10.5	粘土組	19×20	—	—	全面横位ナ デ	挟端面ナデ。側 端面2面ヘラ削り。	技法I3-A1。暗褐色。硬質。 砂粒・白色針状物質含む。 南比企業。SB216中門壺 地業2-2。		
		(35.4)									
98-10 図版24	中門地区	(4.7)	粘土組	20×19	—	—	横位ナデ→ 縦位ヘラナ デ	挟端面ナデ。広 端面ヘラ削り。側 端面1面ヘラ削り。	技法I3-A1。灰褐色。硬質。 砂粒・白色針状物質含む。 南比企業産。SB216中門壺 地業2-2。		
		(12.4) 36.7									
98-11	中門地区	13.6	粘土組	22×19	—	並行	叩き具幅5.0 ×1.7cm。 19条1単 位。	挟端面ナデ。側 端面2面ヘラ削り。	技法I3-A1。灰褐色。硬質。 砂粒・白色針状物質含む。 南比企業。SB216中門壺 地業2-2。		
		(20.8)									

第44表 男瓦観察表(2) (図面92~107、図版18~20・23・24)

図面 図版	出土 位置	狹端		厚さ	成・整形の特徴					備考
		広端 全長	素材		凹面		凸面		端面 特徴	
					布目	特徴	叩き	特徴		
99-12 図版24	中門地区	8.2	1.4	粘土組	21×25	—	—	全面縦位ヘ ラナデ	広端面ヘラ削り。 側端面二面ヘラ削 り。	赤褐色。硬質。砂粒・角礫 多く、やや粗い。SB216中 門壺地業2.2。
		(7.9)								
		32.3								
99-13 図版24	中門地区	11.8	1.2	粘土組	21×17	—	—	全面横位ヘ ラナデ	広端面ヘラ削り。 側端面「中」(文字 瓦No.858)。側端 面二面ヘラ削り。	淡褐色。硬質。砂粒・白色 針状物質含む。南比企業。 SB216中門壺地業2.2。
		20.6								
		35.7								
99-14 図版23	中門地区	—	1.3	粘土組	24×21	—	—	全面横位ヘ ラナデ	広端面ヘラ削り。 「中」押印。側端 面二面ヘラ削り。	淡褐色。硬質。砂粒・白色 針状物質含む。南比企業。 SB216中門壺地業1.2。
		(15.1)								
		(23.3)								
100-15 図版23	中門地区	(2.6)	1.8	粘土組	((18× 18))	—	—	全面縦位ヘ ラナデ	広端面ヘラ削り。 側端面二面ヘラ削 り。	淡褐色。軟質。砂粒・白色 針状物質含む。南比企業。 SB216中門壺地業1.2。
		(2.8)								
		36.8								
100-16	中門地区	11.9	1.5	粘土組	23×20	—	—	全面縦位ヘ ラナデ	広端面ヘラ削り。 側端面二面ヘラ削 り。隅落とし。	暗褐色。軟質。砂粒・白色 針状物質含む。南比企業。 SB216壺地業2.2。
		(10.6)								
		36.2								
100-17 図版24	中門地区	(7.7)	1.6	粘土組	15×20	—	—	叩き→全面 縦位ヘラナ デ	側端面3面ヘラ削 り。	灰褐色。硬質。砂粒・白色 針状物質含む。南比企業。 SB216壺地業2.2。
		—								
		(19.0)								
101-18	中門地区	—	1.6	粘土組	25×30	—	—	全面横位ヘ ラナデ	広端面ヘラ削り。 側端面二面ヘラ削 り。隅落とし。	淡灰色。硬質。砂粒・石英 ・白色針状物質含む。南比 企業。SB216中門壺地業 2.2。
		18.6								
		(29.3)								
101-19 図版23	中門地区	—	1.6	粘土組	20×26	—	—	全面横位ヘ ラナデ	広端面ヘラ削り。 側端面1面ヘラ削 り。	灰褐色。硬質。砂粒少量・ 白色針状物質含む。南比 企業。SB216中門壺地業 1.2。
		15.2								
		(28.6)								
101-20 図版23	中門地区	10.9	1.3	粘土組	22×17	—	—	全面横位ヘ ラナデ	側端面2面ヘラ削 り。	淡褐色。軟質。砂粒少量・ 白色針状物質含む。南比企 業産。SB216中門壺地業 1.2。
		—								
		(26.2)								
102-21 図版23	中門地区	8.3	1.4	粘土組	21×21	—	—	全面横位ヘ ラナデ	広端面ヘラ削り。 側端面1面ヘラ削 り。	赤褐色。硬質。砂粒・白色 針状物質含む。南比企 業産。SB216中門壺地業 1.2。
		16.5								
		35.3								
102-22	中門地区	11.4	1.6	粘土組	22×19	—	—	全面縦位ヘ ラナデ	広端面ヘラ削り。 側端面1面ヘラ削 り。	暗褐色。軟質。砂粒少量 含む。SB216中門壺地業 2.2。
		(13.3)								
		37.7								
103-23 図版19 ・23	中門地区	8.8	2.0	粘土組	15×22	—	—	叩き→全面 横位ヘラナ デ	側端面一面ヘラ削 り。押印「高」(文 字瓦No.804)	技法13-A1。淡灰色。硬 質。砂粒・角礫少量含む。 SB216中門壺地業1.2。
		20.9								
		37.0								
103-24 図版24	中門地区	—	1.7	粘土組	14×20	—	—	叩き→全面 横位ヘラナ デ	側端面2面ヘラ削 り。	技法13-A1。淡褐色。軟質。 きめ細かい脂土。SB216中 門壺地業2.2。
		(8.1)								
		(20.7)								
104-1	区画南辺	(14.0)	1.7	粘土組	18×20	朱墨痕	—	叩き→全面 横位ヘラナ デ	側端面1面ヘラ削 り。	技法13-A1。灰褐色。硬質。 砂粒少量含む。SD194。
		38.0								
		—								
104-2	区画南辺	19.8	1.9	粘土組	14×17	—	—	全面縦位ヘ ラナデ	広端面ヘラ削り。 側端面二面ヘラ削 り。	技法13-A1。灰褐色。硬 質。砂粒・石英少量含む。 SD194。
		(34.0)								
		12.7								
105-3	区画南辺	(11.5)	1.9	粘土組	15×18	—	—	叩き→全面 横位ヘラナ デ	狭端面、広端面ヘ ラ削り。側端面二 面ヘラ削り。	技法13-A1。濃灰色。硬質。 砂粒、角礫、石英含む。火 傷痕。SD194。
		37.8								
		10.5								
105-4	区画南辺	(11.5)	1.8	粘土組	17×20	—	—	叩き→全面 縦位ヘラナ デ	広端面ヘラ削り。 側端面二面ヘラ削 り。	技法13-A1。明灰色。硬質。 砂粒少量含む。SD194。
		32.7								
		—								
106-1 図版19	区画南東	(14.2)	1.6	—	—	全面縦位ユ ビナデ 朱墨「寺」	—	全面縦位ユ ビナデ	広端面三面ヘラ削 り。隅落とし。	黒灰色。硬質。砂粒・白色 針状物質含む。南比企業。 SD425。
		(30.6)								
		(5.9)								
106-2 図版19	区画南東	(23.0)	1.5	粘土組	20×21	朱墨「寺」	—	叩き→全面 横位ヘラナ デ	狭端面、広端面ヘ ラ削り。側端面二 面ヘラ削り。	技法13-A1。青灰色。硬質。 砂粒少量含む。SD425。
		38.5								

第44表 男瓦観察表(3) (図面92~107、図版18~20・23・24)

図面 図版	出土 位置	狹端		厚さ	素材	成・整形の特徴						備考
		広端 全長	—			凹面		凸面		端面		
						布目	特徴	叩き	特徴		特徴	
107-1	塔跡2 地区	—	1.4	粘土組	33×31	—	—	繩	叩き→全面 横位ヘラナ デ	広端面ヘラ削り。 側端面1面ヘラ削り。	灰褐色。硬質。砂粒、角礫 多く、粗い。SK3264。	
		(12.0)										
		(23.2)										
107-2	塔跡2 地区	—	2.7	粘土組	18×18	—	—	—	全面縦位ナ デ	広端面ヘラ削り。 側端面3面ヘラ削り。 隅落とし。	灰白色。やや軟質。砂粒多 く、やや粗い。SK3265。	
		(14.3)										
		(27.5)										
107-3	塔跡2 地区	—	2.2	—	20×21	—	—	—	全面横位ナ デ	有段面ヘラ削り。 側端面2面ヘラ削り。	灰白色。やや軟質。砂粒多 く、やや粗い。SB24塔基 壇版築内。	
		—										
		(7.4)										

第45表 女瓦観察表(1) (図面108~120、図版20~24)

図面 図版	出土 位置	狹端		厚さ	素材	成・整形の特徴						備考
		広端 全長	—			凹面		凸面		端面		
						布目	特徴	叩き	特徴		特徴	
108-1 図版20	金堂地区 29区	(4.0)	1.6	粘土板	20×17	—	—	宇瓦 瓦范	偏行唐草文	側端面・広端面2 面ヘラ削り。	明灰色。やや軟質。砂粒含 み、緻密。表土。	
		—										
		(6.9)										
108-2 図版20	金堂地区 29区	(2.0)	1.7	粘土板	24×27	—	—	宇瓦 瓦范	偏行唐草文	側端面1面ヘラ削り。	明灰色。やや軟質。砂粒含 み、緻密。表土。	
		—										
		(6.0)										
108-3	金堂地区 27区	—	1.7	粘土板	18×18	—	—	宇瓦 瓦范	偏行唐草文	—	明灰色。やや軟質。砂粒含 み、緻密。表土。	
		—										
		(7.4)										
108-4 図版20	金堂地区 9区	(11.2)	2.4	粘土板	22×20	—	—	繩	—	広端面1面ヘラ削り。 「七」墨書。	淡褐色。やや軟質。砂粒少 量含む。表土。	
		—										
		(9.0)										
108-5	金堂地区 29区	(21.2)	2.1	粘土板	22×21	—	—	繩	叩き→ ユビナデ	側端面・広端面・ 狹端面2面ヘラ削り	淡褐色。やや軟質。砂粒少 量含む。表土。	
		(7.3)										
		35.7										
109-6 図版20	金堂地区 29区	(10.8)	1.8	粘土板	21×21	布目→ユビ ナデ	繩L10 本 格子	叩き具幅 8.5×8.0cm	側端面2面、広端 面1面ヘラ削り。	灰褐色。やや軟質。砂粒・ 石英少量含む。		
		—										
		(22.6)										
109-7	金堂地区 27区	—	1.7	粘土板	17×17	—	—	並行	—	側端面2面ヘラ削り。	明灰色。硬質。砂粒・白色 針状物質含む。南比企窯。 表土。	
		—										
		(20.4)										
109-8	金堂地区 10区	(4.8)	1.5	粘土板	24×30	—	—	変形格 子	—	側端面・広端面1 面ヘラ削り。	淡褐色。軟質。砂粒・白色 針状物質含む。南比企窯。 表土。	
		—										
		(7.2)										
109-1	講堂地区 5-3区	—	1.9	粘土板	((18× 18))	—	—	変形 斜格子	叩き具幅4.7 cm	広端面1面ヘラ削り。	灰褐色。やや軟質。砂粒少 量含む、緻密。表土。	
		(9.1)										
		(10.8)										
109-2	講堂地区 5-3区	—	1.9	粘土板	((18× 18))	—	—	格子	叩き→ナデ	側端面・広端面1 面ヘラ削り。	暗灰色。硬質。砂粒・石英 少量含む。表土。	
		(13.3)										
		(5.3)										
109-3	講堂地区 12区	—	2.5	粘土板	—	全面横位 ヘラ削り	—	変形 斜格子	—	—	青灰色。硬質。砂粒多く含 む。表土。	
		(8.9)										
		—										
110-4 図版20	講堂地区 10区	(9.0)	2.3	粘土板	15×21	布目→糸切	—	斜格子	叩き具幅 10.5×7.0 cm	側端面・広端面1 面ヘラ削り。	表土：淡褐色。断面：赤褐色。 軟質。砂粒・石英少量含む。 表土。	
		—										
		21.7										
110-5	講堂地区 6区	—	2.1	粘土板	19×21	—	—	正格子	叩き具幅 7.1×5.5cm	側端面・広端面2 面ヘラ削り。	濃灰褐色。硬質。石英少量 含む、緻密。表土。	
		(7.9)										
		(11.9)										
110-6	講堂地区 3-2区	—	1.6	粘土板	—	布目→ユビ ナデ	—	—	3条1單位 の柳波状 文	—	淡褐色。軟質。砂粒多く含 む。表土。	
		—										
		(8.5)										

第45表 女瓦観察表(2)(図面108~120、図版20~24)

図面 図版	出土 位置	狹端		厚さ	素材	成・整形の特徴						備考
		広端	全長			凹面		凸面		端面		
						布目	特徴	叩き	特徴		特徴	
110-7	講堂地区 10区	(10.6)	—	2.0	粘土板	18×19	—	並行	叩き具幅 9.0×4.5cm	広端面2面ヘラ削り。	淡褐色。硬質。砂粒多く含む。表土。	
		(11.8)										
110-8	講堂地区 3-1区	—	—	2.1	粘土板	((21×27))	布目→糸切	並行	叩き具幅 6.0×5.0cm	側端面1面ヘラ削り。	赤褐色。硬質。砂粒多く含む。表土。	
		(10.9)										
110-1 図版21	中門地区	(9.0)	—	2.0	粘土板	18×21	枠板痕跡 桶巻作り	縄	叩き→ナデ	側端面2面、広端面1面ヘラ削り。	淡褐色。軟質。砂粒・石英少量含む。表土。	
		(15.5)										
110-2	中門地区	—	—	2.2	粘土板	—	ヘラナデ	格子?	格子目に十字文	側端面1面ヘラ削り。	表面:黒褐色。断面:淡褐色。軟質。砂粒・赤色スコリア少量含む。表土。	
		(7.5)										
110-3	中門地区	(6.0)	—	2.8	粘土板	17×19	—	格子?	格子目に十字文	側端面2面ヘラ削り。	表面:明灰褐色。断面:赤褐色。砂粒・赤色スコリア少量含む。表土。	
		(20.5)										
111-4 図版21・23	中門地区	(10.0)	—	2.5	粘土板	15×22	枠板痕跡。 桶巻作り。 押印「高」 〔文字瓦No.803〕。	平行 組合式	—	広端面1面、側端面2面ヘラ削り。	淡褐色。軟質。砂粒少量。きめ細かい胎土。前内出窯産。SB216中門壺地業1-2。	
		(9.0)										
111-5 図版24	中門地区	—	—	1.6	粘土板	21×22	布目→コビ ナデ。指書 「十」〔文字 瓦No.881〕	斜格子	—	端面1面ヘラ削り。	表面:黒褐色。断面:赤褐色。硬質。緻密な胎土。SB216中門壺地業1-1。	
		(8.5)										
112-6	中門地区	—	—	2.2	粘土板	21×24	枠板痕跡 桶巻作り	平行 組合式	—	側端面1面ヘラ削り。	淡褐色。軟質。砂粒少量含む。前内出窯産。表土。	
		(16.0)										
112-7 図版21	中門地区	(13.0)	—	2.0	粘土板	((18×21))	枠板痕跡 桶巻作り	平行 組合式	—	側端面・広端面1面ヘラ削り。	淡褐色。軟質。砂粒少量含む。前内出窯産。Pt。	
		(23.0)										
112-1 図版21	区画南辺	(17.5)	—	1.7	粘土板	22×22	枠板痕跡 桶巻作り	縄L9 本	叩き→横位 ヘラナデ	側端面・広端面1面ヘラ削り。	暗赤褐色。硬質。砂粒含むが、緻密。SK3273。	
		(19.1)										
112-2	区画南辺	—	—	2.1	粘土板	22×25	枠板痕跡 桶巻作り 布目→糸切	縄	叩き→横位 ヘラナデ	—	茶褐色。硬質。砂粒・雲母少量含む。Pt3。	
		(15.0)										
112-3	区画南辺	(13.4)	—	3.2	粘土板	((24×30))	布目→糸切	正格子	叩き具幅 4.5cm	側端面・広端面1面ヘラ削り。	青配色。硬質。砂粒・白色針状物質含む。南比企業。SX249。	
		(9.0)										
113-4 図版22	区画南辺	23.5	—	2.6	粘土板	—	布目→縦位 ヘラミガキ。	斜格子	叩き具幅 8.0×7.0cm	側端面・狭端面・広端面1面ヘラ削り。	明灰色。硬質。砂粒含むが、緻密。SD194。	
		27.5										
113-5	区画南辺	39.0	—	2.3	粘土板	全面布 目ナデ 消し。	—	斜格子	叩き具幅 6.5×5.5cm	側端面・広端面2面ヘラ削り。	淡茶褐色。軟質。砂粒・赤色スコリア多く含む。SD194。	
		27.2										
114-6	区画南辺	(18.1)	—	2.3	粘土板	((14×14))	布目→糸切	格子	叩き具幅 4.0×4.0cm	側端面3面、広端面1面ヘラ削り。	灰褐色。硬質。砂粒・石英多く、やや粗い。SX249。	
		(14.0)										
114-7	区画南辺	—	—	2.1	粘土板	ナデ消 し。	—	斜格子	叩き具幅 5.5×5.5cm	—	灰褐色。硬質。砂粒少量含む。SX249。	
		(8.2)										
114-8	区画南辺	(13.6)	—	2.8	粘土板	((27×21))	—	格子	—	広端面1面ヘラ削り。	淡赤褐色。軟質。砂粒・赤色スコリア多く含む。SX249。	
		(12.4)										
114-9	区画南辺	—	—	2.0	粘土板	23×19	—	縄L9 本 格子	叩き具幅 7.0×5.0cm	側端面1面ヘラ削り。	淡褐色。軟質。砂粒・石英少量含む。SX249。	
		(7.4)										
114-10	区画南辺	(16.4)	—	2.3	粘土板	((16×16))	枠板痕跡 桶巻作り	縄L12 本	—	側端面2面、広端面1面ヘラ削り。	灰褐色。硬質。石英含む。緻密な胎土。SX249。	
		(13.7)										

第45表 女瓦観察表(3)(図面108~120、図版20~24)

図面 図版	出土 位置	先端		厚さ	成・整形の特徴						備考
		広端 全長	素材		凹面		凸面		端面 特徴		
					布目	特徴	叩き	特徴			
114-11	区画南辺	—	粘土板	2.0	(24× 24)	布目→縦位 ヘラ削り	縄	叩き→横位 ヘラナデ	側端面3面、広端 面2面ヘラ削り。	赤褐色。軟質。砂粒・雲母 少量含む。SX249。	
		(10.9)									
114-12	区画南辺	—	粘土板	2.1	33×30	—	縄L12 本	—	広端面1面ヘラ削 り	淡褐色。軟質。砂粒多く含 み、粗い。SX249。	
		(18.9)									
115-13	区画南辺	—	粘土板	2.7	23×21	—	縄L13 本	—	広端面2面、側端 面3面ヘラ削り。	表面：黒灰色。断面：赤褐色。 砂粒・石英多く含む、粗い。 SK3273。	
		(12.0)									
115-14 図版22	区画南辺	—	粘土板	2.3	16×16	—	縄L11 本	—	広端面2面、側端 面1面ヘラ削り。 朱墨痕あり。	灰褐色。やや軟質。砂粒・ 石英少量含む。SK3273。	
		(21.0)									
116-15	区画南辺	—	粘土粗	2.7	17×18	—	縄L9 本 格子	—	広端面2面、側端 面3面ヘラ削り。	橙褐色。やや軟質。砂粒・ 石英少量含む。SK3273。	
		(14.0)									
116-16	区画南辺	—	—	1.8	18×21	—	縄L9 本 格子	—	側端面1面ヘラ削 り。	淡褐色。軟質。砂粒少量含 む。SD194。	
		(26.6)									
116-1 図版22	区画北辺	—	粘土板	1.5	(17× 17)	ナデ消し	—	2葉1單位 の櫛描波状 文	—	灰褐色。やや軟質。砂粒・ 角礫少量含む。表土。	
		(8.7)									
116-1	区画北西 2区	—	粘土板	2.1	15×20	—	—	—	広端面縄叩き。側 端面2面ヘラ削 り。	灰褐色。やや軟質。砂粒・ 石英少量含む。SX339。	
		(10.5)									
116-2	区画北西 2区	—	粘土板	2.2	16×20	布目→糸切	—	—	広端面2面、側端 面2面ヘラ削り ヘラ削り。隅落とし。	暗灰褐色。硬質。砂粒・石 英多く含む。表土。	
		(5.9)									
116-3	区画北西 2区	—	粘土板	2.2	(12× 15)	—	平行	—	側端面3面ヘラ削 り。	灰褐色。硬質。砂粒・石英 ・白色針状物質含む。南比 企業。	
		(11.6)									
117-1	塔跡2 地区	—	粘土板	1.9	(27× 27)	桧板痕跡 桶巻作り?	縄	叩き→ナデ	—	暗褐色。硬質。砂粒多く含 む。SB224 版築内。	
		(10.9)									
117-2	塔跡2 地区	—	粘土板	2.7	布目ヘ ラナデ 消し。	—	正格子	—	広端面1面、側端 面2面ヘラ削り。	淡褐色。軟質。砂粒・石英 少量含む。SX268。	
		(7.4)									
117-3	塔跡2 地区	—	—	1.9	21×18	—	格子	—	側端面2面ヘラ削 り。	暗灰色。硬質。砂粒・石英 含む。SK3263。	
		(6.8)									
117-4	塔跡2 地区	—	—	2.5	(21× 18)	布目→糸切	格子	—	側端面1面ヘラ削 り。	暗灰色。硬質。砂粒・石英 ・白色針状物質含む。南比 企業。SK3263。	
		(13.9)									
117-5	塔跡2 地区	—	粘土板	2.2	布目ヘ ラナデ 消し	—	斜格子	—	広端面1面、側端 面2面ヘラ削り。	暗灰色。軟質。砂粒・石英 少量含む。SX268。	
		(15.0)									
117-6	塔跡2 地区	—	粘土板	2.5	(21× 21)	—	斜格子	—	側端面2面ヘラ削 り。	灰白色。軟質。砂粒少量含 む。SK3264。	
		(8.0)									
117-7	塔跡2 地区	—	粘土板	1.7	19×20	—	斜格子	—	広端面・側端面1 面ヘラ削り。	灰褐色。硬質。砂粒・石英 少量含む。SB224 版築内。	
		(11.5)									
118-8	塔跡2 地区	—	粘土板	1.8	17×17	—	斜格子	—	—	灰白色。軟質。砂粒少量含 む。SK3263。	
		(11.6)									
118-9	塔跡2 地区	—	—	1.4	(27× 27)	—	正格子	—	側端面3面ヘラ削 り。	灰白色。硬質。砂粒少量含 む。SB224 版築内。	
		(4.8)									
118-10	塔跡2 地区	—	—	1.7	(15× 24)	—	格子?	—	側端面2面ヘラ削 り。	灰褐色。硬質。きめ細かい 胎土。SB224 版築内。	
		(5.8)									

第45表 女瓦観察表(4)(図面108~120、図版20~24)

図面 図版	出土 位置	先端		厚さ	素材	成・整形の特徴				備考
		広端 全長	凹面 特徴			凸面 特徴		端面 特徴		
						叩き	特徴			
118-11	塔跡2 地区	—	(24× 24)	3.2	—	ヘラ書?	格子	—	広端面・側端面1 面ヘラ削り。	表面:灰白色。断面:赤褐色。 砂粒少量含む。SB224 版築内。
		(2.6)								
118-12	塔跡2 地区	(23.6)	(30× 30)	3.6	粘土板	布目→幅2 cm×5条1 単位のハケ メ	縄L13 本	叩き具幅 5.0cm	広端面2面、側端 面1面ヘラ削り。	表面:暗褐色。断面:赤褐色。 砂粒・石英多く含む。粗い。 SX270。
		(14.6)								
118-13	塔跡2 地区	—	29×21	2.3	粘土板	—	縄L9 本	—	側端面2面ヘラ削 り。	隅切瓦?明灰褐色。硬質。 砂粒・石英含む。SX269。
		(12.2)								
118-14	塔跡2 地区	—	21×20	1.8	粘土板	布目→糸切	縄L13 本	—	側端面2面ヘラ削 り。	表面:黒褐色。断面:淡褐色。 軟質。砂粒多く含む。粗い。 SB224 版築内。
		(9.9)								
119-15	塔跡2 地区	—	21×22	2.3	粘土板	—	縄L11 本	—	側端面1面ヘラ削 り。	灰褐色。軟質。砂粒・石英 含む。SX269柱穴当り。
		(11.4) (15.7)								
119-16	塔跡2 地区	—	20×19	1.9	粘土板	—	縄L10 本	—	—	淡褐色。軟質。砂粒・石英 多く含む。SK3258。
		(12.2)								
119-17	塔跡2 地区	—	23×25	2.0	粘土板	—	縄L11 本	—	側端面1面ヘラ削 り。	灰褐色。やや硬質。砂粒・石 英含む。SK3264。
		(20.5)								
119-18	塔跡2 地区	(14.3)	31×34	2.1	粘土板	—	—	—	側端面2面ヘラ削 り。	淡褐色。軟質。砂粒・石英 含む。SK3264。
		(22.0)								
120-19	塔跡2 地区	(14.0)	19×22	2.3	粘土板	—	縄L8 本	—	側端面1面ヘラ削 り。	灰褐色。軟質。砂粒多く含 み。粗い。SK3264。
		(32.1)								
120-20	塔跡2 地区	—	—	2.7	—	剥離 指紋あり	縄L9 本	—	—	灰褐色。軟質。砂粒少量含 む。SB224 版築内。
		(3.4)								
120-21	塔跡2 地区	—	14×14	1.5	粘土板	—	縄L7 本	—	—	灰白色。軟質。砂粒少量含 む。SX285。
		(6.0) (10.5)								
120-22	塔跡2 地区	—	—	1.1	—	剥離 —	格子?	—	—	表面:黒灰色。断面:褐色。 砂粒・赤色スコリア少量含 む。SB224 版築内。
		(4.3)								
120-23	塔跡2 地区	—	—	1.3	—	剥離 —	縄L9 本	—	—	灰褐色。軟質。砂粒を含み 粗い。SB224 版築内。
		(3.0)								
120-24	塔跡2 地区	—	—	2.8	—	ナデ —	縄L15 本	—	—	表面:黒灰色。断面:褐色。 砂粒含む。粗い。SB224 版 築内。
		(4.6)								
120-25	塔跡2 地区	(5.4)	25×28	2.3	粘土板	摺打痕あり	正格子	—	広端面・側端面2 面ヘラ削り。	灰褐色。硬質。砂粒少量含 む。表土。
		— 18.1								
120-26	塔跡2 地区	—	—	2.0	—	ナデ —	縄L12 本	—	—	表面:黒灰色。断面:灰褐色。 砂粒含むが緻密。SB224 版 築内。
		(3.7)								

第46表 金堂地区出土埴観察表(図面121~123)

図面 図版	長辺 短辺 厚(cm)	重さ (g)	残存	色調	焼成	胎土	調整	特徴・出土地点等
121-1	(14.0) 16.0 5.0	1,897	1/2	暗褐色	良	軟質。小礫・白色針状物質 少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	南比企窯産。 5~8区表土。
121-2	(11.5) 15.6 5.0	1,263	1/4	灰色	良	硬質。小礫・白色針状物質 少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	南比企窯産。 表土。
121-3	(11.0) 15.3 5.7	1,408	1/4	白灰色	良	硬質。砂粒・白色針状物質 少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	南比企窯産。 表土。
121-4	(13.8) (12.7) 5.8	1,332	1/4	白灰色	良	硬質。砂粒多く含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	側面に「中」押印あり(図 面177-1106)。表土。
121-5	(13.6) (11.4) 5.5	959	1/4	明黄色	良	軟質。砂粒少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	表土。
122-6	(8.7) 16.7 5.6	1,070	1/6	灰色	良	硬質。礫少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	上面中央降灰軸。 表土。
122-7	(11.8) (14.8) 5.2	1,000	1/4	黄白色	良	軟質。緻密。砂粒・雲母少 量含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	粘土板3枚。 表土。
122-8	(8.4) (11.3) 5.5	898	1/6	濃灰色	良	硬質。砂粒・白色針状物質 少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	南比企窯産。 表土。
122-9	(14.3) (10.3) 6.7	1,337	1/4	暗灰色	良	硬質。砂粒・礫・白色針状 物質含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	上面・下面降灰軸。 南比企窯産。2区瓦瀝。
122-10	(16.5) (7.5) (6.6)	1,190	1/4	灰色	良	硬質。小礫・白色針状物質 少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	南比企窯産。隅部被熱赤化。 8区瓦瀝。
122-11	(15.0) (6.5) 6.0	980	1/6	明灰色	良	硬質。砂粒・白色針状物質 少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	南比企窯産。 表土。
122-12	(17.6) (10.6) 5.3	1,229	1/4	明灰色	良	硬質。砂粒・小礫を含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	表土。
123-13	(14.4) (9.3) 5.7	845	1/4	灰白色	良	軟質。緻密。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	粘土板3枚。 表土。
123-14	(21.8) (10.4) 7.4	1,820	1/4	灰白色	良	軟質。砂粒・白色針状物質 含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ、目の粗いハケメ状の 条線あり。	南比企窯産。 上面に「父」押印(図版 177-1107)。表土。
123-15	(12.5) (10.5) 5.2	802	1/6	濃灰色	良	硬質。砂粒・小礫を含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	表土。
123-16	(8.6) (2.8) 6.0	170	1/4	灰色	良	硬質。砂粒・雲母・白色針 状物質含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	南比企窯産。 側面にヘラ書「橘」(1100)。 表土。

第47表 講堂地区出土埴観察表(1)(図面124~130、図版25~26)

図面 図版	長辺 短辺 厚(cm)	重さ (g)	残存	色調	焼成	胎土	調整	特徴・出土地点等
124-1 図版25	26.7 15.4 5.5	4,257	完形	明灰色	良	硬質。砂粒・小礫・白色針 状物質を含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	南比企窯産。 12区表土。
124-2 図版25	26.9 16.8 5.4	4,266	完形	灰白色	良	軟質。砂粒多く、小礫少量 含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	3片接合。 表土。
125-3 図版26	26.0 15.0 5.3	4,046	完形	明灰色	良	硬質。砂粒多く、粗い。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	全面に濃緑色の降灰軸付着。 側面1面に重積痕あり。表 土。
125-4 図版26	30.5 (15.5) 7.5	5,508	1/2	淡褐色	良	軟質。小礫・白色針状物質 を少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケ ズリ	粘土板4枚。南比企窯産。 埋戻土。

第47表 講堂地区出土埴観察表(2)(図面124~130、図版25・26)

図面 図版	長辺 短辺 厚(cm)	重さ (g)	残存	色調	焼成	胎土	調整	特徴・出土地点等
126-5	24.5 17.5 6.5	4,087	3/4	明褐色	良	軟質。小礫多く、白色針状物質少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	南比企窯産。表面摩耗。表土。
126-6	(19.0) 16.9 6.3	3,004	1/2	灰白色	良	軟質。小礫・雲母少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	表土。
126-7	(20.0) 16.5 6.8	3,419	1/2	明黄色	良	軟質。小礫・雲母少量含む。	上面・側面・ヘラケズリ 下面・ナデ	表土。
127-8	(19.4) 16.2 5.8	2,430	1/2	灰褐色	良	軟質。小礫多く、雲母少量含む。	上面・側面・ヘラケズリ 下面・布目	5区表土。
127-9	(20.6) 15.5 5.0	2,391	1/2	褐色	良	硬質。礫多く、白色針状物質少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	上面にヘラ書「加」(1104)。南比企窯産。9区表土。
127-10	(16.6) 15.8 5.5	2,221	1/2	濃灰色	良	硬質。砂粒多く含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	側面にヘラ書「父」(1108)。南比企窯産。5区表土。
127-11	(15.3) 15.5 5.7	2,200	1/2	濃灰色	良	硬質。砂粒・小礫・白色針状物質を含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	南比企窯産。埋戻土。
128-12	(17.2) 16.8 6.1	2,625	1/2	灰白色	良	硬質。砂粒・雲母・白色針状物質を含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	南比企窯産。埋戻土。
128-13	(15.0) 15.8 5.0	1,803	1/2	濃灰色	良	硬質。小礫・白色針状物質を含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	側面にヘラ書「瓦」(1110)。南比企窯産。5区表土。
128-14	(15.9) 16.0 6.0	972	1/2	灰白色	良	軟質。小礫を多く含み、粗い。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	埋戻土。
129-15	(11.2) 16.2 6.0	1,766	1/3	灰色	良	硬質。砂粒・小礫を含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	10区表土。
129-16	(14.7) 17.0 5.8	1,899	1/2	黄褐色	良	軟質。砂粒・雲母を含む。	上面・側面・ヘラケズリ 下面・布目	側面外周黒色。12区表土。
129-17	(14.3) 15.9 5.2	1,679	1/2	濃灰色	良	硬質。砂粒・白色針状物質を少量含む。	上面・側面・ヘラケズリ 下面・ヘラケズリ→ナデ	粘土板2枚。南比企窯産。10区表土。
129-18	(9.0) 15.3 5.4	1,047	1/4	明灰色	良	硬質。小礫・白色針状物質を含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	粘土板3枚。上面にヘラ書「加」(1105)。南比企窯産。12区表土。
129-19	(6.1) 16.5 (3.9)	157	1/12	濃灰色	良	硬質。砂粒多く含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	側面にヘラ書「大里」(1102)。2区埋戻土。
129-20	(14.5) (11.5) 7.0	1,422	1/4	赤褐色	良	硬質。砂粒・白色針状物質を少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	粘土板3枚。南比企窯産。埋戻土。
129-21	(18.0) (13.0) 6.6	1,822	1/3	明灰色	良	硬質。砂粒多く含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	側面にヘラ書「大里」(1101)。1区表土。
129-22	(10.2) (11.1) 6.5	1,075	1/8	明褐色	良	軟質。小礫を多く含み、雲母少量ふうむ。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	粘土板3枚。3-2区表土。

第48表 鐘楼地区出土埴観察表(図面130)

図面 図版	長辺 短辺 厚(cm)	重さ (g)	残存	色調	焼成	胎土	調整	特徴・出土地点等
130-1	(12.5) 16.3 5.3	1,051	1/4	橙褐色	良	軟質。礫多く、雲母・白色針状物質を少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	粘土板3枚。南比企窯産。表土。
130-2	(10.2) (11.1) 6.0	1,036	1/6	灰褐色	良	硬質。小礫多く含み、粗い。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	Dトレンチ内。

第49表 堂間地区(金堂・講堂間)出土土壌観察表(図面130)

図面 図版	長辺 短辺 厚(cm)	重さ (g)	残存	色調	焼成	胎土	調整	特徴・出土地点等
130-1	(15.1) 16.5 6.3	2,128	1/2	灰褐色	良	硬質。礫・白色針状物質を少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	南比企窯産。3区西表土。
130-2	(10.1) 16.8 5.9	1,435	1/4	暗灰色	良	硬質。砂粒・白色針状物質を少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	南比企窯産。表土。
130-3	(11.9) 17.3 7.3	1,745	1/4	灰白色	良	軟質。砂粒・白色針状物質を少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	南比企窯産。6区表土。
130-4	(15.7) 12.0 5.0	1,054	1/4	黒灰色	良	硬質。小石少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	粘土板3枚。降灰軸付着。6区攪乱。
130-5	(11.8) 10.0 6.1	790	1/6	灰褐色	良	軟質。砂粒・雲母少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	表土。

第50表 中門地区出土土壌観察表(図面131)

図面 図版	長辺 短辺 厚(cm)	重さ (g)	残存	色調	焼成	胎土	調整	特徴・出土地点等
131-1	(19.4) 16.0 6.1	2,634	1/2	明灰色	良	硬質。小礫多く含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	上面にヘラ書「父」(1109)。表土。
131-2	(14.5) 16.0 5.5	1,566	1/4	灰褐色	良	硬質。小礫・白色針状物質を少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	南比企窯産。SK3335。
131-3	(12.5) 11.7 6.0	1,175	1/6	黄褐色	良	軟質。礫多く含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	粘土板3枚。側面にヘラ書「加」(1103)。表土。

第51表 (伽藍中樞部区画施設)区画南辺出土土壌観察表(図面131)

図面 図版	長辺 短辺 厚(cm)	重さ (g)	残存	色調	焼成	胎土	調整	特徴・出土地点等
131-1	(20.2) 11.4 6.4	1,687	1/4	橙褐色	良	硬質。小礫・白色針状物質を少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	粘土板4枚。側面に押印「種」。南比企窯産。SD194。

第52表 (伽藍中樞部区画施設)区画北辺出土土壌観察表(図面132)

図面 図版	長辺 短辺 厚(cm)	重さ (g)	残存	色調	焼成	胎土	調整	特徴・出土地点等
132-1	(16.9) 15.4 5.6	2,209	1/2	青灰色	良	硬質。砂粒・白色針状物質を少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	粘土板3枚。上面にヘラ書「父」。南比企窯産。表土。
132-2	(16.8) 16.9 6.0	2,401	1/2	灰白色	良	硬質。砂粒・雲母少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	表土。
132-3	(17.7) 16.7 5.8	1,941	1/2	黒褐色	良	軟質。砂粒・雲母少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	表土。
132-4	(13.3) 17.4 (4.8)	1,235	1/4	淡黄色	良	軟質。砂粒を少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	表土。
132-5	(9.3) 9.4 5.9	663	1/6	灰色	良	硬質。小礫・砂粒・白色針状物質を含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	南比企窯産。表土。
132-6	(13.2) 11.3 (3.7)	695	1/6	明灰色	良	硬質。砂粒・白色針状物質を含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	上面に押印「埴」。南比企窯産。硬化而下。

第 53 表 (伽藍中樞部区画施設) 区画北西出土土塊観察表 (図面 133)

図面 図版	長辺 短辺 厚 (cm)	重さ (g)	残存	色調	焼成	胎土	調整	特徴・出土地点等
133-1	(17.3) 16.5 6.0	2,574	1/2	明黄色	良	軟質。砂粒・雲母少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	1区・表土。
133-2	(11.1) 16.0 6.0	1,443	1/4	濃灰色	良	硬質。砂粒・白色針状物質を少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	粘土板 3枚。南比企窯産。2区・SX337。
133-3	(11.2) (11.9) 5.2	916	1/6	濃灰色	良	硬質。砂粒・白色針状物質を少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	南比企窯産。2区・表土。

第 54 表 塔跡 2 地区出土土塊観察表 (図面 133)

図面 図版	長辺 短辺 厚 (cm)	重さ (g)	残存	色調	焼成	胎土	調整	特徴・出土地点等
133-1	(9.3) (13.5) 5.4	931	1/6	明灰色	良	硬質。砂粒少量含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	攪乱。
133-2	(11.3) (10.5) 5.9	1,428	1/4	濃灰色	良	硬質。砂粒・白色針状物質を含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	側面煤付着。南比企窯産。攪乱。
133-3	(9.6) (10.5) 5.0	693	1/6	濃灰色	良	硬質。砂粒・白色針状物質を含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	粘土板 3枚。南比企窯産。攪乱。
133-4	(15.2) (12.3) 7.0	1,110	1/4	明灰色	良	硬質。砂粒を多く含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	粘土板 3枚。攪乱。
133-5	(11.3) (14.5) (4.5)	757	1/4	橙褐色	やや軟	軟質。砂粒・小礫を含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	側面に押印「埴」。表土。

第 55 表 塔跡 2 周辺地区出土土塊観察表 (図面 133)

図面 図版	長辺 短辺 厚 (cm)	重さ (g)	残存	色調	焼成	胎土	調整	特徴・出土地点等
133-1	(12.5) 16.1 (3.5)	1,002	1/4	暗灰色	良	硬質。砂粒・白色針状物質を含む。	上面・側面・下面・ヘラケズリ	南比企窯産。表土。

第56表 銭貨計測表 (図面134、図版27)

No.	銭路	銭径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	素材	産地	初鋳年	字体	出土位置・備考
1	隆平永寶	2.5	0.8	2.1	銅	日本	796		(伽藍中樞部区画施設)区画北西1区。SD423。
2	景德元寶	2.4	0.6	1.9	銅	北宋	1004		(伽藍中樞部区画施設)区画北辺。表土。
3	明道元寶	2.4	0.7	2.5	銅	北宋	1032	篆書	講堂地区3-1区。旧トレンチ埋土。
4	嘉祐元寶	2.4	0.8	2.3	銅	北宋	1056	篆書	講堂地区4区。旧トレンチ埋土。
5	熙寧元寶	2.4	0.7	1.4	銅	北宋	1068	篆書	講堂地区3-1区。旧トレンチ埋土。
6	紹聖元寶		0.7	1.1	銅	北宋	1094	篆書	講堂地区3-2区。旧トレンチ埋土。
7	聖宋元寶	2.2	0.6	2	銅	北宋	1101	行書	講堂地区2区。SX312。
8	宣和通寶	2.3	0.6	2.3	銅	北宋	1119	篆書	鐘樓地区。Aトレンチ。
9	永樂通寶	2.5	0.6	2.7	銅	明	1408		南門地区。北壁硬質面。
10	寛永通寶	2.4	0.6	2.5	銅	日本			堂間地区(中門・金堂間)。表土。
11	寛永通寶	2.4	0.6	1.8	銅	日本			講堂地区3-1区。埋土。
12	寛永通寶	2.2	0.7	1.8	銅	日本			講堂地区10区東。表土。
13	寛永通寶	2.3	0.6	2.3	銅	日本			金堂地区4区東。表土。
14	寛永通寶	2.2	0.6	2.4	銅	日本			講堂地区2区。表土。
15	寛永通寶	2.3	0.7	1.7	銅	日本			金堂地区26区。表土。
16	寛永通寶	2.2	0.7	1.8	銅	日本			講堂地区10区西。表土。
17	寛永通寶		0.7	1.1	銅	日本			金堂地区6区。埋土。
18	□□□寶	2.3	0.7	2.3	銅	不明	不明		講堂地区3-1区。旧トレンチ埋土。

第57表 金属製品計測表(1)(図面135・136、図版27・28)

図面 図版	種別	法量 (cm)					重量 (g)	出土位置
		最大長	最大幅	最大厚	径	高さ		
135-1 図版27	鉄釘	4.9	1.9	1.7			27.0	塔跡2地区-表土。
135-2	鉄釘	7.0	1.2	2.3			17.0	金堂地区4区-表土。
135-3	鉄釘	8.7	1.1	0.7			12.0	講堂地区14区-表土。
135-4	鉄釘	6.3	1.9	1.3			16.0	講堂地区1区-埋戻土。
135-5 図版27	鉄釘	10.2	1.1	1.3			25.0	塔跡1地区-表土。
135-6	鉄釘	7.5	1.3	0.8			13.0	講堂地区14区-表土。
135-7	鉄釘	10.5	1.3	1.2			22.0	塔跡2地区-表土。
135-8 図版27	鉄釘	9.0	1.3	0.9			34.0	塔跡2地区-表土。
135-9	鉄釘	7.1	1.5	0.8			12.0	講堂地区14区-表土。
135-10 図版27	鉄釘	5.0	2.3	1.2			8.0	講堂地区10区-表土。

第57表 金属製品計測表(2)(図面135・136、図版27・28)

図面 図版	種別	法量 (cm)					重量 (g)	出土位置
		最大長	最大幅	最大厚	径	高さ		
135-11	鉄釘	4.0	1.1	1.1			3.0	講堂地区10区東。
135-12	鉄釘	12.0	1.5	1.5			27.0	講堂地区8区-表土。
135-13 図版27	鉄釘	8.8	1.8	2.2			32.0	金堂地区7区東。
135-14	鉄釘	8.0	1.6	1.2			11.0	講堂地区10区東-表土。
135-15 図版28	鉄釘	13.7	2.6	1.1			39.0	講堂地区8区-表土。
135-16 図版28	鉄釘	10.6	2.9	1.1			55.0	講堂地区8区-表土。
135-17	鉄釘	15.6	3.0	1.7			69.0	講堂地区8区-表土。
135-18	鉄釘	9.4	1.8	1.6			69.0	講堂地区5-3区。
135-19	鉄釘	6.8	1.9	1.2			26.0	講堂地区-表土。
135-20 図版28	鉄釘	12.1	1.4	0.6			45.0	金堂地区7区-埋戻土。
135-21 図版28	鉄釘	9.7	2.1	2.0			49.0	金堂地区7区-埋戻土。
136-22	棒状製品	10.0	1.1	1.0			35.0	塔跡2地区-表土。
136-23 図版28	鉄盤	8.3	1.3	0.8			13.0	(伽藍中樞部区画施設)区画北西2区-瓦瀝。
136-24 図版28	盤	16.4	0.9	0.9			27.0	金堂地区1区-表土。
136-25	不明	7.7	1.6	0.8			36.0	講堂地区14区-表土。
136-26	刀子?	5.2	1.5	0.7			5.0	講堂地区14区-表土。
136-27 図版28	円盤状	4.3	2.0	0.1			9.0	中門地区-表土。
136-28 図版28	銅鈴	3.9	4.0	0.5	4.0	2.9	24.2	金堂地区4区-表土。

第58表 鉄滓・銅滓計測表(1)(図面137~140、図版29~31)

図面 図版	種別	法量 (cm)					重量 (g)	出土位置
		最大長	最大幅	最大厚	径	高さ		
137-1 図版29	椀型滓	8.3	8.4	3.5			221.0	塔跡2地区。
137-2	椀型滓	10.4	12.6	3.3			363.0	塔跡2地区-表土。
137-3 図版29	椀型滓	9.9	11.0	4.1			635.0	塔跡2地区-SB224。
137-4	椀型滓	7.2	8.2	2.7			172.0	塔跡2地区-表土。
136-5	椀型滓	4.8	6.7	2.7			100.0	中門地区-表土。
137-6	椀型滓	5.0	8.6	2.6			112.0	講堂地区1区-埋戻土。
137-7 図版29	椀型滓	7.8	15.0	5.8			727.0	中門地区-表土。
138-8	椀型滓	8.2	13.6	6.0			961.0	中門地区-攪乱。
138-9	椀型滓	8.5	8.4	3.0			202.0	塔跡2地区-表土。
138-10 図版29	椀型滓	4.6	7.6	2.2			73.0	南門地区-旧トレ埋戻土。

第58表 鉄滓・銅滓計測表(2)(図面137～140、図版29～31)

図面 図版	種別	法量 (cm)					重量 (g)	出土位置
		最大長	最大幅	最大厚	径	高さ		
138-11	椀型滓	6.1	6.1	1.7			75.0	堂間地区(金堂・講堂間)6区-SX327。
138-12 図版 29	椀型滓	6.0	6.7	3.2			68.0	(加藍中樞区画施設)区西北西2区-SX337。
138-13	鉄滓	3.7	3.1	2.4			13.0	塔跡2地区-表土。
138-14 図版 29	鉄滓	7.0	4.7	2.9			99.0	塔跡2地区-攪乱。
138-15	鉄滓	5.2	6.2	2.2			97.0	塔跡2地区-表土。
138-16	鉄滓	3.6	2.7	1.3			13.0	(加藍中樞区画施設)区西南辺。
138-17	鉄滓	4.8	3.2	1.7			16.0	(加藍中樞区画施設)区西南辺。
138-18	鉄滓	4.0	3.2	3.0			26.0	塔跡2周辺地区-SX357。
138-19	鉄滓	2.0	1.4	1.1			5.0	塔跡2周辺地区-SX357。
138-20 図版 29	鉄滓	11.0	4.5	2.6			116.0	塔跡2地区-表土。
139-21	鉄滓	2.2	2.4	1.6			10.0	塔跡2周辺地区-SX357。
139-22 図版 30	鉄滓	4.3	5.3	2.9			58.0	塔跡2周辺地区-SX357。
139-23	鉄滓	7.0	3.1	2.5			44.0	塔跡2周辺地区-SX357。
139-24	鉄滓	3.1	2.5	1.6			14.0	塔跡2周辺地区-SX357。
139-25 図版 30	鉄滓	3.0	4.3	1.7			18.0	塔跡2周辺地区-SX357。
139-26	鉄滓	2.8	3.8	1.5			19.0	塔跡2周辺地区-SX357。
139-27	鉄滓	2.5	3.2	1.7			14.0	塔跡2周辺地区-SX357。
139-28	鉄滓	2.0	3.2	1.5			11.0	塔跡2周辺地区-SX357。
139-29	鉄滓	2.2	3.5	1.2			10.0	塔跡2周辺地区-SX357。
139-30	鉄滓	4.2	3.3	2.0			15.0	塔跡2周辺地区-表土。
139-31 図版 30	鉄滓	6.8	5.8	2.0			100.0	塔跡2周辺地区。
139-32	鉄滓	4.0	5.4	2.9			71.0	塔跡2周辺地区-表土。
139-33 図版 30	鉄塊	6.1	6.3	4.3			164.0	堂間(金堂・中門間)-ビット一括。
139-34	鉄滓	8.7	6.0	3.8			205.0	金堂地区5区-表土。
139-35	鉄塊	3.5	3.8	1.7			38.0	金堂地区5区-表土。
139-36	鉄滓	4.6	3.2	1.8			22.0	鐘樓地区-表土。
139-37	鉄滓	6.1	6.8	3.7			178.0	(加藍中樞部区画施設)区西北辺-表土。
139-38 図版 30	鉄塊	3.4	3.0	2.2			26.0	堂間地区(金堂・講堂間)6区-SX311。
139-39	鉄滓	3.5	3.6	1.3			16.0	経蔵地区-表土。
140-40 図版 30	か壁	3.7	8.3	3.1			86.0	塔跡2地区-攪乱。
140-41 図版 30	か壁	5.5	6.8	1.8			52.0	堂間地区(金堂・講堂間)-表土。

第 58 表 鉄滓・銅滓計測表 (3) (図面 137 ~ 140、図版 29 ~ 31)

図面 図版	種別	法量 (cm)					重量 (g)	出土位置
		最大長	最大幅	最大厚	径	高さ		
140-42 図版 30	炉壁	8.3	8.7	6.5			208.0	金堂地区 8 区 - 表土。
140-43	炉壁	7.5	5.8	2.9			42.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。銅滓付着。
140-44	炉壁	2.2	2.0	1.5			2.0	講堂地区 - 埋戻土。土器片付着。
140-45	炉壁	3.2	2.1	1.0			8.0	堂間地区 (金堂・講堂間) - 表土。
140-46 図版 31	銅滓	2.7	1.0	0.6			4.0	堂間地区 (金堂・講堂間) - 表土。
140-47 図版 31	銅滓	4.4	3.8	2.3			16.0	金堂地区 5 区 - 表土。
140-48 図版 31	銅滓	5.0	3.4	2.7			44.0	(加籠中樞区西施設) 区西北西 1 区 -SD423。
140-49 図版 31	銅滓	2.5	2.3	2.0			20.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-50 図版 31	銅滓	3.0	1.4	1.0			8.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-51 図版 31	銅滓	2.4	2.4	1.3			8.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-52 図版 31	銅滓	1.4	1.0	0.7			2.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-53 図版 31	銅滓	2.4	0.9	1.2			3.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-54 図版 31	銅滓	1.3	0.8	0.8			2.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-55 図版 31	銅滓	1.5	1.3	0.2			1.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-56 図版 31	銅滓	1.2	1.0	0.5			1.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-57 図版 31	銅滓	1.3	0.8	0.7			1.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-58 図版 31	銅滓	1.4	0.9	0.8			2.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-59 図版 31	銅滓	1.9	1.4	0.9			4.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-60 図版 31	銅滓	1.9	1.2	0.6			3.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-61 図版 31	銅滓	1.7	1.7	0.8			2.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-62 図版 31	銅滓	1.5	1.6	1.0			2.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-63 図版 31	銅滓	1.2	1.2	1.1			2.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-64 図版 31	銅滓	1.5	1.1	1.1			2.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-65 図版 31	銅滓	1.1	1.2	1.0			1.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-66 図版 31	銅滓	1.6	1.1	0.7			1.0	堂間地区 (金堂・講堂間) 2 区 - 表土。
140-67 図版 31	銅滓	2.5	1.6	0.8			4.0	講堂地区 - 埋戻土。
140-68 図版 31	銅滓	13.8	5.8	2.0			139.0	(加籠中樞区西施設) 区西南東 -SD425。
140-69 図版 31	銅滓	3.4	4.7	1.9			55.0	講堂地区 2 区 -SX312。

第59表 板碑観察表 (図面141、図版31)

No.	種別	規模 (cm)			重量 (g)	石材 (色調)	出土位置	備考
		長さ	幅	厚み				
1	板碑	23.6	23.3	2.3	2,369.0	緑泥片岩 (淡緑色)	講堂地区 2区 埋戻土	頭部は三角形に尖り、二条線を伴う。主尊は葉研形で阿弥陀如来(キリク)を表す。力の先端に点は無く、クと思われる掘り込みを有する。深澤1996分類のB3類相当か? 2枚に折損。
2	板碑	12.4	11.2	2.7	707.0	緑泥片岩 (濃緑色)	塔跡2地区 表土	頭部は欠損し、二条線を有する。主尊は葉研形で阿弥陀如来(キリク)を表し、月輪を伴う。力の先端に点を打ち、ラの跳ねは直線的である。蓮座は受花を葉研形、蓮肉はやや扁平な円形に線刻表現する。また、蓮座の下方にも何らかの線刻が見られる。深澤1996分類で主尊はA8類に、右端の点状の葉研形を受花中心花卉と左右の花卉間に入れた逆三形状の花卉と捉えれば、蓮座は1類に相当するか? 2枚に折損。
3	板碑	29.8	12.2	2.8	1,866.0	緑泥片岩 (明緑色)	中門地区 表土	右端部の蓮座反花を線刻で表している。深澤1996分類のIIもしくはIII類相当か?

第60表 石製品観察表 (図面141、図版31)

No.	種別	規模 (cm)			重量 (g)	石材	出土位置	備考
		長さ	幅	厚み				
1	砥石	8.0	2.9	2.2	70.4	流紋岩	塔跡2地区	側面4面に砥面あり側面・裏面に線状痕。
2	砥石	5.5	2.6	1.6	36.2	流紋岩	塔跡2地区 表土	側面4面に砥面あり。
3	砥石	3.8	2.1	1.5	13.4	流紋岩	中門地区 表土	側面2面に砥面あり。

第61表 縄文時代の土器観察表(1) (図面142、図版32)

No.	器種	型式	出土地点	色調	焼成	特徴
1	浅鉢	五領ヶ台式	塔跡2地区 表土	明茶褐色	良好	砂粒・雲母を少量含む。口縁部内面に2本の隆帯、口縁部内外面に幅5mmの粘土紐による輪を添付。
2	深鉢	竊穴式	堂間地区(金堂・講堂間) 2区-表土	赤褐色	良好	白色粒・砂粒を少量含む。縦方向の隆帯側面に竹管状工具による刺突文を施す。
3	深鉢	加曾利E1式	堂間地区(金堂・講堂間) 3区西-表土	淡褐色	普通	砂粒を多く含む、粗い。縦方向の2本の隆帯横に燃糸を施す。
4	深鉢	加曾利E3式	塔跡2地区 表土	淡褐色	普通	白色粒・砂粒を多く含む、粗い。口縁部肥厚。単節RL縄文を口縁部直下に施す(不鮮明)。
5	両耳盃	加曾利E3式	講堂地区 11区-表土	橙褐色	良好	白色粒・赤色スコリア・雲母を少量含む。
6	深鉢	加曾利E4式	塔跡2地区 表土	淡褐色	良好	砂粒・雲母を少量含む。口縁部外面に一条の隆帯が横位に巡る。内面器面荒れ。
7	深鉢	加曾利E4式	堂間地区(中門・金堂間) 表土	橙褐色	良好	砂粒を多く含む。縦方向の隆帯の片側に単節RL縄文、片側にミガキを施す。
8	深鉢	加曾利E4式	堂間地区(中門・金堂間) 表土	明茶褐色	良好	砂粒を少量含む。沈線で区画した内側に無節L縄文を施す。
9	深鉢	加曾利E4式	堂間地区(中門・金堂間) 表土	淡褐色	良好	砂粒を少量含む。口縁部外面に隆帯が1条横位に巡る。
10	深鉢	加曾利E4式	堂間地区(中門・金堂間) 表土	赤褐色	良好	砂粒を多く含む、粗い。口縁部外面ミガキの後、沈線で区画した内側に単節RL縄文を施す。
11	深鉢	加曾利E4式	堂間地区(中門・金堂間) 表土	橙褐色	普通	砂粒・長石を含み、粗い。口縁部外面は沈線で区画した内側に、単節RL縄文を施す。
12	浅鉢	加曾利E4式	堂間地区(中門・金堂間) 表土	黒褐色	良好	砂粒・長石を含む。口縁部外面に1条の隆帯が巡り、その直下に単節RL縄文を施す。
13	深鉢	加曾利E4式	堂間地区(中門・金堂間) 表土	橙褐色	良好	白色粒・砂粒を多く含む、粗い。縦方向に1条の隆帯が走り、片側に単節LR縄文を施す。
14	深鉢	加曾利E4式	堂間地区(中門・金堂間) 表土	赤褐色	良好	砂粒・長石を少量含む。沈線で区画した内側に単節RL縄文を施す。
15	深鉢	加曾利E4式	講堂地区 11区-表土	灰褐色	普通	砂粒を少量含む。沈線で区画した内側に単節RL縄文を施す。
16	深鉢	加曾利E4式	金堂地区 8区-表土	茶褐色	良好	砂粒・赤色スコリアを少量含む。沈線で区画した内側に単節RL縄文を施す。
17	深鉢	加曾利E4式	鐘樓地区 表土	淡褐色	良好	砂粒を多く含む、粗い。

第 61 表 縄文時代の土器観察表 (2) (図面 142、図版 32)

No.	器種	型式	出土地点	色調	焼成	特徴
18	深鉢	加曾利 E 4 式	鐘樓地区 表土	淡褐色	良好	小型の鉢？砂粒・長石を少量含む。沈線で区画した内側に単節 LR 縄文を施す。
19	深鉢	加曾利 E 4 式	鐘樓地区 表土	茶褐色	良好	砂粒を少量含む。沈線で区画した内側に単節 LR 縄文を施す。
20	深鉢	称名寺 I 式	鐘樓地区 表土	黒褐色	良好	砂粒を多く含む、粗い。沈線で区画した内側に単節 LR 縄文を施す。
21	双耳鉢	加曾利 E 4 式	鐘樓地区 表土	茶褐色	良好	砂粒を少量含む。不鮮明ながら、耳部外面に単節 LR 縄文を施す。
22	深鉢	北白川 C 式	鐘樓地区 表土	茶褐色	良好	やや波状の口縁部を呈し、口縁外面に C 字様に屈曲した沈線を巡らす。口縁内面には、横方向にハケメ状調整痕あり。
23	深鉢	堀之内 I 式	講堂地区 8 区 - 表土	淡褐色	良好	下北原タイプ。砂粒を少量含む。胴部外面に竹管状工具で 4 条 1 単位の懸垂文を描く。内面ミガキ。
24	深鉢	不明	区画北西 2 区 - 表土	橙褐色	良好	砂粒を少量含む。外面羽状縄文？前期諸磯式か？

第 62 表 縄文時代の石器観察表 (図面 143、図版 32)

No.	種別	規模 (cm)			重量 (g)	石材	出土位置	備考
		長さ	幅	厚み				
1	打製石斧	11.1	5.4	1.7	116.7	砂岩	講堂地区 10 区 - 表土	頂部欠損。円刃。片面に自然面を残す。
2	打製石斧	10.2	5.6	1.4	117.7	ホルン フェルス	堂間地区 (中門・金堂間) 表土	頂部欠損。円刃。
3	打製石斧	10.6	5.0	1.5	119.5	砂岩	堂間地区 (中門・金堂間) 表土	刃部欠損。円刃？
4	棒状磨石	13.7	4.6	2.0	199.6	片岩	塔跡 2 地区 表土	基部に研磨痕あり。
5	石錘	15.0	6.8	2.1	187.3	ホルン フェルス	塔跡 2 地区 表土	小形。片刃部円形。
6	スタンプ形 石器	9.7	9.1	5.6	654.0	砂岩	塔跡 2 地区 表土	素材棒状礫。頂部欠損。両側面に敲打による挟り部を整形。底面やや摩耗。
7	スタンプ形 石器	12.7	4.6	4.7	723.0	砂岩	塔跡 2 地区 表土	素材扁平礫。両側面に研磨による挟り部を整形。底面やや摩耗。
8	石皿 (凹石)	17.8	18.3	9.4	3440.0	砂岩	金堂地区 5 区 - 表土	平面 3 × 2 cm の楕円形で、深さ 1.5 cm 程の窪みあり。側面・底面欠損。

第 63 表 金堂地区出土文字瓦観察表(1)(図面 144~154)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
1	ヘラ書	造塔	文字「造塔」	女瓦	凸面	6区瓦溜	
2	ヘラ書	戸主大田マ子	人名	男瓦	凹面	7区表土	「戸主大田部子」
3	ヘラ書	遅マ多弥万	人名	男瓦	凹面	5区表土	「遅部多弥万」
4	ヘラ書	戸主□□	人名	女瓦	凸面	7区覆土	
5	押型	多	部名「多磨部」	女瓦	凸面	7区東埋戻土	
6	押型	多	部名「多磨部」	女瓦	凸面	5区表土	
7	押型	多	部名「多磨部」	宇瓦	凸面	9区埋戻土	同じ凸面に押印「多」(8)、宇瓦(図面 53-14、図版 14)
8	押印	多	部名「多磨部」	宇瓦	凸面	9区埋戻土	角印、陰刻、印枠□、押印2か所、同じ凸面に押型「多」(9)、宇瓦(図面 53-14、図版 14)
9	押印	多	部名「多磨部」	男瓦	凸面	7区東表土	角印、陰刻、印枠□
10	押印	多	部名「多磨部」	女瓦	凹面	7区表土	角印、陰刻、印枠□
11	押印	多	部名「多磨部」	女瓦	凹面	8区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
12	押印	多	部名「多磨部」	女瓦	凹面	7区東埋戻土	角印、陰刻、印枠□
13	押印	玉	部名「多磨部」	男瓦	凸面	7区東埋戻土	角印、陰刻、印枠□
14	押印	川口瓦印	部名「(多磨部)川口郷」	男瓦	凸面	6区瓦溜	角印、陰刻、印枠□
15	押印	石津瓦印	部名「(多磨部)石津郷」	女瓦	凸面	7区東表土	「石津瓦印?」、角印、陰刻、印枠□
16	ヘラ書	玉	部名「多磨部」	女瓦	凸面	7区西表土	
17	ヘラ書	玉	部名「多磨部」	男瓦	凸面	10区瓦溜	
18	ヘラ書	川口	部名「(多磨部)川口郷」	女瓦	凸面	7区東表土	
19	ヘラ書	尔太	部名「(多磨部)尔田郷」	女瓦	凹面	5区表土	
20	ヘラ書	尔	部名「(多磨部)尔田郷」	男瓦	凹面	7区東表土	
21	ヘラ書	海田	部名「(多磨部)海田郷」	男瓦	凹面	7区表土	
22	ヘラ書	海田	部名「(多磨部)海田郷」	男瓦	凹面	6区瓦溜	
23	模骨	玉	部名「多磨部」	女瓦	凹面	7区表土	
24	押印	都	部名「都筑部」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし
25	押印	都	部名「都筑部」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし
26	押印	都	部名「都筑部」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし
27	押印	都	部名「都筑部」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠□
28	押印	都	部名「都筑部」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠□
29	押印	都	部名「都筑部」	女瓦	凹面	24区表土	角印、陰刻、印枠□
30	押印	都	部名「都筑部」	女瓦	凹面	6区覆土	角印、陽刻、印枠□、逆字
31	押印	都	部名「都筑部」	女瓦	凹面	7区東埋戻土	角印、陰刻、印枠□
32	押印	都	部名「都筑部」	男瓦	凸面	7区東埋戻土	角印、陽刻、印枠なし
33	ヘラ書	都	部名「都筑部」	男瓦	凸面	7区東表土	
34	ヘラ書	都	部名「都筑部」	男瓦	凸面	4区表土	
35	ヘラ書	都	部名「都筑部」	女瓦	凸面	30区瓦溜	
36	押型	橘	部名「橘樹部」	女瓦	凸面	30区瓦溜	
37	押印	橘	部名「橘樹部」	男瓦	凸面	7区東表土	角印、陰刻、印枠□
38	押型	往	部名「往原部」	女瓦	凸面	7区東表土	
39	押型	往	部名「往原部」	女瓦	凸面	7区表土	凹面に押印「往」(78)
40	押型	往	部名「往原部」	女瓦	凸面	7区東表土	凹面に押印「往」(91)

第 63 表 金堂地区出土文字瓦観察表(2)(図面 144~154)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
41	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東表土	凹面に押印「往」(89)
42	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東表土	
43	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区西表土	
44	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東表土	
45	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東表土	
46	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東表土	
47	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東表土	凹面に押印「往」(77)
48	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区表土	
49	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区表土	
50	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東	凹面に押印「往」(76)
51	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	9区表土?	
52	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	6区瓦溜	
53	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東表土	
54	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東埋戻土	凹面にヘラ書「入」(147)
55	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	8区瓦溜	
56	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	27~30区表土	
57	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	30区瓦溜	
58	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区表土	
59	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区西表土	
60	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東表土	
61	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	30区瓦溜	
62	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	5区表土	
63	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東表土	
64	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区西表土	凹面に押印「往」(80)
65	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東表土	凹面に押印「往」(74)
66	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東表土	凹面に押印「往」(75)
67	押型	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	30区瓦溜	
68	押印	往	郡名「往原部」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠□
69	押印	往	郡名「往原部」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠□
70	押印	往	郡名「往原部」	女瓦	凹面	30区瓦溜	角印、陽刻、印枠□
71	押印	往	郡名「往原部」	女瓦	凸面	7区東埋戻土	角印、陽刻、印枠□
72	押印	往	郡名「往原部」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠□
73	押印	往	郡名「往原部」	女瓦	凹面	表土	角印、陽刻、印枠□
74	押印	往	郡名「往原部」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし、凸面に押型「往」(65)
75	押印	往	郡名「往原部」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし、凸面に押型「往」(66)
76	押印	往	郡名「往原部」	女瓦	凹面	7区東	角印、陽刻、印枠なし、凸面に押型「往」(50)
77	押印	往	郡名「往原部」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし、凸面に押型「往」(47)
78	押印	往	郡名「往原部」	女瓦	凹面	7区表土	角印、陽刻、印枠なし、凸面に押型「往」(39)
79	押印	往	郡名「往原部」	男瓦	端面	7区西表土	角印、陽刻、印枠なし

第 63 表 金堂地区出土文字瓦観察表(3)(図面 144 ~ 154)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
80	押印	往	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	7区西表土	角印、陽刻、印枠なし、凸面に押型「往」(64)
81	押印	往	郡名「往原郡」	男瓦	端面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし
82	押印	往	郡名「往原郡」	男瓦	端面	7区西表土	角印、陽刻、印枠なし
83	押印	往	郡名「往原郡」	男瓦	端面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし
84	押印	往	郡名「往原郡」	男瓦	端面	8区埋戻土	角印、陽刻、印枠なし
85	押印	往	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	21区表土	角印、陽刻、印枠なし
86	押印	往	郡名「往原郡」	男瓦	端面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし
87	押印	往	郡名「往原郡」	男瓦	端面	5区表土	角印、陽刻、印枠なし
88	押印	往	郡名「往原郡」	男瓦	端面	9区表土	角印、陽刻、印枠なし
89	押印	往	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし、凸面に押型「往」(41)、2カ所
90	押印	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	8区瓦溜	角印、陽刻、印枠なし
91	押印	往	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし、凸面に押型「往」(40)
92	押印	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし
93	押印	往	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	7区西表土	角印、陽刻、印枠なし
94	へら書	往原	郡名「往原郡」	男瓦	凸面	10区攪乱	
95	へら書	往	郡名「往原郡」	男瓦	端面	17区東表土	
96	へら書	往	郡名「往原郡」	男瓦	凸面	7区東表土	
97	へら書	往	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	6区表土	
98	へら書	原	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	7区表土	
99	へら書	往	郡名「往原郡」	男瓦	凹面	6区攪乱	
100	へら書	往	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	9区表土	
101	へら書	往	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	7区東埋戻土	
102	へら書	往?	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	7区東表土	
103	へら書	木木田	郷名「(往原郡)木田郷」	女瓦	凹面	7区東表土	
104	へら書	木田	郷名「(往原郡)木田郷」	女瓦	凹面	7区東表土	
105	へら書	木田	郷名「(往原郡)木田郷」	男瓦	凹面	5区表土	
106	へら書	木田	郷名「(往原郡)木田郷」	男瓦	凹面	7区表土	
107	へら書	木田	郷名「(往原郡)木田郷」	女瓦	凹面	7区表土	
108	へら書	木	郷名「(往原郡)木田郷」	女瓦	凹面	7区東埋戻土	
109	へら書	木□	郷名「(往原郡)木田郷」	女瓦	凹面	30区瓦溜	
110	押印	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	7区西埋戻土	角印、陰刻、印枠
111	押印	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	17区東	角印、陰刻、印枠
112	押印	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	7区東表土	角印、陰刻、印枠
113	押印	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	7区表土	角印、陰刻、印枠
114	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陰刻、印枠
115	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陰刻、印枠
116	押印	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	7区東	角印、陰刻、印枠
117	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	7区西表土	角印、陰刻、印枠
118	押印	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	5区表土	角印、陽刻、印枠
119	押印	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	7区西表土	角印、陽刻、印枠なし

第63表 金堂地区出土文字瓦観察表(4)(図面144~154)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
120	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	18区表土	角印、陰刻、印杵なし
121	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	30区瓦溜	角印、陰刻、印杵なし
122	押印	荒	郷名「(豊島郡)荒島郷」	女瓦	凹面	7区西埋戻土	角印、陰刻、印杵□
123	押印	廣瓦	郷名「(豊島郡)廣岡郷」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陰刻、印杵□
124	ヘラ書	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	5区表土	
125	ヘラ書	豊?	郡名「豊島郡」	男瓦	凹面	5区表土	
126	ヘラ書	豊?	郡名「豊島郡」	男瓦	凹面	30区瓦溜	
127	ヘラ書	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	9区表土	
128	ヘラ書	豊白方	郡郷名「豊島郡白方郷」	男瓦	凸面	7区東表土	
129	ヘラ書	日頭	郷名「(豊島郡)日頭郷」	男瓦	端面	7区	
130	ヘラ書	日頭	郷名「(豊島郡)日頭郷」	男瓦	端面	7区表土	
131	ヘラ書	廣	郷名「(豊島郡)廣岡郷」	男瓦	端面	1区表土	
132	ヘラ書	廣	郷名「(豊島郡)廣岡郷」	男瓦	端面	5区表土	
133	押印	足?	郡名「足立郡」	隅切瓦	凹面	7区	角印、陰刻、印杵□、隅切瓦(図面87-2、図版17)
134	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	6区瓦溜	
135	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	7区西表土	
136	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	6区攪乱	
137	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	10区	
138	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	12区埋戻土	
139	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	12区	
140	ヘラ書	足?	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	25区表土	
141	押印	入瓦	郡名「入間郡」	男瓦	凸面	7区東表土	角印、陰刻、印杵□
142	押印	入瓦	郡名「入間郡」	男瓦	凸面	8区埋戻土	角印、陰刻、印杵□
143	押印	入	郡名「入間郡」	女瓦	凹面	30区瓦溜	角印、陰刻、印杵□
144	ヘラ書	入麻	郡名「入間郡」	男瓦	凹面	9区埋戻土	
145	ヘラ書	入麻	郡名「入間郡」	女瓦	凹面	7区表土	
146	ヘラ書	入	郡名「入間郡」	男瓦	凸面	7区東表土	
147	ヘラ書	人	郡名「入間郡」	女瓦	凹面	7区東埋戻土	凸面に押型「任」(54)
148	ヘラ書	人	郡名「入間郡」	女瓦	凹面	7区表土	
149	ヘラ書	麻	郡名「入間郡」	女瓦	凹面	7区東表土	
150	押型	高	郡名「高麗郡」	女瓦	凸面	30区瓦溜	
151	押印	高	郡名「高麗郡」	男瓦	凸面	17区東	角印、陰刻、印杵□
152	押印	高	郡名「高麗郡」	男瓦	凸面	7区東表土	丸印、陰刻、印杵○
153	押印	高?	郡名「高麗郡」	女瓦	凹面	5区表土	角印、陰刻、印杵なし
154	押印	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	7区東表土	「企」、角印、陰刻、印杵□
155	押印	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	7区西表土	「企」、角印、陰刻、印杵□
156	押印	企	郡名「比企郡」	女瓦	凹面	7区東表土	「企」、角印、陰刻、印杵□
157	押印	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	7区東埋戻土	「企」、角印、陰刻、印杵□
158	押印	企	郡名「比企郡」	女瓦	凹面	7区東表土	「企」、角印、陰刻、印杵□
159	押印	企	郡名「比企郡」	女瓦	凹面	3区埋戻土	「企」、角印、陰刻、印杵□
160	押印	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	6区瓦溜	「企」、角印、陰刻、印杵□

第 63 表 金堂地区出土文字瓦観察表(5) (図面 144 ~ 154)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
161	押印	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	9区埋戻土	「企」、角印、陰刻、印枠□
162	押印	企	郡名「比企郡」	女瓦	凹面	7区東埋戻土	「企」、角印、陰刻、印枠□
163	押印	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	7区東	「企」、角印、陰刻、印枠□
164	押印	企	郡名「比企郡」	女瓦	凹面	7区東表土	「企」、角印、陰刻、印枠□
165	押印/ ヘラ書	横 / 横	郡名「横見郡」	女瓦	凹面	5区埋戻土	押印:角印、陰刻、印枠□
166	押印	埴	郡名「埴玉郡」	男瓦	凸面	8区掘瓦	角印、陰刻、印枠□
167	押印	埴	郡名「埴玉郡」	男瓦	凸面	7区東表土	角印、陰刻、印枠□
168	押印	埴	郡名「埴玉郡」	男瓦	凸面	9区表土	角印、陰刻、印枠□
169	押印	埴	郡名「埴玉郡」	女瓦	凹面	8区埋戻土	角印、陰刻、印枠□、逆字
170	押印	草瓦	郷名「(埴玉郡)草原郷」	女瓦	凹面	5区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
171	押印	草瓦	郷名「(埴玉郡)草原郷」	男瓦	凸面	8区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
172	押印	草瓦	郷名「(埴玉郡)草原郷」	男瓦	凸面	10区 南堀張部	角印、陰刻、印枠□
173	ヘラ書	前	郡名「埴玉郡」	男瓦	凸面	7区埋戻土	
174	ヘラ書	太	郷名「(埴玉郡)太田郷」	男瓦	凸面	7区表土	
175	押印	大	郡名「大里郡」	男瓦	凹面	7区表土	角印、陽刻、印枠□
176	押印	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	7区東表土	丸印、陰刻、印枠○
177	押印	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	7区埋戻土	丸印、陰刻、印枠○
178	押印	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	7区西	丸印、陰刻、印枠○
179	押型	大	郡名「大里郡」	男瓦	凸面	7区西表土	陽刻、印枠なし、あるいは『大井?』
180	押印	大	郡名「大里郡」	男瓦	端面	7区表土	丸印、陽刻、印枠なし
181	押印	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	17区東表土	丸印、陽刻、印枠なし
182	押印	大	郡名「大里郡」	女瓦	端面	7区表土	丸印、陽刻、印枠なし
183	押印	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	9区表土	角印、陽刻、印枠なし
184	押印	大?	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし
185	ヘラ書	大	郡名「大里郡」	男瓦	端面	10区表土	
186	ヘラ書	大	郡名「大里郡」	女瓦	端面	9区表土	
187	ヘラ書	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	7区東表土	
188	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	5区表土	
189	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	17区東表土	
190	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	5区表土	
191	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	7区東埋戻土	
192	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	7区西表土	
193	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	30区瓦溜	
194	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	7区表土	
195	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	6区表土	
196	押印	男	郡名「男衾郡」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陰刻、印枠□
197	押印	男	郡名「男衾郡」	男瓦	凸面	7区西表土	角印、陰刻、印枠□
198	押印	男	郡名「男衾郡」	男瓦	凸面	8区瓦溜	角印、陰刻、印枠□
199	押印	男	郡名「男衾郡」	女瓦	凹面	11区	角印、陰刻、印枠□
200	押印	男?	郡名「男衾郡」	男瓦	凸面	7区東表土	あるいは『猫(逆字)』、丸印、陽刻、印枠なし










第 63 表 金堂地区出土文字瓦観察表(6) (図面 144 ~ 154)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
201	押印	男?	部名「男倉部」	女瓦	凹面	7区表土	角印、陰刻、印枠□、逆字?
202	へら書	男	部名「男倉部」	男瓦	凸面	7区表土	
203	へら書	男	部名「男倉部」	女瓦	凹面	30区瓦溜	
204	へら書	男	部名「男倉部」	女瓦	凹面	6区瓦溜	
205	へら書	男	部名「男倉部」	男瓦	凸面	7区東表土	
206	押印	播	部名「幡羅部」	男瓦	凸面	7区西埋戻土	角印、陰刻、印枠□
207	押印	播	部名「幡羅部」	男瓦	凸面	9区表土	角印、陰刻、印枠□
208	押印	播	部名「幡羅部」	男瓦	凸面	7区東	角印、陰刻、印枠□
209	押印	播	部名「幡羅部」	男瓦	凸面	7区西表土	角印、陰刻、印枠□
210	押印	播	部名「幡羅部」	男瓦	凸面	7区表土	角印、陰刻、印枠□
211	押印	播中	部名「幡羅部那珂郷」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陰刻、印枠□
212	押印	播中	部名「幡羅部那珂郷」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陰刻、印枠□
213	押印	播中	部名「幡羅部那珂郷」	女瓦	凹面	6区攪乱	角印、陰刻、印枠□
214	押印	播中	部名「幡羅部那珂郷」	女瓦	凹面	7区東表土	『播中?』、角印、陰刻、印枠□、
215	押印	下	部名「幡羅部」下奈郷	男瓦	凸面	7区東表土	陰刻、印枠なし
216	押印	下	部名「幡羅部」下奈郷	女瓦	凸面	5区表土	陰刻、印枠なし
217	へら書	播	部名「幡羅部」	女瓦	凹面	9区表土	
218	へら書	播?	部名「幡羅部」	女瓦	凹面	7区東表土	
219	押型	椿	部名「椿澤部」	女瓦	凸面	7区表土	
220	押印	椿	部名「椿澤部」	男瓦	凸面	30区瓦溜	角印、陰刻、印枠□
221	押印	椿	部名「椿澤部」	女瓦	凹面	8区表土	角印、陰刻、印枠□
222	押印	椿	部名「椿澤部」	男瓦	凸面	7区西埋戻土	角印、陰刻、印枠□
223	押印	椿	部名「椿澤部」	男瓦	凸面	7区東表土	角印、陰刻、印枠□
224	押印	椿	部名「椿澤部」	男瓦	凸面	7区東表土	角印、陰刻、印枠□
225	押印	加美	部名「賀美部」	女瓦	凹面	5区表土	角印、陰刻、印枠□
226	押印	加瓦	部名「賀美部」	女瓦	凹面	6区瓦溜	角印、陽刻、印枠なし
227	押印	加瓦	部名「賀美部」	女瓦	凹面	21区表土	角印、陰刻、印枠□、2か所
228	模骨	上	部名「賀美部」	女瓦	凹面	7区表土	
229	模骨	上	部名「賀美部」	女瓦	凹面	8区瓦溜	逆字
230	模骨	上	部名「賀美部」	女瓦	凹面	9区表土	逆字
231	模骨	上	部名「賀美部」	女瓦	凹面	30区表土	逆字
232	模骨	上	部名「賀美部」	女瓦	凹面	5区表土	逆字、あるいは『七?』
233	模骨	上	部名「賀美部」	女瓦	凹面	3区攪乱	逆字
234	模骨	上	部名「賀美部」	女瓦	凹面	6区表土	逆字
235	押型	大井	部名「(兒玉部)大井郷」	女瓦	凸面	7区西埋戻土	
236	押印	中	部名「那珂部」	女瓦	端面	8区瓦溜	角印、陽刻、印枠なし、2か所
237	押印	中	部名「那珂部」	男瓦	端面	27 ~ 30区表土	角印、陽刻、印枠なし
238	押印	中	部名「那珂部」	男瓦	端面	5区表土	角印、陽刻、印枠なし
239	押印	中	部名「那珂部」	男瓦	端面	3区表土	角印、陽刻、印枠なし
240	押印	中	部名「那珂部」	男瓦	端面	8区埋戻土	角印、陽刻、印枠なし
241	押印	中	部名「那珂部」	男瓦	端面	7区表土	角印、陽刻、印枠なし

第 63 表 金堂地区出土文字瓦観察表 (7) (図面 144 ~ 154)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
242	ヘラ書	水	郷名「(那珂郡)水保郷」	男瓦	凹面	7区東埋戻土	
243	ヘラ書	水	郷名「(那珂郡)水保郷」	男瓦	凹面	7区西表土	
244	模骨	中	郡名「那珂郡」	宇瓦	凹面	7区東表土	宇瓦(図面 58-36、図版 14)
245	模骨	中	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	7区東表土	
246	押型	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凸面	7区表土	
247	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凸面	5区表土	角印、陽刻、印枠なし、あるいは押型?
248	押印	父瓦	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし
249	押印	父瓦	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	7区東埋戻土	角印、陰刻、印枠□
250	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	7区東埋戻土	角印、陽刻、印枠□
251	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	6区攪乱	角印、陽刻、印枠□
252	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陰刻、印枠□
253	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	29区	角印、陰刻、印枠□
254	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	7区西表土	角印、陰刻、印枠□
255	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陰刻、印枠□
256	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	7区東表土	角印、陰刻、印枠□
257	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	7区	角印、陽刻、印枠□
258	押印	美	郷名「(秩父郡)美吉郷」	女瓦	凸面	8区表土	角印、陽刻、印枠なし
259	押印	美	郷名「(秩父郡)美吉郷」	女瓦	凸面	4区表土	角印、陽刻、印枠なし
260	ヘラ書	父□	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	7区東表土	『父中?』
261	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	7区東表土	
262	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	8区	
263	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	8区埋戻土	
264	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	7区西表土	
265	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	7区表土	
266	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	9区表土	
267	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	2区表土	
268	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	8区表土	
269	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	5区表土	
270	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	7区東埋戻土	
271	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	7区東埋戻土	
272	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凹面	30区瓦溜	
273	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	26区東表土	
274	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	9区表土	
275	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	6区 瓦溜/攪乱	
276	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	7区表土	
277	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凸面	30区瓦溜	
278	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	端面	7区東表土	
279	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	端面	7区東表土	
280	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	端面	6区表土	
281	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	7区西表土	
282	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	9区表土	

第 63 表 金堂地区出土文字瓦観察表 (B) (図面 144 ~ 154)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
283	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凹面	全域 表採	
284	ヘラ書	父美	郡署名「秩父郡美吉郷」	男瓦	凸面	9区 表土	
285	ヘラ書	美	郷名「(秩父郡)美吉郷」	男瓦	凸面	7区西 表土	
286	ヘラ書	美	郷名「(秩父郡)美吉郷」	女瓦	凹面	7区 表土	
287	ヘラ書	美	郷名「(秩父郡)美吉郷」	女瓦	凹面	7区東	
288	ヘラ書	余?	郷名「余戸郷」	女瓦	凹面	8区 埋戻土	
289	ヘラ書	伴	人名	女瓦	凹面	26区 表土	
290	押印		文字	女瓦	凹面	7区東 表土	角印、陽刻、印枠なし
291	ヘラ書	入備	文字	女瓦	凹面	7区東 埋戻土	
292	ヘラ書	山本	文字	男瓦	凹面	7区東 表土	
293	ヘラ書	山	文字	男瓦	凸面	7区東 表土	
294	ヘラ書	大/天?	文字	女瓦	端面	18区 表土	あるいは『大』×2
295	ヘラ書	郷	文字	女瓦	凹面	7区東 表土	
296	ヘラ書	法?	文字	女瓦	端面	6区 表土	
297	ヘラ書	奈	文字	女瓦	端面	5区 表土	
298	ヘラ書	取?	文字	女瓦	凹面	4区 表土	あるいは『那?』
299	ヘラ書	万	文字	男瓦	凸面	9区 表土	
300	ヘラ書	十	文字	女瓦	端面	7区西 埋戻土	
301	ヘラ書	十	文字	男瓦	端面	7区東 表土	
302	ヘラ書	三	文字	男瓦	端面	7区西 表土	
303	ヘラ書	廿	文字	女瓦	凹面	7区東 表土	
304	ヘラ書	卅	文字	女瓦	凹面	2区 埋戻土	
305	ヘラ書	卅	文字	女瓦	凹面	7区 表土	
306	模骨	万?	文字	女瓦	凹面	8区 瓦溜	
307	模骨	廿	文字	女瓦	凹面	7区東 表土	
308	模骨	廿?	文字	女瓦	凹面	—	
309	模骨	十	文字	女瓦	凹面	30区 瓦溜	
310	模骨	七	文字	女瓦	凹面	7区東 表土	
311	模骨	七	文字	女瓦	凹面	7区 表土	
312	模骨	夫?	文字	女瓦	凹面	7区東 表土	あるいは『天?』
313	模骨	山?	文字	女瓦	凹面	6区 表土	
314	押印		記号	男瓦	凹面	6区 瓦溜	陰刻、印枠なし
315	押印		記号	女瓦	凹面	2区 表土	陰刻、印枠なし
316	押印		記号	女瓦	凹面	6区 表土	陰刻、印枠なし
317	押印		記号	女瓦	凹面	7区東 表土	陰刻、印枠なし
318	押印		記号	男瓦	凹面	30区 瓦溜	陰刻、印枠なし
319	押印		記号	男瓦	凹面	7区 表土	陰刻、印枠なし
320	押印		記号	女瓦	凹面	7区東 表土	角印、陽刻、印枠□
321	押印		記号	女瓦	凹面	7区東埋戻土	陰刻、印枠○

第 63 表 金堂地区出土文字瓦観察表 (9) (図面 144 ~ 154)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
322	押印	⊖	記号	男瓦	凸面	3区 覆瓦	陰刻、印枠○
323	押印	○	記号	男瓦	凸面	5区 表土	陰刻
324	押印	○	記号	男瓦	凸面	7区西 表土	陰刻、竹管
325	押印	○	記号	女瓦	端面	6区 瓦溜	陰刻、竹管
326	押印	○	記号	女瓦	凹面	6区 表土	陰刻、竹管
327	へら書	-	戯画瓦	男瓦	凸面	7区東 表土	
328	へら書	-	戯画瓦?	男瓦	凸面	7区西 埋戻土	
329	へら書	-	戯画瓦?	女瓦	凹面	30区 瓦溜	
330	へら書	-	戯画瓦?	男瓦	凸面	7区 表土	
331	へら書	-	戯画瓦?	女瓦	凹面	30区 瓦溜	
332	押型	-	不明	女瓦	凸面	7区 表土	
333	押印	-	不明	女瓦	凹面	2区 埋戻土	角印、陰刻、印枠□、印内摩滅
334	へら書	-	不明	女瓦	凹面	10区 瓦溜	
335	へら書	-	不明	女瓦	凹面	7区 表土	『毛?』
336	へら書	-	不明	女瓦	凹面	17区東 表土	
337	へら書	-	不明	男瓦	凹面	7区東 埋戻土	
338	へら書	-	不明	男瓦	凸面	9区 表土	
339	へら書	-	不明	女瓦	凹面	7区 表土	
340	へら書	-	不明	女瓦	凹面	6区 表土	
341	へら書	-	不明	女瓦	凹面	6区 瓦溜	
342	へら書	-	不明	女瓦	端面	10区 瓦溜	
343	へら書	-	不明	女瓦	凹面	7区東 表土	
344	へら書	-	不明	女瓦	凹面	8区 埋戻土	
345	へら書	-	不明	男瓦	凸面	7区 表土	
346	へら書	-	不明	女瓦	凹面	7区東 埋戻土	
347	へら書	-	不明	男瓦	凹面	7区東 表土	

第 64 表 講堂地区出土文字瓦観察表 (1) (図面 155 ~ 164)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
348	范	多	郡名「多磨郡」	宇瓦	瓦当面	1区 表土	宇瓦 (図面 60-5、図版 15)
349	押型	多	郡名「多磨郡」	女瓦	凸面	2区 埋戻土	
350	押型	多	郡名「多磨郡」	女瓦	凸面	10区西 表土	
351	押印	王	郡名「多磨郡」	男瓦	凸面	1区 表土	角印、陰刻、印枠□
352	押印	王	郡名「多磨郡」	女瓦	凹面	埋戻土	角印、陰刻、印枠□
353	押印	王	郡名「多磨郡」	女瓦	凹面	2区 埋戻土	角印、陰刻、印枠なし
354	押印	夕下	郡名「多磨郡」	女瓦	凹面	6区 表土	『多磨郡下』あるいは『死』、角印、陰刻、印枠□
355	押印	川口瓦印	郡名「(多磨郡)川口郷」	男瓦	凸面	14区 表土	角印、陰刻、印枠□
356	へら書	多	郡名「多磨郡」	女瓦	凹面	10区 表土	
357	へら書	多?	郡名「多磨郡」	女瓦	凹面	5-1区 埋戻土	

第 64 表 講堂地区出土文字瓦観察表 (2) (図面 155 ~ 164)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
358	ヘラ書	多	郡名「多磨郡」	男瓦	端面	3-2区表土	
359	ヘラ書	多?	郡名「多磨郡」	男瓦	端面	13区表土	
360	ヘラ書	石?	郷名「(多磨郡)石津郷」	女瓦	凹面	13区表土	
361	ヘラ書	川	郷名「(多磨郡)川口郷」	女瓦	凹面	1区埋戻土	あるいは『三?』
362	模骨	多	郡名「多磨郡」	女瓦	凹面	8区表土	陰刻
363	模骨	玉	郡名「多磨郡」	女瓦	凹面	12区表土	
364	押型	郡	郡名「郡筑郡」	女瓦	凸面	10区東表土	
365	押型	郡	郡名「郡筑郡」	女瓦	凸面	7区東表土	
366	押印	郡	郡名「郡筑郡」	女瓦	凹面	3-2区埋戻土	角印、陽刻、印枠なし
367	ヘラ書	郡	郡名「郡筑郡」	女瓦	凸面	13区表土	凹面にヘラ書「(不明) (665)」
368	ヘラ書	郡?	郡名「郡筑郡」	男瓦	凸面	10区表土	
369	ヘラ書	郡?	郡名「郡筑郡」	男瓦	凸面	15区表土	
370	ヘラ書	郡	郡名「郡筑郡」	女瓦	凹面	15区表土	
371	ヘラ書	久	郡名「久良郡」	男瓦	凹面	12区表土	
372	ヘラ書	久?	郡名「久良郡」	女瓦	凹面	8区表土	
373	ヘラ書	久?	郡名「久良郡」	女瓦	凹面	8区西表土	
374	押印	橘	郡名「橘樹郡」	女瓦	凹面	10区表土	角印、陰刻、印枠□
375	押型	荏原	郡名「荏原郡」	女瓦	凸面	13区表土	
376	押型	荏原	郡名「荏原郡」	女瓦	凸面	3-2区埋戻土	
377	押型	荏原	郡名「荏原郡」	女瓦	凸面	3-2区表土	
378	押型	荏	郡名「荏原郡」	女瓦	凸面	5-1区埋戻土	
379	押型	荏	郡名「荏原郡」	女瓦	凸面	5-1区埋戻土	
380	押型	荏	郡名「荏原郡」	女瓦	凸面	12区表土	
381	押型	荏	郡名「荏原郡」	女瓦	凸面	10区東表土	
382	押型	荏	郡名「荏原郡」	女瓦	凸面	8区表土	凹面に押印「荏」(389)
383	押型	木	郷名「(荏原郡)木田郷」	女瓦	凸面	10区表土	
384	押印	荏原	郡名「荏原郡」	女瓦	凸面	10区東表土	角印、陽刻、印枠なし、逆字
385	押印	荏	郡名「荏原郡」	女瓦	凹面	10区表土	角印、陽刻、印枠□
386	押印	荏	郡名「荏原郡」	女瓦	凹面	13区表土	角印、陽刻、印枠□
387	押印	荏	郡名「荏原郡」	女瓦	凹面	10区表土	角印、陽刻、印枠□
388	押印	荏	郡名「荏原郡」	男瓦	凸面	10区東表土	角印、陽刻、印枠なし
389	押印	荏	郡名「荏原郡」	女瓦	凹面	8区表土	角印、陽刻、印枠なし、凸面に押型「荏」(382)
390	ヘラ書	荏	郡名「荏原郡」	女瓦	凹面	13区表土	
391	ヘラ書	荏	郡名「荏原郡」	男瓦	凸面	5-3区埋戻土	
392	ヘラ書	荏	郡名「荏原郡」	女瓦	凹面	表土	
393	ヘラ書	荏?	郡名「荏原郡」	女瓦	凹面	8区西表土	
394	ヘラ書	荏?	郡名「荏原郡」	女瓦	端面	9区東表土	
395	ヘラ書	荏?	郡名「荏原郡」	男瓦	端面	12区表土	凹面ヘラ書「(不明) (647)」
396	ヘラ書	蒲田?	郷名「(荏原郡)蒲田郷」	女瓦	凹面	5-4区埋戻土	
397	ヘラ書	木田	郷名「(荏原郡)木田郷」	男瓦	凹面	5-3区埋戻土	

第64表 講堂地区出土文字瓦観察表(3)(図面155~164)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
398	ヘラ書	木田	郷名「(荏原郡)木田郷」	男瓦	凹面	6区東表土	
399	ヘラ書	木□	郷名「(荏原郡)木田郷」	男瓦	凹面	10区表土	
400	ヘラ書	木	郷名「(荏原郡)木田郷」	女瓦	凹面	10区東表土	
401	ヘラ書	木?	郷名「(荏原郡)木田郷」	女瓦	端面	5-4区埋戻土	
402	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凸面	12区表土	角印、陰刻、印枠□
403	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凸面	3-2区表土	角印、陰刻、印枠□
404	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	8区表土	角印、陰刻、印枠□
405	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	6区東(P状穴)覆土	角印、陰刻、印枠□
406	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	3-2区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
407	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	8区表土	角印、陰刻、印枠なし
408	押印	嶋	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	10区南東表土	角印、陰刻、印枠□
409	ヘラ書	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凹面	5-2区埋戻土	
410	ヘラ書	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	9区西表土	
411	ヘラ書	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	14区表土	
412	ヘラ書	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	10区東表土	
413	ヘラ書	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凹面	8区埋戻土	
414	ヘラ書	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凹面	10区西表土	
415	ヘラ書	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凹面	10区西表土	
416	ヘラ書	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	3-1区埋戻土	
417	ヘラ書	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凹面	8区表土	
418	ヘラ書	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	端面	9区西	
419	ヘラ書	日頭	郷名「(豊島郡)日頭郷」	男瓦	凹面	6区東表土	
420	模骨	廣	郷名「(豊島郡)廣岡郷」	女瓦	凹面	14区表土	逆字
421	模骨	廣	郷名「(豊島郡)廣岡郷」	女瓦	凹面	5-2区埋戻土	逆字
422	模骨	廣	郷名「(豊島郡)廣岡郷」	女瓦	凹面	8区表土	逆字
423	模骨	廣?	郷名「(豊島郡)廣岡郷」	女瓦	凹面	5-4区埋戻土	逆字
424	押印	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	8区表土	角印、陰刻、印枠□
425	押印	安	郡名「足立郡」	男瓦	凸面	3-2区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
426	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	男瓦	凸面	10区東表土	
427	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	5-4区埋戻土	
428	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	6区東表土	
429	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	男瓦	凸面	13区表土	
430	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	男瓦	凹面	5-2区南端表土	
431	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	10区東表土	
432	ヘラ書	足?	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	5-2区埋戻土	
433	押型	入	郡名「入間郡」	女瓦	凸面	6区東表土	あるいは『大』
434	押印/ ヘラ書	入麻	郡名「入間郡」	女瓦	凹面	1区埋戻土	「入」(押印:角印、陰刻、印枠□)/ 「麻」(ヘラ書)
435	押印	入	郡名「入間郡」	女瓦	凹面	14区表土	角印、陰刻、印枠□
436	押印	入	郡名「入間郡」	女瓦	凹面	8区表土	角印、陰刻、印枠□

第 64 表 講堂地区出土文字瓦観察表 (4) (図面 155 ~ 164)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
437	ヘラ書	人	郡名「人間郡」	女瓦	凹面	7区東表土	
438	ヘラ書	人	郡名「人間郡」	男瓦	凹面	10区表土	
439	ヘラ書	人	郡名「人間郡」	男瓦	凹面	5-4区埋戻土	
440	押印	人	郡名「人間郡」	男瓦	凸面	5-2区埋戻土	角印、陰刻、印枠なし
441	ヘラ書	大家	郷名「(人間郡) 大家郷」	男瓦	凸面	3-2区埋戻土	
442	ヘラ書	大家	郷名「(人間郡) 大家郷」	女瓦	凹面	10区東表土	
443	ヘラ書	入大家?	郡名「人間郡」	女瓦	凹面	12区表土	
444	ヘラ書	高	郡名「高麗郡」	宇瓦	端面	8区西表土	宇瓦(図面62-19、図版15)
445	ヘラ書	高	郡名「高麗郡」	男瓦	凹面	12区表土	
446	ヘラ書	高	郡名「高麗郡」	男瓦	凸面	8区表土	
447	ヘラ書	高	郡名「高麗郡」	女瓦	凹面	10区東表土	
448	ヘラ書	高	郡名「高麗郡」	男瓦	凸面	5-4区埋戻土	
449	ヘラ書	高	郡名「高麗郡」	女瓦	凹面	7区表土	
450	押印	比企	郡名「比企郡」	女瓦	端面	5区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
451	押印	比企	郡名「比企郡」	女瓦	端面	3-2区表土	角印、陰刻、印枠□
452	押印	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	10区東表土	『企』、角印、陰刻、印枠□
453	押印	企	郡名「比企郡」	女瓦	凹面	1区埋戻土	『企』、角印、陰刻、印枠□
454	押印	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	10区表土	『企』、角印、陰刻、印枠□
455	押印	横	郡名「横見郡」	女瓦	凹面	5-1区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
456	押印	崎	郡名「埼玉郡」	男瓦	凸面	表土/埋戻土	角印、陰刻、印枠□
457	押印	崎	郡名「埼玉郡」	男瓦	凸面	2区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
458	ヘラ書	大田	郷名「埼玉郡) 大田郷」	女瓦	凹面	3-2区表土	
459	ヘラ書	草?	郷名「埼玉郡) 草原郷」	女瓦	凹面	8区表土	
460	押型	大里	郡名「大里郡」	女瓦	凸面	3-2区表土	
461	押印	大里	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	10区西表土	陽刻、印枠なし
462	押印	大里	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	5-3区埋戻土	陽刻、印枠なし
463	押印	大里	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	2区西端埋戻土	陽刻、印枠なし
464	押印	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	8区西表土	丸印、陽刻、印枠○
465	ヘラ書	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	5-1区埋戻土	
466	ヘラ書	大	郡名「大里郡」	女瓦	端面	5-1区埋戻土	
467	ヘラ書	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	14区表土	
468	ヘラ書	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	5-4区埋戻土	
469	ヘラ書	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	5-1区埋戻土	
470	ヘラ書	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	8区裾張表土	
471	ヘラ書	大	郡名「大里郡」	女瓦	端面	3-2区表土	
472	ヘラ書	大	郡名「大里郡」	男瓦	端面	埋戻土	
473	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	6区表土	
474	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	5-3区埋戻土	
475	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	3-2区表土	
476	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	3-2区埋戻土	

第 64 表 講堂地区出土文字瓦観察表 (5) (図面 155 ~ 164)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
477	押印	男	郡名「男会郡」	女瓦	凹面	5-4区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
478	押印	男	郡名「男会郡」	女瓦	凹面	10区西表土	角印、陰刻、印枠□
479	押印?	男	郡名「男会郡」	女瓦	凹面	8区拡張表土	陽刻、印枠なし
480	へら書	□男	郡名「男会郡」	女瓦	凹面	8区表土	
481	へら書	男?	郡名「男会郡」	男瓦	凸面	8区表土	
482	押印	播瓦	郡名「幡羅郡」	女瓦	凹面	10区東表土	角印、(播)陽刻(瓦)陰刻、印枠□
483	押印	播瓦	郡名「幡羅郡」	男瓦	凸面	5-4区表土	角印、(播)陽刻(瓦)陰刻、印枠□
484	押印	播瓦	郡名「幡羅郡」	女瓦	凹面	5-3区埋戻土	角印、(播)陽刻(瓦)陰刻、印枠□
485	押印	播瓦	郡名「幡羅郡」	男瓦	凸面	5-4区埋戻土	角印、(播)陽刻(瓦)陰刻、印枠□
486	押印	播	郡名「幡羅郡」	女瓦	凹面	5-3区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
487	押印	播	郡名「幡羅郡」	女瓦	凹面	7区西表土	角印、陰刻、印枠□
488	押印	播	郡名「幡羅郡」	女瓦	凹面	3-2区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
489	押印	播	郡名「幡羅郡」	女瓦	凹面	6区東表土	角印、陽刻、印枠□
490	へら書	播	郡名「幡羅郡」	女瓦	凹面	7区西視瓦	
491	へら書	播	郡名「幡羅郡」	女瓦	凹面	3-1区埋戻土	
492	押印	播中瓦	郡名「幡羅郡那珂郷」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□、逆字
493	押印	下	郷名「(幡羅郡)下奈郷」	女瓦	凹面	6区東表土	角印、陽刻、印枠□
494	押印	下	郷名「(幡羅郡)下奈郷」	男瓦	凸面	8区西表土	陰刻、印枠なし
495	へら書	下	郷名「(幡羅郡)下奈郷」	女瓦	凹面	5-4区埋戻土	
496	押型	椽	郡名「椽澤郡」	女瓦	凸面	3-2区埋戻土	逆字
497	押型	椽	郡名「椽澤郡」	女瓦	凸面	3-1区埋戻土	逆字
498	押型	椽	郡名「椽澤郡」	女瓦	凸面	1区埋戻土	逆字
499	押型	椽	郡名「椽澤郡」	女瓦	凸面	5-3区埋戻土	
500	押印	椽	郡名「椽澤郡」	女瓦	凹面	8区拡張表土	角印、陰刻、印枠□
501	押印	椽	郡名「椽澤郡」	女瓦	凹面	8区西表土	角印、陰刻、印枠□
502	押印	椽	郡名「椽澤郡」	女瓦	凹面	5-3区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
503	押印	椽	郡名「椽澤郡」	男瓦	凸面	8区東表土	角印、陰刻、印枠□
504	へら書	椽	郡名「椽澤郡」	女瓦	凹面	8区表土	
505	押型	加	郡名「賀美郡」	女瓦	凸面	1区埋戻土	逆字
506	押型	加	郡名「賀美郡」	女瓦	凸面	—	逆字
507	押型	加	郡名「賀美郡」	女瓦	凸面	10区西表土	逆字
508	押型	加美	郡名「賀美郡」	女瓦	凸面	14区表土	
509	押印	加瓦	郡名「賀美郡」	女瓦	凹面	8区表土	角印、陰刻、印枠□
510	へら書	上	郡名「賀美郡」	女瓦	凸面	10区西表土	逆字
511	模骨	上	郡名「賀美郡」	女瓦	凹面	8区拡張表土	逆字
512	模骨	上	郡名「賀美郡」	女瓦	凹面	1区埋戻土	逆字
513	模骨	上	郡名「賀美郡」	女瓦	凹面	4区埋戻土	逆字
514	模骨	上	郡名「賀美郡」	女瓦	凹面	3-1区埋戻土	逆字
515	模骨	上	郡名「賀美郡」	女瓦	凹面	3-1区埋戻土	逆字
516	模骨	上	郡名「賀美郡」	女瓦	凹面	5-3区表土	逆字
517	模骨	上	郡名「賀美郡」	女瓦	凹面	5-1区埋戻土	逆字

第64表 講堂地区出土文字瓦観察表(6)(図面155~164)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
518	模骨	上	郡名「賀美郡」	女瓦	凹面	3-1区埋戻土	逆字
519	押型	大井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	女瓦	凸面	3-1区埋戻土	
520	押印	兒玉	郡名「兒玉郡」	女瓦	凸面	1区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
521	押印	子玉	郡名「兒玉郡」	女瓦	凹面	3-2区表土	角印、陰刻、印枠□、逆字
522	押印	兒	郡名「兒玉郡」	女瓦	凸面	5-4区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
523	へら書	子	郡名「兒玉郡」	女瓦	凹面	12区表土	
524	へら書	子	郡名「兒玉郡」	女瓦	凹面	7区西表土	
525	へら書	子	郡名「兒玉郡」	女瓦	端面	5-1区埋戻土	
526	へら書	子	郡名「兒玉郡」	男瓦	端面	12区表土	
527	へら書	井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	女瓦	凹面	13区表土	
528	へら書	井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	男瓦	端面	5-1区埋戻土	
529	押印	那瓦	郡名「那珂郡」	男瓦	端面	5-1区北西部 石敷 粘土層直上	角印、陰刻、印枠□
530	押印	那	郡名「那珂郡」	女瓦	端面	5-3区埋戻土	角印、陽刻、印枠□
531	押印	那	郡名「那珂郡」	女瓦	端面	表土	角印、陽刻、印枠□
532	へら書	那□?	郡名「那珂郡」	男瓦	凸面	14区表土	
533	押印	那?	郡名「那珂郡」	女瓦	端面	7区東 表土	角印、陰刻、印枠□
534	へら書	珂	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	10区表土	
535	へら書	珂	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	10区東表土	
536	へら書	珂?	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	8区西表土	
537	押印	中	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	6区東表土	角印、陰刻、印枠□
538	押印	中	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	6区東表土	丸印、陰刻、印枠○
539	押印	中	郡名「那珂郡」	女瓦	端面	1区埋戻土	角印、陽刻、印枠なし
540	押印	中	郡名「那珂郡」	男瓦	端面	5-2区東端 表土	角印、陽刻、印枠なし
541	押印	中	郡名「那珂郡」	女瓦	端面	3-2区表土	角印、陽刻、印枠なし
542	へら書	中	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	10区表土	
543	へら書	中	郡名「那珂郡」	男瓦	凸面	5-2区埋戻土	
544	模骨	中	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	5-1区埋戻土	
545	模骨	中	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	12区表土	
546	押印	水	郷名「(那珂郡)水保郷」	女瓦	凹面	10区表土	丸印、陽刻、印枠なし
547	へら書	水	郷名「(那珂郡)水保郷」	女瓦	凸面	3-1区埋戻土	
548	へら書	水?	郷名「(那珂郡)水保郷」	女瓦	凹面	7区西表土	あるいは『木?』
549	押型	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凸面	14区表土	
550	押型	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凸面	3-1区埋戻土	
551	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	12区表土	角印、陽刻、印枠なし
552	押印	父瓦?	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	12区表土	角印、陽刻、印枠□
553	押印	父瓦?	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	3-2区埋戻土	角印、陽刻、印枠□
554	押印	父瓦	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	7区東表土	角印、陽刻、印枠なし
555	押印	父瓦	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	10区西表土	角印、陽刻、印枠なし
556	押印	父瓦	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	3-2区埋戻土	角印、陽刻、印枠なし




第 64 表 講堂地区出土文字瓦観察表 (7) (図面 155 ~ 164)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
557	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	10区東表土	角印、陰刻、印枠□
558	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	2区西側埋戻土	角印、陰刻、印枠□
559	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	10区東表土	角印、陰刻、印枠□
560	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	5-2区埋戻土	角印、陰刻、印枠なし
561	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	8区西表土	角印、陰刻、印枠□
562	押印	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	15区埋戻土	角印、陰刻、印枠□
563	押印	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	7区西表土	陰刻、印枠なし
564	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	10区西表土	
565	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	1区埋戻土	
566	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	14区表土	
567	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	14区表土	
568	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	8区表土	
569	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	10区東表土	
570	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凸面	5-1区埋戻土	
571	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凹面	7区東表土	
572	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	4区埋戻土	
573	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	5-3区埋戻土	
574	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凹面	14区表土	
575	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	13区掘乱	
576	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	3-2区埋戻土	
577	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	8区西表土	
578	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	12区表土	同じ凹面に横骨「天」(633)
579	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	端面	7区東表土	
580	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	端面	5-1区埋戻土	
581	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	端面	13区表土	
582	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	端面	5-3区埋戻土	
583	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	端面	5-1区埋戻土	
584	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	端面	12区表土	
585	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	端面	3-2区埋戻土	
586	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	端面	10区東表土	
587	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	端面	8区表土	
588	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	端面	5-1区埋戻土	
589	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	端面	13区表土	
590	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	端面	8区表土	
591	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	端面	14区表土	
592	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	端面	13区表土下	
593	ヘラ書	□郷□	文字	男瓦	凸面	10区東表土	
594	ヘラ書	呂	文字	女瓦	凹面	8区表土	
595	ヘラ書	呂?	文字	女瓦	端面	13区表土	
596	ヘラ書	呂瓦?	文字	女瓦	端面	3-1区埋戻土	

第 64 表 講堂地区出土文字瓦観察表 (B) (図面 155 ~ 164)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
597	ヘラ書	山	文字	男瓦	端面	15区表土	
598	ヘラ書	田	文字	女瓦	凹面	10区表土	
599	ヘラ書	无	文字	女瓦	凹面	3-2区攪乱	
600	ヘラ書	有	文字	男瓦	凹面	5-4区埋戻土	
601	ヘラ書	主	文字	男瓦	凹面	13区表土	
602	ヘラ書	本	文字	女瓦	凹面	5-1区表土	
603	ヘラ書	本	文字	男瓦	凹面	6区表土	
604	ヘラ書	丈?	文字	女瓦	端面	3-1区埋戻土	
605	ヘラ書	万?	文字	女瓦	凹面	5-4区埋戻土	
606	ヘラ書	干?	文字	女瓦	端面	5-1区埋戻土	
607	ヘラ書	干?	文字	男瓦	凹面	14区表土	
608	ヘラ書	冊	文字	男瓦	端面	8区表土	
609	ヘラ書	冊	文字	女瓦	凹面	12区表土	
610	ヘラ書	冊?	文字	女瓦	凹面	8区表土	
611	ヘラ書	廿	文字	女瓦	端面	8区表土	
612	ヘラ書	廿	文字	女瓦	端面	8区表土	
613	ヘラ書	□十	文字	女瓦	端面	1区埋戻土	
614	ヘラ書	十	文字	女瓦	端面	12区表土	
615	ヘラ書	十	文字	女瓦	端面	10区西表土	
616	ヘラ書	十	文字	女瓦	凹面	12区表土	
617	ヘラ書	十	文字	女瓦	端面	5-1区埋戻土	
618	ヘラ書	十	文字	男瓦	端面	3-1区埋戻土	
619	ヘラ書	十	文字	女瓦	端面	12区表土	
620	ヘラ書	十	文字	女瓦	端面	5-1区埋戻土	
621	ヘラ書	七	文字	男瓦	端面	5-4区埋戻土	
622	ヘラ書	七	文字	女瓦	凹面	5-1区埋戻土	
623	模骨	山万	文字	女瓦	凹面	5-3区埋戻土	
624	模骨	山万	文字	女瓦	凹面	6区東表土	
625	模骨	山?	文字	女瓦	凹面	3-2区表土	
626	模骨	七	文字	女瓦	凹面	6区東表土	
627	模骨	七	文字	女瓦	凹面	8区表土	
628	模骨	七	文字	女瓦	凹面	1区埋戻土	
629	模骨	七?	不明	女瓦	凹面	8区西表土	
630	模骨	十	文字	女瓦	凹面	5-1区埋戻土	
631	模骨	干?	文字	女瓦	凹面	5-1区埋戻土	
632	模骨	干?	文字	女瓦	凹面	10区西表土	
633	模骨	干?	文字	女瓦	凹面	10区東表土	
634	模骨	天	文字	女瓦	凹面	12区表土	同じ凹面にヘラ書「父」(577)
635	模骨	𠄎	文字	女瓦	凹面	6区東表土	「丙?」
636	模骨	六?	文字	女瓦	凹面	1区埋戻土	あるいは記号?
637	押印	𠄎	記号	女瓦	凸面	5区埋戻土	「垂?」、角印、陰刻、印枠□

第 64 表 講堂地区出土文字瓦観察表 (9) (図面 155 ~ 164)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
638	押印		記号	男瓦	凹面	1区埋戻土	陰刻、印枠なし
639	押印		記号	女瓦	凹面	7区表土	角印、陰刻、印枠□
640	押印	○	記号	女瓦	凹面	8区西表土	陰刻、竹管
641	押印	○	記号	女瓦	凹面	5-1区埋戻土	陰刻、竹管
642	押印		記号	男瓦	端面	10区表土	陰刻
643	へら書	=	記号	女瓦	端面	1区埋戻土	
644	押印	不明	不明	女瓦	凸面	5-1区埋戻土	角印、陰刻、印枠□、四文字
645	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	10区東表土	
646	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	10区表土	
647	へら書	不明	不明	男瓦	凹面	12区表土	端面にへら書「花?」(395)
648	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	6区東表土	2文字
649	へら書	不明	不明	男瓦	凹面	5-2区埋戻土	
650	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	6区東表土	
651	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	10区表土	
652	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	15区表土	
653	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	8区西表土	
654	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	7区東表土	
655	へら書	不明	不明	男瓦	凹面	表土	
656	へら書	不明	不明	男瓦	凸面	3区西表土	
657	へら書	不明	不明	男瓦	端面	10区表土	
658	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	8区西表土	
659	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	7区表土	
660	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	12区表土	
661	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	5-3区覆土	
662	へら書	不明	不明	男瓦	凸面	13区表土	
663	へら書	不明	不明	男瓦	凹面	3-2区覆土	
664	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	5-1区埋戻土	
665	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	13区表土	凸面にへら書「那」(367)
666	へら書	不明	不明	女瓦	端面	12区東表土	
667	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	10区東表土	

第 65 表 鐘樓地区出土文字瓦観察表 (図面 165)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
668	ヘラ書	川口	郷名「(多磨郡)川口郷」	男瓦	凸面	Aトレンチ	
669	押印	橘	郡名「橘樹郡」	女瓦	凸面	埋戻土	角印、陰刻、印枠□
670	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	埋戻土	
671	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	埋戻土	
672	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	西側拡張部 表土	
673	押印	往	郡名「往原郡」	男瓦	凸面	埋戻土	角印、陽刻、印枠□
674	押印	往	郡名「往原郡」	男瓦	凸面	表土	角印、陽刻、印枠□
675	押印	往	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陽刻、印枠□
676	ヘラ書	往	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	西側拡張部 表土	
677	ヘラ書	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	西側拡張部 表土	
678	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	表土	
679	押印	入	郡名「入間郡」	女瓦	凹面	北西瓦瀬	角印、陰刻、印枠□
680	押型	高	郡名「高麗郡」	女瓦	凸面	西側拡張部 表土	
681	押印	高	郡名「高麗郡」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
682	押印	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
683	押印	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
684	ヘラ書	見	郡名「横見郡」	女瓦	凹面	埋戻土	
685	押印	崎	郡名「崎玉郡」	男瓦	凸面	埋戻土	角印、陰刻、印枠□、逆字
686	押印	男	郡名「男衾郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
687	押印	播	郡名「幡羅郡」	男瓦	凸面	Dトレンチ	角印、陰刻、印枠□
688	押印	播	郡名「幡羅郡」	男瓦	凸面	埋戻土	角印、陰刻、印枠□
689	押印	播?	郡名「幡羅郡」	女瓦	凹面	-	角印、陰刻、印枠□
690	ヘラ書	播	郡名「幡羅郡」	男瓦	凸面	Dトレンチ	
691	模骨	上	郷名「(幡羅郡)上秦郷」	女瓦	凹面	埋戻土	逆字
692	押印	中	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	西側拡張部 表土	角印、陽刻、印枠なし
693	押印	父瓦	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	西側拡張部 表土	角印、陽刻、印枠なし
694	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	Cトレンチ	角印、陰刻、印枠□
695	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	Eトレンチ	角印、陽刻、印枠□
696	押印	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	-	角印、陽刻、印枠なし
697	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	-	
698	ヘラ書	飛?	文字	男瓦	凹面	表土	上部に書き損じ?
699	ヘラ書	三□	文字	男瓦	端面	Aトレンチ	
700	ヘラ書	月□	文字	女瓦	端面	表土	
701	ヘラ書	本?	文字	女瓦	凹面	表土	
702	ヘラ書	七?	文字	女瓦	端面	表土	
703	ヘラ書	七?	文字	男瓦	端面	-	逆字?
704	模骨	山万	文字	女瓦	凹面	西側拡張部 表土	
705	押印	○	記号	男瓦	凹面	-	陰刻、竹筥

第 66 表 中門地区出土文字瓦観察表(1)(図面 166~170)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
706	押型	多	部名「多磨部」	女瓦	凸面	表土	
707	押型	多?	部名「多磨部」	女瓦	凸面	覆乱	
708	押型	多?	部名「多磨部」	女瓦	凸面	表土	
709	押印	多	部名「多磨部」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
710	押印	多	部名「多磨部」	女瓦	凹面	覆乱	角印、陰刻、印枠□
711	押印	多	部名「多磨部」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
712	押印	玉	部名「多磨部」	男瓦	凸面	SD194	角印、陰刻、印枠□
713	へら書	小川	郷名「(多磨部)小川郷」	女瓦	凸面	表土	
714	へら書	多	部名「多磨部」	男瓦	凹面	表土	
715	へら書	玉	部名「多磨部」	女瓦	凹面	表土	
716	へら書	川	郷名「(多磨部)川口郷」	女瓦	凹面	表土	
717	模骨	多	部名「多磨部」	女瓦	凹面	表土	陰刻
718	模骨	多	部名「多磨部」	女瓦	凹面	覆乱	逆字
719	模骨	玉	部名「多磨部」	女瓦	凹面	表土	
720	押印	部	部名「都筑部」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
721	押印	部	部名「都筑部」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
722	押印	部	部名「都筑部」	女瓦	凹面	表土	角印、陽刻、印枠なし
723	押印	部	部名「都筑部」	女瓦	凹面	覆乱	角印、陽刻、印枠なし
724	押印	部	部名「都筑部」	女瓦	凹面	覆乱	角印、陽刻、印枠なし
725	押印	部	部名「都筑部」	男瓦	凸面	覆乱	角印、陽刻、印枠なし
726	押印	部	部名「都筑部」	男瓦	凸面	表土	角印、陽刻、印枠なし
727	押印	部	部名「都筑部」	女瓦	凹面	覆乱	角印、陽刻、印枠なし
728	押印	部	部名「都筑部」	女瓦	凹面	表土	角印、陽刻、印枠□、逆字
729	押印	部	部名「都筑部」	女瓦	凹面	覆乱	角印、陽刻、印枠□
730	押印	部?	部名「都筑部」	女瓦	凹面	覆乱	丸印、陰刻、印枠○
731	へら書	部	部名「都筑部」	男瓦	凸面	表土	
732	へら書	部	部名「都筑部」	女瓦	凹面	-	
733	へら書	部	部名「都筑部」	女瓦	凹面	SA10	
734	へら書	部	部名「都筑部」	女瓦	凹面	表土	
735	へら書	部	部名「都筑部」	女瓦	凹面	表土	
736	へら書	部立	部名「都筑部」	女瓦	端面	表土	
737	へら書	部立	部郷名「都筑部立野郷」	女瓦	端面	覆乱	
738	へら書	部	部名「都筑部」	女瓦	端面	表土	
739	へら書	部	部名「都筑部」	女瓦	端面	表土	
740	へら書	部立?	部郷名「都筑部立野郷」	女瓦	端面	覆乱	
741	へら書	立	郷名「(都筑部)立野郷」	女瓦	端面	表土	
742	へら書	久	部名「久良部」	製斗瓦	-	表土	製斗瓦(図面 87-2、図版 17)
743	へら書	久	部名「久良部」	女瓦	凹面	表土	
744	押印	橘	部名「橘樹部」	女瓦	凹面	SX292	角印、陰刻、印枠□
745	押印	橘	部名「橘樹部」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□、凸面に范
746	押型	住	部名「住原部」	女瓦	凸面	表土	

第 66 表 中門地区出土文字瓦観察表(2)(図面 166~170)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
747	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	表土	
748	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	表土	
749	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	表土	
750	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	覆乱	
751	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	表土	
752	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	覆乱	
753	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	覆乱	
754	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	SK3335	
755	押印	[往]	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	覆乱	角印、陶刻、印枠□
756	押印	[往]	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陶刻、印枠□
757	押印	[往]	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陶刻、印枠□
758	押印	[往]	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陶刻、印枠□
759	押印	[往]	郡名「往原郡」	男瓦	端面	表土	角印、陶刻、印枠なし
760	押印	[豊瓦]	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□、逆字、2か所
761	押印	[豊瓦]	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□、逆字
762	押印	[湯島瓦]	郷名「(豊島郡)湯島郷」	女瓦	凹面	覆乱	角印、陰刻、印枠□、2か所。凸面は押型「父」(863)
763	押印	[豊]	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
764	押印	[豊]	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
765	押印	[豊]	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
766	押印	[豊]	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	覆乱	角印、陰刻、印枠□
767	押印	[豊]	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
769	押印	[豊]	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	覆乱	角印、陰刻、印枠□
770	押印	[豊]	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
771	押印	[豊]?	郡名「豊島郡」	女瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠なし
772	押印	[豊]	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陶刻、印枠なし
773	押印	[豊]	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	覆乱	角印、陶刻、印枠なし
774	押印	[豊]	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	表土	角印、陶刻、印枠□
775	押印	[豊]	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	表土	角印、陶刻、印枠□
776	押印	[豊]?	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	覆乱	角印、陶刻、印枠□
777	押印	[豊]?	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陶刻、印枠なし
778	押印	[日]	郷名「(豊島郡)日頭郷」	女瓦	凹面	SX292	角印、陰刻、印枠□
779	へら書	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	表土	
780	へら書	豊?	郡名「豊島郡」	男瓦	凹面	覆乱	
781	へら書	豊?	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	表土	
782	へら書	豊?	郡名「豊島郡」	男瓦	凹面	表土	
783	へら書	豊?	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	表土	
784	へら書	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凹面	表土	
785	へら書	豊?	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	表土	
786	へら書	湯嶋?	郷名「(豊島郡)湯嶋郷」	男瓦	凸面	表土	同じ凸面にへら書(不明)(908)
787	押印	[足]	郡名「足立郡」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□

第 66 表 中門地区出土文字瓦観察表(3)(図面 166~170)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
788	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	表土	
789	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	表土	
790	ヘラ書	足?	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	表土	
791	ヘラ書	足?	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	表土	
792	ヘラ書	足?	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	表土	
793	ヘラ書	足	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	SX292	
794	押型	入瓦	郡名「入間郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	
795	押印	入大	郡郷名「入間郡大家郷」	男瓦	凸面	覆瓦	角印、陰刻、印枠□
796	ヘラ書	入瓦	郡名「入間郡」	女瓦	凹面	表土	
797	ヘラ書	入麻?	郡名「入間郡」	女瓦	凸面	表土	
798	ヘラ書	入	郡名「入間郡」	女瓦	凹面	覆瓦	
799	ヘラ書	入	郡名「入間郡」	男瓦	凸面	表土	
800	ヘラ書	入	郡名「入間郡」	女瓦	凹面	表土	
801	ヘラ書	入	郡名「入間郡」	男瓦	凹面	表土	
802	ヘラ書	人	郡郷「入間郡」	女瓦	凹面	表土	
803	ヘラ書	家	郷名「(入間郡) 大家郷」	女瓦	凹面	表土	
804	押印	高	郡名「高麗郡」	女瓦	凸面	SB216	角印、陰刻、印枠□、女瓦(図面 111-4)
805	押印	高	郡郷「高麗郡」	男瓦	凸面	SB216	角印、陰刻、印枠□、男瓦(図面 103-23)
806	押印	高	郡名「高麗郡」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
807	押印	高	郡名「高麗郡」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
808	押印	高	郡名「高麗郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
809	押印	高	郡名「高麗郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
810	押印	高	郡名「高麗郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
811	押印	高	郡名「高麗郡」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
812	ヘラ書	高	郡名「高麗郡」	男瓦	凸面	表土	
813	押印	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	覆瓦	『企』、角印、陰刻、印枠□
814	押印	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	覆瓦	『企』、角印、陰刻、印枠□
815	押印	企	郡名「比企郡」	男瓦	凹面	表土	『企』、角印、陰刻、印枠□
816	押印	企	郡名「比企郡」	女瓦	凹面	表土	『企』、角印、陰刻、印枠□
817	押印	企	郡名「比企郡」	女瓦	凹面	表土	『企』、角印、陰刻、印枠□
818	押印	企	郡名「比企郡」	女瓦	凹面	表土	『企』、角印、陰刻、印枠□
819	押印	企	郡名「比企郡」	女瓦	凹面	覆瓦	『企』、角印、陰刻、印枠□
820	ヘラ書	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	表土	
821	押印	埴	郡名「埴玉郡」	男瓦	凸面	覆瓦	角印、陰刻、印枠□
822	押印	埴	郡名「埴玉郡」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□、逆字
823	押印	埴	郡名「埴玉郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□、逆字
824	押印	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	表土	丸印、陰刻、印枠○
825	ヘラ書	市田	郷名「(大里郡) 市田郷」	女瓦	凹面	表土	
826	押印	男	郡名「男衾郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
827	押印	男	郡名「男衾郡」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□

第 66 表 中門地区出土文字瓦観察表 (4) (図面 166 ~ 170)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
828	へら書	男?	部名「男倉部」	男瓦	凸面	表土	
829	押印	播中瓦	部名「幡羅部那珂郷」	男瓦	凸面	SX292	角印、陰刻、印枠□
830	押印	播	部名「幡羅部」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
831	押印	播	部名「幡羅部」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
832	押印	播	部名「幡羅部」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
833	押印	播	部名「幡羅部」	女瓦	凹面	覆乱	角印、陽刻、印枠なし
834	押印	下	部名「(幡羅部)下桑郷」	女瓦	凹面	表土	角印、陽刻、印枠□
835	へら書	播	部名「幡羅部」	男瓦	凸面	SB216/1-2	
836	へら書	播	部名「幡羅部」	男瓦	凸面	表土	
837	へら書	播	部名「幡羅部」	女瓦	凹面	覆乱	
838	へら書	播	部名「幡羅部」	女瓦	凹面	覆乱	
839	へら書	播?	部名「幡羅部」	女瓦	凹面	表土	
840	へら書	播?	部名「幡羅部」	男瓦	凸面	表土	
841	押印	極	部名「極澤部」	男瓦	凸面	覆乱	角印、陰刻、印枠□
842	押印	極	部名「極澤部」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
843	押印	極	部名「極澤部」	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
844	押印	極	部名「極澤部」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
845	押印	極	部名「極澤部」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
846	押印	極	部名「極澤部」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
847	押印	極	部名「極澤部」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
848	押印	極	部名「極澤部」	男瓦	凸面	覆乱	角印、陽刻、印枠□
849	模骨	上	部名「賀美部」	女瓦	凹面	覆乱	逆字
850	模骨	上	部名「賀美部」	女瓦	凹面	表土	逆字
851	模骨	上	部名「賀美部」	女瓦	凹面	表土	逆字
852	押型	大井	部名「(兒玉部)大井郷」	女瓦	凸面	表土	
853	押印	中	部名「那珂部」	女瓦	端面	表土	角印、陰刻、印枠なし
854	押印	中	部名「那珂部」	女瓦	端面	表土	角印、陽刻、印枠なし
855	押印	中	部名「那珂部」	女瓦	端面	覆乱	角印、陰刻、印枠なし
856	押印	中	部名「那珂部」	男瓦	端面	表土	角印、陽刻、印枠なし
857	押印	中	部名「那珂部」	女瓦	端面	表土	角印、陽刻、印枠なし
858	押印	中	部名「那珂部」	男瓦	凸面	表土	角印、陽刻、印枠なし
859	押印	中	部名「那珂部」	男瓦	端面	SB216	角印、陽刻、印枠なし、男瓦(図面 99-13)
860	押印	中	部名「那珂部」	男瓦	端面	旧トレ埋戻土	角印、陽刻、印枠なし
861	へら書	中	部名「那珂部」	男瓦	凸面	表土	
862	押印	水	部名「(那珂部)水保郷」	女瓦	凹面	表土	丸印、陽刻、印枠なし
863	押型	父	部名「秩父部」	女瓦	凸面	表土	凹面に押印?「父」(869)
864	押型	父	部名「秩父部」	女瓦	凸面	覆乱	凹面は押印「湯島瓦」(761)
865	押型	父	部名「秩父部」	女瓦	凸面	表土	
866	押印	父瓦	部名「秩父部」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
867	押印	父	部名「秩父部」	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□

第 66 表 中門地区出土文字瓦観察表 (5) (図面 166 ~ 170)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
868	押印	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	覆瓦	角印、陰刻、印枠□
869	押印	父	郡名「秩父郡」	女瓦	端面	旧トレ埋戻土	陽刻、印枠なし
870	押印?	父?	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	表土	陽刻、印枠なし、凸面の押型「父」(862)と同一か
871	押印	父?	郡名「秩父郡」	女瓦	凸面	表土	角印、陽刻、印枠なし
872	へら書	父?	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	表土	
873	へら書	父?	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	覆瓦	あるいは「十」?
874	へら書	父?	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	表土	
875	へら書	知瓦	郡名「秩父郡」	男瓦	端面	表土	あるいは「知識」と関係か?
876	へら書	余?	郡名「余戸郷」	女瓦	凹面	覆瓦	
877	へら書	□大?	文字	女瓦	凹面	表土	
878	へら書	十	文字	女瓦	凹面	-	
879	へら書	十	文字	男瓦	凹面	覆瓦	
880	へら書	十	文字	男瓦	端面	表土	
881	へら書	十	文字	男瓦	凸面	表土	
882	指書	十	文字	女瓦	凹面	S8216	女瓦(図面 111-5)
883	模骨	𠄎	文字	女瓦	凹面	表土	『丙?』
884	模骨	十?	文字	女瓦	凹面	表土	あるいは『七?』
885	模骨	十?	文字	女瓦	凹面	表土	あるいは『七?』
886	模骨	七	文字	女瓦	凹面	表土	
887	模骨	山?	文字	女瓦	凹面	表土	
888	模骨	干?	文字	女瓦	凹面	表土	
889	模骨	干?	文字	女瓦	凹面	表土	
890	押印	⊕	記号	男瓦	端面	表土	丸印、陽刻、印枠なし
891	押印	Y	記号	男瓦	凹面	覆瓦	陰刻、印枠なし
892	押印	○	記号	女瓦	凹面	表土	陰刻
893	押印	○	記号	男瓦	凸面	表土	陰刻
894	押印	○	記号	女瓦	凹面	表土	陰刻
895	押印	○	記号	女瓦	端面	旧トレ埋戻土	陰刻、竹管
896	押印	○	記号	女瓦	端面	表土	陰刻、竹管
897	押印	○	記号	女瓦	端面	表土	陰刻、竹管
898	押印	○	記号	女瓦	端面	表土	陰刻、竹管
899	模骨	→	記号	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	矢印に類似した形
900	押型	不明	不明	女瓦	凸面	表土	
901	押型	不明	不明	女瓦	凸面	表土	
902	押印	不明	不明	男瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
903	押印	不明	不明	男瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
904	へら書	不明	不明	男瓦	凸面	表土	
905	へら書	不明	不明	女瓦	凸面	表土	
906	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	表土	
907	へら書	不明	不明	女瓦	凹面	表土	

第 66 表 中門地区出土文字瓦観察表 (6) (図面 166 ~ 170)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
908	ヘラ書	不明	不明	男瓦	凸面	表土	同じ凸面にヘラ書「鬮嶋？」(785)
909	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	表土	
910	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	埋戻土	
911	ヘラ書	不明	不明	男瓦	凹面	表土	
912	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	攪乱	
913	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	攪乱	
914	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	表土	
915	ヘラ書	不明	不明	男瓦	凹面	表土	
916	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	表土	
917	模骨	不明	不明	女瓦	凹面	表土	
918	模骨	不明	不明	女瓦	凹面	攪乱	
919	模骨	不明	不明	女瓦	凹面	表土	
920	模骨	不明	不明	女瓦	凹面	表土	

第 67 表 塔跡 1 地区出土文字瓦観察表 (1) (図面 171 ~ 172)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
921	押印	王	郡名「多磨郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
922	押印	王	郡名「多磨郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
923	押印	王	郡名「多磨郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
924	押印	王	郡名「多磨郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
925	押印	王	郡名「多磨郡」	男瓦	凸面	SB223 再建時覆土	角印、陰刻、印枠□?
926	押印	王	郡名「多磨郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	陰刻、印枠なし
927	押型	都	郡名「都筑郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	逆字
928	押型	都?	郡名「都筑郡」	女瓦	凸面	表採	
929	ヘラ書	都	郡名「都筑郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	
930	ヘラ書	都立	郡名「都筑郡立野郷」	女瓦	端面	旧トレ埋戻土	
931	ヘラ書	都立	郡名「都筑郡立野郷」	女瓦	端面	旧トレ埋戻土	
932	押型	橘	郡名「橘樹郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	
933	押型	橘	郡名「橘樹郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	
934	押型	橘	郡名「橘樹郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	
935	押型	橘	郡名「橘樹郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	
936	押型	橘	郡名「橘樹郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	
937	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	
938	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	
939	押印	往	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	角印、陽刻、印枠なし
940	押印	往	郡名「往原郡」	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	角印、陽刻、印枠なし
941	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	陰刻、印枠なし
942	ヘラ書	豊?	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	

第 67 表 塔跡 1 地区出土文字瓦観察表 (2) (図面 171 ~ 172)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
943	ヘラ書	足?	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	
944	ヘラ書	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	
945	押印	男	郡名「男衾郡」	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
946	押印	播	郡名「幡羅郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
947	押印	播	郡名「幡羅郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
948	押印	播	郡名「幡羅郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
949	押印	播?	郡名「幡羅郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
950	押印	播?	郡名「榛澤郡」	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
951	押印	播	郡名「榛澤郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
952	押印	播?	郡名「榛澤郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
953	押印	兒	郡名「兒玉郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
954	押印	兒玉?	郡名「兒玉郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□ 逆字
955	押印	那瓦	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
956	押型	父瓦?	郡名「秩父郡」	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
957	押印	別父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	「秩父」?、角印、陰刻、印枠□
958	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	
959	ヘラ書	父?	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	
960	押印	瓦	文字	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	角印、陰刻、印枠□
961	ヘラ書	六?	文字	女瓦	凸面	旧トレ埋戻土	
962	押印	○	記号	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	竹筥、3か所
963	ヘラ書	不明	不明	男瓦	凹面	旧トレ埋戻土	
964	ヘラ書	不明	不明	男瓦	凸面	旧トレ埋戻土	
965	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	「七」?
966	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	2文字
967	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	
968	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	
969	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	
970	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	旧トレ埋戻土	

第 68 表 塔跡 2 地区出土文字瓦観察表 (1) (図面 173 ~ 176)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
971	ヘラ書	□原マ花万呂	人名『□原部花万呂』	女瓦	凹面	表土	
972	ヘラ書	□久万呂	人名	女瓦	凹面	覆瓦	
973	模骨	造塔	文字「造塔」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
974	模骨	造塔	文字「造塔」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
975	模骨	造塔	文字「造塔」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
976	模骨	造塔	文字「造塔」	女瓦	凹面	表土	逆字
977	模骨	造□	文字「造塔」	女瓦	凹面	表土	逆字
978	模骨	□塔	文字「造塔」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
979	模骨	□塔	文字「造塔」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字

第68表 塔跡2地区出土文字瓦観察表(2)(図面173~176)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
980	模骨	塔	文字「造塔」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
981	模骨	造塔	文字「造塔」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
982	模骨	□塔	文字「造塔」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
983	模骨	□塔	文字「造塔」	女瓦	凹面	表土	逆字
984	模骨	塔?	文字「造塔」	女瓦	凹面	表土	逆字
985	模骨	塔?	文字「造塔」	女瓦	凹面	表土	逆字
986	模骨	塔?	文字「造塔」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
987	模骨	塔?	文字「造塔」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
988	模骨	造?	文字「造塔」	女瓦	凹面	表土	逆字
989	模骨	造?	文字「造塔」	女瓦	凹面	SK3264	逆字
990	模骨	造塔?	文字「造塔」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
991	模骨	造塔?	文字「造塔」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
992	模骨	造塔?	文字「造塔」	女瓦	凹面	表土	逆字
993	模骨	造?	文字「造塔」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
994	押印	王	郡名「多磨郡」	女瓦	凹面	覆瓦	角印、陰刻、印枠□
995	模骨	王	郡名「多磨郡」	女瓦	凹面	覆瓦	
996	模骨	口?	郷名「(多磨郡)川口郷」	女瓦	凹面	表土	
997	押型	都	郡名「都筑郡」	女瓦	凸面	表土	
998	押印	都?	郡名「都筑郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
999	押印	都?	郡名「都筑郡」	女瓦	凹面	SK284	丸印、陽刻、印枠○
1000	へら書	都立	郡郷名「都筑郡立野郷」	男瓦	端面	覆瓦	
1001	へら書	久	郡名「久良郡」	女瓦	凹面	覆瓦	
1002	押型	橘	郡名「橘樹郡」	女瓦	凸面	SK3264	
1003	押型	橘	郡名「橘樹郡」	女瓦	凸面	覆瓦	
1004	押型	橘	郡名「橘樹郡」	女瓦	凸面	表土	
1005	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	表土	
1006	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	表土	
1007	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	表土	
1008	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	覆瓦	
1009	押型	往	郡名「往原郡」	女瓦	凸面	覆瓦	
1010	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	覆瓦	角印、陰刻、印枠Γ
1011	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凸面	覆瓦	角印、陽刻、印枠なし
1012	押印	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	覆瓦	角印、陽刻、印枠なし
1013	押印	豊	郡名「豊島郡」	男瓦	凸面	覆瓦	角印、陽刻、印枠なし
1014	へら書	豊	郡名「豊島郡」	女瓦	凹面	覆瓦	
1015	へら書	荒	郷名「(豊島郡)荒島郷」	男瓦	凸面	覆瓦	
1016	へら書	足?	郡名「足立郡」	女瓦	凹面	覆瓦	
1017	へら書	入	郡名「入間郡」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
1018	へら書	企	郡名「比企郡」	男瓦	凸面	表土	
1019	押型	大田?	郷名「(埼玉郡)太田郷」	女瓦	凸面	覆瓦	
1020	へら書	大	郡名「大里郡」	男瓦	凹面	覆瓦	指書

第68表 塔跡2地区出土文字瓦観察表(3)(図面173~176)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
1021	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	覆瓦	
1022	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	表土	
1023	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	覆瓦	
1024	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	覆瓦	
1025	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	覆瓦	
1026	模骨	大	郡名「大里郡」	女瓦	凹面	表土	あるいは「万?」
1027	模骨	上?	郷名「(幡羅郡)上桑郷」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
1028	模骨	上?	郷名「(幡羅郡)上桑郷」	女瓦	凹面	表土	逆字
1029	模骨	上?	郷名「(幡羅郡)上桑郷」	女瓦	凹面	覆瓦	逆字
1030	押印	椀	郡名「椀澤郡」	女瓦	凹面	覆瓦	角印、陰刻、印枠□
1031	押印	椀	郡名「椀澤郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
1032	押印	加瓦	郡名「賀美郡」	女瓦	凹面	表土	角印、陰刻、印枠□
1033	押印	兒玉	郡名「兒玉郡」	女瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
1034	押印	兒玉	郡名「兒玉郡」	女瓦	凸面	覆瓦	角印、陰刻、印枠□
1035	押印	兒玉	郡名「兒玉郡」	女瓦	凸面	表土	角印、陰刻、印枠□
1036	へら書	子	郡名「兒玉郡」	男瓦	凸面	表土	
1037	へら書	子	郡名「兒玉郡」	男瓦	凸面	覆瓦	
1038	へら書	子	郡名「兒玉郡」	男瓦	端面	覆瓦	
1039	へら書	子	郡名「兒玉郡」	男瓦	端面	覆瓦	
1040	へら書	子	郡名「兒玉郡」	男瓦	凸面	表土	
1041	へら書	子	郡名「兒玉郡」	男瓦	端面	覆瓦	
1042	模骨	井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	女瓦	凹面	表土	
1043	模骨	井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	女瓦	凹面	表土	
1044	模骨	井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	女瓦	凹面	表土	
1045	模骨	井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	女瓦	凹面	覆瓦	
1046	模骨	井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	女瓦	凹面	表土	
1047	模骨	井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	男瓦	凹面	表土	
1048	模骨	井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	女瓦	凹面	表土	
1049	模骨	井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	女瓦	凹面	表土	
1050	模骨	井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	女瓦	凹面	表土	
1051	模骨	井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	女瓦	凹面	表土	
1052	模骨	井	郷名「(兒玉郡)大井郷」	女瓦	凹面	表土	
1053	模骨	中	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	表土	
1054	模骨	中?	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	覆瓦	
1055	模骨	中?	郡名「那珂郡」	女瓦	凹面	覆瓦	
1056	へら書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	表土	
1057	へら書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	覆瓦	
1058	へら書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凹面	覆瓦	
1059	へら書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凹面	表土	
1060	へら書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	覆瓦	
1061	へら書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凸面	覆瓦	

第 68 表 塔跡 2 地区出土文字瓦観察表 (4) (図面 173 ~ 176)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
1062	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	女瓦	凸面	覆乱	
1063	ヘラ書	父	郡名「秩父郡」	男瓦	凹面	表土	
1064	范	父	郡名「秩父郡」	踏瓦	-	覆乱	
1065	ヘラ書	余	郷名「余戸郷」	女瓦	凹面	覆乱	
1066	ヘラ書	造	文字	男瓦	凸面	表土	
1067	ヘラ書	飛	文字	男瓦	凹面	表土	
1068	ヘラ書	書	文字	男瓦	凹面	SB224 版築内	
1069	ヘラ書	山	文字	女瓦	凸面	表土	
1070	ヘラ書	山	文字	男瓦	凸面	覆乱	
1071	ヘラ書	心?	文字	女瓦	凹面	表土	
1072	ヘラ書	二	文字	男瓦	凹面	SX268	
1073	ヘラ書	十	文字	女瓦	端面	覆乱	あるいは「父?」
1074	ヘラ書	□瓦	文字	女瓦	凹面	表土	
1075	ヘラ書	田?	文字	女瓦	凹面	覆乱	
1076	模骨	十	文字	女瓦	凹面	表土	
1077	ヘラ書	册	文字	男瓦	凸面	表土	
1078	模骨	万	文字	女瓦	凹面	表土	
1079	模骨	本	文字	女瓦	凹面	覆乱	
1080	模骨	干?	文字	女瓦	凹面	表土	
1081	模骨	𠄎	記号	女瓦	凹面	覆乱	「丙?」
1082	押印	○×4	記号	男瓦	凸面	覆土	竹管
1083	模骨	←	記号	女瓦	凹面	覆乱	
1084	指書	一	記号	女瓦	凹面	覆乱	
1085	ヘラ書	一	鐵画瓦?	男瓦	凸面	表土	
1086	ヘラ書	不明	不明	男瓦	凹面	表土	
1087	ヘラ書	不明	文字	女瓦	凹面	表土	
1088	ヘラ書	不明	不明	男瓦	凹面	表土	
1089	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	表土	
1090	指書	不明	不明	女瓦	凹面	覆乱	
1091	ヘラ書	不明	不明	男瓦	凸面	覆乱	
1092	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凸面	覆乱	
1093	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凹面	表土	
1094	ヘラ書	不明	不明	女瓦	凸面	覆乱	
1095	ヘラ書	不明	不明	男瓦	凸面	表土	
1096	模骨	不明	不明	男瓦	凹面	表土	

第 69 表 南門地区出土文字瓦観察表 (図面 176)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
1097	押型	多	部名「多磨部」	女瓦	凸面	表土	
1098	押型	往原	部名「往原部」	女瓦	凸面	表土	
1099	押型	往	部名「往原部」	女瓦	凸面	表土	

第 70 表 文字埴観察表 (図面 177)

No.	記載方法	内容	内容種別	瓦種別	記載位置	出土位置	備考
1100	ヘラ書	橘	部名「橘樹部」	埴	-	金堂地区 10区 南掘張	埴 (図面 123-16)
1101	ヘラ書	大里	部名「大里部」	埴	-	講堂地区 1区 表土	埴 (図面 129-21)
1102	ヘラ書	大里	部名「大里部」	埴	-	講堂地区 2区 埋戻土	埴 (図面 129-19)
1103	ヘラ書	加	部名「賀美部」	埴	-	中門地区 表土	埴 (図面 131-3)
1104	ヘラ書	加	部名「賀美部」	埴	-	講堂地区 9区西 表土	埴 (図面 129-18)
1105	ヘラ書	加	部名「賀美部」	埴	-	講堂地区 12区 表土	埴 (図面 127-9)
1106	ヘラ書	中	部名「那珂部」	埴	-	金堂地区 21区	
1107	押印	父	部名「秩父部」	埴	-	金堂地区 7区	
1108	ヘラ書	父	部名「秩父部」	埴	-	講堂地区 12区 表土	埴 (図面 127-10)
1109	ヘラ書	父	部名「秩父部」	埴	-	中門地区 SK3282	埴 (図面 131-1)
1110	ヘラ書	瓦	文字	埴	-	講堂地区 12区 表土	埴 (図面 128-13)

第71表 昭和31・33・39～44年度調査出土土器類(1)(図面178～181、図版33)

No.	種別	観察内容
1	土師器 環	法量 口径(10.8)cm/底径(5.1)cm/器高5.9cm 色調 赤褐色 胎土 赤色スコリア状物質を多く混入。 調整 粘土紐巻き上げ後、指頭により押え成形。口縁部-コノナデ。備考 灯火器(内面に煤付着)。二次火熱を受ける。出土位置 金堂
2	土師器 環	法量 底径4.4cm/器高2.5cm 色調 黄褐色 胎土 赤色スコリア状物質を少量混入。調整 粘土紐巻き上げ後、指頭により押え成形。体部-下端横へら削り。底部-手持ちへら削り。備考 灯火器(内面に煤付着) 出土位置 金堂
3	須恵器 環	法量 口径(11.6)cm/底径(6.5)cm/器高4.0cm 色調 淡黄褐色 胎土 赤色スコリア状物質を少量混入。 調整 口縁部-横ナデ。底部-回転系切り。備考 灯火器(口縁部に煤付着) 出土位置 金堂
4	須恵器 環	法量 底径(6.7)cm 色調 青灰色 調整 底部-回転系切り 備考 底部外面に判読不明のへら書き。 出土位置 金堂
5	須恵器 環	法量 底径6.0cm/器高2.6cm 色調 青灰色 調整 円柱作り。全面丁寧な回転ナデ。底部回転系切り。 出土位置 金堂
6	須恵器 埴	法量 底径(5.9)cm/器高2.5cm 色調 薄灰色 調整 底部回転系切り後、付高台。備考 二次火熱を受ける。 出土位置 金堂
7	須恵器 埴	法量 底径(6.8)cm/器高3.0cm 色調 灰色 出土位置 金堂
8	土師質土器 環	法量 口径(11.2)cm/底径6.4cm/器高5.4cm 色調 明褐色～薄黒褐色 焼成 軟質 胎土 赤色スコリア状物質を多く混入し、緻密。調整 全面丁寧な回転ナデ。底部-回転系切り。備考 図版33 出土位置 金堂
9	土師質土器 環	法量 口径(11.6)cm/底径4.2cm/器高3.8cm 色調 赤褐色 胎土 赤色スコリア状物質を多く混入。 調整 口縁部-横ナデ。全面回転ナデ? 底部-回転系切り。備考 図版33 出土位置 金堂
10	土師質土器 環	法量 口径(12.7)cm/底径6.2cm/器高3.8cm 色調 明褐色～赤褐色 胎土 赤色スコリア状物質を混入。 調整 全面-回転ナデ。底部-回転系切り。 出土位置 金堂
11	土師質土器 環	法量 口径11.4cm/底径5.5cm/器高5.3cm 色調 赤褐色 焼成 軟質 胎土 赤色スコリア状物質を混入し、緻密。調整 口縁部-内外面横ナデ。全面丁寧な回転ナデ。調整痕が顕著である。底部-回転系切り。備考 灯火器-図版33 出土位置 金堂
12	土師質土器 環	法量 口径(12.4)cm/底径(6.2)cm/器高4.0cm 色調 赤褐色 焼成 軟質 胎土 赤色スコリア状物質を混入し、緻密。調整 回転ナデ? 備考 灯火器-図版33 出土位置 金堂
13	土師質土器 環	法量 口径(10.0)cm/底径5.1cm/器高4.5cm 色調 明褐色 焼成 軟質 胎土 赤色スコリア状物質を多く混入し、緻密。調整 全面回転ナデ? 底部-回転系切り。備考 灯火器(内面に煤付着) 出土位置 金堂
14	土師質土器 埴	法量 器高3.3cm 色調 外面-淡赤褐色、内面-淡黄白色～黒色 焼成 軟質 胎土 緻密 調整 底部内面へら磨き? 備考 黒色土器の可能性がある。図版33 出土位置 金堂
15	土師質土器 小皿	法量 口径(8.4)cm/底径4.6cm/器高2.5cm 色調 薄赤褐色 胎土 赤色スコリア状物質を多く混入。 調整 底部-回転系切り 備考 底部中央に焼成後の孔あり。図版33 出土位置 金堂
16	土師質土器 小皿	法量 口径(8.1)cm/底径5.4cm/器高2.1cm 色調 褐色 胎土 海綿骨針・赤色スコリア状物質を混入。 調整 底部-回転系切り。備考 図版33 出土位置 金堂
17	土師器 小皿	法量 口径(9.0)cm/底径(4.5)cm/器高2.2cm 色調 黄褐色 胎土 海綿骨針・赤色スコリア状物質(少量)を混入。調整 底部-回転系切り。備考 灯火器 出土位置 金堂
18	土師質土器 小皿	法量 口径(9.2)cm/底径(5.4)cm/器高2.3cm 色調 淡黄褐色 調整 全面丁寧な回転ナデ? 底部-静止系切り(削ぎ切り) 備考 図版33 出土位置 金堂
19	灰輪陶器 埴	法量 底径(7.0)cm/器高1.8cm 色調 灰白色 調整 底部回転系切り後、付高台。 出土位置 講堂
20	灰輪陶器 埴	法量 底径6.2cm/器高1.9cm 色調 黄白色 調整 全面丁寧なナデ。底部-回転系切り後、付高台。 備考 内面に重ね焼きの痕跡あり。 出土位置 講堂
21	灰輪陶器 埴	法量 底径(7.4)cm/器高2.7cm 色調 薄灰白色 調整 全面丁寧な回転ナデ。付高台。備考 内面見込み部分に重ね焼きの痕跡あり。 出土位置 講堂
22	灰輪陶器 皿	法量 口径(18.9)cm/底径(4.0)cm/器高1.8cm 色調 素地-黄白色、釉調-黄緑色 調整 底部および体部下端回転へら削り。備考 口縁部外面および全内面施釉。 出土位置 講堂
23	灰輪陶器 皿	法量 底径6.8cm/器高5.1cm 色調 素地-薄灰白色、釉調-黄緑色 調整 底部回転系切り 備考 外面施釉 出土位置 講堂
24	須恵器 蓋	法量 器高2.4cm 色調 濃青灰色 調整 天井部外面回転系切り痕残存。肩部-回転へら削り。 出土位置 講堂
25	須恵器 埴	法量 底径(6.5)cm/器高2.3cm 色調 暗灰褐色～明褐色 焼成 やや軟質 胎土 緻密 調整 ロク口調整、底部-回転系切り。 出土位置 講堂 ※旧報告では土師質土器として報告。
26	土師質土器 環	法量 口径12.7cm/底径(5.4)cm/器高4.0cm 色調 赤褐色 胎土 赤色スコリア状物質を少量混入。 調整 全面丁寧な回転ナデ。底部-回転系切り。 出土位置 講堂
27	土師質土器 環	法量 口径12.9cm/底径5.2cm/器高4.1cm 色調 赤褐色 胎土 赤色スコリア状物質を少量混入。調整 粘土紐巻き上げ後、全面丁寧な回転ナデ。底部-回転系切り。備考 灯火器(内面に煤付着) 出土位置 講堂
28	土師質土器 環	法量 口径12.5cm/底径5.1cm/器高4.2cm 色調 赤褐色 胎土 赤色スコリア状物質を少量混入。 調整 全面丁寧な回転ナデ。底部-回転系切り。備考 灯火器(内面に煤付着) 出土位置 講堂
29	土師質土器 環	法量 口径(13.1)cm/底径5.5cm/器高4.3cm 色調 赤褐色～明黄褐色 胎土 赤色スコリア状物質を少量混入。備考 灯火器(内面に煤付着) 出土位置 講堂
30	土師質土器 環	法量 口径(9.7)cm/底径5.1cm/器高4.5cm 色調 明黄褐色 焼成 軟質 胎土 赤色スコリア状物質を少量混入し、緻密。調整 粘土紐巻き上げ後、回転ナデ。底部-回転系切り。 出土位置 講堂

第71表 昭和31・33・39～44年度調査出土土器類(2)(図面178～181、図版33)

No.	種別	観察内容
31	土師質土器 環	法量 口径(12.3)cm/底径(6.9)cm/器高3.8cm 色調 淡赤褐色 胎土 赤色スコリア状物質を多く混入。 調整 外面雑な回転ナデ。底部・回転系切り。 出土位置 調査
32	土師質土器 椀	法量 底径6.4cm/器高2.3cm 色調 明黄褐色 焼成 やや軟質 調整 ロクロ調整。底部・回転系切り後付高台。高台部丁寧なナデ。 出土位置 調査
33	土師質土器 環	法量 口径(11.0)cm/底径5.5cm/器高4.7cm 色調 明黄褐色 焼成 軟質 胎土 赤色スコリア状物質を少量混入し、緻密。調整 全面やや雑な回転ナデ。底部・回転系切り。備考 灯火器(内面に煤付着) 出土位置 調査
34	須恵器 甕	色調 黒灰色 調整 口縁部に内外面横方向の指ナデ。備考 肩部外面自然釉付着 出土位置 調査
35	土師質土器 環	法量 底径(5.6)cm/器高2.0cm 色調 明褐色 焼成 やや軟質 胎土 緻密 調整 ロクロ調整。底部・回転系切り後付高台。 出土位置 雑椀
36	土師質土器 環	法量 口径(10.7)cm/器高3.4cm 色調 明褐色(内面黒色) 胎土 緻密 調整 ロクロ調整 備考 灯火器(内面に煤付着) 出土位置 雑椀
37	土師質土器 環	法量 底径(3.4)cm 器高1.6cm 色調 灰白色 調整 底部回転系切り。 出土位置 中門
38	土師質土器 環	法量 口径(11.5)cm/底径(5.0)cm/器高3.5cm 色調 明灰褐色 焼成 軟質 調整 ロクロ調整。底部回転系切り。 出土位置 中門
39	須恵器 環	法量 口径17.9cm/底径8.8cm/器高8.0cm 色調 ねずみ色 胎土 緻密 調整 ロクロ調整。底部回転系切り後付高台。 出土位置 中門
40	土師質土器 環	法量 口径15.3cm/器高5.1cm 色調 褐色～赤褐色 調整 粘土紐巻き上げ痕あり。ロクロ調整。底部・回転系切り。備考 灯火器(内面に煤付着) 出土位置 中門
41	須恵器 甕	法量 口径(16.6)cm/器高4.5cm 色調 外面黒灰色 内面黄味灰色 胎土 海綿骨針を混入 調整 ロクロ調整 備考 内面に自然釉付着 出土位置 雑椀
42	土師器 甕	法量 口径(16.1)cm/器高12.4cm 色調 外面明褐色～暗褐色 内面黒色(一部赤褐色) 焼成 やや軟質 調整 粘土紐成形。口縁部・横ナデ。胴部・内面横ナデ。外面下斜方向のヘラ削り。 出土位置 中門
43	須恵器 環	法量 口径(13.8)cm/底径6.4cm/器高3.8cm 色調 黒灰色～暗茶褐色 調整 回転による調整。底部・内面一方のナデ調整を行う。底部・ヘラ削り。備考 底部外面に「干」のヘラ書き。 出土位置 D地区
44	須恵器 環	法量 口径12.5cm/底径5.2cm/器高4.3cm 色調 黄味灰色 胎土 赤色スコリア状物質を混入。調整 全体丁寧に丁寧な回転ナデ。底部・回転系切り。備考 全体外面に「丁」の墨書あり。図版33 出土位置 D地区
45	須恵器 環	法量 口径12.7cm/底径5.7cm/器高4.6cm 色調 黄味灰色 調整 回転による調整痕が顕著である。底部・回転系切り。備考 灯火器(内外面に煤付着) 出土位置 D地区
46	須恵器 環	法量 口径12.8cm/底径5.1cm/器高4.3cm 色調 灰褐色 調整 全面丁寧な回転ナデ。底部・回転系切り。備考 図版33 出土位置 D地区
47	須恵器 環	法量 口径13.3cm/底径5.1cm/器高4.0cm 色調 暗褐色 胎土 赤色スコリア状物質を多く混入。調整 回転ナデ。底部・回転系切り。備考 灯火器(内外面に煤付着)・図版33 出土位置 D地区
48	須恵器 環	法量 口径(11.8)cm/底径5.0cm/器高4.3cm 色調 薄灰色 調整 内外面回転ナデ。底部・回転系切り。 出土位置 D地区
49	須恵器 環	法量 口径13.3cm/底径5.2cm/器高4.0cm 色調 上半黄味灰色 下半赤灰色 胎土 赤色スコリア状物質を多く混入。調整 全面丁寧な回転ナデ。底部・回転系切り。備考 灯火器・図版33 出土位置 D地区
50	須恵器 環	法量 口径(14.9)cm/底径5.1cm/器高4.7cm 色調 灰褐色 調整 内外面回転ナデ。口縁部・横ナデ。底部・回転系切り。 出土位置 D地区
51	須恵器 環	法量 口径12.9cm/底径4.8cm/器高3.6cm 色調 上半灰白色 下半黒褐色 調整 全面丁寧な回転ナデ。底部・回転系切り。備考 灯火器・図版33 出土位置 D地区
52	須恵器 環	法量 底径4.6cm/器高3.6cm 色調 明褐色 調整 全面回転ナデ?。底部・回転系切り。 出土位置 D地区
53	須恵器 環	法量 底径5.0cm/器高3.7cm 色調 黄味灰色～灰褐色 胎土 赤色スコリア状物質を混入 調整 全面回転ナデ。底部・回転系切り。 出土位置 D地区
54	須恵器 環	法量 口径(12.1)cm/底径5.4cm/器高4.0cm 色調 灰色 調整 粘土紐巻き上げ後、回転ナデ。調整痕が顕著である。底部・回転系切り。 出土位置 D地区
55	須恵器 環	法量 口径14.3cm/底径7.4cm/器高5.8cm 色調 上半・青灰色、下半・灰褐色。調整 全面回転ナデ。口縁部・横ナデ。底部・回転系切り。 出土位置 D地区
56	須恵器 環	法量 口径(15.0)cm/底径7.8cm/器高8.1cm 色調 黄味灰色 調整 粘土紐巻き上げ後、回転ナデ。付高台。底部・回転系切り。備考 図版33 出土位置 D地区
57	須恵器 環	法量 口径16.0cm/底径6.7cm/器高6.9cm 色調 暗灰色 調整 粘土紐巻き上げ後、外面回転ナデ。口縁部・横ナデ。付高台。底部・回転系切り。備考 図版33 出土位置 D地区
58	須恵器 環	法量 底径6.0cm/器高3.3cm 色調 黒灰色 調整 回転ナデ。底部・回転系切り。 出土位置 D地区
59	土師質土器 環	法量 底径5.5cm/器高3.9cm 色調 赤褐色 調整 全面丁寧な回転ナデ?。底部・回転系切り。備考 灯火器 出土位置 D地区
60	土師質土器 環	法量 口径(12.0)cm/底径5.0cm/器高3.5cm 色調 明褐色 胎土 赤色スコリア状物質を多く混入 調整 口縁部・横ナデ。底部・回転系切り。 出土位置 D地区

第71表 昭和31・33・39～44年度調査出土土器類(3)(図面178～181、図版33)

No.	種別	観察内容
61	土師質土器 環	法量 口径(13.3)cm/底径(5.0)cm/器高3.1cm 色調 明褐色 焼成 軟質 胎土 赤色スコリア状物質を混入し、緻密。調整 全面丁寧な回転ナデ?。底部-回転糸切り。出土位置 D地区
62	土師質土器 環	法量 口径12.9cm/底径5.6cm/器高4.3cm 色調 赤褐色 胎土 赤色スコリア状物質を多く混入調整 全面丁寧な回転ナデ。底部-回転糸切り。備考 図版33 出土位置 D地区
63	土師質土器 環	法量 口径(10.7)cm/底径5.8cm/器高5.2cm 色調 赤褐色 焼成 軟質 胎土 赤色スコリア状物質を混入し、緻密。調整 回転ナデ調整。底部-回転糸切り。備考 図版33 出土位置 D地区
64	土師質土器 環	法量 口径(12.1)cm/底径(6.0)cm/器高4.2cm 色調 赤褐色 焼成 軟質 胎土 赤色スコリア状物質を混入し、緻密。調整 内外面回転ナデ。底部-回転糸切り。出土位置 D地区
65	土師質土器 環	法量 口径6.4cm/器高2.8cm 色調 褐色 焼成 軟質 胎土 赤色スコリア状物質を混入し、緻密。調整 底部-回転糸切り後、付高台。出土位置 D地区
66	土師質土器 埴	法量 口径(8.2)cm/器高1.8cm 色調 黄褐色 胎土 赤色スコリア状物質を混入 調整 底部回転糸切り後、付高台。出土位置 D地区
67	土師質土器 埴	法量 口径8.3cm/器高2.4cm 色調 黄褐色 胎土 精選されている 調整 丁寧な回転ナデ 出土位置 D地区
68	土師質土器 埴	法量 口径7.2cm/器高1.4cm 色調 内面-黒色、外面-褐色 調整 内面へら磨き 備考 黒色土器 出土位置 D地区
69	土師質土器 埴	法量 口径6.9cm/器高2.0cm 色調 赤褐色 胎土 赤色スコリア状物質を多く混入 調整 回転ナデ。底部-回転糸切り後、付高台。出土位置 D地区
70	土師質土器 環	法量 口径(13.2)cm/底径7.1cm/器高4.0cm 色調 黄褐色 胎土 赤色スコリア状物質を多く混入調整 粘土紐巻き上げ後、回転ナデ。底部-回転糸切り。出土位置 D地区
71	須恵器 甕	色調 青灰色 調整 外面-平行叩き目痕、内面-上半部縦方向のへらナデ。出土位置 D地区
72	須恵器 長頸壺	法量 口径8.0cm/器高12.1cm 色調 灰色～黒灰色 調整 胴下端部-回転へら削り後、内外全面回転ナデ。底部-回転へら削り後、付高台。備考 図版33 出土位置 D地区
73	灰釉陶器 長頸瓶	法量 口径9.2cm/器高3.3cm 色調 灰白色 調整 丁寧な回転ナデ、底部-回転糸切り後、付高台。出土位置 D地区
74	土師質土器 埴	法量 口径7.7cm/器高1.9cm 色調 赤褐色 焼成 軟質 胎土 赤色スコリア状物質を混入し、緻密。調整 底部-回転糸切り後、付高台。出土位置 E地区
75	土師質土器 埴	法量 口径(13.1)cm/底径6.2cm/器高5.9cm 色調 明褐色(酸化焙) 胎土 緻密 調整 ロクロ調整。粘土紐巻き上げ痕がみられる。底部-回転糸切り。備考 内外面に火燗痕が残る。図版33 出土位置 塔跡1
76	須恵器 長頸壺	法量 口径(9.3)cm/器高2.8cm 色調 内面-青灰色、外面-黒灰色～灰色 調整 ロクロ調整 出土位置 塔跡1
77	土師質土器 埴	法量 口径(12.6)cm/底径6.4cm/器高5.9cm 色調 明黄褐色 胎土 緻密 調整 ロクロ調整。付高台後ナデ。備考 図版33 出土位置 塔跡1
78	須恵器 甕	色調 内面-灰色、外面-黄褐色 胎土 緻密 備考 内外面に自然釉付着。特に口縁部外面釉が重れる。図版33 出土位置 塔跡1
79	土師質土器 環	法量 口径(9.1)cm/底径5.3cm/器高2.4cm 色調 淡赤褐色 調整 ロクロ調整。外面に粘土紐巻き上げ痕あり。底部-回転糸切り。備考 図版33 出土位置 不明
80	土師質土器 環	法量 口径(10.0)cm/底径4.9cm/器高3.0cm 色調 明黄褐色 調整 ロクロ調整。底部-回転糸切り。備考 灯火器(内外面に煤付着)・図版33 出土位置 不明
81	土師質土器 環	法量 口径(10.7)cm/底径4.6cm/器高3.4cm 色調 淡赤褐色 焼成 軟質 調整 ロクロ調整。底部-回転糸切り。備考 灯火器(内面に煤付着) 出土位置 不明
82	土師質土器 環	法量 口径(12.7)cm/底径5.0cm/器高4.0cm 色調 明黄褐色(一部淡赤褐色) 胎土 緻密 調整 ロクロ調整。底部-回転糸切り。出土位置 不明
83	土師質土器 埴	法量 口径6.0cm/器高3.4cm 色調 淡灰褐色 焼成 軟質(ざらつく) 胎土 海綿骨針を備かに混入。調整 ロクロ調整。底部-回転糸切り。備考 図版33 出土位置 不明
84	土師質土器 埴	法量 口径6.9cm/器高2.9cm 色調 赤褐色 胎土 海綿骨針を混入。調整 ロクロ調整。内面(底部)一方のナデ。出土位置 不明
85	土師質土器 埴	法量 口径(13.2)cm/底径5.9cm/器高4.7cm 色調 内面-黒色、外面-黒色(一部暗褐色)。焼成 中や軟質 調整 ロクロ調整。底部-回転糸切り後、付高台。高台部ナデ。備考 内面に炭化物付着 出土位置 不明
86	灰釉陶器 埴	法量 口径(9.7)cm/器高2.0cm 色調 素地-灰白色、釉調-黄緑色 調整 ロクロ調整。備考 内面見込み部に重ね焼き痕あり。転用視と思われる(内面硬面?)。出土位置 不明
87	灰釉陶器 埴	法量 口径(6.4)cm/器高2.5cm 色調 暗い灰白色 調整 ロクロ調整。底部-回転糸切り後、ナデ。出土位置 不明
88	灰釉陶器 埴	法量 口径(6.9)cm/器高3.0cm 色調 素地-淡黄白色 調整 ロクロ調整。備考 施釉は漬け掛けで白色に発色している。出土位置 不明

第72表 東僧坊出土土器(図面182)

No.	種別	観察内容
1	須恵器 環	法量 口径13.0cm/底径5.0cm/器高4.1cm 残存率 完形 色調 灰色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 ロク口調整。底部-回転糸切り後、無調整。 出土位置 19次調査(昭和51年度)SK131
2	須恵器 皿	法量 口径16.6cm/底径7.3cm/器高2.9cm 残存率 口縁部一部欠損 色調 灰色 焼成 硬質 胎土 砂粒 微量混入 調整 ロク口調整。底部-回転糸切り後、無調整。 出土位置 19次調査(昭和51年度)SD27
3	須恵器 環	法量 口径(13.2)cm/底径5.4cm/器高4.3cm 残存率 2/3 色調 灰白色 焼成 硬質 胎土 砂粒微量混 入 調整 ロク口調整。底部糸切り後、無調整。 出土位置 414次調査(平成7年度)SD26
4	須恵器 環	法量 口径12.4cm/底径4.7cm/器高4.4cm 残存率 2/4 色調 灰黄白色-暗褐色 焼成 やや硬質 胎土 砂粒やや多量混入 調整 ロク口調整。底部-回転糸切り後、無調整。 出土位置 414次調査(平成7年度)SD26
5	須恵器 環	法量 口径12.7cm/底径4.5cm/器高4.4cm 残存率 ほぼ完形 色調 暗褐色 焼成 やや硬質 胎土 砂粒 少量混入 調整 ロク口調整。底部-回転糸切り後、無調整。 出土位置 414次調査(平成7年度)SD26
6	須恵器 環	法量 口径12.5cm/底径4.7cm/器高4.2cm 残存率 体部-口縁部4/5 色調 褐色 焼成 硬質 胎土 砂 粒少量混入 調整 ロク口調整。底部-回転糸切り後、無調整。 出土位置 414次調査(平成7年度)SD26
7	須恵器 環	法量 口径11.7cm/底径4.1cm/器高4.5cm 残存率 口縁部1/5欠損 色調 暗褐色-暗褐色 焼成 硬質 胎土 砂粒微量混入 調整 ロク口調整。底部-回転糸切り後、無調整。 出土位置 414次調査(平成7年度)SD26
8	須恵器 環	法量 口径(12.7)cm/底径(4.2)cm/器高3.4cm 残存率 1/4 色調 暗褐色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 ロク口調整。底部-回転糸切り後、無調整。備考 底部内面煤付着 出土位置 414次調査(平成7年度)SK1546
9	土師器 環	法量 底径6.7cm 器高(2.7)cm 残存率 体部-底部1/3 色調 薄黄褐色 焼成 軟質 胎土 砂粒微量混入 調整 ロク口調整。体部外面下半及び底部回転へう削り整形 出土位置 414次調査(平成7年度)SK1546
10	土師質土器 埴	法量 底径(8.2)cm 器高(1.8)cm 残存率 高台部のみ1/2 色調 薄黄褐色 焼成 やや硬質 胎土 緻密 調整 ロク口調整 出土位置 414次調査(平成7年度)SD26
11	土師質土器 埴	法量 口径(14.2)cm 底径7.6cm 器高5.3cm 残存率 遺存度2/3 色調 暗褐色 焼成 やや軟質 胎土 砂粒微量混入 調整 ロク口調整。底部-回転糸切り後、高台部付け。 出土位置 414次調査(平成7年度)遺構外

第73表 (伽藍中柵部区画施設)区画南辺出土土器(1)(図面183~185)

No.	種別	観察内容
1	土師器 埴	法量 口径11.6cm/底径5.0cm/器高4.1cm 残存率 口縁部一部欠損 色調 褐色 焼成 硬質 胎土 砂粒 少量混入 調整 粘土紐巻き上げ成形。体部-下半へう削り。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
2	土師器 環	法量 口径12.0cm/底径5.6cm/器高4.3cm 残存率 4/5 色調 淡黄色 焼成 やや硬質 胎土 砂粒微量 混入 調整 口縁部-外面-内面全面強く横ナデ。体部下半-指頭痕あり。 出土位置 226次調査(昭和60年 度)SD194 C2期
3	土師器 埴	法量 口径11.4cm/底径3.6cm/器高4.2cm 残存率 1/2 色調 暗灰褐色 焼成 硬質 胎土 砂粒微量混入 調整 粘土紐巻き上げ成形。体部下半-へう削り。備考 口縁部外面煤付着 出土位置 226次調査(昭 和60年度)SD194 C2期
4	土師器 環	法量 口径(11.8)cm/底径(8.0)cm/器高3.2cm 残存率 底部残存 色調 褐色 胎土 粗砂粒多量混入 調 整 底部へう削り 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
5	土師器 環	法量 口径(10.8)cm/底径(5.0)cm/器高3.4cm 残存率 1/6 色調 褐色 焼成 やや硬質 胎土 砂粒少量 混入 調整 輪組み成形。体部外面-指頭痕あり。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 B期
6	土師器 環	法量 口径(13.0)cm/底径5.0cm/器高4.5cm 残存率 1/3 色調 暗褐色-褐色 焼成 やや軟質 胎土 金雲母少量混入 調整 口縁部横ナデ。体部下半-指頭痕あり。備考 体部内面煤付着 出土位置 226次調査(昭 和60年度)SD194 B期
7	土師器 鉢	法量 口径(17.6)cm/器高(3.2)cm 残存率 口縁部片 色調 褐色 焼成 やや軟質 胎土 緻密 調整 口縁 部-横ナデ。口唇部-つまみあける。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
8	土師器 鉢	法量 底径(3.4)cm/器高(3.4)cm 残存率 底部付近残存 色調 褐色 焼成 やや硬質 胎土 金雲母やや多 量混入 調整 体部下半-縦位のへう削り。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C1期
9	須恵器 環	法量 口径(12.8)cm/底径4.6cm/器高3.9cm 残存率 3/5 色調 灰白色 焼成 硬質 胎土 砂粒やや多 量混入 調整 ロク口調整。底部-回転糸切り後、無調整。備考 体部内面煤付着 出土位置 226次調査(昭 和60年度)SD194 C2期
10	須恵器 環	法量 底径(5.8)cm/器高(2.8)cm 残存率 底部残存 色調 灰色 焼成 硬質 胎土 砂粒少量混入 調整 ロク口調整。底部-回転糸切り後、無調整。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
11	須恵器 調整	法量 底径6.0cm/器高(2.7)cm 残存率 1/3 色調 灰色 焼成 硬質 胎土 粗砂粒少量混入 調整 ロク口調整。底部回転糸切り後、無調整。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
12	須恵器 環	法量 底径(5.6)cm/器高(1.7)cm 残存率 底部2/3 色調 灰白色 焼成 やや硬質 胎土 砂粒微量混入 調整 ロク口調整。底部-回転糸切り後、無調整。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
13	須恵器 環	法量 底径(5.2)cm/器高(1.7)cm 残存率 3/6 色調 淡褐色 焼成 硬質 胎土 金雲母少量混入 調整 ロク口調整。底部-回転糸切り後、無調整。備考 体部内面煤付着 出土位置 226次調査(昭和60年 度)SD194 C1期
14	須恵器 環	法量 底径(6.2)cm/器高(0.8)cm 残存率 底部1/2 色調 灰白色-淡褐色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 底部-回転糸切り後、無調整。備考 底部外面不明黒書あり 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
15	須恵器 環	法量 底径6.4cm/器高(1.6)cm 残存率 底部1/2 色調 灰白色 焼成 硬質 胎土 白色粒多量混入 調整 底部-回転糸切り後、無調整。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 土坑

第 73 表 (如坐中核部区画施設) 区画南辺出土土器 (2) (図面 183 ~ 185)

No.	種別	観察内容
16	須恵器 環	法量 口径(11.8)cm/器高(3.5)cm 残存率 口縁部~体部上半 1/6 色調 灰色 焼成 硬質 胎土 海綿質砕 や多量混入 調整 口ク口調整 出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C1 期
17	須恵器 環	法量 口径(15.2)cm/器高(4.5)cm 残存率 口縁部~体部上半 1/6 色調 暗灰色 焼成 硬質 胎土 砂粒や や多量混入 調整 口ク口調整 出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C1 期
18	須恵器 環	法量 底径(2.6)cm/器高(0.9)cm 残存率 底部片 色調 灰白色 焼成 やや軟質 胎土 緻密 調整 口ク 口調整。底部・回転糸切り。備考 底部外面不明書書あり。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
19	須恵器 環	法量 口径 13.1cm/底径 5.7cm/器高 4.2cm 残存率 体部一次損 色調 褐色 焼成 やや軟質 胎土 粗 砂粒・雲母多量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り。備考 体部内外外面墨書「十」あり 出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
20	須恵器 環	法量 口径 12.8cm/底径(5.1)cm/器高 4.0cm 残存率 2/3 色調 灰白色~淡褐色 焼成 硬質 胎土 砂 粒少量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、無調整。備考 底部内外外面煤付着 出土位置 226 次調 査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
21	須恵器 環	法量 口径(12.7)cm/底径 4.5cm/器高 4.5cm 残存率 2/3 色調 灰黄白色 焼成 硬質 胎土 砂粒やや 多量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、無調整。備考 内面全面煤付着 出土位置 226 次調査(昭 和 60 年度)SD194 C2 期
22	須恵器 環	法量 口径 12.7cm/底径 4.5cm/器高 4.3cm 残存率 2/3 色調 暗褐色~褐色 焼成 硬質 胎土 金雲母 少量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、無調整。備考 内外外面煤付着 出土位置 226 次調査(昭 和 60 年度)SD194 C2 期
23	須恵器 環	法量 口径(12.0)cm/底径 4.8cm/器高 3.9cm 残存率 1/2 色調 灰黄白色 焼成 硬質 胎土 砂粒少量混 入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、無調整。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
24	須恵器 環	法量 底径(5.4)cm/器高(2.8)cm 残存率 1/3 色調 淡褐色 焼成 硬質 胎土 粗砂粒多量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、無調整。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
25	須恵器 環	法量 底径 6.2cm/器高(2.3)cm 残存率 底部残存 色調 淡黄白色 焼成 硬質 胎土 砂粒やや多量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、無調整。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
26	須恵器 環	法量 口径(12.0)cm/底径(4.7)cm/器高 4.0cm 残存率 1/2 色調 暗褐色 焼成 硬質 胎土 金雲母や 多量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、無調整。備考 内外外面煤付着 出土位置 226 次調査(昭 和 60 年度)SD194 C2 期
27	須恵器 環	法量 口径(13.8)cm/底径 5.2cm/器高 3.7cm 残存率 1/3 色調 淡褐色 焼成 硬質 胎土 砂粒微量混 入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、無調整。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
28	須恵器 環	法量 口径(12.1)cm/底径(5.1)cm/器高 4.0cm 残存率 1/3 色調 褐色 焼成 硬質 胎土 砂粒微量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、無調整。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
29	須恵器 環	法量 底径 4.6cm/器高(3.9)cm 残存率 2/5 色調 暗褐色 焼成 硬質 胎土 砂粒・金雲母やや多量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、無調整。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
30	須恵器 環	法量 口径 9.2cm/底径 4.8cm/器高 3.2cm 残存率 2/3 色調 灰黄白色 焼成 硬質 胎土 砂粒少量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、無調整。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
31	須恵器 環	法量 底径 5.0cm/器高(1.4)cm 残存率 底部 1/2 色調 褐色 焼成 硬質 胎土 砂粒微量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、無調整。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
32	須恵器 環	法量 底径 5.8cm/器高(2.1)cm 残存率 底部付近残存 色調 褐色 焼成 硬質 胎土 砂粒やや多量混入 調整 口ク口調整 回転糸切り後、体部下端・底部周縁へろ削り
33	須恵器 環	法量 底径(5.0)cm/器高(1.5)cm 残存率 底部 1/2 色調 灰黄白色 焼成 やや硬質 胎土 砂粒微量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、無調整。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C1 期
34	須恵器 環	法量 器高(2.0)cm 残存率 口縁部片 色調 暗褐色 焼成 やや硬質 胎土 粗砂粒微量混入 調整 口ク口 調整 備考 体部外面・不明書書あり。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
35	須恵器 環	法量 底径(3.3)cm/器高(0.7)cm 残存率 底部片 色調 褐色 焼成 軟質 胎土 緻密 調整 口ク口調整。 底部・回転糸切り後、無調整。備考 底部外面不明書書あり。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
36	須恵器 環	法量 底径(6.4)cm/器高(1.5)cm 残存率 底部 1/2 色調 灰白色 焼成 硬質 胎土 砂粒微量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、高台貼付。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
37	須恵器 環	法量 底径(6.2)cm/器高(2.7)cm 残存率 底部付近 1/3 色調 淡褐色 焼成 硬質 胎土 砂粒微量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、高台貼付。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
38	須恵器 環	法量 底径(6.6)cm/器高(1.7)cm 残存率 底部付近 1/6 色調 褐色 焼成 やや軟質 胎土 砂粒微量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、高台貼付。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
39	須恵器 環	法量 底径 5.1cm/器高(2.2)cm 残存率 底部付近残存 色調 褐色 焼成 やや硬質 胎土 金雲母やや多量 混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、高台貼付。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
40	須恵器 環	法量 底径(7.6)cm/器高(1.7)cm 残存率 底部付近 1/2 色調 褐色 焼成 やや硬質 胎土 砂粒微量混入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、高台貼付。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
41	須恵器 環	法量 底径 5.2cm/器高(3.3)cm 残存率 底部付近残存 色調 暗褐色 焼成 やや硬質 胎土 粗砂粒多量混 入 調整 口ク口調整。底部・回転糸切り後、高台貼付。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
42	須恵器 蓋	法量 口径(12.6)cm/底径(5.2)cm/器高 1.8cm 残存率 1/2 色調 暗灰褐色 焼成 硬質 胎土 粗砂粒や 多量混入 調整 口ク口調整。天井部・へろ削り。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C1 期
43	須恵器 蓋	法量 口径(15.0)cm/器高(2.5)cm 残存率 1/8 色調 灰色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 口ク口調整 出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期
44	須恵器 壺	法量 底径 5.2cm/器高(3.4)cm 残存率 底部付近残存 色調 暗褐色 焼成 硬質 胎土 粗砂粒やや多量混 入 調整 口ク口調整。体部下半・回転へろ削り。出土位置 226 次調査(昭和 60 年度)SD194 C2 期

第 73 表 (如壘中樞部区画施設) 区画南辺出土土器 (3) (図面 183 ~ 185)

No.	種別	観察内容
45	須恵器 甕	法量 底径(10.4)cm/器高(4.4)cm 残存率 底部付近1/4 色調 灰色 焼成 硬質 胎土 砂粒少量混入 調整 口ク口調整。底部-回転系へ削り。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
46	須恵器 甕	法量 器高(8.1)cm 残存率 頸部片 色調 灰色~暗褐色 焼成 硬質 調整 口ク口調整。波状文を描出 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
47	土師質土器 環	法量 底径6.0cm/器高(2.3)cm 残存率 底部残存 色調 褐色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 口ク口調整。 底部-回転系切り後、無調整。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
48	土師質土器 環	法量 底径7.4cm/器高(1.9)cm 残存率 底部3/4 色調 淡褐色 焼成 やや硬質 胎土 緻密 調整 口ク口調整。底部-回転系切り後、無調整。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
49	土師質土器 環	法量 底径(6.2)cm/器高(1.6)cm 残存率 底部2/3 色調 褐色 焼成 やや軟質 胎土 緻密 調整 底部-回転系切り後、外面手持ちへ削り。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
50	土師質土器 環	法量 底径5.1cm/器高(2.1)cm 残存率 底部残存 調整 底部-回転系切り後、無調整。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
51	土師質土器 環	法量 底径7.3cm/器高(2.0)cm 残存率 高台部残存 色調 褐色 焼成 やや軟質 胎土 金雲母微量混入 調整 底部-回転系切り後、無調整。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
52	土師質土器 環	法量 底径7.0cm/器高(2.4)cm 残存率 底部1/2 色調 淡褐色 焼成 軟質 胎土 緻密 調整 底部-回転系切り後、無調整。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
53	土師質土器 環	法量 口径(9.8)cm/底径(6.0)cm/器高3.2cm 残存率 1/6 色調 褐色 焼成 やや硬質 胎土 砂粒少量 混入 調整 底部-回転系切り後、無調整。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
54	土師質土器 胎土	法量 口径(13.9)cm/底径5.8cm/器高4.7cm 残存率 口縁部部分の欠け 色調 褐色 焼成 やや硬質 胎土 砂粒微量混入 調整 底部-回転系切り後、無調整。 備考 体部外面塗書「上」あり 出土位置 226次 調査(昭和60年度)SD194 C2期
55	土師質土器 埴	法量 器高(2.2)cm 残存率 底部残存 色調 褐色 焼成 軟質 胎土 緻密 調整 底部回転系切り後、高台 貼付。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
56	土師質土器 埴	法量 底径(5.8)cm/器高(2.4)cm 残存率 底部残存 色調 褐色 焼成 軟質 胎土 緻密 調整 底部回転系切り後、高台貼付。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
57	土師質土器 埴	法量 底径(6.2)cm/器高(2.7)cm 調整 底部-回転系切り後、高台貼付。 出土位置 226次調査(昭和60年度)SD194 C2期
58	須恵器 蓋	法量 口径11.5cm/器高(2.4)cm 残存率 握み部欠損 色調 灰色 焼成 硬質 胎土 白色粒微量混入 調整 口ク口調整。天井部-へ削り後、握み部貼付。出土位置 360次調査(平成3年度)SB125
59	須恵器 環	法量 口径(12.6)cm 底径5.6cm/器高4.2cm 残存率 2/3 色調 灰白色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 口ク口調整。底部-回転系切り後、無調整。 出土位置 360次調査(平成3年度)SD23
60	須恵器 鉢	法量 口径(18.2)cm/器高(5.6)cm 残存率 口縁部~体部上半、一部残存 色調 暗褐色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 口ク口調整。口縁部-握み上。備考 体部内面塗書「寺」あり 出土位置 360次調査(平 成3年度)SD194
61	須恵器 環	法量 底径(5.6)cm/器高(0.8)cm 残存率 底部1/4 色調 暗灰褐色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 口ク 口調整。回転系切り後、無調整。備考 底部外面不明へ削り書あり 出土位置 360次調査(平成3年度)SD194
62	須恵器 蓋	法量 口径(11.6)cm/器高2.5cm 残存率 1/2 色調 暗赤灰色~暗黄灰白色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 口ク口調整。天井部-へ削り後、握み部貼付。出土位置 360次調査(平成3年度)SB125
63	土師質土器 環	法量 口径(9.0)cm/底径(6.0)cm/器高2.2cm 色調 淡褐色 焼成 やや軟質 胎土 砂粒少量混入 調整 口ク口調整。底部-回転系切り後、無調整。 出土位置 360次調査(平成3年度)SI446
64	灰陶器 椀	法量 口径(19.0)cm/器高(5.2)cm 色調 灰白色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 口ク口調整 備考 口縁部~体部上半、内外面漬け掛け施軸。 出土位置 360次調査(平成3年度)SB128
65	灰陶器 皿	法量 底径(9.2)cm/器高(1.6)cm 残存率 底部1/2 色調 灰白色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 口ク口 調整。回転系切り後、高台貼付。備考 体部内、外面漬け掛け施軸 出土位置 360次調査(平成3年度)SD23
66	灰陶器 皿	法量 口径(12.8)cm/底径(6.1)cm/器高2.7cm 残存率 1/7 色調 灰白色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 口ク口調整。回転系切り後、高台貼付。備考 体部内外面漬け掛け施軸 出土位置 360次調査(平成3年度)P70
67	灰陶器 壺	法量 底径(5.4)cm/器高3.3cm 残存率 底部3/4 色調 暗灰白色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 口ク口 調整。回転系切り後、高台貼付。備考 体部外面自然剥着 出土位置 360次調査(平成3年度)遺構外
68	灰陶器 手付瓶	法量 器高(6.3)cm 残存率 肩部一部残存 色調 灰白色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 口ク口調整。 備考 体部外面施軸 出土位置 360次調査(平成3年度)遺構外
69	灰陶器 壺	法量 底径10.5cm/器高(6.1)cm 残存率 底部残存 色調 暗灰白色 焼成 硬質 胎土 砂粒少量混入 調整 口ク口調整。底部-へ削り調整後、高台貼付。備考 外面体部貼着 出土位置 360次調査(平成3年度) 遺構外
70	灰陶器 皿	法量 口径13.6cm/底径(7.0)cm/器高2.9cm 残存率 1/4 色調 灰黄白色 焼成 やや硬質 胎土 緻密 調整 口ク口調整。回転系切り後、高台貼付。備考 体部内外面漬け掛け施軸 出土位置 360次調査(平成3 年度)遺構外
71	灰陶器 皿	法量 口径(14.2)cm/底径(7.0)cm/器高2.8cm 残存率 1/3 色調 灰白色 焼成 硬質 胎土 緻密 調整 口ク口調整。回転系切り後、高台貼付。備考 口縁部内外面漬け掛け施軸 出土位置 360次調査(平成3 年度)遺構外

第74表 昭和31・33年度調査出土鏡瓦観察表(1)(図面186~188)

図面	出土位置	直径	内区				外区					出典 図版号	備考	
			中房径 形態	継子数	弁区径 弁幅	弁数 形態	内縁		外縁					
							幅	幅	文様	幅	高さ			文様
186-1	金堂	-	(3.0) B1	1	10.8 3.9	- SA	-	-	-	-	-	第6図1	技法D。接合部内外面(瓦当両面)ナデ。青灰色。4型式。	
186-2	金堂 (18.3)	-	6.1 B1	1	5.4	(4) SA	-	-	-	-	-	第6図2	文様内区のみ。間弁楕円形状。技法D。接合部内外面(瓦当両面)指ナデ。青灰色。5型式。	
186-3	金堂	-	B1	(1+4)	(6.7)	(6) SC	-	-	-	-	-	第6図3	瓦当裏面罫目叩き後指ナデ。褐色(内部青灰色)。赤色スロリア状物質を多く混入。	
186-4	金堂 (20.1)	-	(5.6) B1	1+(4) 方形	(14.2) 3.5	(6) SC	3.0	1.8	a	1.2	1.0	a	第6図4	中央蓮子に范キズあり。黄味灰色。外区外縁・瓦当側面・瓦当裏面周縁へラ削り。瓦当裏面へラ削り。瓦当裏面ナデ。23-A型式。
186-5	金堂	-	B1	(1+4) 長方形	4.7	(6) SC	2.5	1.0	a	1.5	0.8	a	第6図7	蓮弁に范キズあり。外区外縁・瓦当側面・瓦当裏面周縁へラ削り。瓦当裏面ナデ。青灰色。26-A型式。八坂前Ⅲ-2類。II期。
186-6	金堂 (16.5)	-	3.9 B1	1+4	(13.3) 3.7	(6) SC	1.6	-	-	-	1.2	a	第6図8	蓮弁楕円形。間弁三角形。青灰色。24-B型式。
186-7	金堂	-	B1	-	3.3	(6) SA	2.8	1.0	a	1.8	1.0	a	第6図10	接合部ナデ。瓦当側面へラ削り。同裏面指ナデ。青灰色。29-F型式。
186-8	金堂 (18.4)	-	(6.0) B1	1+(4)	(15.9) 2.1	(6) SA	1.6	-	-	-	0.5	a	第7図17	間弁細弁状。瓦当側面へラ削り。同裏面不調整(指頭痕残存)。薄青灰色。33型式。
186-9	金堂 (20.1)	-	6.3 B1	1+4 方形	15.7 2.7	6 SA	2.2	-	-	-	1.4	a	第8図19	接合部横ナデ。瓦当側面へラ削り。同裏面横ナデ(指頭痕残存)。青灰色。30-B型式。御殿山窯1a類。
186-10	金堂	-	B1	-	-	(6) SB	灰白色	-	-	-	-	-	第7図12	灰白色。31型式。八坂前1類。II期。
186-11	金堂	-	(5.2) B1	1+(4)	3.0	(6) SA	-	-	-	-	-	-	第7図18	瓦当裏面罫目叩き。明灰色。30-C類。御殿山窯1b類。
186-12	金堂 基壇内	(17.4)	5.0 A1	なし	(14.0) 4.6	8 SC	1.7	0.4	a	1.3	0.6	a	第9図32	間弁杏葉形。蓮弁に接する。技法BⅡ。瓦当裏面ナデ。薄青灰色。105-A1型式。南北企在地基。
186-13	金堂 (19.0)	-	5.3 B1	1+4	7.6 4.0	(6) SA	1.9	-	-	-	0.4	a	第8図20	技法BⅠ。接合部横ナデ。瓦当裏面ナデ。黒灰色。29-D型式。広町B遺跡改范?
186-14	金堂	-	B1	-	3.7	(8) SC	3.4	0.7	a	2.7	1.3	a	第9図31	外区外縁・瓦当側面へラ削り。瓦当裏面罫目叩き(L10本)後周縁へラ削り。灰白色。63型式。新久Ⅲ類・八坂前Ⅲ類。II期。
186-15	金堂	-	B1	-	3.0	- SA	(1.5)	-	-	-	0.9	a	第8図22	技法BⅠ。接合部・内外面(瓦当両面)横ナデ。内外瓦凸面罫目叩き(L)。青灰色。65-B3型式。
186-16	金堂	-	-	-	-	(7) SA	1.5	-	-	-	0.7	a	第8図21	技法CⅡ。瓦当裏面中央部ナデ。海獅骨針を多く混入。やや軟質。黄白色。
186-17	金堂	-	B1	-	-	(8) SA	-	-	-	-	-	-	第10図37	瓦当面に布目痕あり。黄白色。
186-18	金堂	-	-	-	5.0	(8) T	1.3	-	-	-	1.1	a	第10図40	蓮弁に子葉状の痕跡。間弁楔形。技法B。外区外縁・瓦当側面に布目痕。暗青灰色。83-C型式。瓦谷戸1類。I b期。
186-19	金堂	-	B1	-	2.8	(9) SA	3.1	2.1	b	1.0	0.9	a	第10図42	灰白色。軟質。121型式。平城宮系。
186-20	金堂	-	(3.0) C	-	4.3	- SA	-	-	-	-	-	-	第10図44	技法B。瓦当裏面ナデ。薄青灰色。
186-21	金堂 (18.8)	-	(4.5) B1	1+?	6.8	(8) SA	-	-	-	-	-	-	第10図45	中房内部を曲する凸線状痕跡あり。技法D7。海獅骨針を多く混入。青灰色。
187-22	講堂	-	4.7 B1	1+4	7.3 4.6	(6) SC	-	-	-	-	-	-	第6図9	接合部指ナデ。瓦当裏面罫目叩き(L10本)。薄青灰色。28型式。新久Ⅳ類。II期。
187-23	講堂	-	-	-	3.8	(8) SA	1.6	-	-	-	-	a	第8図26	間弁杏葉形。外区文様面と同高。灰色。93型式。

第 74 表 昭和 31・33 年度調査出土瓦観察表(2)(図面 186~188)

図面	出土位置	直径	内区				外区						出典 図版号	備考
			中房径 形態	蓮子数	弁区径 弁幅	弁数 形態	内縁			外縁				
							幅	幅	文様	幅	高さ	文様		
187-24	講堂	-	-	-	-	(8) SC	-	-	-	-	-	-	第 8 図 27	間弁変形 Y 字状。技法 B I。 男瓦部凸面縦へら削り。95-A 型式。八坂前Ⅲ類。Ⅱ期。
187-25	講堂	-	-	-	-	(8) SC	2.4	1.1	a	1.3	0.5	a	第 10 図 38	蓮弁と間弁が接する。技法 C I。接合部指ナデ。海綿骨針 を多く混入。黒色。南比企土 野系。
187-26	講堂	-	-	-	-	(8) SC	2.6	1.0	a	1.6	1.5	a	第 10 図 39	間弁楔形。海綿骨針・赤色ス コリア状物質を混入。灰白色。
187-27	金堂 講堂	-	8.0 A1	1+6	-	-	-	-	-	-	-	-	第 8 図 25	蓮子輪郭線あり。海綿骨針・ 赤色スコリア状物質を混入。 灰白色。久保瓦窯・石田園分 寺瓦窯。I b 期。
187-28	講堂二 次基壇内	(18.5)	6.4 A1	1+8	(14.6) 4.1	8 SC	2.0	0.7	a	1.3	0.9	a	第 9 図 36	蓮弁と間弁が接する。技法 B Ⅱ。海綿骨針を多く混入。軟 質。灰色。86 型式。
187-29	金堂 講堂	-	-	-	-	(6) SA	1.5	-	-	-	0.4	a	第 10 図 47	蓮弁・間弁ともに鑿形。瓦当 裏面曬目叩き(L9本)後、へら 削り。薄青灰色。171 型式。 西別府廃寺に出土例あり。
187-30	金堂 講堂	(17.7)	(3.3) B1	1	(14.2) 3.2	- SA	1.7	-	-	-	0.8	a	第 8 図 23	蓮弁細弁状。間弁 Y 字状。 瓦当裏面指ナデ?。青灰色。 65-B4 型式。
187-31	金堂 講堂	-	-	-	-	(8) SC	1.1	-	-	-	0.7	a	第 8 図 28	間弁三角形状(凸縁)。技法 B I。青灰色。91-?型式。
187-32	金堂 講堂	(18.4)	4.8 B1	1+4	14.3 4.0	6 SA	2.2	0.8	a	1.4	0.9	a	第 7 図 15	蓮弁に范キズ(2ヶ所)あり。 赤・黒色スコリア状物質を混 入。灰白色。29B 型式。
187-33	金堂 D 地区	19.2	4.5 B1	1 菱形	13.7 4.1	6 SC	2.8	1.1	a	1.7	0.9	a	第 7 図 11	接合部指ナデ。瓦当裏面ナデ (指頭痕残存)。明青灰色。27 型式。新久 1・八坂前Ⅳ類。 Ⅱ期。
187-34	金堂 D 地区	-	- A1	-	- 6.4	(6) SA	-	-	-	-	-	-	第 7 図 13	明灰色。海綿骨針を少し混入。
187-35	金堂 D 地区	19.6	7.1 B1	1+6	17.0 4.6	7 SC	1.0 ~ 1.6	-	-	-	1.1	a	第 8 図 24	技法 B I。接合溝指で浅くえぐる。 瓦当裏面指ナデ(指頭痕 残存)。間弁変形 Y 字状。黒 灰色。61-A 型式。武蔵国府・ 寺尾台廃寺に出土例あり。
187-36	金堂 D 地区	-	5.3 B1	1+4	-	(8) SC	-	-	-	-	-	-	第 9 図 30	187-38 と同范。瓦当裏面へ らナデ。海綿骨針を多く混入。 灰色。善昌廃寺に類例あり。
187-37	金堂 D 地区	(20.2)	5.6 B1	1+4 方形	15.0 4.1	6 SC	2.9	0.7	a	2.2	1.1	a	第 7 図 16	蓮弁間、外区内縁に同方向の 范キズあり。技法 B I。瓦当裏 面曬目叩き(L)後、接合部 横ナデ。青灰色。23-C 型式。
187-38	金堂 D 地区	-	- B1	-	- 5.1	(8) SC	2.6	1.0	-	1.6	0.7	a	第 9 図 29	蓮弁と間弁が接する。技法 B I。接合部横ナデ。灰白色。 海綿骨針を多く混入。88 型式。
187-39	金堂 D 地区	20.6	7.4 A1	1+4	16.0 4.3	15 SC	2.2	0.6	a	1.6	0.9	a	第 10 図 43	間弁三角形状。内縁に接する。 技法 B I。瓦当裏面不調整。 接合部縦ナデ。男瓦部凸面縦 へら削り。黒灰色。131 型式。
188-40	金堂 D 地区	19.3	4.5 A1	「父」 文字	15.6 5.6	(8) SC	1.8	0.5	a	1.3	1.1	a	第 9 図 35	蓮弁輪郭凸縁が各蓮弁とも接 する。技法 B I。接合溝浅く、 瓦当裏面へらナデ。黄味灰色。 海綿骨針・黒色スコリア状物 質を多く混入。97-B2 型式。 小谷 B 遺跡・広町 B 遺跡・新 沼窪。I b 期。
188-41	金堂 講堂二 次基壇 D 地区	18.9	3.8 B1	1+4	14.2 4.3	6 SC	2.4	0.6	a	1.8	2.2	a	第 7 図 14	蓮弁に中房内縁と接する范キ ズあり。接合部ナデ。瓦当裏 面曬目叩き後ナデ。男瓦部 凸面縦へら削り。薄青灰色。 26-D 型式。
188-42	D 地区	-	6.8 A1	1+(8)	(15.8) 4.4	(8) SC	-	-	a	-	-	-	第 9 図 33	間弁杏葉形。蓮弁に接する。 技法 B Ⅱ。瓦当裏面へらナ デ。海綿骨針を混入。薄青灰 色。瓦当裏面に「那瓦」の 文字。85-A2 型式。南比企勝呂 系。金沢・石田園分寺瓦窯。

第 74 表 昭和 31・33 年度調査出土土鏡瓦観察表(3)(図面 186~188)

図面	出土位置	直径	内区				外区					出典 図版号	備考	
			中房径 形態	蓮子数	弁区径 弁幅	弁数 形態	内縁		外縁					
							幅	文様	幅	高さ	文様			
188-43	講堂 D地区	-	-	-	- 3.1	(8) SA	2.3	-	-	-	0.7	a	第 10 図 46	技法 DL。接合部内外面(瓦当 両面)ナデ。灰色。
188-44	D地区	-	-	-	-	SA	2.3	-	-	-	0.8	a	第 6 図 5	瓦当裏面指ナデ。青灰色。 30.? 型式。
188-45	D地区	19.5	4.1 A2	(1)+4	14.4 5.1	(8) SC	2.6	1.0	a	1.6	1.2	a	第 10 図 41	瓦当裏面ナデ(指頭痕残存)。 海綿付針を多く混入。軟質。 黒色。98 型式。
188-46	D地区	(16.0)	4.9 B1	1+4	(12.4) 3.0	8 SC	1.8	0.8	a	1.0	0.8	a	第 9 図 34	瓦当裏面・同側面ヘラナデ。 海綿付針を混入。濃青灰色。 99 型式。石田国分寺瓦窯。I b~c 期。
188-47	講堂 D地区	-	(6.4) B1	1+4 変形	16.4 5.0	(6) SC	-	-	-	-	-	-	第 6 図 6	接合部ナデ。瓦当裏面側目叩 き(L11 本)。青灰色。23-B 型式。谷久保窯。II 期。

※出典 日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会編 1985『武蔵国分寺跡遺物整理報告書-昭和 31・33 年度-』より

第 75 表 昭和 31・33 年度調査出土宇瓦観察表(1)(図面 188~191)

図面	出土位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	出典 図版号	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様				
						厚さ	文様	厚さ	文様						
188-48	金堂	12.5 7.0	-	3.0	KK	1.5	b	-	b	-	b	0.2	-	第 12 図 54	脇区上外区のみ界線あり。顎 C1-c。顎・女瓦部凸面縄目叩き(L9 本)。黒灰色。231-A 型式。南比 企平城宮系。
188-49	金堂	14.5 17.4	6.3	2.4	KK	2.1	f	1.9	f	5.5	a	0.3	-	第 12 図 63	技法 D。顎 B2-d。同凸面・女瓦 部凸面縄目叩き(L9 本)。青灰色 234-C 型式。勝呂庵寺に類例あり。 Ⅱ期。
188-50	金堂	11.5 11.0	6.2	3.1	KK	1.6	a	1.5	a	5.8	a	0.1	-	第 13 図 65	瓦当面に縄目残存。顎 C2-b。同 凸面横縄目叩き。女瓦部凸面縄 目叩き(L8 本)。同側面指ナデ。 黄味灰色。234-E 型式。
188-51	金堂	9.9 10.0	4.3	2.6	KK	0.9	a	0.8	a	-	-	0.1	-	第 13 図 68	技法 D。顎 B2-c。同凸面横縄目 叩き。女瓦部凸面縄目叩き(L7 本)。灰白色～黒灰色。海綿骨針 を多く混入。241 型式。
188-52	金堂	5.4 4.0	4.3	2.7	KK	0.6	a	1.0	a	-	-	0.2	-	第 13 図 66	顎 A-a。同凸面横へら削り。女瓦 部凸面縄目叩き(L7 本)。同凹面 粘土紐接合部指ナデ。薄青灰色。 237 型式。八坂前Ⅳ類。Ⅱ期。
188-53	金堂	27.3 27.3	5.2	2.5	KK	1.4	f	1.3	f	右 5.0 左 4.5	f	0.2	-	第 13 図 75	唐草文変型。技法 D。顎 B2-d。 同凸面横縄目叩き。女瓦部縄目 叩き(L9 本)。灰色。239-A 型式。
189-54	金堂	16.6 17.0	5.3	4.0	HK	0.7	a	0.7	a	3.0	-	0.2	-	第 14 図 80	顎 C1-b。同凸面縦へら削り。薄 青灰色。281-A 型式。神明上道 跡(7号住居跡)に類例あり。
189-55	金堂	10.1 7.9	5.6	-	HK	-	-	-	-	-	-	0.2	-	第 15 図 88	顎 C1-d。同凸面縄目叩き後へら 削り。女瓦部凸面縦へら削り。 灰白色。海綿骨針を多く混入。 290 型式。広町 B 道跡。Ⅰ b 期。
189-56	金堂	12.0 9.2	5.5	-	H	-	-	-	-	-	-	-	-	第 15 図 92	瓦当面に縄目残存。技法 D。顎 B2-a。同凸面横ナデ(縄目残存)。 青灰色。321-D 型式。
189-57	金堂	20.4 19.5	4.0	-	O	-	-	-	a	4.2	-	0.2	-	第 16 図 100	瓦当部女瓦狭端部に作る。瓦当 面より范型がはみ出る。顎 B1-c。 同凸面縄目叩き。黒灰色。海綿 骨針を少し混入。370 型式。
189-58	金堂	8.5 12.0	5.1	2.7	O	1.5	a	0.9	a	4.0	-	0.1	-	第 16 図 99	顎 B2-c。同凸面縄目叩き。女瓦 部凸面縄目叩き(L8 本)。同側 面指ナデ。明黄褐色。赤色スコ リア状物質を混入。軟質。361 型式。
189-59	金堂	23.4 25.0 3.7	4.4	2.5	O	0.6	f	1.3	f	3.8	-	0.2	-	第 16 図 101	瓦当部女瓦狭端部に作る。技法 D。 顎 B2-c。同凸面縄目叩き。女瓦 部凸面縄目叩き(L9 本)。同側 面指ナデ。青灰色。368-A 型式。
189-60	金堂	23.3 25.0 3.9	4.6	3.2	O	0.6	a	0.8	a	4.2	a	0.2	-	第 16 図 103	顎 B2-c。同凸面縄目叩き。女瓦 部凸面縄目叩き(L10 本)。同側 面へら削り。青灰色。357-A 型式。
189-61	講堂	10.0 13.0	7.7	2.9	KK	3.0	b	1.8	b	-	-	0.2	-	第 12 図 55	顎 B3-a。同凸面ナデ。女瓦部凸 面格子目叩き。暗青灰色。232B 型式。
189-62	講堂	4.3 10.2	4.6	3.5	KK	0.4	a	0.7	a	-	a	0.3	-	第 14 図 78	顎 C2-a。同凸面横へら削り。女 瓦部凸面縄目叩き(L12 本)。明 灰色。243 型式。八坂前Ⅲ類。 Ⅱ期。
189-63	講堂 二次 基壇内	2.9 8.5	5.4	3.9	O	1.3	a	0.2	a	5.7	a	0.4	-	第 13 図 73	技法 D。女瓦部格子目叩き以前 に接合。顎 B2-a。同凸面へら削り。 青灰色。
189-64	講堂	7.5 7.7	2.4	-	HK	0.3	a	-	-	-	-	0.2	-	第 14 図 87	技法 D。女瓦部凸面格子目叩 き。灰色。海綿骨針を多く混入。 282-C 型式。
189-65	講堂	5.8 -	3.5	-	K	-	-	-	-	-	-	0.1	-	第 15 図 95	顎 B2-c。同凸面横縄目叩き(L10 本)。灰白色。赤色スコリア状物 質を混入。やや軟質。
189-66	講堂	6.2 5.5	4.6	-	H	-	-	-	-	-	-	0.3	-	第 15 図 93	顎 B1-c。同凸面横縄目叩き。女 瓦部凸面縄目叩き(L11 本)。黒 灰色。自然釉付着。322-F 型式。

第 75 表 昭和 31・33 年度調査出土土瓦観察表(2)(図面 188~191)

図面	出土位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区			外区				脇区		文様 深さ	全長	出典 図版号	備考
				厚さ	文様	文様	上		下		幅	文様				
							厚さ	文様	厚さ	文様						
189-67	講堂	17.8 17.9	5.5	2.5	O	1.9	a	1.1	a	6.0	a	0.2	-	第 16 図 98	瓦当面に縄目印き+ヘラ削り後施文。顎 B2-a。同凸面縄目印き後ヘラ削り。女瓦部凸面縄目印き(L10 本)。同側端面指ナデ。暗青灰色。364 型式。	
189-68	金堂講堂	9.0 -	2.8	-	3G	-	-	-	-	-	-	0.6	-	第 11 図 50	文様の施文范型+ナデ?。技法 D。顎 B1。割離部分に女瓦縄目印き残存。暗灰色。軟質。	
189-69	金堂講堂	12.4 12.0	4.4	-	3G	-	-	-	-	4.1	-	0.7	-	第 11 図 51	文様の施文范型+ナデ?。189-68 と同范?。技法 D。顎 B1-c。凸面格子目印き。黒灰色。自然釉付着。	
189-70	金堂講堂	7.5 8.0	6.9	2.0	O	2.2	f	2.7	f	-	-	0.3	-	第 12 図 60	顎 B3-a。同凸面および外区外縁ヘラ削り。女瓦部凸面縄目印き(L7 本)。青灰色。234-A 型式。新久皿類。II 期。	
189-71	金堂・講堂二次各基壇内	10.8 13.8	4.5	3.4	HK	0.6	a	0.5	a	-	-	0.5	-	第 14 図 85	顎 B1-c。黒灰色。海綿骨針を多く混入。282-B 型式。	
189-72	金堂講堂	11.0 12.0	1.9	-	H	0.8	a	-	-	-	-	0.3	-	第 15 図 91	技法 D。顎 B2?。女瓦部凸面縄目印き(L11 本)。同側端面指ナデ+ヘラ削り。黒灰色-青灰色。321-C 型式。	
190-73	金堂講堂	25.0 27.0 4.8	4.4	2.6	KK	0.7	a	1.1	a	3.4	f	0.2	-	第 14 図 79	瓦当面に縄目残存。顎 C2-b。同凸面縄目印き(縦→横)。女瓦部凸面、同側面縄目印き(L11 本)。黒灰色。248-A 型式。高岡瓦窯。	
190-74	金堂講堂	8.0 8.0	5.8	-	J	-	-	-	-	-	-	-	-	第 15 図 96	顎 C2-c。同凸面縄目印き(縦+横、L7 本)。薄灰色。351 型式。	
190-75	金堂・講堂二次各基壇内	26.5 26.7	5.9	-	M	-	-	-	-	右 4.5 左 3.9	-	-	-	第 15 図 97	顎 C2-b。同凸面縄目印き。女瓦部凸面縄目印き(L9 本)。同側端面指ナデ。薄灰色。自然釉付着。355 型式。	
190-76	金堂 D 地区	8.0 7.0	3.2	-	3G	-	-	-	-	-	-	0.3	-	第 11 図 52	文様の施文范型+ナデ。技法 D。顎 B1-c。凸面ヘラナデ。明青灰色。	
190-77	金堂講堂	16.3 11.8	4.8	3.6	HK	0.6	a	0.7	a	4.2	a	0.3	-	第 14 図 86	189-71 と同范。技法 D。顎 B1-a。同凸面横ヘラナデ。女瓦部凸面格子目印き。明灰色。282-B 型式。	
190-78	金堂 D 地区	14.0 -	-	-	KK	1.4	b	-	-	-	-	0.2	-	第 12 図 57	技法 D。顎 C?。割離面に糸切り痕残存。女瓦部凸面縄目印き(L13 本)。灰白色。232-D 型式。新久 1・八坂前 1 類。II 期。	
190-79	金堂 D 地区	27.2 4.0	6.3	2.5	KK	1.9	b	1.9	b	3.2	a	0.3	-	第 12 図 58	左脇区に横方向の范キズあり。瓦当面に縄目残存。190-78 と同范。顎 C1-a。同凸面横ヘラ削り。女瓦部凸面縄目印き(L9 本)。黄味灰色。黒色スコリア状物質を混入。232-D 型式。新久 1・八坂前 1 類。II 期。	
190-80	金堂 D 地区	12.5 8.5	5.3	3.3	KK	0.6	a	1.4	a	-	a	0.3	-	第 13 図 67	技法 D。顎 B1-a。同凸面横ヘラ削り。暗赤灰色。海綿骨針を多く混入。やや軟質。235-H 型式。山田遺跡(25号住居)に類例あり。	
190-81	金堂 D 地区	9.4 10.2	5.1	3.6	O	0.8	a	0.7	a	3.7	a	0.2	-	第 13 図 69	瓦当面に縄目残存。顎 B2-c。同凸面縄目印き。灰褐色-黒灰色。240 型式。山田遺跡	
190-82	金堂 D 地区	15.1 19.3	5.9	3.5	O	1.3	a	1.1	a	5.3	a	0.1	-	第 13 図 71	顎 B2-c。同凸面縄目印き「く」字形。女瓦部凸面縄目印き(L11 本)。灰色。238 型式。	
190-83	金堂 D 地区	15.0 15.4	5.5	4.2	HK	0.8	a	0.5	a	-	-	0.3	-	第 14 図 83	顎 B1-a。同凸面横ヘラナデ。黒灰色。海綿骨針を多く混入。282-D1 型式。南比企業。1 b 期。	

第75表 昭和31・33年度調査出土瓦観察表(3)(図面188~191)

図面	出土位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区			外区				脇区		文様 深さ	全長	出典 図版号	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様					
						厚さ	文様	厚さ	文様							
190-84	金堂 D地区	9.4 9.6 -	4.9	4.4	HK	0.2	a	0.3	a	-	a	0.3	-	第14図 82	顎B2-a。同凸面縦目叩き後横へら削り。灰白色。海綿骨針・黒色スコリア状物質を混入。282-A型式。	
190-85	金堂 D地区	16.5 20.3 -	5.1	4.4	HK	-	-	0.7	-	-	-	0.2	-	第15図 90	顎C2-a。同凸面横へら削り。女瓦部凸面縦目叩き。薄青灰色。284型式。東金子No.20遺跡・高岡庵寺に類例あり。II期。	
190-86	金堂 講堂 D地区	8.7 9.8 -	6.3	3.0	KK	1.6	a	1.7	a	-	-	0.2	-	第12図 64	文様中心部横方向の范キズあり。顎C2-d。同凸面縦目叩き(L13本)。後へら削り。灰色。233型式。新久Ⅱ期・八坂前Ⅵ期。Ⅱ期。	
190-87	金堂 講堂 D地区	12.7 15.5 -	4.9	3.9	O	0.5	a	0.5	a	-	-	-	-	第13図 70	技法D。顎B2-c。同凸面縦目叩き。黒灰色。240型式。山田遺跡(25号住居)に類例あり。	
190-88	金堂 講堂 D地区	24.2 24.5 3.4	4.9	2.8	KK	0.6	a	1.6	a	4.6	f	0.2	-	第13図 76	瓦当部女瓦袂端部に作る。顎B2-c。同凸面・女瓦部凸面縦目叩き(L11本)。女瓦部側端部ナデ。暗灰色。女瓦部凹面不明模倣文字あり。236型式。勝呂庵寺に類例あり。	
191-89	講堂 D地区	15.3 7.0 -	6.1	2.8	KK	1.5	a	1.8	a	-	-	0.3	-	第12図 59	唐草文2・3単位目主葉間に范キズあり。顎C2-c。女瓦部凸面縦目叩き(L11本)。灰色。232-E型式。谷津池窯。II期。	
191-90	講堂 D地区	17.7 -	3.8	2.2	KK	1.6	a	-	-	-	a	0.3	-	第12図 61	191-89と同范。范型左端部分欠損。技法D(叩き以前に接合)。女瓦部凸面縦目叩き(L8本)。灰色。232-E型式。	
191-91	講堂 D地区	26.3 26.4 3.6	5.2	4.0	O	0.3	a	0.9	a	4.9	a	0.2	-	第16図 102	文様左側に「父瓦作」の文字。顎B1-a。同凸面へらナデ。女瓦部凸面格子目叩き。凹凹面粘土紐接合部指ナデ。黄味灰色。海綿骨針を多く混入。365型式。小谷B遺跡・広町B遺跡。I b期。	
191-92	D地区	4.0 5.3 -	4.3	2.5	-	-	-	-	-	4.5	-	0.2	-	第12図 62	顎B1-c。同凸面・瓦当部・女瓦部凸面縦目叩き(L8本)。女瓦部側端部指ナデ。灰色。	
191-93	D地区	13.0 13.5 -	4.0	-	3G	-	-	-	-	4.3	-	0.6	-	第11図 48	文様の施文范型+ナデ。顎B1-a。女瓦部凸面格子目(米印)叩きあり。薄灰色。チャート小礫を多く混入。	
191-94	D地区	14.5 15.7 -	5.0	3.1	KK	0.3	b	1.6	b	3.5	a	0.4	-	第12図 56	顎C2-a。同凸面横へら削り。女瓦部凸面縦目叩き(L)。凹凹面粘土紐接合部指ナデ。薄青灰色。黒色スコリア状物質を多く混入。232-C型式。八坂前窯。II期。	
191-95	D地区	1.7 4.2 -	-	2.1	O	-	-	-	-	-	-	0.2	-	第13図 74	顎B2。女瓦部凸面縦目叩き(L10本)。黒灰色。	
191-96	D地区	15.7 18.0 -	4.6	-	HK	-	-	-	-	2.1	-	0.2	-	第14図 84	顎C2-c。同凸面縦目叩き(L7本)。灰色。282-E型式。	
191-97	D地区	6.6 7.9 -	5.1	2.6	O	1.4	a	1.1	a	-	-	0.2	-	第14図 77	顎C2-b。同凸面縦目叩き後へら削り。女瓦部凸面縦目叩き(L11本)。青灰色。247-A型式。	
191-98	D地区	13.5 15.8 -	4.1	-	3G	-	-	-	-	-	-	0.5	-	第11図 49	文様の施文范型。顎B1-a。凸面縦目叩き(L8本)後へらナデ。薄灰色。	
191-99	D地区	6.6 7.3 -	5.2	3.8	-	0.9	a	0.5	a	-	a	0.3	-	第14図 81	顎B2-a。灰白色。海綿骨針・黒色スコリア状物質を少し混入。295型式。	
191-100	D地区	22.0 21.3 -	4.2	-	3G	-	-	-	-	5.1	-	0.5	-	第11図 53	文様の施文范型+ナデ。顎B1-d。顎・女瓦部凸面格子目叩き。黒色。	
191-101	D地区	6.5 5.7 -	4.0	-	KK	-	-	-	-	4.3	-	0.3	-	第13図 72	顎B2-c。同凸面格子目叩き。灰色～黒灰色。海綿骨針を混入。235-I型式。	

第 75 表 昭和 31・33 年度調査出土宇瓦観察表（4）（図面 188～191）

図面	出土位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				輪区		文様 深さ	全長	出典 図版号	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様				
						厚さ	文様	厚さ	文様						
191-102	D地区	- - -	3.5	-	HK	-	-	-	-	-	-	0.2	-	第 15 図 89	類 C1-b。灰白色。285-D 型式。
191-103	D地区	- - -	3.8	-	H	0.7	a	-	-	-	-	0.2	-	第 15 図 94	女瓦部凸面鑄目叩き（L8 本）。灰白色。海綿骨針・赤色スコーラ状物質を混入。322-A 型式。

※出典 日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会編 1985『武蔵国分寺跡遺物整理報告書—昭和 31・33 年度—』より

第76表 昭和39～44年度調査出土鍔互観察表(1)(図面192～197)

図面	出土位置	直径	内区				外区					出典 図版号	備考	
			中房径 形態	蓮子数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高さ			文様
192-1	塔	-	B1	(1)	-	(4) SA	2.9	-	-	-	1.1	a	第18図 1	暗赤灰色～薄青灰色。4 型式。
192-2	塔	18.6	4.6 B1	4	13.4 2.1	6 SB	2.6	-	-	-	0.7	a	第19図 8	暗赤褐色。
192-3	塔	(20.0)	(4.8) B1	1 円形	(14.8) 3.2	3 SA	2.6	0.8	a	1.8	0.9	a	第20図 21	黄白色。やや軟質。新久 II類?
192-4	塔	-	-	-	3.5	- SC	2.6	1.0	a	1.6	1.0	a	第20図 23	灰白色。軟質。
192-5	塔	20.2	4.9 A1	1+5 竹管	15.0 3.8	8 SA	2.1	-	-	-	0.7	a	第22図 41	技法C I。男瓦部凸面 格子目印きあり。暗黄褐色。 84-A型式。南比企上野系。 I a期。
192-6	塔	(18.5)	5.2 B1	1+4	(14.5) 4.2	7 SA	2.2	-	-	-	0.9	a	第21図 35	技法D?。瓦当裏面不 調整(指頭痕あり)。薄 青灰色。63型式の後続 種か?
192-7	塔	(21.2)	5.8 A1	1+6 竹管	(16.4) 3.7	(8) SC	3.0	0.8	a	2.2	0.5	a	第23図 49	技法C I。接合部指ナ デ。灰白色。やや軟質。 82-C型式。南比企上野系。 I a期。
192-8	塔	19.4	-	1+4	14.8 2.4	8 SA	2.3	-	-	-	1.5	a	第22図 42	技法B I。灰色。108 型式。
192-9	塔	(17.5)	(7.1) B1	-	(15.7) 4.3	(8) SC	1.1	-	-	-	-	-	第24図 59	蓮弁に子葉状の痕跡あり。 技法B I。青灰色。
192-10	塔	(18.5)	5.2 A1	(1+4)	(14.1) 3.3	- SC	(2.5)	(0.7)	a	(1.8)	(1.2)	a	第25図 62	技法B I。海綿骨針を 多く混入。灰褐色。88 型式?
192-11	塔	-	-	-	-	(8) SC	2.7	0.3	a	2.4	0.4	a	第25図 63	各蓮弁に指頭痕あり。 192-16と同範。海綿骨 針を多く混入。黒灰色。 82-B2型式。南比企上野系。 I a期。
192-12	塔	-	-	-	3.3	- SA	2.1	0.6	a	1.5	1.4	a	第25図 64	灰色。101型式。
192-13	塔	-	-	-	3.4	(8) SA	1.6	-	-	-	0.8	a	第25図 66	黒灰色(内部灰褐色)。 全面自然釉付着。
192-14	塔	-	-	-	3.3	- SC	2.1	0.5	-	1.6	1.1	a	第25図 70	技法B I。薄青灰色。 83-C型式。瓦谷戸I類。 I b期。
192-15	塔	-	-	-	4.7	- SC	-	-	-	-	-	-	第26図 76	技法B。灰色。やや軟質。 93型式。南比企上野系。
192-16	塔	-	-	-	3.7	(8) SC	2.0	0.5	a	1.5	0.2	a	第26図 88	192-11と同範。技法C。 接合部ナデ。瓦当側面格 子目印きあり。灰白色。 やや軟質。82-B型式。
192-17	塔	-	-	-	-	(8) SC	1.3	-	-	-	0.9	a	第27図 102	海綿骨針を混入。薄赤褐色。 新久宮・八坂前窯製品 か。II期。
193-18	塔・ 中門・ 不明	18.7	(5.7) B1	1+4	15.0 2.8	7 SC	2.1	0.8	a	1.3	0.9	a	第21図 36	技法B I。暗黄白色。 やや軟質。63型式。
193-19	塔・ 中門・ 不明	(18.2)	(4.4) B1	1+6	(11.6) 2.2	(9) SA	3.4	2.1	b	1.3	0.9	a	第27図 91	技法B I。明赤褐色。 121型式。石田国分寺 瓦窯。胎土に白色針状物 質含む。I b～c期。
193-20	塔・ 鐘樓	(17.6)	(5.3) B1	1+4	(13.3) 3.0	(8) SC	(2.3)	(0.6)	a	(1.7)	(0.9)	a	第24図 58	技法B?。海綿骨針を 混入。薄青灰色。99型式。
193-21	塔・ 不明	19.3	(7.2) B1	-	7.0	4 SA	-	-	-	-	-	-	第18図 2	技法D I。暗赤褐色。 自然釉付着。蓮子を指ナ デで消している。5型式。 八坂前窯製品?。II期。

第76表 昭和39～44年度調査出土鏡互観察表(2)(図面192～197)

図面	出土位置	直径	内区				外区					出典 図版号	備考	
			中房径 形態	窪子数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高さ			文様
193-22	塔・不明	20.7	(5.2) B1	1+4 長方形	15.3 3.3	6 SC	2.9	1.0	a	1.9	0.9	a	第18図 3	内区に范キズあり。灰褐色。やや軟質。26-C型式。八坂前Ⅲ-1類。Ⅱ期。
193-23	塔・不明	(19.8)	(5.1) B1	1+4	14.7 3.1	6 SC	2.7	0.9	a	1.8	1.4	a	第18図 4	技法BⅠ。灰色。26-C型式。八坂前Ⅲ-1類。Ⅱ期。
193-24	塔・不明	(18.2)	(4.5) B1	1 菱形	14.2 3.7	6 SC	2.1	0.9	a	1.2	1.0	a	第18図 5	内区に布目痕僅かにあり。黄味灰色。やや軟質。27型式。新久Ⅰ類・八坂前Ⅳ類。Ⅱ期。
193-25	塔・不明	(18.2)	(5.2) B1	1+4	(15.6) 3.9	6 SC	1.2	-	-	-	0.9	-	第18図 6	技法BⅠ。暗灰褐色。35型式。
193-26	塔・不明	(20.0)	(5.3) B1	4	(15.0) 3.7	6 SA	2.5	-	-	-	0.7	a	第19図 9	技法BⅠ。薄青灰色。171型式。
193-27	塔・不明	(20.0)	(5.3) B1	1+4 方形	(14.0) 3.0	6 SA	2.8	1.1	a	1.7	1.2	a	第18図 7	瓦当裏面縄目叩き(L11本)。黒灰色(瓦当面黄味灰色)。29-F型式。
193-28	塔・金堂・不明	17.0	3.4 B1	1 方形	12.8 1.8	6 SA	2.1	-	-	-	0.9	a	第19図 10	193-29と同範。技法BⅠ。瓦当裏面中程に格子目叩きあり。同下半部不調整(指頭痕あり)。暗灰褐色。65-B1型式。
193-29	塔・金堂・不明	16.4	3.4 B1	1 方形	12.6 1.7	6 SA	2.0	-	-	-	0.9	a	第19図 11	193-28と同範。技法BⅠ。瓦当裏面格子目叩きあり。灰褐色(内部赤褐色)。65-B2型式。
193-30	塔・不明	19.0	4.6 B1	1+4	14.2 3.4	6 SA	2.4	1.0	a	1.4	1.0	a	第19図 12	193-31と同範。内区に范キズあり。技法BⅠ。黄味灰色。やや軟質。29-G2型式。
193-31	塔・不明	(19.4)	4.4 B1	-	14.2 2.8	(6) SA	2.5	1.2	a	1.3	0.9	a	第19図 13	193-30と同範。内区に范キズあり。技法BⅠ。灰白色。軟質。29-G1型式。
194-32	塔・不明	-	3.7 B1	1 菱形	13.0 2.5	6 SA	-	-	-	-	-	-	第19図 14	技法BⅠ。薄灰褐色。やや軟質。
194-33	塔・不明	(20.4)	(6.9) B1	(1+4) 菱形	(16.4) 5.0	(6) SC	(2.0)	0.4	a	1.6	1.0	a	第20図 17	技法BⅠ?。瓦当内区全面に布目あり。暗灰褐色。23-B型式。谷久保Ⅱ期。
194-34	塔・不明	(19.3)	5.9 B1	4	- 3.4	6 SB	0.7	-	-	-	0.9	a	第20図 19	灰白色。やや軟質。31型式。八坂前Ⅰ類。Ⅱ期。
194-35	塔・不明	(20.0)	(6.0) B1	(1+4)	(13.4) 2.5	(6) SA	3.3	0.8	a	2.5	0.9	a	第20図 22	瓦当裏面縄目叩き(L9本)。赤褐色(瓦当面黄味灰色)。29-F型式。
194-36	塔・不明	-	-	-	4.4	(6) SC	1.3	-	-	-	-	-	第20図 25	暗灰褐色。やや軟質。22型式。
194-37	塔・不明	-	B1	(1+4)	4.4	(6) SA	2.0	0.6	a	1.4	0.4	a	第21図 29	黄味灰色～黒灰色。29-E型式?
194-38	塔・不明	-	B1	(1+4)	3.5	(6) SC	2.9	0.5	a	2.4	1.3	a	第21図 31	技法BⅠ。灰色～暗赤褐色。28型式。新久Ⅳ類。Ⅱ期。
194-39	塔・不明	(18.9)	5.9 B1	1+4 方形	(15.6) 3.2	7 SC	1.8	0.7	a	1.1	0.6	a	第21図 37	194-41と同範。技法BⅠ。灰色。64-A型式。八坂前Ⅵ類。Ⅱ期。
194-40	塔・不明	(20.0)	(7.0) B1	1+6	(17.8) 3.2	(7) SC	1.1	-	-	-	1.0	a	第21図 39	灰色。やや軟質。61-A型式。
194-41	塔・不明	-	B1	(7) 方形	3.1	(7) SC	1.5	-	-	-	0.9	a	第21図 40	194-39と同範。技法BⅠ。灰色。瓦当面自然軸付着。64-A'型式。
194-42	塔・不明	(17.0)	5.6 B1	21	(15.4) 3.7	8 SC	0.9	-	-	-	(0.7)	-	第22図 43	技法BⅡ。黄白色～薄灰色。やや軟質。96型式。瓦谷戸Ⅷ類。Ⅰb期。
194-43	塔・不明	(20.4)	7.8 A1	1+8	(17.4) 4.4	(8) SC	1.5	-	-	-	0.9	a	第22図 44	196-61と同範。技法BⅡ。暗灰色。83-F型式。

第76表 昭和39～44年度調査出土鍔瓦観察表(3)(図面192～197)

図面	出土位置	直径	内区				外区					出典 図版号	備考	
			中房径 形態	蓮子数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高さ			文様
194-44	塔・不明	(19.2)	7.8 A1	1+8	(14.3) 3.9	(8) T	1.4	0.2	a	1.2	0.5	a	第22図 45	蓮弁に子葉状の痕跡あり。技法BⅡ。明灰色。やや軟質。部分的に二次加熱を受ける。83-B類。TNT No 513 遺跡A類・瓦谷戸室Ⅲ類。1 b期。
194-45	塔・不明	(19.0)	6.1 A1	1+8	(14.2) 2.9	8 SC	(1.4)	-	-	-	-	a	第22図 46	技法BⅡ。灰褐色。やや軟質。86型式。
194-46	塔・不明	(20.6)	8.3 A1	1+8	(17.2) 4.0	8 T	2.5	0.6	a	1.9	0.7	a	第22図 47	蓮弁に子葉状の痕跡あり。技法BⅡ。薄灰色。やや軟質。83-A型式。瓦谷戸Ⅳ類。1 a期。
195-47	塔・不明	(22.0)	7.1 A1	(1+6) 竹管	(15.8) 3.0	(8) SC	3.0	1.0	a	2.0	0.2	a	第23図 48	195-60, 197-94と同范。技法CⅠ。瓦当裏面格子目印きあり。灰白色。やや軟質。二次加熱を受けもろい。82-A1型式。南比企上野系。1 a期。
195-48	塔・不明	20.2	5.7 A1	1+6 竹管	(16.0) 3.6	(8) SC	2.4	0.5	a	1.9	0.3	a	第23図 50	技法CⅠ。接合部筋ナデ。黄白色。軟質。82-D型式。南比企上野系。1 a期。
195-49	塔・不明	(20.1)	7.1 A1	1+4	(16.6) 3.9	(8) SC	1.8	-	-	-	0.6	a	第23図 51	技法BⅠ。薄青灰色。87型式。瓦谷戸Ⅴ類・TNT No 513 遺跡C②類。1 a期。
195-50	塔・不明	-	A1	1+4	- 3.1	(8) SC	2.7	0.6	-	2.1	0.7	a	第23図 52	技法CⅠ。黄褐色～黒灰色。やや軟質。84-B型式。南比企上野系。1 a期。
195-51	塔・不明	(19.1)	5.2 B1	(1+4)	(15.5) 2.9	8 SC	(2.3)	0.7	a	1.6	0.9	-	第23図 53	海綿骨針を混入。薄黄灰色。88型式。
195-52	塔・不明	(17.4)	3.6 B1	1+4	12.2 2.4	8 SC	2.7	1.3	b	1.4	0.8	a	第24図 54	技法BⅠ。瓦当裏面周縁不調整(指頭痕あり)。海綿骨針を混入。青灰色。100-B型式。南比企平城宮系(新沼窯・天沼窯)。1 c期。
195-53	塔・不明	(16.0)	4.5 B1	1+4	11.4 1.9	(8) SC	(2.2)	(1.1)	b	(1.1)	1.2	a	第24図 55	技法BⅠ。海綿骨針を微量混入。薄青灰色。100-A型式。南比企平城宮系(広町B遺跡・天沼遺跡)。1 c期。
195-54	塔・不明	(17.8)	4.6 A1	-	15.3 3.8	8 SC	1.6	0.2	a	1.4	1.0	a	第24図 56	195-59と同范。技法BⅡ。灰色。105-A1型式。南比企在地系。
195-55	塔・不明	(17.0)	6.2 A1	(1+8)	(14.4) 3.3	(8) T	1.4	0.2	a	1.2	0.4	a	第24図 60	蓮弁に子葉状の痕跡あり。技法BⅠ。青灰色。83-D型式。
195-56	塔・不明	(21.0)	6.9 A1	1+8 三角丸4	(16.6) 3.2	(8) SC	2.2	0.7	-	1.5	1.2	a	第24図 61	海綿骨針を混入。薄青灰色。85-A3型式。南比企勝呂系。
195-57	塔・不明	(19.2)	(6.0) B1	1+2	(15.3) 2.4	(8) SA	1.4	-	-	-	0.7	a	第25図 65	文様全面布目痕あり(布目30×32)。瓦当裏面網目印き(L13本)。海綿骨針を混入。黄味灰色。104型式?
195-58	塔・不明	-	B1	-	- 2.8	(8) SC	-	-	-	-	-	-	第25図 71	技法BⅠ。暗灰褐色。やや軟質。90型式。
195-59	塔・不明	-	-	-	- 3.6	- SC	2.5	0.6	-	(1.9)	0.8	-	第26図 78	195-54と同范。薄褐色。軟質。
195-60	塔・不明	-	-	-	- 3.8	- SC	2.4	0.5	a	(1.9)	-	a	第26図 79	195-47, 197-94と同范。技法CⅠ。外区外縁格子目印きあり。海綿骨針を混入。黒灰色。軟質。82型式。南比企上野系。1 a期。

第76表 昭和39～44年度調査出土鏡互観察表(4)(図面192～197)

図面	出土位置	直径	内区				外区					出典 図版号	備考	
			中房径 形態	蓮子数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高さ			文様
196-61	塔・不明	-	-	-	4.4	SC	1.6	-	-	-	0.9	-	第26図 80	194-43と同范。青灰色。 83-F型式。
196-62	塔・不明	-	6.2 B1	1+6	2.9	9? SA	-	-	-	-	-	-	第27図 92	技法B1?。薄青灰色。 瓦谷戸Ⅷ類。
196-63	塔・不明	(19.6)	(7.5) A1	(1+4)	(16.2) 2.5	(15) SA	1.9	0.8	a	1.1	(0.8)	-	第27図 94	技法B1?。薄青灰色。 131型式。
196-64	塔・不明	-	-	-	-	-	2.1	1.3	a	0.8	0.8	a	第27図 95	196-68と同范。技法C。 瓦当側面格子明き目あり。 外区内縁竹管文あり。 海綿付針を多く混入。 薄黒灰色。やや軟質。 132-A型式。南比企上野系。 I a期。
196-65	不明	-	5.0 B1	1+4	(13.6) 2.5	(6) SA	-	-	-	-	-	-	第19図 15	技法B1?。薄青灰色。
196-66	不明	-	-	-	-	SA	2.2	-	-	-	0.7	a	第19図 16	灰色。
196-67	不明	(19.4)	(6.5) B1	(1+4) 方形	(15.6) 2.4	(6) SA	1.9	-	-	-	1.8	a	第20図 18	196-74と同范。暗灰色。 やや軟質。
196-68	塔・不明	-	A1	1 竹管	0.9	SA	-	-	-	-	-	-	第27図 97	196-64と同范。技法C I。黒灰色(内部黄白色)。 やや軟質。132-?型式。 南比企上野系。I a期。
196-69	不明	-	(4.0) B1	(1+4)	(14.0) 2.4	(6) SC	-	-	-	-	-	-	第20図 20	技法B1。灰褐色～黒 灰色。自然釉付着。
196-70	不明	(19.8)	(5.8) B1	1+4 方形	(14.4) 2.9	SA	2.9	0.9	a	2.0	1.1	a	第20図 24	技法B1。瓦当裏面罫 目明き(Ⅷ1本)。後周 縁へラ削り。
196-71	不明	-	-	-	2.9	(6) SC	1.9	0.3	a	1.6	0.8	a	第20図 26	技法B1。薄青灰色。 裏面周縁浅い溝状にへ ラ削り。
196-72	不明	-	-	-	3.9	SA	-	-	-	-	-	-	第20図 27	技法B1。薄黄白色。 軟質。
196-73	不明	-	B1	(1+4) 方形	3.2	SC	-	-	-	-	-	-	第20図 28	灰色。
196-74	不明	-	B1	(1+4)	2.7	(6) SA	1.6	-	-	-	1.0	a	第21図 30	196-67と同范。赤褐色。 軟質。
196-75	不明	-	B1	-	4.8	SC	2.2	0.8	a	1.4	1.3	a	第21図 32	196-76と同范か。技法 B1?。薄灰褐色。
196-76	不明	-	B1	-	3.1	SC	(2.0)	(1.0)	a	(1.0)	(1.8)	a	第21図 33	196-75と同范か。技法 B1。灰褐色。
196-77	不明	-	B1	(1+4)	3.1	(6) SC	(1.8)	-	-	-	1.0	a	第21図 34	技法B1?。暗青灰色(瓦 当面黄味灰色)。
196-78	不明	(19.2)	B1	2	(16.9) 3.6	-	1.2	-	-	-	1.4	a	第21図 38	技法B1。黄灰色。軟質。 八坂前Ⅷ類。Ⅱ期。
196-79	不明	(19.9)	5.5 A1	-	(17.4) 3.7	(8) SC	(2.8)	-	-	-	(1.4)	-	第24図 57	薄黄褐色。軟質。
196-80	不明	-	-	-	2.3	SA	3.1	-	-	-	0.7	a	第25図 67	技法B1。青灰色(内部 薄赤褐色)。
196-81	不明	-	-	-	2.3	SA	1.4	-	-	-	1.0	a	第25図 68	海綿付針を多く混入。灰 色。
196-82	不明	-	-	-	3.7	SC	-	-	-	-	-	-	第25図 69	技法B1。海綿付針を 混入。灰色～黒灰色。
196-83	不明	-	-	-	3.7	SC	1.6	0.2	-	1.4	0.7	a	第25図 72	青灰色。
196-84	不明	-	-	-	1.9	SC	-	-	-	-	-	-	第25図 73	暗灰褐色。
196-85	不明	-	-	-	3.3	SC	2.1	-	-	-	1.2	a	第26図 74	薄黄白色。やや軟質。
196-86	不明	-	-	-	4.3	T	-	-	-	-	-	-	第26図 75	蓮弁に子葉状の痕跡あり。 技法B1。薄灰色。

第76表 昭和39～44年度調査出土鍔互観察表(5)(図面192～197)

図面	出土位置	直径	内区					外区					出典 図版号	備考
			中房径 形態	蓮子数	弁区径 弁幅	弁数 形態	幅	内縁		外縁				
								幅	文様	幅	高さ 文様			
197-87	不明	-	-	-	3.7	SC	(2.0)	0.7	-	(1.3)	(0.4)	-	第26図 77	灰黄色(内部赤褐色)。軟質。
197-88	不明	-	-	-	4.5	SC	2.0	-	-	-	0.8	-	第26図 81	海綿骨針を混入。薄灰褐色(内部赤褐色)。やや軟質。
197-89	踵楼・不明	-	-	-	-	C	2.2	-	-	-	(0.7)	-	第26図 82	技法B I。海綿骨針を混入。灰褐色。
197-90	不明	-	(5.8) B1	-	2.9	SC	-	-	-	-	-	-	第26図 86	技法B I。海綿骨針を混入。黄味灰色(五当裏面薄青灰色)。軟質。
197-91	不明	-	A1	(1+6)	-	(8) SC	-	-	-	-	-	-	第26図 85	技法B I?。黄味灰色。やや軟質。
197-92	不明	-	-	-	3.0	SD	2.8	1.2	c	1.6	0.2	a	第26図 83	技法C I。接合部ナデ。褐色。軟質。
197-93	不明	-	-	-	2.5	SD	2.8	1.5	c	1.3	(0.2)	-	第26図 84	技法C I。五当側面格子目印きあり。黒色(内部明褐色)。軟質。
197-94	不明	-	-	-	3.8	SC	1.8	0.6	-	1.2	0.4	a	第26図 87	195-47、195-60と同范。技法C。外区外縁刺突文あり。接合部ナデ。海綿骨針を混入。黒灰色(内部薄赤褐色)。軟質。
197-95	不明	-	-	-	-	SA	2.4	-	-	-	1.3	a	第27図 98	技法B I。薄青灰色。
197-96	不明	-	A1	-	3.2	SC	-	-	-	-	-	-	第26図 89	技法D?。海綿骨針を混入。黒灰色(内部黄褐色)。やや軟質。
197-97	不明	-	-	-	2.9	SC	2.1	0.7	-	1.4	(0.6)	-	第26図 90	灰白色。やや軟質。
197-98	不明	(20.0)	(4.2) B1	(1+4)	(16.6) 2.2	SA	(1.4)	-	-	-	(1.2)	a	第27図 93	技法B?。海綿骨針を混入。暗黄灰色。
197-99	不明	-	-	-	1.0	SA	3.4	1.2	b	2.2	0.2	a	第27図 96	細弁。技法C I。黒色(内部明黄褐色)。軟質。
197-100	不明	-	-	-	3.0	SA	1.9	-	-	-	-	-	第27図 99	海綿骨針を微量混入。青灰色。
197-101	不明	-	-	-	2.1	SA	-	-	-	-	-	-	第27図 100	技法D?。青灰色。
197-102	不明	-	-	-	4.2	SA	1.4	0.5	a	0.9	0.4	a	第27図 101	青灰色。

※出典 滝口宏編 1987『武蔵国分寺跡調査報告—昭和39年～44年度—』国分寺市教育委員会より

第 77 表 昭和 39～44 年度調査出土宇瓦観察表(1)(図面 197～202)

図面	出土位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区				外区				脇区		文様 深さ	全長	出典 図版号	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様						
						厚さ	文様	厚さ	文様								
197-103	塔	19.2 17.3	5.4	-	5G	-	-	-	-	0.8	-	0.6	-	第 29 図 111	技法 D ?。顎 B1-a。黒色～暗褐色(内部褐色)。二次加熱を受けざらつく。		
197-104	塔	7.7 10.4	6.0	3.0	KK	1.6	a	(1.4)	a	3.0	a	0.4	-	第 31 図 127	技法 D。顎 B2。顎部罫目叩き(L9 本)。海綿骨針を混入。青灰色。235-I 型式。		
197-105	塔	10.0	2.9	-	-	1.2	-	-	-	-	-	0.2	-	第 31 図 131	技法 D。顎 B ?。女瓦部凸面罫目叩き(L11 本)。青灰色。		
197-106	塔	12.7 10.6	(6.9)	4.2	KK	(1.3)	b	1.4	b	-	b	0.3	-	第 32 図 139	技法 D ?。顎 C1-a。灰白色～薄黄褐色。やや軟質。235-E 型式。洒井分類 A4 類。		
197-107	塔	15.3 17.8	7.4	3.1	KK	2.0	a	2.3	a	2.3	a	0.3	-	第 33 図 144	顎 C2-a。凸面罫目叩き(L)。瓦当面に罫目残存。灰色。252 型式。八坂前 II 類。II 期。		
197-108	塔	-	(6.3)	4.2	HK	(0.6)	-	1.5	-	-	-	0.6	-	第 33 図 149	暗灰色～黒灰色。287-A 型式。		
197-109	塔	11.4 8.0	6.0	4.6	HK	0.7	a	0.7	a	-	a	0.4	-	第 34 図 152	技法 D。顎 B1-a。海綿骨針を混入。薄青灰色～黒灰色(側面自然釉付着)。282-D 型式。南比企業。		
197-110	塔	-	(5.1)	-	HK	-	-	-	-	-	-	0.2	-	第 34 図 155	顎 B1-a。海綿骨針を少し混入。黄味灰色(内部薄黄褐色)。295 型式。		
197-111	塔	11.7 7.5	(6.0)	4.7	HK	0.5	-	(0.8)	a	-	a	0.2	-	第 34 図 158	技法 D。顎 C2-c。海綿骨針を混入。黒灰色～灰色。290 型式。広町 B 遺跡。I b 期。		
197-112	塔	18.6 20.7	4.0	2.2	O	0.7	a	1.1	a	-	a	0.2	-	第 36 図 174	顎 B2-c。顎部罫目叩き(L16 本)。海綿骨針を多く混入。薄青灰色。369-C 型式。		
197-113	塔	12.3 19.8	5.5	2.8	O	0.9	a	1.8	a	-	a	0.2	-	第 36 図 176	技法 D。顎 B1-c。顎部罫目叩き(L10 本)。暗灰色。362 型式。		
198-114	塔・ 中門・ 不明	28.8 30.9 (3.5)	7.4	2.8	KK	(1.8)	b	2.8	b	2.8	a	0.5	-	第 30 図 120	198-118 と同範。顎 C1-a。凸面罫目叩き(L11 本)。黄白色。やや軟質。232-D 型式。新久 I 類・八坂前 I 類。		
198-115	塔・ 中門・ 不明	13.0 11.7	6.0	2.8	KK	0.7	-	(2.5)	b	-	a	0.1	-	第 29 図 116	198-116 と同範。顎 B2-c。顎・女瓦部凸面罫目叩き(L9 本)。黄味灰色。232-B 型式。		
198-116	塔・ 中門・ 不明	7.6 6.6	6.3	2.7	KK	1.8	b	1.8	b	-	-	0.2	-	第 29 図 118	198-115 と同範。技法 D ?。顎 B2-c。顎・女瓦部凸面罫目叩き(L)。薄灰褐色。232-B 型式。		
198-117	塔・ 中門	-	(4.8)	2.9	O	(0.7)	-	1.2	-	3.2	-	0.2	-	第 35 図 170	顎 C2-b。凸面罫目叩き(L10 本)。暗赤灰色。358 型式。		
198-118	塔・ 中門・ 不明	29.9 29.2 5.6	4.7	2.8	KK	0.9	b	1.0	b	-	a	0.2	-	第 30 図 121	198-114 と同範。顎 C2-a。凸面格子目叩きあり。灰白色。やや軟質。232-D 型式。		
198-119	塔・ 中門・ 不明	30.3 35.6 4.1	(5.1)	3.7	KK	1.1	a	0.3	a	6.1	a	0.3	-	第 31 図 129	技法 D ?。顎 B2-c。顎・女瓦部凸面罫目叩き(L12 本)。海綿骨針を微量混入。青灰色(文様面暗黄褐色)。240 型式。		
198-120	鐘樓	8.5	4.3	3.5	HK	-	-	0.8	a	-	a	0.1	-	第 34 図 153	技法 D。顎 C2-a。凸面格子目叩き。青灰色。283 型式。		
198-121	鐘樓	13.7 14.2	(5.1)	3.8	HK	0.5	a	(0.8)	a	-	-	0.2	-	第 34 図 157	顎 B1-a。暗灰色。285-D 型式。新久 II 類・八坂前 IV 類。		
198-122	中門・ 不明	25.7 27.2 3.9	6.0	2.6	KK	2.0	f	1.4	f	3.8	a	0.1	-	第 33 図 141	顎 C2-b。凸面罫目叩き(L10 本)。青灰色。246 型式。		
198-123	塔・ 不明	27.2 28.3 3.7	4.3	-	3G	-	-	-	-	-	-	0.4	-	第 28 図 103	顎 B1-a。女瓦部凸面格子目叩き。灰褐色。		

第77表 昭和39～44年度調査出土宇瓦観察表(2)(図面197～202)

図面	出土位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区				外区				脇区		文様 深さ	全長	出典 図版号	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様						
						厚さ	文様	厚さ	文様								
198-124	塔・不明	16.1 15.5	2.8	-	3G	-	-	-	-	-	-	-	0.5	-	第28図 105	顎 B1-a, 灰色。	
198-125	塔・不明	27.5 26.3	4.0	-	3G	-	-	-	-	-	-	-	0.6	-	第28図 104	技法 D, 顎 B1-a, 女瓦部凸面に格子目印きあり。図面 191-93 と接合。薄灰色。やや軟質。二次火熱を受けざらつく。	
198-126	塔・不明	13.8 14.1	4.6	-	3G	-	-	-	-	-	-	-	0.5	-	第28図 106	技法 D, 顎 B1-a, 薄灰褐色。	
199-127	塔・不明	25.8 26.5 4.1	(5.0)	-	4G	-	-	-	-	0.5	-	-	0.6	-	第28図 108	技法 D?。顎 B1-c, 顎・女瓦部凸面格子目印き。青灰色。	
199-128	塔・不明	15.7 8.3	4.8	-	4G	-	-	-	-	-	-	-	0.6	-	第28図 109	技法 D?。顎 B1, 女瓦部凸面罫目印き(L13本)。灰褐色。やや軟質。	
199-129	塔・不明	8.9 12.5	4.0	-	3G	-	-	-	-	-	-	-	0.5	-	第28図 107	技法 D?。顎 B1-a, 女瓦部凸面格子目印きあり。黒灰色(内部薄褐色)。	
199-130	塔・不明	-	5.8	3.4	KK	-	b	1.5	b	-	-	-	0.1	-	第29図 113	199-132, 199-133 と同範。技法 D?。顎 C1-a, 黄褐色。やや軟質。231-B 型式。	
199-131	塔・不明	10.3 8.0	4.9	-	4G	-	-	-	-	-	-	-	0.8	-	第29図 110	顎 B1, 凸面に蓮華文(スタンプ)論文。暗青灰色。二次火熱を受けざらつく。(宇野 1987 文獻の第 11 図 10)	
199-132	塔・不明	13.3 7.8	6.9	3.3	KK	1.7	b	1.9	b	-	b	0.2	-	第29図 115	199-130, 199-133 と同範。顎 C1-a, 灰白色。軟質。231-B 型式。		
199-133	塔・不明	7.7 8.7	6.2	3.0	KK	1.6	b	1.6	b	2.2	b	0.2	-	第29図 114	199-130, 199-132 と同範。技法 D?。顎 C2-c, 灰色。231-B 型式。		
199-134	塔・不明	24.3 27.8 3.4	6.0	2.6	KK	1.7	b	1.7	b	2.0	a	0.1	-	第29図 117	顎 C2-c, 凸面格子目印き。海綿骨針を混入。黒灰色。232-A 型式。南比企平城宮系。天沼遺跡。I c 期。		
199-135	塔・不明	29.0 32.0 3.8	6.1	2.9	KK	1.2	b	2.0	b	4.7	a	0.4	-	第30図 119	顎 C2-a, 凸面罫目印き(L9本)。黒灰色。232-C 型式。八坂前窯。II 期。		
199-136	塔・不明	(27.5) 28.1 (4.6)	(6.3)	3.0	KK	1.2	a	(2.1)	a	2.0	a	0.4	-	第30図 122	顎 B2-d, 顎・女瓦部凸面罫目印き(L11本)。黒灰色～黒褐色。232-E 型式。谷津池窯。II 期。		
199-137	塔・不明	23.2 27.2 3.8	(6.7)	2.0	KK	2.3	f	(2.4)	f	3.6	a	0.2	-	第31図 128	技法 D?。顎 B2-c, 顎・女瓦部凸面罫目印き(L11本)。灰褐色。234-A 型式。新久皿類。II 期。		
200-138	塔・不明	29.1 31.8 5.4	7.0	2.9	KK	2.7	a	1.4	a	2.9	a	0.3	-	第31図 125	顎 C2-a, 凸面罫目印き(L7本)。青灰色～黒灰色。233 型式。新久皿類・八坂前VI類。II 期。		
200-139	塔・不明	7.3 24.5	(7.1)	(3.3)	KK	(1.7)	a	2.1	a	1.5	-	0.2	-	第31図 130	技法 D, 顎 B2-c, 顎・女瓦部凸面罫目印き(L12本)。灰色～黒灰色(瓦当部一部自然袖付着)。238 型式。		
200-140	塔・不明	14.3	4.3	-	KK	1.6	a	-	-	(2.3)	-	0.3	-	第32図 135	顎 C2, 凸面罫目印き(L8本)。凹面薄灰褐色。凸面灰白色(両面内部薄赤褐色)。やや軟質。242 型式。		
200-141	塔・不明	14.4 18.3	5.6	2.8	KK	1.2	a	1.6	a	2.9	a	0.3	-	第32図 134	技法 D?。顎 B2-c, 顎・女瓦部凸面罫目印き(L15本)。青灰色。236 型式。		
200-142	塔・不明	10.2 14.7	(6.8)	3.4	KK	1.7	b	1.7	b	(1.4)	b	0.3	-	第32図 136	技法 D?。顎 C1-a, 凸面罫目印き後ヨコナデ(罫目残存)。薄青灰色。235-A 型式。酒井分類 A1 類。		
200-143	塔・不明	28.0 28.7 3.4	6.8	4.1	KK	1.4	b	1.3	b	1.6	b	0.3	-	第32図 137	技法 D, 顎 C1-a, 暗青灰色。やや軟質?(もろい)。235-D 型式。酒井分類 A3 類。		

第77表 昭和39～44年度調査出土宇瓦観察表(3)(図面197～202)

図面	出土位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	出典 図版号	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様				
						厚さ	文様	厚さ	文様						
200-144	塔・不明	11.6 21.7 -	(8.4)	4.2	KK	(1.8)	b	2.4	b	-	b	0.4	-	第32図 138	技法D?。顎B1。青灰色。 235-C型式。酒井分類A2類。
200-145	塔・不明	11.3 11.3 -	(6.2)	3.3	KK	1.3	a	(1.6)	a	-	-	0.4	-	第33図 143	技法D?。顎C2-b。薄青灰色。 249型式。八坂前皿類。II期。
200-146	塔・不明	25.8 21.2 4.3	5.3	3.0	KK	0.9	a	1.4	a	3.2	f	0.2	-	第33図 142	技法D。顎B2-c。顎・女瓦部凸 面罫目叩き(L12本)。黒灰色。 文様面暗黄色(全体に自然軸付 着)。248-A型式。高岡瓦空。
200-147	塔・不明	15.5 13.7 -	4.5	3.5	HK	0.3	a	0.7	a	-	a	0.1	-	第33図 145	顎A-a。凸面格子目叩き。黄 味灰色。281-D型式。TNT No 944 遺跡。
200-148	塔・不明	23.0 23.2 -	(5.5)	4.4	HK	(0.5)	a	0.6	a	-	-	0.2	-	第33図 148	顎C2-a。凸面罫目叩き後ナデ (罫目残存)。黒灰色～黄灰色(自 然軸付着)。284型式。高岡院寺。 II期。
200-149	塔・不明	25.6 28.7 6.0	6.0	6.0	HK	0.9	a	1.2	a	1.5	a	0.3	-	第33図 147	文様右側に「多」の文字あり。 顎C2-a。凸面罫目叩き(L10本)。 薄黄褐色。281-B型式。八坂前 V類・下落合瓦空。II期。
201-150	塔・不明	25.1 24.0 3.6	4.5	-	HK	-	-	-	a	1.8	a	0.2	-	第34図 154	顎C2-a。凸面罫目叩き(L13 本)。海綿骨針を混入。暗灰色。 282-E型式。南比企窯。
201-151	塔・不明	11.5 11.3 -	5.2	3.9	HK	-	-	1.3	-	-	-	0.2	-	第34図 159	技法D。顎C1-a。凸面平行叩 き。海綿骨針を混入。黄味灰色。 289型式。
201-152	塔・不明	3.4 5.2 -	(5.0)	-	O	-	-	-	-	-	-	0.2	-	第34図 162	顎C2-d。凸面罫目叩き(L8本)。 黒灰色(内部暗灰色)。341-B 型式。
201-153	塔・不明	10.7 11.5 -	4.7	2.6	O	0.8	-	1.3	o	1.3	a	0.3	-	第34図 163	顎B2-a。顎・女瓦部凸面罫目 叩き(L10本)。海綿骨針を少量 混入。黄味灰色。341-B型式。
201-154	塔・不明	5.2 8.1 -	(6.4)	4.1	H	(1.2)	a	1.1	a	1.4	a	0.2	-	第35図 166	顎C2。凸面罫目叩き(L9本)。 薄灰褐色。軟質。
201-155	塔・不明	16.0 26.7 -	5.8	3.9	H	0.6	a	1.3	a	-	a	0.2	-	第35図 165	顎B2-c。顎・女瓦部凸面罫目叩 き(L10本)。黄味灰色。321-C 型式。
201-156	塔・不明	5.8 8.8 -	4.7	-	J	-	-	-	-	-	-	-	-	第35図 169	顎B2-c。顎・女瓦部凸面罫目 叩き(L10本)。海綿骨針を混入。 薄赤灰色～黄味灰色(内部灰白 色)。二次火焼をうける? 351 型式。
201-157	塔・不明	29.9 32.7 3.7	6.5	3.7	H	1.0	a	1.8	a	1.7	a	0.2	-	第35図 167	顎B1-a。顎・女瓦部凸面罫目 叩き(L10本)。黄味灰色。322 新型式。
201-158	塔・不明	22.3 25.3 -	5.1	3.1	H	0.7	a	1.3	a	1.5	a	0.3	-	第35図 168	顎C2-c。凸面罫目叩き(L11本)。 暗灰色。322新型式。
201-159	塔・不明	24.5 29.0 6.3	3.8	2.4	H	0.4	a	1.0	a	1.5	a	0.1	-	第34図 164	顎B2-d。顎・女瓦部凸面罫目 叩き(L13本)。青灰色。322-A 型式。
201-160	塔・不明	9.5 13.8 -	(5.1)	2.2	O	(0.6)	-	2.3	-	-	-	0.2	-	第36図 177	瓦当面罫目叩きあり。顎B1-c。 顎部罫目叩き(L10本)。海綿骨 針を混入。暗赤灰色。370型式。
201-161	塔・不明	21.4 13.3 -	5.0	4.0	-	0.3	a	0.7	a	-	-	0.3	-	第36図 180	文様左側に「父瓦作」の文字あ り。技法D。顎B2-a。女瓦部凸 面格子目叩き。暗灰色～黒灰色 (自然軸付着)。365型式。小 谷B遺跡・広町B遺跡。I b期。
201-162	塔・不明	29.6 31.0 4.5	4.1	-	M	-	-	-	-	-	-	-	-	第35図 171	顎C2-d。凸面罫目叩き(L11本)。 灰白色。やや軟質。355型式。
201-163	塔・不明	26.9 28.8 3.8	5.7	2.7	O	1.6	a	1.4	a	4.0	a	0.2	-	第36図 179	顎B1-d。顎・女瓦部凸面罫目 叩き(L9本)。薄灰褐色～黒灰 色(自然軸付着)。356型式。

第 77 表 昭和 39～44 年度調査出土宇瓦観察表(4)(図面 197～202)

図面	出土位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	出典 図版号	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様				
						厚さ	文様	厚さ	文様						
202-164	不明	20.7 17.5	(5.3)	3.0	KK	1.5	b	(0.8)	b	2.4	b	0.2	-	第 29 図 112	顎 C1-d。凸面縄目叩き(L)。 図面 188-48 と接合。黒灰色。 二次火熱を受けざらつく。
202-165	不明	9.5 17.1	6.5	2.5	KK	2.2	b	1.8	b	-	-	0.2	-	第 30 図 123	顎 B2-c。顎・女瓦部凸面縄目 叩き(L11本)。青灰色(全体に 自然釉付着)。
202-166	不明	7.0 9.5	6.5	2.7	KK	2.1	a	1.7	a	-	-	0.2	-	第 30 図 124	顎 B2-b。凸面縄目叩き(L8本)。 薄灰褐色。やや軟質。
202-167	不明	- -	(6.0)	3.7	KK	0.9	a	(1.4)	a	-	-	0.3	-	第 31 図 126	技法 D。顎 C1-d。凸面縄目叩 き(L9本)。灰色。
202-168	不明	3.1 2.5	4.7	3.3	KK	0.7	a	0.7	a	-	-	0.2	-	第 31 図 133	顎 B2-c。顎・女瓦部凸面縄目 叩き(L11本)。暗灰褐色。
202-169	不明	15.1 -	(6.8)	(3.5)	KK	1.0	a	(2.3)	-	2.5	a	0.1	-	第 31 図 132	技法 D?。顎 C2-d。凸面縄目 叩き(L8本)。薄灰褐色(内部 明赤褐色)。軟質。
202-170	不明	30.5 31.4 3.3	5.0	3.8	KK	0.7	d	0.5	d	3.0	d	0.1	-	第 32 図 140	顎 B2-d。顎・女瓦部凸面縄目 叩き(L10本)。薄青灰色。
202-171	不明	3.8 3.8	5.4	3.4	HK	1.1	a	1.0	a	-	a	0.2	-	第 33 図 146	文様右側に「多」の文字あり。 顎 C2-a。凸面格子目叩き。薄 青灰色。
202-172	不明	6.4 8.2	4.3	4.1	HK	0.2	-	-	-	-	-	0.2	-	第 33 図 150	顎 C2-a。凸面縄目叩き(L)。海 綿付針を多く混入。暗灰褐色～ 明褐色(内部灰色)。やや軟質。
202-173	不明	11.5 12.0	4.7	3.4	HK	0.5	a	0.8	a	-	a	0.3	-	第 33 図 151	技法 D。顎 B1。青灰色～黒灰色。
202-174	不明	10.8 10.3	(5.6)	4.3	HK	0.5	a	(0.8)	a	-	-	0.2	-	第 34 図 156	顎 B1-a。薄青灰色。凹面一部 黒灰色(自然釉付着)。
202-175	不明	- -	5.8	-	-	-	-	0.9	-	-	-	0.1	-	第 34 図 160	顎 C1-a。凸面格子目叩き。明 青灰色(内部明褐色)。やや軟 質(二次火熱を受けているよう である)。
202-176	不明	5.6 5.1	7.0	2.8	HK ?	1.8	-	2.4	-	2.3	a	0.4	-	第 34 図 161	顎 C2-a。凸面縄目叩き(L9本)。 青灰色。
202-177	不明	11.4 12.0	4.8	3.4	O	0.7	-	0.7	-	0.5	-	0.3	-	第 36 図 172	顎 C1-a。凸面格子目叩き。灰 褐色～暗赤灰色。
202-178	不明	5.3 -	(6.5)	(3.2)	O	1.9	f	-	-	-	-	0.4	-	第 36 図 173	顎 C2。凸面縄目叩き(L9本)。 暗灰色。
202-179	不明	9.4 10.7	4.1	2.3	O	0.9	a	0.9	a	4.2	a	0.1	-	第 36 図 175	凸面縄目叩き(L11本)。青灰色。
202-180	不明	23.8 24.5 3.7	4.1	2.8	O	0.4	a	0.9	a	1.7	a	-	-	第 36 図 178	顎 C2-b。顎・女瓦部凸面縄目 叩き(L8本)。黄褐色。やや軟質。

※出典 滝口宏編 1987『武蔵国分寺跡調査報告—昭和 39 年～44 年度—』国分寺市教育委員会より

第78表 第19・117・414次調査(東僧坊跡)、第226・360次調査
(南辺区面溝※中門西)出土鍔瓦観察表(1)(図面203・204)

図面	出土位置	直径	内区				外区					出典 図版号	備考	
			中房径 形態	蓮子数	弁区径 弁幅	弁数 形態	内縁			外縁				
							幅	幅	文様	幅	高さ			文様
203-1	SD27	(7.7)	7.2 AI	—	(4.7) 3.3	(1) SC	1.8	—	—	—	—	a	【A】 図面 30-1	技法 B-II。黄灰白色～暗褐色。 やや軟質。砂粒少量混入。瓦当側 面へラナデ。瓦当裏面ナデ。
203-2	遺構外	(6.4)	—	—	(3.7) 2.8	(1) SC	2.1	0.7	a	1.4	(0.7)	—	【A】 図面 30-2	灰白色～黄灰白色。軟質。海綿骨 針微量混入。瓦当側面・瓦当裏面 へラナデ。
203-3	SK 1546	(11.4)	(4.8) B1	1+(2)	(9.1) 4.6	(2) SC	2.0	0.7	a	1.3	1.1	a	【A】 図面 33-4	灰色～暗赤褐色。硬質。砂粒少量 混入。瓦当側面へラ削り・瓦当裏 面指頭痕あり。
203-4	遺構外	(6.7)	(2.8) B2	—	(3.3) 1.7	(2) SB	—	—	—	—	—	—	【A】 図面 30-3	黄褐色。軟質。粗砂粒少量混入。 瓦当裏面ナデ。
203-5	SD194 A期	(5.2)	—	—	(2.7) (1)	(1) SC	—	0.7	a	—	—	—	【B】 図面 27-2	灰褐色。やや硬質。砂粒混入。
203-6	SD195 C-2期	(13.0)	(3.8) B1	1+((5))	(7.8) 3.6	((8)) T	1.8	—	—	—	1.1	a	【B】 図面 68-12	製作技法 B I。青灰色。粗砂粒・ 小石を含む。文様裏面横ナデ。男 瓦部凹面粘土拵接合痕あり。61-B 型式。
203-7	SD195 C-2期	(19.4)	6.1 B1	1+4	(17.9) 3.4	8 SA	1.0	—	—	—	0.5	a	【B】 図面 68-13	製作技法 B I。青灰色。海綿骨針 を含む。文様全面に糸切痕あり。 文様裏面下端縁削り整形。
203-8	SD195 C-2期	(6.4)	—	—	—	(2) T	2.2	0.6	a	1.6	0.6	a	【B】 図面 69-4	灰褐色・青灰色。砂粒・灰白色粒 を含む。瓦当端面削り整形・文様 裏面削り・ナデ調整。131型式。
203-9	SD195 C-2期	(10.4)	((3.6)) A1	—	((8.7)) 4.5	(2) SA	1.6	—	—	—	0.3	a	【B】 図面 68-15	製作技法 C II。淡青灰色。砂粒・ 海綿骨針を含む。中房に「文」刻印。 文様裏面外縁に布目痕あり。一本 作り。外区外縁削り整形。62型式。 小谷B遺跡・広町B遺跡。1 b 期。
203-10	SD195 C-2期	(8.1)	((6.5)) A1	—	((15.5)) 3.4	((8)) T	2.4	0.6	a	1.8	1.5	a	【B】 図面 69-1	製作技法 B I。青灰色。灰白色粒・ 海綿骨針を含む。外区外縁一部に 布目痕あり。文様裏面ナデ調整。 88型式。
203-11	SD195 C-2期	(5.0)	—	—	—	(1) T	—	—	—	—	—	—	【B】 図面 69-5	灰白色。細砂粒・海綿骨針を含む。 文様裏面ナデ調整。
203-12	SD195 C-2期	(14.0)	7.2 AI	1+4	((11.7)) 2.4	(7) T	2.2	0.5	a	1.7	0.8	a	【B】 図面 68-16	製作技法 B I。青灰色。灰白色粒・ 粗砂粒を多く含む。中房に「住」 押印あり。文様裏面指ナデ。瓦当 端面・男瓦部凹面削り整形。131 型式。
203-13	SD195 C-2期	(5.6)	—	—	—	—	2.0	0.4	a	1.6	1.5	a	【B】 図面 69-3	灰白色。砂粒を多く含む。瓦当端 面削り整形。文様裏面一部に布目 痕あり。ナデ調整。
203-14	SD195 C-2期	(6.8)	— B1	(2)	— 2.8	(2) SA	—	—	—	—	—	—	【B】 図面 69-11	灰褐色。砂粒を含む。弁端付近指 ナデあり。文様裏面ナデ調整。
203-15	SD195 C-2期	(8.8)	((4.1)) A1	—	((14.8)) 3.5	((8)) T	2.9	1.0	a	1.9	1.2	a	【B】 図面 69-6	製作技法 D I。黒色。細砂粒・海 綿骨針を含む。男瓦接合部へラ状 工具により刻目あり。文様裏面縦 方向にナデ付け。凹面削り整形。 98型式。
203-16	SD195 C-2期	(9.0)	((7.3)) A1	—	((14.6)) 3.5	(3) T	3.2	1.2	a	2.0	0.9	a	【B】 図面 69-7	製作技法 B I。灰褐色。細砂粒を 多く含む。外区外縁削り整形。文 様裏面ナデ調整。23-A型式。
203-17	SD195 C-2期	(7.8)	— B1	—	((19.8)) 2.3	— T	1.6	—	—	1.6	1.2	a	【B】 図面 69-8	灰褐色。砂粒を含む。外区外縁削 り整形。文様裏面は不規則に削 り整形。95-A型式。八坂前IX期。 II期。
203-18	SD195 C-2期	(10.0)	— B1	1+(1)	— 2.4	(2) SA	1.8	—	—	1.8	1.5	a	【B】 図面 69-2	青灰色。細砂粒を多く含む。文様 裏面ナデ整形。
203-19	SD195 C-2期	(4.8)	—	—	— 3.3	(2) T	—	—	—	—	—	—	【B】 図面 69-9	黒褐色。細砂粒・海綿骨針を含む。 85型式。
204-20	P-4	(6.0)	—	—	—	(1) T	3.0	0.8	a	2.2	1.0	a	【B】 図面 98-6	製作技法 B I。青灰色。灰白色粒・ 細砂粒を含む。男瓦部凹面罫目に 赤色塗料付着。28型式。新久V期。 II期。

第78表 第19・117・414次調査（東僧坊跡）、第226・360次調査
（南边区面溝※中門西）出土鏡瓦観察表（2）（図面203・204）

図面	出土位置	直径	内区				外区					出典 図版号	備考	
			中房径 形態	蓮子数	弁区径 弁幅	弁数 形態	内縁		外縁					
							幅	文様	幅	高さ	文様			
204-21	遺構外	(4.0)	—	—	((14.7) 3.3	(2) T	2.4	0.9	a	1.5	1.2	a	【B】 図面 98-11	青灰色。灰白色粒・粗砂粒をやや多く含む。文様裏面ナデ調整。男瓦部凹面削り整形。27型式。新久1類・八坂前IV類。II期。
204-22	遺構外	(12.2)	—	1+4	((13.8) 2.7	6 SA	—	—	—	—	—	—	【B】 図面 98-10	青灰色。灰白色粒・細砂粒を含む。文様裏面ナデ調整。
204-23	遺構外	(8.4)	—	—	— (3.0)	(2) SA	1.5	1.3	a	0.9	—	—	【B】 図面 98-8	青灰色。粗砂粒を多く含む。文様面木目痕あり。
204-24	SD23	18.5	4.9 B-B1	5	15.4 3.3	7 SA	13.0 17.0	—	—	—	0.6	a	【B】 図面 103-5	製作技法D I。灰色。硬質。砂粒・海綿骨針少量混入。瓦当側・裏面ヘラ削り。
204-25	SD23	(9.9)	(4.8) B-B1	(3)	(9.9) 2.8	(3) SA	—	—	—	—	—	—	【B】 図面 103-7	製作技法D I。灰色。硬質。粗砂粒・小石多量混入。瓦当裏面ヘラ削り。171型式。
204-26	SD23	(10.4)	5.3 B-B1	1+4	(10.4) (3.6)	(2) SA	—	—	—	—	—	—	【B】 図面 103-8	灰色灰白色。硬質。粗砂粒を多く含む。文様面木目痕あり。
204-27	SX86	(4.6)	—	—	(3.5) 3.3	(2) SC	—	—	—	—	—	a	【B】 図面 105-5	灰色。硬質。粗砂粒・海綿骨針やや多量混入。瓦当裏面ナデ。
204-28	遺構外	(8.8)	(1.7) B-B1	(2)	(6.6) 2.8	(3) SC	2.3	0.8	—	1.5	1.3	a	【B】 図面 108-8	灰色。硬質。白色砂粒多量混入。瓦当側面ヘラ削り。瓦当裏面ナデ。丹塗痕あり。24A型式。
204-29	遺構外	(20.0)	8.1 A-A1	1+6	(18.5) 5.5	8 SC	(1.5)	0.3	—	1.2	(0.5)	a	【B】 図面 107-11	製作技法A。灰色～灰白色。やや硬質。白色砂粒少量混入。瓦当裏面ナデ。久保瓦窯・石田国分寺瓦窯。1b期。
204-30	SX87	(15.1)	6.0 B-B1	1+7	(13.5) 1.8	(6) SC	2.1	0.5	—	1.6	0.8	a	【B】 図面 107-6	製作技法A。灰白色。やや硬質。胎土緻密。瓦当側・裏面ヘラ削り。86型式。
204-31	遺構外	(9.4)	(1.3) B-B1	—	(7.1) 3.2	(2) SC	2.2	0.9	—	1.3	0.9	a	【B】 図面 108-9	灰白色。硬質。砂粒少量混入。瓦当側面ヘラ削り。瓦当裏面ナデ。

※出典

【A】小野本教 2009『武蔵国分寺跡発掘調査概報 34 - 東僧坊・僧尼寺区面溝・東山道武蔵路の調査 -』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会より

【B】小野本教 2010『武蔵国分寺跡発掘調査概報 35 - 僧寺伽藍地の確認調査 -』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会より

第79表 第226次調査（南边区面溝※中門西）出土鬼瓦観察表（図面204）

図面	出土位置	長辺		特徴
		短辺	厚さ	
204-33	遺構外	(8.3)	灰色～淡橙褐色。やや硬質。白色粒をやや多量混入。側・下面ヘラ削り。出典図番号：図面99-8	
		(14.3)		
		4.9		
204-34	SD194 C-1期	(18.8)	青灰色。硬質。粗粒微量混入。側面ヘラ削り。下面指ナデ。上面不明ヘラ書あり。出典図番号：図面65-5	
		(11.5)		
		3.3		

※出典 小野本教 2010『武蔵国分寺跡発掘調査概報 35 - 僧寺伽藍地の確認調査 -』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会より

第80表 第19・117・414次調査(東僧坊跡)、第226・360次調査
(南辺区面溝※中門西)出土宇瓦観察表(1)(図面205~208)

図面	出土位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区				外区				脇区		文様 深さ	全長	出典 図版号	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様						
						厚さ	文様	厚さ	文様								
205-35	遺構外	(5.6) —	(3.1)	(1.5)	KK	—	—	1.0	a	—	—	0.2	(7.1)	【A】 図面 34-2	製作技法D?。顔面ヘラ 削り。灰黄白色。硬質。 砂粒少量混入。232-D'型 式。		
205-36	SD27	(6.6) (7.7) (0.8)	6.4	3.5	HK	1.5	a	1.4	a	1.4	a	0.4	(7.0)	【A】 図面 33-5	製作技法D。顎の形態C1 c? 顔面縦位罫叩き(L11 本)。灰黄白色。やや軟質。 砂粒少量混入。281-B'型 式。八坂前V類。II期。		
205-37	SX1	(4.8) —	(3.6)	(2.4)	KK	—	—	1.0	a	—	—	0.2	—	【A】 図面 33-6	顔面・女瓦凸面斜格子叩 き。灰色~暗灰色。硬質。 砂粒少量混入。281-C'型 式。谷野瓦窯。I b期。		
205-38	遺構外	(6.6) (10.0) (1.0)	(2.8)	(1.8)	KK	1.0	a	—	—	(1.7)	a	0.4	(10.0)	【A】 図面 34-1	製作技法B。顎の形態 C1a。顔面・女瓦凸面縦 位罫叩き(L7本)。灰黄 白色。やや軟質。砂粒少 量混入。282-A'型式。石 田国分寺瓦窯。I b期。		
205-39	SK130	(12.9) (13.5) (2.8)	3.7	2.5	HK	0.6	a	0.6	a	1.3	a	0.1	(24.0)	【A】 図面 33-7	製作技法D。顎の形態 B2-a。顔面横位罫叩き。 灰色。硬質。胎土緻密。 布目27×28。288型式。 谷津池2号窯。II期。		
205-40	SD194 C-1期	(8.8) (3.2) —	6.0	2.8	KK	1.5	a	1.7	a	0.7	a	0.3	(7.0)	【B】 図面 59-12	製作技法D。顎の形態 C1a。凸面罫叩き。凹面 布目下に糸切痕。灰褐色。 粗砂粒を含む。232-E'型 式。谷津池窯。II期。		
205-41	SD194 C-1期	(5.0) —	(3.5)	(2.9)	KK	0.8	a	—	—	—	—	0.2	(0.8)	【B】 図面 59-13	製作技法D。顎の形態B。 凸面罫叩き。青灰褐色。 粗砂粒を含む。233型式。 新久II類・八坂前VI類。 II期。		
205-42	SD194 C-1期	(13.5) —	(3.3)	(2.9)	HK	0.7	a	—	—	0.8	a	0.3	(12.0)	【B】 図面 59-11	製作技法D?。顎の形態 C1?。凸面削り整形。凹 面布目下に糸切り痕。灰 褐色。粗砂粒を含む。 290型式。広町B遺跡。 I b期。		
205-43	SD194 C-1期	(12.3) —	(4.1)	(3.4)	HK	—	—	0.7	a	0.9	a	0.4	(6.8)	【B】 図面 59-15	製作技法D?。顎の形態C。 顎部削り整形。明褐色。 砂粒・海綿骨針を含む。 282-E'型式。南比企。		
205-44	SD194 C-1期	(14.5) (16.0) —	4.9	(4.0)	0	—	a	0.9	a	1.3	a	0.2	(11.0)	【B】 図面 59-14	製作技法D。顎の形態 B2。女瓦部凸面格子叩 き。[文]押印あり。青灰色。 粗砂粒・海綿骨針を含む。 365型式。小谷B遺跡・ 広町B遺跡。I b期。		
206-45	SD194 C-2期	(2.0) (9.0) —	5.2	4.0	HK	0.6	a	0.8	a	0.8	a	0.3	(6.7)	【B】 図面 69-13	製作技法A?。顎の形態 C1a。灰褐色。海綿骨針 を含む。282-A'型式。石 田国分寺瓦窯。I b期。		
206-46	SD194 C-2期	(8.0) —	(3.1)	(2.4)	HK	—	—	0.8	a	—	—	0.2	(6.3)	【B】 図面 69-16	製作技法D。顎の形態 B1a。灰褐色。砂粒を含む。 285-B'型式。		
206-47	SD194 C-2期	(4.0) (4.0) —	4.8	(3.6)	HK	0.8	a	0.6	a	—	—	0.3	(8.8)	【B】 図面 69-14	製作技法D。顎の形態 B1b。女瓦部凸面にヘラ による格子状沈線あり。 灰褐色。海綿骨針を含む。 281型式。		
206-48	SD194 C-2期	(1.0) —	(3.4)	(2.6)	唐草 文	0.8	a	—	—	—	—	0.2	(8.5)	【B】 図面 69-15	製作技法D。顎の形態 C2。女瓦部凸面斜格子叩 き。灰色。砂粒を含む。 281-C'型式。谷野瓦窯。 I b期。		

第 80 表 第 19・117・414 次調査（東僧坊跡）、第 226・360 次調査
（南辺区画溝※中門西）出土宇瓦観察表（2）（図面 205～208）

図面	出土位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	出典 図版号	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様				
						厚さ	文様	厚さ	文様						
206-49	SD194 C-2 期	(11.2) (11.3) —	5.4	3.7	不明	—	a	1.0	a	1.3	a	0.2	(7.0)	【B】 図面 69-12	製作技法 D。顎の形態 C1a。凸面正格子叩き。 暗茶褐色。粗砂粒を含む。 359 型式。セイカク瓦 窯。
206-50	SD194 C-2 期	(11.4) (8.3) —	6.7	3.0	KK	0.8	b	0.7	b	0.9	a	0.5	(15.4)	【B】 図面 70-1	製作技法 D。顎の形態 B1a。女瓦部凸面叩き。 青灰色。細砂粒を含む。 232-C 型式。八坂前瓦窯。 Ⅱ期。
206-51	SD194 C-2 期	(11.5) (11.6) —	4.0	2.4	0	0.7	a	0.9	a	—	—	0.1	(9.2)	【B】 図面 70-4	製作技法不明。顎の形態 C1a。橙灰褐色。粗砂粒 を含む。375 型式。
206-52	SD194 C-2 期	— (14.8) —	(2.9)	(1.8)	H	—	—	0.6	a	0.7	a	0.1	(5.5)	【B】 図面 70-3	製作技法 D。顎の形態 B1a。顎部叩き。青灰色。 細砂粒を含む。321-C 型 式。
206-53	SD194 C-2 期	25.0 30.5 3.4	4.3	2.7	KK	0.7	b	0.8	b	1.1	a	0.3	(10.6)	【B】 図面 70-5	製作技法不明。顎の形 態 C1c。顎部削り整形。 女瓦部凸面叩き。褐色。 砂粒を含む。232-D 型 式。
207-54	SD194 C-2 期	(11.0) (10.0) (2.5)	5.3	3.4	HK	0.4	a	0.6	a	0.5	a	0.4	(0.6)	【B】 図面 70-2	製作技法不明。顎の形 態 C2。顎部斜格子叩き。 青灰色。灰白色粒・砂粒 を含む。283 型式。
207-55	SD194 C-2 期	— (5.0) —	(2.7)	(1.2)	H	—	—	0.6	a	0.5	a	0.1	(5.0)	【B】 図面 70-6	製作技法 D。顎の形 態 B3。顎部叩き。瓦当 裏面横ナデ。暗青灰色。 灰白色粒を含む。321-C 型式。
207-56	SK873	— (8.9) —	(3.7)	(3.7)	0	—	—	—	a	—	—	0.4	(7.7)	【B】 図面 97-7	製作技法不明。顎の形 態 C3。顎部叩き。灰褐色。 灰白色粒・軟質赤褐色粒 を含む。358 型式。
207-57	遺構外	(4.6) (5.0) —	4.7	3.2	HK	0.7	a	0.6	a	0.6	a	0.2	(4.0)	【B】 図面 98-14	製作技法・顎の形 態不明。顎部凸面斜格子叩 き。凹面削り整形。青灰 色。灰白色粒を少量含む。 281-D 型式。
207-58	遺構外	(7.0) (5.4) —	3.7	—	3G	—	—	—	—	—	—	0.6	(6.4)	【B】 図面 98-13	製作技法 B。顎の形 態 B1a。青灰色。灰白色粒・ 海綿骨針、小石を含む。
207-59	遺構外	(10.6) (14.8) —	4.8	3.2	KK	0.7	b	0.8	b	0.9	a	0.4	(13.0)	【B】 図面 99-1	製作技法 D。顎の形 態 B1a。顎部・女瓦部凸面 叩き。灰褐色。細砂粒 を含む。232-C 型式。八 坂前窯。Ⅱ期。
207-60	遺構外	(5.8) — —	(3.5)	(2.9)	HK	—	a	—	—	—	—	0.2	(7.6)	【B】 図面 98-12	製作技法 D。顎の形 態不明。青灰色。細砂粒・海 綿骨針を含む。250 型 式。
207-61	遺構外	(6.3) (7.6) (0.8)	4.3	—	M	—	—	—	—	—	—	—	(7.6)	【B】 図面 108-11	製作技法 D。顎の形 態 B1a。灰色～灰赤褐色。 硬質。砂粒やや多量混入。 顎面横位へラ削り。355 型式。
207-62	SB124	(13.3) (11.7) 2.5	3.4	—	3G	—	—	—	—	—	—	0.7	(13.9)	【B】 図面 102-1	製作技法 D。顎の形 態 B1b。灰色。硬質。海綿 骨針やや多量混入。顎面 横位・女瓦凸面横位へラ 削り。
207-63	SD23	(12.0) (12.6) 4.0	5.3	2.0	HK	1.3	—	2.0	a	1.3	a	0.2	(12.0)	【B】 図面 104-1	製作技法 B。顎の形 態 B1a。灰色。硬質。砂粒 微量混入。顎面へラ削 り。女瓦部横位叩き。 234-A 型式。新久田類。 Ⅱ期。
207-64	SX86	(9.6) (10.6) (1.6)	5.9	4.2	HK	1.2	a	0.5	—	0.6	a	0.4	8.0	【B】 図面 105-6	製作技法 D。顎の形 態 C1c。灰色。硬質。砂粒 やや多量混入。顎面横位 へラ削り。285-D 型 式。

第80表 第19・117・414次調査(東僧坊跡)、第226・360次調査
(南辺区画溝※中門西)出土宇瓦観察表(3)(図面205~208)

図面	出土位置	上限弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	出典 図版号	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様				
						厚さ	文様	厚さ	文様						
207-65	遺構外	(4.9) (4.9) —	5.5	—	J	—	—	—	—	—	—	—	8.7	【B】 図面 108-10	製作技法D。顎の形態C2c。灰色。硬質。砂粒微量混入。顎面横位・女瓦凸面縦位脚叩き。351型式。
207-66	SD23	(6.9) (7.5) 0.2	4.9	2.7	KK	0.7	—	1.5	a	—	—	0.2	(9.7)	【B】 図面 103-9	製作技法D。顎の形態C1c。灰色～灰赤褐色。硬質。粗砂粒多量混入。顎面・女瓦凸面縦位脚叩き。236型式。
208-67	SI447	27.0 30.0 4.5	4.1	—	3G	—	—	—	—	—	—	0.9	(20.9)	【B】 図面 103-6	製作技法B?。顎の形態B1a。灰色。硬質。白色粒子多量混入。
208-68	SX86	(15.8) (16.9) 3.5	5.4	2.9	KK	0.9	a	1.6	a	—	a	—	15.0	【B】 図面 105-7	製作技法D。顎の形態B1a。灰色。硬質。粗砂粒多量混入。顎面横位・女瓦凸面縦位脚叩き。236型式。
208-69	遺構外	(10.6) (11.1) (0.8)	(6.0)	(4.4)	HK	—	—	—	a	—	a	(0.4)	(9.8)	【B】 図面 109-2	製作技法B。顎の形態B2b。灰黄白色。硬質。砂粒少量混入。顎面横位ヘラ削り。287-B型式。
208-70	遺構外	(7.5) (8.2) (0.6)	4.1	—	KK	—	a	—	a	—	—	0.2	(4.8)	【B】 図面 108-13	製作技法D。顎の形態B1a。灰色。硬質。白色粒・粗砂粒多量混入。顎面横位脚叩き。236型式。
208-71	遺構外	(5.9) (7.0) —	(5.2)	2.0	HK?	(1.3)	—	(1.9)	a	—	—	0.5	(9.8)	【B】 図面 109-4	製作技法D。顎の形態B2。灰色。硬質。砂粒微量混入。顎面横位脚叩き。368-A型式。
208-72	遺構外	(11.8) (12.2) 2.6	3.2	2.7	HK	0.0	a	0.5	a	—	—	0.1	(6.9)	【B】 図面 109-3	製作技法C。顎の形態C1c。灰色～灰赤褐色。硬質。砂粒少量混入。288型式。谷津池2号窯。II期。
208-73	遺構外	(7.4) (9.9) (0.4)	4.8	1.5	H	1.4	a	1.9	a	—	—	0.3	15.3	【B】 図面 108-12	製作技法B。顎の形態C1b。灰色。硬質。顎面横位脚叩き。砂粒や多量混入。322-A型式。
208-74	遺構外	(13.4) (13.9) 3.7	5.1	3.6	HK	0.7	a	0.8	a	1.0	a	0.6	13.8	【B】 図面 109-1	製作技法D。顎の形態B1a。灰色。硬質。白色粒多量混入。顎面・女瓦凸面正格子叩き。294-A型式。

※出典

【A】小野本牧 2009『武蔵国分寺跡発掘調査概報34—東僧坊・僧尼寺区画溝・東山道武蔵路の調査—』国分寺市道跡調査会・国分寺市教育委員会より

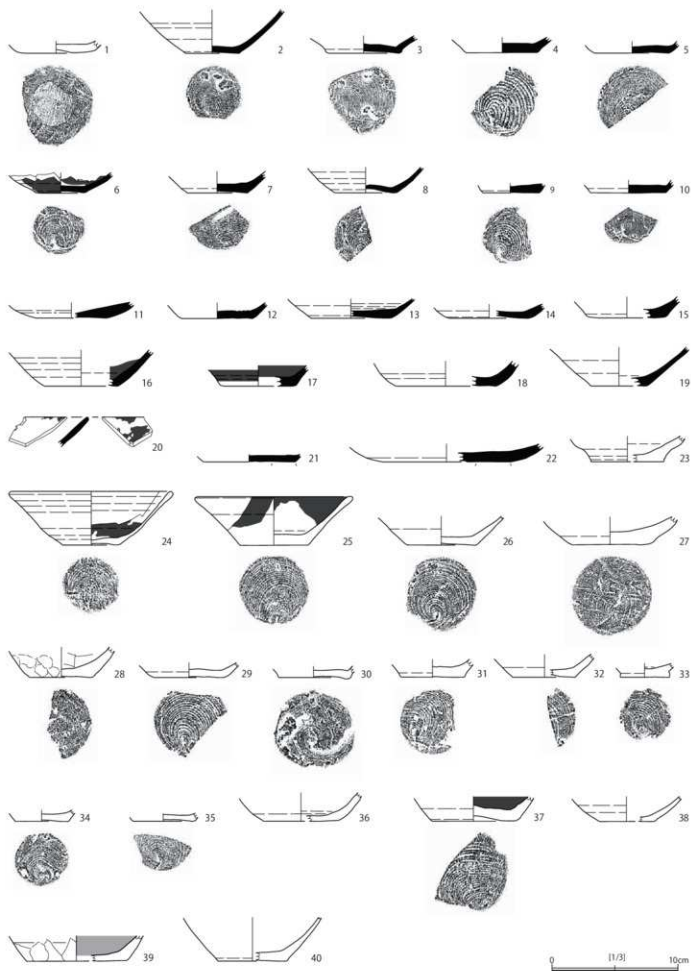
【B】小野本牧 2010『武蔵国分寺跡発掘調査概報35—僧寺伽藍地の確認調査—』国分寺市道跡調査会・国分寺市教育委員会より

圖 面

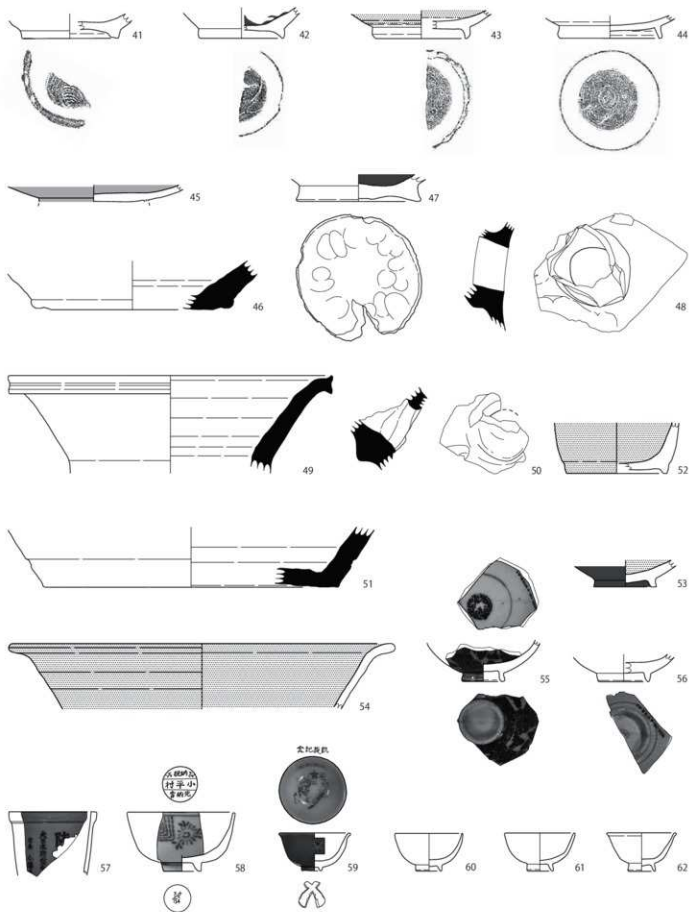


金堂7区東出土軒先瓦

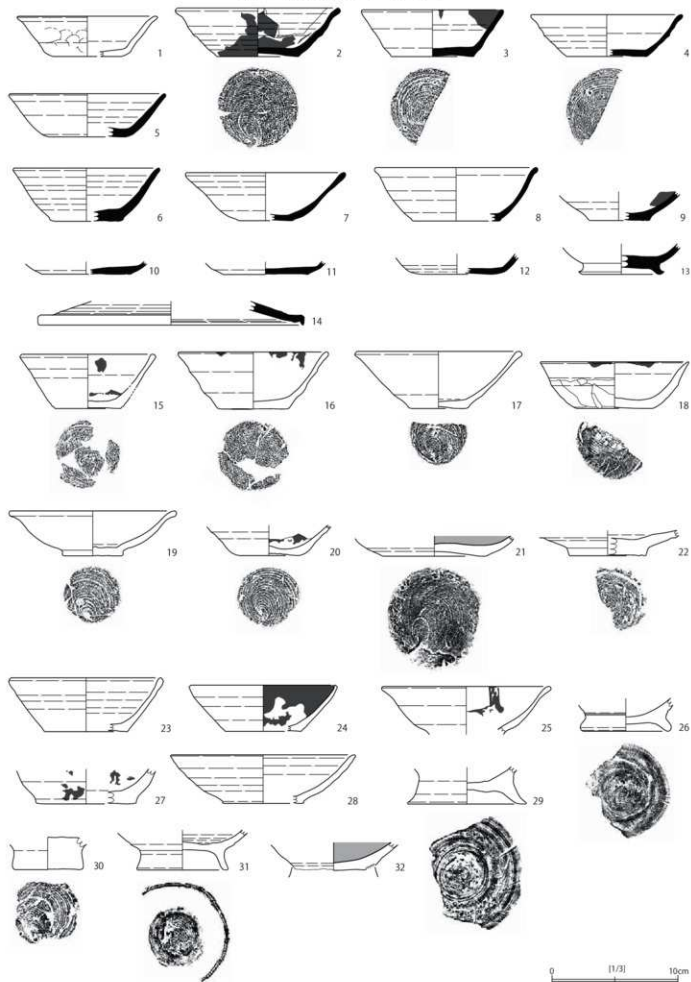
图面1 土器·陶磁器類(1) —金堂地区1—



图版 2 土器·陶磁器類(2) —金堂地区2—

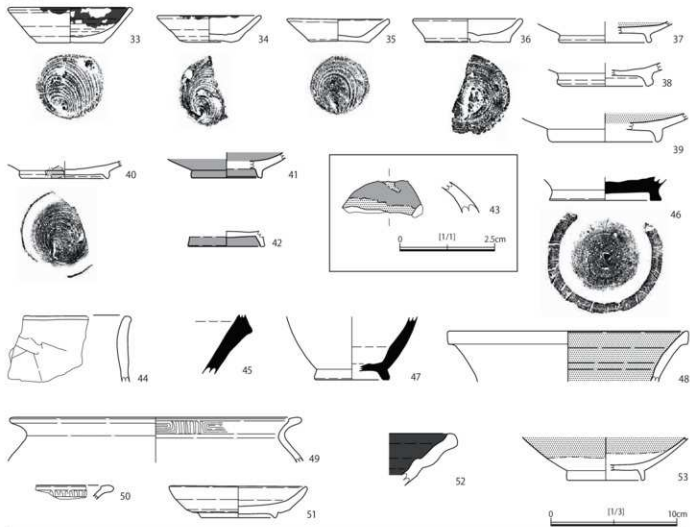


図面3 土器・陶磁器類(3) - 講堂地区1 -

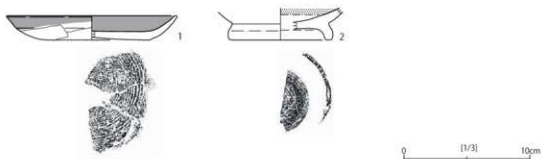


図面4 土器・陶磁器類(4) -講堂地区2、鐘楼地区、堂間地区(中門・金堂間)-

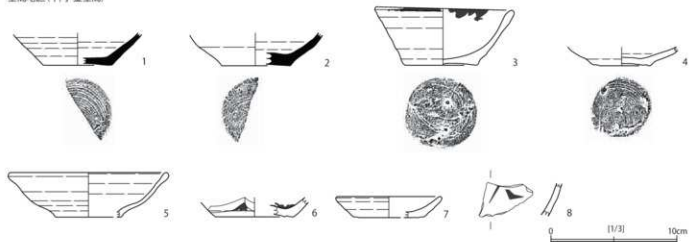
講堂地区



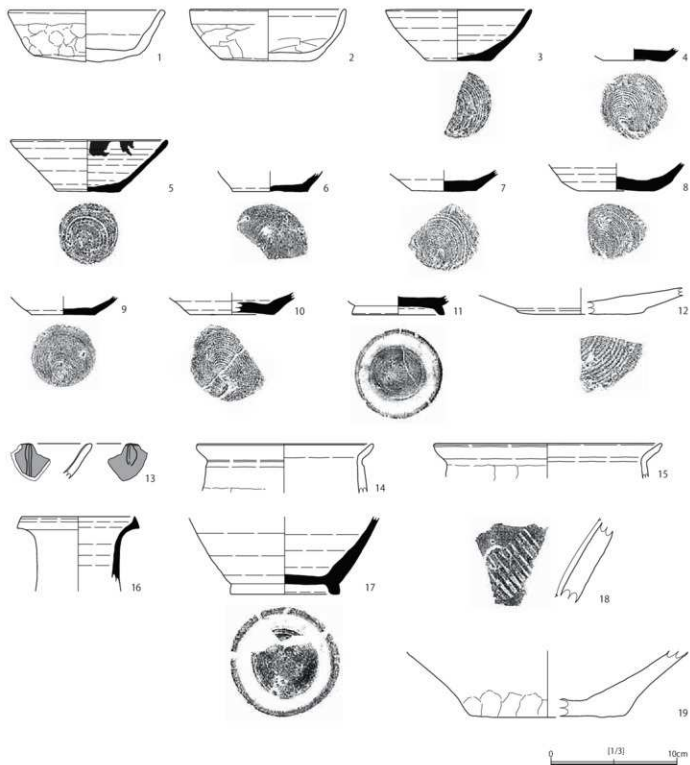
鐘楼地区



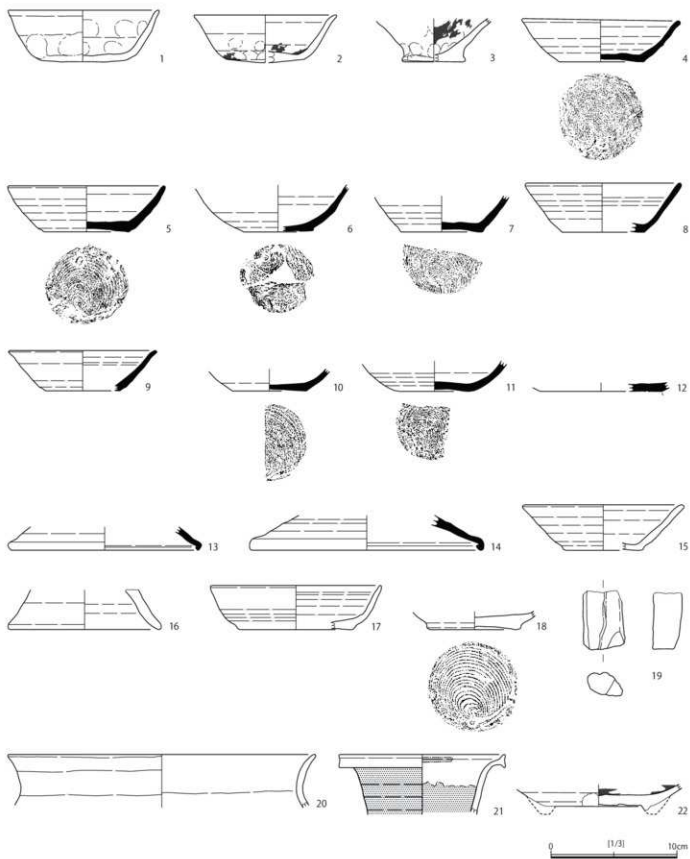
堂間地区(中門・金堂間)



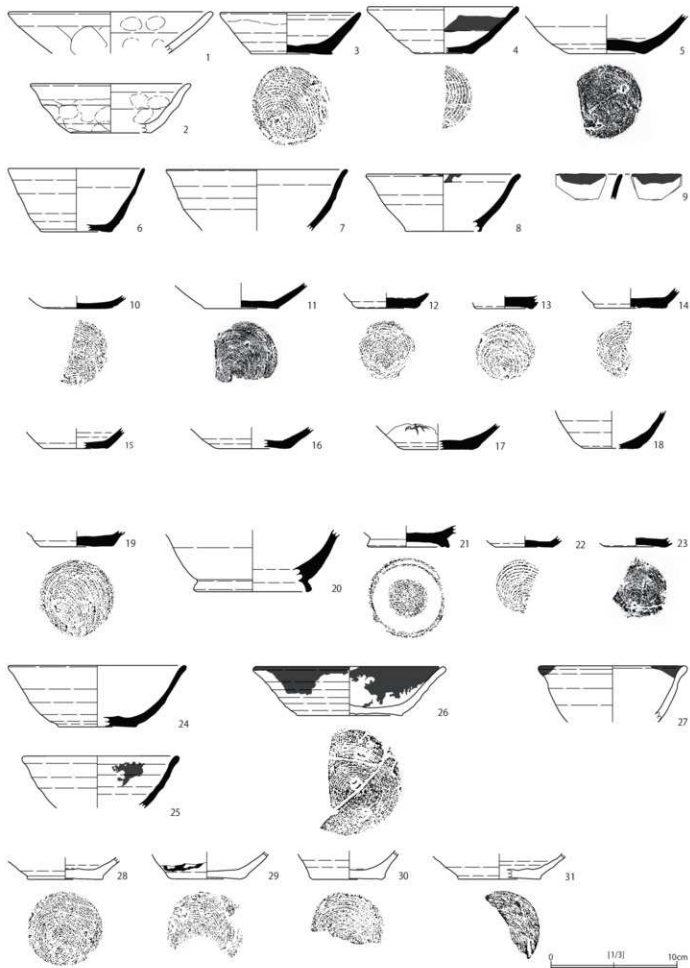
図面5 土器・陶磁器類(5) 一堂間地区(金堂・講堂間)



図面6 土器・陶磁器類(6) 一中門地区一

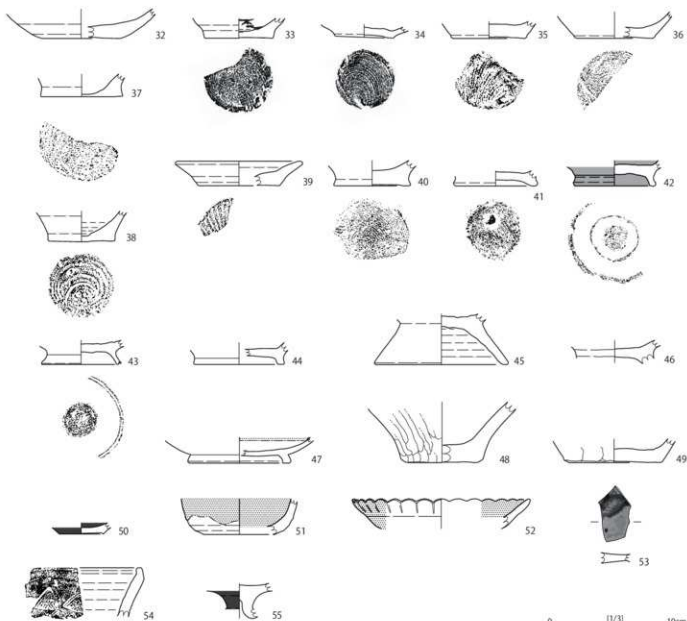


图版 7 土器·陶磁器類(7) — (加賀中松部区面施段)区画南辺1—

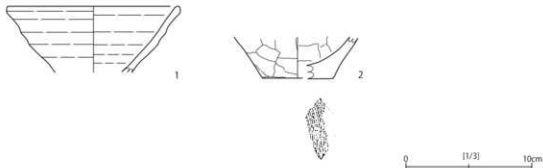


图版 B 土器·陶磁器類 (B) — (加藍中樞部區畫施設) 区画南辺 2、区画南東、区画北辺—

区画南辺 2



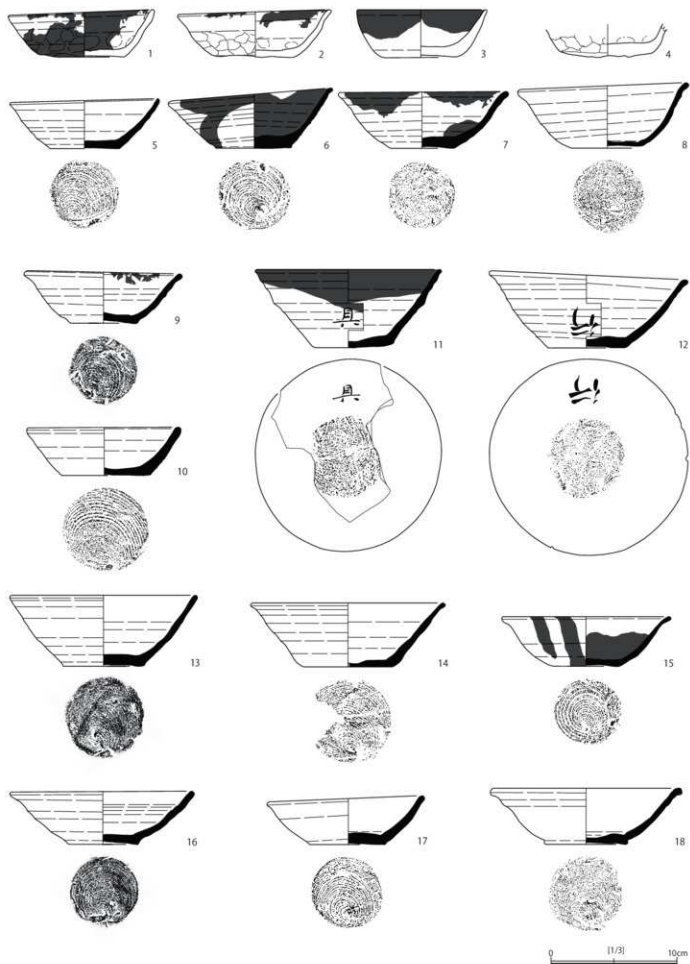
区画南東



区画北辺



图9 土器·陶磁器類(9) — (加賀中松部区画施設)区画北西1—

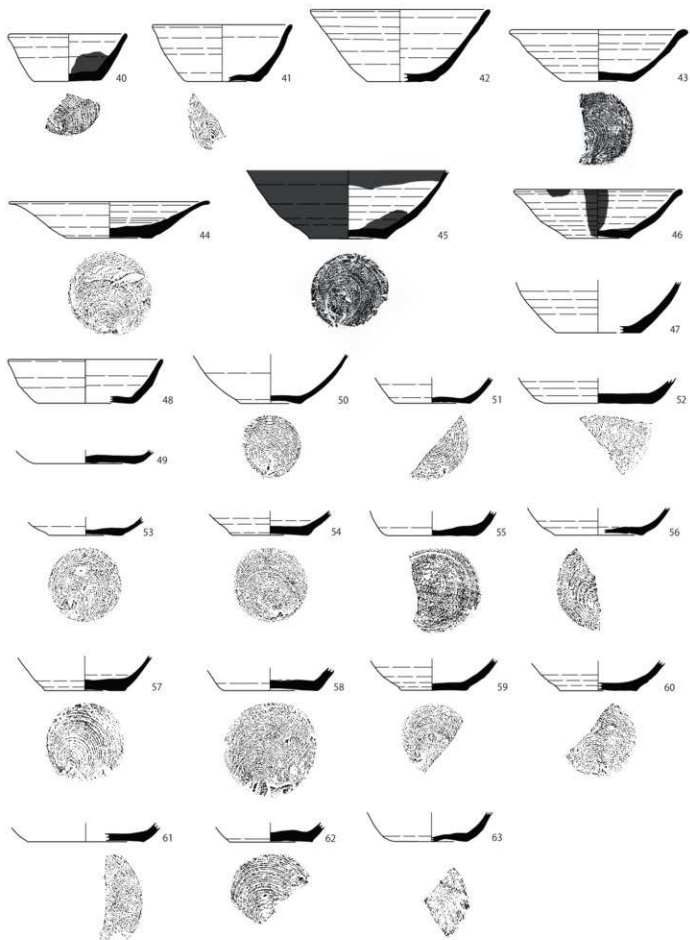


图版10 土器·陶磁器類(10) — (伽藍中柁部区画施設)区画北西2—



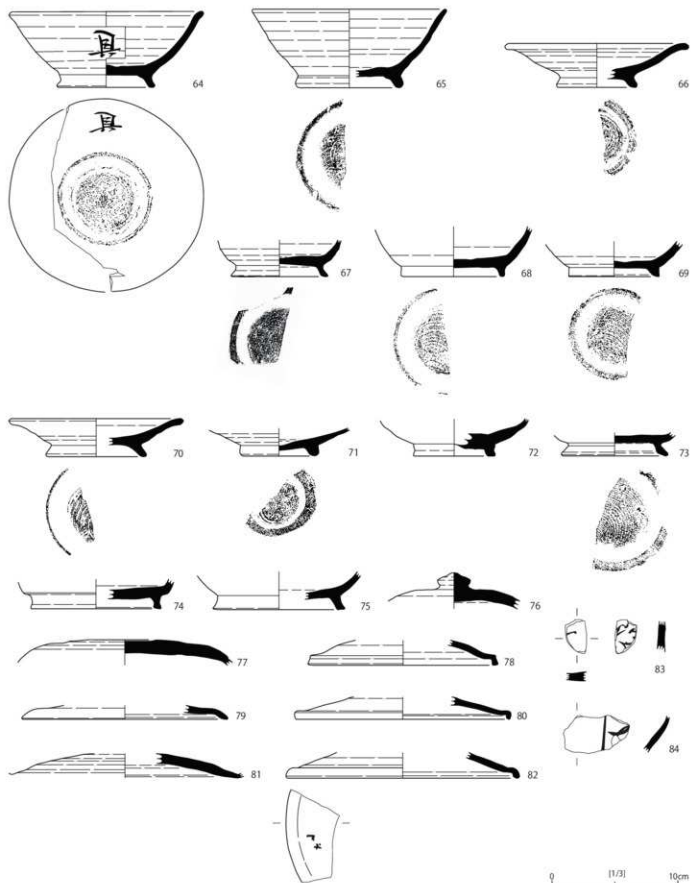
0 [1/3] 10cm

图版11 土器·陶磁器類(11) — (加藍中柘部区画施設)区画北西3—

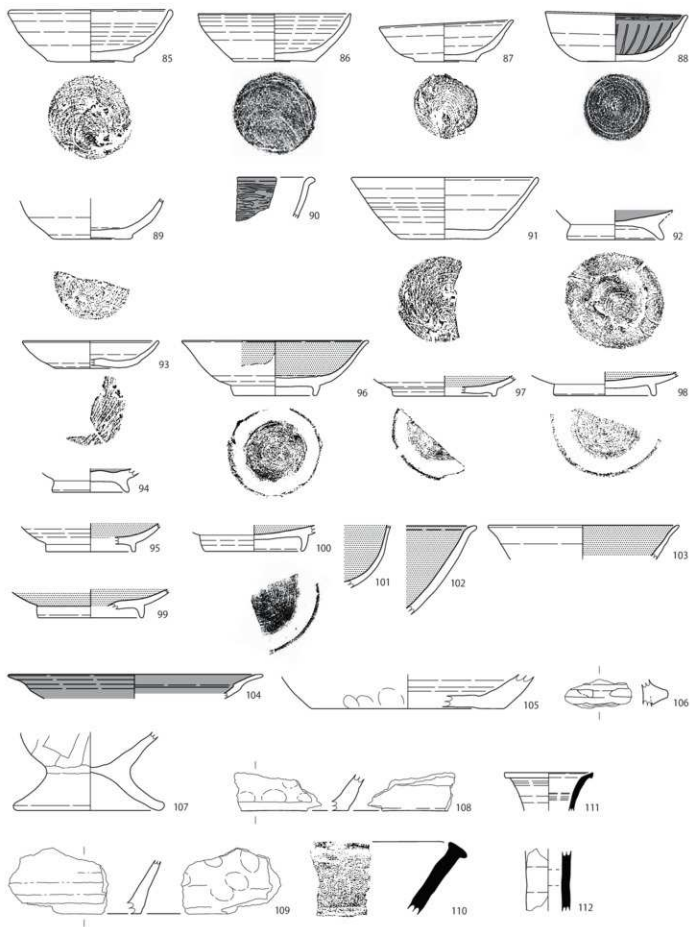


0 [1/3] 10cm

图版12 土器·陶磁器類(12) — (伽藍中柁部区画施設)区画北西4—



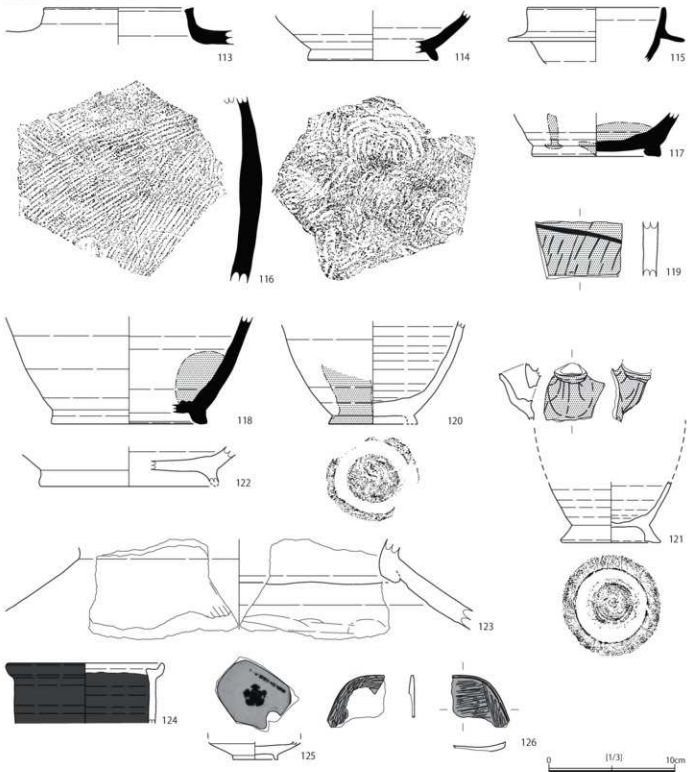
图版13 土器·陶磁器類(13) — (加藍中樞部区画施設)区画北西5—



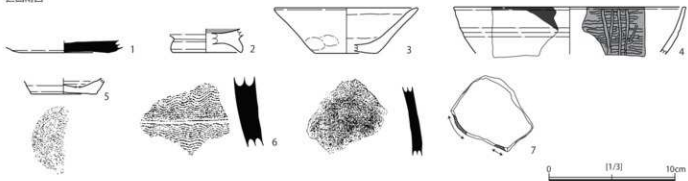
0 [1/3] 10cm

图版14 土器·陶磁器類(14) — (加蓋中柙部区画施設)区画北西6、区画南西—

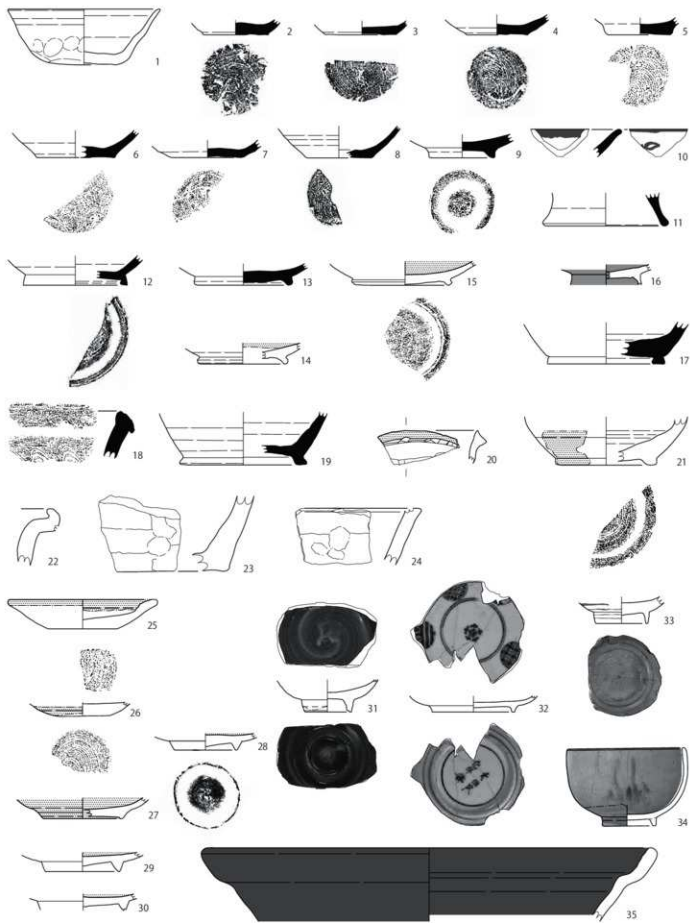
区画北西6



区画南西



图面15 土器·陶磁器類 (15) —塔跡2地区1—



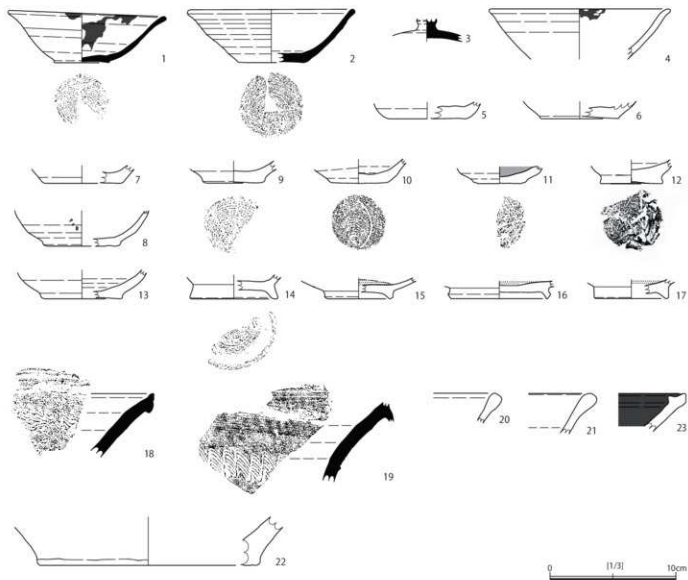
0 [1/3] 10cm

图版16 土器·陶磁器類(16) —塔跡2地区2、塔跡2周辺地区—

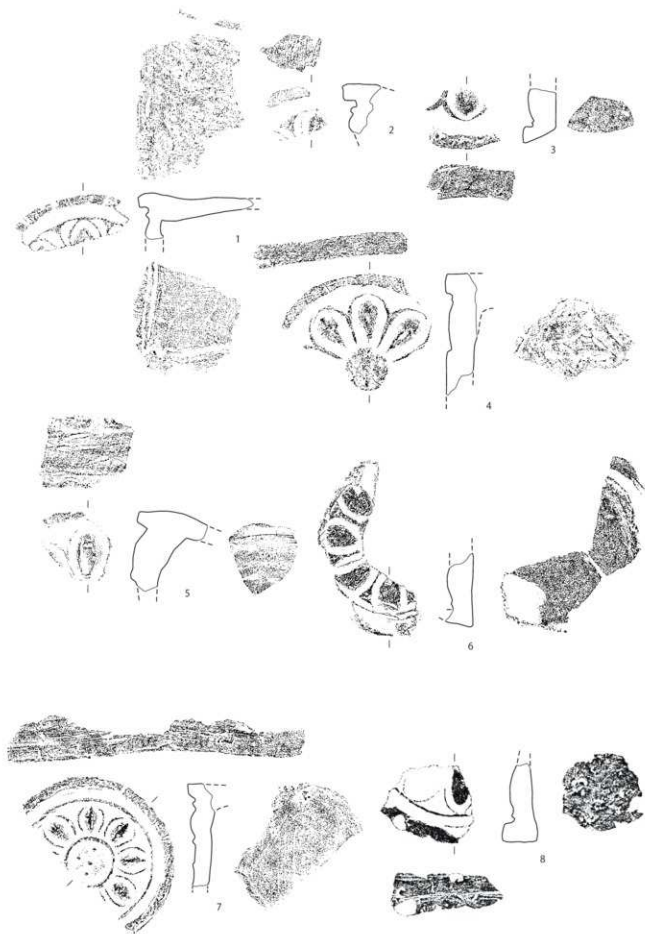
塔跡2地区



塔跡2周辺地区

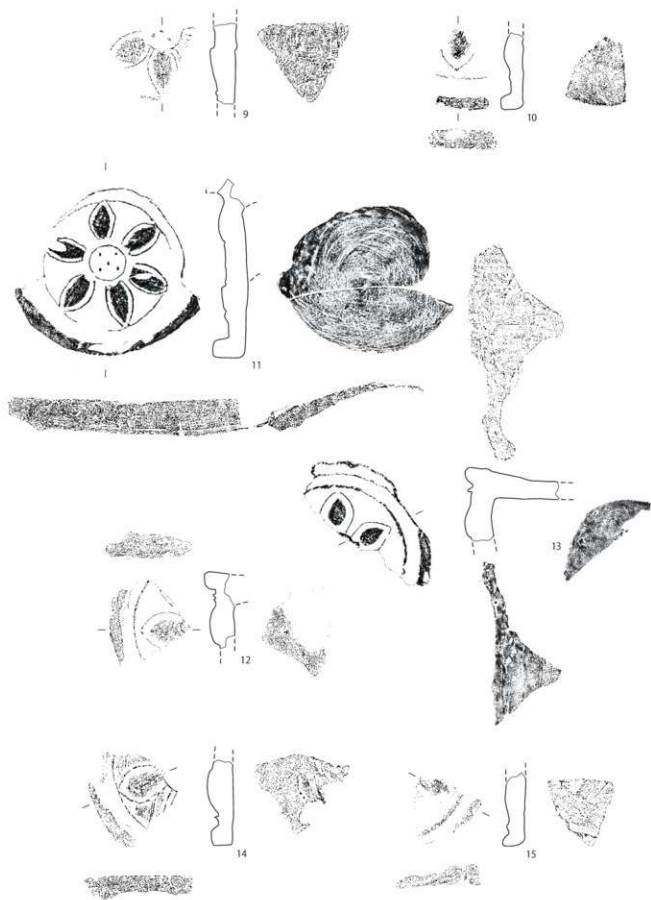


图版17 粗瓦(1) —金堂地区1—



0 [1/4] 10cm

图面18 粗瓦(2) —金堂地区2—



0 [1/4] 10cm

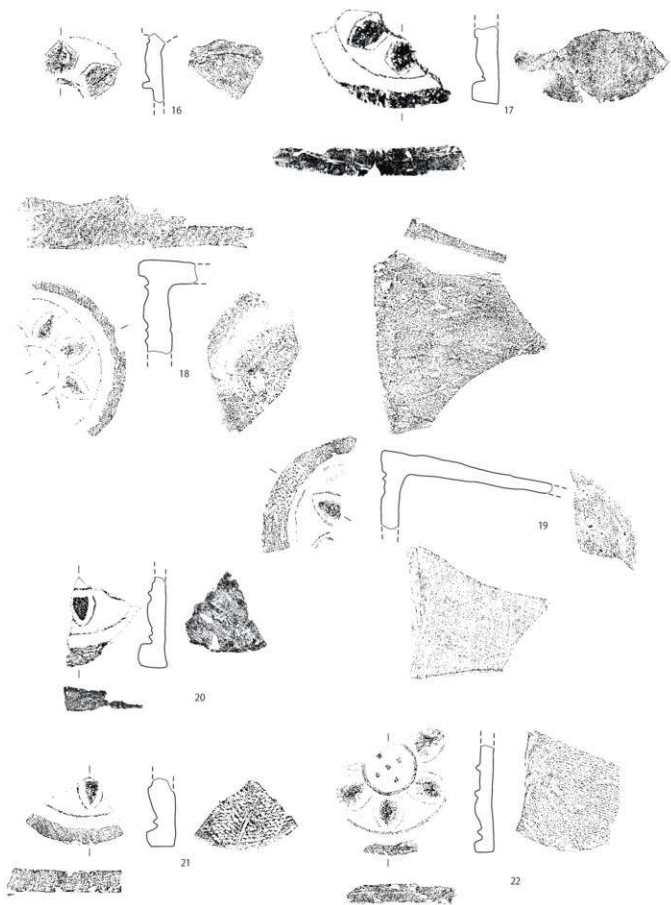
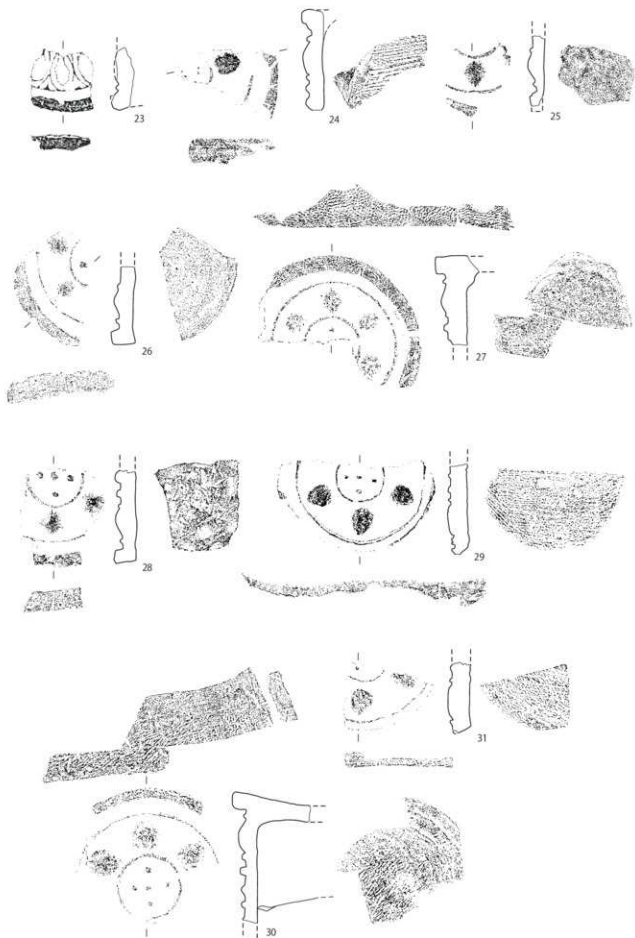
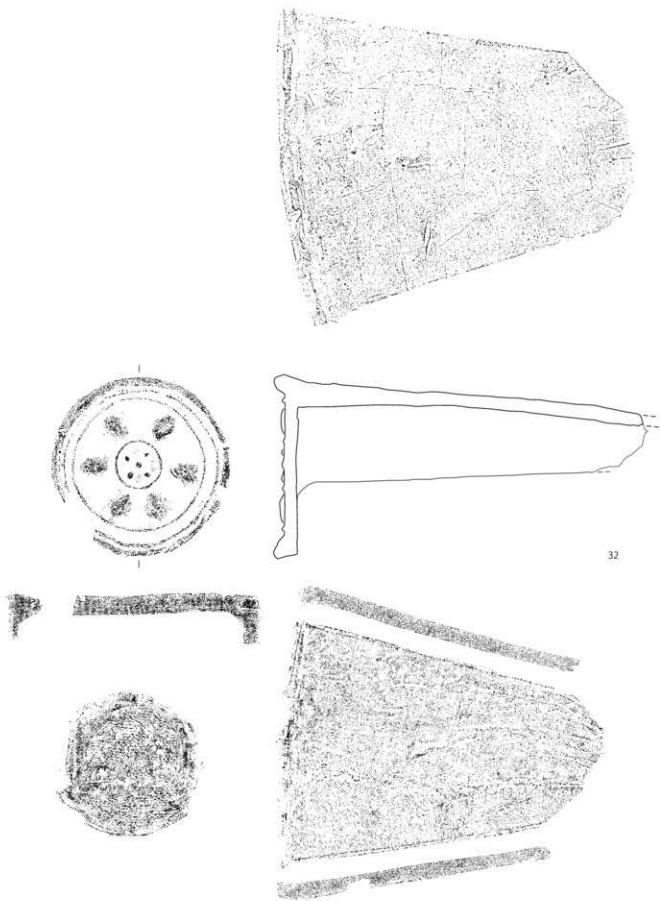


图20 粗瓦(4) —金堂地区4—



0 [1/4] 10cm



32

0 1/4 10cm

图22 粗瓦(6) —金堂地区6—

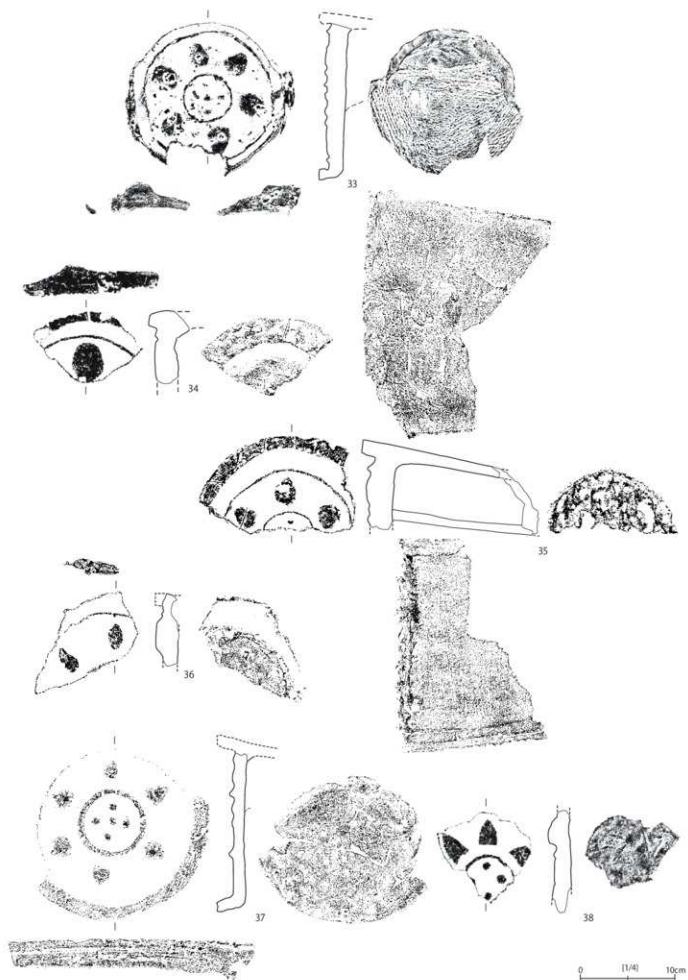


图23 粗瓦(7) —金堂地区7—

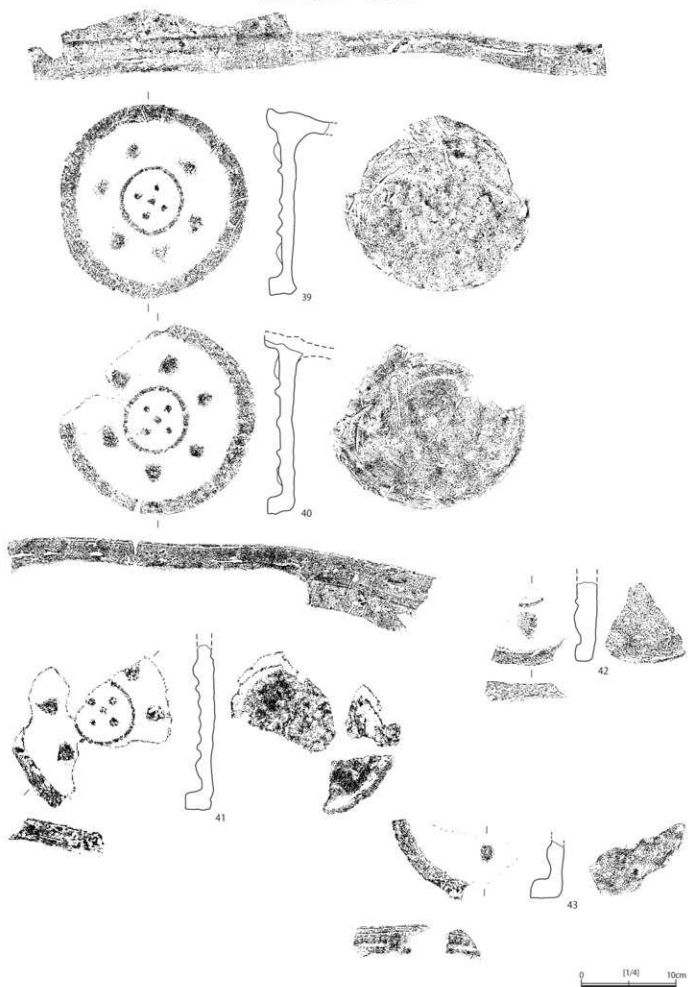
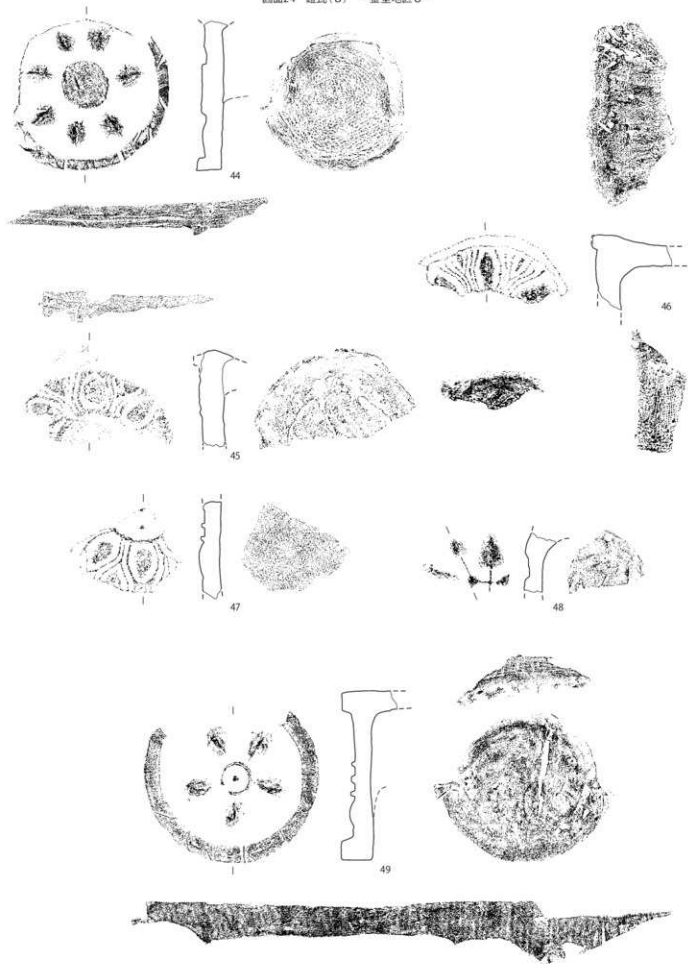
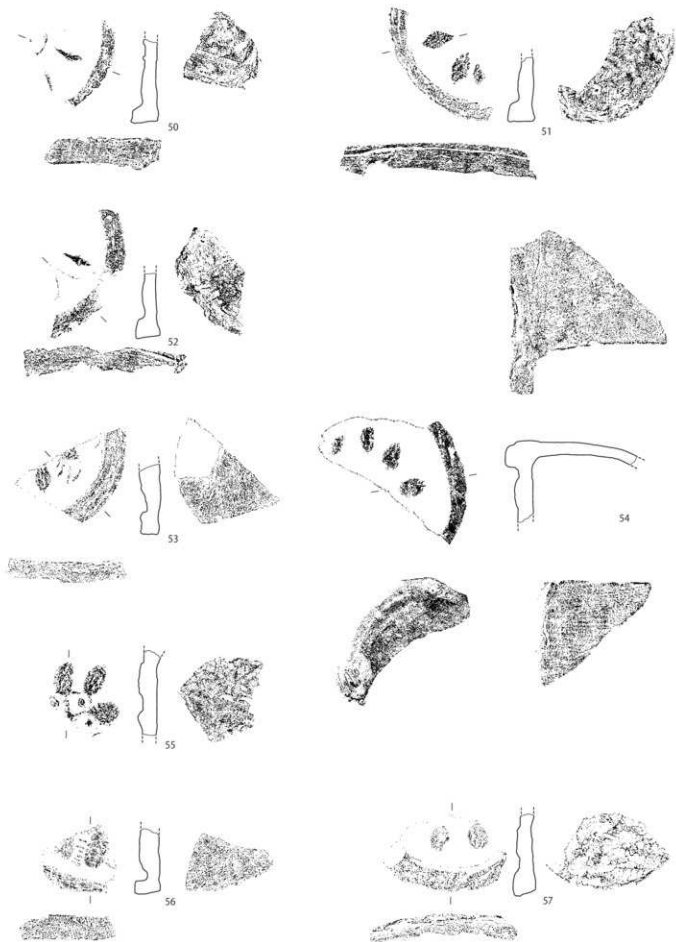


图24 粗瓦(8) —金堂地区8—



0 [1/4] 10cm

图25 粗瓦(9) —金堂地区9—



0 [1/4] 10cm

图26 釉瓦(10) —金堂地区10—

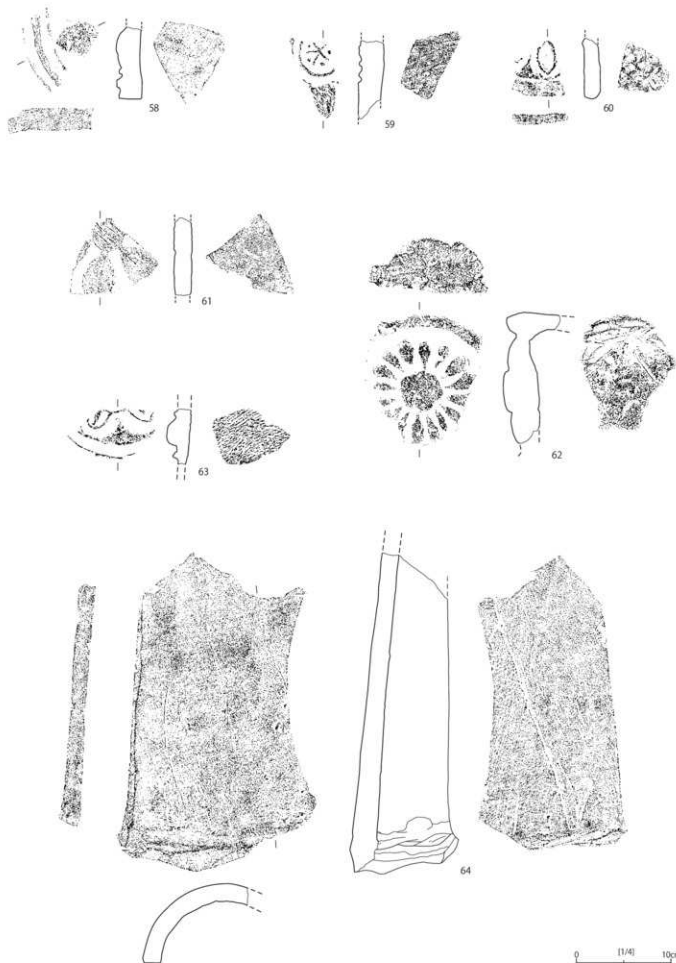
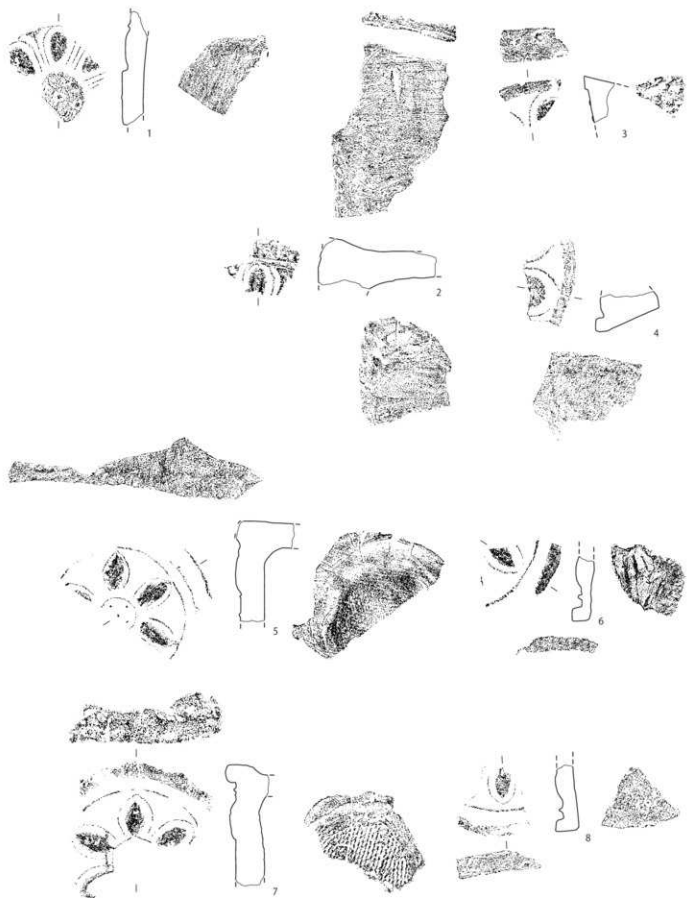
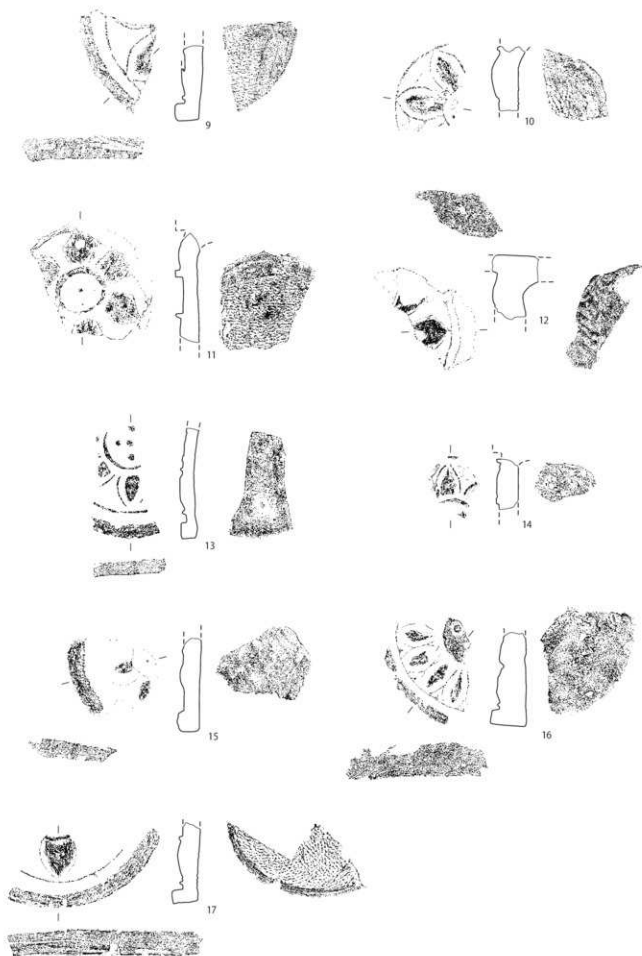


图27 粗瓦(11) — 讲堂地区1—

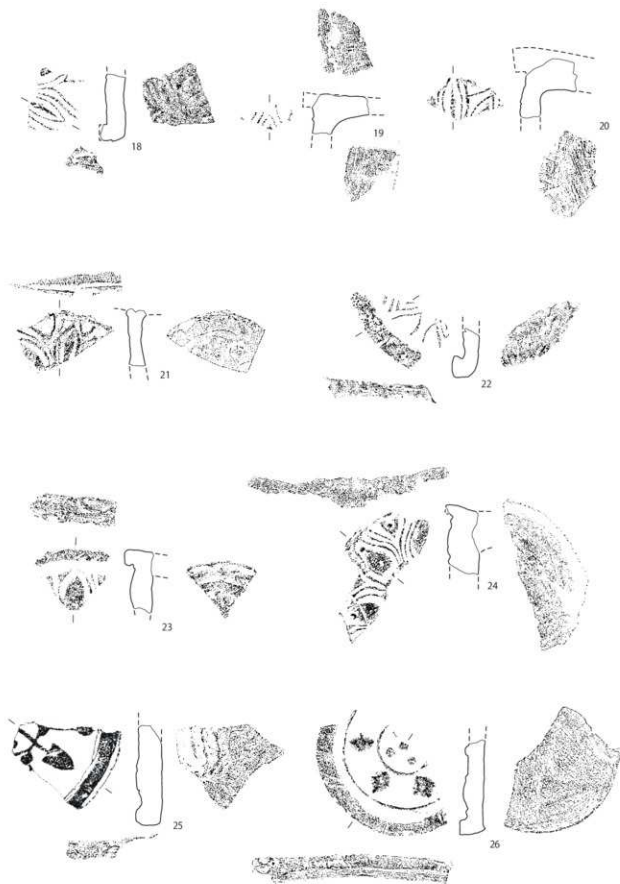


0 1140 10cm

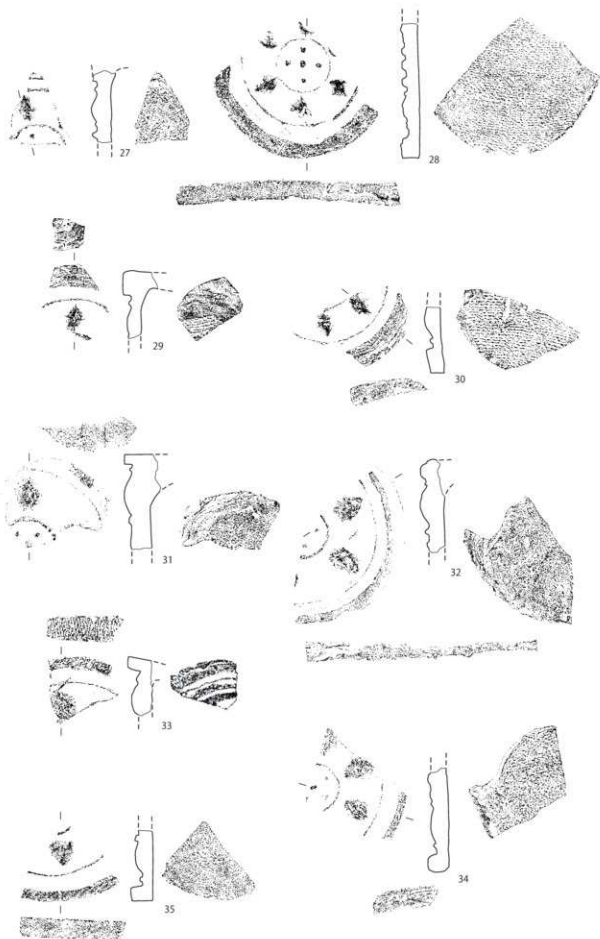
图28 粗瓦(12) — 讲堂地区2—



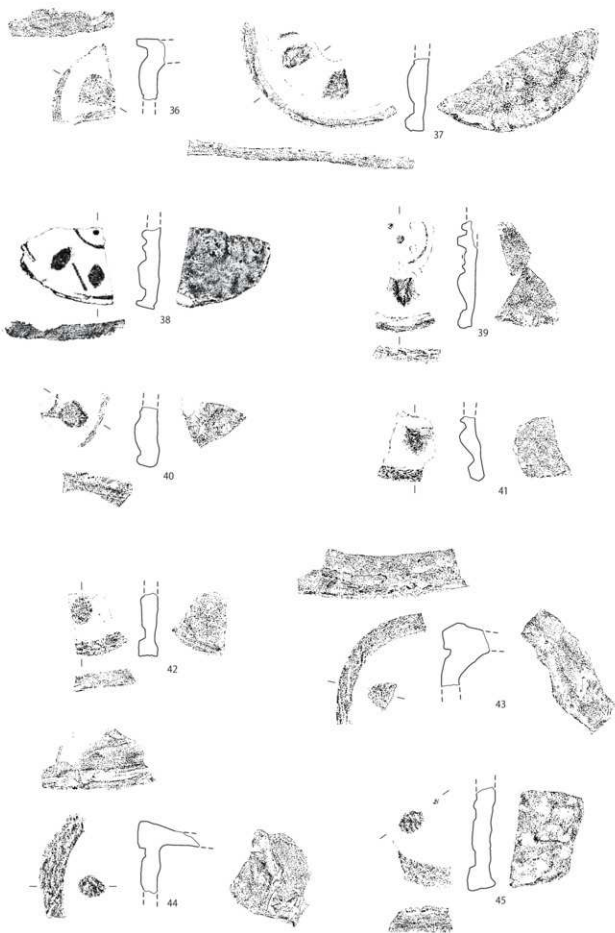
0 [1/4] 10cm



图面30 粗瓦(14) — 講堂地区4 —

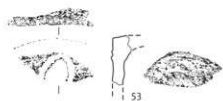
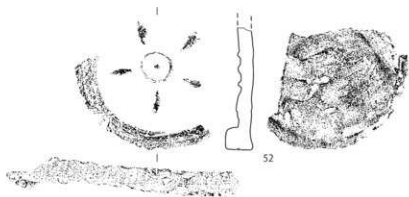
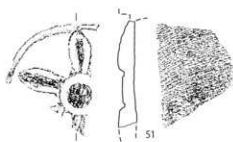
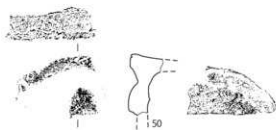
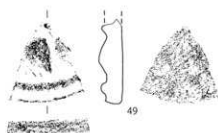
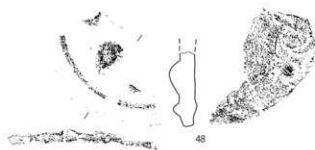
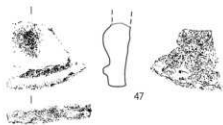
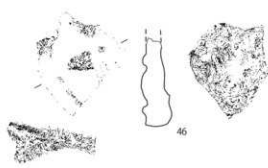
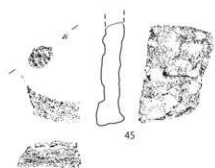


图面31 粗瓦(15) —講堂地区5—



0 [1/4] 10cm

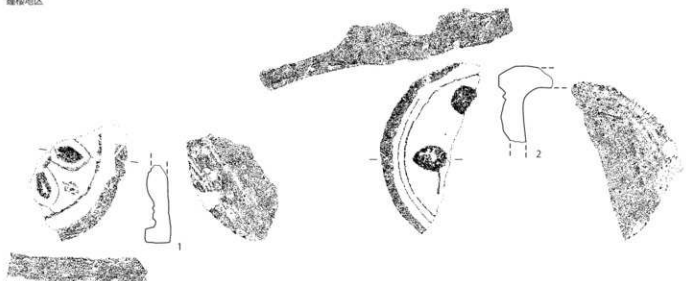
图32 粗瓦(16) — 讲堂地区6 —



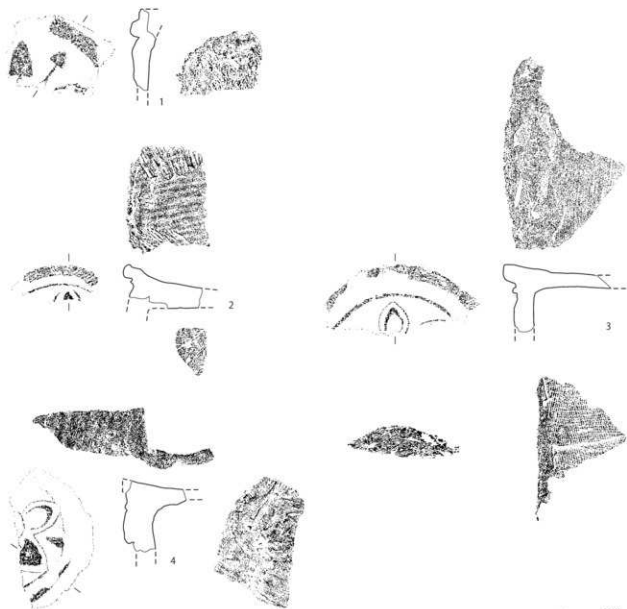
0 [1/4] 10cm

図面33 甃瓦(17) 一鐘楼地区、空間地区(中門・金堂間)一

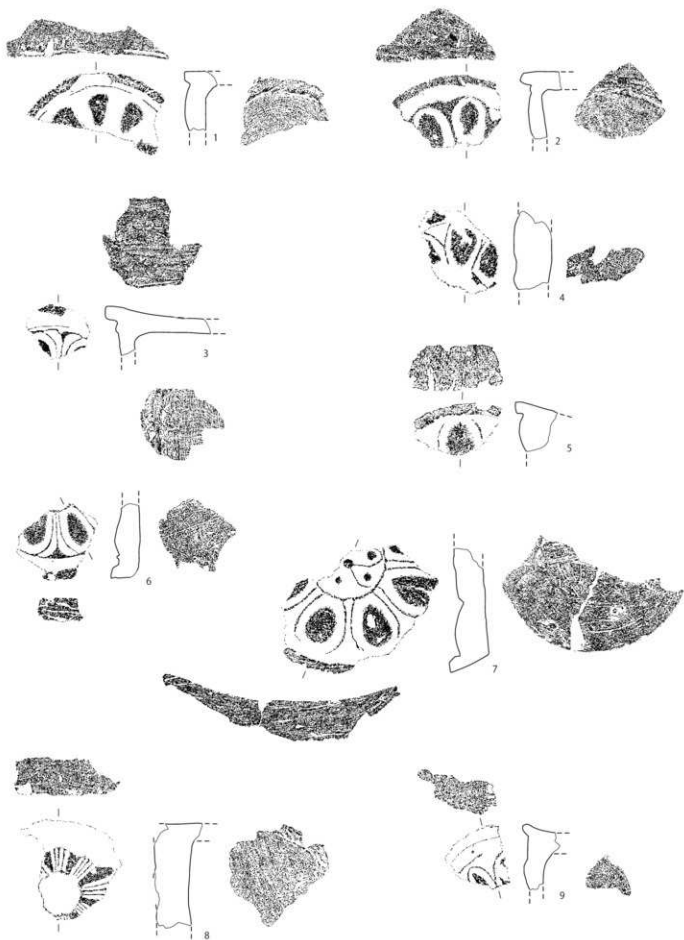
鐘楼地区



空間地区(中門・金堂間)

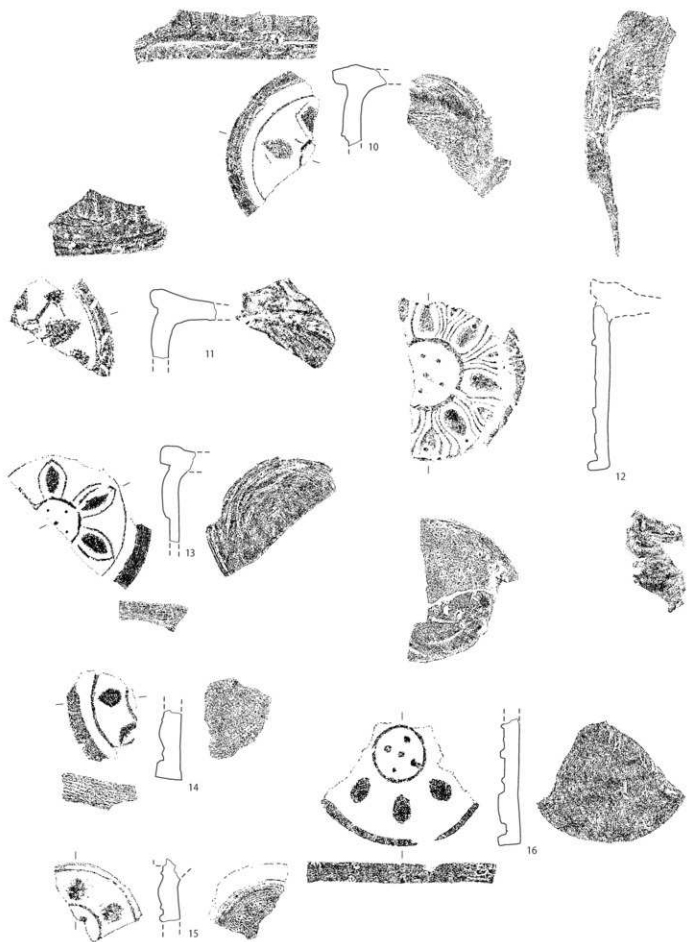


図面34 観瓦(18) 一堂間地区(金堂・講堂間) 1-

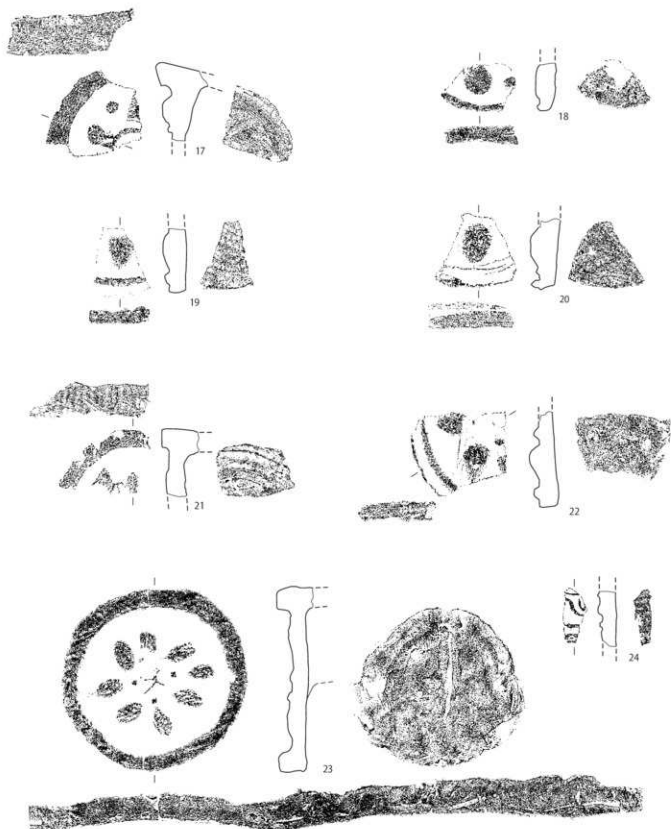


0 [1/4] 10cm

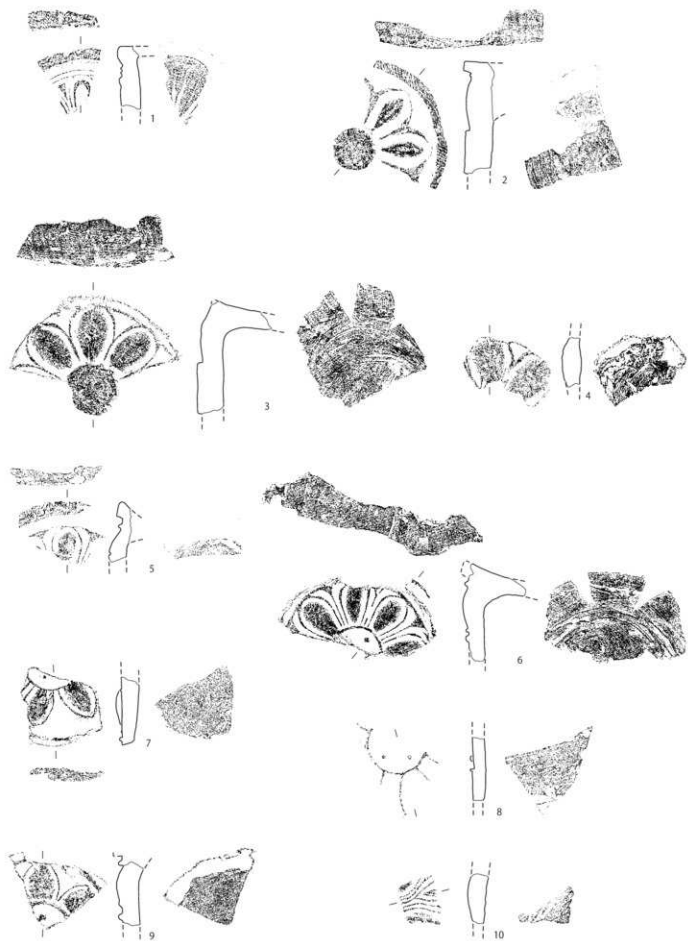
図面35 繪瓦(19) 一堂間地区(金堂・講堂間) 2-



0 1/4 10cm

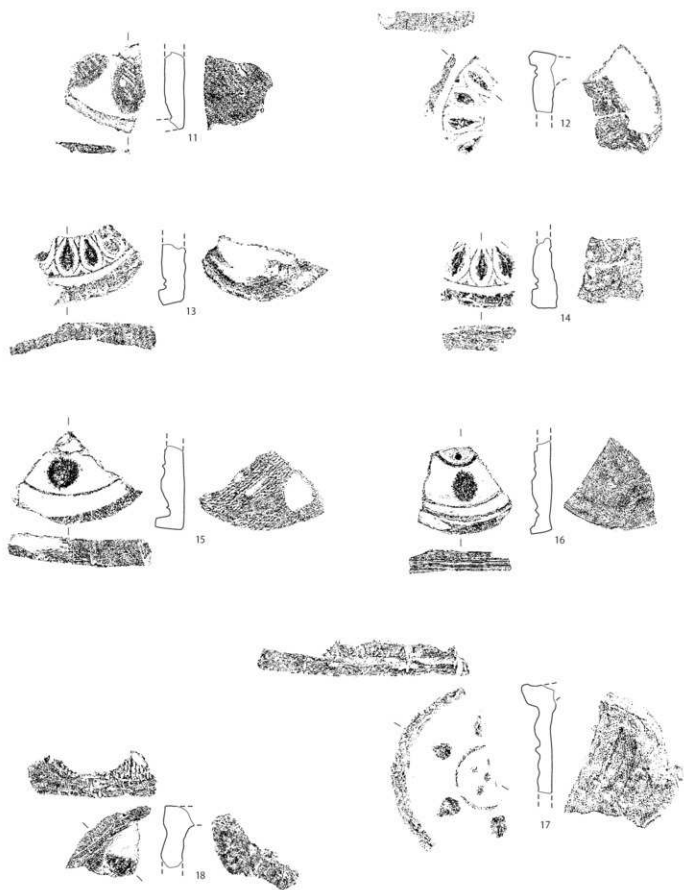


図面37 粗瓦(21) —中門地区1—



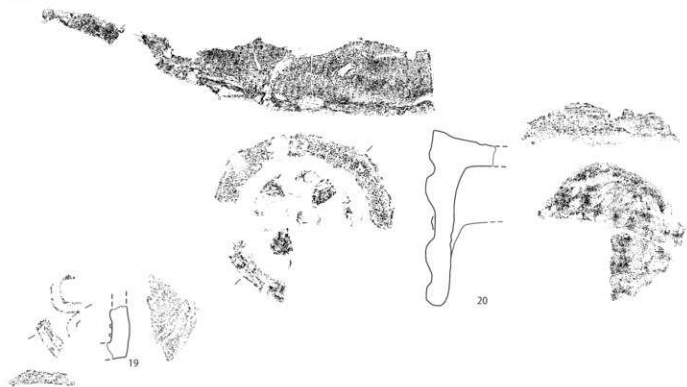
0 [1/4] 10cm

図面38 燈瓦(22) —中門地区2—



0 [1/4] 10cm

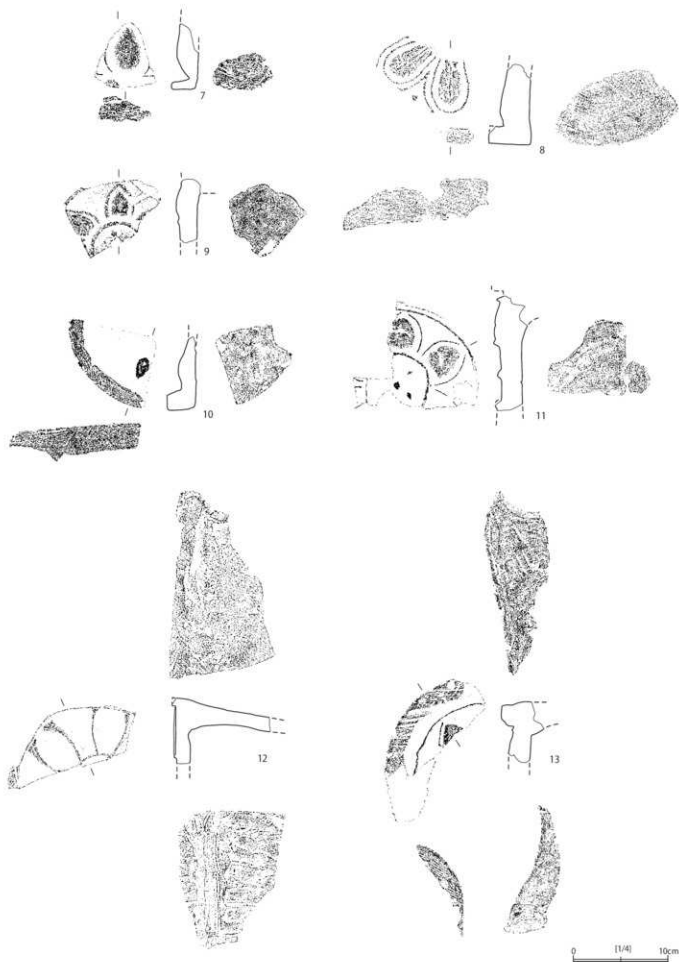
中門地区3



区画南辺1

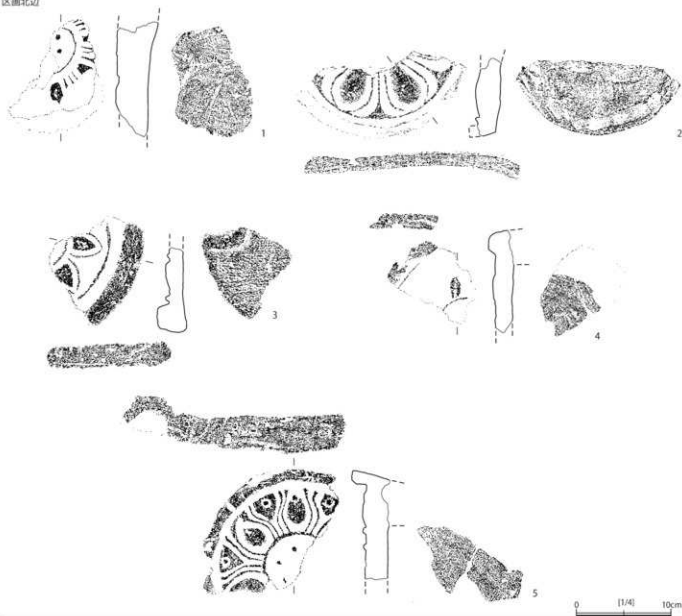


图版40 澄瓦(24) — (加整中柜部区画施股)区画南边2—



图版41 彩瓦(25) — (加蓝中枢部画施设) 区画北边、区画北西 1 —

区画北边



区画北西(1区)



区画北西(2区)

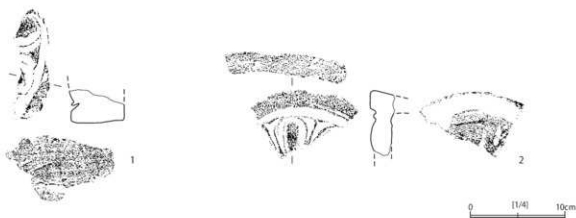
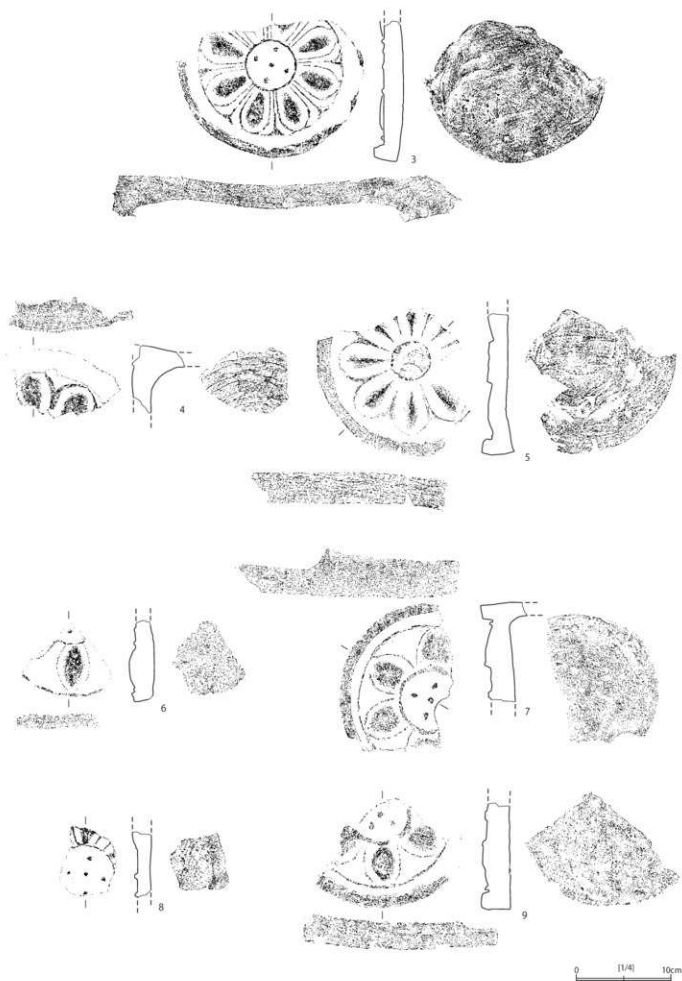


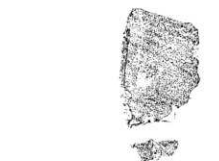
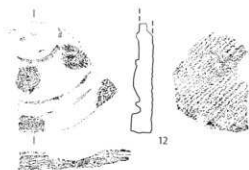
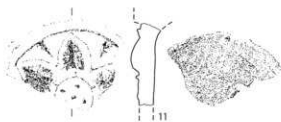
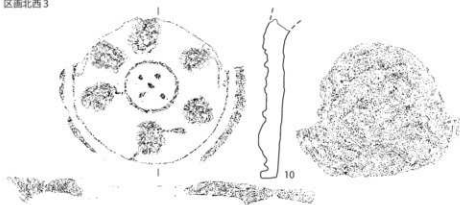
图42 碧瓦(26) — (伽蓝中柱部区画施設)区画北西2—



0 [1/4] 10cm

图版43 橙瓦(27) — (加蓝中枢部区画施設) 区画北西3、区画南西—

区画北西3

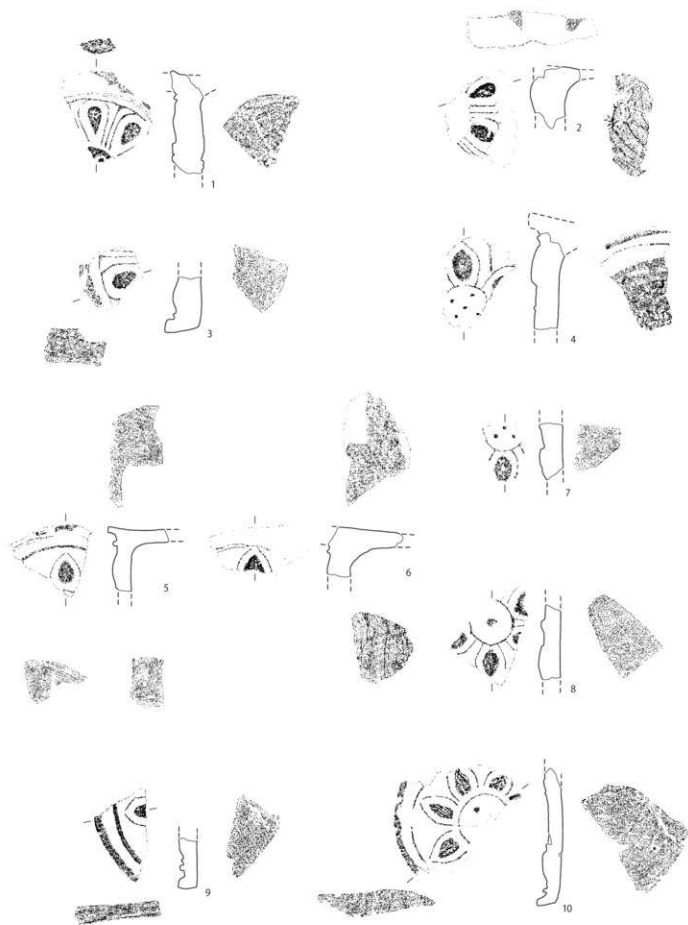


0 [1/4] 10cm

区画南西



0 [1/4] 10cm

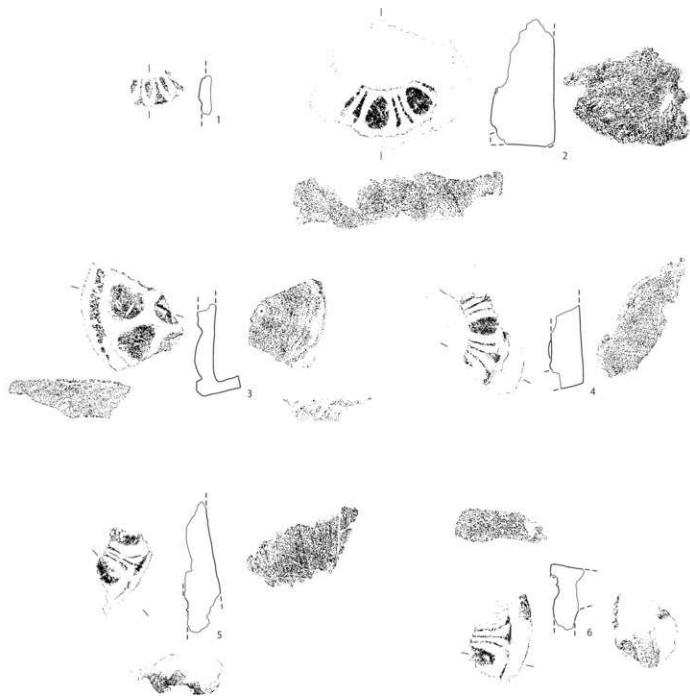


塔跡1地区2

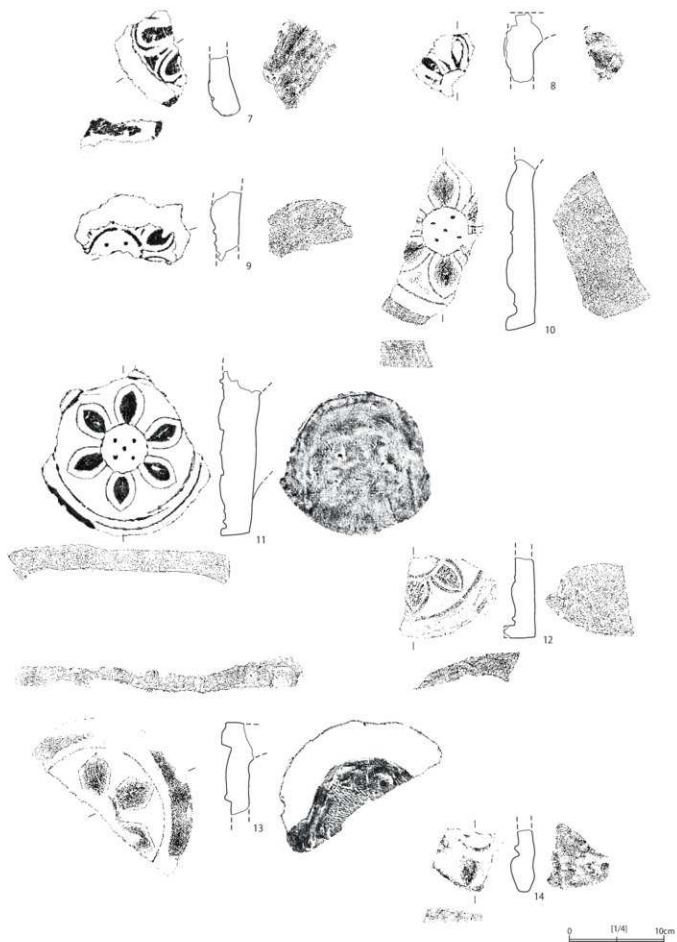


0 [1/4] 10cm

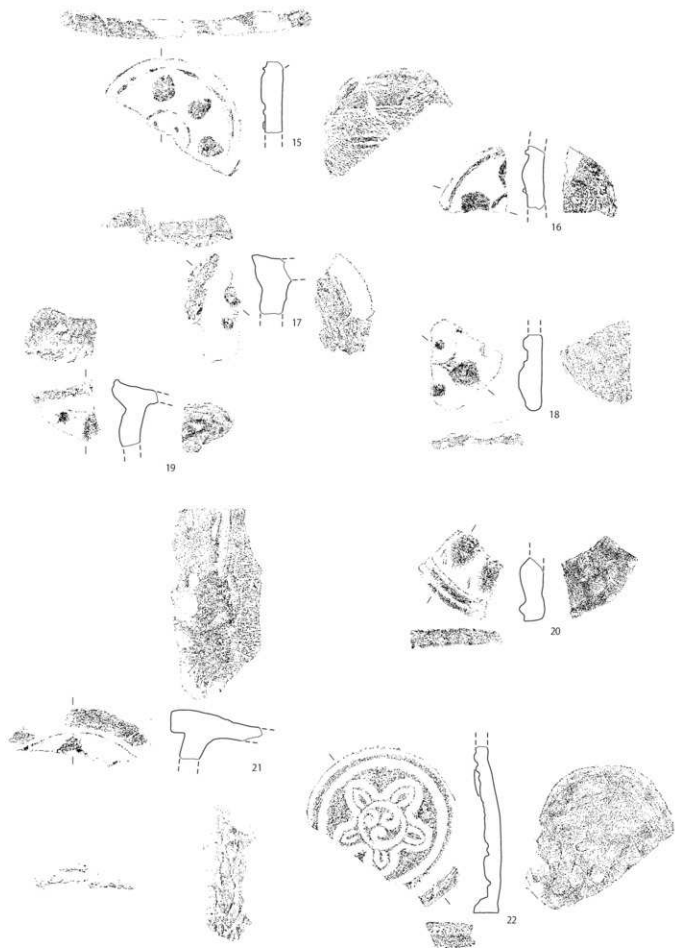
塔跡2地区1



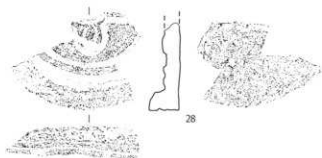
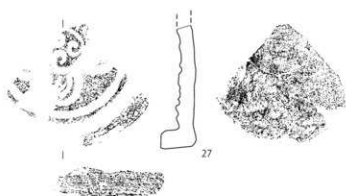
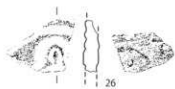
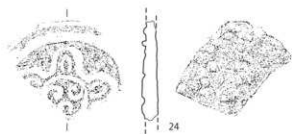
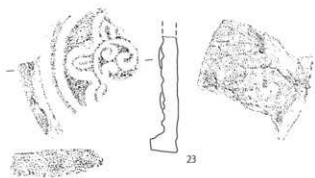
0 [1/4] 10cm



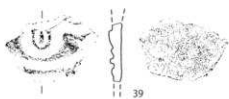
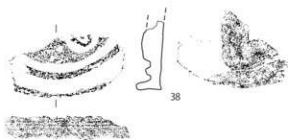
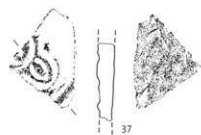
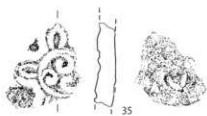
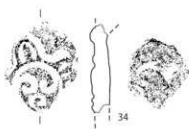
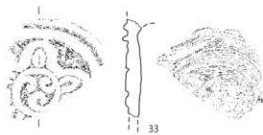
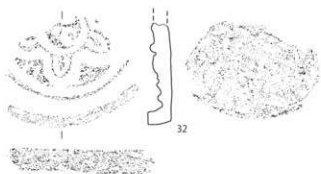
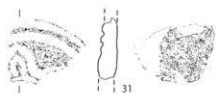
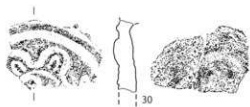
图版47 橙瓦(31) —塔跡2地区3—



0 [1/4] 10cm

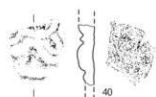


图版49 橙瓦(33) —塔跡2地区5—

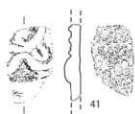


0 [1/4] 10cm

图面50 橙瓦(34) —塔跡2地区6—



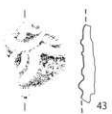
40



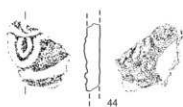
41



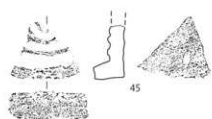
42



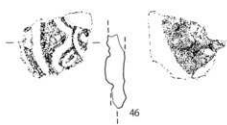
43



44



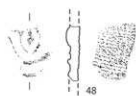
45



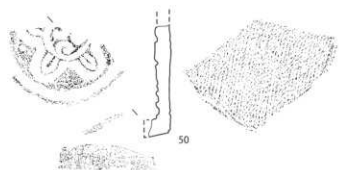
46



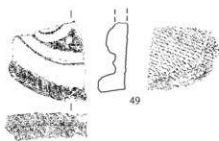
47



48



50



49

0 [1/4] 10cm



图52 字瓦(1) —金堂地区1—

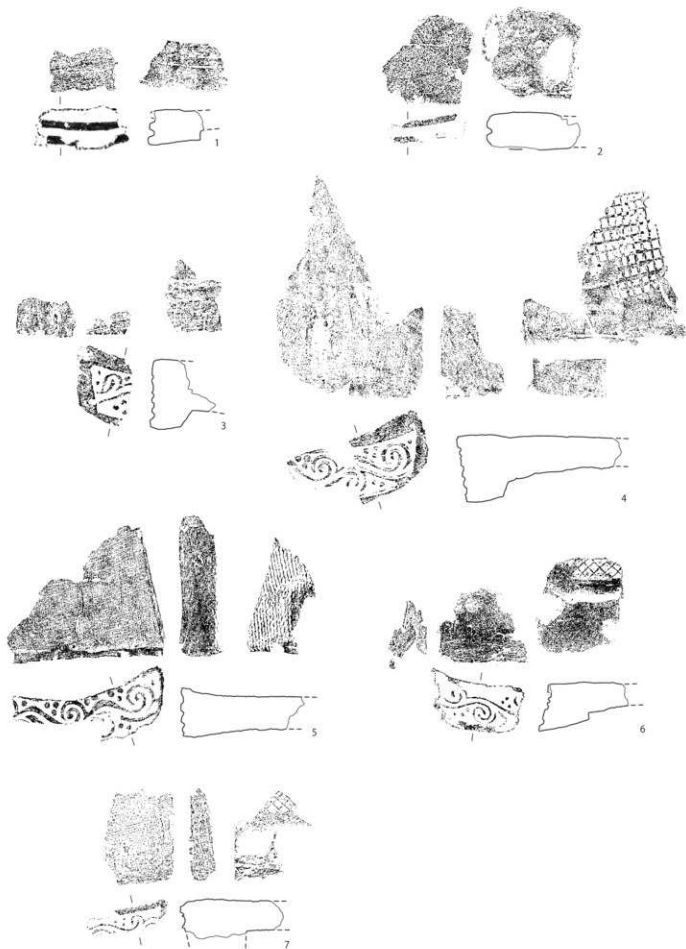


图53 字瓦(2) —金堂地区2—

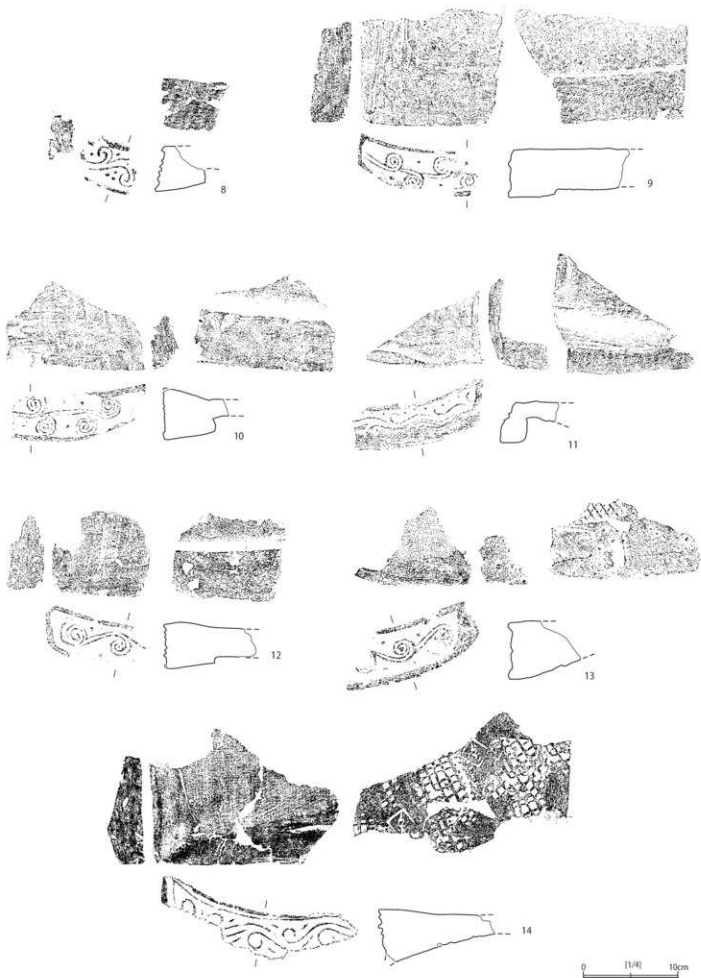


图54 字瓦(3) —金堂地区3—

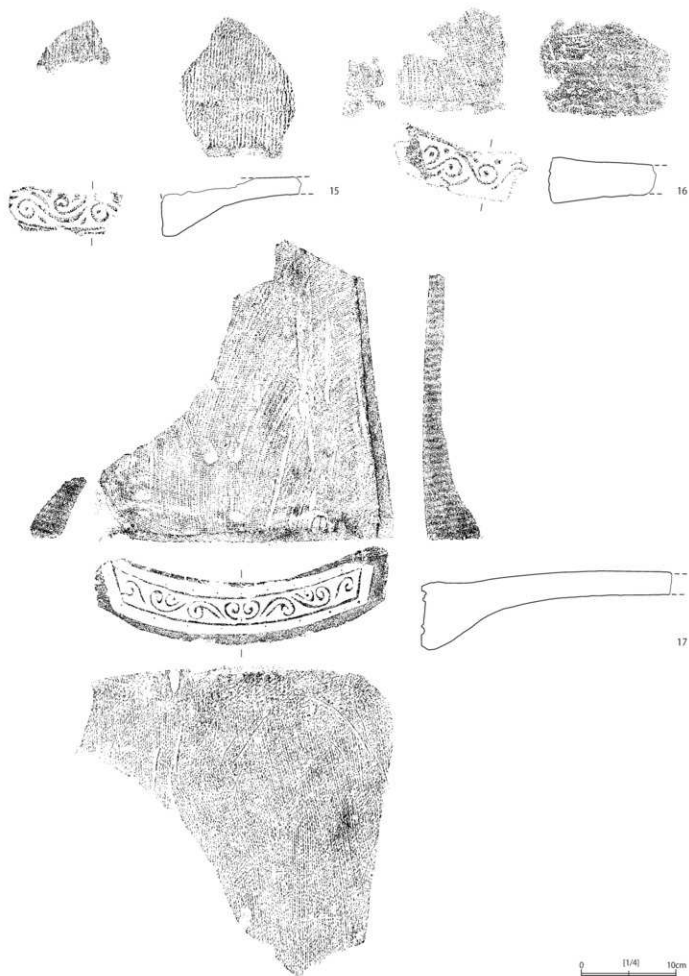
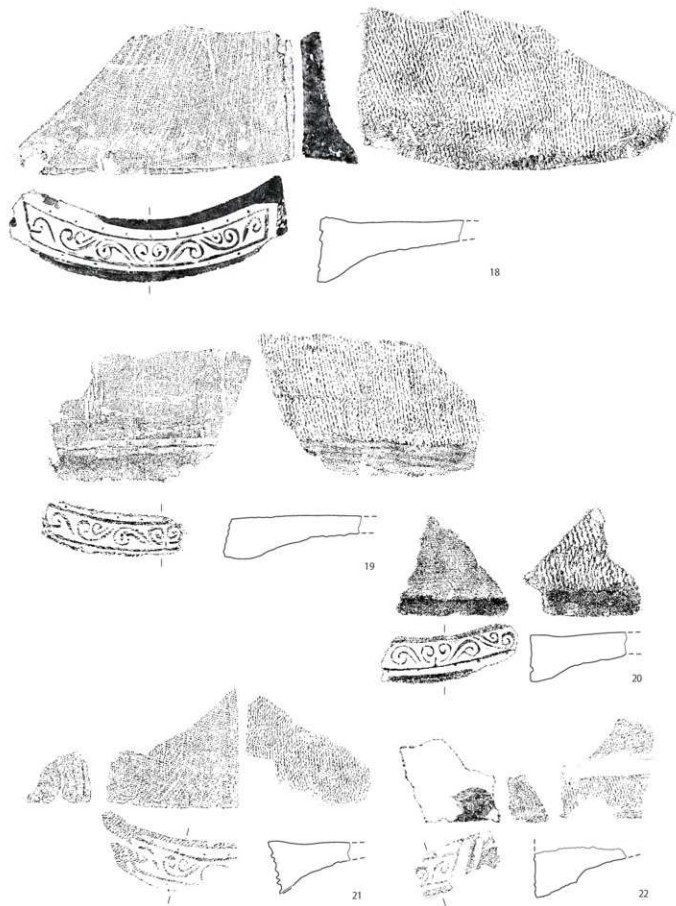
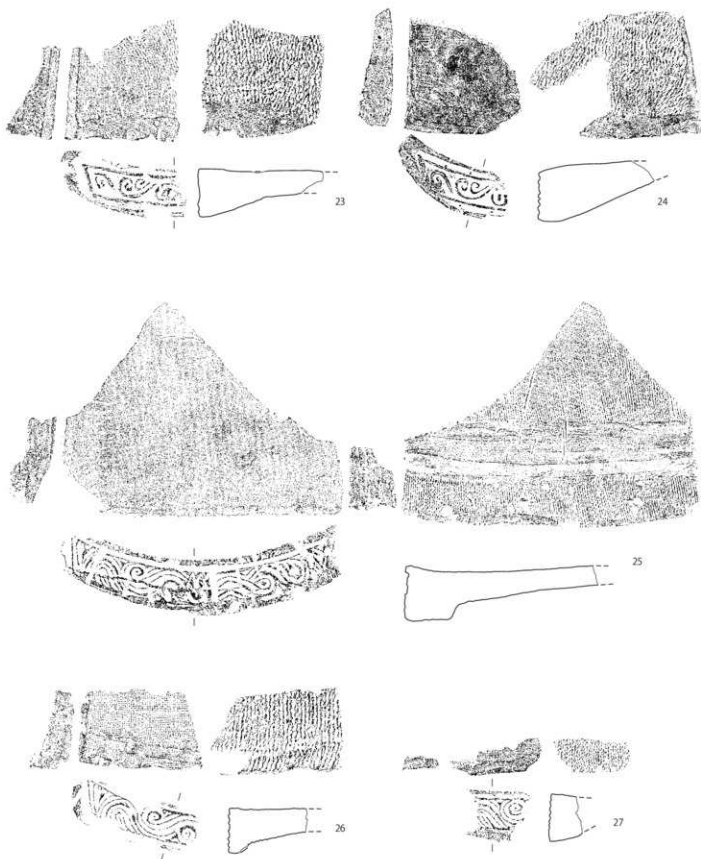


图55 字瓦(4) —金堂地区4—



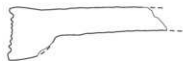
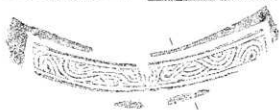
0 [1/4] 10cm

图56 字瓦(5) —金堂地区5—

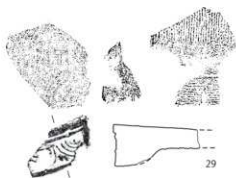


0 [1/4] 10cm

图57 字瓦(6) —金堂地区6—



28



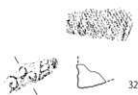
29



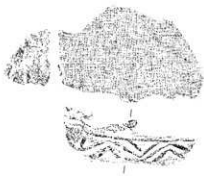
30



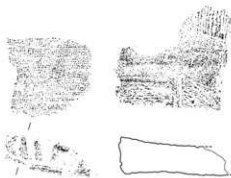
31



32



33



34



35

0 [1/4] 10cm

图58 字瓦(7) —金堂地区7—

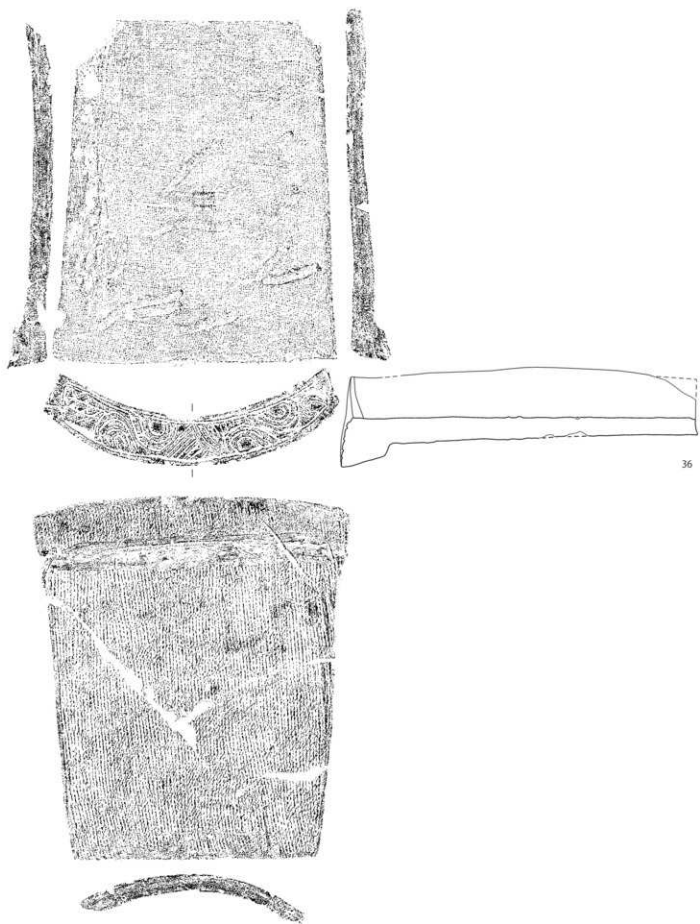
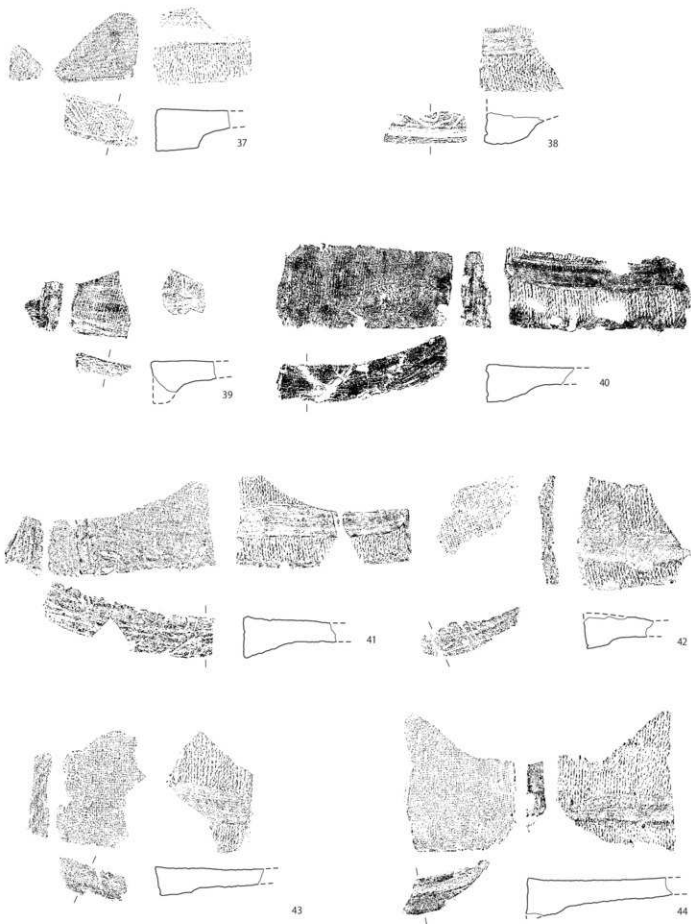
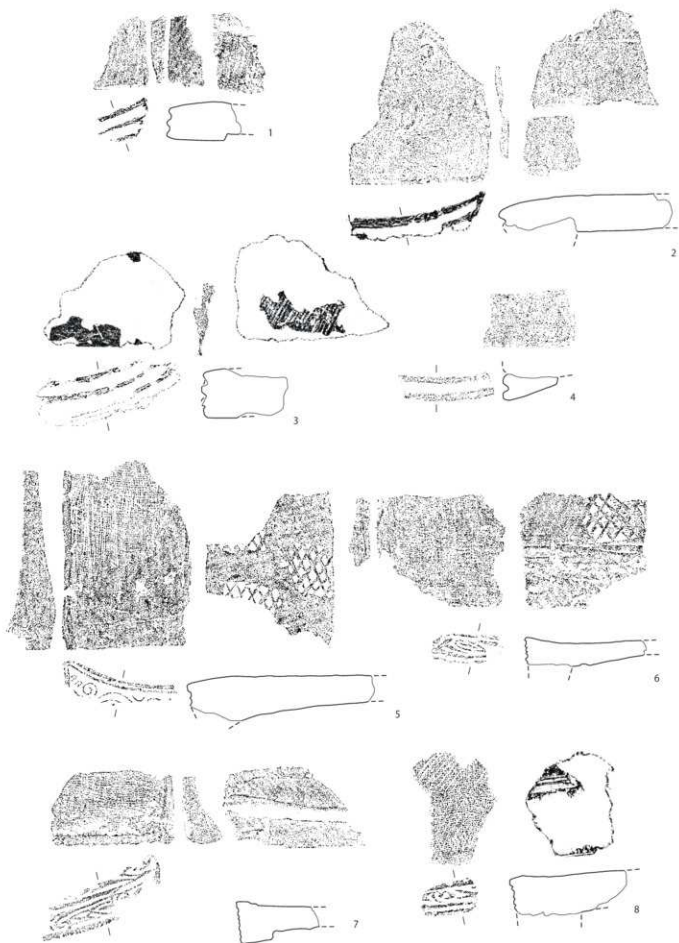


图59 字瓦(8) —金堂地区8—



0 [1/4] 10cm

图版60 字瓦(9) — 讲堂地区1—



0 [1/4] 10cm

图61 字瓦(10) — 讲堂地区2—

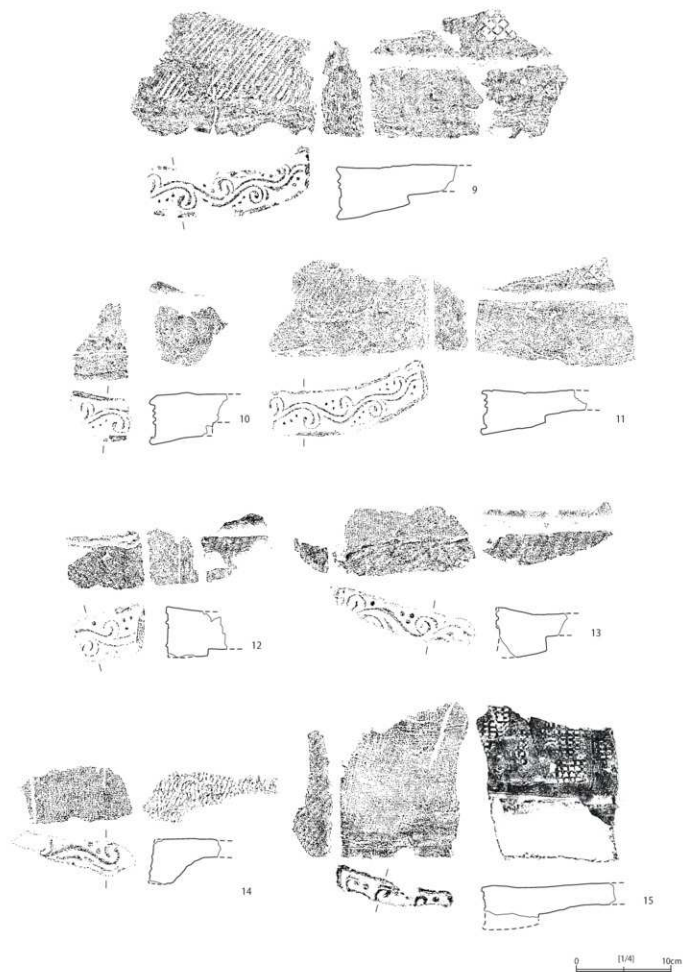
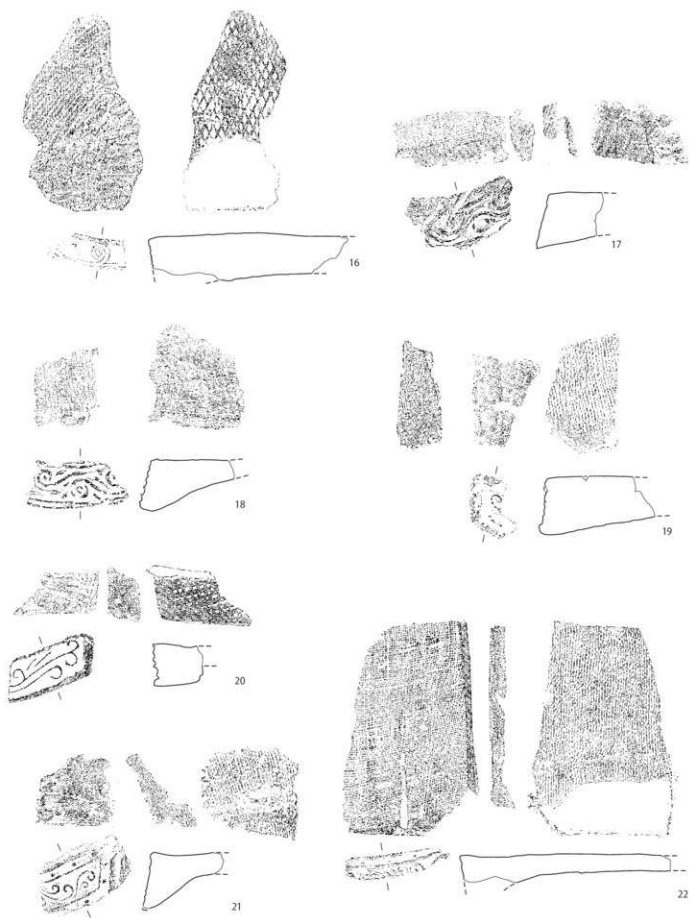
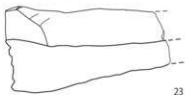
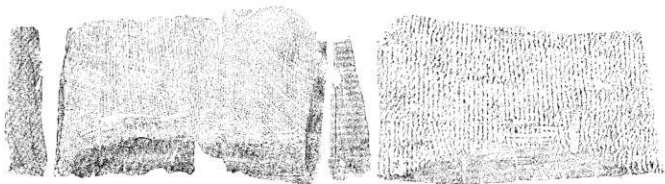


图62 字瓦(11) — 講堂地区3—

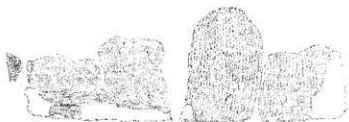


0 [1/4] 10cm

图63 字瓦(12) — 讲堂地区4 —



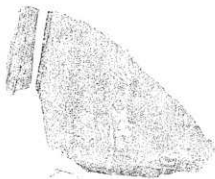
23



24



25



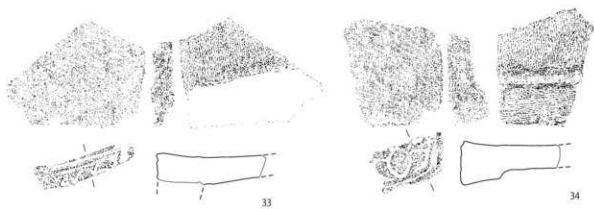
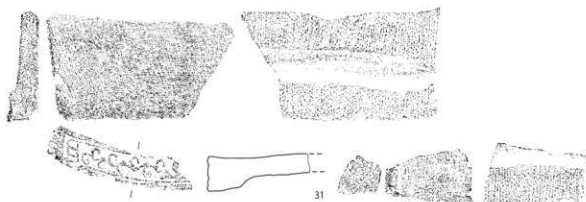
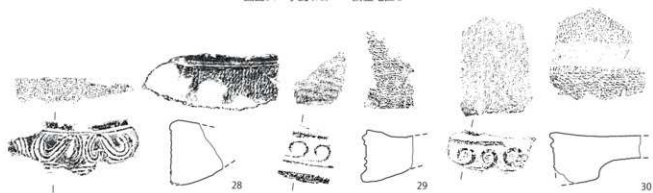
26



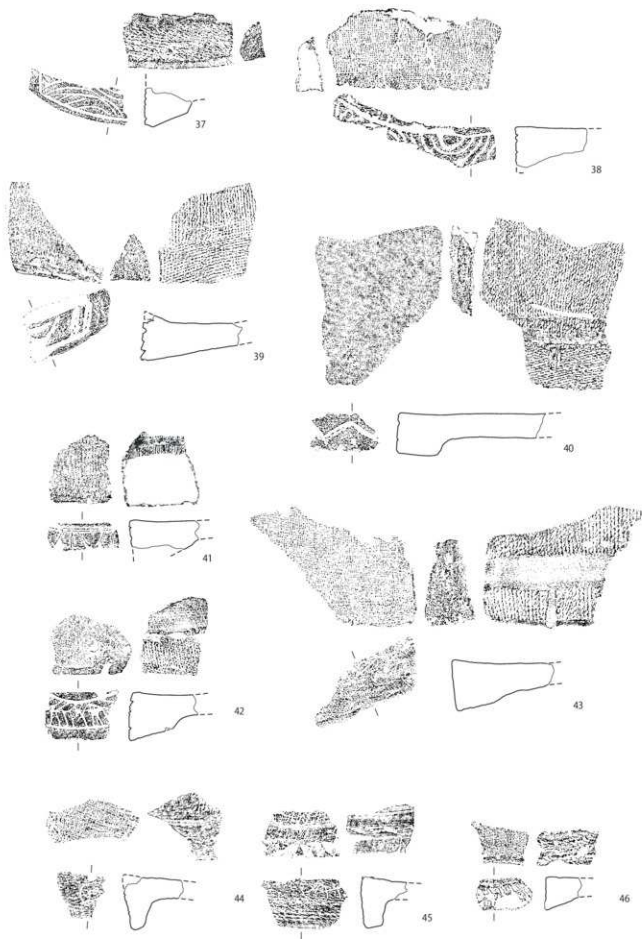
27

0 [1/4] 10cm

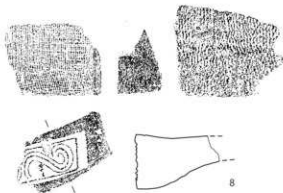
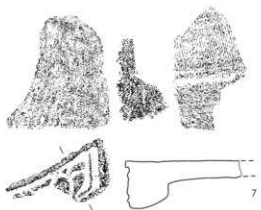
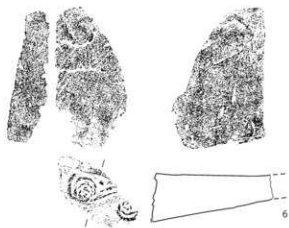
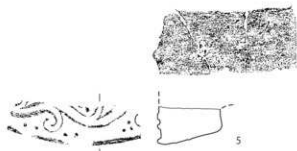
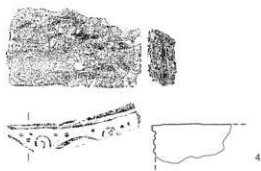
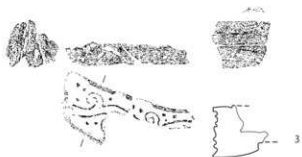
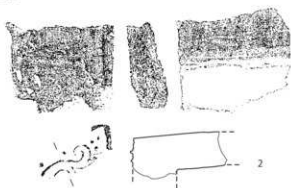
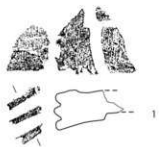
図面64 字瓦(13) —講堂地区5—



0 [1/4] 10cm

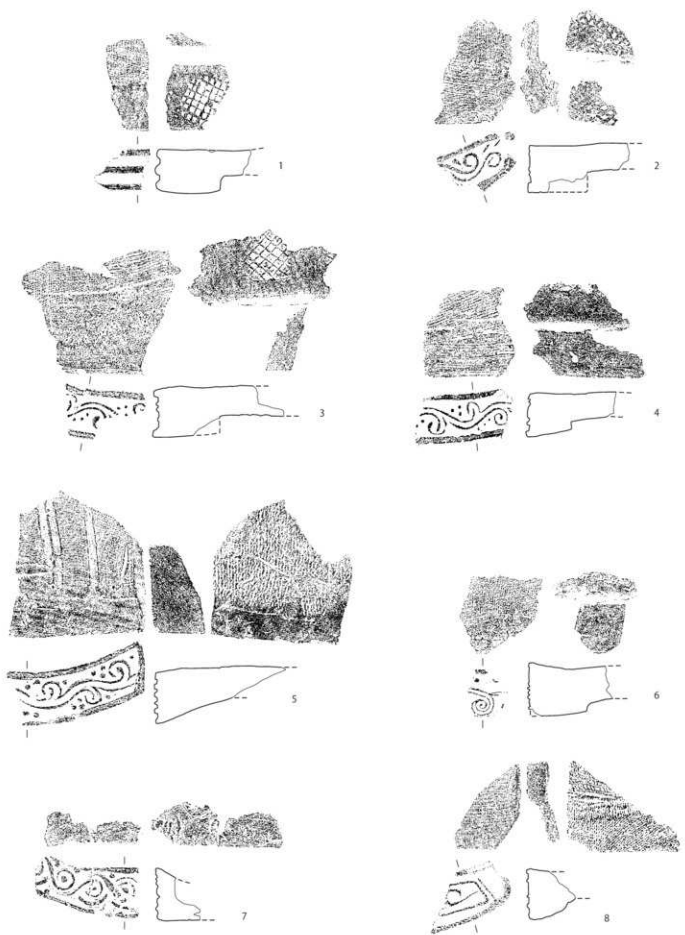


0 [1/4] 10cm



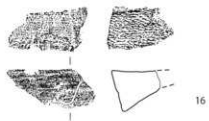
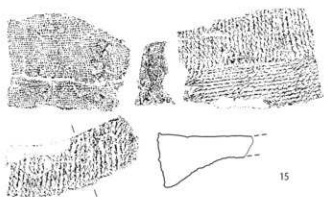
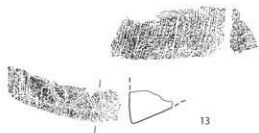
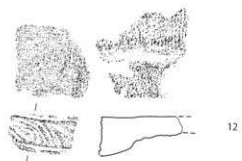
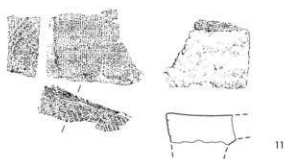
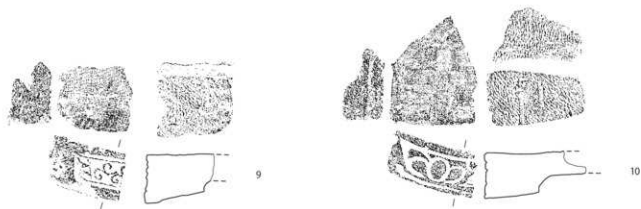
0 [1/4] 10cm

図面67 字瓦(16) 一堂間地区(金堂・講堂間) 1-



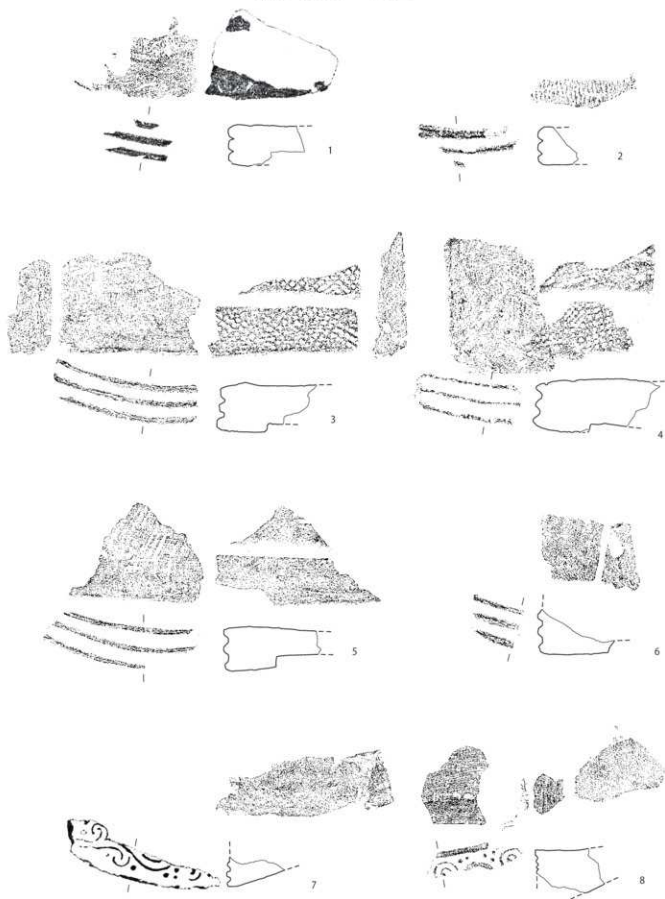
0 [1/4] 10cm

図面68 字瓦(17) 一堂間地区(金堂・講堂間) 2-



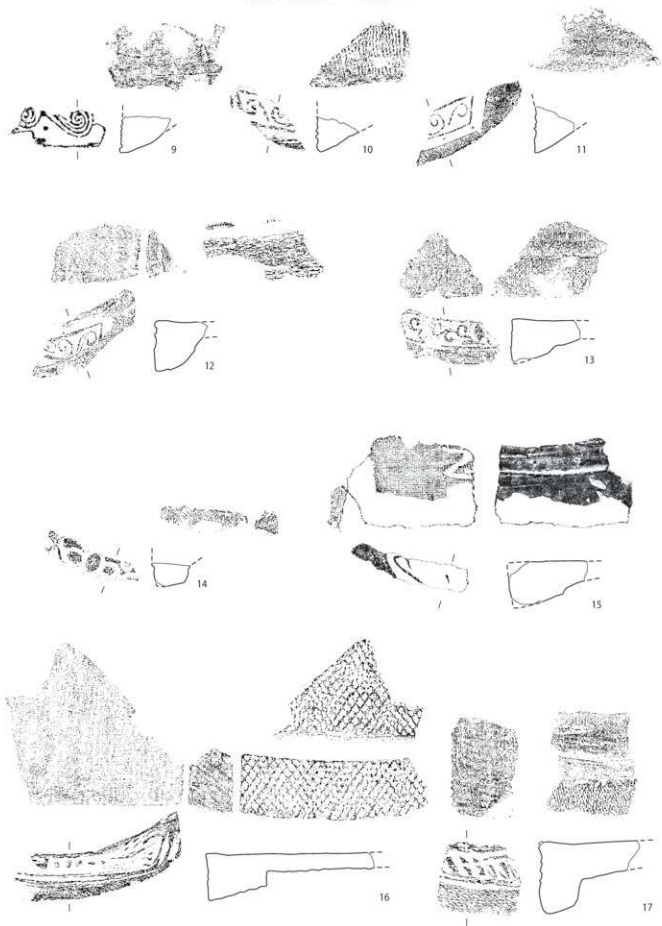
0 [1/4] 10cm

図面69 宇瓦(18) 一中門地区1-



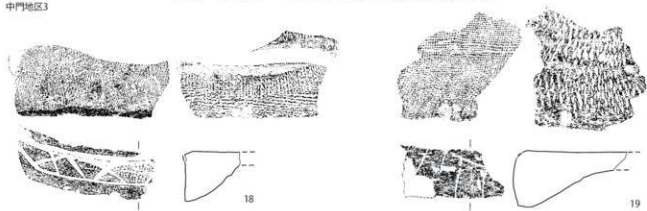
0 [1/4] 10cm

図面70 字瓦(19) 一 中門地区 2 -



図面71 宇瓦(20) 一 中門地区3、(伽藍中庭部区画施設)区画南辺1 -

中門地区3



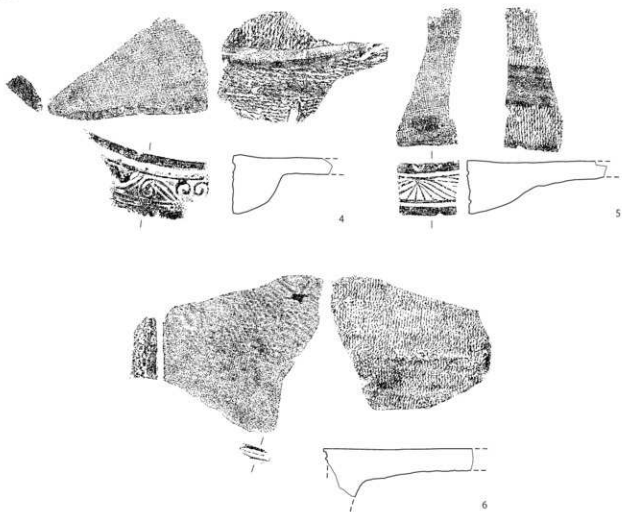
0 [1/4] 10cm

区画南辺1

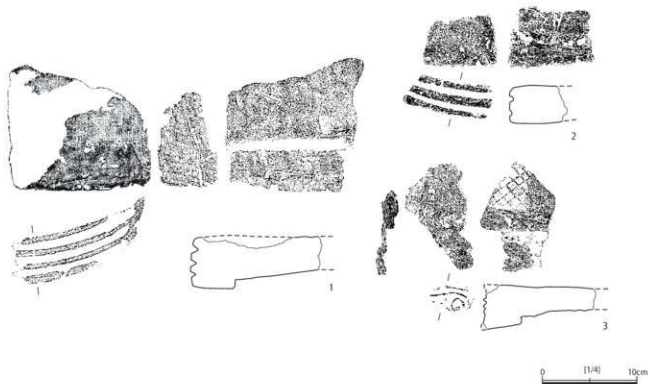


图版72 宇瓦(21) — (仰甃中松部区画施段)区画南边2、区画北边1—

区画南边2

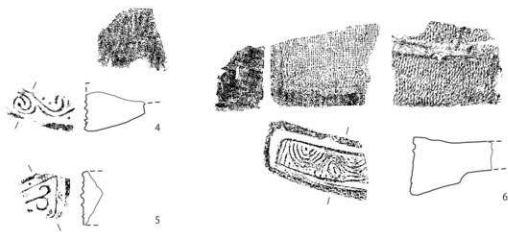


区画北边1

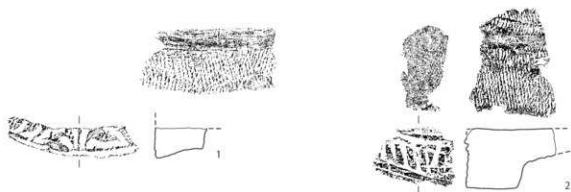


图版73 宇瓦(22) — (加整中部区面施段)区面北边2、区面北西1—

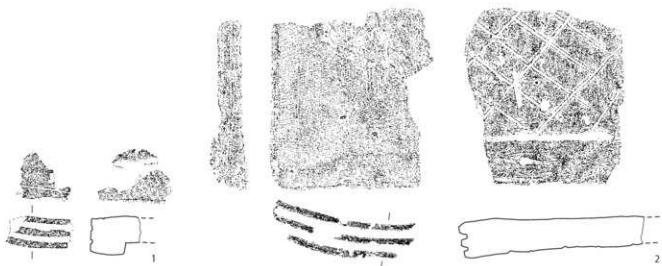
区面北边2



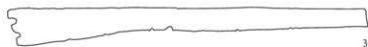
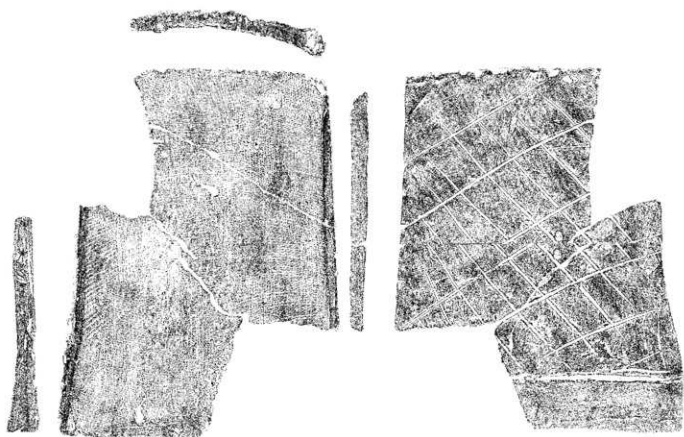
区面北西1(1区)



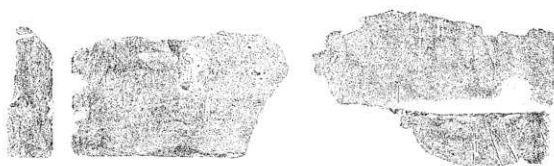
区面北西1(2区)



图版74 宇瓦(23) — (加蓋中樞部區施設)區画北西2—



3



4

0 [1/4] 10cm

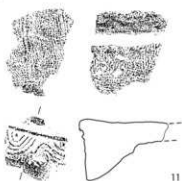
图版75 宇瓦(24) — (加蓋中樞部區畫施設)區畫北西3—



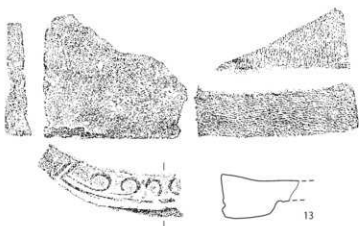
0 [1/4] 10cm

图版76 宇瓦(25) — (伽藍中柙部区画施設) 区画北西4、区画南西—

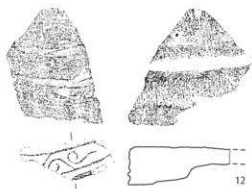
区画北西4



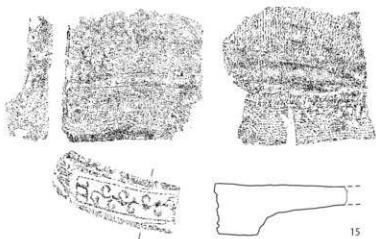
11



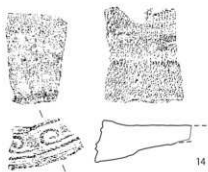
13



12



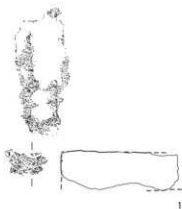
15



14



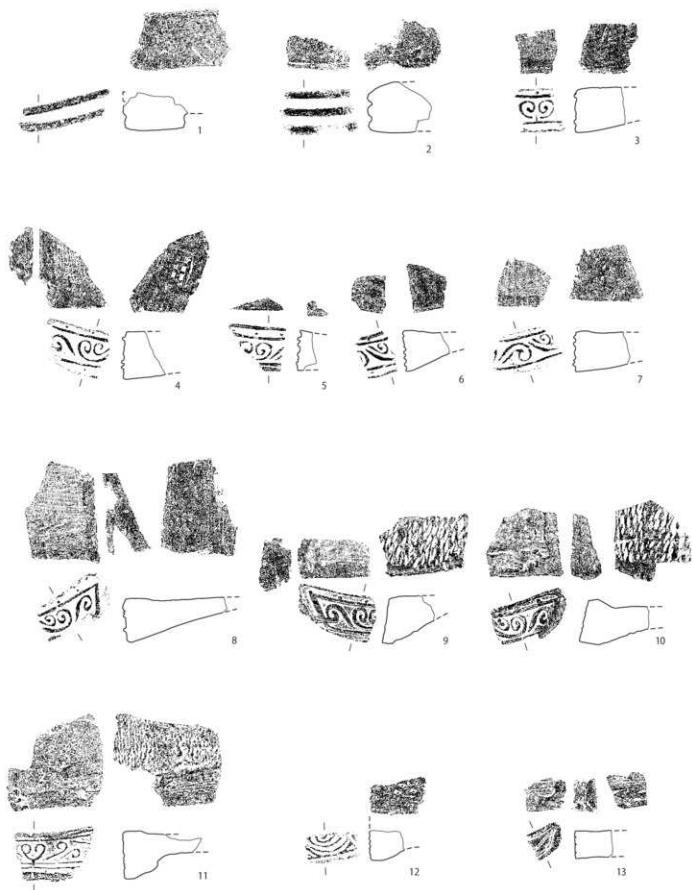
区画南西



1



图77 字瓦(26) —塔跡1地区—

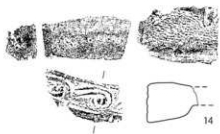
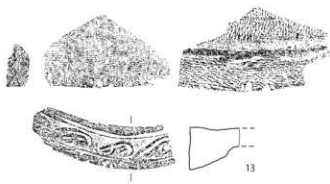
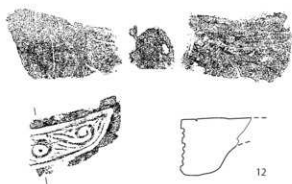
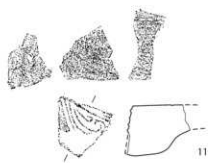
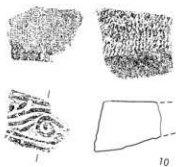
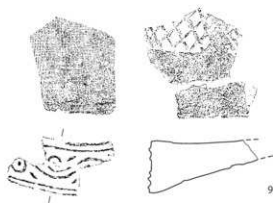
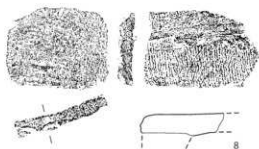


0 [1/4] 10cm

图面78 宇瓦(27) —塔跡2地区1—

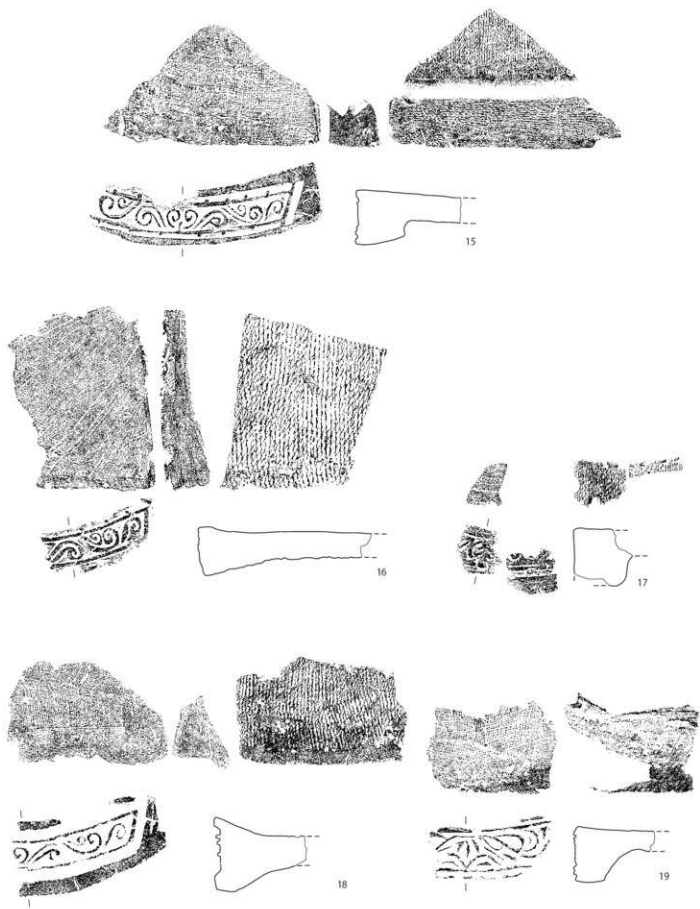


图979 宇瓦(28) —塔跡2地区2—



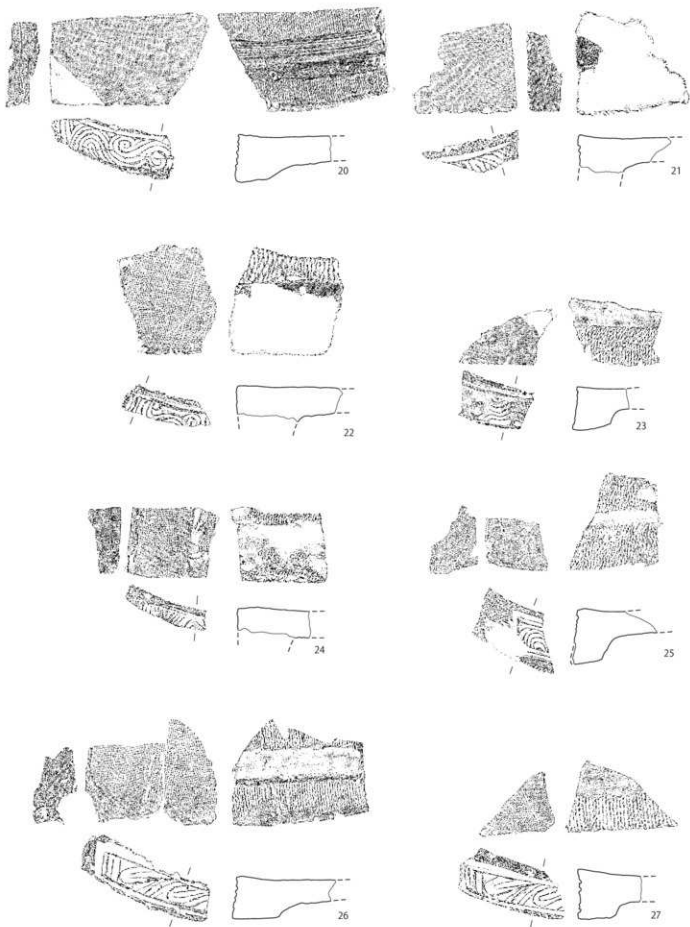
0 [1/4] 10cm

图80 宇瓦(29) —塔跡2地区3—

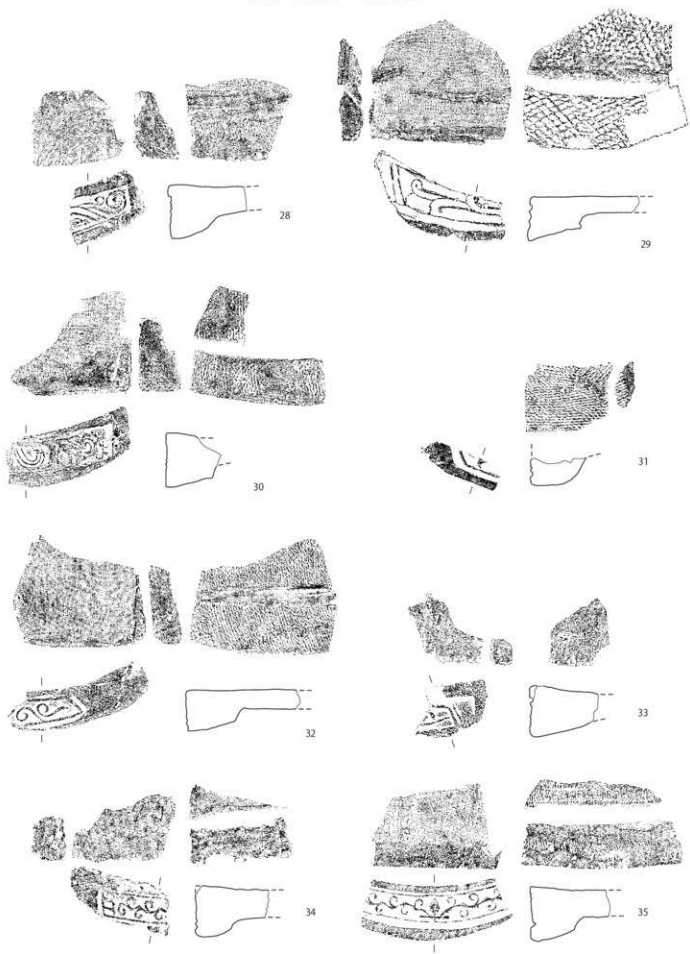


0 [1/4] 10cm

图版81 宇瓦(30) —塔跡2地区4—

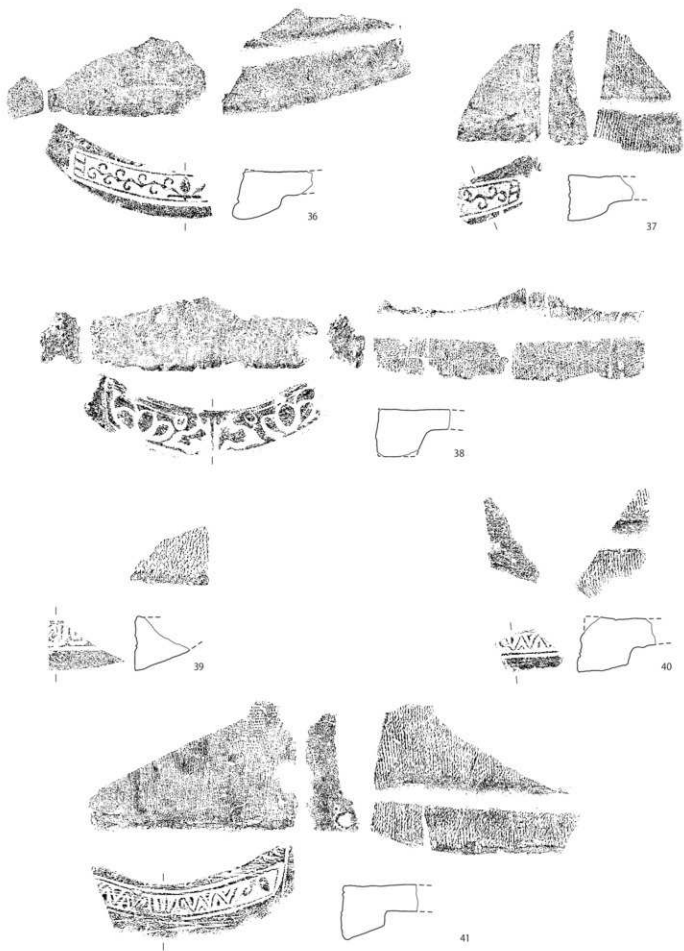


0 [1/4] 10cm

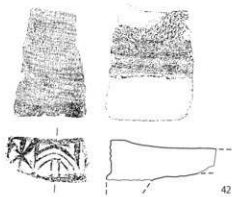


0 [1/4] 10cm

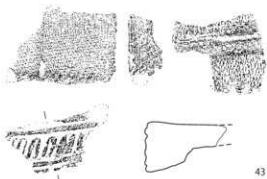
图版83 宇瓦(32) —塔跡2地区6—



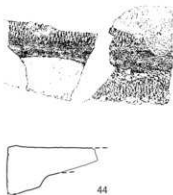
图版84 宇瓦(33) —塔跡2地区7—



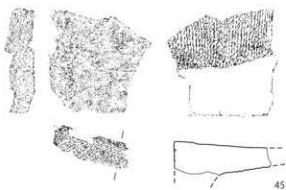
42



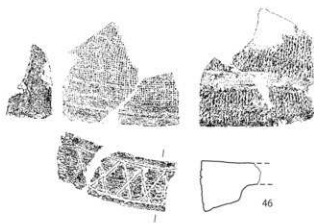
43



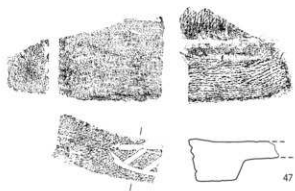
44



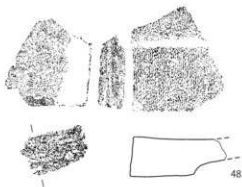
45



46



47



48

0 [1/4] 10cm

塔跡2周辺地区



0 [1/4] 10cm

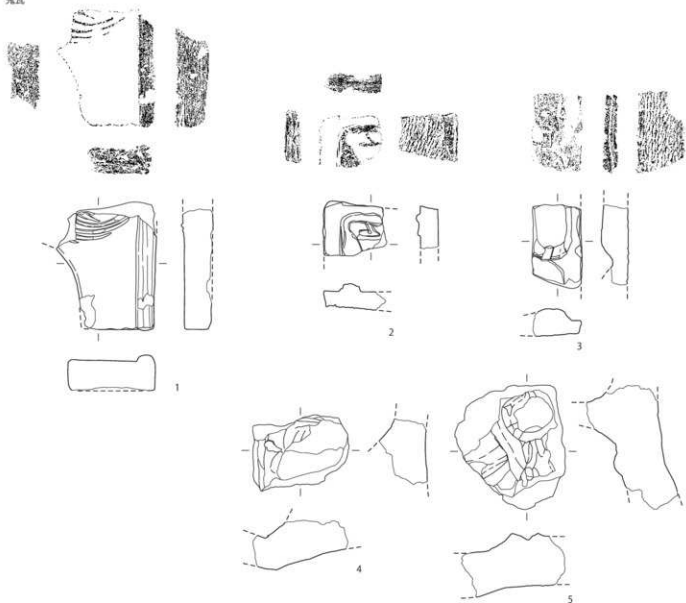
南門地区



0 [1/4] 10cm

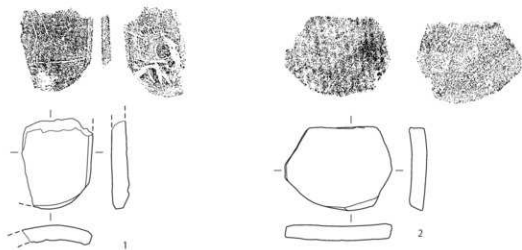
図面86 鬼瓦、面戸瓦

鬼瓦



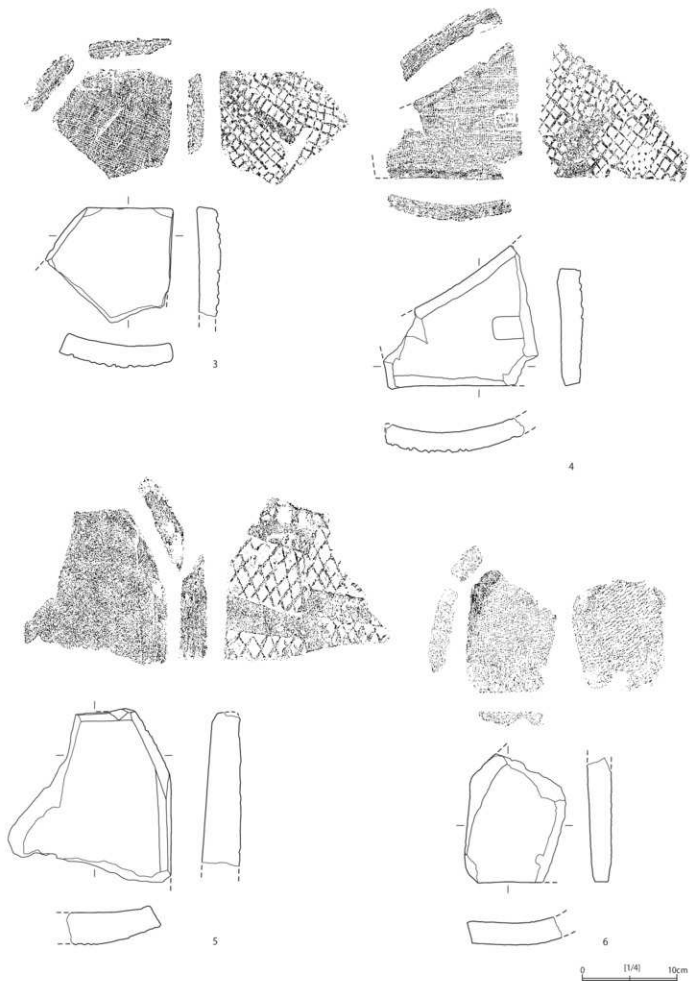
0 [1/4] 10cm

面戸瓦



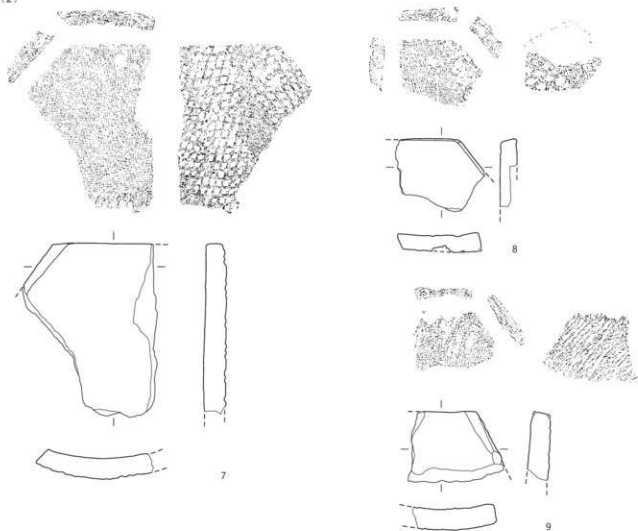
0 [1/4] 10cm

図面87 薄切瓦(1) 一金堂地区、講堂地区、中門地区1-



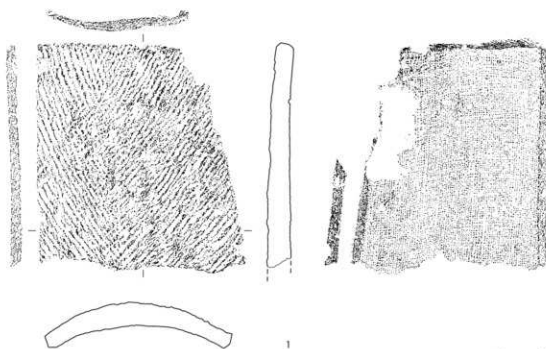
図面88 隅切瓦(2) —中門地区2—、契斗瓦(1) —講堂地区—

隅切瓦(2)



0 [1/4] 10cm

契斗瓦(1)



0 [1/4] 10cm

図面89 梨斗瓦(2) —講堂地区、鐘樓地区、中門地区—

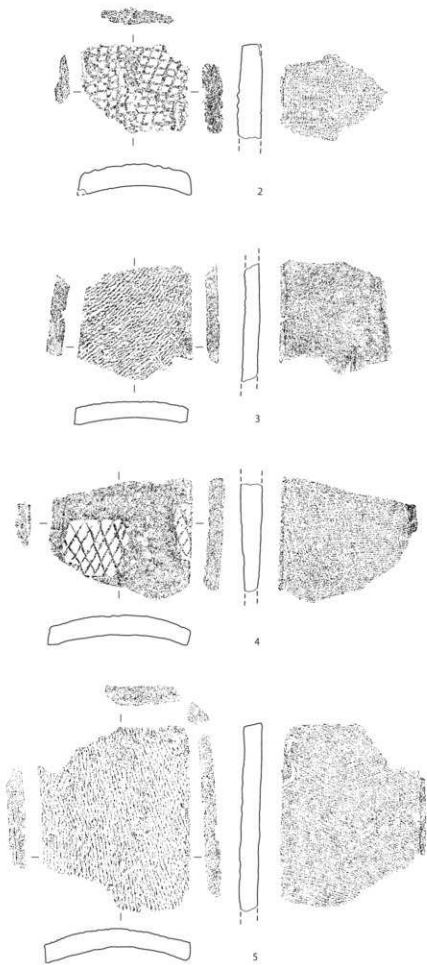
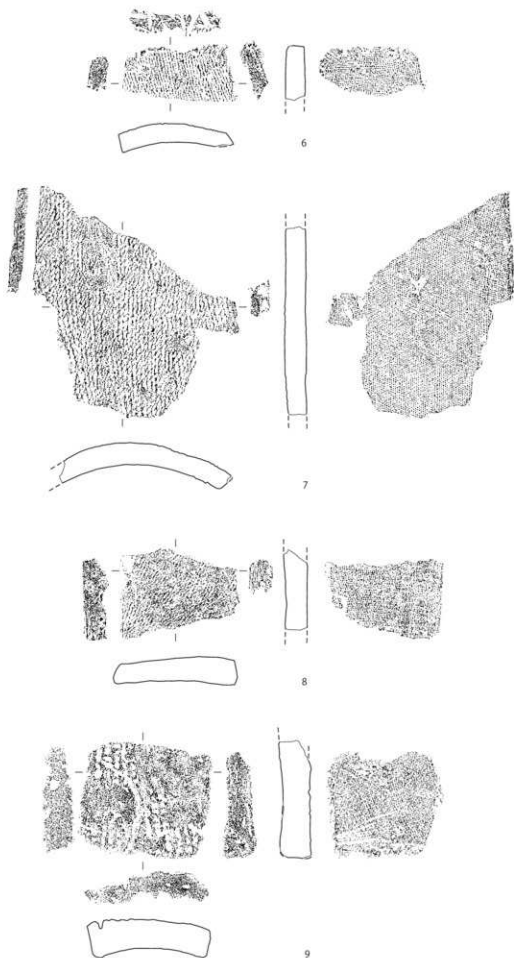
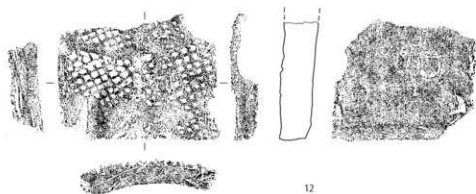
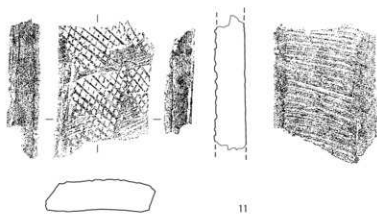
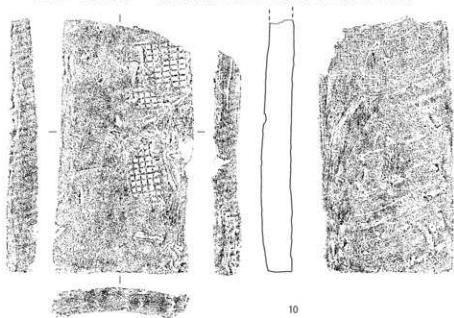


图90 鬲斗瓦(3) —中門地区、(完整中柙部區画施設)区画南边、区画北西1—



0 [1/4] 10cm

图91 鬲斗瓦(4) — (加整中柃部区画施脱) 区画北西2、区画南西、区画南东—



0 [1/4] 10cm

图92 男瓦(1) —金堂地区1—

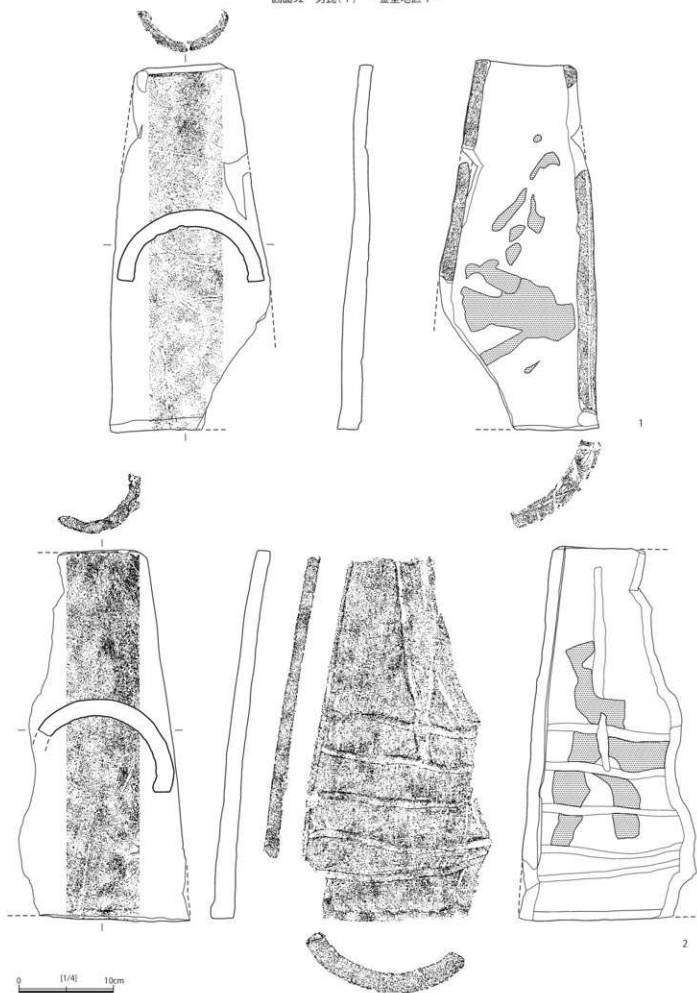


图93 男瓦(2) —金堂地区2—

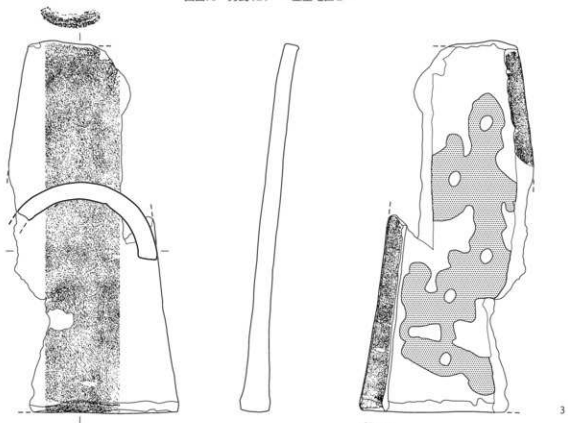
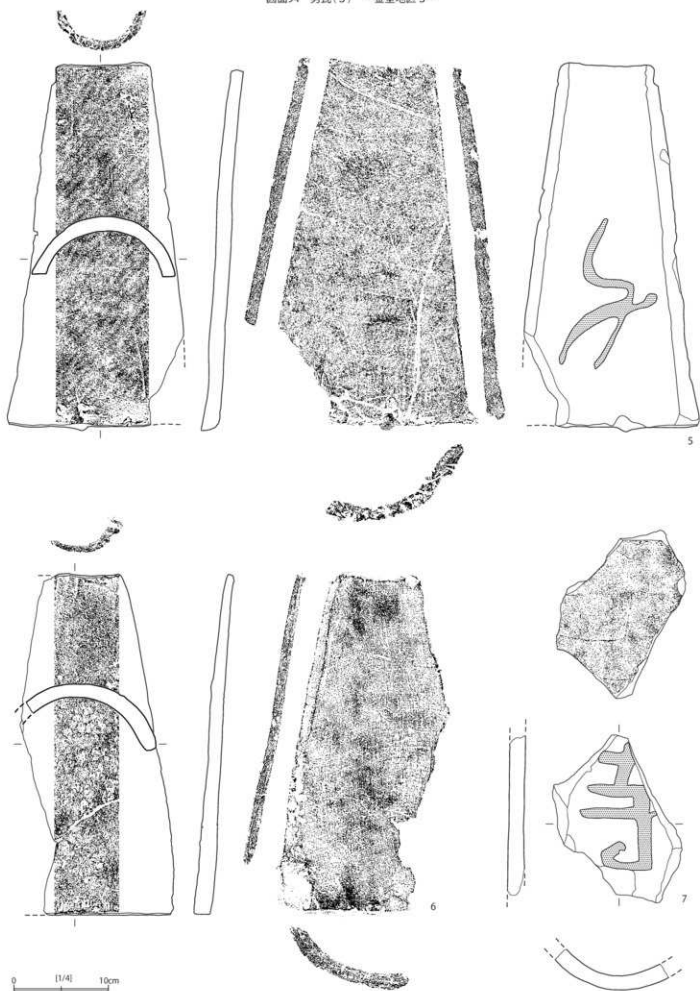
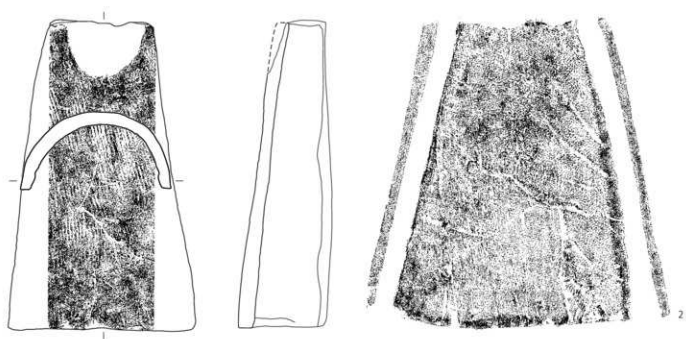
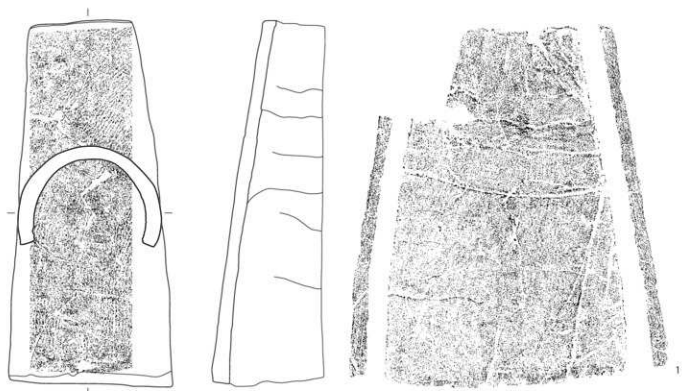
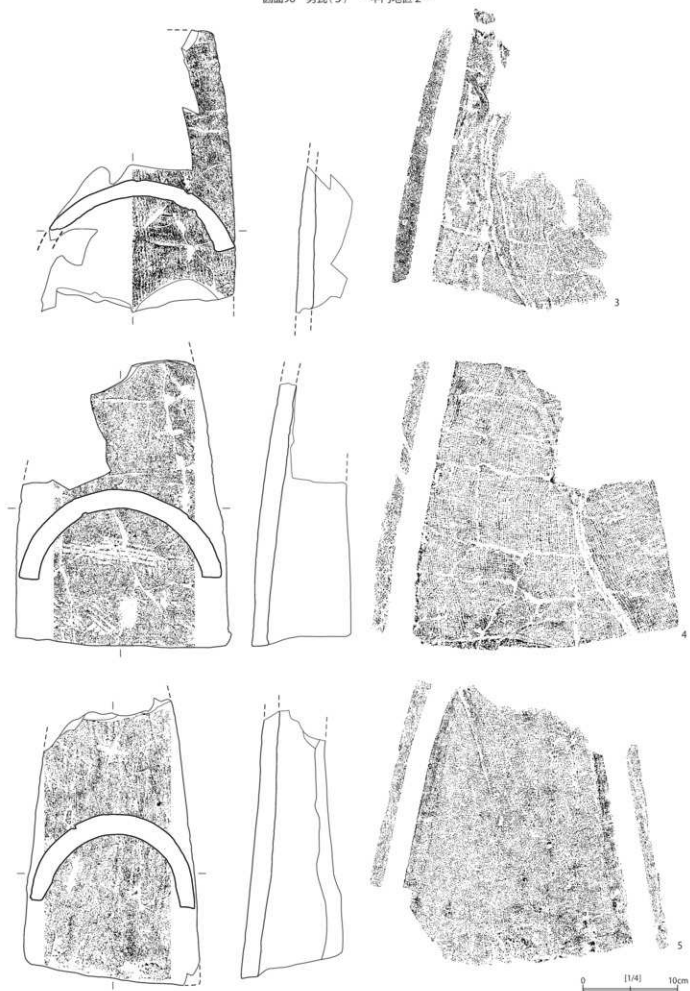


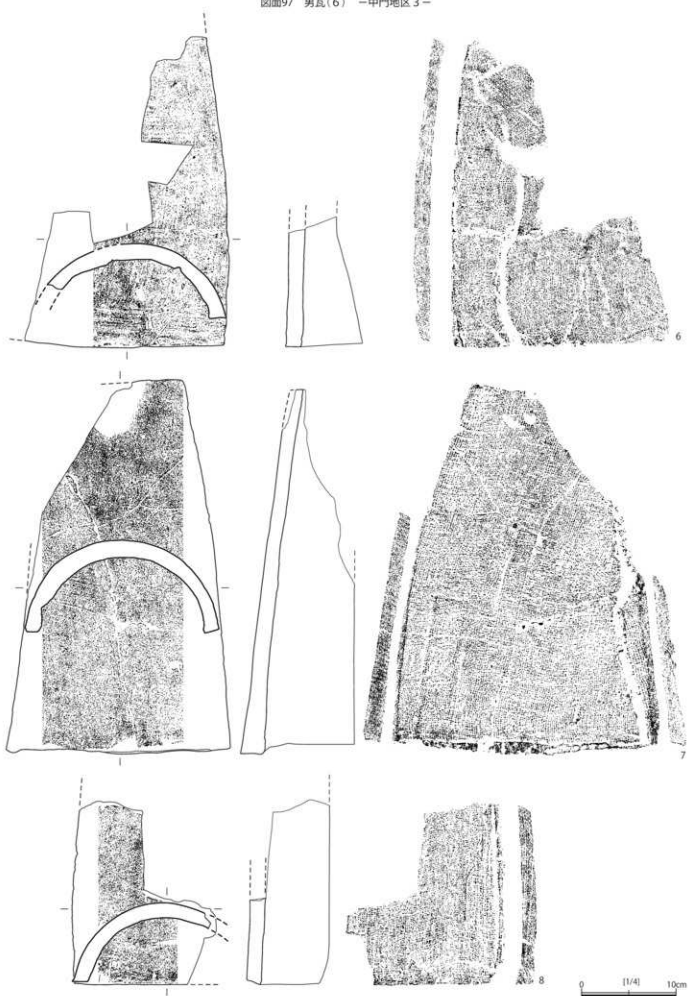
图94 男瓦(3) —金堂地区3—



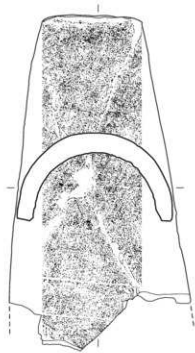




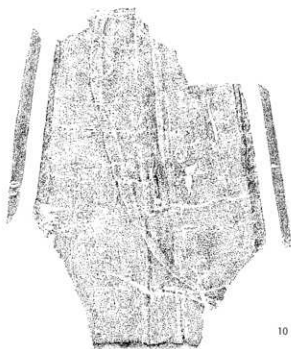
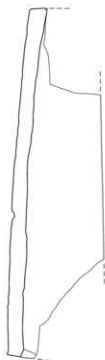
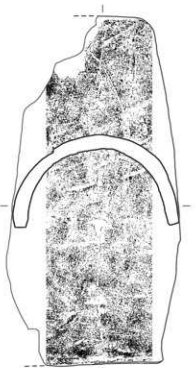
図面97 男瓦(6) 一中門地区3-



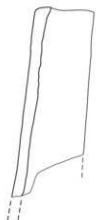
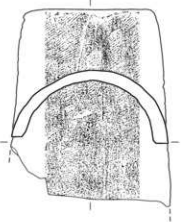
図面98 男瓦(7) -中門地区4-



9



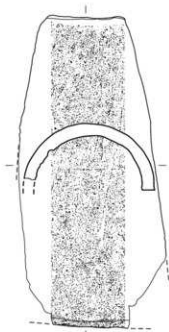
10



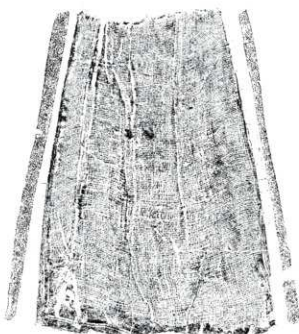
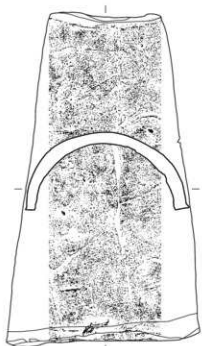
11

0 [1/4] 10cm

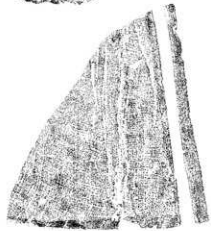
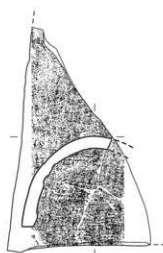
図面99 男瓦(8) —中門地区5—



12



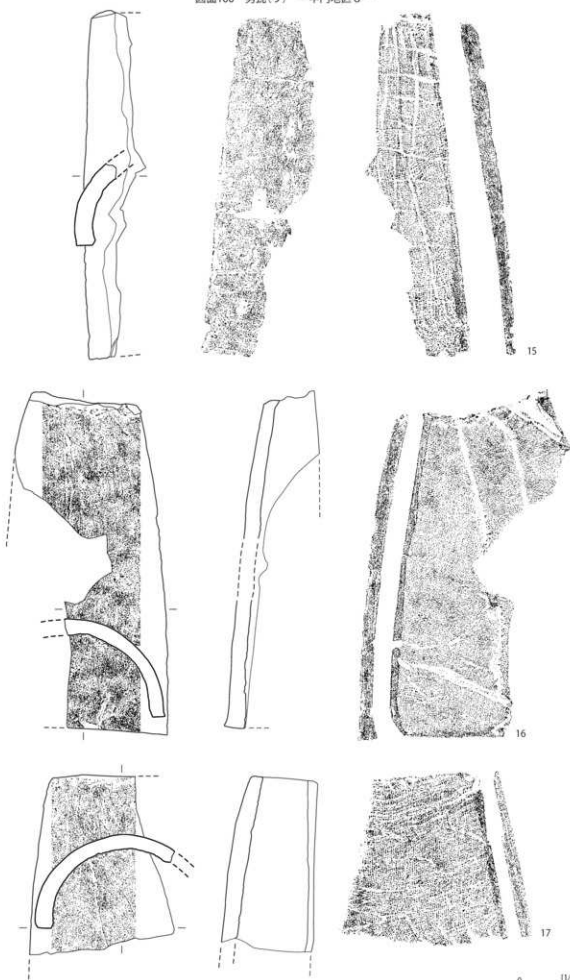
13



14

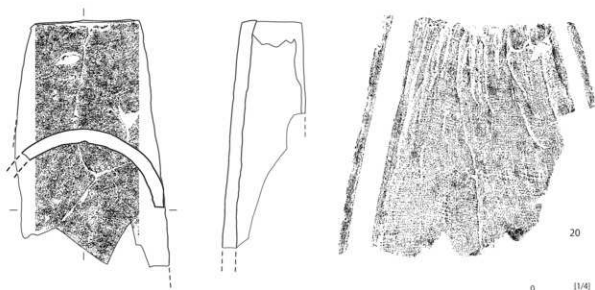
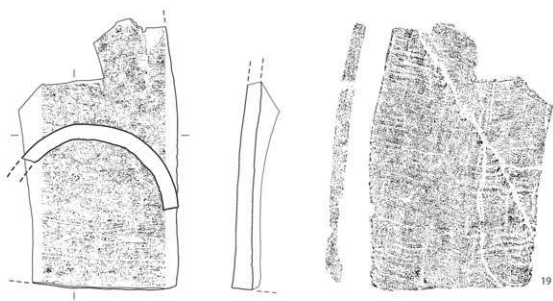
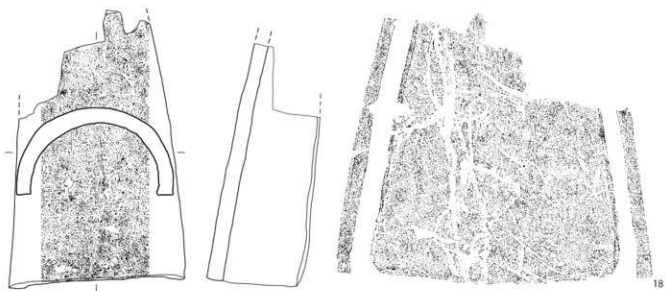
0 [1/4] 10cm

図面100 男瓦(9) -中門地区6-

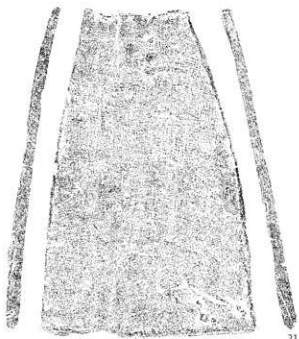
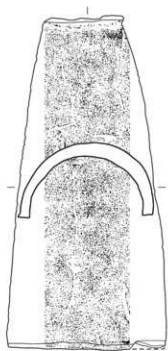


0 [1/4] 10cm

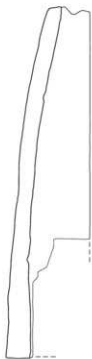
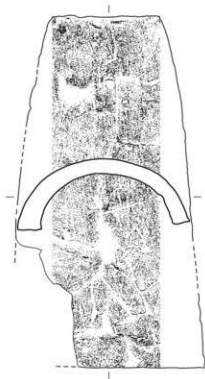
図面101 男瓦(10) 一中門地区7一



0 11/4 10cm

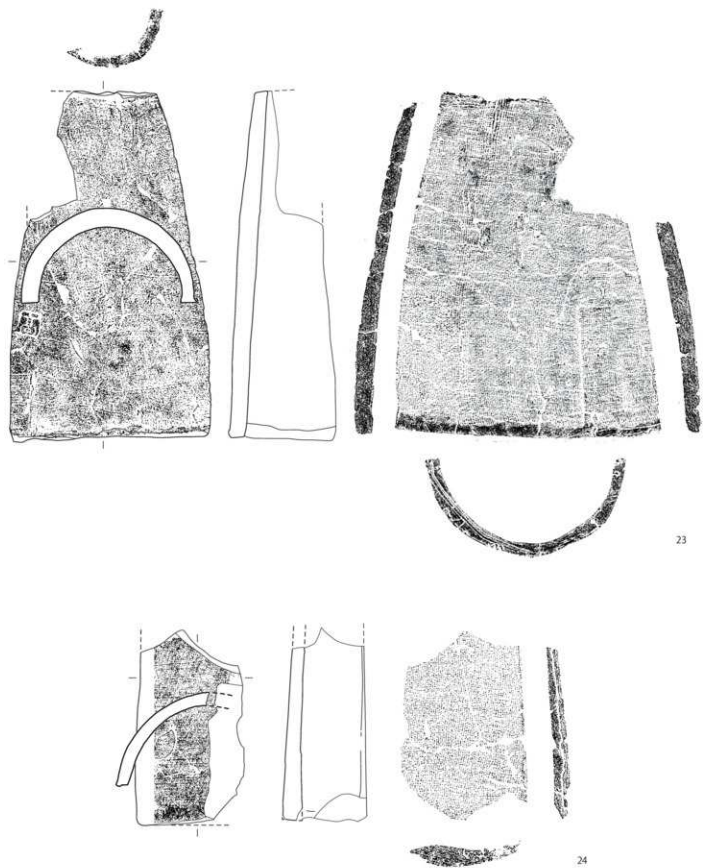


21

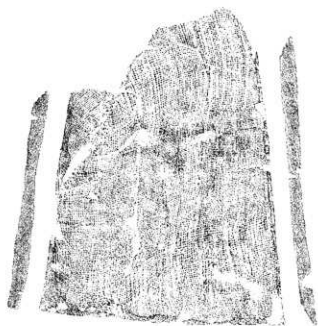
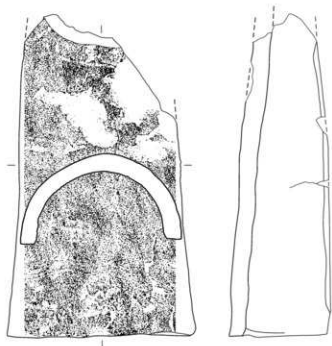
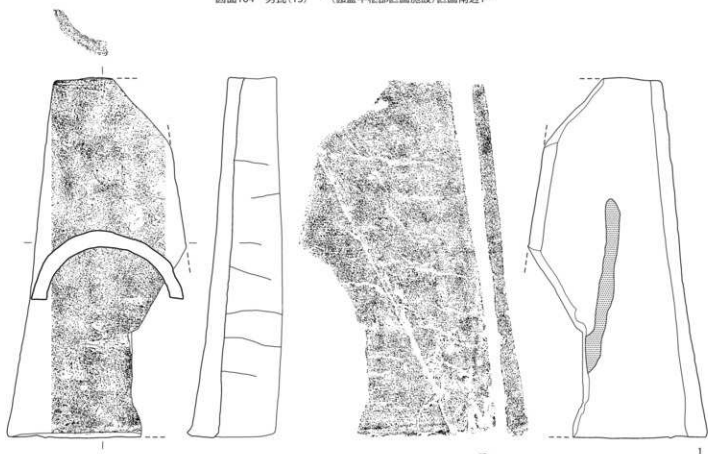


22



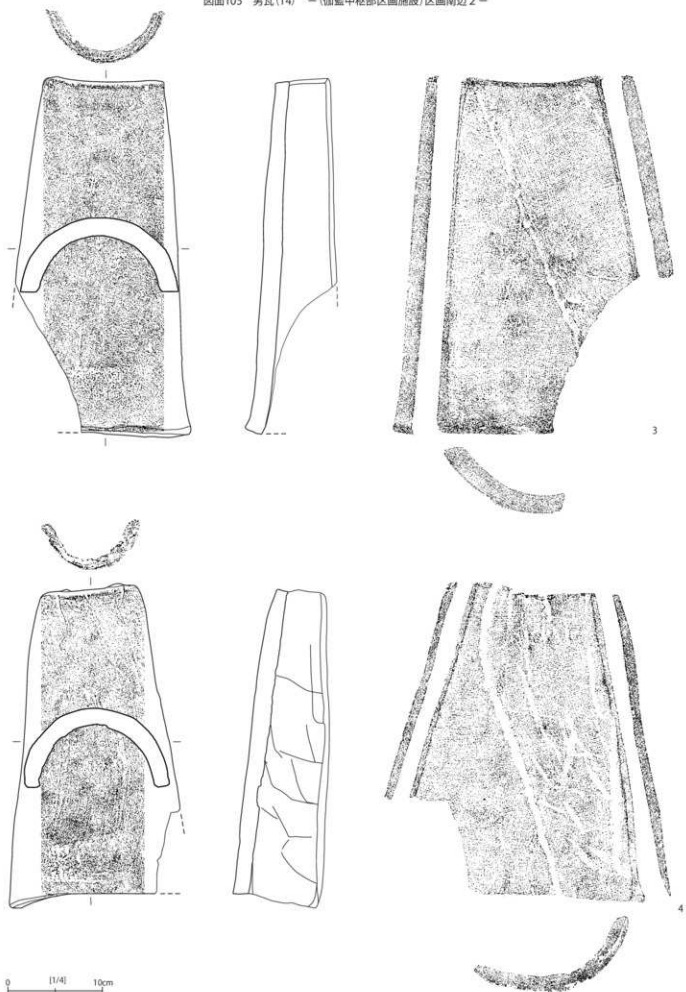


图面104 男瓦(13) —(伽藍中柱部区画施設)区画南边1—



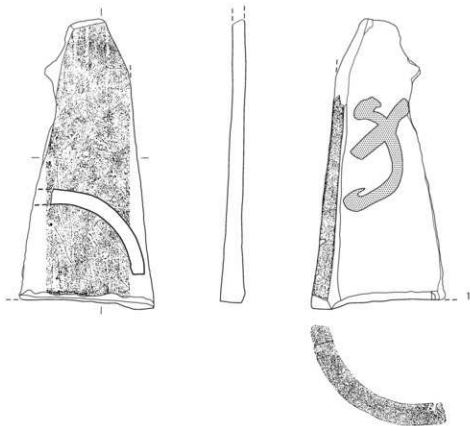
0 1/4 10cm

图面105 男瓦(14) — (加整中裆部区画施股)区画南边2—



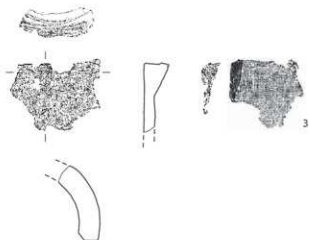
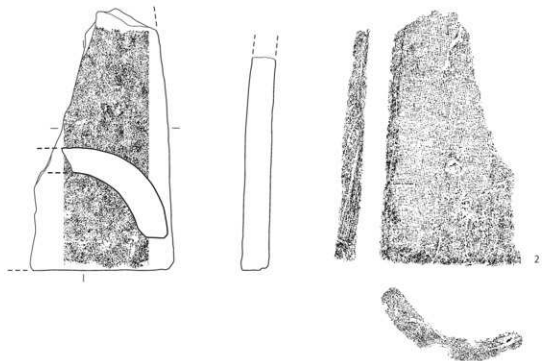
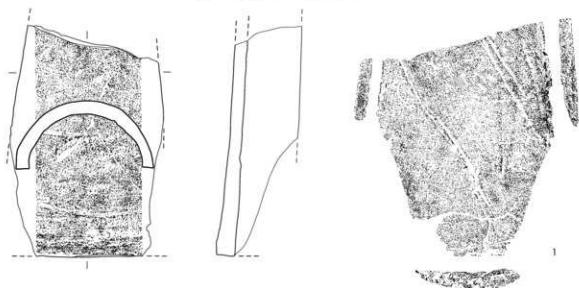
0 [1/4] 10cm

图版106 男瓦(15) — (加粗中部区画施设)区画南東一



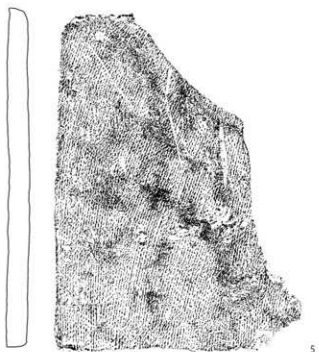
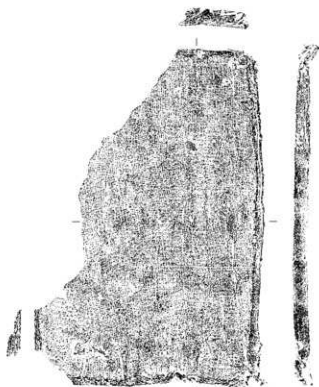
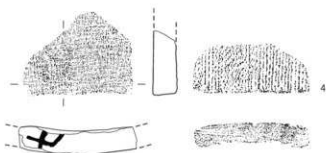
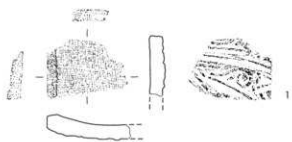
0 [1/4] 10cm

图面107 男瓦(16) —塔跡2地区—



0 [1/4] 10cm

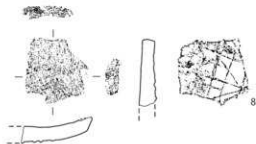
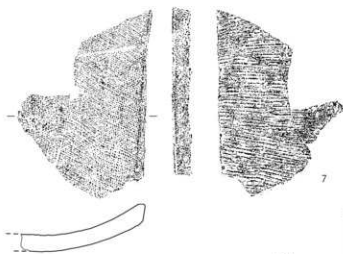
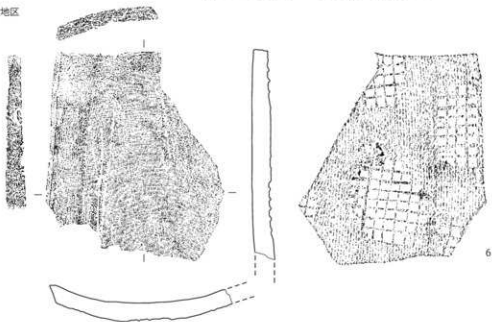
图面108 女瓦(1) —金堂地区1—



0 1 1/4 10cm

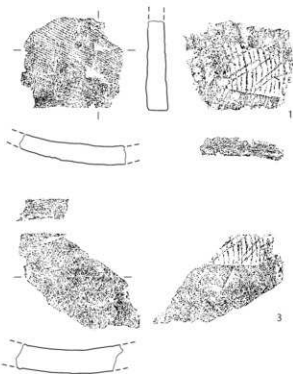
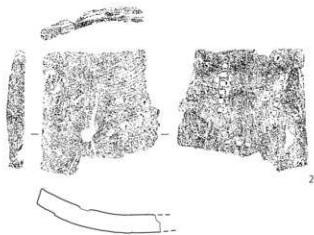
図面109 女瓦(2) —金堂地区2・講堂地区1—

金堂地区



0 [1/4] 10cm

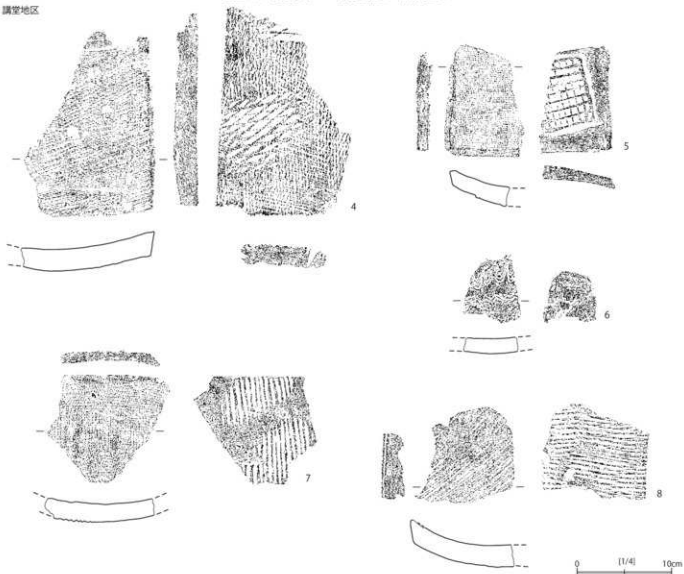
講堂地区



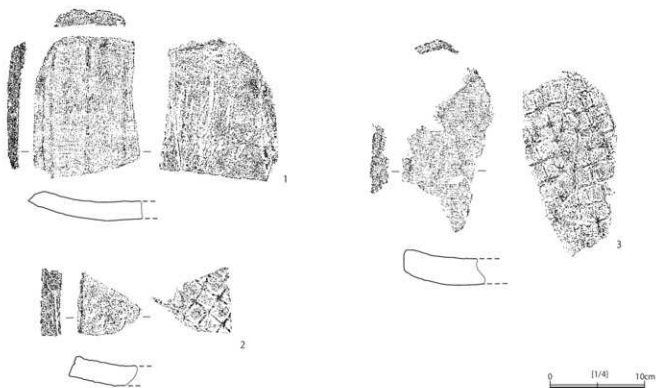
0 [1/4] 10cm

図面110 女瓦(3) —講堂地区2・中門地区1—

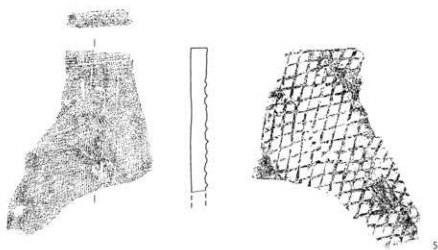
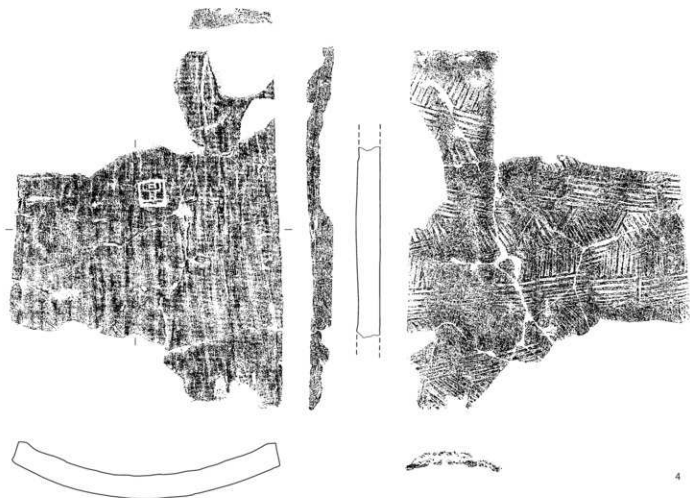
講堂地区



中門地区

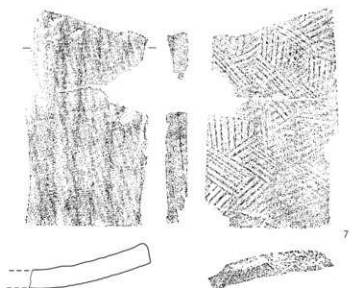
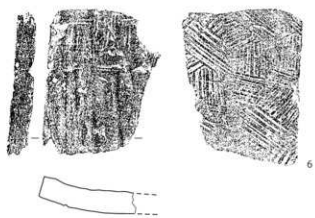


図面111 女瓦(4) 一中門地区2一



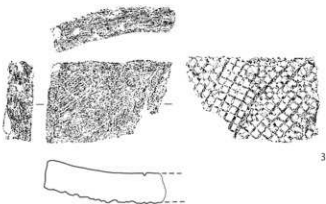
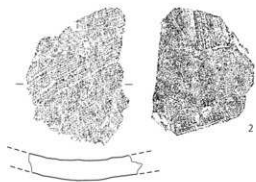
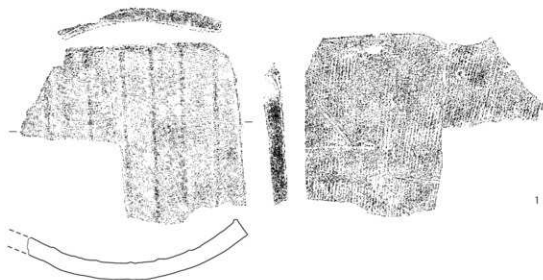
0 [1/4] 10cm

中門地区3



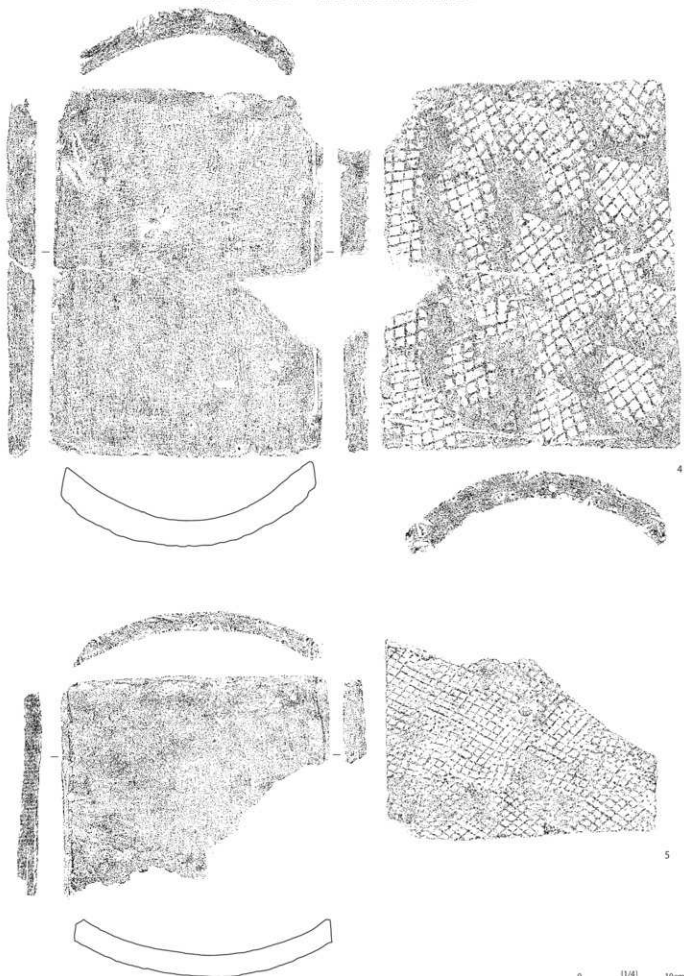
0 [1/4] 10cm

区画南辺1

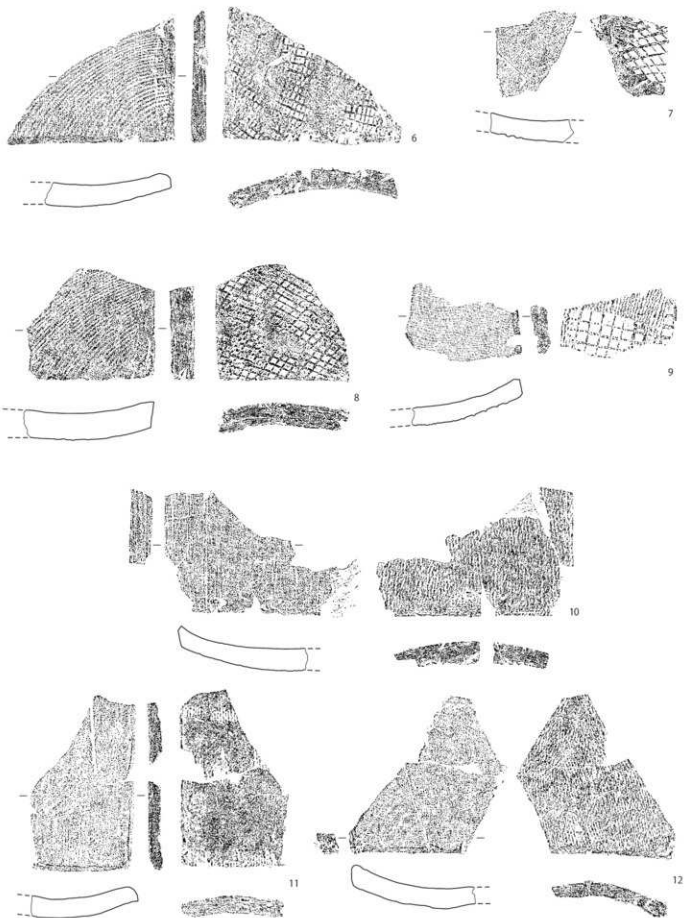


0 [1/4] 10cm

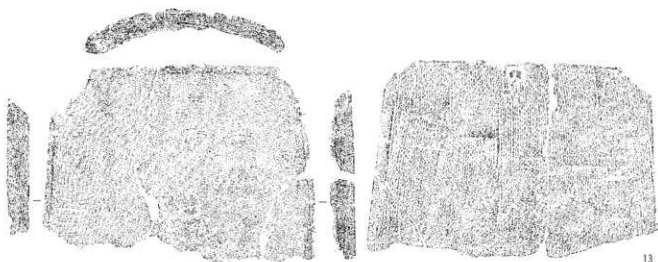
图版113 女瓦(6) —(加整中枢部区画施設)区画南边2—



图面114 女瓦(7) — (加整中柘部区画施設)区画南边3—



0 [1/4] 10cm



13

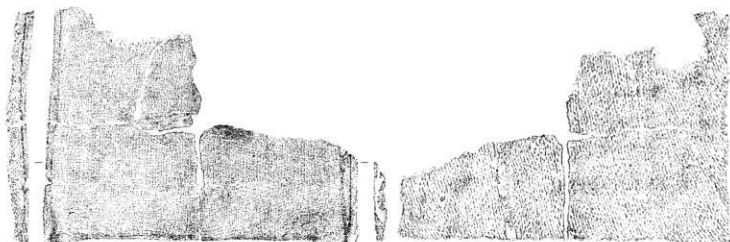


14



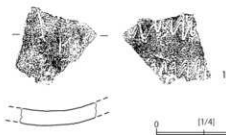
图版116 女瓦(9) — (完整中部区画除股) 区画南边·区画北边·区画北西—

区画南边5



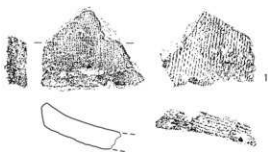
15

区画北边

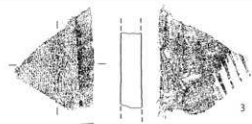
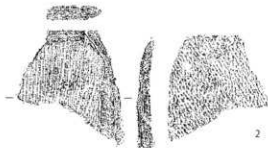


0 [1/4] 10cm

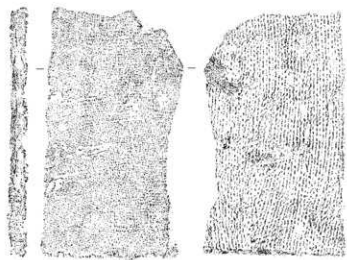
区画北西



0 [1/4] 10cm



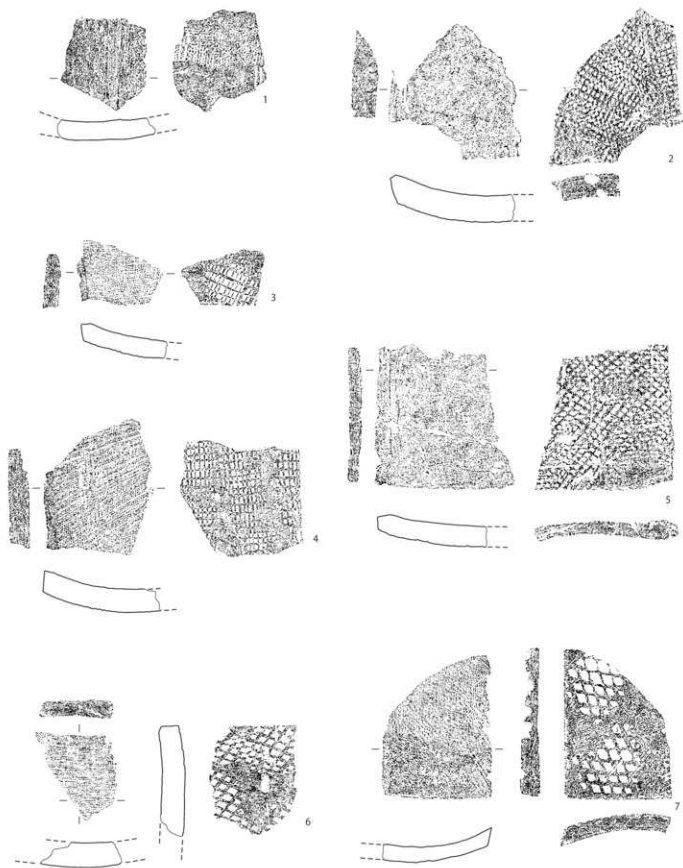
0 [1/4] 10cm



16

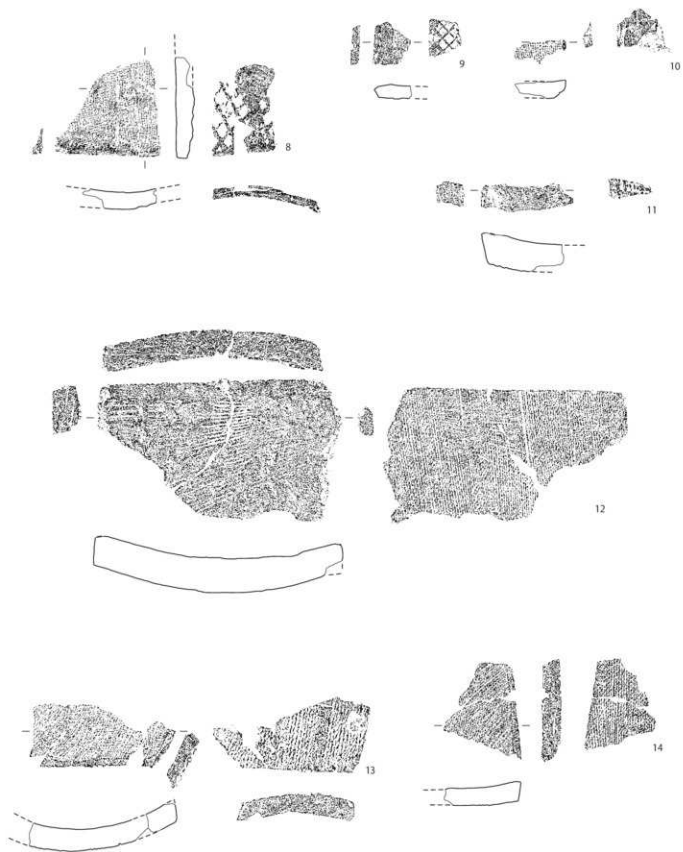


图版117 女瓦(10) —塔迹2地区1—



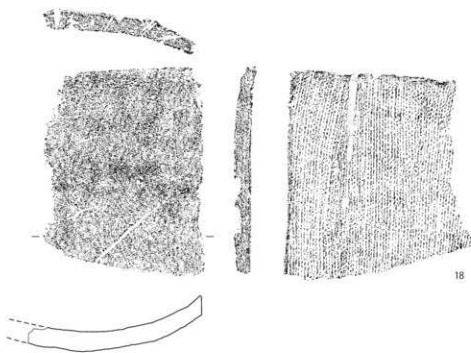
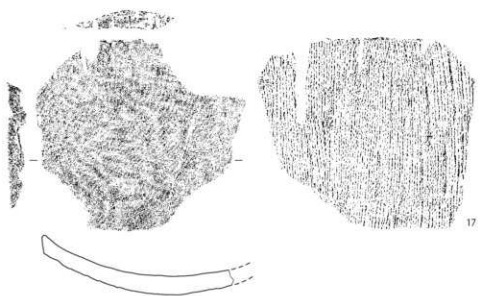
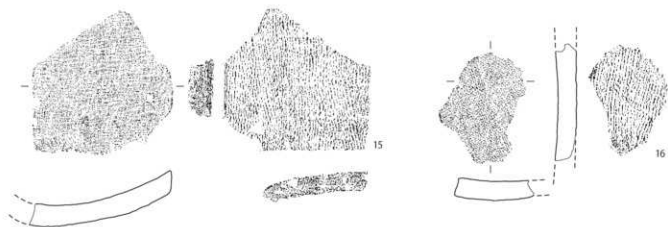
0 [1/4] 10cm

図面118 女瓦(11) 一塔跡2地区2-



0 1 1/4 10cm

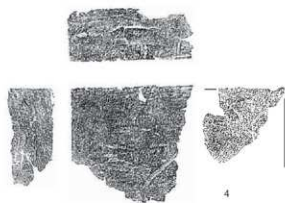
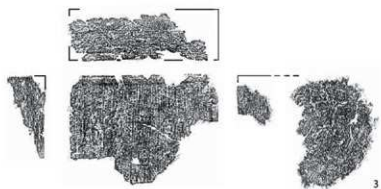
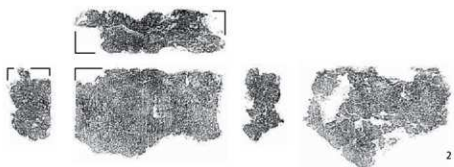
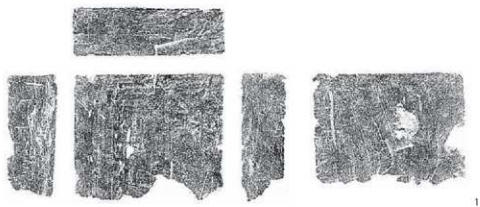
图面119 女瓦(12) —塔跡2地区3—



0 1 1/4 10cm

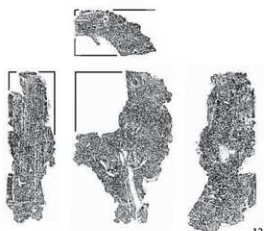
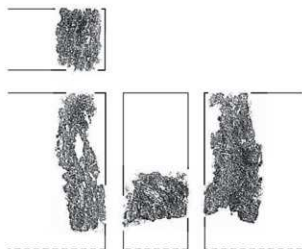
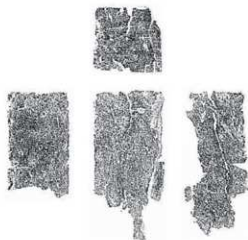
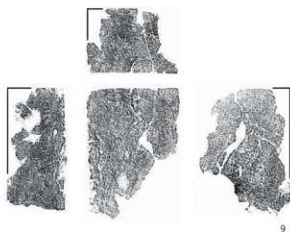
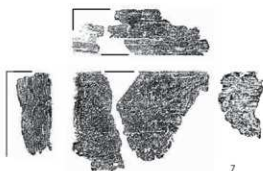
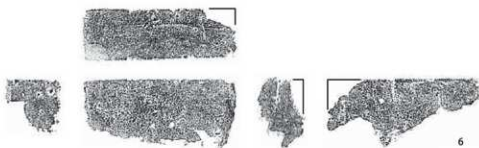


図面121 埴(1) —金堂地区1—



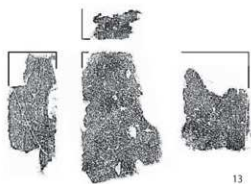
0 [1/4] 10cm

図面122 埴(2) 一金堂地区2-

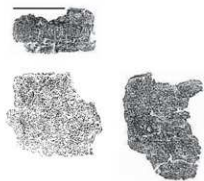


0 [1/4] 10cm

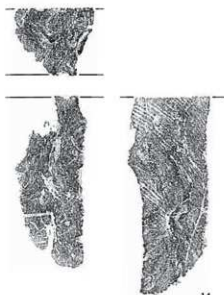
図面123 埴(3) —金堂地区3—



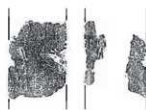
13



15



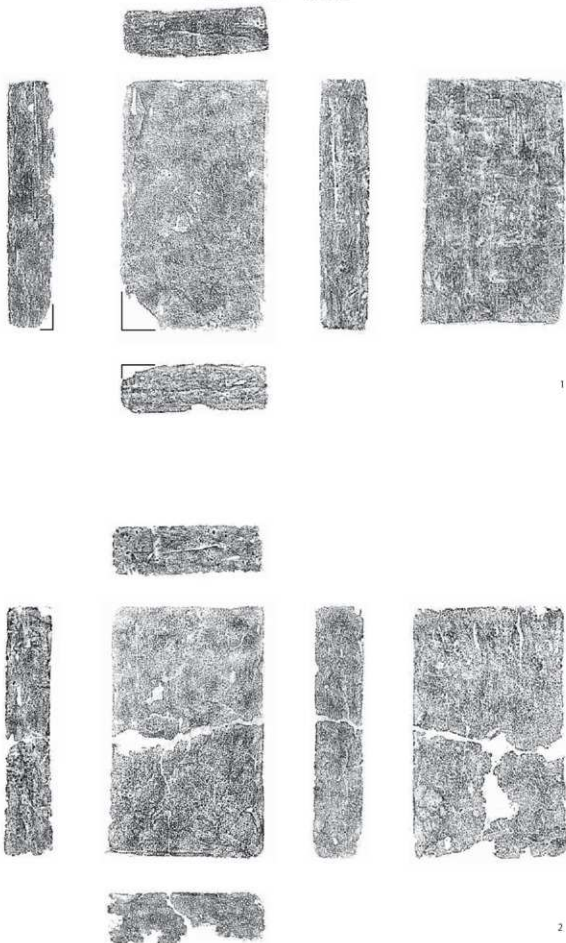
14



16



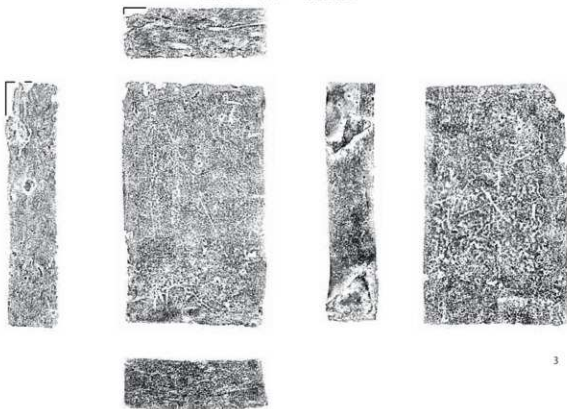
図面124 埴(4) -講堂地区1-



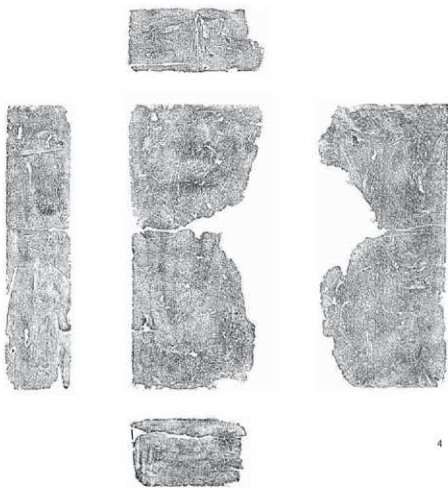
2

0 [1/4] 10cm

図面125 埴(5) 一講堂地区2-



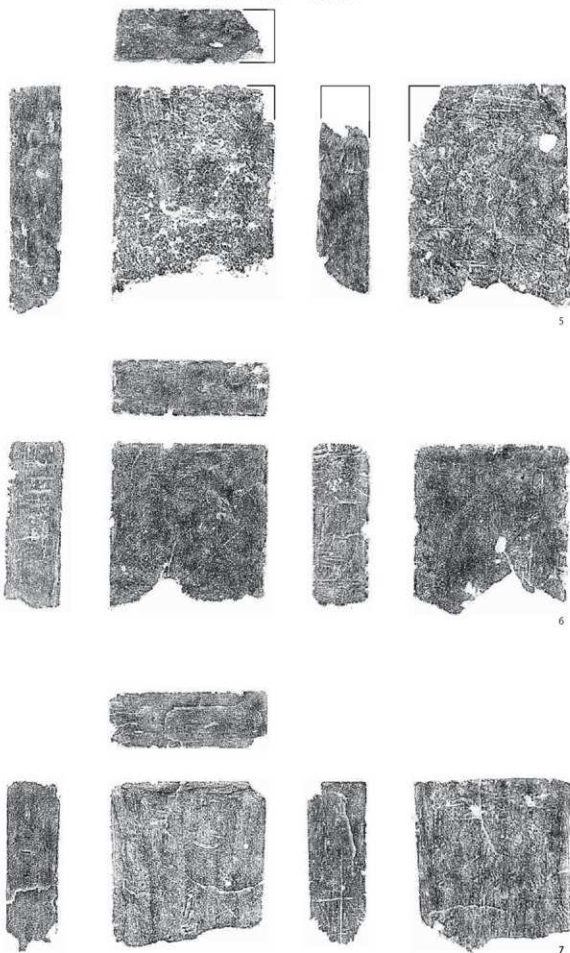
3



4

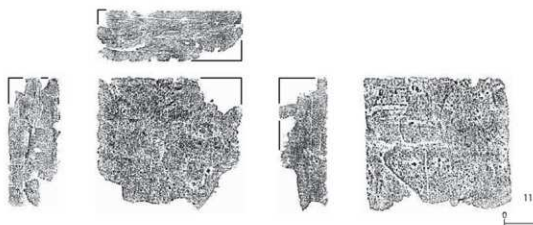
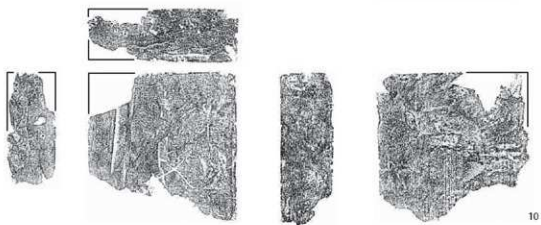
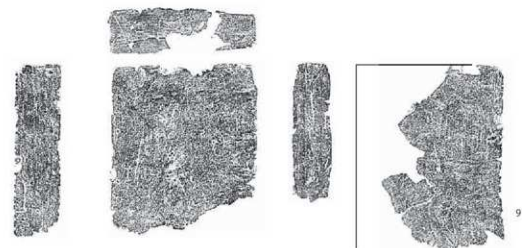
0 [1/4] 10cm

図面126 埴(6) -講堂地区3-

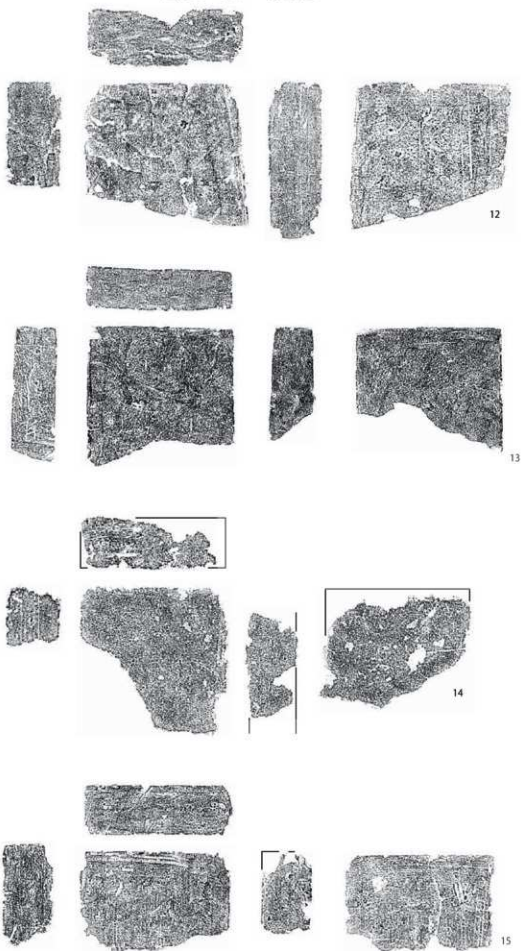


0 [1/4] 10cm

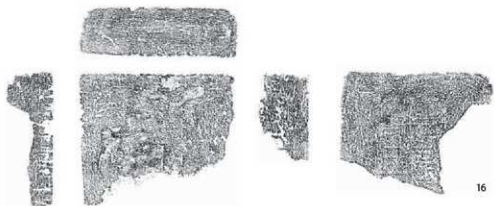
図面127 埴(7) -講堂地区4-



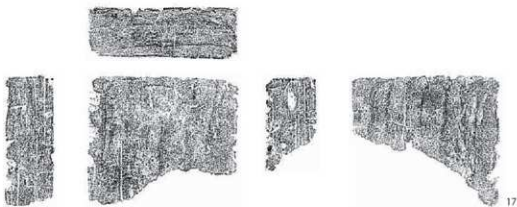
0 [1/4] 10cm



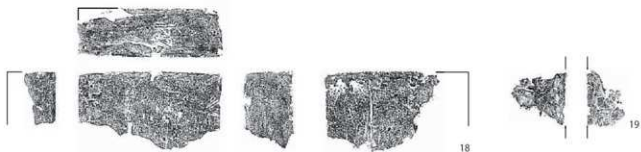
0 [1/4] 10cm



16

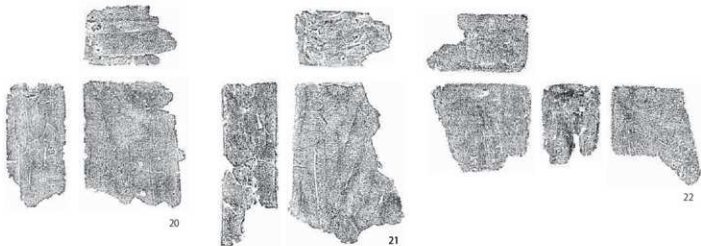


17



18

19



20

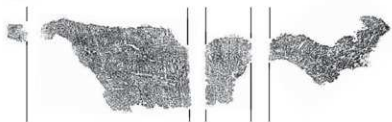
21

22

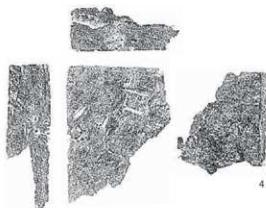
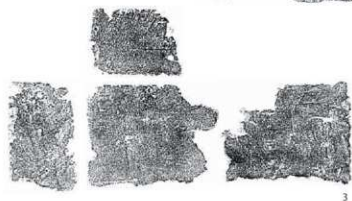
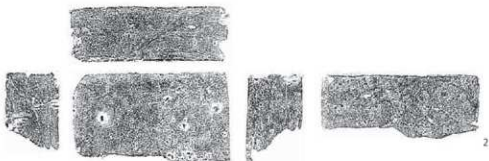
0 [1/4] 10cm

図面130 埴(10) 一階楼地区、堂間地区(金堂・講堂間)一

廻廊地区



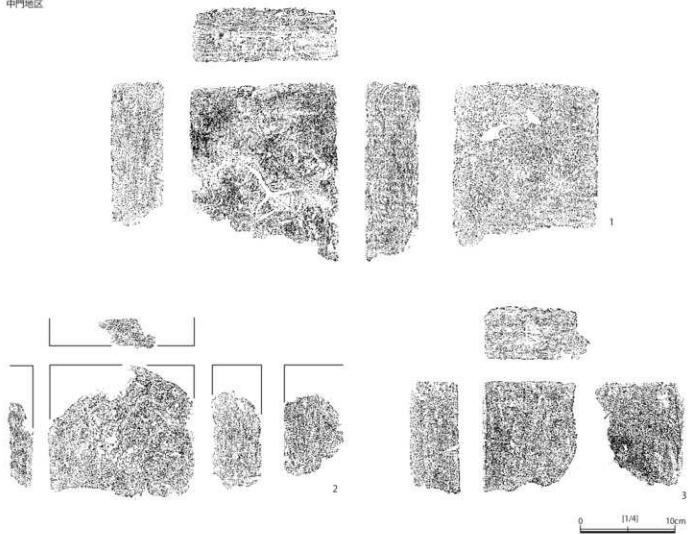
堂間地区(金堂・講堂間)



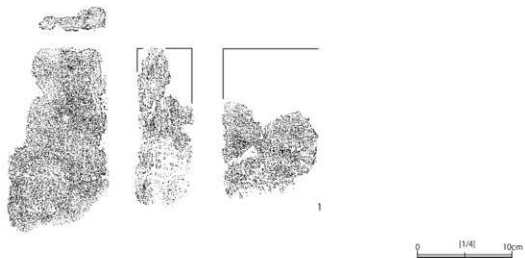
0 [1/4] 10cm

図面131 埴(11) —中門地区、(加藍中枢部区画施設)区画南辺—

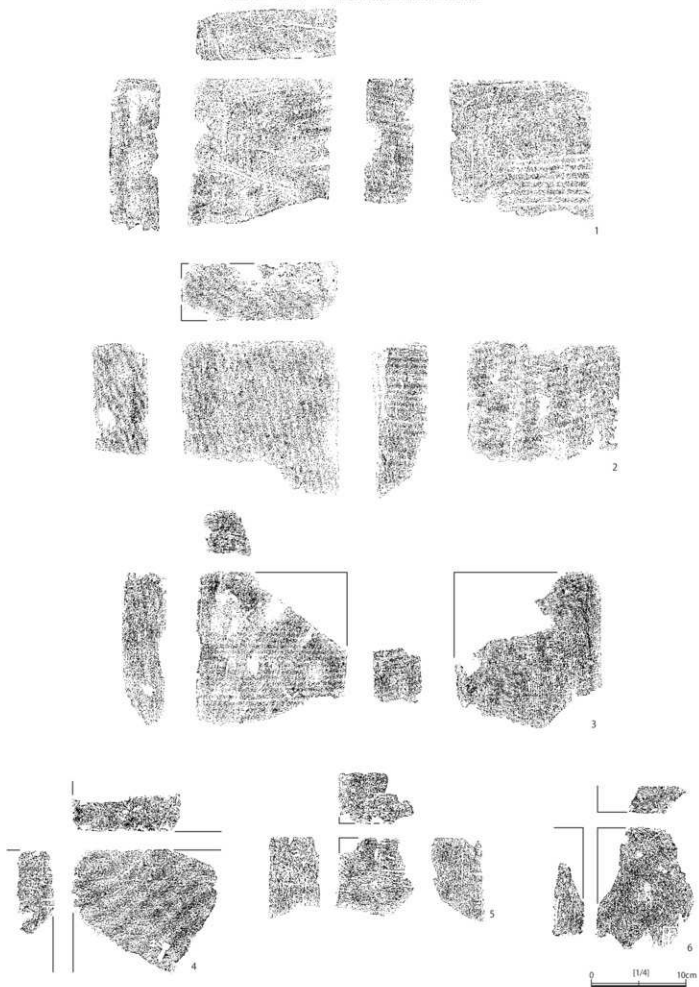
中門地区



区画南辺

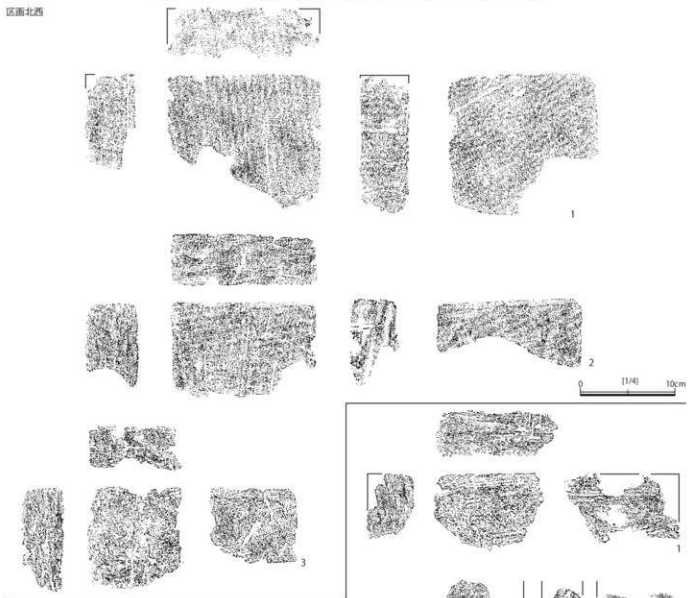


图版132 墙(12) — (加整中柜部区画施設)区画北辺—

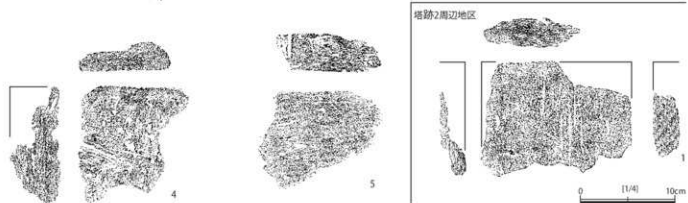
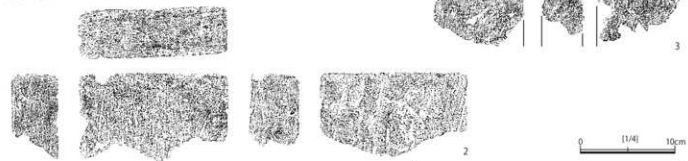


图版133 埤(13) — (伽藍中區部區面施設)區面北西、塔跡2地区、塔跡2周边地区—

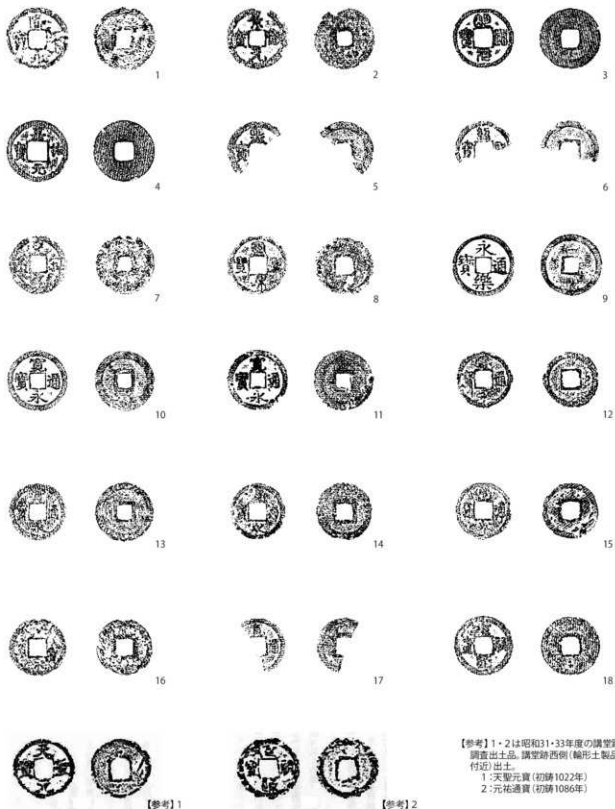
区面北西



塔跡2地区



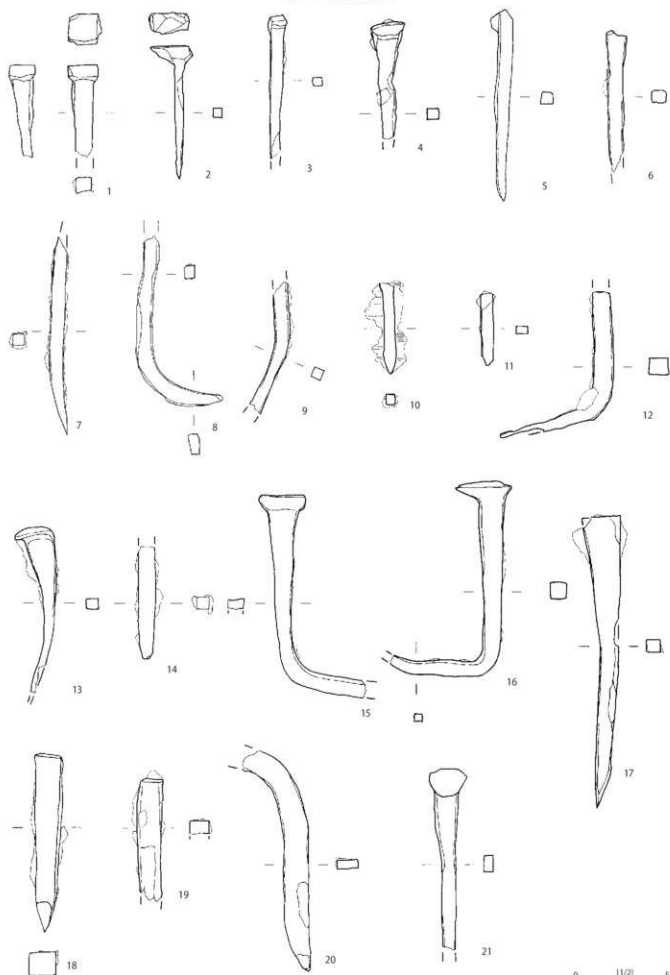
図面134 銭貨



【参考】1・2は昭和31・33年度の講堂跡
調査出土品。講堂跡西側(輪形土製品
付近)出土。
1:天聖元貨(初鑄1022年)
2:元祐通貨(初鑄1086年)

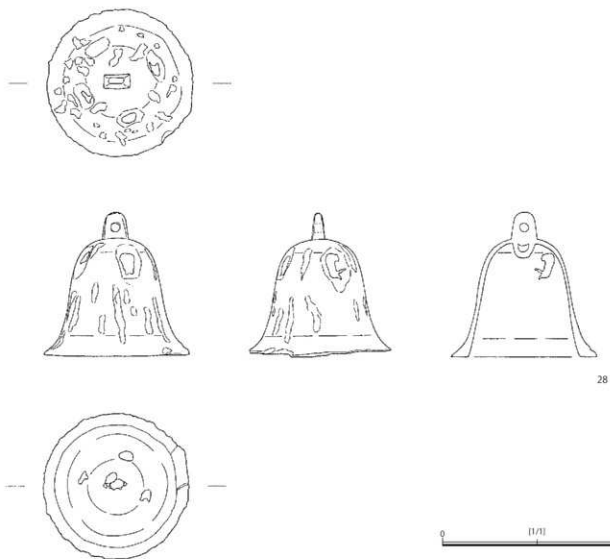
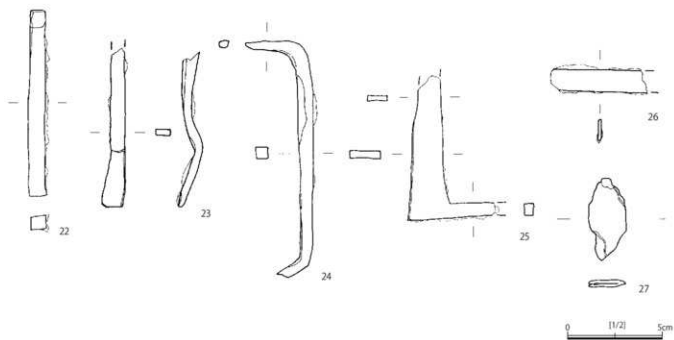
0 [2/3] 5cm

図面135 金属製品(1)

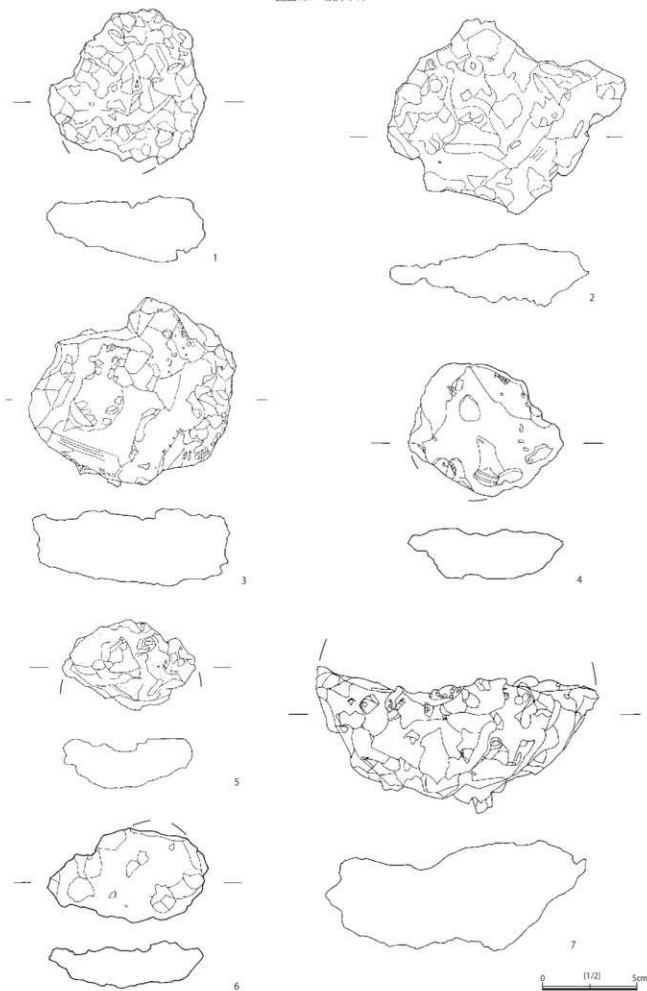


0 1[1/2] 5cm

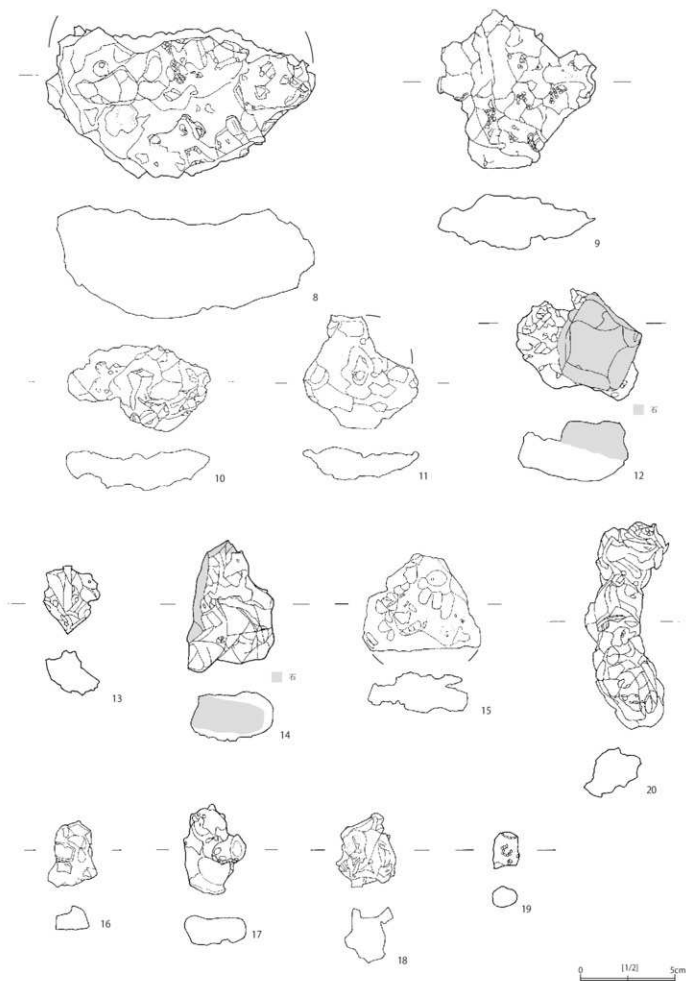
図面136 金属製品(2)



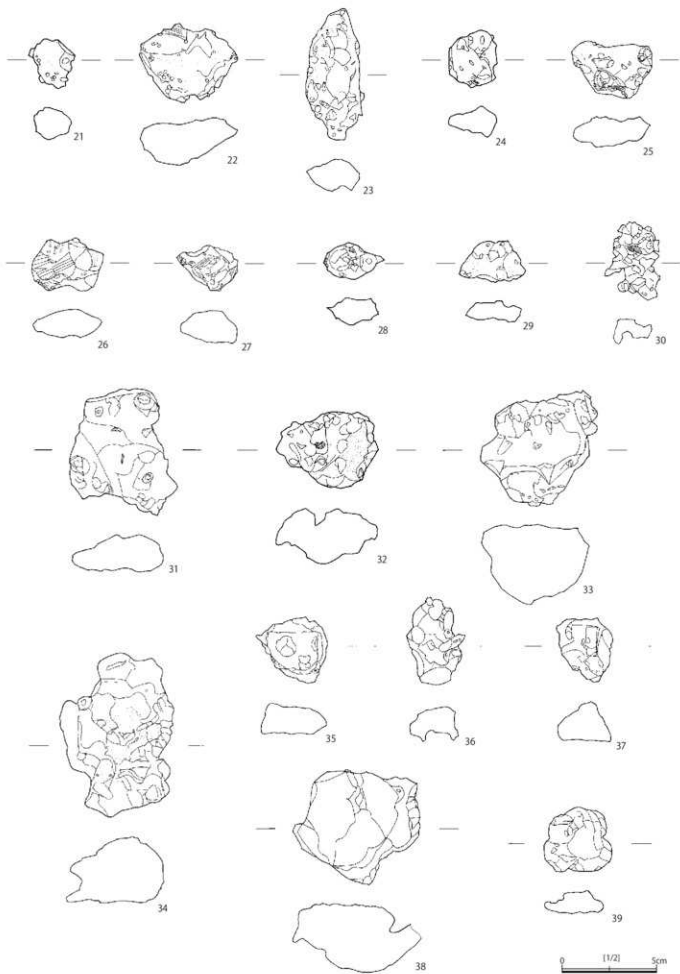
図面137 鉄滓(1)



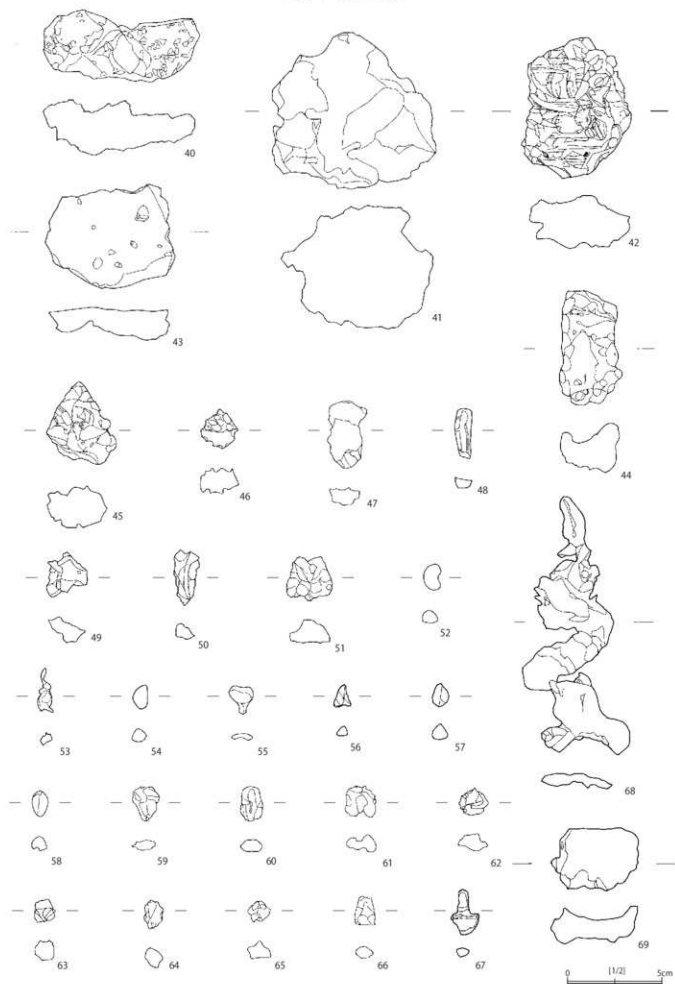
図面138 鉄滓(2)



図面139 鉄滓(3)

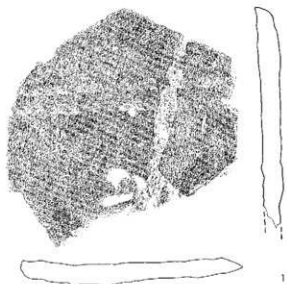


図面140 鉄滓(4)・銅滓



图面141 板碑·磁石

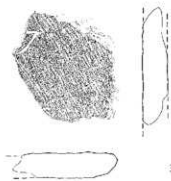
板碑



1



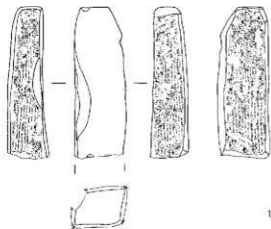
2



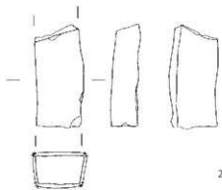
3

0 1/4 10cm

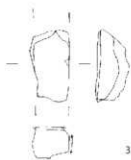
磁石



1



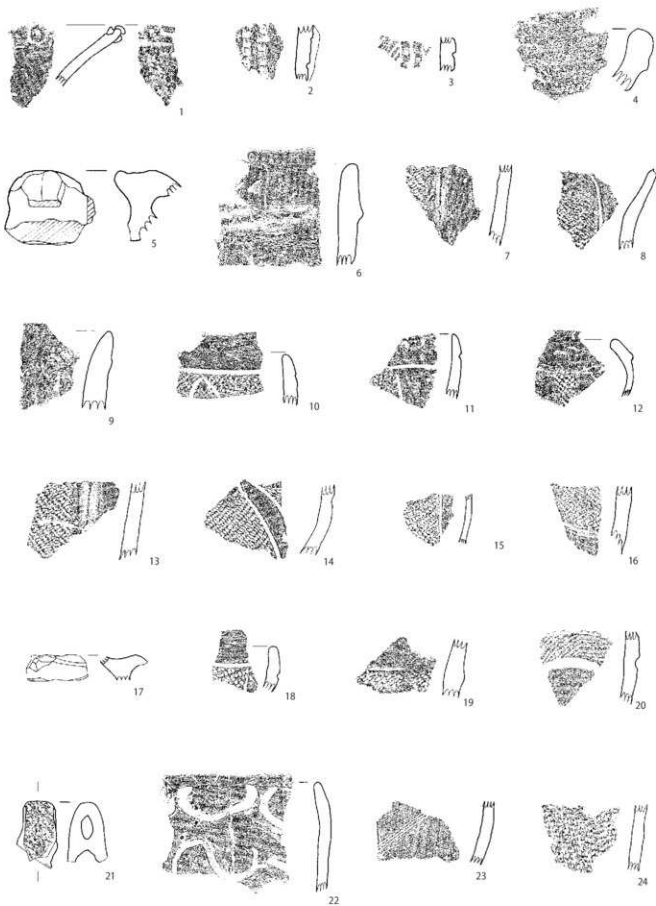
2



3

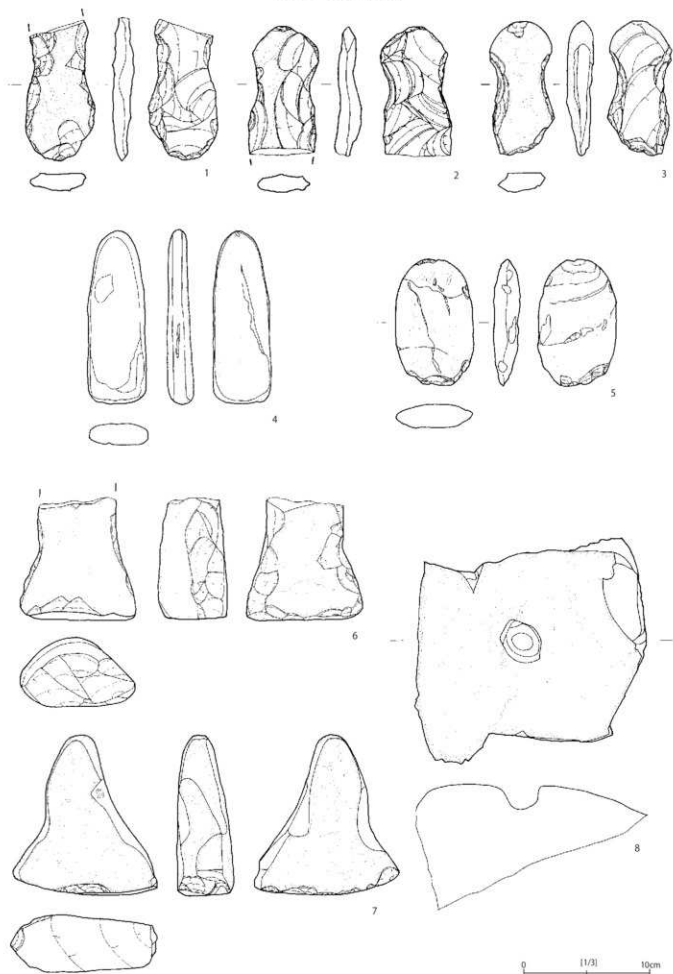
0 1/2 5cm

図面142 縄文時代の土器

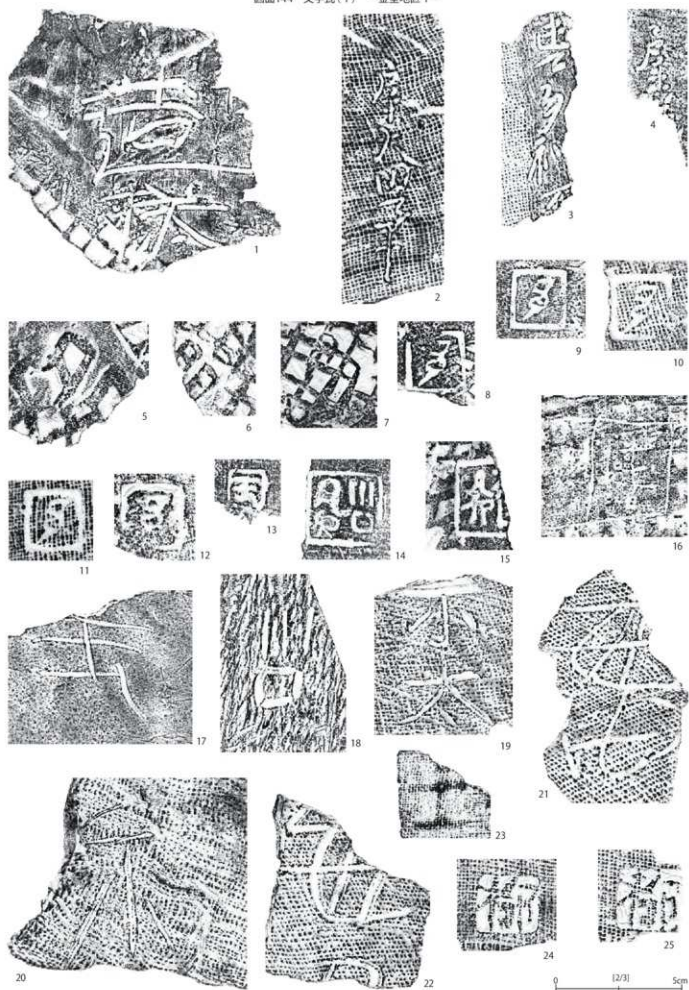


0 [1/3] 10cm

図面143 縄文時代の石器



图面144 文字瓦(1) —金堂地区1—



图版145 文字瓦(2) 一金堂地区 2—



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53

0 [2/3] 5cm

图版146 文字瓦(3) —金堂地区3—



54



55



56



57



58



59



60



61



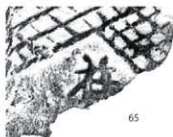
62



63



64



65



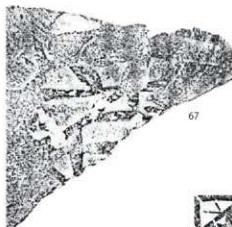
66



68



69



67



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



89



90



91



92



93



94

0 [2/3] 5cm

图面147 文字瓦(4) —金堂地区4—



95



96



97



98



99



100



103



104



101



102



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



118



119

0 [2/3] 5cm

图版148 文字瓦(5) —金堂地区5—



120



121



122



123



124



125



126



127



128



129



130



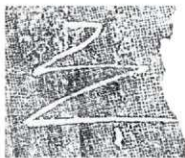
131



132



133



134



135



136



137



138



139



140



141



142



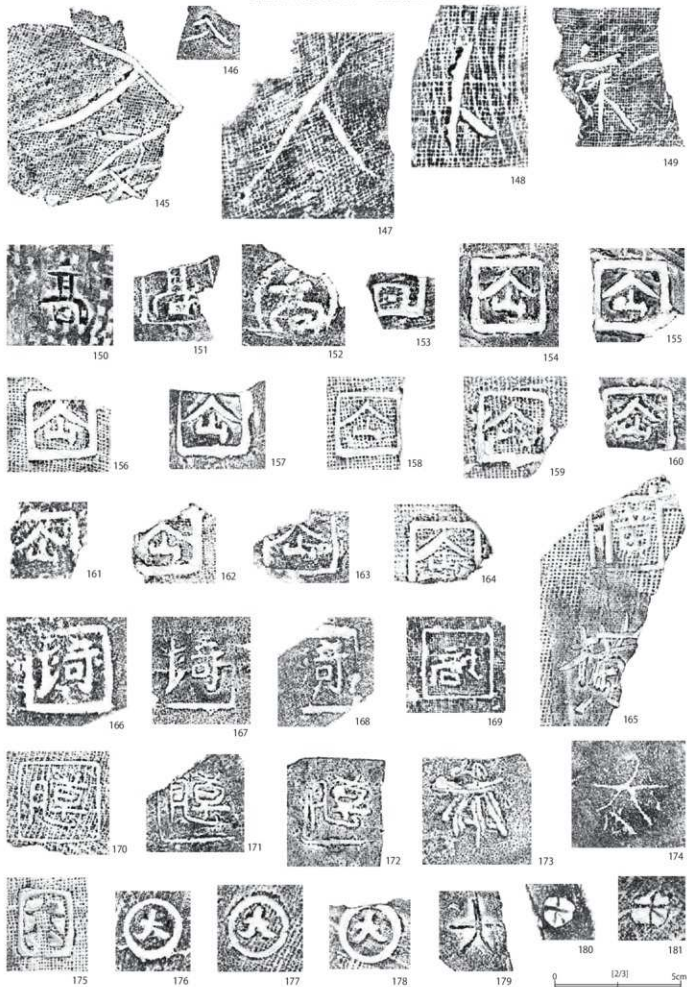
143



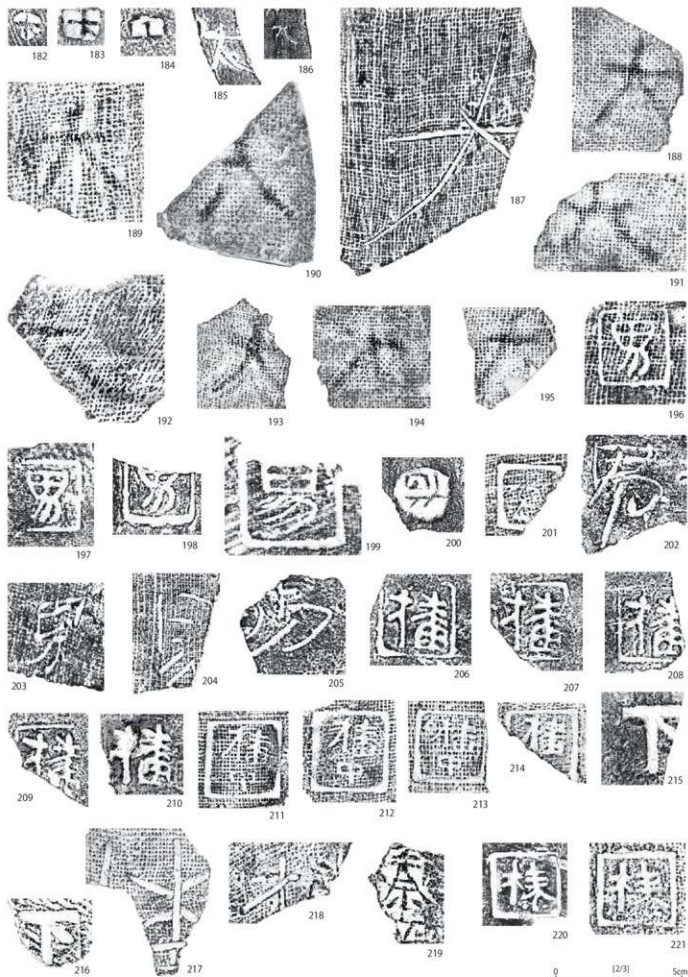
144

0 [2/3] 5cm

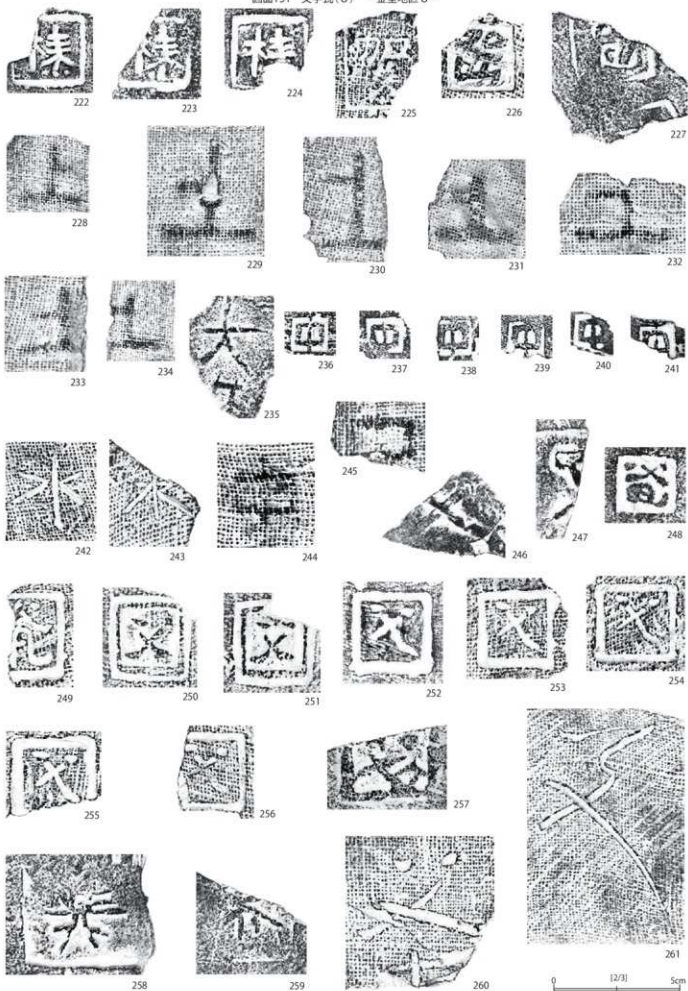
图版149 文字瓦(6) —金堂地区6—



图面150 文字瓦(7) —金堂地区7—



图版151 文字瓦(8) —金堂地区8—



图版152 文字瓦(9) —金堂地区9—



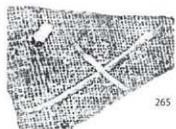
262



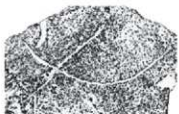
263



264



265



266



267



268



269



270



271



272



273



274



275



276



277



278



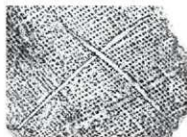
279



280



281



282



283



284



285



287



288



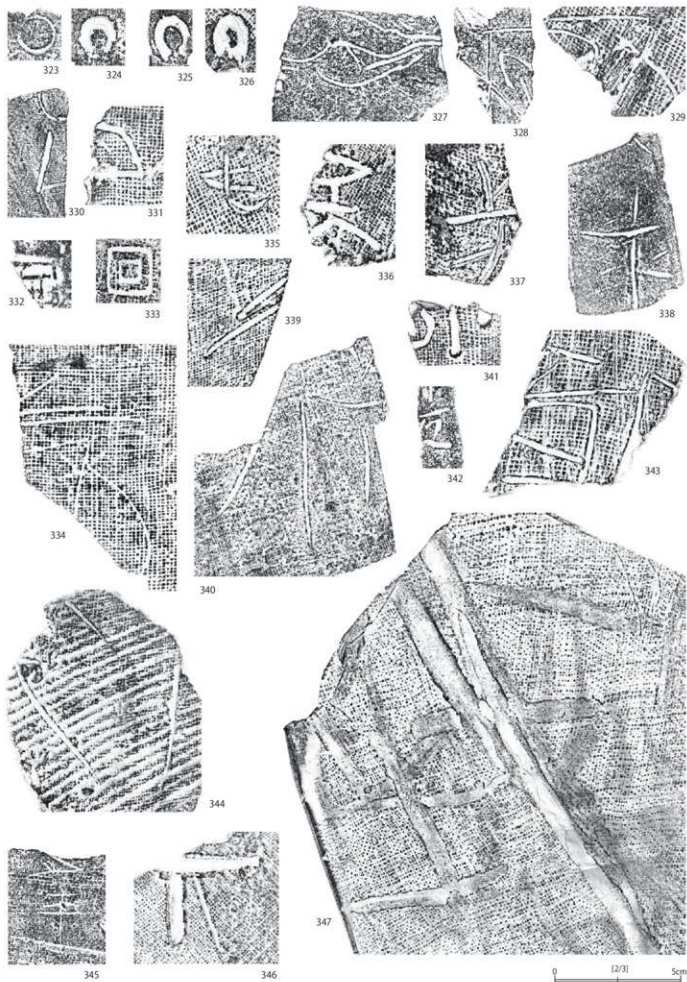
289



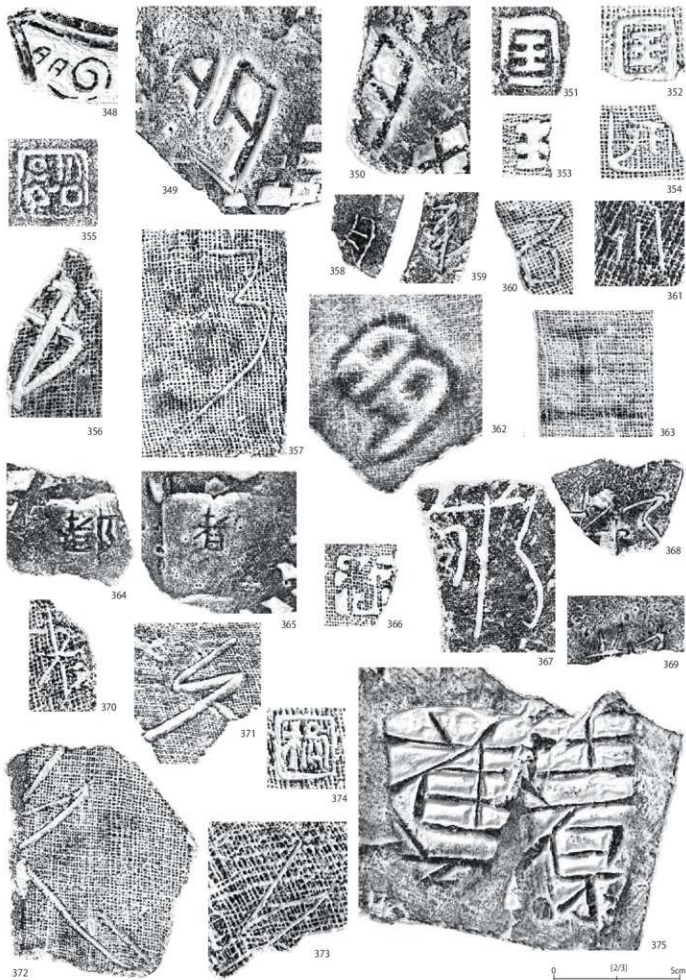
286

0 [2/3] 5cm

图面154 文字瓦(11) —金堂地区11—



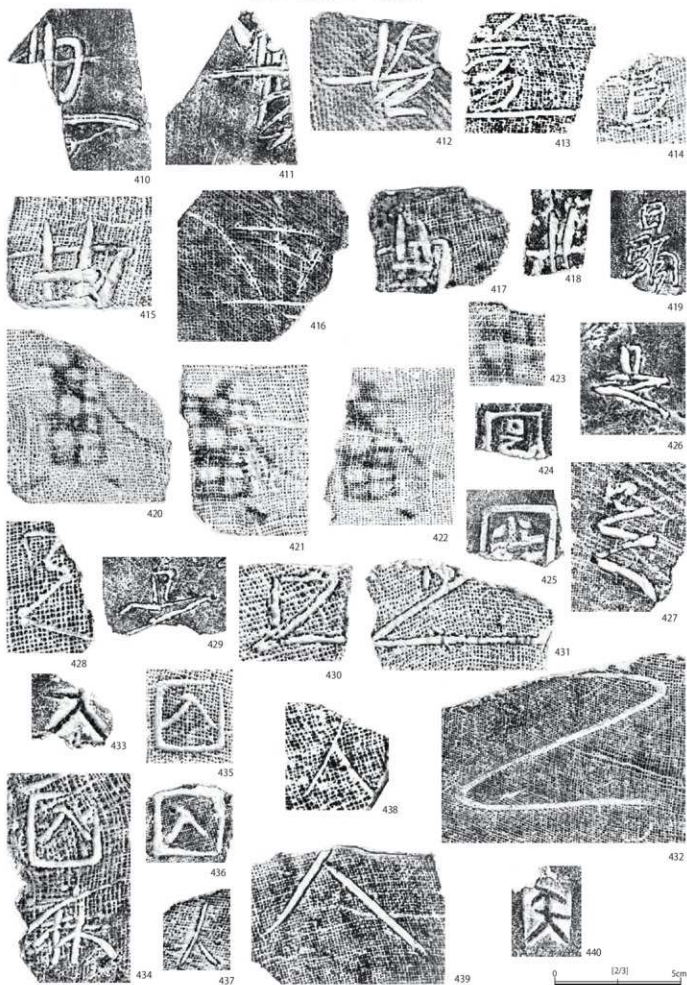
図面155 文字瓦(12) 一講堂地区1-



図面156 文字瓦(13) 一講堂地区 2 -



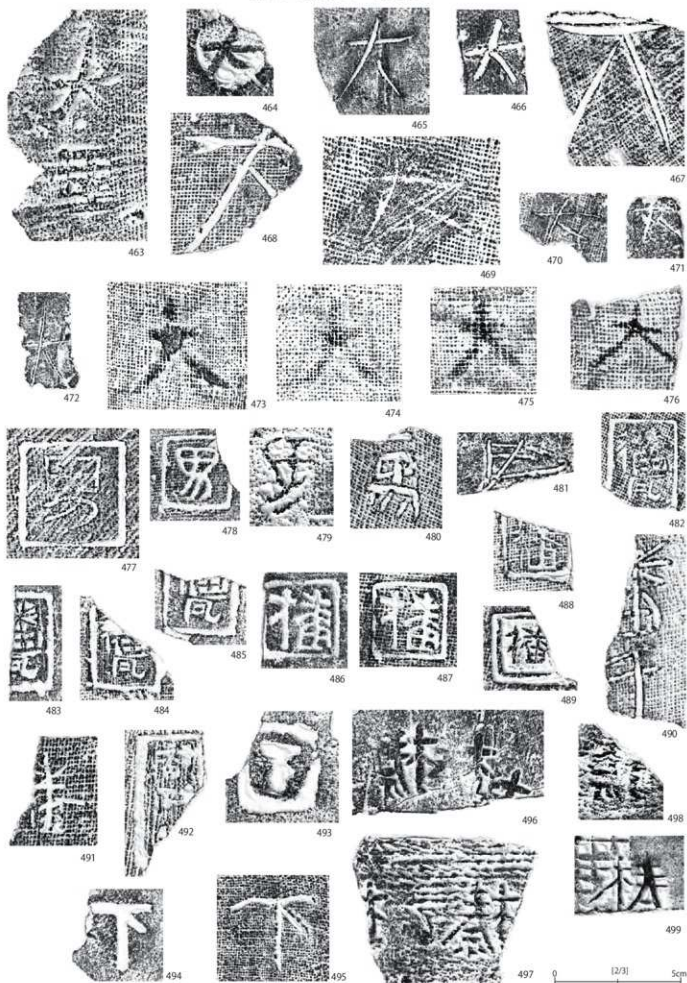
图面157 文字瓦(14) — 講堂地区3 —



図面158 文字瓦(15) 一講堂地区4一



図面159 文字瓦(16) 一講堂地区5-



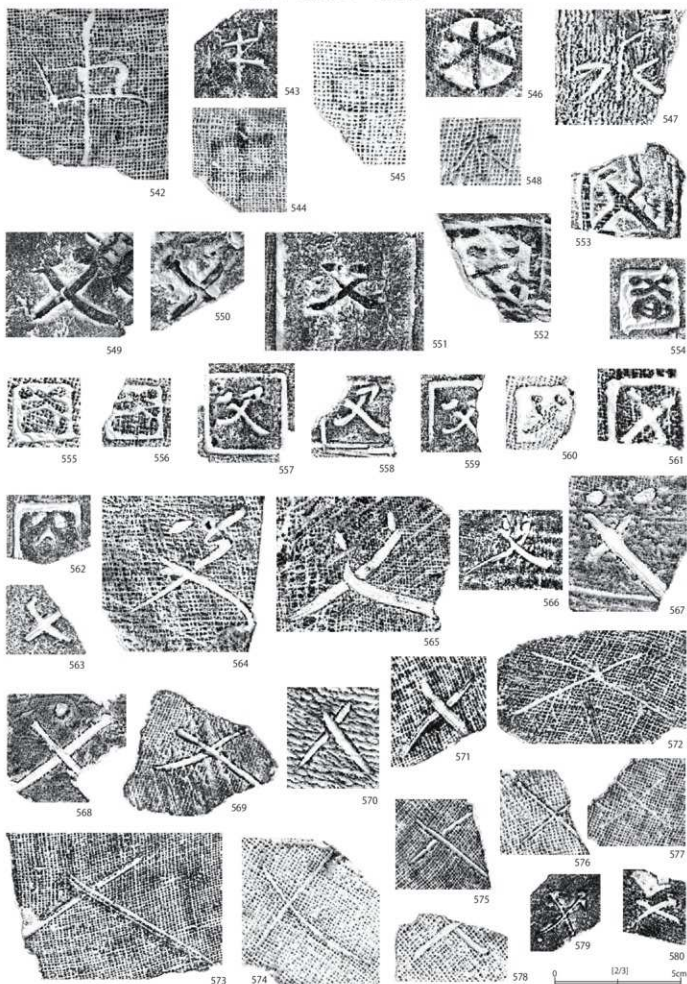
0 [2/3] 5cm

図面160 文字瓦(17) 一講堂地区6-

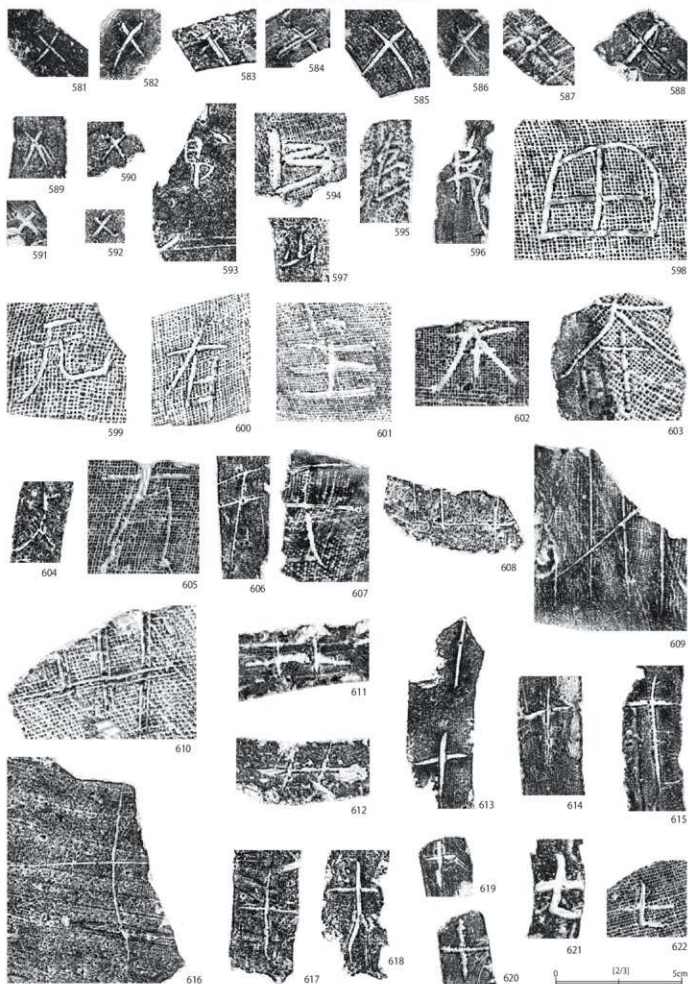


0 [2/3] 5cm

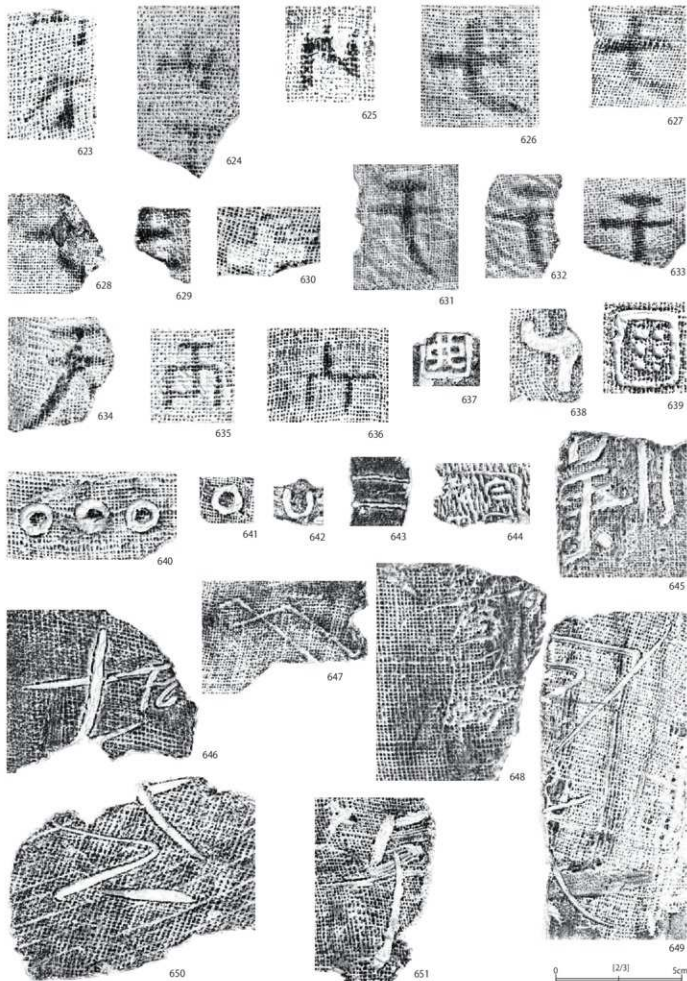
図面161 文字瓦(18) 一講堂地区7-



図面162 文字瓦(19) 一講堂地区8-



図面163 文字瓦(20) 一講堂地区9-



図面164 文字瓦(21) 一講堂地区10-



652



653



654



655



656



657



658



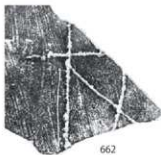
659



660



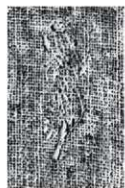
661



662



663



664



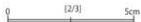
665



666



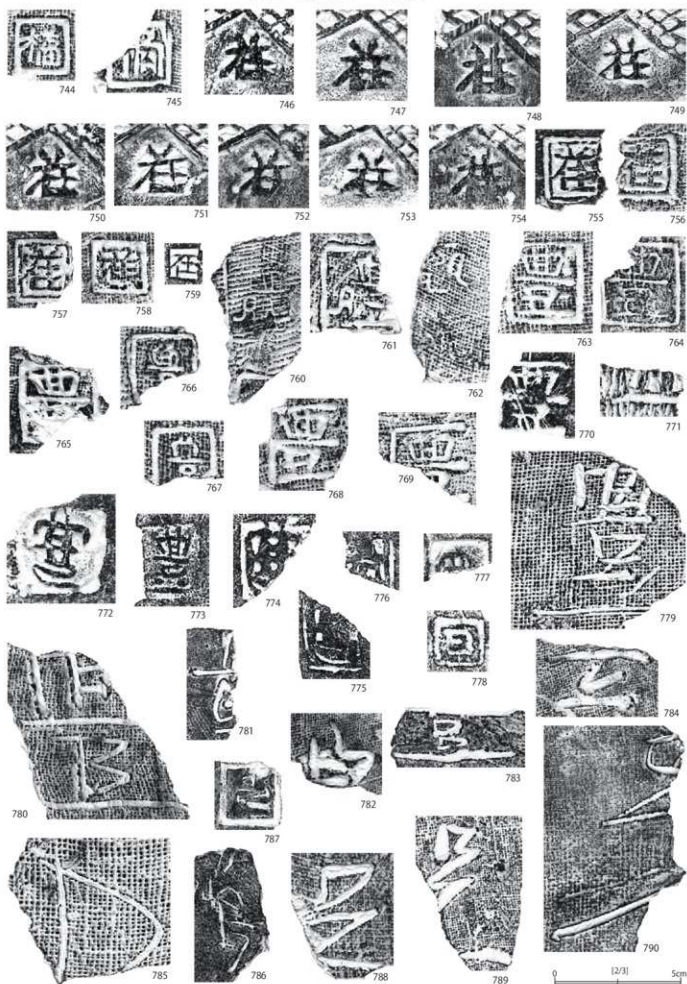
667



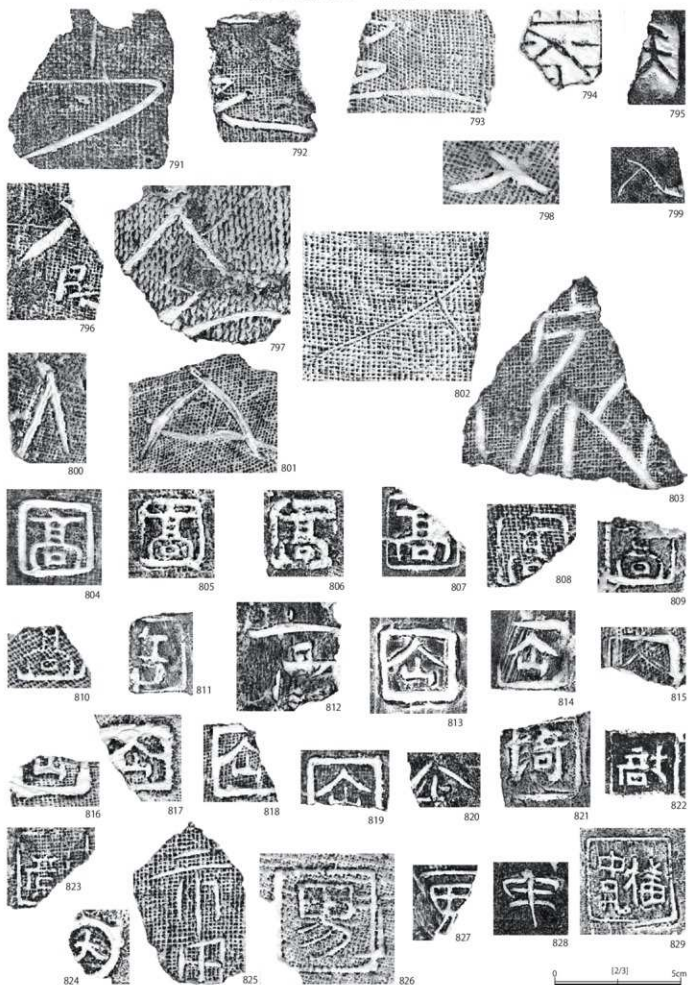
图版165 文字瓦(22) 一 鐘樓地区一



図面167 文字瓦(24) 一 中門地区 2 -

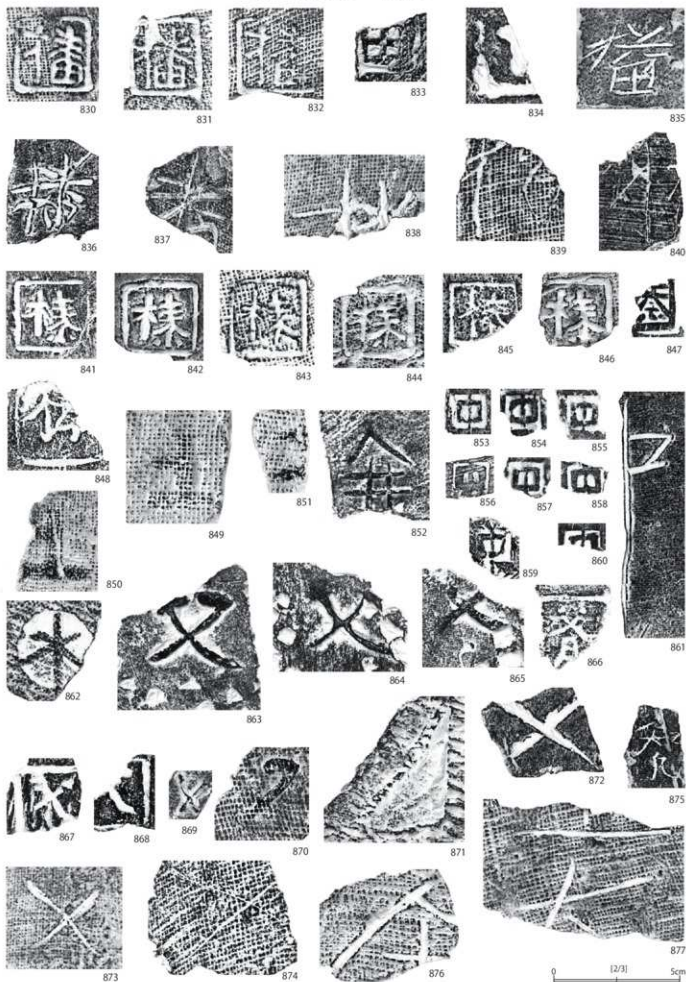


図面168 文字瓦(25) —中門地区3—

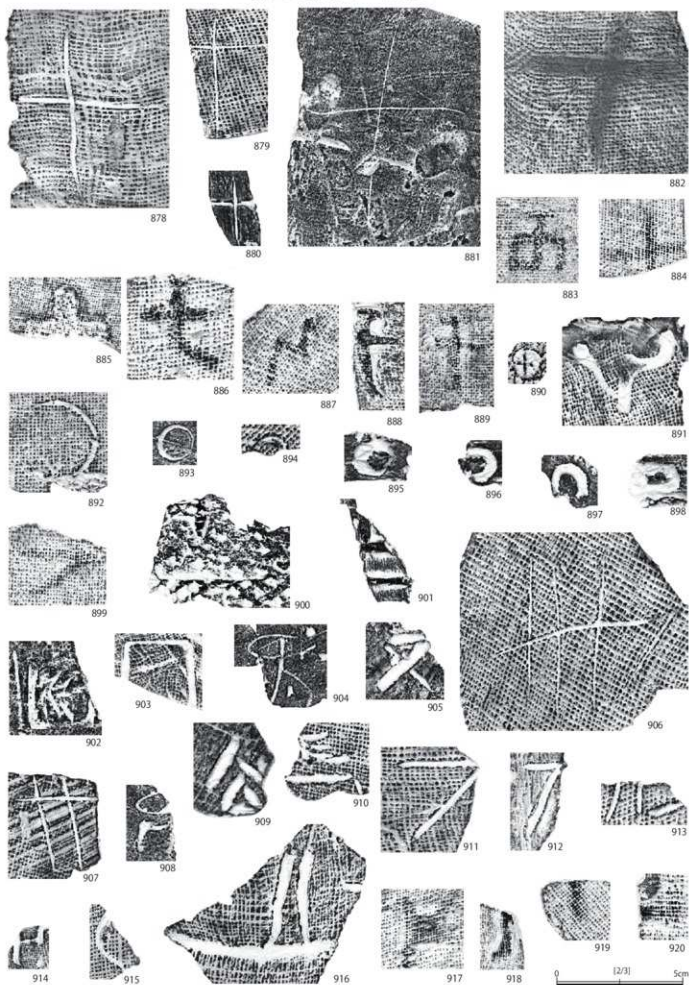


0 [2/3] 5cm

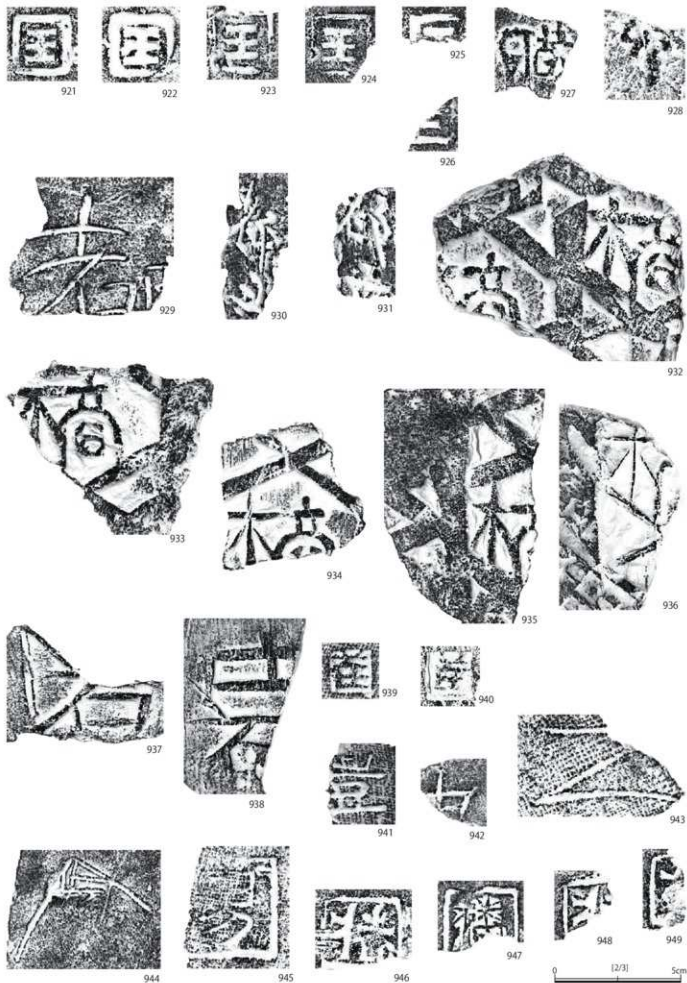
図面169 文字瓦(26) —中門地区4—



図面170 文字瓦(27) —中門地区5—



图面171 文字瓦(28) —塔跡1地区1—



图面172 文字瓦(29) 一塔跡1地区2一



950



951



952



953



954



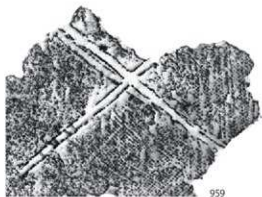
955



956



958



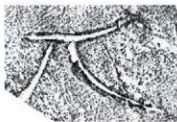
959



957



960



961



962



963



964



965



966



967



968



969



970



图版173 文字瓦(30) 一塔跡2地区1一



971



973



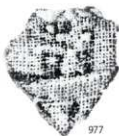
974



975



976



977



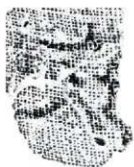
978



979



980



981



972



982



983



984



985



986



987



988



989



990



991



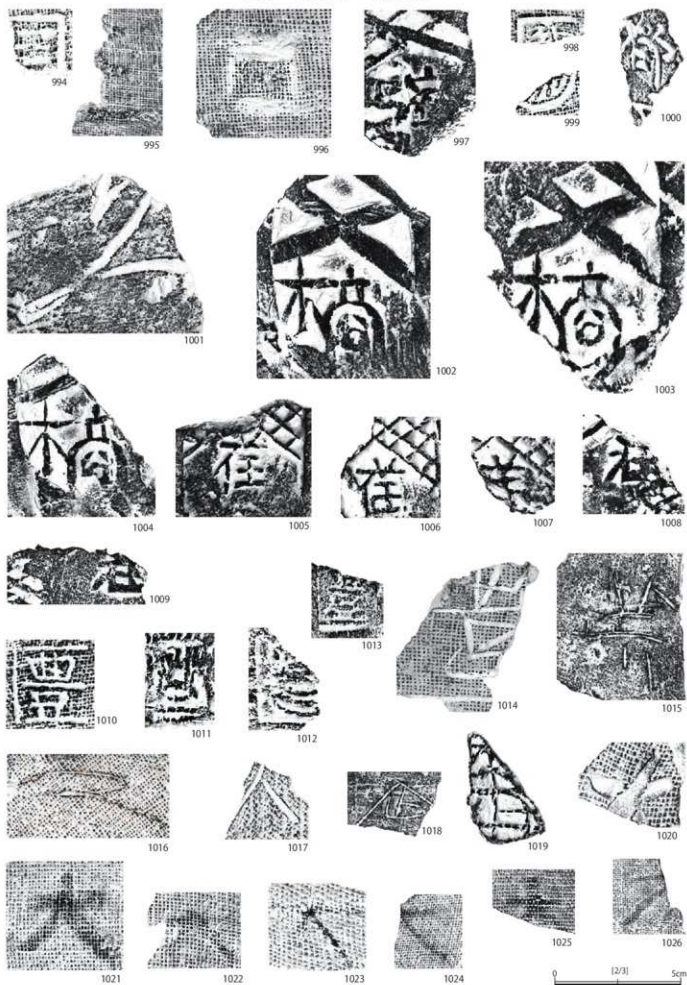
992



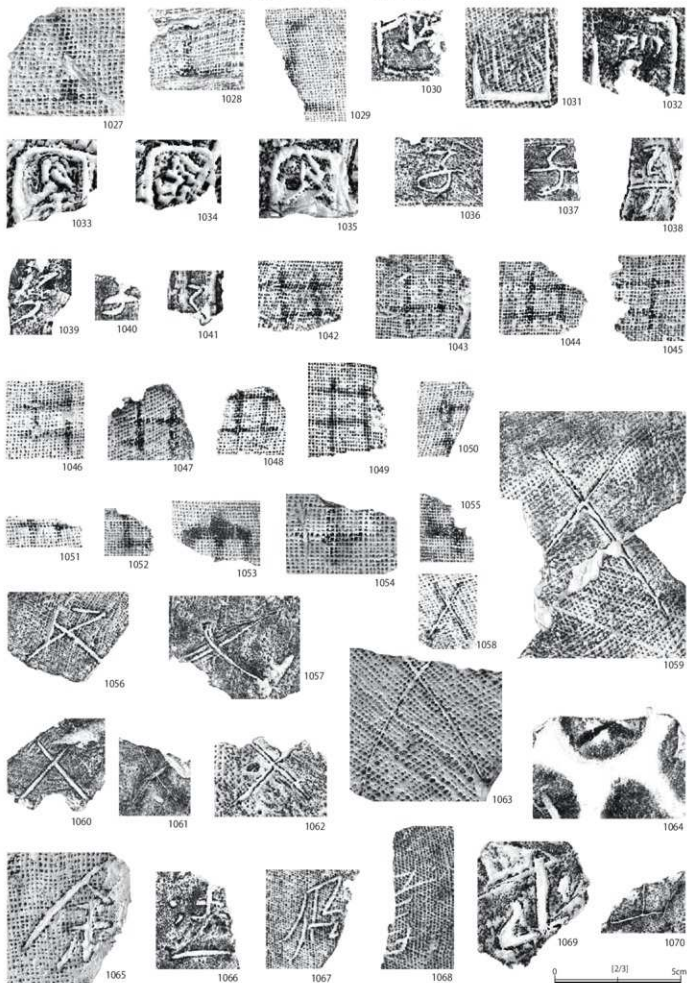
993

0 [2/3] 5cm

图面174 文字瓦(31) 一塔跡2地区2—

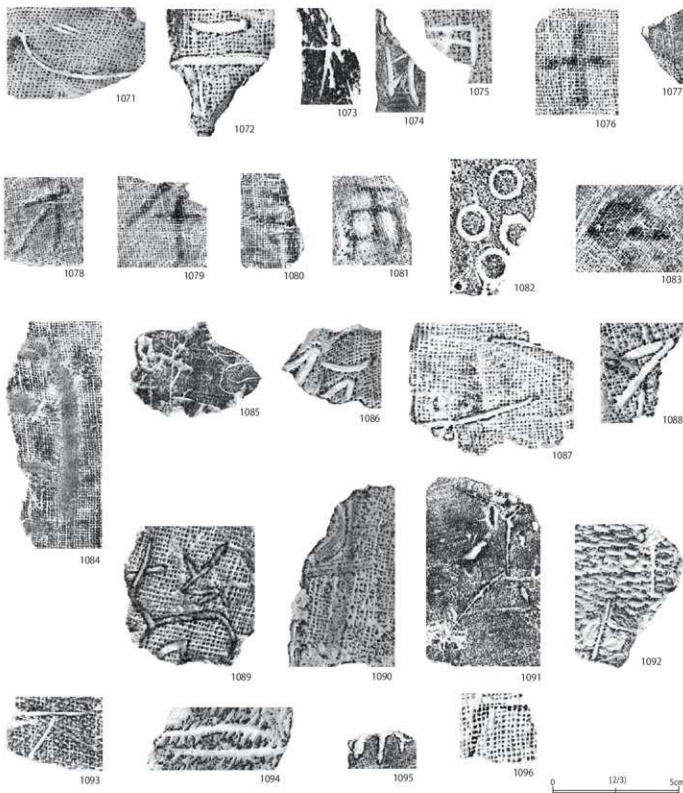


图面175 文字瓦(32) 一塔跡2地区 3一



図面176 文字瓦(33) 一塔跡2地区4・南門地区一

塔跡2地区4



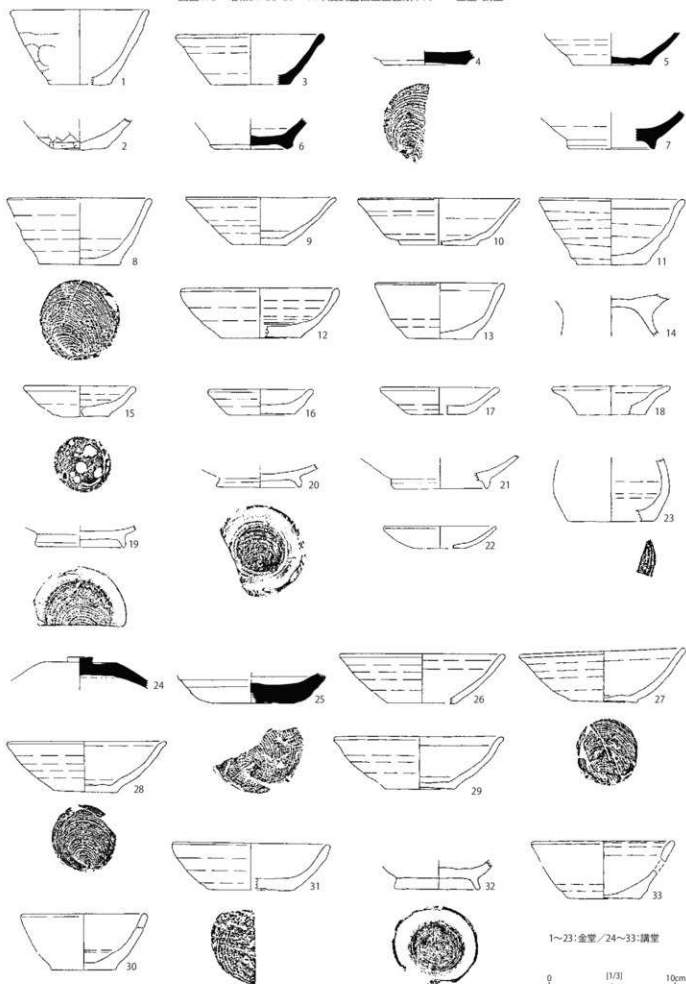
南門地区



図面177 文字埴



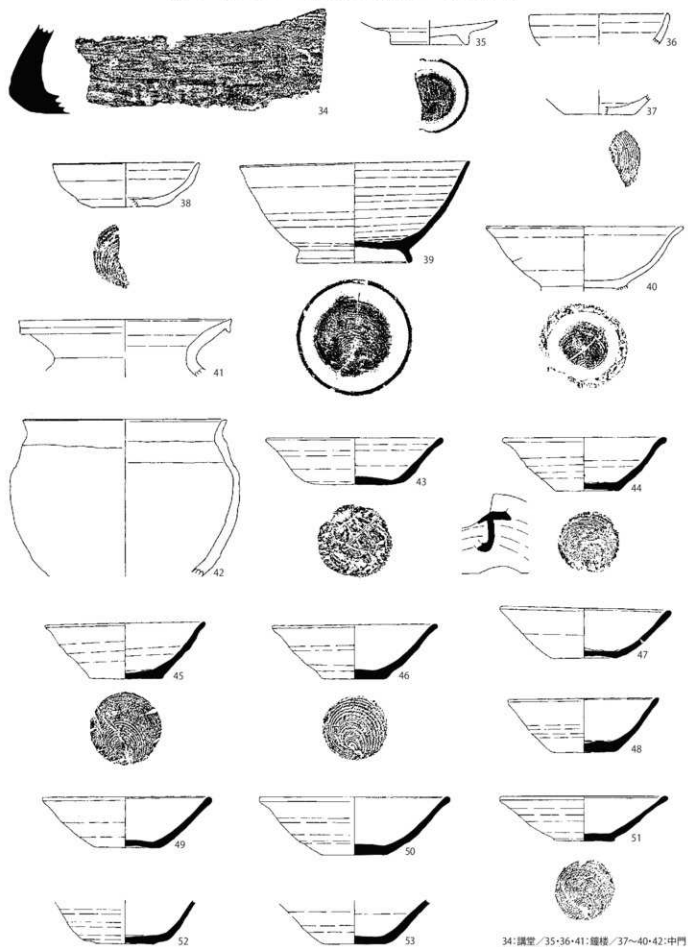
図面178 昭和31・33・39~44年度調査出土土器類(1) 一金堂・講堂一



1~23:金堂/24~33:講堂

0 [1/3] 10cm

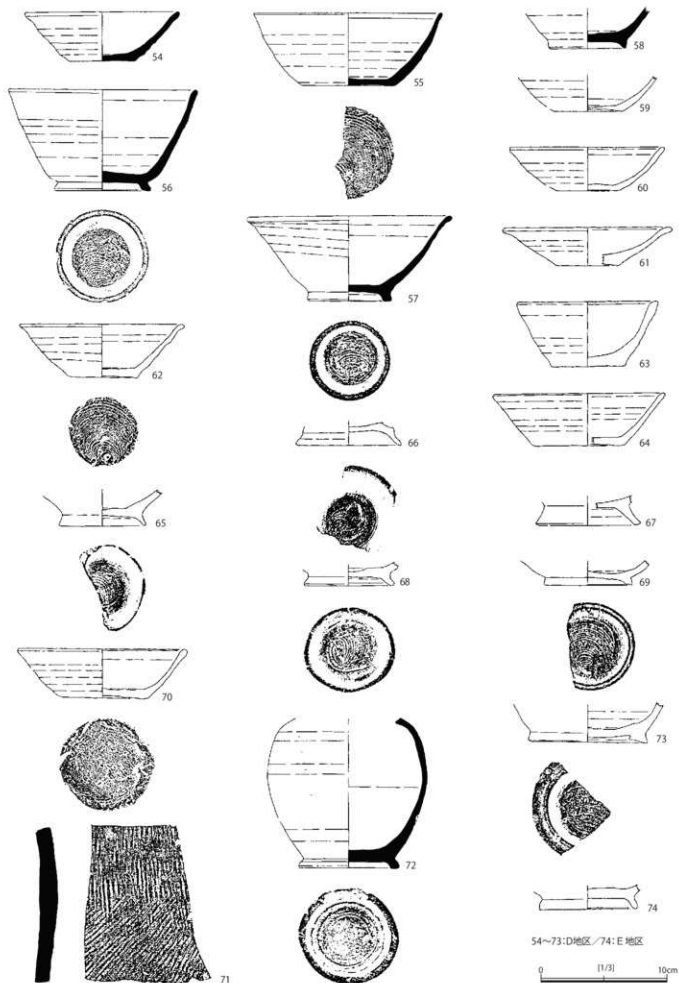
図面179 昭和31・33・39～44年度調査出土土器類(2) -講堂・鐘楼・中門-



34:講堂/35・36・41:鐘楼/37~40・42:中門
43~53:D地区

0 1/3 10cm

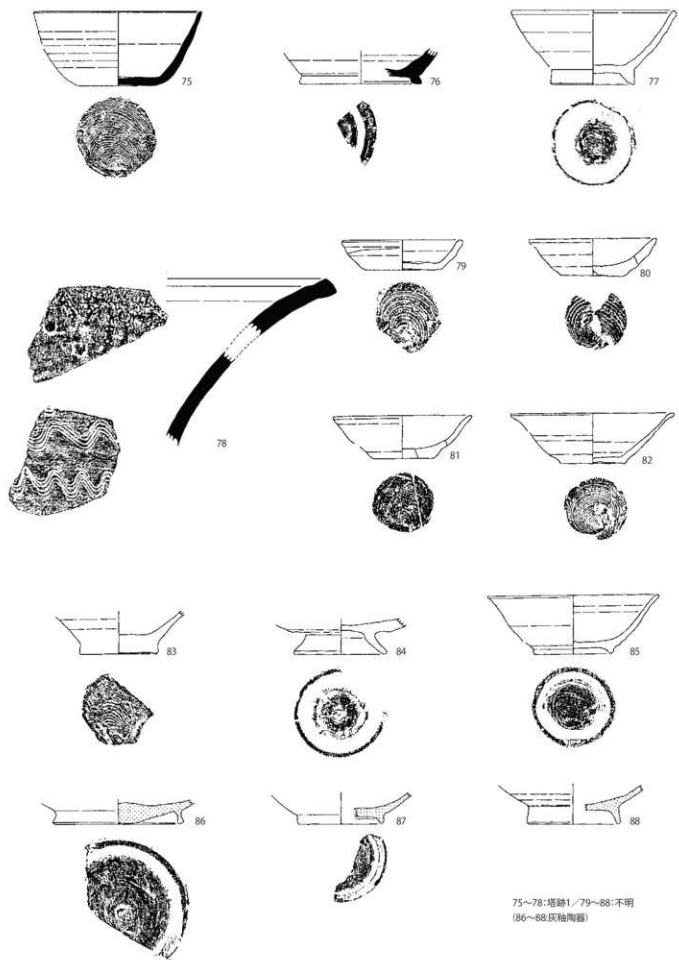
図面180 昭和31・33・39~44年度出土土器類(3) —D地区・E地区—



54~73: D地区 / 74: E地区

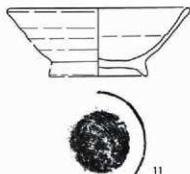
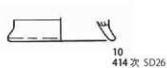
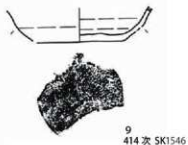
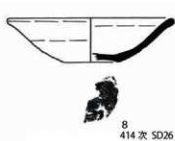
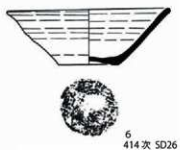
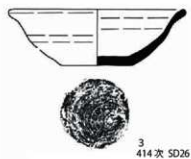
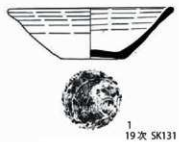
0 1/3 10cm

図面181 昭和31・33・39～44年度調査出土土器類(4) -塔跡1・不明-

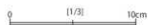


75～78:塔跡1/79～88:不明
(86～88:灰軸陶器)

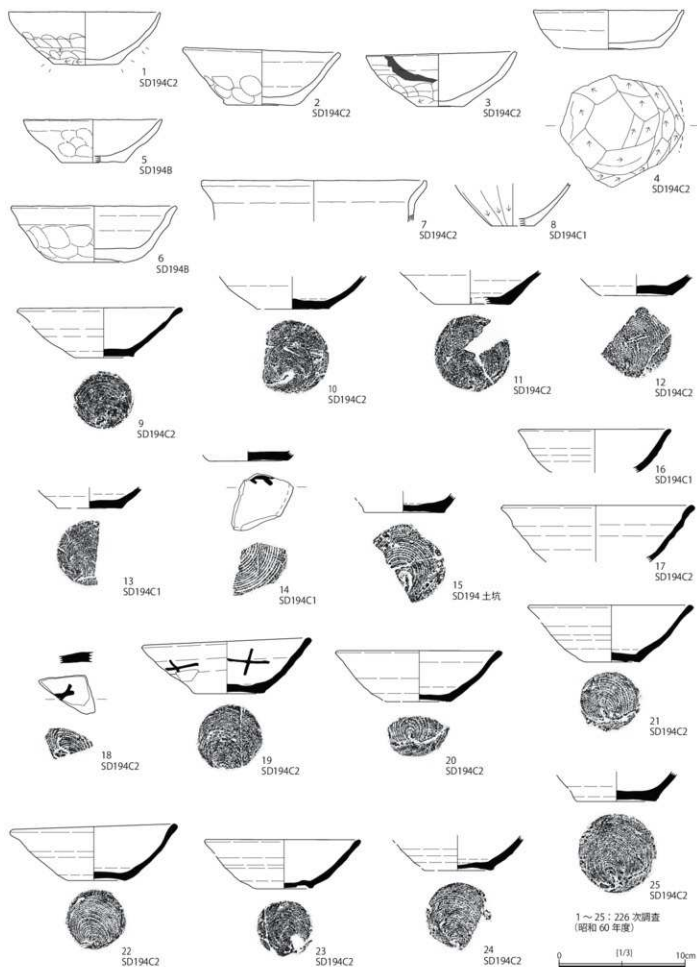
0 1/3 10cm



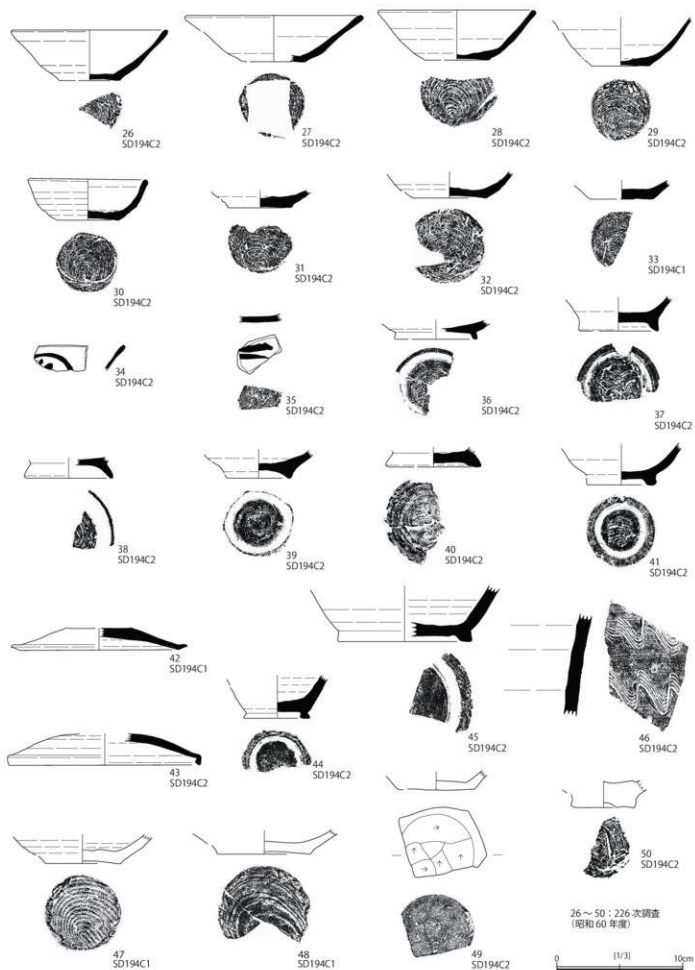
1～2:19次調査
(昭和51年度)
3～11:414次調査
(平成7年度)



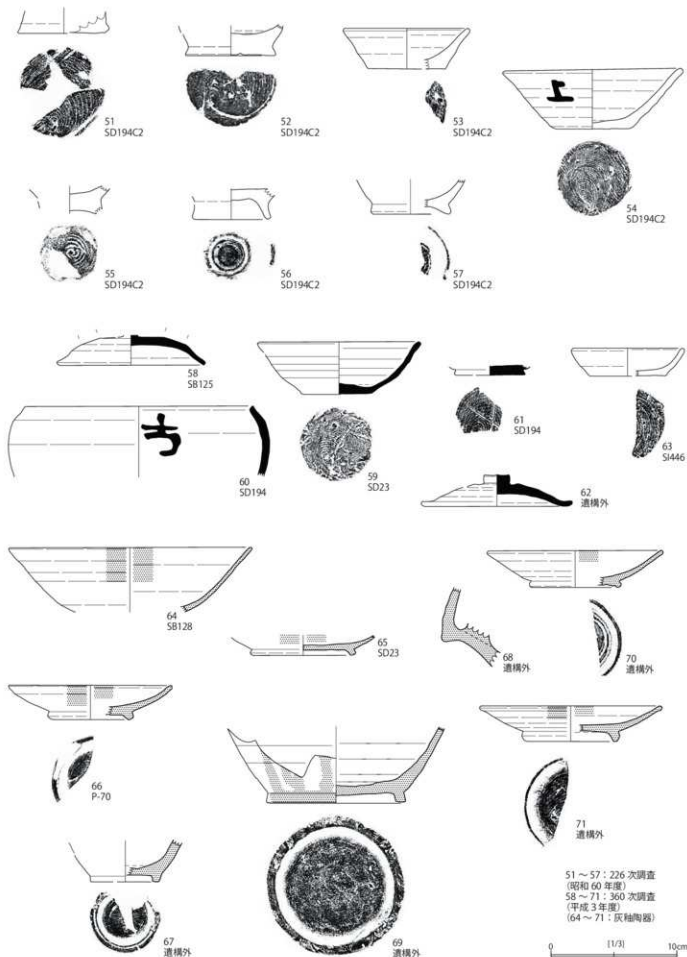
図面 183 (伽藍中核部区画施設) 区画南辺出土土器 (1)



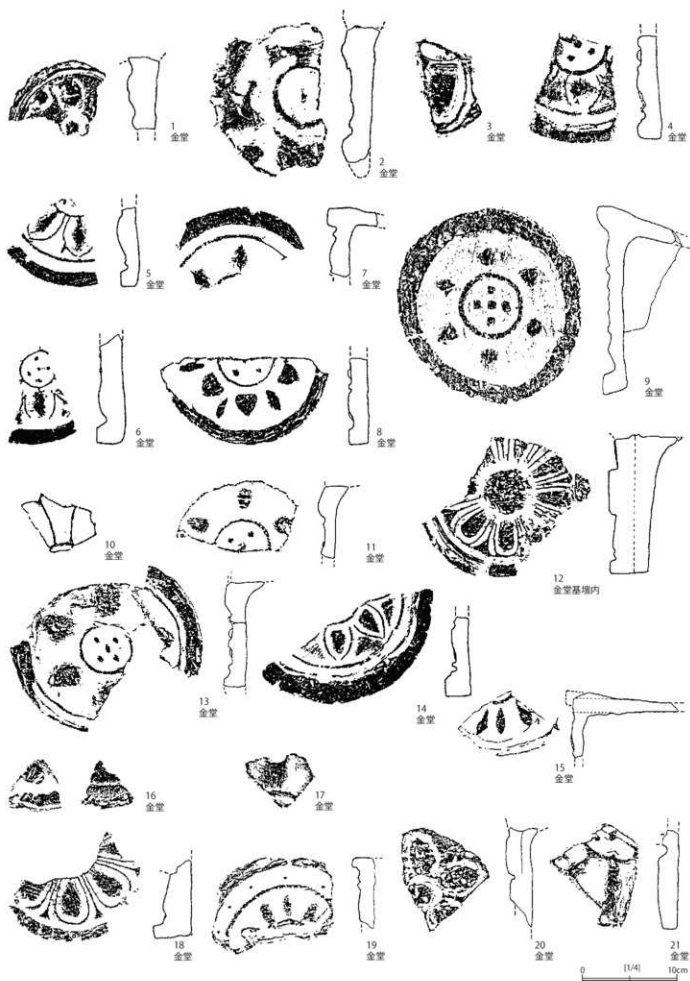
図面 184 (加那中北部区画施設) 区画南辺出土土器(2)

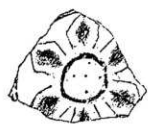


図面 185 (伽藍中柵部区画施設) 区画南辺出土土器 (3)



図面186 昭和31・33年調査出土瓦(1) 一層瓦一





22 講堂



23 講堂



24 講堂



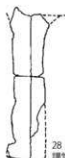
26 講堂



25 講堂



27 金堂・講堂



28 講堂二次基壇内



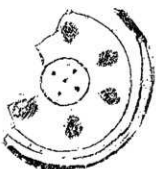
29 金堂・講堂



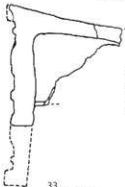
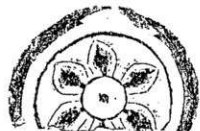
30 金堂・講堂



31 金堂・講堂



32 金堂・講堂



33 金堂・D地区



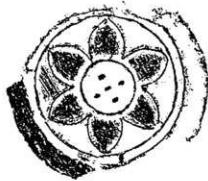
34 金堂・D地区



35 金堂・D地区



36 金堂・D地区



37 金堂・D地区

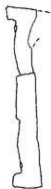


38 金堂・D地区



39 金堂・D地区

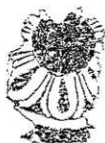




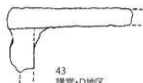
40
金堂・D地区



41
金堂・講堂二次基礎・D地区



42
D地区



43
講堂・D地区



44
D地区(金堂南東)



45
D地区



46
D地区



47
講堂・
D地区(金堂南東)



48
金堂



49
金堂



50
金堂



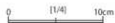
51
金堂



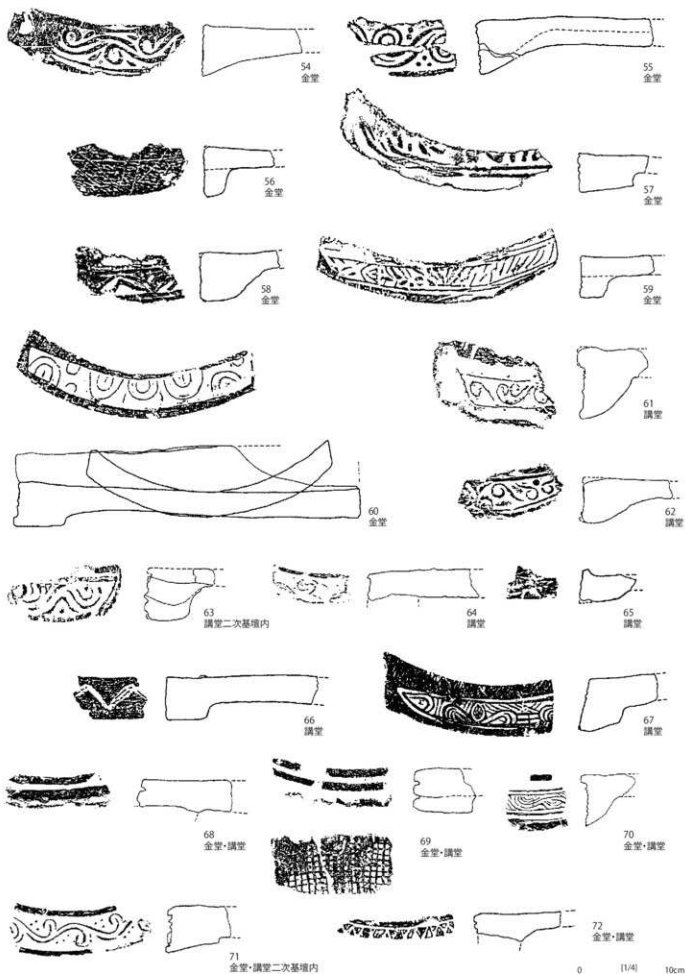
53
金堂



52
金堂

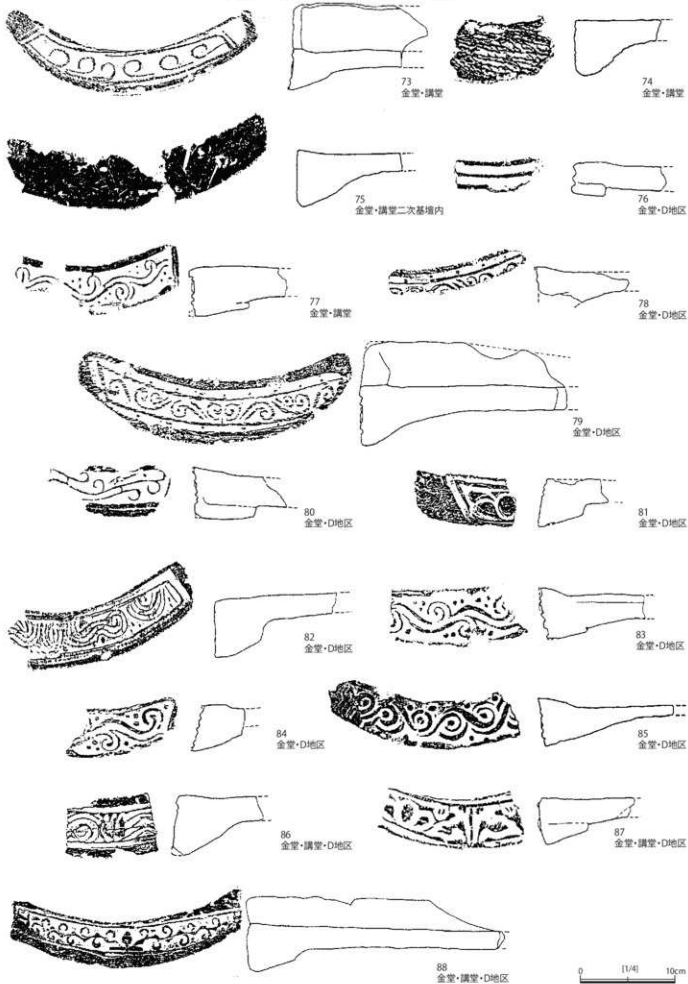


図面189 昭和31・33年調査出土瓦(4) 一字瓦2-

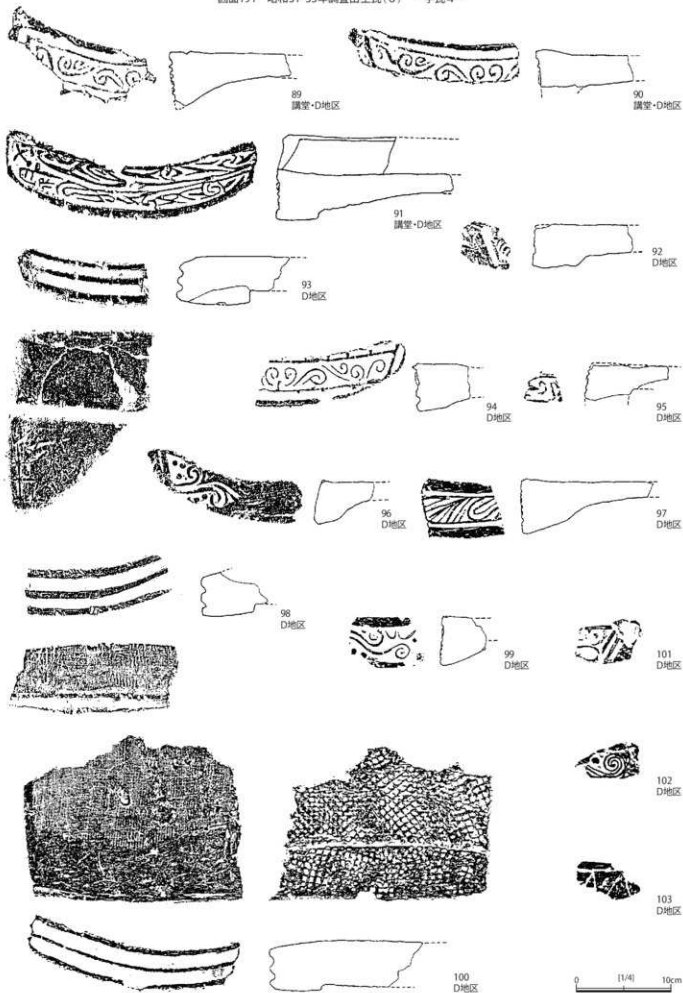


0 [1/4] 10cm

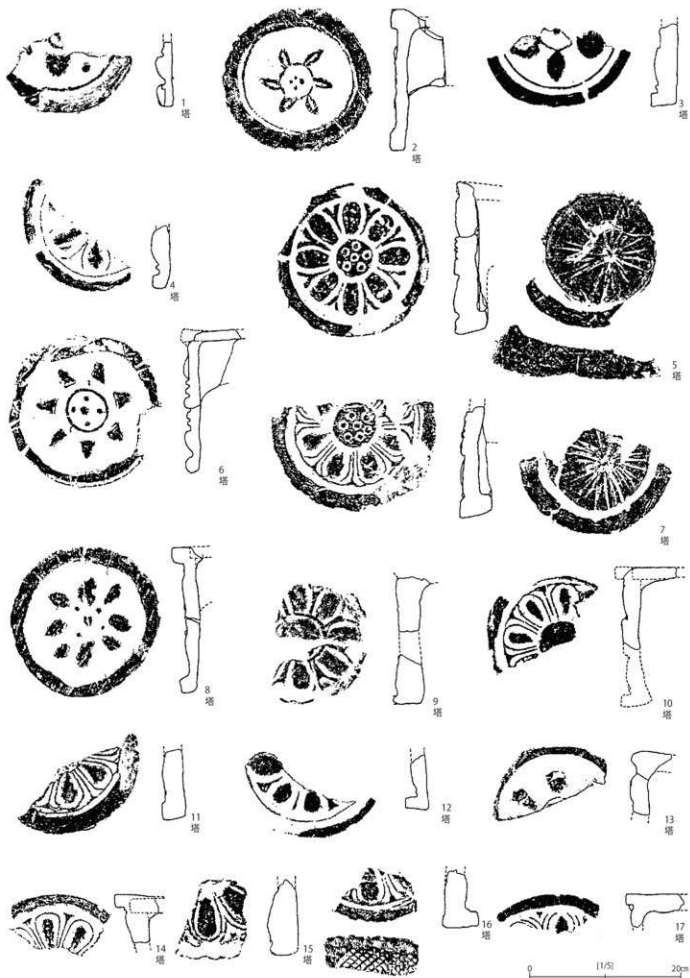
図面190 昭和31・33年調査出土瓦(5) 一字瓦3-



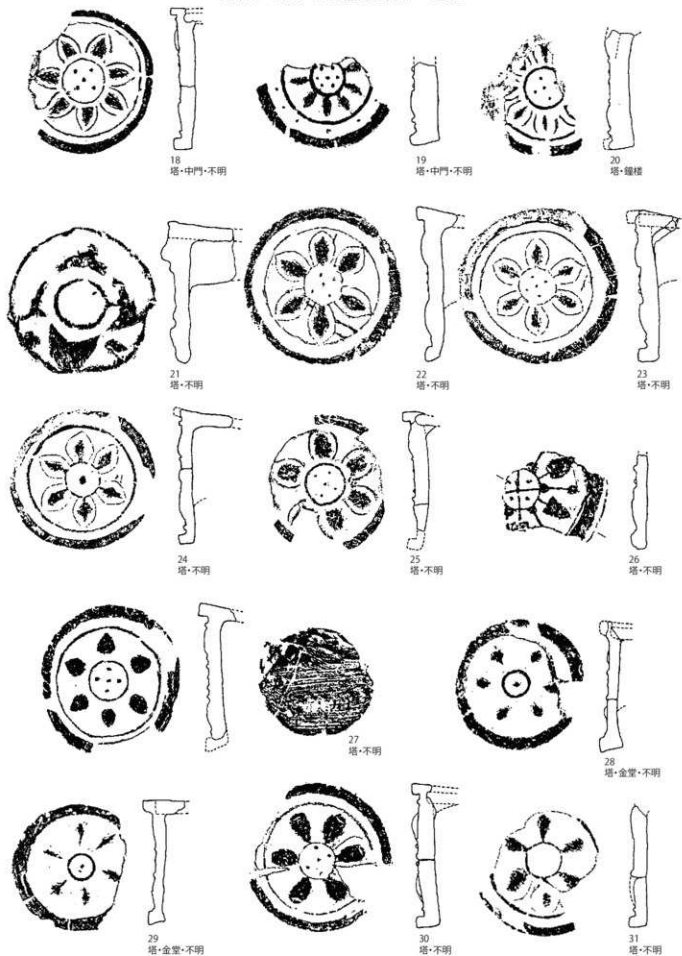
図面191 昭和31・33年調査出土土瓦(6) 一字瓦4-



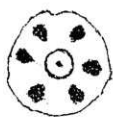
図面192 昭和39~44年調査出土瓦(1) 一體瓦1-



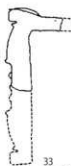
図面193 昭和39~44年調査出土瓦(2) 一體瓦2-



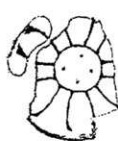
0 [1/5] 20cm



32 塔・不明



33 塔・不明



34 塔・不明



35 塔・不明



36 塔・不明



37 塔・不明



38 塔・不明



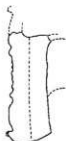
39 塔・不明



40 塔・不明



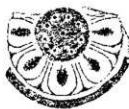
41 塔・不明



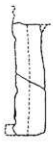
42 塔・不明



43 塔・不明



44 塔・不明



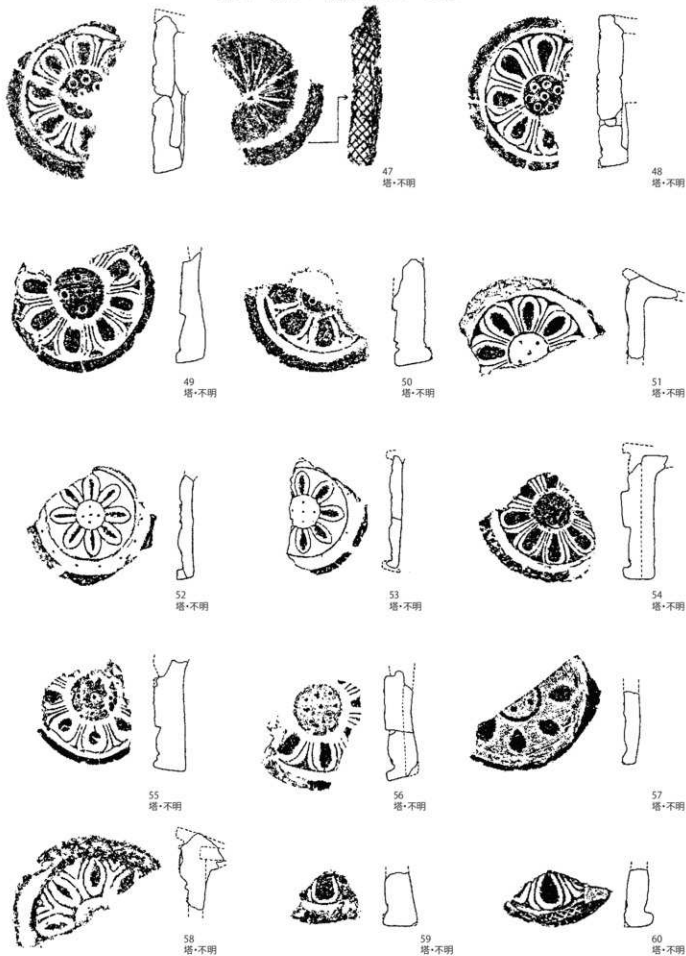
45 塔・不明



46 塔・不明

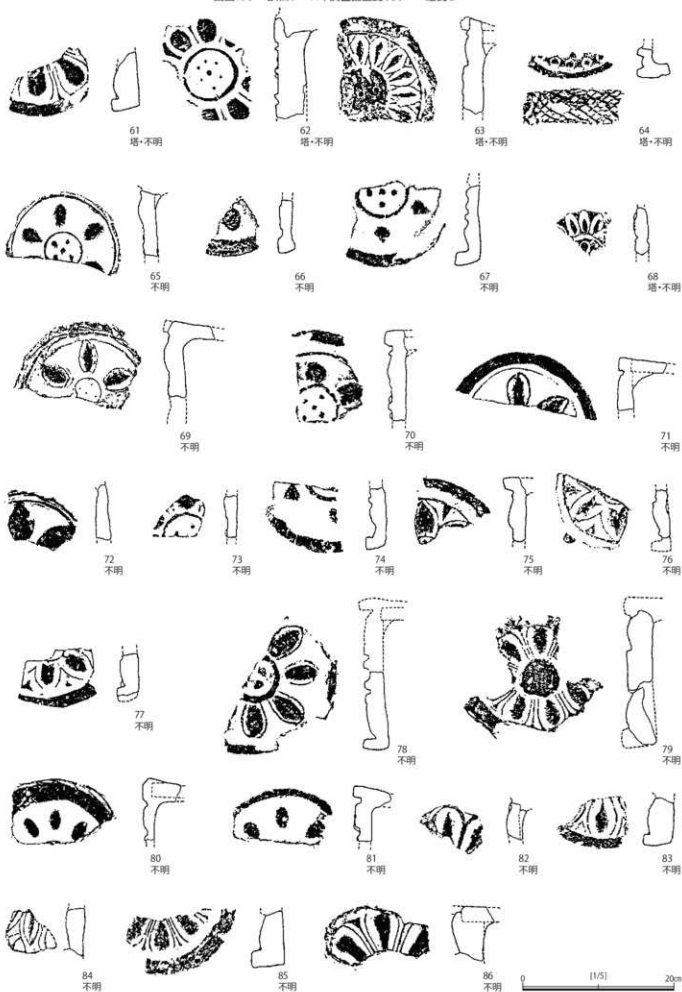


図面195 昭和39~44年調査出土瓦(4) 一體瓦4-

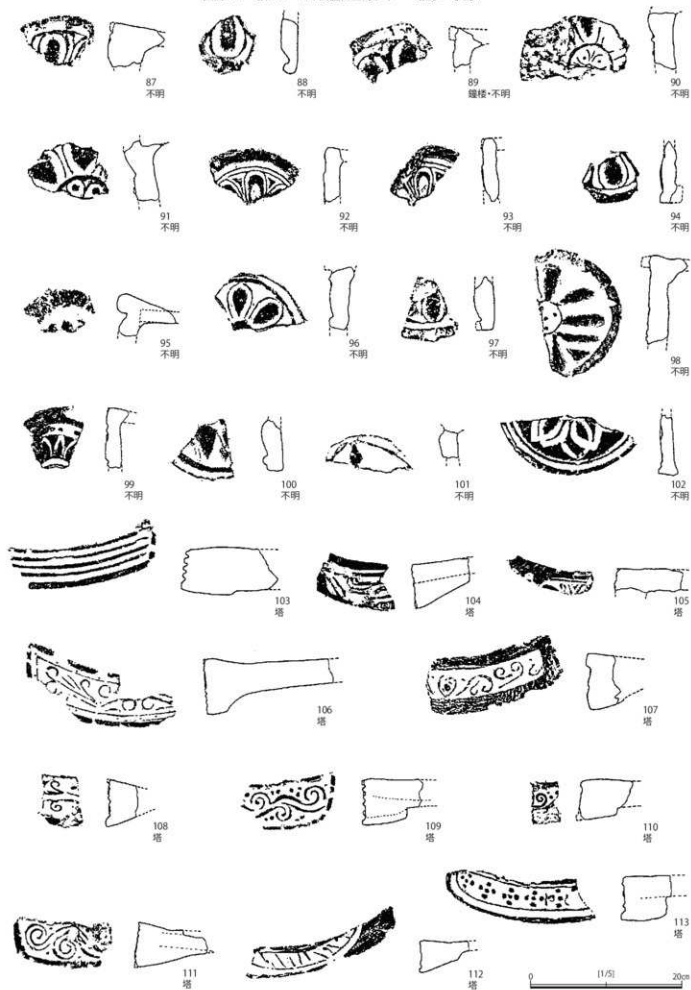


0 [1/5] 20cm

図面196 昭和39~44年調査出土瓦(5) 一體瓦5-



図面197 昭和39~44年調査出土瓦(6) 一燈瓦6・字瓦1-



図面198 昭和39~44年調査出土瓦(7) 一字瓦 2-



114
塔・中門・不明



115
塔・中門・不明



116
塔・中門・不明



118
塔・中門・不明



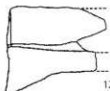
117
塔・中門



119
塔・中門・不明



120
鐘樓



122
中門・不明



121
鐘樓



123
塔・不明



124
塔・不明



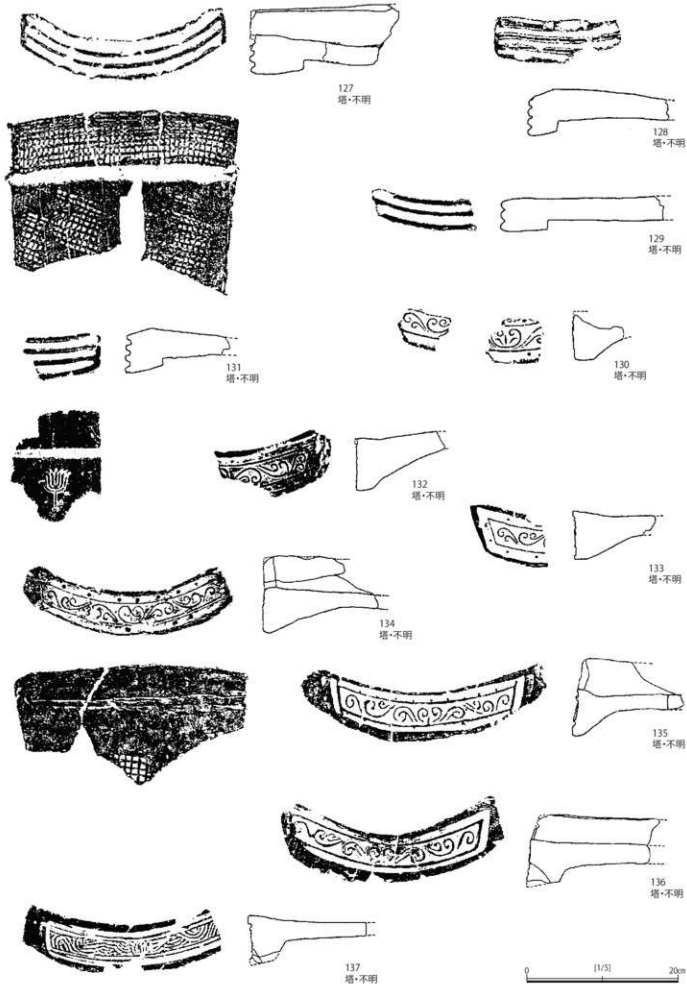
125
塔・不明



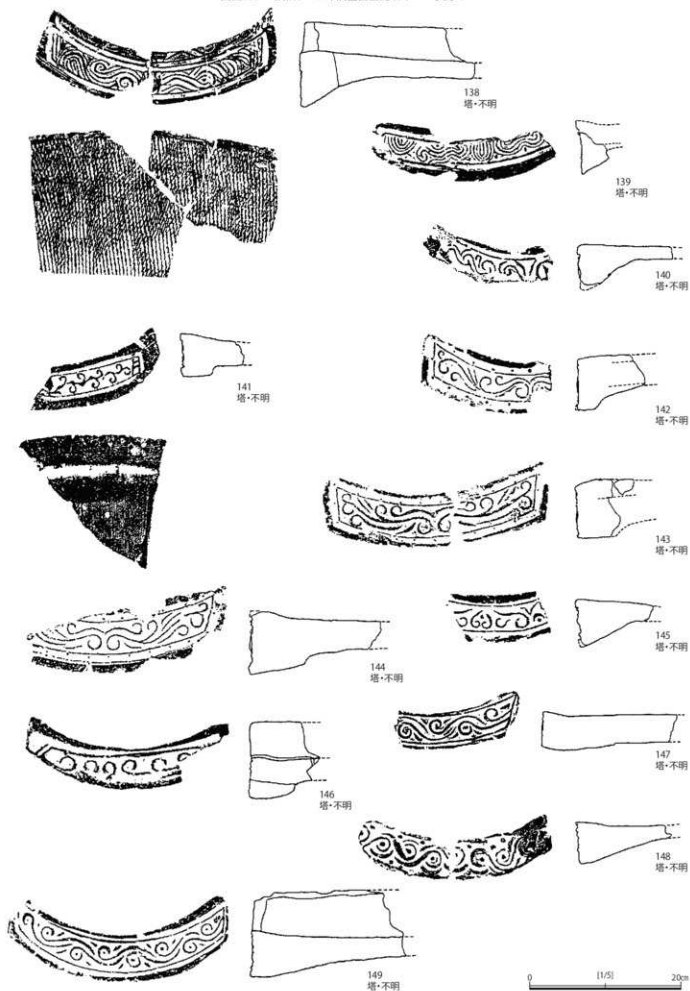
126
塔・不明



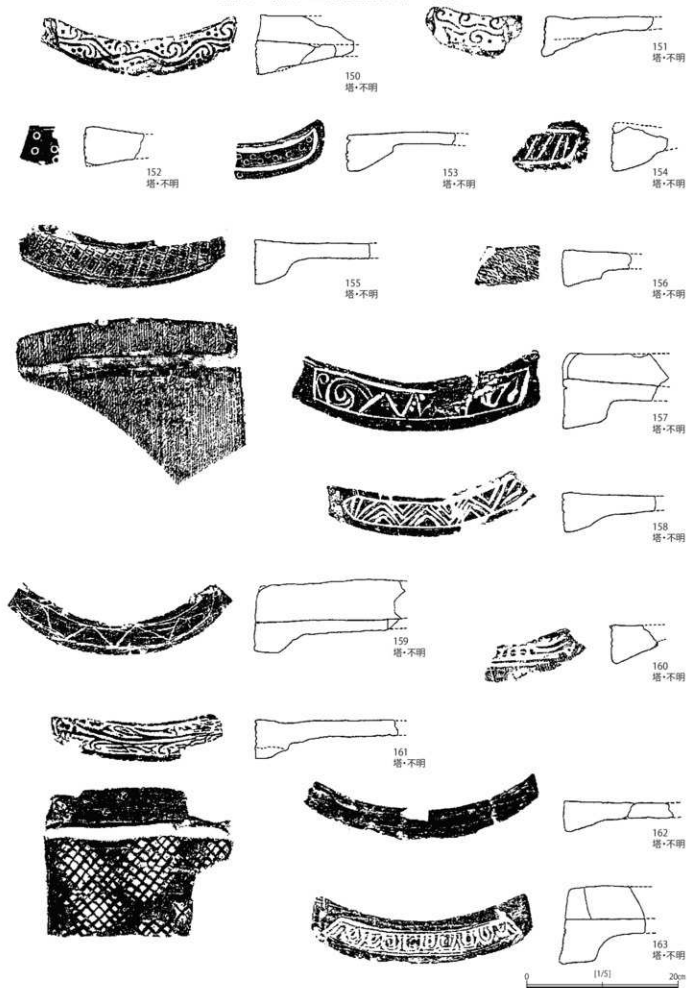
図面199 昭和39~44年調査出土瓦(8) 一字瓦3-



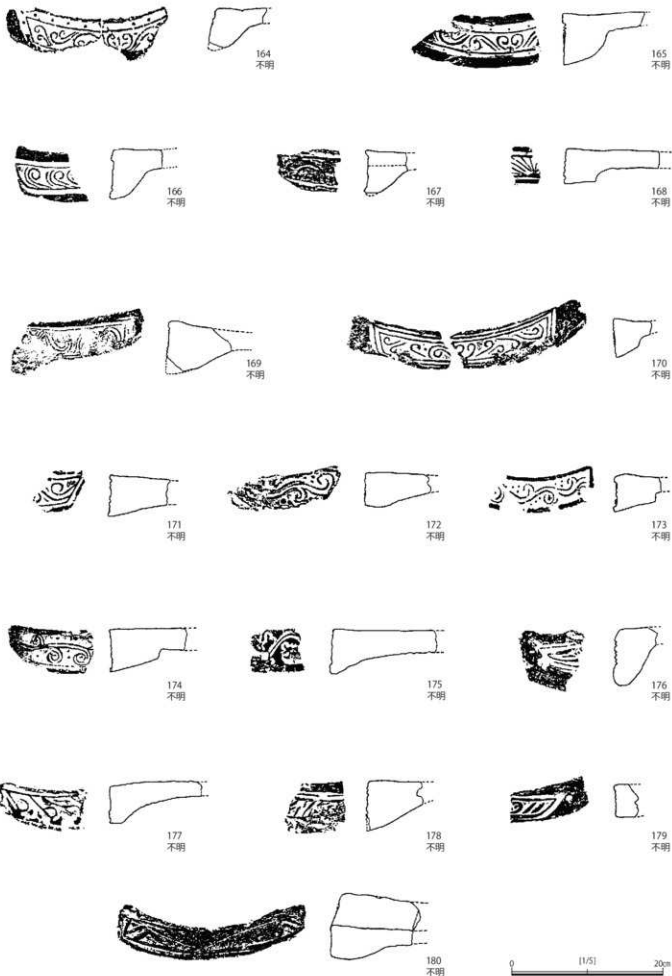
図面200 昭和39~44年調査出土瓦(9) 一字瓦4-

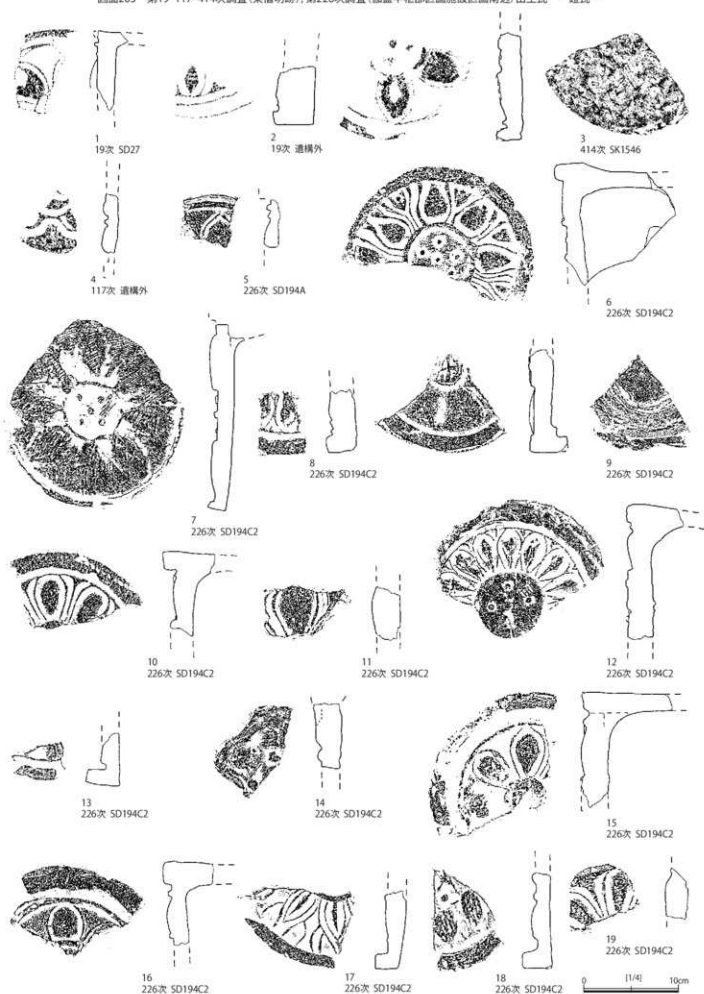


図面201 昭和39~44年調査出土瓦(10) 一字瓦5

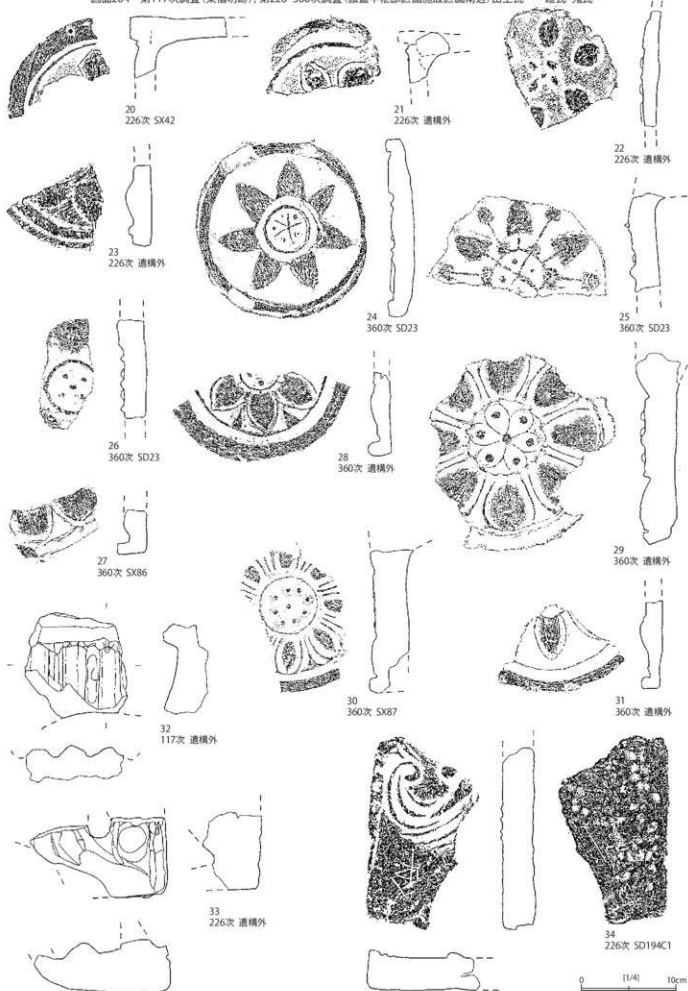


図面202 昭和39~44年調査出土瓦(11) 一字瓦6-

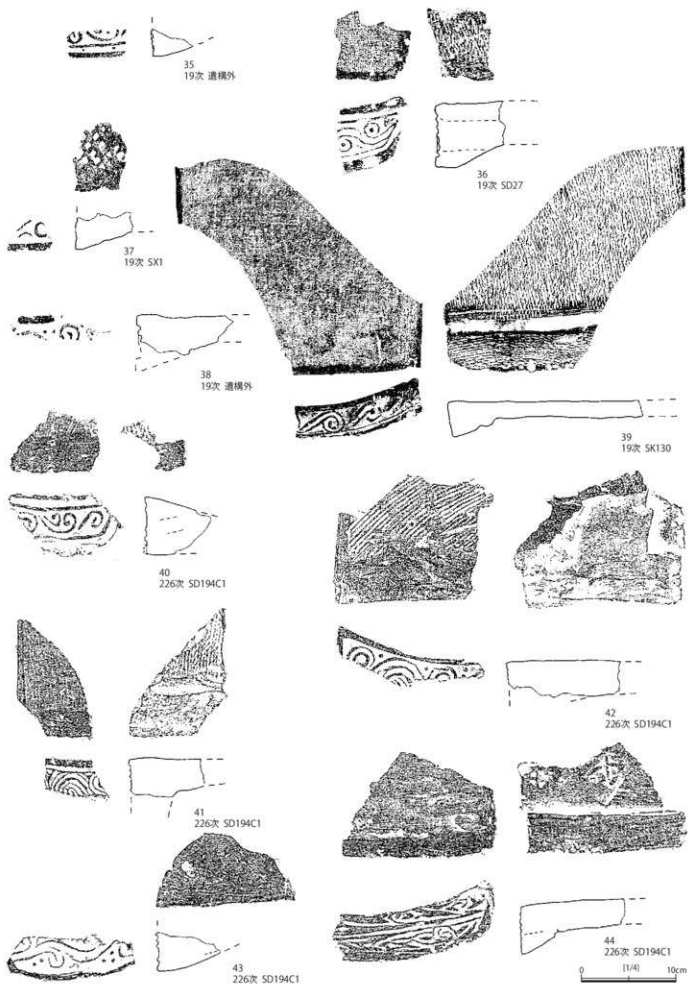




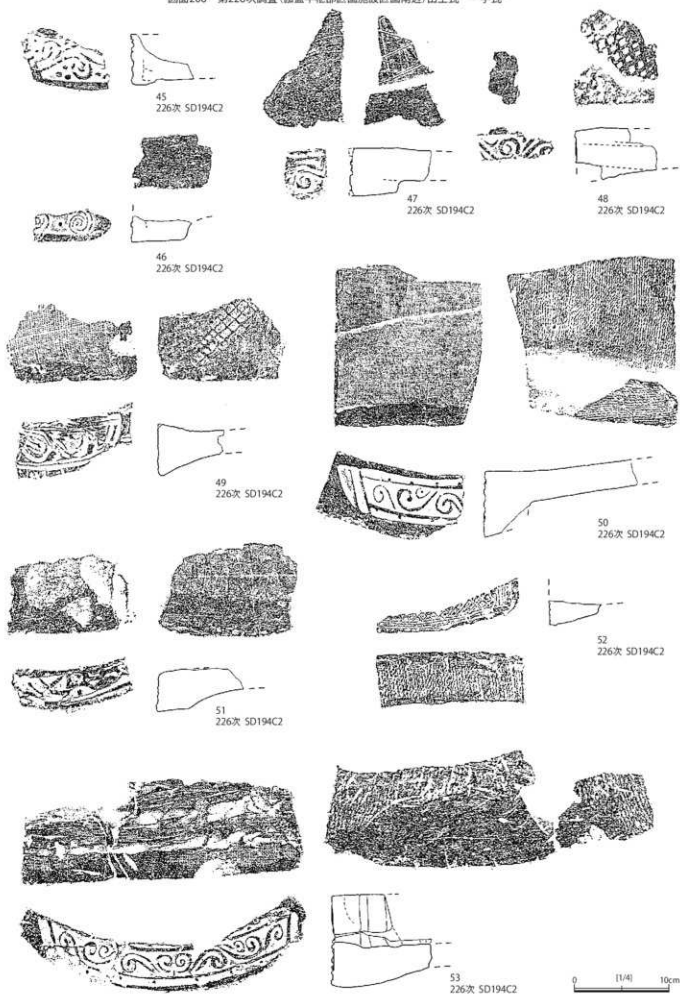
図面204 第117次調査(東僧坊跡),第226・360次調査(加能中枢部区画施設区画南辺)出土瓦 一燈瓦・鬼瓦一

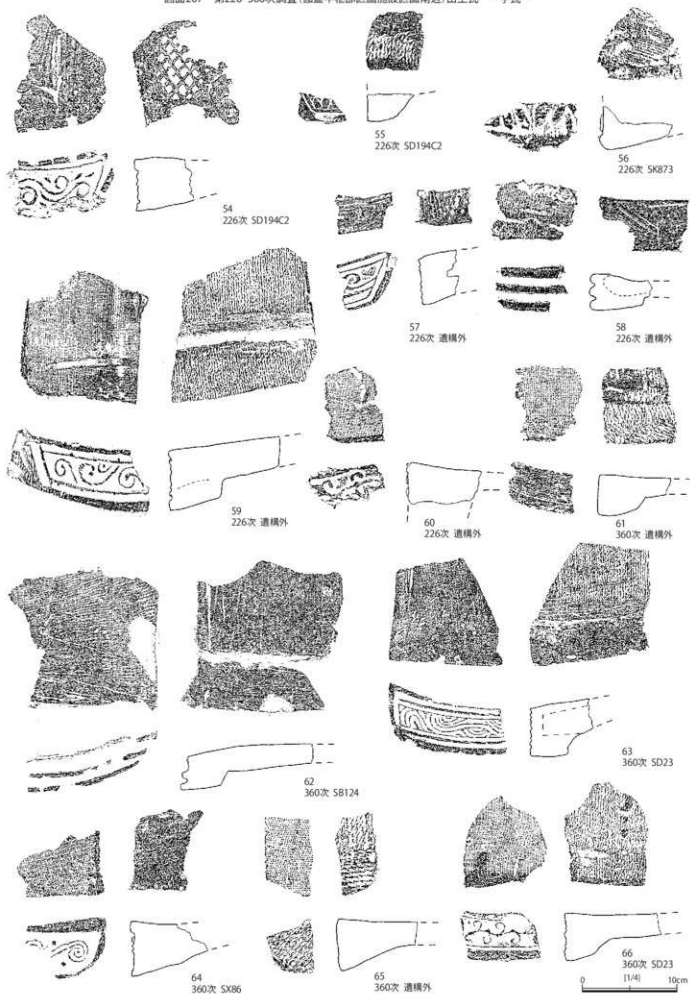


0 [1/4] 10cm



図面206 第226次調査(伽藍中庭部区画施設区画南辺)出土瓦 一字瓦一





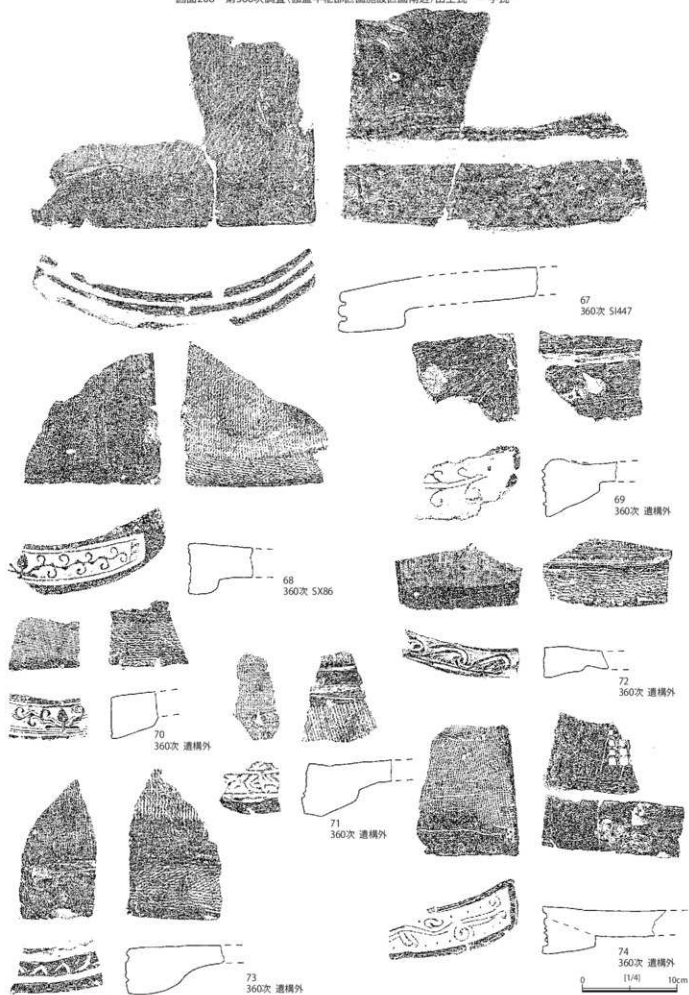


图 版



塔跡 2 出土甲弁五葉蓮華文瓦



图面 1-24



图面 1-25



图面 2-45



图面 2-47



图面 2-50



图面 2-48



图面 2-52



图面 2-53



图面 2-54



图面 2-55



图面 2-56



图面 2-57



图面 2-58



图面 2-59



图面 2-60



图面 2-61



图面 2-62



図面 3-2



図面 3-3



図面 3-15



図面 3-16



図面 3-17



図面 3-21



図面 3-30



図面 3-32



図面 4-33



図面 4-34



図面 4-35



図面 4-36



図面 4-42



図面 4-41



図面 4-46



図面 4-43 (S=1/1)

講堂地区2



図面 4-45



図面 4-52



図面 4-49



図面 4-51



図面 4-50



図面 4-53

鐘樓地区



図面 4-1

堂間地区(中門・金堂間)



図面 4-3

堂間地区(金堂・講堂間)



図面 5-1



図面 5-2



図面 5-5



図面 5-13



図面 5-17



図面 5-18



図面 5-19

中門地区



图面 6-1



图面 6-4



图面 6-5



图面 6-19



图面 6-22

区画南边



图面 7-3



图面 8-38



图面 7-24



图面 8-51



图面 8-42



图面 7-26



图面 8-51



图面 8-52



图面 8-53



图面 8-48



图面 8-50



图面 8-54



图面 8-55

区画南東



图面 8-2



图面 9-1



图面 9-2



图面 9-3



图面 9-5



图面 9-6



图面 9-7



图面 9-8



图面 9-9



图面 9-10



图面 9-11



图面 9-15



图面 9-12



图面 9-16



图面 9-17



图面 9-18



図面 10-19



図面 10-20



図面 10-21



図面 10-23



図面 12-64



図面 10-28



図面 11-63



図面 12-64



図面 12-66



図面 12-70



図面 12-83 (5=1/1)



図面 13-85



図面 13-86



図面 13-87





図面 13-90



図面 13-92



図面 13-88



図面 13-91



図面 13-93



図面 13-96



図面 13-97



図面 13-98



図面 13-102



図面 13-104



図面 14-118



図面 13-107



図面 14-115



図面 14-120



図面 14-121

图版 8 土器·陶磁器類(8) — (加賀中樞部区画施設) 区画北西4、区画南西、塔跡2地区1—

区画北西



图面 14-125



图面 14-126



图面 14-123



图面 14-122

区画南西



图面 14-3



图面 14-4

塔跡2地区1



图面 15-1



图面 15-9



图面 15-20



图面 15-22



图面 15-23



图面 15-24



图面 15-25



图面 15-26



图面 15-27



图面 15-29



图面 15-30



图面 15-28



图面 15-31



图面 15-32

塔跡2地区2



图面 15-33



图面 15-34



图面 15-35



图面 16-36



图面 16-37



图面 16-38



图面 16-39



图面 16-40



图面 16-41



图面 16-43



图面 16-44



图面 16-45



图面 16-46



图面 16-47

塔跡2周边地区



图面 16-1



图面 16-2



图面 16-3



图面 16-18



图面 16-19



图面 16-20



图面 16-21



图面 16-22



图面 16-23



图面 17-4



图面 18-11



图面 17-7



图面 19-18



图面 19-22



图面 21-32



图面 23-39



金堂地区2



图图 24-44



图图 26-62



图图 24-49



图图 26-63

講堂地区



图图 27-1



图图 27-4



图图 28-11



图图 28-15



图图 29-25



图图 32-51



图图 30-28



图图 32-52

図版 12 甍瓦(3) 一堂間地区(中門・金堂間)、堂間地区(金堂・講堂間)、中門地区、(伽藍中柱部区画施設)区画南辺一

堂間地区(中門・金堂間)



図面 33-1

堂間地区(金堂・講堂間)



図面 34-7



図面 35-12



図面 34-9



図面 35-16



図面 36-23

中門地区



図面 37-1



図面 38-17

区画南辺



図面 39-2



図面 40-8

区画北西



图面 41-1



图面 42-5



图面 42-7



图面 43-10

塔跡 2 地区



图面 45-2



图面 45-3



图面 45-4



图面 46-11



图面 47-22



图面 48-24



图面 50-50



塔跡 2 周辺地区



图面 51-8



图面 51-12





图面 52-5



图面 53-9



图面 53-11



图面 53-14



图面 54-16



图面 54-17



图面 56-25



图面 57-33



图面 57-28



图面 58-36



图面 57-34



图面 59-38



图面 59-40



图面 59-44

講堂地区



図面 60-1



図面 60-3



図面 60-5



図面 60-7



図面 62-18



図面 62-19



図面 62-20



図面 62-21



図面 64-31



図面 64-34



図面 65-37



図面 65-42



図面 65-45

鐘樓地区



図面 66-3



図面 66-7

堂間地区(金堂・講堂間)



図面 68-10



図面 68-14



図面 68-15

中門地区



图面 69-1



图面 69-3

区画北边



图面 73-5

区画南边



图面 71-1



图面 71-3



图面 75-6

区画北西



图面 74-3



图面 75-8

塔跡2地区



图面 79-12



图面 82-29



图面 83-36



图面 83-38



图面 84-42



图面 83-41

鐘樓地区



图面 86-1 鬼瓦

金堂地区



图面 86-2 鬼瓦



图面 87-1 隅切瓦

中門地区



图面 86-3 鬼瓦

塔跡2地区



图面 86-5 鬼瓦



图面 87-2 隅切瓦

講堂地区



图面 88-1 契斗瓦

区画南边



图面 90-7 契斗瓦

区画北西



图面 91-10 熨斗瓦

金堂地区
男瓦



图面 92-1



图面 93-3



图面 94-7

中門地区



图版 103-23

区画南東 1



图版 106-1

区画南東2

男瓦



图面 106-2

金堂地区

女瓦



图面 108-1



图面 108-2



图面 108-4



图面 109-6

講堂地区



图面 110-4

中門地区



图面 110-1



图面 112-7



图面 111-4



区画南边 1



图面 112-1

区画南边 2



图面 113-4



图面 115-14



区画北边

图面 116-1







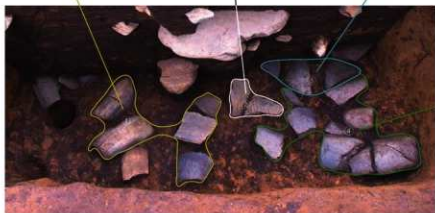
① 図面 95-2



② 図面 111-5



③ ※ 写真のみ



沓地業 1-1 上層瓦敷き (14 層上面) 西から撮影



④ 図面 95-1



③ 図面 103-24



④ 図面 97-8



⑤ 図面 100-17



⑥ ※ 写真のみ



⑦ 図面 99-12



② 図面 99-13



沓地業 2-2 上層瓦敷き (11 層上面) 南から撮影



① 図面 98-9



⑧ 図面 98-10

透視図面は、第1分冊透視縮図面 49-51 を参照



图面 124-1



图面 124-2



图 125-3



图 125-4



图面 134-1
(区画北西)



图面 134-2
(区画北辺)



图面 134-3
(講堂地区)



图面 134-4
(講堂地区)



图面 134-5
(講堂地区)



图面 134-6
(講堂地区)



图面 134-7
(講堂地区)



图面 134-8
(鐘楼地区)



图面 134-9
(南門地区)



图面 134-10
(堂間地区
(中門・金堂間))



图面 134-11
(講堂地区)



图面 134-12
(講堂地区)



图面 134-13
(金堂地区)



图面 134-14
(講堂地区)



图面 134-15
(金堂地区)



图面 134-16
(講堂地区)



图面 134-17
(金堂地区)



图面 134-18
(講堂地区)



图面 135-1
(塔跡 2 地区)



图面 135-5
(塔跡 1 地区)



图面 135-8
(塔跡 2 地区)



图面 135-10
(講堂地区)



图面 135-13
(金堂地区)



図面 135-15
(講堂地区)



図面 135-16
(講堂地区)



図面 135-20
(金堂地区)



図面 135-21
(金堂地区)



図面 136-23
(区画北西)



図面 136-24
(金堂地区)



図面 136-27
(中門地区)



図面 136-28
(金堂地区) S=1/1



図面 137-1
(塔跡 2 地区)



図面 137-3
(塔跡 2 地区)



図面 137-7
(中門地区)



図面 138-10
(南門地区)



図面 138-12
(区画北西)



図面 138-14
(塔跡 2 地区)



図面 138-20
(塔跡 2 地区)



图面 139-22
(塔跡 2 周边地区)



图面 139-25
(塔跡 2 周边地区)



图面 139-31
(塔跡 2 周边地区)



图面 139-33
(堂前地区)
(中門・金堂間)



图面 139-38
(区画北边)



图面 140-40
(塔跡 2 地区)



图面 140-41
(塔 2 周边地区)



图面 140-42
(金堂地区)

图版 31 铜滓・板碑・磁石

铜滓



图面 140-46
(講堂地区)



图面 140-47
(堂間地区)



图面 140-48
(堂間地区)



图面 140-49
(堂間地区)



图面 140-50
(堂間地区)



图面 140-51
(堂間地区)



图面 140-52
(堂間地区)



图面 140-53
(堂間地区)



图面 140-54
(堂間地区)



图面 140-55
(堂間地区)



图面 140-56
(堂間地区)



图面 140-57
(堂間地区)



图面 140-58
(堂間地区)



图面 140-59
(堂間地区)



图面 140-60
(堂間地区)



图面 140-61
(堂間地区)



图面 140-62
(堂間地区)



图面 140-63
(堂間地区)



图面 140-64
(堂間地区)



图面 140-65
(堂間地区)



图面 140-66
(堂間地区)



图面 140-67
(講堂地区)



图面 140-69
(講堂地区)



图面 140-68
(区南南東)

板碑



图面 141-1
(講堂地区)



图面 141-3
(塔跡 2 周辺地区)



图面 141-2
(塔跡 2 地区)

磁石



图面 141-1
(塔跡 2 地区)



图面 141-2
(塔跡 2 地区)



图面 141-3
(中門地区)



図面 142-4
(塔跡 2 地区)



図面 142-5
(講堂地区)



図面 142-6
(塔跡 2 地区)



図面 142-9
(堂間地区)
(中門・金堂間)



図面 142-10
(堂間地区)
(中門・金堂間)



図面 142-11
(堂間地区)
(中門・金堂間)



図面 142-12
(堂間地区)
(中門・金堂間)



図面 142-18
(鐘樓地区)



図面 142-22
(鐘樓地区)



図面 142-24
(塔跡 2 周辺地区)



図面 143-1
(講堂地区)



図面 143-2
(堂間地区)
(中門・金堂間)



図面 143-3
(堂間地区)
(中門・金堂間)



図面 143-4
(塔跡 2 地区)



図面 143-5
(塔跡 2 地区)



図面 143-6
(塔跡 2 地区)



図面 143-7
(塔跡 2 地区)



図面 143-8
(金堂地区)

図版 33 第 1 期調査 (昭和 30 ~ 40 年代) 出土土器

昭和 31 ~ 33 年度の日本考古学協会調査



昭和 39 ~ 44 年度の日本考古学協会調査



報告書抄録

ふりがな	くにしていしせき むさしこくぶんそうじあとはくつちょうさほうこくしょⅡ							
書名	国指定史跡 武蔵国分寺僧跡発掘調査報告書Ⅱ							
副書名	一史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査一〔遺物編〕							
編著者名	坂訪秀一・酒井清治（編） 依田亮一・笹津備当・矢内雅之							
編集機関	国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会							
所在地	〒185-0023 東京都国分寺西元町1-13-10 武蔵国分寺跡資料館内 TEL.042-300-0073							
発行年月日	2018年3月31日							
規格/部数	A4版横組1段 42文字×32行 486頁（うち図版244頁）/350部							
資料の保存 問い合わせ先	国分寺市教育委員会 教育部 ふるさと文化財課 〒185-0023 東京都国分寺西元町1-13-10 武蔵国分寺跡資料館内 TEL 042-300-0073 FAX 042-300-0091 E-mail bunkazai@city.kokubunji.tokyo.jp							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〇' 〃	〇' 〃			
武蔵国分寺跡 第570次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 30"	139° 28' 19"	20031211	177.40	史跡整備に伴う事前遺構確認調査
				~	~	20040319		
武蔵国分寺跡 第578次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 29"	139° 28' 18"	20040601	2,680.56	史跡整備に伴う事前遺構確認調査
				~	~	20070315		
武蔵国分寺跡 第603次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 29"	139° 28' 18"	20050822	1,193.66	史跡整備に伴う事前遺構確認調査
				~	~	20070331		
武蔵国分寺跡 第625次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 30"	139° 28' 18"	20070719	628.56	史跡整備に伴う事前遺構確認調査
				~	~	20080331		
武蔵国分寺跡 第642次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 33"	139° 28' 17"	20080613	659.04	史跡整備に伴う事前遺構確認調査
				~	~	20090331		
武蔵国分寺跡 第650次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 33"	139° 28' 18"	20090515	675.60	史跡整備に伴う事前遺構確認調査
				~	~	20100331		
武蔵国分寺跡 第655次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 32"	139° 28' 19"	20100507	749.39	史跡整備に伴う事前遺構確認調査
				~	~	20110331		
武蔵国分寺跡 第672次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 33"	139° 28' 17"	20110715	505.17	史跡整備に伴う事前遺構確認調査
				~	~	20120330		
武蔵国分寺跡 第680次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41' 33"	139° 28' 14"	20120614	313.60	史跡整備に伴う事前遺構確認調査
				~	~	20130228		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武蔵国分寺跡 第570次調査	寺院跡	古代	塔1、掘込地蔵(塔2)、 中樞部区画施設・区画溝	瓦、須恵器、土師器	南門南方/塔跡1南方/塔 跡1・2間/塔跡2/中樞 部区画施設南辺(中門東) の調査
武蔵国分寺跡 第578次調査	寺院跡	古代	掘立柱塼・築地塼・区画 溝(中樞部区画施設南 辺)、塔2、幡竿遺構(塔 2東西)	瓦、須恵器、土師器、鉄滓	中樞部区画施設南辺(中門 東)/塔跡2全体の調査 ※中門東は570次調査の継 続及び調査区の拡張
武蔵国分寺跡 第603次調査	寺院跡	古代	中門、掘立柱塼・築地塼・ 区画溝(中樞部区画施設 南辺)、区画溝(伽藍地 南辺)	瓦、須恵器、土師器	中門全体(市道南3号線下 含む)/塔跡2全体及び周 辺の調査
武蔵国分寺跡 第625次調査	寺院跡	古代	塔1、中門、幡竿遺構(塔 1西)、金堂前面、金堂・ 中門間、	瓦、埴、須恵器、土師器	・塔1周辺西、中門全体、金 堂前面、南門の調査 ・塔1周辺西、中門全体は 603次調査の継続及び調査区 の拡張
武蔵国分寺跡 第642次調査	寺院跡	古代	南門、伽藍地区画溝(伽 藍地南辺)、橋脚、講堂、 掘立柱塼・区画溝(中樞 部区画施設北辺)	瓦、埴、須恵器、土師器、 輪形土製品	南門/金堂前面東/講堂/ 中樞部区画施設(北辺)の 調査 ※南門は625次調査の継続 及び調査区の拡張
武蔵国分寺跡 第650次調査	寺院跡	古代	講堂、金堂	瓦、埴、須恵器、土師器、 宋銭、青銅製品	・講堂全体、金堂の調査 ・講堂は642次調査の継続及 び調査区の拡張
武蔵国分寺跡 第655次調査	寺院跡	古代	金堂、大規模土取穴	瓦、埴、須恵器、土師器、 青銅製品	金堂全体/金堂・講堂間/ 鐘樓の調査 ※金堂は650次調査の継続 及び調査区の拡張
武蔵国分寺跡 第672次調査	寺院跡	古代	金堂、堂間通路、幡竿遺 構(講堂前面)、大規模 土取穴(講堂前面)、整 地層(経蔵東)、掘立柱塼・ 築地塼・区画溝(中樞部 区画施設北辺)	瓦、埴、須恵器、土師器、 銭貨、炭化物、緑釉陶器、 施釉陶器	鐘樓全体/金堂・講堂間(経 蔵含む)/中樞部区画施設 (北辺)の調査 ※鐘樓は655次調査の継続 及び調査区の拡張
武蔵国分寺跡 第680次調査	寺院跡	古代	金堂、掘立柱塼(中樞部 区画施設北西・南西・南 東)、築地塼(中樞部区 画施設北西)、区画溝(中 樞部区画施設北西・南西・ 南東)	瓦、埴、須恵器、土師器、 炭化物	※金堂(市道南2号線下含 む)/中樞部区画施設(北西・ 南西・南東)の調査 ※中樞部区画施設北西は322 次調査区の拡張
要約	<p>本書は、国指定史跡武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡の僧寺地区において、平成15～24年度に史跡保存整備事業に伴って実施した事前遺構確認調査の第Ⅱ分冊で、出土遺物の成果を収載したものである。調査の対象は、金堂、講堂、鐘樓、中門、金堂・講堂間、金堂・中門間、中樞部区画施設、七重塔(塔跡1・2)、南門等の主要堂塔に及び、調査面積は約7,583㎡を有する。10ヶ年の調査で、プラスチックコンテナに換算して3,126箱分の遺物が出土した。僧寺中樞伽藍域は、昭和31・33年に日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会が行った発掘調査を嚆矢として、その後も学術調査・開発に伴う緊急調査が複数件行われているが、本報告書には、これら既往の調査成果も合わせて収載した。</p> <p>武蔵国分寺は、多様な軒先瓦と文字瓦の存在が夙に著名で、軒先瓦は、これまでに鑑瓦が141種以上、宇瓦が145種以上の型式が把握されてきたが、本書では建物単位での様相を整理し、いずれの堂塔も多種多様な軒先瓦を葺いていたことが明らかとなった。また、特に1,573点の出土をみた文字瓦については、建物地区出土の1,110点全点の分析を通じて郡名瓦について追究し、武蔵国内21郡中、在野・秩父・豊島・多摩郡の郡名が多い出土傾向を指摘した。</p> <p>また、今回の調査では、従来知られていた塔基壇(塔跡1)の西方約50m離れた地点でも新たに塔基壇(塔跡2)が見つかり、『続日本後記』承和12年の塔再建記事との関連が目玉されるが、塔跡2所用瓦は中房に旋回花文状の文様を施す、他の諸堂では出土しない特徴的な単弁五葉蓮華文瓦で、その意匠は壬生吉志氏との関連性を想定した。</p> <p>出土土器については、従来の編年研究に依拠しながら再整理を行い、寺院の中樞伽藍域特有の土器様相として、用途別に分類した場合、貯蔵具や煮沸具に比べて供膳具が突出した出土比率を示すことや、10世紀以降に土師質土器を用いた獻燈行為が盛行することに触れ、仁王会・放生会・灯明会などの法会や、写経・修法が盛んに行われた平安時代の東国仏教政策との関わりを想定した。</p> <p>特に古代末期～中世における武蔵国分寺の動向については、10世紀後半以降の出土遺物が極めて僅少であることから、『小右記』記載の治安3(1023)年武蔵国分寺修造期宣旨は、具体的な内容を知らないもの、この時期までには伽藍を構成する主だった堂塔の倒壊が進んでいた可能性や、12世紀で一旦古代以来の土地利用が途絶える予察的な見通しを述べた。</p> <p>その他、鍛冶関連遺物の分布から、塔跡2・中門付近で精錬・小鍛冶を、金堂・講堂付近で銅の鋳造に関わる施設が存在した可能性について触れた。</p>				

国指定史跡 武蔵国分僧寺跡発掘調査報告書Ⅱ

－史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査－

〔遺物編〕

発行日 平成30(2018)年3月31日
編集 国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
発行 国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10
(武蔵国分寺跡資料館内 ふるさと文化財課)
印刷 株式会社コモダ印刷

©Kokubunji City Board of Education 2018. Printed in Japan

令和4年(2022)8月16日 デジタル版作成